

ISSN 0916-4375

Research

独立行政法人 国立病院機構 大阪医療センター

臨床研究業績年報

Vol.40 2020

Institute for Clinical Research

Osaka National Hospital

独立行政法人 国立病院機構 大阪医療センター 臨床研究センター

Research
R-CRIONH

＜目 次＞

I. 研究業績

診療部門

＜総合診療部＞	1
＜腎臓内科＞	3
＜糖尿病内科＞	6
＜輸血療法部＞	8
＜呼吸器内科＞	9
＜脳卒中内科＞	11
＜感染症内科＞	17
＜精神科＞	45
＜消化器内科＞	47
＜循環器内科＞	52
＜小児科＞	59
＜外科 肝胆膵外科・上部消化管外科・下部消化管外科・呼吸器外科・乳腺外科＞	74
＜形成外科＞	107
＜整形外科＞	109
＜脳神経外科＞	116
＜心臓血管外科＞	130
＜皮膚科＞	131
＜泌尿器科＞	133
＜産科・婦人科＞	136
＜眼科＞	138
＜耳鼻咽喉科＞	141
＜放射線診断科・放射線治療科＞	143
＜口腔外科＞	148
＜救命救急センター＞	150
＜麻酔科＞	158
＜臨床検査科＞	160
＜リハビリテーション科＞	167
＜臨床腫瘍科＞	169
＜薬剤部＞	172
＜看護部＞	183
＜栄養管理部＞	185
＜ケアサポートチーム＞	187
＜臨床心理室＞	190
＜メンタルヘルスサポートチーム「なのはな」＞	200
＜臨床工学室＞	203
＜院長室＞	206

臨床研究センター

<臨床研究センター>	208
<幹細胞医療研究室>	217
<再生医療研究室>	221
<分子医療研究室>	230
<エイズ先端医療開発室>	239
<HIV感染制御研究室>	255
<臨床疫学研究室>	259
<がん療法研究開発室>	263
<高度医療技術開発室>	296
<医療情報研究室>	300
<災害医療研究室>	302
<臨床研究推進室>	306
<レギュラトリーサイエンス研究室>	308

II. 研究助成一覧	311
------------------	-----

III. 全研究業績の区分分類と業績件数の総括表

診療科全体の研究業績の区分分類と業績件数の総括表	314
臨床研究センター全体の研究業績の区分分類と業績件数の総括表	314
全研究業績の区分分類と業績件数の総括表	314
研究業績の区分基準と記号	315

I. 研究業績

-診療部門-

総合診療科

中島 伸

総合診療科は常勤医師 1 名、非常勤医師 5 名、内科専攻医 1～2 名、初期研修医 1～3 名、診療看護師 4 名で日々の診療を行っています。対象疾患は肺炎や尿路感染などの感染症を中心として、不明熱、外傷（脊椎圧迫骨折、軽症頭部外傷など）、めまい、脱水症など多岐に及んでおり、入院患者数は 15～20 名程度です。また、これらの中から興味深い症例や治療成績評価についての学会発表を行いました。幸い、論文の 1 編が査読付きジャーナルにアクセプトされました。今後は論文数を増やしていきたいと考えています。

【2020 年度 研究発表業績】

A-6

中島 伸：突如発生、想定外 レジデントノート 22 (1): 175-177, 2020 年 4 月

中島 伸：一般外来研修、はじまる！ レジデントノート 22 (3): 607-609, 2020 年 5 月

中島 伸：医学論文作成の手ほどき レジデントノート 22 (4): 799-801, 2020 年 6 月

中島 伸：新型コロナウイルス・パンデミックとレジリエント・ヘルスケア（前編）
レジデントノート 22 (6): 1212-1214, 2020 年 6 月

中島 伸：新型コロナウイルス・パンデミックとレジリエント・ヘルスケア（後編）
レジデントノート 22 (7): 1385-1387, 2020 年 8 月

中島 伸：果てしなきムンテラ名人への道 レジデントノート 22 (9): 1774-1776, 2020 年 9 月

中島 伸：研修医の発表指導（前編） レジデントノート 22 (10): 1941-1943, 2020 年 10 月

中島 伸：研修医の発表指導（後編） レジデントノート 22 (12): 2344-2346, 2020 年 11 月

中島 伸：手術上達のヒント（その 1） レジデントノート 22 (13): 2503-2505, 2020 年 12 月

中島 伸：手術上達のヒント（その 2） レジデントノート 22 (15): 2939-2941, 2021

年 1 月

中島 伸:手術上達のヒント(その3) レジデントノート 22(16):3109-3111,2021
年 2 月

中島 伸:手術上達のヒント(その4) レジデントノート 22(18):3473-3475,2021
年 3 月

B-3

森 寛泰、山口壽美枝、竹本雪子、福田貴史、中島 伸:二次救急診療における診療看護師(NP)の能力の検証 -正診率と再受診率に着目して-。日本NP学会学術集会、Web開催、2020年10月16日

中島 伸、山口壽美枝、森 寛泰、竹本雪子、福田貴史:大阪医療センター総合診療科における診療看護師の活動と問題点、そして解決法の提案。第74回国立病院総合医学会 シンポジウム22:Japanese Nurse Practitionerの先進的イノベーション～医師と考えるJNPの更なる活動～、Web開催、2020年10月16日

森 寛泰:大阪医療センターにおける診療看護師(JNP)の研究報告。第74回国立病院総合医学会 シンポジウム22:Japanese Nurse Practitionerの先進的イノベーション～医師と考えるJNPの更なる活動～、Web開催、2020年10月16日

中島 伸:私の二刀流 ～脳神経外科医として、モノ書きとして～。日本脳神経外科学第79回学術総会 特別企画:二刀流の時代を生きる、岡山、2020年10月17日

山口壽美枝、森 寛泰、竹本雪子、福田貴史、中島 伸:新型コロナウイルス感染症(COVID-19)疑い症例の初期対応。第6回日本NP学会学術集会、東京、2020年10月18日

中島 伸:ポリファーマシー。令和2年度「医療安全推進指導者講習会」、大阪、2019年11月24日

IgA 腎症はもっとも多い原発性糸球体腎炎である。本疾患は若年者に発症しやすく、病巣感染との関連が指摘されている。これまで病巣感染や血尿の観点から検討してきた経験を踏まえ、日々の臨床では病巣感染を見つけ、可能な限り除去する努力を行っている。また IgA のヒンジ部の O 型糖鎖を質量分析器で定量し、糖鎖と治療反応性との関連を過去に報告してきた。また、IgA 腎症では糖鎖が短い、腎組織が類似している紫斑病性腎炎においても、糖鎖は短くなっていることを最近の共同研究で報告している。

IgA 腎症に関しては、これまでの基礎的、臨床的検討を行ってきた豊富な経験をもとに、専門外来を開設しており、日本全国、北は北海道から南は沖縄まで全国各地の大学病院、基幹病院より紹介を受けている。

またネフローゼ症候群においても、病巣感染と関連があることがわかりつつある。微小変化型ネフローゼ症候群において、病巣感染巣の外科的治療によりステロイドを使用することなく完全寛解導入に成功した世界初の症例を英文報告している。その他の組織型のネフローゼ症候群でも、病巣感染の除去にて、ステロイドを使用せずに寛解することに成功している。これらの豊富な経験を基に、ネフローゼ症候群に関しても日本全国の大学病院や基幹病院より紹介を受けている。

腎臓領域では、利尿薬の使い方も重要である。水利尿薬であるトルバプタンの使用経験は豊富であるが、その薬剤の細胞内液に対する影響等を論文報告している。本薬剤は、多発性嚢胞腎でも用いるが、本疾患についても専門外来を開設しており、多くの医療機関より紹介を受けている。

腎機能が低下した患者さんでは、血管石灰化が起りやすく心血管イベントを起こしやすい。そのため、血管石灰化に関連のある因子も検討し論文化している

【2020 年度 研究発表業績】

A-0

Takaori K, Iwatani H, Yamato M and Ito T: User of angiotensin-converting-enzyme inhibitor and/or angiotensin II receptor blocker might be associated with vascular calcification in predialysis chronic kidney disease patients: a retrospective single-center observational study 「BMC Nephrology」 22(1):7, 2021 Jan

Yamato M, Asahina Y, Koizumi S, Shigeki T, Yajima A, Kimura Y, Iwatani H.: Lactate predicts the 28-day survival rate in patients with septic shock treated with the combination of PMX-DHP and rTM. 「Ther Apher Dial.」 24(5):492-498, 2020 Oct

Obi Y, Yamaguchi S, Hamano T, Sakaguchi Y, Shimomura A, Namba-Hamano T, Mikami S, Nishi O, Tanaka M, Kamoto A, Obi Y, Tomosugi N, Tsubakihara Y, Isaka Y: Effect of cholecalciferol on

serum hepcidin and parameters of anaemia and CKD-MBD among haemodialysis patients: a randomized clinical trial 「Sci Rep」 10(1): 15500, 2020 Sep

B-4

矢島綾子、倭 成史、茂木孝友、小泉信太郎、木村良紀、岩谷博次: Nasal High-Flow (NHF)とAN69ST膜を用いた持続血液濾過透析(AN69ST-CHDF)を併用し重症呼吸不全を早期に離脱した2例。第65回日本透析医学会学術集会・総会、大阪、web、2020年11月2日

窪田卓也、小泉信太郎、茂木孝友、矢島綾子、木村良紀、倭 成史、岩谷博次: 持続性ショック状態を呈さず、診断に難渋した血液透析患者の弓部大動脈瘤破裂の1剖検例。第65回日本透析医学会学術集会・総会、大阪、web、2020年11月2日

小堀愛美、倭 成史、茂木孝友、矢島綾子、小泉信太郎、木村良紀、浜川卓也、岩谷博次: スキルス胃癌に対する胃全摘術後に寒冷凝集素症(CAD)の増悪を呈した1例。第65回日本透析医学会学術集会・総会、大阪、web、2020年11月2日

岩谷博次、小泉信太郎、茂木孝友、矢島綾子、木村良紀、藤中俊之、倭 成史: 脳動脈瘤患者における多発性嚢胞腎の頻度。第63回日本腎臓学会総会、横浜、2020年8月19日～21日

別所紗妃、岩谷博次、茂木孝友、矢島綾子、小泉信太郎、木村良紀、倭 成史: 亜鉛が赤血球産生を刺激、誘発する可能性。第63回日本腎臓学会総会、横浜、2020年8月19日～21日

矢島綾子、岩谷博次、茂木孝友、小泉信太郎、木村良紀、倭 成史: 腎 Resistive Index(RI)はeGFR、尿蛋白、尿細管マーカーより腎機能低下/死亡の予測能が高い。第63回日本腎臓学会総会、横浜、2020年8月19日～21日

茂木孝友、岩谷博次、矢島綾子、小泉信太郎、木村良紀、関本貢嗣、加藤健志、倭 成史: 腎機能は人工肛門(ストマ)造設で低下し、閉鎖で回復する。第63回日本腎臓学会総会、横浜、2020年8月19日～21日

下村明弘、尾崎晋吾、高橋篤史、松井功、猪坂善隆: 全身性エリテマトーデスの経過中に抗AQP4抗体陽性の視神経脊髄炎を発症し、血漿交換が奏効した症例。第65回日本透析医学会学術集会・総会、大阪、web、2020年11月2日

B-6

脇 貞徳、別所紗妃、窪田卓也、小堀愛美、東 優希、野津翔輝、木村良紀、下村明弘、岩谷博次: 家族歴もなく、多発腎嚢胞も形態的に非典型的で常染色体優性多発性嚢胞腎

(ADPKD)と診断しえていなかった高齢患者において、繰り返しの脳MR検査で脳動脈瘤が発見された1例。第231回日本内科学会近畿地方会、京都、web、2021年3月13日

小林 碧、野津翔輝、東 優希、窪田卓也、小堀愛美、別所紗妃、木村良紀、下村明弘、岩谷博次：QTc 短縮を認めない高カルシウム（Ca）血症に高マグネシウム（Mg）血症合併が判明した一例。第 231 回日本内科学会近畿地方会、京都、web、2021 年 3 月 13 日

小堀愛美、別所紗妃、窪田卓也、東優希、野津翔輝、下野圭一郎、木村良紀、下村明弘、岩谷博次：サリチル酸中毒に対し血液透析を含む集学的治療で救命しえた一例。第 94 回大阪透析研究会、大阪、web、2021 年 3 月 7 日

B-8

岩谷博次：合併症予防のための 2 型糖尿病治療。Diabetes & Kidney Disease Seminar、大阪、2020 年 11 月 20 日

岩谷博次：CKD での貧血治療における注意点。CKD 病診連携セミナー、大阪、2020 年 11 月 12 日

岩谷博次：腎疾患と栄養管理。令和 2 年度「NST 専門療法士認定取得研修」、大阪、2020 年 11 月 17 日

糖尿病内科

加藤 研

当科は糖尿病の治療ならびに合併症の早期発見に努め、患者の QOL 改善に取り組んでいる。

看護部・栄養管理室・薬剤科・臨床検査科・リハビリテーション科・口腔外科と糖尿病チームを組織し、共同で糖尿病教室・糖尿病デーの催しを行い患者への情報提供に取り組んでいる。また看護部とフットケア外来、看護部・栄養管理室と透析予防外来、看護部・栄養管理室と1型糖尿病センターを開設し専門医療を提供している。最近の糖尿病治療分野ではグルコース測定機器としてのCGM（持続グルコースモニタリング）やFGM（フラッシュグルコースモニタリング：腕に留置したセンサーに読み取り機をかざしてグルコース値をモニターする）またインスリン注入機器としてはインスリンポンプ（CSII）のみならずSAP（Sensor Augmented Pump：持続グルコースモニター付きポンプ）など、先進糖尿病治療デバイスの進化が目立っている。当科ではそのような先進デバイスを駆使し糖尿病患者のよりよい血糖コントロール実現に寄与している。

また、最近では内分泌疾患の精査、負荷試験入院も受け入れ、内分泌分野の学会発表も行い診療領域の幅を広げている。

【2020年度 研究発表業績】

A-0

Murata T, Kuroda A, Matsuhisa M, Toyoda M, Kimura M, Hirota Y, Kato K, Sawaki H, Tone A, Kawashima S, Okada A, Watanabe T, Nirengi S, Sukanuma A, Sakane N.

"Predictive Factors of the Adherence to Real-time CGM Sensors: A Prospective Observational Study (PARCS STUDY)". 「J Diabetes Sci Technol」、

1932296820939204 - 1932296820939204 2020年8月7日

A-2

加藤 研: 第7回 高齢糖尿病患者のケア「高齢糖尿病患者のケア」、17(7): p.679-681、株式会社メディカ出版、大阪、2020年7月

加藤 研: 解説&症例でわかるSAP「まるごと◎血糖モニターとインスリンポンプ」、17(8): p.735-741、株式会社メディカ出版、大阪、2020年8月

B-6

松井俊郎、山本裕一、向井うらら、岩崎莉佳子、花岡 希、上原雄平、種田灯子、光井絵理、加藤 研：後期ダンピング症候群と甲状腺機能低下症および原発性副腎皮

質機能低下症の合併により頻回に食後低血糖・意識障害を引き起こした一例。第229回日本内科学会近畿地方会、大阪、2020年9月26日

吉村友佑、山本裕一、上原雄平、花岡 希、種田灯子、光井絵理、木村剛、小河原光正、加藤 研：小細胞肺癌の化学療法中に汎下垂体機能低下を認めた1例。第230回日本内科学会近畿地方会、大阪、2020年12月12日

B-8

加藤 研：リアルタイムCGMに適した症例の検討。テルモ（株）WEBセミナー、大阪、2020年9月8日

加藤 研：1型糖尿病への治療法選択について～MDI、CSII、SAP、SGLT2阻害薬の使用例から考える～。Type1 diabetes Seminar、兵庫、2020年11月5日

加藤 研：リアルタイムCGMを1型糖尿病診療に活かす。第1回 リアルタイムCGM 適正使用 WEBセミナー、大阪、2021年1月14日

加藤 研：先進糖尿病治療デバイスの活用～CSII/SAP療法とチーム医療について～。和歌山SAPセミナーWeb、大阪、2021年1月27日

加藤 研：リアルタイムCGMの学び舎 in 大阪。基幹病院でのDexcom G4運用の現状と適応患者像について、大阪、2021年3月4日

B-9

加藤 研：「糖尿病はどんな病気」。毎日放送【医のココロ】、大阪、2021年3月6日

輸血療法部

高見康二

輸血療法部では、安全かつ適切な輸血療法の実践をめざして輸血の管理、検査、供給を行っています。同種血輸血製剤に関しては、発注および在庫調整を適切に行い、病棟や外来での輸血依頼や手術の状況に応じて、常時、必要量を払い出しできる状態を維持し、低い廃棄率での過不足のない管理を実現しています。また、輸血後移植片対宿主病（GVHD）の発生を予防するために、血液製剤に放射線照射を行っています。

輸血副作用に関する情報収集も、輸血部の重要な任務です。輸血後副作用が発生した場合の遡及調査のため、輸血を受けられた患者様の血液は2年間、適切に保存しています。また、輸血副作用発症時の情報収集を行い、日本血液センターへ報告し、必要があれば精密検査の依頼を行います。

さらに、各部署で安全な輸血療法が継続的に実施できるよう、院内で作製した輸血管理マニュアルの更新や、自己血輸血の実施に関する院内の整備や教育等も行っています。また、輸血療法部運営委員会を年6回開催し、医師、看護師、臨床検査技師、薬剤部、事務等の各部門の委員で、輸血療法に関する問題を協議し、より安全で適切な輸血療法の実施できるよう取り組んでいます。

2020年度は血液内科常勤医が不在のため、研究業績はありませんが、2021年度より血液内科が整備されることとなり今後の発展が期待されます。

呼吸器内科

小河原光正

呼吸器内科は呼吸器悪性腫瘍（肺癌，胸膜中皮腫など）を専門として診療を行っており，呼吸器外科，放射線診断科，放射線治療科，臨床検査科，臨床腫瘍科と協同で肺癌の診断及び化学療法を含む集学的治療を行っている．また，気管支鏡診断に力を入れている．稀な肺悪性腫瘍の症例報告，気管支鏡検査などについて報告を行った．

また，抗がん剤の治験，国立病院機構ネットワーク研究等の多施設共同臨床試験に参加・協力した．

【2020年度 研究発表業績】

A-5

木村 剛：仮想気管支鏡を軸に気管支鏡検査の実際と肺癌治療の概要について「日本放射線技術学会近畿支部雑誌」26（3）P32-P83，2020年

近畿支部 2020年度ステップアップ臨床セミナー，web開催，2020年11月20日-30日

B-4

安藤性實、小河原光正、木村 剛、高見康二、栗山啓子、眞能正幸、森 清：化学療法反復により長期生存が得られた胸腺癌の一例。第43回日本呼吸器内視鏡学会学術集会、旭川、2020年6月27日。

土井貴司、高見康二、小河原光正、木村 剛、宮本 智、安藤性實、角永茂樹、森 清、栗山啓子：肺原発滑膜肉腫の1切除例。第61回日本肺癌学会学術集会、岡山、2020年11月14日

久田原郁夫、角永茂樹、上田孝文、小河原光正、安藤性實、木村 剛、宮本 智：I V期肺がんにおける骨転移の臨床的検討。第53回日本整形外科学会骨・軟部腫瘍学術集会。オンライン学術集会、2020年9月11日-30日

B-5

木村 剛：仮想気管支鏡を軸に気管支鏡検査の実際と肺癌治療の概要について。日本放射線技術学会近畿支部 2020年度ステップアップ臨床セミナー、web開催、2020年11月20日-30日

B-6

大崎慧、安藤性實、小河原光正、清木祐介、三田英治、栗山啓子、森清、眞能正

幸：急激な転帰を辿った **KRAS** 変異陽性肺癌の 1 例。第 229 回日本内科学会近畿地方会、web 開催、2020 年 9 月 26 日

吉村友佑、山本裕一、上原雄平、花岡 希、種田灯子、光井絵理、加藤 研、木村剛、小河原光正：小細胞肺癌の化学療法中に汎下垂体機能低下を認めた 1 例。第 230 回日本内科学会近畿地方会、web 開催、2020 年 12 月 26 日。

脳卒中内科

山上 宏

脳卒中内科は脳神経外科と協力して脳卒中診療を24時間体制で行っています。当科はスタッフ全員が脳卒中専門医であり、その中に脳神経血管内治療専門医、日本神経学会専門医を擁し、脳卒中診療に特化した内科部門です。

当科での研究についても脳外科と協力し、新規の脳血栓回収デバイスの国内治験（VS-01）、来院時に広範囲脳梗塞を認める脳主幹動脈閉塞例に対する血栓回収療法ランダム化比較試験（RESCUE-LIMIT）を行っており、2021年度には急性期脳出血に対する国際共同比較試験（FASTEST）の患者登録を開始する予定です。また、脳卒中内科単独で、軽症脳梗塞を対象とした新規経口抗凝固薬の国際治験（CV0200131）や、中等症脳梗塞を対象とした神経再生誘導薬の国内治験（S-005151）に参加、特定臨床研究である心房細動とアテローム血栓症を合併した脳梗塞例に対する抗血栓療法に関する比較試験（ATIS-NVAF）の代表研究者および事務局を担当、同じく特定臨床研究である心房細動を有する脳梗塞に対するアブレーションの効果に関する比較試験（STABLED）に循環器内科と共同で参加しています。また、全国数施設と共同の埋め込み型心電図計を使用している潜因性脳梗塞の登録研究（LOOK）、抗血栓薬や脳微少出血に関する多施設共同研究に参加しています。

【2020年度 研究業績発表】

A-0

Sato T, Sato S, Yamagami H, Komatsu T, Mizoguchi T, Yoshimoto T, Takagi M, Ihara M, Koga M, Iwata H, Matsushima M, Toyoda K, Iguchi Y : D-dimer level and outcome of minor ischemic stroke with large vessel occlusion. 「J Neurol Sci」413:116814.、2020年6月

Imamura H, Sakai N, Matsumoto Y, Yamagami H, Terada T, Fujinaka T, Yoshimura S, Sugi K, Ishii A, Matsumaru Y, Izumi T, Oishi H, Higashi T, Iihara K, Kuwayama N, Ito Y, Nakamura M, Hyodo A, Ogasawara K. Clinical trial of carotid artery stenting using dual-layer CASPER stent for carotid endarterectomy in patients at high and normal risk in the Japanese population. 「J Neurointerv Surg」2020-016250、2020年9月

Uchiyama S, Hoshino T, Charles H, Kamiyama K, Nakase T, Kitagawa K, Minematsu K, Todo K, Okada Y, Nakagawara J, Nagata K, Yamagami H, Yamaguchi T, Amarenco P. Japanese and Non-Japanese Patients with Transient Ischemic Attack or Minor Stroke: A Five-Year Risk Analysis of Stroke and Vascular Events. 「J Atheroscler Thromb.」doi:10.5551/jat.58552、2020年9月

Uchida K, Yoshimura S, Imamura H, Ohara N, Sakai N, Tanaka K, Yamagami H,

Matsumoto Y, Takeuchi M, Morimoto T; RESCUE-Japan Registry 2 Investigators. Effect of Statin Administration After Onset of Acute Ischemic Stroke With Large Vessel Occlusion: Insights From RESCUE-Japan Registry 2. 「J Am Heart Assoc.」 9(23): e017472、2020 年 9 月

Saito K, Abe S, Kumamoto M, Uchihara Y, Tanaka A, Sugie K, Ihara M, Koga M, Yamagami H. : Blood Flow Visualization and Wall Shear Stress Measurement of Carotid Arteries Using Vascular Vector Flow Mapping. 「Ultrasound Med Biol」 46:P2692-2699、2020 年 10 月

Kinjo N, Yoshimura S, Uchida K, Sakai N, Yamagami H., Morimoto T. : RESCUE-Japan Registry 2 Investigators. Incidence and Prognostic Impact of Intracranial Hemorrhage after Endovascular Treatment for Acute Large Vessel Occlusion. 「Cerebrovasc Dis.」 49:540-549, 2020 年 10 月

Tokunaga K, Koga M, Yoshimura S, Okada Y, Yamagami H., Todo K, Itabashi R, Kimura K, Sato S, Terasaki T, Inoue M, Shiokawa Y, Takagi M, Kamiyama K, Tanaka K, Takizawa S, Shiozawa M, Okuda S, Kameda T, Nagakane Y, Hasegawa Y, Shibuya S, Ito Y, Matsuoka H, Takamatsu K, Nishiyama K, Kario K, Yagita Y, Mizoguchi T, Fujita K, Ando D, Kumamoto M, Miwa K, Arihiro S, Toyoda K; for the SAMURAI Study Investigators. : Left Atrial Size and Ischemic Events after Ischemic Stroke or Transient Ischemic Attack in Patients with Nonvalvular Atrial Fibrillation. 「Cerebrovasc Dis.」 49:P619-624, 2020 年 11 月

Yoshimoto T, Tanaka K, Yamagami H., Uchida K, Inoue M, Koge J, Ihara M, Toyoda K, Imamura H, Ohara N, Morimoto T, Sakai N, Yoshimura S : Treatment Outcomes by Initial Neurological Deficits in Acute Stroke Patients with Basilar Artery Occlusion: The RESCUE Japan Registry 2. 「J Stroke Cerebrovasc Dis. 」 29:P105-256、2020 年 11 月

Higashida K, Okazaki S, Todo K, Sasaki T, Ohara N, Kohara N, Yamamoto S., Yamagami H., Hashikawa K, Yoshimoto T, Ihara M, Koga M, Szabo K, Mochizuki H. : A multicenter study of transient global amnesia for the better detection of magnetic resonance imaging abnormalities. 「Eur J Neurol.」 27:P2117-2124、2020 年 11 月

Kitano T, Sakaguchi M, Yamagami H., Ishikawa T, Ishibashi-Ueda H, Tanaka K, Okazaki S, Sasaki T, Kadono Y, Takagaki M, Nishida T, Nakamura H, Yanase M, Fukushima N, Shiozawa M, Toyoda K, Takahashi JC, Funatsu T, Ryu B, Yoshioka D, Toda K, Murayama S, Kawamata T, Kishima H, Sawa Y, Mochizuki H, Todo K. Mechanical thrombectomy in acute ischemic stroke patients with left ventricular assist device. 「J Neurol Sci.」 418:117142、2020 年 11 月

Doijiri R, Yamagami H., Morimoto M, Iwata T, Hashimoto T, Sonoda K, Yamazaki H, Koge J, Kimura N, Todo K. Paroxysmal Atrial Fibrillation in Cryptogenic Stroke Patients

With Major-Vessel Occlusion. 「Front Neurol. 」 11:580572. 2020 年 11 月

Yazawa Y, Ohira T, Itabashi R, Uchida K, Sakai N, Yamagami H, Morimoto T, Yoshimura S; RESCUE-Japan Registry 2 Investigators. Association of Admission Hyperglycemia with Clinical Outcomes in Japanese Patients with Acute Large Vessel Occlusion Stroke: A post hoc Analysis of the Recovery by Endovascular Salvage for Cerebral Ultra-Acute Embolism Japan Registry 2. 「Cerebrovasc Dis.」 50:P12-19. 2021 年 1 月

Toyoda K, Inoue M, Yoshimura S, Yamagami H, Sasaki M, Fukuda-Doi M, Kimura K, Asakura K, Miwa K, Kanzawa T, Ihara M, Kondo R, Shiozawa M, Ohtaki M, Kamiyama K, Itabashi R, Iwama T, Aoki J, Minematsu K, Yamamoto H, Koga M; THAWS trial investigators. Magnetic Resonance Imaging-Guided Thrombolysis (0.6 mg/kg) Was Beneficial for Unknown Onset Stroke Above a Certain Core Size: THAWS RCT Substudy. 「Stroke.」 52:P12-19、2021 年 1 月

Toyoda K, Yamagami H, Kitagawa K, Kitazono T, Nagao T, Minematsu K, Uchiyama S, Tanahashi N, Matsumoto M, Nagata I, Nishikawa M, Nanto S, Shirai T, Abe K, Ikeda Y, Ogawa A; PRASTRO Trial Investigators. Blood Pressure Level and Variability During Long-Term Prasugrel or Clopidogrel Medication After Stroke: PRASTRO-I. 「Stroke. 」 52:P12-19. 2021 年 1 月

Kitazono T, Toyoda K, Kitagawa K, Nagao T, Yamagami H, Uchiyama S, Tanahashi N, Matsumoto M, Minematsu K, Nagata I, Nishikawa M, Nanto S, Ikeda Y, Shirai T, Abe K, Ogawa A; PRASTRO-I Study Group. Efficacy and Safety of Prasugrel by Stroke Subtype: A Sub-Analysis of the PRASTRO-I Randomized Controlled Trial. 「J Atheroscler Thromb.」 28:P169-180. 2021 年 2 月

Aoki J, Iguchi Y, Urabe T, Yamagami H, Todo K, Fujimoto S, Idomari K, Kaneko N, Iwanaga T, Terasaki T, Tanaka R, Yamamoto N, Tsujino A, Nomura K, Abe K, Uno M, Okada Y, Matsuoka H, Yamagata S, Yamamoto Y, Yonehara T, Inoue T, Yagita Y, Kimura K; ADS investigators. Cilostazol Addition to Aspirin could not Reduce the Neurological Deterioration in TOAST Subtypes: ADS Post-Hoc Analysis. 「J Stroke Cerebrovasc Dis.」 30:105494、2021 年 2 月

Nogueira R, Abdalkader M, Qureshi MM, Frankel MR, Mansour OY, Yamagami H, et al.: Global Impact of the COVID-19 Pandemic on Stroke Hospitalizations and Mechanical Thrombectomy Volumes. 「Int J Stroke.」 29:1747493021991652. 2021 年 3 月

Imamura H, Sakai N, Yamagami H, Satow T, Matsumoto Y, Imai K, Ota S, Horie N, Kondo R, Enomoto Y, Yoshimura S, Hirohata M, Shibata M, Matsumaru Y, Ohara N, Sakai C; T-01 trial Investigators. Clinical Trial of the New Stent Retriever Tron FX for both Proximal and Distal Intracranial Large Vessel Occlusions. 「J Stroke Cerebrovasc Dis」 30:105585、2021 年 3 月

Yamagami H, Hayakawa M, Inoue M, Iihara K, Ogasawara K, Toyoda K, Hasegawa Y, Ohata K, Shiokawa Y, Nozaki K, Ezura M, Iwama T; JSS/JNS/JSNET Joint Guideline Authoring Committee. Guidelines for Mechanical Thrombectomy in Japan, the Fourth Edition, March 2020: A Guideline from the Japan Stroke Society, the Japan Neurosurgical Society, and the Japanese Society for Neuroendovascular Therapy. 「Neurol Med Chir (Tokyo).」 61:P163-192. 2021年3月

A-2

山上 宏: 脳卒中「臨床循環器学」伊藤 浩、坂田泰史編集、P319-332、文光堂、東京、2021年3月16日

山本司郎、山上 宏: 急性期血栓回収療法の現状と課題 「Annual Review 神経 2020」鈴木則宏、荒木信夫、宇川義一、桑原 聡、塩川芳昭:p190-199、中外医学社、東京、2020年4月15日

A-3

片岡優子、田中寛大、園田和隆、山上 宏、古賀政利: リバーロキサバン内服中に尿閉、尿路感染症による急性腎障害を来し脳出血に至った1例「脳卒中」42(3): P176-180、2020年5月

岡田敬史、井上 学、山上 宏、田中寛大、塩澤真之、園田和隆、池之内 初、福田哲也、佐藤 徹、猪原匡史、工藤與亮、板橋 亮、豊田一則、古賀政利: 急性期脳梗塞における画像診断の現状—全国アンケート調査—「脳卒中」42 (6): P502-508、2020年11月

A-4

河野智之、山上 宏: 脳梗塞血管内治療の今後の展望「脳神経内科」92(6): P650-656、2020年6月

永野恵子: Ultrasonography in acute ischemic stroke 脳卒中診療における超音波検査の実際「神経治療」37(3): 294-298、2021年2月

山上 宏 (作成委員): 日本脳卒中学会、日本脳神経外科学会、日本脳神経血管内治療学会策定 経皮経管的脳血栓回収機器 適正使用指針 第4版「脳卒中」42(4): P281-313、2020年7月25日

山上 宏: 急性期脳梗塞における血管内治療の進歩「画像診断」40(14): P1417-1426、2020年11月25日

古賀政利、井上 学、園田和隆、田中寛大、塩澤真之、岡田敬史、池之内 初、福田哲也、佐藤 徹、猪原匡史、板橋 亮、工藤與亮、山上 宏、豊田一則: 急性期脳梗塞診療における画像診断: 適切な再灌流療法を行うために「脳卒中」42(6): P495-501、2020年11月

山上 宏 : 歩いて帰る脳卒中診療「*BIO Clinica*」 35 (14): P7-11、2020 年 12 月 10 日

山上 宏 : 脳梗塞急性期における機械的血栓回収療法の適応判断のポイントは?
【初期画像検査で早期虚血病変の大きさと脳主幹動脈閉塞の有無を評価する】「*日本医事新報*」 5055: P46-46、2021 年 3 月 13 日

B-3

山上 宏 : Impact of Intracranial Hemorrhage during Antithrombotic Therapy From Stroke Physician 。第 84 回日本循環器学会学術集会、京都、2020 年 8 月 1 日

山上 宏 : 奥野善教、猪原匡史、八木田佳樹、松岡秀樹、宮下史生、重嶋裕也、望月悠一 : 病院前の卒中スケールの役割とは : FACE2AD スケールの活用。第 45 回日本脳卒中学会学術集会、横浜、2020 年 8 月 25 日

山上 宏 : 教育講演 脳梗塞急性期 血管内治療。第 45 回日本脳卒中学会学術集会、横浜、2020 年 8 月 25 日

山上 宏 : 脳梗塞再発予防における抗血栓療法 循環器領域から学ぶ。第 45 回日本脳卒中学会学術集会、横浜、2020 年 8 月 25 日

山上 宏 : Decision Making of Patent Foramen Ovale Closure by Brain and Heart Team。第 61 回日本神経学会学術大会、岡山、2020 年 9 月 1 日

山上 宏 : 教育コース 血栓回収療法のすべて。第 61 回日本神経学会学術大会、岡山、2020 年 9 月 2 日

山上 宏 : 抗凝固薬中和と脳梗塞超急性期治療。第 23 回日本栓子検出と治療学会、東京、2020 年 10 月 25 日

山上 宏 : The long and winding road ~ 頸動脈狭窄症へのアプローチ。第 38 回日本神経治療学会学術集会、東京、2020 年 10 月 29 日

山上 宏 : Continuing Education Program AIS1 (適応、エビデンス、体制整備)。第 36 回日本脳神経血管内治療学会学術総会、京都、2020 年 11 月 19 日

Yamagami H, Sakai N, Ogasawara K, Nagata I, Matsumaru Y, Yoshimura S, Sasaki M, Nagatsuka K, Minematsu K, Ogawa A, Miyamoto S, Nagai Y, Sakai C, Matsumoto Y, Ezura M, Ishihara H, for the CAS-CARE Trial Investigators : Cilostazol versus Other Anti-platelet Drugs for the In-stent Restenosis after Carotid Artery Stenting: The Carotid Artery Stenting with Cilostazol Addition for Restenosis (CAS-CARE) Trial. 第 36 回日本脳神経血管内治療学会学術総会、京都、2020 年 11 月 20 日

山上 宏 : CAS 施行後の頸部血管エコー。第 39 回日本脳神経超音波学会総会、福

岡、2020年12月8日

永野恵子：下肢静脈血栓と PFO。第 39 回日本脳神経超音波学会総会、福岡市＋Web 開催＋紙上発表、2020 年 12 月 9 日

山上 宏、坂井信幸、小笠原邦明、永田 泉、松丸祐司、吉村紳一、佐々木真理、長束一行、峰松一夫、小川 彰、宮本 享、永井洋士、坂井千秋、松本康史、江面正幸、石原秀行：頸動脈ステント留置術後の再狭窄に対するシロスタゾールの効果に関する多施設無作為比較試験：CAS-CARE。第 46 回日本脳卒中学会学術集会、福岡、2021 年 3 月 11 日

山上 宏：ディベート 1 「EVT 前の tPA 治療は必要か？」必要な症例とは？。第 46 回日本脳卒中学会学術集会、福岡、2021 年 3 月 13 日

山上 宏：Reperfusion Therapy in Patients with Acute Cardiogenic Stroke。第 85 回日本循環器学会学術集会、横浜、2021 年 3 月 27 日

山上 宏：Mechanical thrombectomy for acute ischemic stroke - expansion of the indication。第 85 回日本循環器学会学術集会、横浜、2021 年 3 月 27 日

B-4

江左佳樹、山本司郎、池上剛史、安藤大祐、河野智之、永野恵子、山上 宏、三嶋剛、大西俊成、田中宜暁、井上耕一：経皮的左心耳閉鎖術後に重篤な出血を来し死亡した一例。第 7 回日本心血管脳卒中学会、横浜、2020 年 8 月 25 日

岸 由衣加、安藤大祐、永野恵子、池上剛史、河野智之、山本司郎、山上 宏：緊急 EC-IC バイパス術後に経頭蓋カラードプラで血行動態の経時的変化が観察可能であった 1 例。第 39 回日本脳神経超音波学会総会、福岡市＋Web 開催＋紙上発表、2020 年 12 月 8 日～9 日

安藤大祐、永野恵子、池上剛史、河野智之、山本司郎、山上 宏：頸動脈エコーで経時的に血栓を確認し得た椎骨動脈スタンブ症候群の 1 例。第 39 回日本脳神経超音波学会総会、福岡市＋Web 開催＋紙上発表、2020 年 12 月 8 日～9 日

櫻井 玲、山本司郎、井出裕季子、木村陽子、永野恵子、藤中俊之、山上 宏：動脈解離による急性脳底動脈閉塞症に対し 2 度のステント留置術を施行した一例。第 36 回日本脳神経血管内治療学会学術総会、京都、2020 年 11 月 19 日

B-6

小林 碧、櫻井 玲、山本司郎、永野恵子、山上 宏：橋左背側ラクナ梗塞により右半身異常感覚、右上肢振戦、右方への body lateropulsion を呈した 1 例。第 118 回日本神経学会近畿地方会、大阪市、2021 年 3 月 7 日

感染症内科

上平朝子

当院は平成9年4月にエイズ治療の近畿地方ブロック拠点病院に選定され、診療、研究、情報発信、教育研修の4つの機能を求められている。当院のHIV患者数は、毎年1年間で140名前後の新規患者が受診し、令和3年3月末現在、当院のHIV感染症累計患者数は約3,800名以上、入院累積患者数は2,000名以上となっている。当科では、HIV感染症に関する多様なニーズに対して、医師、看護師、薬剤師、カウンセラー、情報担当官、ソーシャルワーカーらでチーム医療を実践している。現在の診療内容は、HIV感染症が全体の9割近くを占めており、その他は免疫疾患、一般感染症（一類、二類を除く）などである。

「主な診療、研究」

日和見感染症に対する治療や予防の進歩と抗HIV療法の確立によってエイズによる死亡者数は減少した。当科では、ニューモシスティス肺炎、サイトメガロウイルス感染症、カンジダ症、クリプトコッカス髄膜炎、非結核性抗酸菌症など多彩な病原体による日和見感染症の診療を行っている。抗HIV療法では、最新の治療を提供し、9割以上の患者で治療が奏効している。最近の初回治療レジメンは、インテグラーゼ阻害薬を含むSTR（single tablet regimen）が最も多く選択されている。抗HIV療法は、患者の予後を改善し、他の人への感染を予防しHIVの流行を抑えることから、全ての人に早期に治療を開始することが推奨されている。また、新薬により服薬の負担はより一層軽減されている。しかし、長期間にわたり正確な内服を継続しなければならない抗HIV療法の身体的、精神的負担、非AIDS関連悪性腫瘍の増加、糖尿病や心・腎合併症など生活習慣病への対応、精神科疾患や長期療養施設の確保が困難であるなど課題も続いている。

研究では、医療体制、多様な合併症の課題克服、検査体制、薬剤耐性の動向把握、薬物動態、精神的、心理的支援の方策、ウイルス肝炎（HCV、HBV）とHIVとの重複感染についての症例研究などなど基礎研究、臨床研究を行い、新規薬剤の治験にも積極的に参加している。日本エイズ学会や日本感染症学会を始めとした多くの学会における発表や、論文発表を行っている。

「情報発信、教育研修」

HIV感染症は、病原体も感染経路も予防方法も明らかであるにも関わらず蔓延している。日本では、30～40歳代の若者を中心に患者が多くみられている。HIV感染症の早期発見と予防のために、病気についての正しい知識を幅広く提供している。現在、ブロック拠点病院である当院にHIV感染症患者が集中しているが、中核拠点病院を始めとした各拠点病院と連絡会議や研修会を行い、連携を強化している。各種マニュアルや冊子を作成し配布している。HIV/AIDS先端医療開発センターのホームページからも、最新の情報発信を行っている（<https://osaka.hosp.go.jp/department/khac/>）。さらに、HIV患者の高齢化に伴い、長期療養や一般医療の必要性が一層高まっており、地域の医療機関や訪問看護との連携も積極的に行っている。症例相談、針刺し等の職務感染防止への対応、生活

療養支援など、さまざまな相談にすみやかに対応できる体制を目指している。

【2020年度 研究発表業績】

A-0

Kato T, Yoshihara Y, Watanabe D, Fukumoto M, Wada K, Nakakura T, Kuriyama K, Shirasaka T, Murai T: Neurocognitive impairment and gray matter volume reduction in HIV-infected patients. 「J Neurovirol.」 26(4): P.590-601、2020年8月

Hirota K, Watanabe D, Koizumi Y, Sakanashi D, Ueji T, Nishida Y, Takeda M, Taguri T, Ozawa K, Mikamo H, Shirasaka T, Uehira T: Observational study of skin and soft-tissue Staphylococcus aureus infection in patients infected with HIV-1 and epidemics of Pantone-Valentine leucocidin-positive community-acquired MRSA infection in Osaka, Japan. 「J Infect Chemother.」 26(12): P.1254-1259、2020年11月

A-2

西田恭治: 血友病保因者の健康管理「EBM 血液疾患の治療」金倉譲 監修、P.473-474、中外医学社、東京、2021年1月

A-3

中蔵伊知郎、今西嘉生里、廣田和之、坪倉美由紀、上平朝子、宮部貴識、佐光留美、山内一恭: 基質拡張型 β -ラクタマーゼ(ESBLs)産生グラム陰性菌菌血症に対する抗菌薬療法の治療期間とアウトカムに関する検討:単施設後方視的調査「日本化学療法学会雑誌」 68(4): P.539-546、日本化学療法学会、2020年7月10日

櫛田宏幸、中内崇夫、矢倉裕輝、渡邊大、上平朝子、白阪琢磨: HIV-1, HBV 共感染血液透析症例におけるテノホビル血中濃度推移を測定した一症例「感染症学雑誌」印刷中。

A-4

上平朝子: HIV 感染症-Up to date「大阪透析研究会会誌」 38(1): P.15-20、2020年4月

白阪琢磨: ガイドライン改訂の Points DHHS ガイドライン改訂のポイント「HIV 感染症と AIDS の治療」 11(1): P.17-23、メディカルレビュー社、2020年11月

増田純一、渡邊大、横幕能行、四本美保子: 主要 AIDS 治療拠点病院での HIV 感染症治療の実際「HIV 感染症と AIDS の治療」 11(1): P.78-85、メディカルレビュー社、2020年11月

白阪琢磨: 抗 HIV 薬「治療薬ハンドブック 2021」 P.1406-1432、じほう、2021年1月

西田恭治：血友病保因者の健康管理「EBM 血液疾患の治療 2021-2022」P.473-474、中外医学社、2021年1月

西田恭治：女性血友病「Land-Mark in Thrombosis & Haemostasis」(1): P.39-42、メディカルレビュー社、2021年2月

西田恭治：保因者「日本血栓止血学会誌」32(1): P.33-41、2021年2月

西田恭治：より良いコミュニケーション講座 周産期の包括的なコミュニケーション(保因者検診、父親、家族全体のケアについて)「Frontiers in Haemophilia」8(1)、メディカルレビュー社、2021年3月

A-5

渡邊 大：オピニオンリーダーに聞く最新抗 HIV 治療 患者背景に合わせた抗 HIV 薬 切り替えの考え方「新しい NNRTI ドラビリンの実臨床における位置づけ」2020年11月

木内 英、谷口俊文、照屋勝治、渡邊 大：HIV 感染症座談会 HIV 感染症治療最前線! 新しい NNRTI ドラビリンの実臨床における位置づけ ～基礎から臨床まで、その可能性をさぐる～「記録集」、2020年12月

白阪琢磨：HIV 感染症及びその合併症の課題を克服する研究。厚生労働行政推進調査事業費補助金(エイズ対策政策研究事業)「HIV 感染症及びその合併症の課題を克服する研究」令和2年度研究報告書、2021年3月31日

白阪琢磨：HIV 感染症及びその合併症の課題を克服する研究。厚生労働行政推進調査事業費補助金(エイズ対策政策研究事業)「HIV 感染症及びその合併症の課題を克服する研究」平成30-令和2年度総合研究報告書、2021年3月31日

白阪琢磨：エイズ発症予防に資するための血液製剤による HIV 感染者の調査研究。公益財団法人友愛福祉財団委託事業「エイズ発症予防に資するための血液製剤による HIV 感染者の調査研究」令和2年度報告書、2021年3月31日

上平朝子：大阪医療センターにおける HIV/HCV 重複感染凝固異常患者の検討。厚生労働行政推進調査事業費補助金(エイズ対策政策研究事業)「血液製剤による HIV/HCV 重複感染患者の肝移植に関する研究」令和2年度研究報告書、P.13-15、2021年3月31日

渡邊 大：近畿ブロックの HIV 医療体制整備。厚生労働行政推進調査事業費補助金(エイズ対策政策研究事業)「HIV 感染症の医療体制の整備に関する研究」令和2年度研究報告書、P.64-68、2021年3月31日

A-6

長江千愛, 西田恭治, 佐道俊幸: 保因者・女性血友病。Frontiers in Haemophilia 7(1): 4-12、メディカルレビュー社、2020年4月

白阪琢磨: HIV 治療の現在 (第 1~3 回)。『中学保健ニュース』『高校保健ニュース』付録、株式会社少年写真新聞社、2020年6月28日、8月28日、9月28日

白阪琢磨: HIV 感染症の治療の現在。『高校保健ニュース』、株式会社少年写真新聞社、2020年11月8日

白阪琢磨、山内一恭、小林恭子、松尾友香、羽田かおる: 密な職種間連携で適正な治験と臨床研究を実現する「臨床研究推進室」。Medical Network No. 34 P.10-13、田辺三菱製薬、2020年11月

白阪琢磨: HIV の新常識、適切な治療続ければ「感染しない」。朝日新聞、2020年12月1日

白阪琢磨: HIV 新常識、治療すれぱうつさない 世界エイズデー。朝日新聞 DIGITAL、2020年12月1日

B-2

Bessho H, Tanaka S, Ishihara A, Watanabe D, Uehira T, Ishida H, Shirasaka T, Mita E: Effectiveness of hepatitis A vaccination in human immunodeficiency virus-infected men who have sex with men during an outbreak of hepatitis A in Osaka, Japan. The Digital International Liver Congress, Digital, 27-29 Aug 2020

Anand T, Nitpolprasert C, Shirasaka T, Iwatani Y, Yokomaku Y, Imahashi M, Kaneko N, Iwahashi K, Ikushima Y, Aoki R, Ishida T, Shiono S, Yamaguchi M, Takemura K, Iwamoto A. HIV prevention among MSM in Japan: current opinions on achieving the first 90 among Japanese MSM. HIV Glasgow 2020, Virtual Meeting, 5-8 Oct 2020

B-3

渡邊 大: 50分でCatch upできるHIV治療の現在と臨床で直面する今日の課題。第94回日本感染症学会総会・学術講演会、東京、2020年8月21日

白阪琢磨: U=Uを陽性者に伝える、社会に伝えることについて。第34回日本エイズ学会学術集会・総会、WEB開催、2020年11月27日

西田恭治: 世界の血友病事情－WFHの報告を踏まえて－。第34回日本エイズ学会学術集会・総会、WEB開催、2020年11月27日

白阪琢磨: ガイドラインの位置づけと期待。第34回日本エイズ学会学術集会・総会、東京・WEB、2020年11月28日

渡邊 大：With/After COVID-19 時代の ART の New Normal。第 34 回日本エイズ学会学術集会・総会、WEB 開催、2020 年 11 月 28 日

白阪琢磨：HIV 感染症と AIDS の治療の手引き「What's New」。第 34 回日本エイズ学会学術集会・総会、WEB 開催、2020 年 11 月 29 日

白阪琢磨：HIV/AIDS に関連した医薬品の承認審査について－医師の立場から－。第 34 回日本エイズ学会学術集会・総会、WEB 開催、2020 年 11 月 27 日-12 月 25 日

上平朝子：抗 HIV 治療の開始時期・薬剤の選択。第 34 回日本エイズ学会学術集会・総会、WEB 開催、2020 年 11 月 27 日-12 月 25 日

渡邊 大：HIV 診療における薬物相互作用。第 34 回日本エイズ学会学術集会・総会、WEB 開催、2020 年 11 月 27 日-12 月 25 日

渡邊 大：CAB/RPV など注射剤の将来的なポジショニングについて。第 34 回日本エイズ学会学術集会・総会、WEB 開催、2020 年 11 月 27 日-12 月 25 日

西田恭治：血友病周産期を取り巻く課題。第 30 回日本産婦人科新生児血液学会、WEB 開催、2020 年 12 月 21-26 日

西田恭治：保因者の現状と課題。第 30 回日本産婦人科新生児血液学会学術集会、WEB 開催、2020 年 12 月 21-26 日

B-4

中内崇夫、矢倉裕輝、櫛田宏幸、井上敦介、宮部貴識、上平朝子、白阪琢磨、山内一恭：当院における抗 HIV 療法施行中患者のポリファーマシーに関する調査。第 74 回国立病院総合医学会、WEB 開催、2020 年 10 月 17 日-11 月 14 日

矢倉裕輝、櫛田宏幸、渡邊 大、中内崇夫、西田恭治、井上敦介、宮部貴識、上平朝子、白阪琢磨、山内一恭：日本人 HIV-1 感染者におけるビクテグラビルの血漿中トラフ濃度に関する検討。第 74 回国立病院総合医学会、WEB 開催、2020 年 10 月 17 日-11 月 14 日

野村悠樹、杉山 文、阿部夏音、今田寛人、Rakhimov Anvarion、Tuychiev Sherzad、秋田智之、鹿野千治、喜多村祐里、白阪琢磨、田中純子：広島市・大阪市の献血ルーム来訪者における複数回献血者の特徴と地域差の検討。第 79 回日本公衆衛生学会総会、WEB 開催、2020 年 10 月 20-22 日

白阪琢磨、橋本修二、川戸美由紀、大金美和、岡本 学、瀧永博之、日笠 聡、福武勝幸、八橋 弘、岡 慎一：血液製剤による HIV 感染者の調査成績（第 1 報）健康状態と生活状況の概要。第 34 回日本エイズ学会学術集会・総会、WEB 開催、

2020年11月27日-12月25日

川戸美由紀、橋本修二、大金美和、岡 慎一、岡本 学、瀧永博之、日笠 聡、福武勝幸、八橋 弘、白阪琢磨：血液製剤による HIV 感染者の調査成績（第 2 報）未発症者の生活状況とその推移。第 34 回日本エイズ学会学術集会・総会、WEB 開催、2020年11月27日-12月25日

佐保美奈子、古山美穂、高 知恵、山田加奈子、工藤里香、立花久裕、岡本友子、立花久裕、豊島裕子、大野典子、白阪琢磨：HIV サポートリーダー養成研修 10 年間の成果と展望。第 34 回日本エイズ学会学術集会・総会、WEB 開催、2020年11月27日-12月25日

渡邊 大、矢倉裕輝、榊田智仁、廣田和之、上地隆史、中内崇夫、榊田宏幸、西田恭治、上平朝子、白阪琢磨：当院におけるビクテグラビル・テノホビルアラフェナミド・エムトリシタビン配合錠の処方例に関する検討。第 34 回日本エイズ学会学術集会・総会、WEB 開催、2020年11月27日-12月25日

川畑拓也、伊禮之直、真栄田 哲、 崎原永辰、仲宗根正、仁平 稔、 久高 潤、渡邊 大、大森亮介、 駒野 淳、阪野文哉、森 治代、本村和嗣：健康診断機会を利用した HIV・梅毒検査の提供。第 34 回日本エイズ学会学術集会・総会、WEB 開催、2020年11月27日-12月25日

菊地 正、蜂谷敦子、西澤雅子、椎野禎一郎、俣野哲朗、佐藤かおり、豊嶋崇徳、伊藤俊広、林田庸総、瀧永博之、岡 慎一、古賀道子、長島真美、貞升健志、近藤真規子、宇野俊介、谷口俊文、猪狩英俊、寒川 整、中島秀明、吉野友祐、堀場昌英、茂呂 寛、渡邊珠代、今橋真弓、松田昌和、重見 麗、岡崎玲子、岩谷靖雅、横幕能行、渡邊 大、小島洋子、森 治代、藤井輝久、高田清式、中村麻子、南 留美、山本政弘、松下修三、健山正男、藤田次郎、杉浦 互、吉村 和：国内新規 HIV/AIDS 診断症例における薬剤耐性 HIV-1 の動向。第 34 回日本エイズ学会学術集会・総会、WEB 開催、2020年11月27日-12月25日

矢倉裕輝、中内崇夫、榊田宏幸、榊田智仁、廣田和之、上地隆史、渡邊 大、西田恭治、上平朝子、白阪琢磨：日本人 HIV-1 感染者におけるビクテグラビルの血漿中濃度に関する検討 第 1 報。第 34 回日本エイズ学会学術集会・総会、WEB 開催、2020年11月27日-12月25日

榊田宏幸、中内崇夫、矢倉裕輝、榊田智仁、廣田和之、上地隆史、渡邊 大、西田恭治、上平朝子、白阪琢磨：日本人のテノホビルアラフェナミド服用における推定糸球体ろ過量低下症例についての検討。第 34 回日本エイズ学会学術集会・総会、WEB 開催、2020年11月27日-12月25日

中内崇夫、矢倉裕輝、榊田宏幸、榊田智仁、廣田和之、上地隆史、渡邊 大、西田恭治、上平朝子、白阪琢磨：初回治療としてインテグラーゼ阻害剤を使用した患

者の血清尿酸値の変動に関する要因についての検討。第 34 回日本エイズ学会学術集会・総会、WEB 開催、2020 年 11 月 27 日-12 月 25 日

増田純一、関根祐介、國本雄介、矢倉裕輝、平野 淳、日笠真一、築地茉莉子、石原正志、岩崎 藍、押賀充則、又村了輔、櫛田宏幸、福島直子、島袋翔多、沼田理子、川口 崇、山口拓洋、天野景裕、岡 慎一、白阪琢磨：抗 HIV 療法における意思決定とアドヒアランスに関する多施設共同研究(DEARS-J study)。第 34 回日本エイズ学会学術集会・総会、WEB 開催、2020 年 11 月 27 日-12 月 25 日

中濱智子、東 政美、池田和子、杉野祐子、谷口紅、生島嗣、若林チヒロ、渡邊 大、上平朝子：HIV 陽性者の情報の Up date における課題～「HIV 陽性者の健康と生活に関する全国調査」の結果から（第 2 報）。第 34 回日本エイズ学会学術集会、WEB 開催、2020 年 11 月 27 日-12 月 25 日

東 政美、中濱智子、渡邊 大、上平朝子、池田和子、杉野祐子、谷口紅、生島嗣、若林チヒロ：高齢化への対応と介護について「HIV 陽性者の健康と生活に関する全国調査」の結果から（第 3 報）。第 34 回日本エイズ学会学術集会、WEB 開催、WEB 開催、2020 年 11 月 27 日-12 月 25 日

安尾利彦、西川歩美、水木薫、神野未佳、富成伸次郎、白阪琢磨：HIV 陽性者を含む慢性疾患患者の行動と心理に関する研究。第 34 回日本エイズ学会学術集会総会、WEB 開催、2020 年 11 月 27 日-12 月 25 日

水木 薫、安尾利彦、森田眞子、冨田朋子、宮本哲雄、西川歩美、牧 寛子、神野未佳、白阪琢磨：初診 HIV 陽性者を対象とした心理スクリーニングに関する研究。第 34 回日本エイズ学会学術集会・総会、WEB 開催、2020 年 11 月 27 日-12 月 25 日

松山亮太、渡邊 大、土橋西紀、鍵浦文子、加納和彦、高橋琢理、松井佑亮、白阪琢磨、砂川富正、梯正之：CD4 細胞数データとインシデンス法を利用した日本における HIV 感染者数の推定。第 31 回日本疫学会学術総会、WEB 開催、2021 年 1 月 28 日

B-7

渡邊 大：新たな 2 剤療法開幕～耐性への知見を踏まえて～。HIV 講演会-新しい時代の治療を考える-、大阪、2020 年 8 月 8 日

B-8

白阪琢磨：「抗 HIV 治療ガイドライン」UP TO DATE。HIV インターネット講演会、大阪、2020 年 6 月 8 日

上平朝子：HIV 感染症。関西医科大学「感染症コース」講義、枚方、2020 年 6 月 12 日

西田恭治：血友病とわが国における診療体制。第1回血友病講演会（大阪）、大阪、2020年6月24日

白阪琢磨：概論。2020年度大阪大学医学部環境医学・公衆衛生学実習、大阪、2020年7月2日

上平朝子：COVID-19感染対策。2020年度第1回院内定期講演会（感染制御部）、大阪、2020年7月9日

渡邊 大：HIV感染症の診断。2020年度大阪大学医学部環境医学・公衆衛生学実習、大阪、2020年7月9日

白阪琢磨：日本および海外におけるHIV治療ガイドライン。Medical Education Webinar「HIV治療ガイドラインを紐解く」、大阪、2020年7月17日

上平朝子：新型コロナウイルス感染症の概要。大阪市感染対策支援ネットワーク東ブロック研修会、大阪、2020年7月28日

白阪琢磨：HIV/エイズの歴史と日本のHIV医療体制。エイズ予防財団令和2年度HIV/エイズ基礎研修会、大阪、2020年7月31日

西田恭治：定期補充療法を継続するために大切なこと。血友病B誌上座談会「血友病B患者が継続できる定期補充療法を考える」、大阪、2020年8月2日

白阪琢磨：ヒト免疫不全ウイルス（HIV）。大阪医療センター附属看護学校講義、大阪、2020年9月9日

西田恭治：血友病と薬害エイズ。2020年度大阪大学医学部環境医学・公衆衛生学実習、大阪、2020年9月17日

上平朝子：HIV針刺し暴露後予防。2020年度大阪大学医学部環境医学・公衆衛生学実習、大阪、2020年9月17日

白阪琢磨：HIV陽性者の人権課題～HIV、AIDS等の現状と課題～。大阪府人権総合講座（前期）人権問題科目、大阪、2020年9月30日

白阪琢磨：HIVの最新治療。厚生科研エイズ対策研究事業 第21回HIVサポーターリーダー養成研修、WEB開催、2020年10月2日

廣田和之：STD（性行為感染症）の診断。2020年度奈良県立医科大学健康政策医学実習、大阪、2020年10月13日

上平朝子：HIV感染症の基礎知識。2020年度奈良県立医科大学健康政策医学実習、

大阪、2020年10月13日

渡邊 大：HIV感染症の診断。2020年度奈良県立医科大学健康政策医学実習、大阪、2020年10月14日

上平朝子：事例紹介。2020年度奈良県立医科大学健康政策医学実習、大阪、2020年10月15日

西田恭治：薬害 HIV。2020年度奈良県立医科大学健康政策医学実習、大阪、2020年10月15日

白阪琢磨：HIV感染症の疫学。2020年度奈良県立医科大学健康政策医学実習、大阪、2020年10月16日

白阪琢磨：HIV感染症治療と最新情報。MERS 2020年度相談員研修会、大阪、2020年10月18日

白阪琢磨：HIV感染者における新型コロナウイルス感染症の留意点。MERS 2020年度相談員研修会、大阪、2020年10月18日

白阪琢磨：最新の ART の動向とビクトルビ配合錠の臨床的位置づけ～COVID-19 流行から学ぶ服薬支援の New Normal とは～。Gilead Infectious Disease Virtual Symposium 2020、大阪、2020年10月27日

白阪琢磨：疫学と抗 HIV 治療ガイドライン。令和 2 年度 HIV 感染症研修会、大阪、2020年11月2日

渡邊 大：HIV感染症の診断。令和 2 年度 HIV 感染症研修会、大阪、2020年11月2日

渡邊 大、矢倉裕輝：抗 HIV 療法の実際。令和 2 年度 HIV 感染症研修会、大阪、2020年11月2日

西田恭治：血友病診療・凝固因子製剤の使い方。令和 2 年度 HIV 感染症研修会、大阪、2020年11月2日

渡邊 大：日和見感染症（PCP）。令和 2 年度 HIV 感染症研修会、大阪、2020年11月3日

上平朝子：免疫再構築症候群。令和 2 年度 HIV 感染症研修会、大阪、2020年11月2日

上平朝子：針刺し暴露後対策。令和 2 年度 HIV 感染症研修会、大阪、2020年11

月 3 日

白阪琢磨：現代的健康課題－HIV/エイズや性感染症等について－。大阪府令和 2 年度新規採用養護教諭研修（第 10 回）、大阪、2020 年 11 月 5 日

上平朝子：COVID-19 感染対策～今冬のインフルエンザ対策に備えて。2020 年度第 2 回院内定期講演会（感染管理）、大阪、2020 年 11 月 5 日

西田恭治：HIV/AIDS の背景：薬害エイズについて。令和 2 年度 HIV/AIDS 看護師研修初心者コース、大阪、2020 年 11 月 9 日

渡邊 大：HIV/AIDS の基礎知識：HIV 感染症・抗体検査・日和見疾患・治療。令和 2 年度 HIV/AIDS 看護師研修初心者コース、大阪、2020 年 11 月 9 日

HIV 診療チーム（医師、HIV コーディネーター、薬剤師、MSW、臨床心理士）：HIV 陽性者の③チーム医療：チーム医療の実際。令和 2 年度 HIV/AIDS 看護師研修初心者コース、大阪、2020 年 11 月 10 日

上平朝子：HIV 感染症－治療の進歩と病診連携。大阪府医師会令和 2 年度 HIV 医療講習会、大阪、2020 年 11 月 13 日

西田恭治：世界の血友病事情のいま－WFH の報告を踏まえて－。Hemophilia A Update Webinar（サノフィ）、大阪、2020 年 11 月 13 日

廣田和之：インフルエンザの診療と感染対策～With COVID-19～。2020 年度 ICT・感染制御部主催研修会、大阪、2020 年 11 月 13 日

西田恭治：取り残された血友病保因者問題。大阪南 血友病治療講演会、大阪、2020 年 12 月 3 日

西田恭治：血友病包括医療 2021 の実践。New Generation～血友病治療 新たな一歩～、WEB 開催、2020 年 12 月 14 日

西田恭治：血友病診療におけるチーム医療の重要性と薬剤師への期待。薬剤師のための血友病 WEB セミナー、WEB 開催、2020 年 12 月 15 日

白阪琢磨：公衆衛生看護学 I。2020 年度大阪府立大学看護学類講義、WEB 開催、2020 年 12 月 22 日

西田恭治：取り残された血友病保因者問題。埼玉周産期血友病検討会、大阪、2020 年 12 月 22 日

西田恭治：長期療養時代の HIV 感染血友病医療-新たな治療選択-。Hemophilia Meet

the Expert in 仙台、WEB 開催、2021 年 1 月 23 日

西田恭治：血友病医療連携 2021 の実践。第 3 回近畿 Hemophilia オンラインセミナー part 3、WEB 開催、2021 年 2 月 9 日

西田恭治：取り残された血友病保因者問題。第 3 回 Osaka 血友病カンファレンス、WEB 開催、2021 年 2 月 18 日

西田恭治：取り残された血友病保因者問題－医者は気付きを、保因者は自覚を－。第 11 回北関東ヘモフィリア研究会、WEB 開催、2021 年 2 月 26 日

上平朝子：HIV 感染症の感染対策。2020 年度 ICT・感染制御部主催研修会、大阪、2021 年 3 月 12 日

渡邊 大：HIV 治療の新たな選択肢、発売から 1 年を経て－Real World での有用性－。HIV Specialist Web セミナー、WEB 開催、2021 年 3 月 17 日

B-9

白阪琢磨：ラジオ小学校。エフエム大阪開局 50 周年記念 50 時間特別番組「LAUGH & MUSIC RADIO」、大阪、2020 年 4 月 1 日

白阪琢磨：おしえて！しらさか先生。FM 大阪ラジオ「hug+（ハグタス）」、大阪、2020 年 4 月 24 日

白阪琢磨：新型コロナウイルスについて①。FM 大阪ラジオ「HIV/AIDS 啓発プロジェクト LOVE+RED」、大阪、2020 年 5 月 5 日

白阪琢磨：新型コロナウイルスについて。FM 大阪ラジオ「シャンパーハットこいでの Friday Music Show（笑）」、大阪、2020 年 5 月 8 日

白阪琢磨：新型コロナウイルスについて②。FM 大阪ラジオ「HIV/AIDS 啓発プロジェクト LOVE+RED」、大阪、2020 年 5 月 12 日放送

白阪琢磨：新型コロナウイルスについて③。FM 大阪ラジオ「HIV/AIDS 啓発プロジェクト LOVE+RED」、大阪、2020 年 9 月 15 日

白阪琢磨：新型コロナウイルスについて④。FM 大阪ラジオ「HIV/AIDS 啓発プロジェクト LOVE+RED」、大阪、2020 年 9 月 22 日

白阪琢磨：感染症アップデート。FM 大阪ラジオ「HIV/AIDS 啓発プロジェクト LOVE+RED」、大阪、2020 年 10 月 20 日

基質拡張型 β -ラクタマーゼ (ESBLs) 産生グラム陰性菌菌血症に対する抗菌薬療法の治療期間とアウトカムに関する検討：単施設後方視的調査

中蔵伊知郎^{1,2)}・今西嘉生里^{1,2)}・廣田 和之^{2,3)}・坪倉美由紀²⁾
上平 朝子^{2,3)}・宮部 貴識¹⁾・佐光 留美¹⁾・山内 一恭¹⁾

¹⁾ 国立病院機構大阪医療センター薬剤部*

²⁾ 同 感染制御部

³⁾ 同 感染症内科

受付日：2019年10月11日 受理日：2020年4月20日

基質拡張型 β -ラクタマーゼ産生グラム陰性菌 (ESBLs 産生 GNB) による菌血症に対する、抗菌薬の治療期間と治療アウトカムの関連は不明であり、十分に確立されていない。本検討の目的は、これらの関連性について明らかにすることである。主要評価項目は、抗菌薬の治療期間と治療アウトカム (30日以内死亡と菌血症の再発) の関連性とした。単施設後方視的観察研究での検討を行い、ESBLs 産生 GNB 菌血症の 87 症例を評価した。これらの症例では、有効な抗菌薬による治療後 30 日以内の死亡は 2 例 (2%)、菌血症の再発症例は 5 例 (6%) であった。有効な抗菌薬による治療期間が 10 日以下は、有効な抗菌薬による治療後 30 日以内死亡との関連性を認めなかった ($P=0.35$)。一方、有効な抗菌薬による治療期間が 10 日以下は、菌血症の再発との関連性を認めた ($P=0.049$)。結論として、ESBLs 産生 GNB 菌血症の患者において、10 日以下の抗菌薬治療期間が菌血症の再発と関連していることが示唆された。

Key words: extended-spectrum β -lactamase, Gram-negative bacteria, bacteremia, mortality, recurrent

はじめに

近年、グラム陰性菌 (GNB) のうち、基質拡張型 β -ラクタマーゼ (ESBLs) 産生 GNB の検出が増加している。このうち、実臨床における血液検体からの分離率は 10% 前後と報告されている¹⁾。一般に薬剤耐性菌による菌血症は薬剤耐性菌でない病原体による菌血症と比較し、予後が悪いとされている (WHO, Antimicrobial resistance: global report on surveillance 2014. https://www.who.int/iris/bitstream/10665/112642/1/9789241564748_eng.pdf?ua=1 2019年8月15日アクセス)。このうち、ESBLs 産生 GNB による菌血症は、ESBLs 非産生 GNB に

よる菌血症と比較し、死亡率が高いことが報告されている²⁾。GNB が起因の菌血症のうち、カテーテル関連菌血症に対する有効な抗菌薬による推奨治療期間は 7~14 日間とされている³⁾。しかし、GNB による菌血症のうち、カテーテル関連菌血症以外に対する抗菌薬による推奨治療期間を明確に設定されているものは知る限り存在しない。また、近年、GNB を対象とした抗菌薬加療について、短期間治療と長期間治療の比較に関する報告が⁴⁻⁶⁾されており、抗菌薬による治療期間の設定に関して賛否が分かれている。一方、ESBLs 産生 GNB による菌血症に対する有効な抗菌薬による治療期間と治療アウトカムの関連性についての検討は限られているのが現状であ

る。そこで今回、ESBLs 産生 GNB による菌血症に対する有効な抗菌薬の治療期間と治療アウトカムとの関連性について評価を行った。

I. 対象と方法

1. 対象

本検討は、単施設で実施した後ろ向き観察研究である。対象は、2012年4月1日から2018年8月31日までの期間に独立行政法人国立病院機構大阪医療センター（694床、3次救急病院、以下当院）にて、血液培養よりESBLs産生GNBを検出し、ESBLs産生GNBによる菌血症と診断された入院症例とした。

2. 調査項目

対象の症例について、診療録より、性別、年齢、体重、身長、基礎疾患、既往歴、検出菌および検出菌の薬剤感受性結果、臨床検査値（血清クレアチニン、アラニンアミノ基転移酵素、アルカリフォスファターゼ、血中尿素窒素、赤血球数、白血球数、ヘモグロビン値、血小板数、アルブミン値、血中酸素分圧）、使用薬剤、血圧、心拍数、呼吸回数、感染症の感染源、医療関連感染か否かについて、投与した抗菌薬の種類および投与期間に関して調査した。

体重、臨床検査値、血圧、心拍数、呼吸回数については、血液培養採取当日のデータを確認した。

血液培養検査は、院内微生物検査室にて、BD バクテック™ FX システム（日本ベクトン・ディッキンソン株式会社、東京）を用いて行い、検出菌の同定および薬剤感受性試験は、BD フェニックス™（日本ベクトン・ディッキンソン株式会社、東京）を用いて行った。薬剤感受性試験の判定は、Clinical and Laboratory Standards Institute 公表の M100-S 24 に従い、感受性有無に関して判定を行った。ESBLs 産生有無については、院内微生物検査室にて、double disk synergy test にて判定を行った。

算出項目として、quick Sequential (Sepsis-related) Organ Failure Assessment (qSOFA) スコア⁷⁾、Pitt Bacteremia Score (PBS)⁸⁾、Charlson Comorbidity Index (CCI)⁹⁾を算出した。

医療関連感染症の定義は、『医療・介護関連肺炎診療ガイドライン』¹⁰⁾を参考に、入院前に長期療養型病床群もしくは介護施設に入所していた症例、90日以内に医療機関から退院した症例、介護を必要とする症例、通院にて継続的に血管内治療を受けてい

る症例とした。

投与した抗菌薬について、薬剤感受性試験結果の判定にて、感性の抗菌薬を使用した場合は有効な抗菌薬の投与と定義し、それらの抗菌薬を使用している日数を有効な抗菌薬による治療期間としてカウントした。

有効な抗菌薬による治療期間は過去の報告を参考に、10日以下と11日以上との2群に分け^{4,9)}評価した。

複数菌による菌血症の定義は、血液培養検体よりESBLs産生GNBが2菌種の場合、もしくは、ESBLs産生GNB以外の菌種を同定した場合とした。ただし、コアグラールゼ陰性ブドウ球菌属、*Propionibacterium acnes*、*Micrococcus* 属、*viridans group streptococci*、*Corynebacterium* 属もしくは *Bacillus* 属が血液培養検体のうち1セットのみ検出した場合は、過去の報告¹¹⁾を参考に汚染菌と判断し、複数菌による菌血症の症例として組み込まなかった。

治療アウトカムとして、30日以内死亡および菌血症の再発について確認を行った。30日以内死亡の定義は、有効な抗菌薬による治療終了後、30日以内に死亡した症例と定義した。菌血症の再発は、有効な抗菌薬による治療終了後、30日以内に同一菌種による菌血症が再燃した場合と定義した。

3. 評価項目

本検討の主要評価項目は、有効な抗菌薬による治療をしている症例のうち、有効な抗菌薬による治療期間が10日以下の症例と治療アウトカムの関連性とした。副次評価項目は、有効な抗菌薬による治療期間以外の治療アウトカムに関連する要因を検討した。

4. 統計解析

統計解析は、JMP® 9.0.2 (SAS Institute Inc., Cary, NC, USA) を用い、カテゴリー変数については Fisher's exact test にて、連続変数については Mann-Whitney U test にて行った。これらの検定における有意水準は5%とした。

5. 倫理的配慮

本検討は、「人を対象とする医学系研究に関する倫理指針」を遵守し、当院の倫理委員会に準じる、受託研究審査委員会にて承認を得たうえで実施した（承認番号：18154）。

II. 結果

本検討の対象は87例であり、患者背景は Table

Table 1. Characteristics of the patients

Characteristic	All patients (N = 87)
Sex (male:female)	32:55
Age*	75 (68-84)
Body weight (kg)*	50 (44-61)
Death within 30 days of treatment completion (number, %)	2 (2%)
Recurrent bacteremia (number, %)	5 (6%)
Number of patients with tumors (number, %)	43 (49%)
Number of patients with diabetes mellitus (number, %)	9 (10%)
Number of patients with heart failure (number, %)	4 (5%)
Number of days to administrations of the appropriate antibiotic(s) (day)*	1 (0-2)
Duration of administration of the appropriate antibiotic(s) (day)*	14 (12-15)
Number of patients who received the appropriate antibiotic(s) of ≤ 10 days (number, %)	17 (20%)
qSOFA score*	1 (0-2)
PBS*	2 (1-3)
CCI*	2 (2-4)
Administration of total parenteral nutrition (number, %)	13 (15%)
Appropriate antimicrobial drug (number, %)	
Carbapenem	34 (39%)
Non-carbapenems	53 (61%)
Cefmetazole	44
Others†	9
Combined antibiotic therapy (number, %)	13 (15%)
Healthcare-associated infection (number, %)	51 (59%)
Site of infection (number, %)	
Urinary tract	54 (62%)
Biliary tract	15 (17%)
Unknown	9 (10%)
Respiratory	4 (5%)
Intraabdominal	3 (3%)
Intravascular catheter-related	2 (2%)
Polymicrobial bacteremia (number, %)	3 (3%)
ESBLs-producing pathogen (number, %)	
<i>Enterobacter cloacae</i>	2 (2%)
<i>Escherichia coli</i>	76 (87%)
<i>Klebsiella oxytoca</i>	1 (1%)
<i>Klebsiella pneumoniae</i>	8 (9%)

* Median (IQR).

qSOFA: quick Sequential (Sepsis-related) Organ Failure Assessment, PBS: Pitt Bacteremia Score, CCI: Charlson Comorbidity Index, ESBLs: extended-spectrum β -lactamases

† Including Tazobactam/Piperacillin, Sulbactam/Cefoperazone, Levofloxacin

1に示した。感染源は尿路が54例(62%)、病原体は大腸菌が76例(87%)と最も多く、有効な抗菌薬による治療期間が10日以下の症例は17例(20%)であった。このうち、30日以内死亡の症例は2例(2%)、菌血症の再発を認めた症例は5例(6%)であった。30日以内死亡の有無および菌血症再発の

有無でそれぞれ2群間比較を行い、Table 2および3に示した。有効な抗菌薬による治療期間が10日以下の症例は、30日以内死亡との関連性は認められなかったが(P=0.35)、菌血症再発との関連性を認めた(P=0.049)。その他の項目では、胆道系感染が感染源であることが30日以内死亡との関連性を

Table 2. Comparison of the patient characteristics between those who died within 30 days of treatment completion and those who survived

Characteristic	Death within 30 days of treatment completion (+) (N = 2)	Death within 30 days of treatment completion (-) (N = 85)	P-value
Sex (male:female)	1:1	54:31	1.00 ^{a)}
Age*	89 (88-89)	75 (67.5-82.5)	0.06 ^{b)}
Body weight (kg) *	43.0 (36.5-49.5)	50.7 (44.2-60.8)	0.28 ^{b)}
Number of patients with tumors	1	42	1.00 ^{a)}
Number of patients with diabetes mellitus	0	9	1.00 ^{a)}
Number of patients with heart failure	0	4	1.00 ^{a)}
Number of days to administration of the appropriate antibiotic(s) (day) *	2.5 (1-4)	1 (0-2)	0.26 ^{b)}
Number of patients who received the appropriate antibiotic(s) of ≤ 10 days	1	16	0.35 ^{a)}
qSOFA score*	1 (1-1)	1 (0-2)	0.61 ^{b)}
PBS*	2 (1-2)	2 (0.5-3)	0.81 ^{b)}
CCI*	2 (2-2)	2 (2-4)	0.45 ^{b)}
Administration of total parenteral nutrition	0	13	1.00 ^{a)}
Appropriate antimicrobial drug			
Carbapenem	0	34	0.52 ^{a)}
Non-carbapenems	2	51	
Cefmetazole	2	42	
Others [†]	0	9	
Combined antibiotic therapy	0	13	1.00 ^{a)}
Healthcare-associated infection	1	50	1.00 ^{a)}
Site of infection			
Urinary tract	0	54	0.14 ^{a)}
Biliary tract	2	13	0.028 ^{a)}
Unknown	0	9	1.00 ^{a)}
Respiratory	0	4	1.00 ^{a)}
Intraabdominal	0	3	1.00 ^{a)}
Intravascular catheter-related	0	2	1.00 ^{a)}
Polymicrobial bacteremia	0	3	1.00 ^{a)}
ESBLs-producing pathogen			
<i>Enterobacter cloacae</i>	0	2	N.A
<i>Escherichia coli</i>	1	75	
<i>Klebsiella oxytoca</i>	0	1	
<i>Klebsiella pneumoniae</i>	1	7	

* Median (IQR).

a) Fisher's exact test, b) Mann-Whitney U test

qSOFA: quick Sequential (Sepsis-related) Organ Failure Assessment, PBS: Pitt Bacteremia Score, CCI: Charlson Comorbidity Index, N.A: not available, ESBLs: extended-spectrum β -lactamases

[†] Including Tazobactam/Piperacillin, Sulbactam/Cefoperazone, Levofloxacin

認めた (P=0.028)。また、CCI (P=0.012) および感染源不明 (P=0.007) が菌血症再発との関連性を認めた。

III. 考察

本検討では、ESBLs 産生 GNB による菌血症の症

例において、有効な抗菌薬による治療期間が 10 日以下の症例と 30 日以内死亡との関連性は認めなかったが、菌血症再発との関連性を認めた。以上より、ESBLs 産生 GNB による菌血症に対する有効な抗菌薬による治療期間が 10 日以下の症例では、

Table 3. Comparison of the patient characteristics between those who did and did not develop recurrent bacteremia

Characteristic	Recurrent bacteremia (+) (N = 5)	Recurrent bacteremia (-) (N = 82)	P-value
Sex (male:female)	5:0	50:32	0.15 ^{a)}
Age*	74 (47-80)	76 (69-84)	0.24 ^{b)}
Body weight (kg) *	54.6 (42.4-61.8)	50.0 (43.8-60.7)	0.72 ^{b)}
Number of patients with tumors	4	39	0.20 ^{a)}
Number of patients with diabetes mellitus	0	9	0.57 ^{a)}
Number of patients with heart failure	0	4	0.79 ^{a)}
Number of days to administration of the appropriate antibiotic(s) (day) *	2 (1-3)	1 (0-2)	0.41 ^{b)}
Number of patients who received the appropriate antibiotic(s) of ≤ 10 days	3	14	0.049 ^{a)}
qSOFA score*	1 (1-3)	1 (0-2)	0.26 ^{b)}
PBS*	3 (1-6)	2 (1-3)	0.46 ^{b)}
CCI*	6 (4-6)	2 (2-4)	0.012 ^{b)}
Administration of total parenteral nutrition	0	13	1.00 ^{a)}
Appropriate antimicrobial drug			
Carbapenem	3	31	0.30 ^{a)}
Non-carbapenems	2	51	
Cefmetazole	1	43	
Others †	1	8	
Combined antibiotic therapy	0	13	1.00 ^{a)}
Healthcare-associated infection	5	46	0.074 ^{a)}
Site of infection			
Urinary tract	1	53	0.07 ^{a)}
Biliary tract	1	14	1.00 ^{a)}
Unknown	3	6	0.007 ^{a)}
Respiratory	0	4	1.00 ^{a)}
Intraabdominal	0	3	1.00 ^{a)}
Intravascular catheter-related	0	2	1.00 ^{a)}
Polymicrobial bacteremia	0	3	1.00 ^{a)}
ESBLs-producing pathogen			
<i>Enterobacter cloacae</i>	0	2	N.A
<i>Escherichia coli</i>	3	73	
<i>Klebsiella oxytoca</i>	1	0	
<i>Klebsiella pneumoniae</i>	1	7	

* Median (IQR).

a) Fisher's exact test, b) Mann-Whitney U test

qSOFA: quick Sequential (Sepsis-related) Organ Failure Assessment, PBS: Pitt Bacteremia Score, CCI: Charlson Comorbidity Index, N.A: not available, ESBLs: extended-spectrum β -lactamases

† Including Tazobactam/Piperacillin, Sulbactam/Cefoperazone, Levofloxacin

ESBLs 産生 GNB による菌血症の再発と関連する可能性が考えられた。

細菌による菌血症のうち、メチシリン耐性株を含む黄色ブドウ球菌が原因菌である非複雑性菌血症の場合では、種々の条件はあるが、一般的には血液培養陰性化を確認してから 14 日間以上の有効な抗菌薬加療が推奨されている¹²⁾。一方、GNB による菌

血症のうち、カテーテル関連菌血症の場合は、血液培養の陰性化確認は必須ではなく、有効な抗菌薬による治療を開始してから 7~14 日間の抗菌薬加療を行うことが一般的であるが³⁾、ESBLs 産生 GNB による菌血症に対する治療期間を明記したガイドライン等は調査した限り見当たらない。さらに、ESBLs 産生 GNB による菌血症は、ESBLs 非産生 GNB に

よる菌血症と比較し、その死亡率は高いことが報告されている²⁾。

過去に報告されている ESBLs 産生 GNB による菌血症の死亡に関連する独立因子として、患者背景、菌血症時の重症度、初期治療の適切さ、カルバペネム系抗菌薬以外の抗菌薬による治療、抗菌薬の最小発育阻止濃度、原因菌種が要因として報告されている¹³⁻¹⁷⁾。本検討では、患者背景として、基礎疾患、菌血症発症時における重症度の指標として用いた qSOFA スコアおよび PBS、有効な抗菌薬投与までの期間および有効な抗菌薬の種類は 30 日以内死亡有無および菌血症再発有無による差はなく、これらの因子による治療アウトカムへの影響はなかったものと考えられる。

GNB による菌血症の治療期間については、さまざまな報告がされている。近年報告されているものとして、腸内細菌科細菌および緑膿菌を含む GNB による非複雑性菌血症を対象とした報告では、有効な抗菌薬の治療期間が 7~10 日と 10 日を超えた群の 2 群間で比較を行っているが、短期間の治療群では治療失敗が多く、2 週間程度の治療期間が望ましいことが報告されている⁵⁾。一方、腸内細菌科細菌による菌血症を対象としたメタ解析による報告では、抗菌薬の治療期間が 10 日以下と 10 日を超えた期間の治療では死亡率 (30 日および 90 日) および菌血症の再発について差がないことが報告されている⁴⁾。しかし、これらの報告では、ESBLs 産生菌を含む耐性菌検出症例の組み込みについては言及されていない^{4,5)}。さらに、腸内細菌科細菌、緑膿菌、アシネトバクターを含む GNB による非複雑性菌血症を対象とした、抗菌薬の治療期間が 7 日と 14 日の症例群を比較した検討では、17% の ESBLs 産生菌を含んでいるが、両群で 90 日死亡率、再入院、入院期間延長、菌血症再発のようなアウトカムに差はなかったことが報告されている⁶⁾。以上より、GNB による菌血症の治療期間は賛否が分かれており、結論が出ていない。

本検討では、過去の報告^{4,5)}を参考に、有効な抗菌薬による治療期間を 10 日以下と 11 日以上に症例に分け、有効な抗菌薬による治療期間 10 日以下が治療アウトカムと関連するかに関して検討を行い、30 日以内死亡との関連性は認めなかったが、菌血症再発との関連性を認めた。また、有効な抗菌薬による

治療期間以外の因子では、治療アウトカムと関連性のある因子として、胆道系感染が 30 日以内死亡との関連性を認め、CCI および感染源不明が菌血症再発との関連性を認めた。

過去に、菌血症の再発に CCI が関連することが報告されている^{18,19)}。さらに、死亡や菌血症の再発に感染源が関連することが報告されており、呼吸器¹³⁾、消化管¹⁸⁾、肝胆道系¹⁸⁾、静脈留置カテーテル¹⁸⁾、感染性心内膜炎¹⁸⁾、感染源不明¹⁸⁾、尿路¹⁹⁾が因子になることが報告されている。本報告でも CCI や感染源不明が菌血症再発との関連性を認め、胆道系感染が 30 日以内死亡との関連性を認めた。このため、有効な抗菌薬の治療期間だけではなく、患者の基礎疾患や感染源を考慮することも菌血症の再発や予後改善のために重要であると考えられる。以上より、ESBLs 産生 GNB による菌血症症例においては、患者背景を考慮しながら、投与期間の設定を行い、患者の治療アウトカム改善に努める必要があると考えられる。

本検討では、いくつかの limitation を含んでいる。第一に、本検討は単施設で実施した後ろ向き観察研究であり、いずれの検討においてもイベントが発生した症例の数が限られている。このため、多変量解析等の検討を十分に行うことができず、また、感染源および原因菌に関して統一することができていない。第二に、本検討では重症度の評価に関して、本来であれば、Sequential (Sepsis-related) Organ Failure Assessment score や Acute Physiology and Chronic Health Evaluation II score で定量的に評価する必要があると考えられるが、後ろ向き観察研究のため欠損データが多く、算出することができていない。

結論として、ESBLs 産生 GNB による菌血症の患者において、有効な抗菌薬による治療期間が 10 日以下の場合、菌血症の再発と関連していることが示唆された。

本報告は、第 67 回日本化学療法学会総会にて発表し、座長より投稿の推薦を受けたものである。

謝 辞

本報告の作成にあたり、ご助言をいただきました、京都大学大学院医学研究科社会健康医学系専攻健康情報学分野 富成 伸次郎先生に深謝いたします。

利益相反自己申告：報告すべきものなし。

文献

- 1) 野村秀和, 鎌倉明美, 棚村一彦, 伊藤愛美, 赤津義文, 大塚喜人: 中規模施設4病院の尿, 血液由来からのESBL産生菌検出状況。医学検査2014; 63: 146-53
- 2) Melzer M, Petersen I: Mortality following bacteraemic infection caused by extended spectrum beta-lactamase (ESBL) producing *E. coli* compared to non-ESBL producing *E. coli*. J Infect 2007; 55: 254-9
- 3) Mermel L A, Allon M, Bouza E, Craven D E, Flynn P, O'Grady N P, et al: Clinical practice guidelines for the diagnosis and management of intravascular catheter-related infection: 2009 Update by the Infectious Diseases Society of America. Clin Infect Dis 2009; 49: 1-45
- 4) Tansarli G S, Andreatos N, Pliakos E E, Mylonakis E: A Systematic Review and Meta-analysis of Antibiotic Treatment Duration for Bacteremia Due to *Enterobacteriaceae*. Antimicrob Agents Chemother 2019; 63: e02495-18
- 5) Nelson A N, Justo J A, Bookstaver P B, Kohn J, Albrecht H, Al-Hasan M N: Optimal duration of antimicrobial therapy for uncomplicated Gram-negative bloodstream infections. Infection 2017; 45: 613-20
- 6) Yahav D, Franceschini E, Koppel F, Turjeman A, Babich T, Bitterman R, et al: Seven versus 14 Days of Antibiotic Therapy for uncomplicated Gram-negative Bacteremia: a Noninferiority Randomized Controlled Trial. Clin Infect Dis 2019; 69: 1091-8
- 7) Singer M, Deutschman C S, Seymour C W, Shankar-Hari M, Annane D, Bauer M, et al: The Third International Consensus Definitions for Sepsis and Septic Shock (Sepsis-3). JAMA 2016; 315: 801-10
- 8) Paterson D L, Ko W C, Von Gottberg A, Mohapatra S, Casellas J M, Goossens H, et al: International prospective study of *Klebsiella pneumoniae* bacteremia: implications of extended-spectrum β -lactamase production in nosocomial Infections. Ann Intern Med 2004; 140: 26-32
- 9) Quan H, Li B, Couris C M, Fushimi K, Graham P, Hider P, et al: Updating and validating the Charlson comorbidity index and score for risk adjustment in hospital discharge abstracts using data from 6 countries. Am J Epidemiol 2011; 173: 676-82
- 10) 日本呼吸器学会 呼吸器感染症に関するガイドライン作成委員会 編: 医療・介護関連肺炎診療ガイドライン, 日本呼吸器学会, 東京, 2011
- 11) Bekeris L G, Tworek J A, Walsh M K, Valenstein P N: Trends in blood culture contamination: a College of American Pathologists Q-Tracks study of 356 institutions. Arch Pathol Lab Med 2005; 129: 1222-5
- 12) Holland T L, Arnold C, Fowler V G Jr: Clinical management of *Staphylococcus aureus* bacteremia: a review. JAMA 2014; 312: 1330-41
- 13) Lim C L, Spelman D: Mortality impact of empirical antimicrobial therapy in ESBL- and AmpC-producing Enterobacteriaceae bacteremia in an Australian tertiary hospital. Infect Dis Health 2019; 24: 124-33
- 14) Mitsuboshi S, Tsuruma N, Watanabe K, Takahashi S, Nakashita M, Ito A, et al: Does Quick Sepsis-Related Organ Failure Assessment Suggest the Use of Initial Empirical Carbapenem Therapy in Bacteremia Caused by Extended-Spectrum β -Lactamase-Producing Bacteria? : A Multicenter Case-Control Study. Jpn J Infect Dis 2019; 72: 124-6
- 15) Scheuerman O, Schechner V, Carmeli Y, Gutiérrez-Gutiérrez B, Calbo E, Almirante B, et al: Comparison of Predictors and Mortality Between Bloodstream Infections Caused by ESBL-Producing *Escherichia coli* and ESBL-Producing *Klebsiella pneumoniae*. Infect Control Hosp Epidemiol 2018; 39: 660-7
- 16) Sfeir M M, Askin G, Christos P: Beta-lactam/beta-lactamase inhibitors versus carbapenem for bloodstream infections due to extended-spectrum beta-lactamase-producing Enterobacteriaceae: systematic review and meta-analysis. Int J Antimicrob Agents 2018; 52: 554-70
- 17) Namikawa H, Yamada K, Yamairi K, Shibata W, Fujimoto H, Takizawa E, et al: Mortality caused by extended-spectrum beta-lactamase-producing Enterobacteriaceae bacteremia; a case control study: alert to Enterobacteriaceae strains with high minimum inhibitory concentrations of piperacillin/tazobactam. Diagn Microbiol Infect Dis 2019; 94: 287-92
- 18) Jensen U S, Knudsen J D, Ostergaard C, Gradel K O, Frimodt-Møller N, Schönheyder H C: Recurrent bacteraemia: A 10-year regional population-based study of clinical and microbiological risk factors. J Infect 2010; 60: 191-9
- 19) Jensen U S, Knudsen J D, Wehberg S, Gregson D B, Laupland K B: Risk factors for recurrence and death after bacteraemia: a population-based study. Clin Microbiol Infect 2011; 17: 1148-54

Antimicrobial treatment duration and outcomes in patients with bacteremia caused by extended-spectrum β -lactamase-producing Gram-negative bacteria: A single-center retrospective study

Ichiro Nakakura^{1,2)}, Kaori Imanishi^{1,2)}, Kazuyuki Hirota^{2,3)}, Miyuki Tsubokura²⁾,
Tomoko Uehira^{2,3)}, Takashi Miyabe¹⁾, Rumi Sako¹⁾ and Kazutaka Yamauchi¹⁾

¹⁾ Department of Pharmacy, National Hospital Organization Osaka National Hospital, 2-1-14 Hoenzaka, Chuo-ku, Osaka, Japan

²⁾ Department of Infection Control and Prevention, National Hospital Organization Osaka National Hospital

³⁾ Department of Infectious Diseases, National Hospital Organization Osaka National Hospital

In patients with bacteremia caused by extended-spectrum β -lactamase-producing Gram-negative bacteria (ESBLs-GNB), the relationship between the treatment duration with antimicrobial drugs and the treatment outcomes has not yet been clarified. The present single-center retrospective study, conducted in 87 patients who had received treatment for ESBLs-GNB bacteremia, was aimed at clarifying this relationship. The primary endpoint was the relationship between the duration of antimicrobial drug treatment and the treatment outcomes (death within 30 days and incidence of recurrent bacteremia). Of the 87 patients, 2 (2%) died within 30 days of completion of treatment with the appropriate antibiotic(s), and 5 (6%) developed recurrent bacteremia. While no association was observed between the treatment duration with the appropriate antibiotic(s) of ≤ 10 days and the risk of death within 30 days of completion of treatment ($P=0.35$), the treatment duration with the appropriate antibiotic(s) of ≤ 10 days was found to be significantly associated with the risk of recurrent bacteremia ($P=0.049$). In conclusion, our findings revealed that in patients with ESBLs-GNB bacteremia, a treatment duration of ≤ 10 days, even with the appropriate antibiotic(s), was associated with an elevated risk of recurrent bacteremia.

保因者

西田恭治*

Hemophilia carrier

Yasuharu NISHIDA

要約: 近年の血友病診療の進歩は著しい。凝固因子製剤の普及以前は、成書でも血友病患者は成人まで存命するのは稀であったのが、今年年間出血ゼロの患者も多くみられ、平均余命も健常者と変わらなくなりつつある。一方で、保因者の状況は身体的にも精神的にも放置されたままであった。しかし、近年になってそういった危機感世界的にもようやく高まりつつある。本邦では、血友病関連の多くの成書で保因者ケアに関する項目は欠かせなくなった。従来は、遺伝学的用語である「保因者」に対する解説はあったものの、ケアにまで踏み込んだものは少なかった。また、保因者問題の啓発のための機会や資料も増えつつある。医療者の関心の高まりにより、保因者も血友病包括的医療の対象であるという意識が芽生えつつある。保因者ケアが包括医療の一環として取り組まれることは、保因者の健康関連 QOL の向上のみならず、新たに生まれてくる血友病患者の命をも救う。

Key words: hemophilia, carrier, obligate carrier, possible carrier, X-linked recessive inheritance

1. はじめに

血友病保因者の存在は紀元2世紀末にはすでに知られていたと思われる。ユダヤ教の聖典バビロニア・タルムードの記載では、「最初の男子が割礼の出血により死亡し、第2子も同様であれば、第3子の割礼は行ってはならない」と、男性の遺伝性出血性素因についての記述がみられる¹⁾。そしてその母親はそれ以後の男子出生に際して父親が異なっても同様の配慮が必要と説いており、1800年以上前に女性を介して伝わる家族性の致死性出血性素因に気づいていた²⁾。また、血友病は19世紀の英国王朝を中心にヨーロッパに広がり、The Royal Disease と称されていた。ヴィクトリア女王の9名の子供（男4名、女5名）のうちレオポルドは血友病患者であった。また2人の皇女を通して血友病がロシア、スペイン、

ドイツなどの王室や貴族にも伝わったことより、女王は保因者であったと考えられる。しかし、ヴィクトリアの家系にはそれまで血友病は出ておらず、突然変異で女王が保因者になったと推測されている。ヴィクトリア女王の孫にあたるアレキサンドラはロシア皇帝ニコライ2世妃となり、後に革命で一家惨殺される。彼女の1男4女のうちアレクセイ皇太子は血友病であり、彼の出血症状は皇帝夫妻の苦悩の種であった。王室内の苦悩にロシア社会の混乱が相まった結果、革命が起り300年続いたロマノフ王朝は崩壊した。近年、ニコライ2世一家の遺骨が発見され、2009年にはアレクセイ皇太子が血友病BであったことがDNA鑑定の結果により判明した。それのみならず、生存説により数々のドラマの題材となった四女アナスタシアの遺骨も発見され、保因者であったことまでが明らかにされた。ドラマを生んできた血友病保因者たちはヨーロッパ近代史において隠れた役割を担ってきたと言える。

血友病とは、X染色体の第VIII因子あるいは第IX因子の遺伝子変異を病因とする出血性疾患である。X連鎖劣性遺伝形式をとり、患者はほとんどが男性

*責任者連絡先:

独立行政法人国立病院機構大阪医療センター感染症内科・
血友病ケアユニット

〒540-0006 大阪市中央区法円坂2-1-14

Tel: 06-6942-1331, Fax: 06-6946-3652

E-mail: nishida.yasuharu.kt@mail.hosp.go.jp

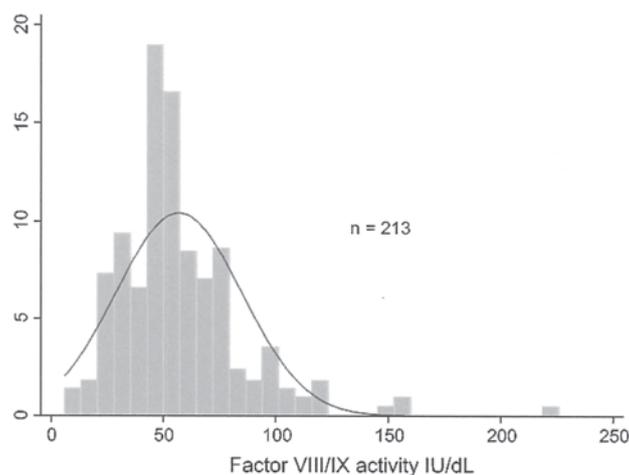


図1 血友病保因者の因子活性
Osooli M, et al: Haemophilia 2019. より.

であり、女性患者は病因遺伝子のホモ接合体など希少な存在とされてきた。そして血友病保因者とは、2本のX染色体（対立遺伝子）のうち1本に病因遺伝子変異をもつ女性と定義される。保因者の第VIIIあるいは第IX因子活性は50～60%あたりにピークを持つ正規分布を示すとされているが個人差が大きい（図1）。国内外においても保因者の登録は進んでいないため明らかでないことが多いが、World Federation of Hemophilia（WFH）は、保因者女性は男性血友病患者の1.6から5倍存在し、彼女らの20%は第VIII（IX）因子活性が30%以下と想定している³⁾。米国のKasperが自施設の過去からの血友病患者1,858人の家族歴を洗い出したところ、100人の患者あたり277人が保因者の可能性があり、156人が真の保因者であったと報告している⁴⁾。しかし、家族歴から追跡できる保因者には限りがあるので真の保因者数は不明である。

保因者という呼称は遺伝学的呼称であり臨床的呼称ではない。その呼称のために出血傾向を認める多くの保因者が医療に繋がりにくいという現実を見据えて、出血傾向のある保因者つまり症候性保因者を「女性血友病」と捉えていこうという働きかけが欧米では出てきている。保因者は血友病患者よりも多いために、血友病男性に匹敵する数の保因者が何らかの出血傾向を抱えていると推測されるが医療が届いているとはいえないようである⁵⁾。日本においては

「女性血友病」の範疇に因子活性が低い保因者も含むべきなのか否かの議論は進んでいない。厚生労働省委託事業の「血液凝固異常症全国調査」令和元年度報告書には女性血友病Aが54人、女性血友病Bが25人と報告されているが、報告に際しての女性血友病の定義はない⁶⁾。

血友病保因者の現状把握は進んでおらず、医療側から保因者への啓発活動も従来は乏しかった。医療従事者をも含めた周囲の無理解により、多くの保因者は精神的・身体的不利益を被ってきた。近年、そういった不利益の再認識が世界的にも保因者への取り組みを促進させている。我々にとっても保因者の健康関連QOL（HR-QOL）の向上を目指した取り組みは喫緊の課題である⁷⁾。

2. 保因者の現況

WFHは、多くの保因者は凝固因子活性値が低い傾向にあるのみならず、実生活において異常出血の経験があると警鐘を鳴らしている³⁾。保因者は軽症血友病男性に見られる症状のみならず月経過多などの女性に特有の症状を経験する（表1）。健常女性と比較して保因者女性は血友病患者にみられる関節症の頻度が高いことは、保因者も血友病と同様に血友病包括医療のもとで関節症状に注意を向けなければならないことを意味している⁸⁾。そのような保因者の

表1 血友病保因者の出血と頻度

出血の種類	割合
月経過多	23~50%
産後出血	22~43%
青あざ	19~67%
術後	28~69%
鼻出血	8~43%
抜歯後出血	21~77%
関節内出血	8%

以下の複数の報告から筆者作成. Sharathkumar A et al. Haemophilia. 2009. Miesbach W et al. Haemophilia. 2011. Plug I et al. Blood. 2006. Mauser Bunschoten EP et al. Thromb Haemost. 1988.より改変.

不慮の事故時や大手術時には血友病と同様に止血管理への配慮が必要である。しかし多くの医療者は、保因者も出血傾向があるという認識が欠如しており、十分な止血管理が行き届いていない。カナダでは、保因者が被った医療現場における無理解を論文で紹介もしている⁹⁾。また、出血傾向は本人でさえ気づかない場合や気づいていても我慢して訴えられない場合も多く、保因者問題啓発の第一人者である米国のKulkarniは彼女らを静かな“*She-mophilia*”(血友病を表す*Hemophilia*に対して)と呼んで注意喚起しておられる。

一方、精神的側面から見ると、多くの保因者はHR-QOLの低下に苦しめられている。つまり、遺伝病を抱えているという後ろめたさ(stigma)に苛まれ、そういった悩みを相談できる窓口が乏しい。また、過多月経などによる慢性的な鉄欠乏性貧血は精神的にも影響を及ぼす。加えて、自らの将来に対して漠然とした不安を抱えるも、その解決の機会を持ち合わせていないことが多い。多くの場合、彼女たちの血友病に対する知識は、父・叔父・兄弟など過去の血友病に対する認識で止まっている。よって、自身が将来に出生する可能性がある血友病児が被ると思いついておられる重篤な関節障害、ウイルス感染症、出血による生命危機などへの恐れが、前時代の認識のままに放置されている。彼女たちの適切な将来設計のために現在の血友病環境の認識を共有する場が必要である。

3. 保因者診断と保因者健診

保因者診断としては、①家族歴、②凝血学的方法、③遺伝子解析が行われている。家族歴で確定保因者(obligate carrier)と推定保因者(possible carrier)を判断することが出来る(表2)。推定保因者の場合は、真の保因者であるかどうかは検査によって保因者診断が可能な場合がある。凝血学的方法とは、前述のように保因者であっても因子活性は低いことから推測する方法である。Zimmermanらは第VIII因子活性とVIII因子と複合体を形成するVWF抗原量を測定して、血友病A保因者検索を行った¹⁰⁾。第VIII因子活性とVWF抗原量の比を求めることにより、第VIII因子活性のみを測定するよりも診断確度が上がることを示唆した。しかし、個人差が非常に大きいためこの方法で診断することは現在では推奨されていないが、出血リスクに備えるための凝固因子活性測定は重要である¹¹⁾。確定保因者44名の凝血学的検査結果の自験例を表に示す。軽症血友病に分類される因子活性40%以下の確定保因者はAとBを合わせて27.3%にも及んだ(表3)。ABともに平均因子活性は低いものの、第VIII因子活性が100%を超えているのは4例見受けられ、因子活性が高いからと言って保因者の可能性を否定できない。第VIII因子活性/VWF抗原比も保因者の比は0.6より小さくなると考えられている¹²⁾ものの0.6未満の例は68.4%にとどまった。凝血学的検査による真の保因者であるか否かの推定は、極度に因子活性や比が低い例は保因者である可能性が高いと言えるかもしれないが、凝血学的手法のみで保因者診断をするのは危険である。よって、凝血学的検査は保因者診断目的よりも出血に対しての気持ちの備えとして意義があると考えられる。

一方で、遺伝子解析は推定保因者の一对の責任遺伝子中に病因遺伝子変異の存在を確認するものである。まずは患者の病因遺伝子変異を同定し、その後保因者診断を希望する推定保因者が患者と同じ変異を持っているかを調べる検査である。患者と推定保因者の病因遺伝子変異を直接同定することから確定診断となる。しかし、遺伝子解析にても変異が検出されない場合もあり得ることから、「保因者ではな

表2 家族歴からの確定保因者と推定保因者

確定保因者	①血友病の父親を持つ女性 ②2人以上の血友病患者を出産した女性 ③1人の血友病患者を出産し、かつ母方家系に確実な血友病患者のいる女性
推定保因者	①母方家系に血友病患者がいるが、血友病患者の出産歴のない女性 ②1人の血友病患者を出産したが、家系内には他に血友病患者がいない女性 ③兄弟に血友病患者がいる女性

表3 血友病確定保因者の凝血学的検査結果（自験データ）

	血友病 A 確定保因者 (n = 38)	血友病 B 確定保因者 (n = 6)
平均因子活性*	59.8%	42.1%
最大因子活性*	172.8%	60.4%
最小因子活性*	18.3%	18.5%
因子活性* < 40%	10/38 (26.3%)	2/6 (33.3%)
VIII 因子活性/VWF 抗原比		
平均	0.50	—
< 0.6	26/38 (68.4%)	—

* 血友病 A 保因者、B 保因者の各々、凝固一段法による第 VIII 因子活性、第 IX 因子活性を示す。

い」という絶対的な判定にはならない¹²⁾。そのように多くは家系内患者の協力が必要であり、時間と費用を要し、限られた施設のみでしか施行できない。そのために国内では必ずしも普及しているとはいえず、今後の課題である。

日常的な診療現場で、医療従事者からの患者家族である保因者への支援は大切である。筆者は保因者がカルテを作成し受診し、精神的・身体的支援を受ける機会を「保因者健診」と呼んで提唱している(図2)。「保因者診断」は確定保因者には不要であるが、「保因者健診」は確定・推定保因者ともに重要である。前述の Kasper 報告でも、すべての保因者の可能性がある女性は、カウンセリングや検査が必要であるとしている⁴⁾。自施設にて2020年10月時点で「保因者健診」として受け入れた保因者は82名で、内訳は確定保因者45名、推定保因者37名であり両者に数の上で大きな偏りはなかった。その目的は、自覚の有無にかかわらず彼女らの身体的・精神的損失を見つけ出し、検査と啓発によってHR-QOLの向上を目指すことである。保因者健診で初めて因子活性の

低さや鉄欠乏性貧血に保因者自身が気づき、保因者も出血傾向があることを認識されることも稀ではない。また、現在の血友病の治療環境を知ることによって、婚姻や育児を含めて人生設計を見直されることも少なくない。世の中の数多くの家族歴がない保因者とは接触が不可能だが、家族歴から判断できる確定・推定保因者には医療者から手を差し伸べることが可能である。

4. 保因者健診の要点

筆者らは保因者の掘り起こしを家族歴の取り直しから始め、彼女らへの啓発を「保因者健診」という形で始めた。我々の手順を参考のために紹介する。

①家族歴聴取は初診時のみであり、推定・確定保因者の存在を確認するという視点を欠いている場合が多い。該当者がいれば、発端者である血友病患者自身に「保因者健診」の必要性を理解していただくことが不可欠である。多くの発端者血友病患者はこの種の問題を家庭内で話題にするのを敬遠

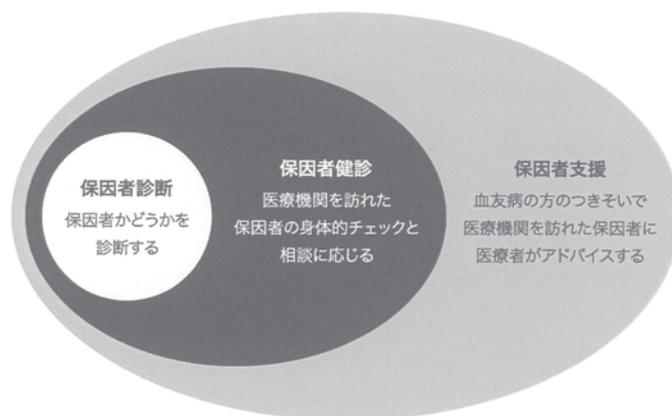


図2 保因者診断・健診・支援の関係

しがちであるが、必要性の理解がなければ保因者を「保因者健診」に繋いでいただけない。よって、最初の関門であり、繰り返し理解を求める必要がある。

- ②受診されれば、血友病保因者に関する認識の程度を確認し、月経過多などの出血傾向の有無や既往歴などを問診する。その認識度合いに応じて、血友病に関する遺伝的背景、保因者の出血傾向等を啓発用の小冊子¹³⁾等を用いて説明する。理解の程度は様々であるので、個々に照らす必要がある。また、自身の出血傾向を過小評価しておられることが多く、具体的な質問によってはじめて出血傾向が確認されることも多い。
- ③検査の種類とその意味合いを説明する。VWFおよび第VIII因子活性は血液型O型の場合は20%程度低く測定される¹⁴⁾ため血液型の確認も血友病A保因者の場合は必要である。また、無自覚でも鉄欠乏性貧血の可能性もあるので確認が必要である。保因者診断のための検査の誤解は多い。遺伝子検査を容易に捉えておられることや凝固因子検査で保因者診断が可能と考えておられることはよく見受けられる。
- ④出血傾向の有無にかかわらず、また年齢にかかわらず凝固因子検査を勧める。検査をいつ行うかに関しては類出の質問であり、議論の余地があるかもしれない¹¹⁾。早期の検査の利点としては、将来における事故や外傷時の出血時に対して適切な備えが可能となるかもしれない。欠点としては、年

少者に検査の判断を委ねることが可能かという疑問が残る。しかし、凝固因子検査に関しては、受検年齢への配慮は不必要かもしれない。出血傾向があれば、幼小児期でも行うべきだし、初潮前が望ましいとの考えもあり両親の判断を尊重する。そして保因者診断のための遺伝子検査の具体的な方法も推定保因者には紹介する。しかし、凝固因子検査と異なり遺伝子検査は受検者自身の判断が可能な年齢まで待つのが適切と考えられている^{11,15)}。いずれにせよ、推定保因者の健診の過程で、保因者診断を望まれるか否かは推定保因者の思いを尊重しなければならない。

- ⑤将来に妊娠・出産の可能性や意向があれば、留意点を説明する^{16,17)}。強調しておかなければならないのは、産科医と血友病専門医とが連携をとることと、男児であれば吸引・鉗子分娩を避けることの重要性である。
- ⑥現在の血友病治療環境の進歩を前時代と対比させて解説する。健常者と差がなくなりつつある平均寿命、各種スポーツに関する制限がなくなりつつある現状など現在の血友病環境が一世代前とは変わっていることを説明する。
- ⑦小冊子以外に動画で啓発するヘモフィリア友の会全国ネットワーク・サイト内のアニメ「私と私の遺伝子」(<http://hemophilia-japan.org/contents/library/2-2-1/2-2-1-1.html>)やウェブセミナー内容をオンデマンドで配信している「血友病保因者健診への提唱」(<http://www.hemophilia-st.jp/baxweb/>)等を紹

介し、次回受診時に疑問点があればお答えすることを伝えて、初回受診を終了する。しかし、それらの資料で小学生などの低年齢層に理解を高めるのは困難であった。それを克服するためにマンガを利用した啓発資料も利用できるようになった (https://smile-on.jp/hemophilia/hemophilia6_5.html)。低年齢層への啓発は海外でも同様に苦慮していたようで、英語翻訳版は日本文化である MANGA が低年齢層の血友病保因者の啓発に貢献するであろうと評価を受けている (<https://www.ehc.eu/ehc-now-patient-education-taken-to-a-whole-new-level/>)。

⑧多くの場合で、初回は発端者血友病患者や家族と来院される。彼らへの遠慮やプライバシーのために多くを語られない傾向があるので、2回目は一人で受診されることを勧める。一人で来院されて初めて、家族に気兼ねなく彼女の血友病や社会に対する懸念や思いを知らされることも多い。2回目受診時は、検査結果を報告し質問を受付ける。凝固因子検査に関しては種々の要因によって変動しやすく、反復して測定することが好ましいことを伝える。

⑨必要に応じて凝固検査や相談はその後も反復する。求めがあれば、臨床心理士に繋ぐ。いったん保因者健診が終了してもカルテは存在し、いつでも新たな相談を受け入れる窓口が出来ている事を伝える。

以上が我々の保因者健診の流れである。最終的に彼女らが保因者健診を受けてよかったと感じていただければ、保因者健診の目的の過半を達したと考える。実務的には血友病あるいは疑い病名でカルテを作成して、保険診療として経済的負担を出来るだけ軽減することによって受診の敷居を下げる。以上から言えることは、保因者健診を行うに当たって、医療側の「対応する意志」以外に特別に用意しなければいけないものは何も無いということである。

5. 保因者の周産期管理

保因者の出産に際しては、血友病専門医・産科医・小児科医が協働した母子への配慮が必要である。しかし、エビデンスに基づいた指針は極めて少ない。

妊婦は妊娠中にさまざまな出血リスクがあるが、保因者妊婦の流産リスクが明らかに高いということはなく、妊娠22週以降における出血リスクも増大しないと報告されている^{18,19)}。血友病A保因者の場合は妊娠から出産に向けてVIII因子活性が増加し、VIII因子製剤を必要とすることは稀である。しかし、血友病B保因者の場合はIX因子活性の増加は乏しく補充療法の必要な例も少なくない(図3)。それらの増加した凝固因子も分娩後には元に復するために、分娩後異常出血の頻度が高いことに注意が必要である(表1)。フランスからのコホート研究で1/3以上の保因者が周産期に止血異常を経験したがほとんどが後期分娩後異常出血(分娩後24時間から12週間の間に発生する異常出血)であったという報告は、産後の因子活性低下に合致する。特に帝王切開した場合と妊娠前の因子活性が40%以下であった保因者には注意が必要と警鐘を鳴らす²⁰⁾。また、新生児が血友病であった場合に、分娩時の頭蓋内出血のために死に至る、あるいは後遺症に悩まされる例は血友病医療の進歩した現在でも減少しているとはいえない。つまり、産科医も新生児を担当する医師も妊婦が保因者であることを知らされていないことが多い。そもそも妊婦に家族歴があっても保因者であるという認識が乏しく、無警戒に出産に臨んでいた例が多い。松尾らは血友病患者の母親を対象に行ったアンケート調査で、確定保因者であるにもかかわらず半数は自身が保因者であることを知らされていなかったと警戒を促す²¹⁾。出産時のトラブルによる合併症は、保因者自身と医療者の事前の備えによってリスク軽減が可能である。そういった気付きによって、今まで話題とすることを避けてきた血友病家族および血友病は男子の疾患で女子は無縁と捉えていた医療者を啓発していくことの重要性が認識されるようになってきた。

日本血栓止血学会は血友病患者の治療のガイドラインは策定してきたが、保因者の周産期管理に関する記載はなかった。そこで、日本産婦人科・新生児血液学会と協働して、臨床の有用性を示す科学的根拠が乏しいなかでも、適切な血友病の周産期管理を目指した「エキスパートの意見に基づく血友病周産期管理指針2017年版」(<http://www.jsognh.jp/common/>)

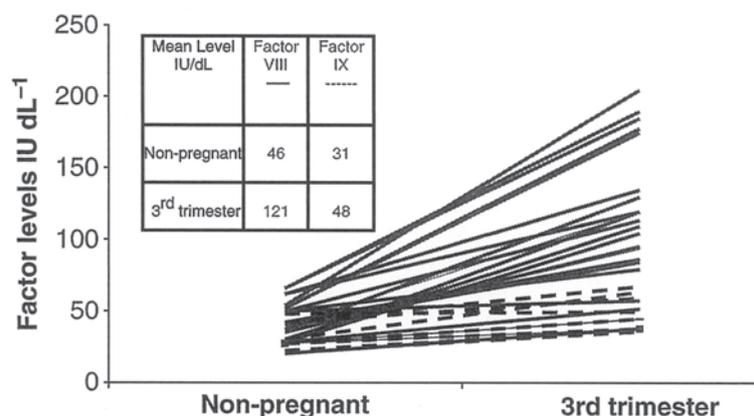


図3 保因者妊婦の因子活性の推移

血友病 A 保因者は出産時に向けて VIII 因子活性は正常化する事が多い。血友病 B 保因者は IX 因子活性増加の程度が少ない。Chi, C, et al. Haemophilia. 2008 より引用。

files/society/2017/hemophilia_guideline_2017.pdf) が作成されて、オンラインで利用できる。最も大切なことのひとつは、事前に産科医と血友病専門医が連携しておき、分娩方法も保因者妊婦を交えてその短所・長所を勘案した上で決定していくことである。男児出産の場合で経膈分娩を選択された際は、可能な限り自然分娩とし、血友病新生児の頭蓋内出血を誘発する可能性のある吸引分娩や鉗子分娩は避けることが望まれる。それらの方策だけで、約4%前後と推測される血友病新生児の頭蓋内出血は激減することが知られている²²⁾。また、頭蓋内出血を回避するために選択的帝王切開分娩を強く推奨する考えが欧米では高まりつつあった^{23,24)}。しかし、出血リスク軽減のための分娩方法に関して帝王切開と機械分娩を行わない経膈分娩とに差はないとの報告もあり²⁵⁾、未だ結論が出たとは言えない。いずれにせよ、保因者妊婦の理解と希望に配慮した選択が大切であると考える。母子にとって望ましいのは、院内での凝固因子活性測定が可能で、必要時の凝固因子製剤が常置してあることだが、それが可能でない施設での周産期管理を排除するものではない。いずれの環境下でもより安全な周産期管理のために、血友病専門医との連携が必要なのである。

6. おわりに — めざすべき保因者ケアの今後

血友病診療医と保因者への啓発が浸透し保因者ケ

アの機会が増えると、今までの見落としに気付く機会が増える。潜在化していた出血傾向に対する対応が求められるのだが、客観的に出血傾向を捉える仕組みが必要である。保因者の代表的な異常出血である月経過多でさえ、他者との比較が困難なために異常出血と認識していない保因者も少なくない。欧米ではナプキン・タンポンの使用状況をスコア化して月経過多診断の手段とする Pictorial Blood Loss Assessment Chart (PBAC) が利用されており²⁶⁾、我が国でも日本に合った PBAC 検討がなされている。保因者の止血治療の中では、トラネキサム酸が近年見直されている。それは、出産前のたった1回の静脈投与で主に途上国における産後出血による妊婦死亡を30%減少させたという報告²⁷⁾による。それ以外にも、一部のフォンビルブランド病にも効果的なデスマプレシン、低因子活性例への凝固因子製剤などがある。個々に適した方法での保因者 QOL の改善が望まれる。保因者の凝固因子活性測定が普及すれば、因子活性40%以下という血友病の範疇に入る保因者も確認数が増えて、凝固因子製剤使用の機会も増えると予想される。しかし、保因者におけるインヒビター発生の統計データはなく、凝固因子製剤使用は慎重で最小限であるべきだし、今後の前向きなデータ蓄積・共有が求められる。一方で、インヒビター発生の懸念なく、安価で鼻腔粘膜投与が可能な高用量デスマプレシン・スプレーは軽症血友病 A での適応が諸外国では承認されている。血友病保因者

の出血傾向, 特に過多月経には高用量デスマプレシン・スプレーは簡便で携帯が可能な対処方法と考えられる。しかし, 日本では未承認であることは解決されなければならない課題の一つである。

欧米先進諸国の血友病センターでは遺伝カウンセリングの存在なしには, 確立された血友病包括医療とは言えないとされており, 日本血栓止血学会が発行するガイドラインでも血友病診療体制のセンター病院の基準として「血友病患者のカウンセリングの経験を有する遺伝カウンセラーを1人以上配置する」となっている。しかし, 現実とは大きく乖離していると認めざるを得ず, 各々の医療者がカウンセリングマインドをもって保因者に寄り添う必要がある。

保因者を含めた先天性止血異常症女性への取り組みの必要性は諸外国においても認識が広がりつつあり²⁸⁾, WFHや欧州血友病コンソーシアム(European Haemophilia Consortium: EHC)でも様々な啓発・提唱プロジェクトが立ち上がっている。そこで気付くのは, 当然とも言えるが彼女らの抱えるHR-QOL低下の要因は世界共通だということである。保因者が身体的困難および精神的呪縛から開放され, 21世紀の血友病医療環境の正しい認識の下で自身の将来設定の門戸を広げられることが, 世界中の関係者が目指す保因者ケアの最終目標と言える。

著者の利益相反(COI)の開示:

講演料・原稿料など(バイエル薬品(株)), 臨床研究(治験)(中外製薬, オクトファーマ社)

文献

- 1) 藤巻道男: タルムード—血友病の記録. 血栓止血誌 15: 198–199, 2004.
- 2) 齋藤英彦: 血友病物語. 臨床血液 54: 1919–1925, 2013.
- 3) World Federation of Hemophilia: Carriers and Women with Hemophilia. <https://www1.wfh.org/publication/files/pdf-1471.pdf#search=World+Federation+of+Hemophilia%3A+Carriers+and+Women+with+Hemophilia.>
- 4) Kasper CK, Lin JC: How many carriers are there? *Haemophilia* 16: 840–842, 2010.
- 5) van Galen KPM, Lavin M, Skouw-Rasmussen N, Ivanova E, Mauser-Bunschoten E, Punt M, Romana G, Elfvinge P, D’Oiron R, Kadir RA: Clinical management of woman with bleeding disorders: A survey among European haemophilia treatment centres. *Haemophilia* 26: 657–662, 2020.
- 6) 厚生労働省委託事業血液凝固異常症全国調査令和2年度報告書.
- 7) 西田恭治: 血友病保因者と女性血友病. 血栓止血誌 29: 687–690, 2018.
- 8) Osooli M, Donfield SM, Carlsson KS, Baghaei F, Holmström M, Berntorp E, Astermarket J: Joint comorbidities among Swedish carriers of haemophilia: A register-based cohort study over 22 years. *Haemophilia* 25: 845–850, 2019.
- 9) Renault NK, Howell RE, Robinson KS, Greer WL: Qualitative assessment of the emotional and behavioural responses of haemophilia A carriers to negative experiences in their medical care. *Haemophilia* 17: 237–245, 2011.
- 10) Zimmerman TS, Ratnoff OD, Littell AS: Detection of carriers of classic hemophilia using an immunologic assay for anti-hemophilic factor (factor VIII). *J Clin Invest* 50: 255–258, 1971.
- 11) 白山理, 小野織江, 伊藤琢磨, 押田康一, 佐藤哲司, 酒井道生, 楠原浩一, 白幡聡: 血友病保因者女性への医療ケア。—保因者診断・健診と周産期管理. 日本小児血液・がん学会雑誌 56: 275–281, 2019.
- 12) 篠澤恵子: 遺伝子解析による血友病保因者診断の意義. 血栓止血誌 26: 549–556, 2015.
- 13) 西田恭治, 篠澤圭子, 瀧正志, 松尾陽子: 保因者健診に行きましょう。サノフィ株式会社.
- 14) Gallinaro L, Cattini MG, Sztukowska M, Padrini R, Sartorello F, Pontara E, Bertomoro A, Daidone V, Pagnan A, Casonato A: A shorter von Willebrand factor survival in O blood group subjects explains how ABO determinants influence plasma von Willebrand factor. *Blood* 111: 3540–3545, 2008.
- 15) Thomas S, Herbert D, Street A, Barnes C, Boal J, Komesaroff PA: Attitudes towards and beliefs about genetic testing in the haemophilia community: A qualitative study. *Haemophilia* 13: 633–641, 2007.
- 16) 西田恭治: 血友病・von Willebrand病(VWD)と妊娠. 産科と婦人科 80: 40–46, 2013.
- 17) 松尾陽子: 血友病周産期管理指針の策定. 日本小児血液・がん学会誌 54: 351–355, 2017.
- 18) Kadir RA, Economides DL, Braithwaite J, Goldman E, Lee CA: The obstetric experience of carriers of haemophilia. *Br J Obstet Gynaecol* 104: 803–810, 1997.
- 19) Greer IA, Lowe GD, Walker JJ, Forbes CD: Haemorrhagic problems in obstetrics and gynaecology in patients with congenital coagulopathies. *Br J Obstet Gynaecol* 98: 909–918, 1991.
- 20) Nau A, Gillet B, Guillet B, Beurrier P, Ardillon L, Cussac V, Guillou S, Raj L, Trossaert M, Horvais V, Bayart S, Potin J, Rose J, Macchi L, Couturaud F, Lacut K, Pan-Petes B: Bleeding complications during pregnancy and delivery in haemophilia carriers and their neonates in Western France: An observational study. *Haemophilia*. Aug 25. doi: 10.1111/hae.14117. Online ahead of print. 2020.
- 21) 松尾陽子, 稲田浩子, 佐藤哲司, 酒井道生, 松石豊次郎, 白幡聡: 血友病保因者の妊娠・出産. 日本産婦人科・新生児血液学会誌 20: 37–41, 2011.
- 22) Kulkarni R, Soucie JM, Lusher J, Presley R, Shapiro A, Gill J, Manco-Johnson M, Koerper M, Mathew P, Abshire T, Dimichele D, Hoots K, Janco R, Nugent D, Geraghty S, Evatt E, Haemophilia Treatment Center Network Investigators: Sites of initial bleeding episodes, mode of delivery and age of diagnosis in babies with haemophilia diagnosed before the age of 2 years: A report from The Centers for Disease Control and Prevention’s (CDC) Universal Data Collection (UDC) project.

-
- Haemophilia **15**: 1281–1290, 2009.
- 23) 西田恭治：血友病・von Willebrand 病（VWD）と妊娠。産科と婦人科 **80**: 40–46, 2013.
- 24) Davies J, Kadir RA: Mode of delivery and cranial bleeding in newborns with haemophilia: A systematic review and meta-analysis of the literature. *Haemophilia* **22**: 32–38, 2016.
- 25) Andersson NG, Chalmers EA, Kenet G, Ljung R, Mäkipernaa A, Chambost H: Mode of delivery in hemophilia: Vaginal delivery and Cesarean section carry similar risks for intracranial hemorrhages and other major bleeds. *Haematologica* **104**: 2100–2106, 2019.
- 26) Higham JM, O'Brien PMS, Shaw RW: Assessment of menstrual blood loss using a pictorial chart: A validation study. *Br J Obstet Gynaecol* **97**: 734–739, 1990.
- 27) WOMAN Trial Collaborators: Effect of early tranexamic acid administration on mortality, hysterectomy, and other morbidities in women with post-partum haemorrhage (WOMAN): An international, randomised, double-blind, placebo-controlled trial. *Lancet* **27**: 2105–2116, 2017.
- 28) Noone D, Skouw-Rasmussen N, Lavin M, van Galen KPM, Kadir RA: Barriers and challenges faced by women with congenital bleeding disorders in Europe: Results of a patient survey conducted by the European Haemophilia Consortium. *Haemophilia* **25**: 468–474, 2019.

精神科

田宮裕子

当科は、精神科身体合併症病棟入院中の方への対応、コンサルテーション・リエゾン、専門外来などを中心に診療を行っている。精神科身体合併症病棟に入院になる場合は、当院総合救命救急センターを経由しての入院となるため、重篤な身体合併症のある症例がほとんどである。近年では自殺企図による多発外傷後当科に転科になる症例も多く、自殺企図後の精神状態を適切に評価し再度危険な行為を行わないように援助することは精神科医の重要な役目となっている。日々多くの自殺企図患者に対応しており、自殺企図に至る要因を分析し再企図予防に有効な因子などについて調査研究を行い、積極的に学会で発表し論文化していきたいと考えている。

一般診療科入院患者の不眠、気持ちの落ち込み、せん妄などの精神症状に対応するコンサルテーション・リエゾンも総合病院で働く精神科医にとっては重要な業務である。高齢化に伴い、入院後せん妄を呈する患者は増えている。せん妄を発症することで合併症のリスクも高まり、臥床期間も長期化するため、認知機能や下肢の筋力も衰え ADL の低下を招くこととなる。特に高齢者では手術中の麻酔による睡眠覚醒リズムの障害が術後せん妄を惹起しやすいと考えられており、術後せん妄の予防となるような方策を他科と協働で検証していきたい。

昨年度より摂食障害の専門外来及び教育入院を開設しているが、今年度は地域からの紹介件数も増え、ニーズの高さを実感している。教育入院は、生理的に必要な栄養を摂取できるようになることを目的にした4週間のプログラムである。栄養士と協働で行う栄養療法に加え、認知の偏りを是正するための認知行動療法や適度な運動習慣を獲得するための運動療法などを組み合わせた多職種によるチーム医療を実践している。摂食障害は精神疾患の中でも特に死亡率が高く、慢性化することでさらに治療が奏功しにくくなるため、早期に治療介入し慢性化を防ぐ必要がある。当科で開設している教育入院にて早期に食行動異常を改善させることで、慢性化を防ぐための一助となっていると考える。

近年総合病院での精神科の役割は多岐にわたっており、コンサルテーション・リエゾン、専門外来をさらに充実させ、地域医療に貢献できるよう努めていきたいと考えている。

【2020年度 研究発表業績】

B-4

木下紀子、粕谷多佳子、古田寧子、田宮裕子：摂食障害、強迫性障害、知的障害を有する患者が30年間の引きこもりから改善した一例。第33回日本総合病院精神医学会総会、Web、2020年11月20日

B-5

田宮裕子：コミュニケーション。大阪医療センター緩和ケア研修会、大阪、2020年10月11日

B-8

田宮裕子：精神医学総論。大阪医療センター附属看護学校講演、大阪、2020年10月12日

田宮裕子：統合失調症の症状・疫学・成因。大阪医療センター附属看護学校講演、大阪、2020年10月22日

田宮裕子：生理的障害、身体的要因に関連した行動症候群、パーソナリティ障害。大阪医療センター附属看護学校講演、大阪、2020年10月29日

田宮裕子：せん妄と睡眠薬。大阪医療センター講演、大阪、2020年9月24日

田宮裕子：精神科コンサルテーション・リエゾン。研修医レクチャー、大阪、2020年11月11日

山路國弘：気分障害。大阪医療センター附属看護学校、大阪、2020年10月8日

山路國弘：神経症状障害、ストレス関連障害、身体表現性障害、心身症。大阪医療センター附属看護学校、大阪、2020年10月15日

百崎詩子：器質性精神障害。大阪医療センター附属看護学校、大阪、2020年10月28日

百崎詩子：てんかん、神経発達障害群。大阪医療センター附属看護学校、大阪、2020年10月30日

消化器内科

石田 永

消化器内科・肝臓内科は、①肝炎・肝癌診療、②内視鏡治療、③消化器癌に対する化学療法を診療の3つの柱にしています。論文発表や学会発表も、この3つの柱を中心に活動しています。

C型肝炎およびB型肝炎に対する抗ウイルス療法ですが、その診療患者数が日本でも常にトップクラスにランクされ、国内のみならず海外の学会・学術誌に情報発信しています。C型肝炎治療はインターフェロンフリーの時代に入り、100%に近いウイルス排除率が得られています。患者さんの併存疾患に応じた適切な治療を選択するなど、よりよい治療を追求するよう心がけています。当科のB型肝炎に対する抗ウイルス剤（特に核酸アナログ）治療も国内で高い評価を受けている領域です。核酸アナログの治療成績は、国立病院機構ネットワーク共同研究の主任研究者としてとりまとめています。肝癌においては治療困難なラジオ波焼灼術症例にも対応し、また若手医師の技術指導にも熱心に取り組んでいます。

内視鏡治療では、早期胃癌に対する粘膜下層剥離術（ESD）に力を入れ、診療レベルの向上をはかってきました。適応拡大病変の検討や安全性の評価、技術的改良に関する検討を発表しています。特に抗凝固剤、抗血小板薬が投与されている症例の検討を国内外に発信しています。

消化器癌に対する化学療法は今や最も活発に論文発表や学会発表を行っている領域です。特に胆道系悪性腫瘍、膵臓癌は増加傾向にあり、今後も先進医療を行っていきます。また、新規薬剤の開発に伴い胃癌・大腸癌の化学療法も日々進歩しており、遺伝子解析の技術を積極的に活用し、エビデンスに基づいた診療を行うとともに、その成績の検討に取り組んでいます。

上記の他にも、臨床的にまれな症例や貴重な経験症例の報告をしています。特に症例報告は専修医/専攻医・研修医の初めての学会発表の場として、消化器内科をあげて指導に力を入れています。今後も、診療・教育とともに臨床研究の成果を国内外に発信していきたいと思えます。

【2020年度 研究発表業績】

A-0

Yamamoto S, Neumann H.: Dynamic microangiography of the gastrointestinal mucosa using magnifying Blue Light Imaging. 「Endoscopy」2021年2月 accepted

Yamamoto S, Parra-Blanco A : Snare rotation technique: a simple tip for successful polypectomy for non-pedunculated gastrointestinal polyps. 「Endoscopy」2021年2月 accepted

Hasegawa H, Taniguchi H, Nakamura Y, Kato T, Fujii S, Ebi H, Shiozawa M, Yuki S,

Masuishi T, Kato K, Izawa N, Moriwaki T, Oki E, Kagawa Y, Denda T, Nishina T, Tsuji A, Hara H, Esaki T, Nishida T, Kawakami H, Sakamoto Y, Miki I, Okamoto W, Yamazaki K, Yoshino T : FMS-like tyrosine kinase 3 (FLT3) amplification in patients with metastatic colorectal cancer. 「Cancer Science」 112(1) : P314-322、2020 年 11 月 20 日

Myojin Y, Kodama T, Maesaka K, Motooka D, Sato Y, Tanaka S, Abe Y, Ohkawa K, Mita E, Hayashi Y, Hikita H, Sakamori R, Tatsumi T, Taguchi A, Eguchi H, Takehara T : ST6GAL1 is a novel serum biomarker for lenvatinib-susceptible FGF19-driven hepatocellular carcinoma. 「Clinical Cancer Research」 27(4) : P1150-1161、2021 年 2 月 15 日

Yamamoto S, Ishida H : Acetic acid together with narrow band imaging for visualizing Kudo's pit pattern. 「Digestive Endoscopy」 33(1) : P207、2021 年 1 月

Yamamoto S, Sano Y, Mottacki N, Neumann H : Axis-Keeping Shortening technique for colonic intubation. 「Video GIE」 5(12) : P 630-633、2020 年 12 月

Yamamoto S, Varkey J, Bhandari P : Aceto-electronic chromoendoscopy for sessile serrated polyp. 「Gastrointestinal Endoscopy」 93(1) : P267-268、2021 年 1 月

Maesaka K, Sakamori R, Yamada R, Urabe A, Tahata Y, Oshita M, Ohkawa K, Mita E, Hagiwara H, Tamura S, Ito T, Yakushijin T, Iio S, Kodama T, Hikita H, Tatsumi T, Takehara T : Therapeutic efficacy of lenvatinib in hepatocellular carcinoma patients with portal hypertension. 「Hepatology Research」 50(9) : P1091-1100、2020 年 9 月

Yamamoto S, Takahashi Y, Ishida H : Pneumatosis cystoides intestinalis. 「Annals of Gastroenterology」 33(5) : P541、2020 年 9-10 月

Nishimoto N, Sakakibara Y, Nakazuru S, Mori K, Mita E : Multiple Lymphomatous Polyposis Associated with Mucosa-Associated Lymphoid Tissue Lymphoma of the Colon 「ACG Case Reports journal」 8(2) : e00503、2021 年 2 月 26 日

A-2

石田 永、三田英治 : 外国株 (ゲノタイプ B、C 以外) の急性肝炎の場合 「困ったウイルス肝炎パーフェクト対応ガイド」 竹原徹郎、持田 智 編集、P.60-65、南江堂、東京、2020 年 12 月 10 日

田中聡司、三田英治 : A 型肝炎の HIV 重複感染の場合 「困ったウイルス肝炎パーフェクト対応ガイド」 竹原徹郎、持田 智 編集、P.172-175、南江堂、東京、2020 年 12 月 10 日

A-3

西本奈穂、榊原祐子、石田 永、石原朗雄、田中聡司、長谷川裕子、山本俊祐、中水流正一、森 清、三田英治：肺腺癌を合併した寛解期の潰瘍性大腸炎患者にペムブロリズマブ投与し、重篤な腸炎が誘発された一例「日本消化器病学会誌」2021年1月 accept

東 瀬菜、田中聡司、津室 悠、西村佑子、河本泰治、別所宏紀、石原朗雄、長谷川裕子、山本俊祐、赤坂智史、榊原祐子、中水流正一、石田 永、三田英治：S状結腸憩室穿孔が周囲膿瘍形成を来し、Fusobacterium 肝膿瘍を合併した1例「肝臓」2020年11月 accept

河本泰治、榊原祐子、石田 永、長谷川裕子、赤坂智史、中水流正一、田中玲子、宮崎道彦、三田英治：大腸全摘術後に特発性血小板減少性紫斑病を合併した潰瘍性大腸炎の1例「日本消化器病学会雑誌」117(12)：P1073-1080、2020年12月10日

河本泰治、田中聡司、津室 悠、西村祐子、清木祐介、西本奈穂、早田菜保子、宮崎哲郎、東 瀬菜、別所宏紀、石原朗雄、長谷川裕子、山本俊祐、赤坂智史、榊原祐子、中水流正一、石田 永、三田英治：B型慢性肝炎の加療中に発見された肝腫瘍で肝細胞癌との鑑別が困難であった肝脾濾胞性リンパ腫の一例「肝臓」2020年10月 accept

B-1

Yamamoto S：Endoscopia durante la alerta COVID19: indicaciones, limitaciones y sentido común. Webinar sued, Sociedad Uruguaya de Endoscopia Digestiva, Uruguay, 2020年4月2日

B-4

西本奈穂、石原朗雄、清木祐介、早田菜保子、宮崎哲郎、河本泰治、東 瀬菜、別所宏紀、平尾 建、藤井祥史、岩崎哲也、田中聡司、長谷川裕子、赤坂智史、榊原祐子、中水流正一、石田 永、三田英治：乳癌治療経過中に急速に進行する肝不全をきたし死亡した一例。第56回日本肝臓学会総会、大阪、2020年8月28-29日

藤井祥史、石田 永、石原朗雄、岩崎哲也、田中聡司、長谷川裕子、赤坂智史、榊原祐子、中水流正一、野田剛広、疋田隼人、阪森亮太郎、東原大樹、江口英利、竹原徹郎、三田英治：発達した傍食道静脈を伴う再発性食道静脈瘤に対し経回結腸静脈的塞栓術を行い良好にコントロールできた一例。第56回日本肝臓学会総会、大阪、2020年8月28-29日

松尾剛明、田中聡司、清木祐介、西本奈穂、早田菜保子、宮崎哲郎、岩崎哲也、石原朗雄、長谷川裕子、赤坂智史、榊原祐子、中水流正一、石田 永、三田英治：HIV感染に気付かずラミブジンを導入したため HIV 耐性変異を生じた B 型慢性肝炎の1例。第56回日本肝臓学会総会、大阪、2020年8月28-29日

清木祐介、石原朗雄、西本奈穂、宮崎哲郎、早田菜保子、河本泰治、東瀬菜、平尾建、別所宏紀、藤井祥史、岩崎哲也、田中聡司、長谷川裕子、赤坂智史、榊原祐子、中水流正一、石田 永、三田英治：S 状結腸憩室炎の穿破・膿瘍形成から肝膿瘍を呈した一例。第 56 回日本肝臓学会総会、大阪、2020 年 8 月 28-29 日

土居 哲、疋田隼人、田畑優貴、中堀 輔、山田涼子、小玉尚宏、阪森亮太郎、巽智秀、萩原秀紀、今井康陽、乾 由明、三田英治、竹原徹郎：DAA 治療により非著効となった C 型慢性肝疾患患者における薬剤耐性変異と再治療の可能性。第 56 回日本肝臓学会総会、大阪、2020 年 8 月 28-29 日

河本泰治、榊原祐子、清木祐介、西本奈穂、早田菜保子、宮崎哲郎、東瀬菜、別所宏紀、藤井祥史、石原朗雄、岩崎哲也、田中聡司、長谷川裕子、赤坂智史、中水流正一、石田 永、尾下正秀、三田英治：当院で経験した肝膿瘍 104 症例の検討。第 56 回日本肝臓学会総会、大阪、2020 年 8 月 28-29 日

石原朗雄、清木祐介、宮崎哲郎、西本奈穂、早田菜保子、平尾建、藤井祥史、岩崎哲也、田中聡司、長谷川裕子、赤坂智史、榊原祐子、中水流正一、石田 永、三田英治：HIV 合併の A 型急性肝炎、C 型急性肝炎では強い肝障害を惹起する。第 56 回日本肝臓学会総会、大阪、2020 年 8 月 28-29 日

山田涼子、阪森亮太郎、土居 哲、卜部彩子、田畑優貴、平松直樹、尾下正秀、三田英治、脇岡泰三、今井康陽、小玉尚宏、疋田隼人、巽智秀、竹原徹郎：核酸アナログ投与症例における新規発癌の検討 多施設共同研究。第 56 回日本肝臓学会総会、大阪、2020 年 8 月 28-29 日

田中聡司、清木祐介、西本奈穂、早田菜保子、宮崎哲郎、藤井祥史、岩崎哲也、石原朗雄、長谷川裕子、赤坂智史、榊原祐子、中水流正一、石田 永、三田英治：MSM 間に流行する A 型肝炎の現況。第 56 回日本肝臓学会総会、大阪、2020 年 8 月 28-29 日

田中聡司、清木祐介、西本奈穂、早田菜保子、宮崎哲郎、藤井祥史、岩崎哲也、石原朗雄、長谷川裕子、赤坂智史、榊原祐子、中水流正一、石田 永、三田英治：HIV 感染者に対する A 型肝炎ワクチン接種効果の検討。第 56 回日本肝臓学会総会、大阪、2020 年 8 月 28-29 日

中水流正一：Trousseau 症候群を併発した胆嚢癌の 1 例。第 56 回日本胆道学会学術集会、福岡（オンライン&誌上開催）、2020 年 10 月 1-2 日

宮崎哲郎、榊原祐子、清木祐介、西本奈穂、早田菜保子、東瀬菜、別所宏紀、河本泰治、石原朗雄、田中聡司、長谷川裕子、山本俊祐、赤坂智史、中水流正一、石田 永、三田英治：当院における直腸 NET に対する治療についての検討。第 17 回日本消化管学会総会、web、2021 年 2 月 19 日

東 瀬菜、石原朗雄、清木祐介、西本奈穂、早田菜保子、宮哲郎、藤井祥史、岩崎哲也、田中聡司、長谷川裕子、赤坂智史、榊原祐子、中水流正一、石田 永、尾下正秀、三田英治：RFA 困難部肝細胞癌に対する PEIT 併用 RFA の安全性と有効性の評価。第 56 回日本肝臓学会総会、大阪、2020 年 8 月 28-29 日

B-5

榊原祐子、赤坂智史、中水流正一、石田 永、三田英治：当院での便中カルプロテクチンを用いた潰瘍性大腸炎の評価。第 104 回日本消化器内視鏡学会近畿支部例会、Web、2020 年 6 月 27 日

別所宏紀、榊原祐子、中水流正一、石田 永、三田英治：当院における内視鏡的胃瘻造設術後の合併症、及び早期死亡に関わる因子の検討。第 104 回日本消化器内視鏡学会近畿支部例会、Web、2020 年 6 月 27 日

B-6

津室 悠、田中聡司、西村佑子、河本泰治、東 瀬菜、別所宏紀、石原朗雄、長谷川裕子、赤坂智史、榊原祐子、中水流正一、石田 永、三田英治：B 型慢性肝炎患者に発見された肝腫瘍で、肝細胞癌との鑑別が困難であった肝脾悪性リンパ腫の一例。第 43 回日本肝臓学会東部会、オンライン、2020 年 12 月 3-5 日

東 瀬菜、石原朗雄、津室 悠、西村佑子、河本泰治、別所宏紀、田中聡司、長谷川裕子、赤坂智史、榊原祐子、中水流正一、石田 永、三田英治：HCC 治療経過中に発症した CCC に対して SBRT を施行した一例。第 43 回日本肝臓学会東部会、オンライン、2020 年 12 月 3-5 日

西本奈穂、榊原祐子、清木祐介、早田菜保子、宮崎哲郎、河本泰治、別所宏紀、東 瀬菜、藤井祥史、石原朗雄、岩崎哲也、田中聡司、長谷川裕子、赤坂智史、中水流正一、石田 永、三田英治：ペンブロリズマブ投与後に潰瘍性大腸炎が増悪した一例。第 104 回日本消化器内視鏡学会近畿支部例会、Web、2020 年 6 月 27 日

大山愛理、榊原祐子、津室 悠、西村佑子、別所宏紀、東 瀬菜、河本泰治、石原朗雄、田中聡司、長谷川裕子、山本俊祐、中水流正一、石田 永、三田英治：HIV 感染と CMV 感染を合併し、診断に難渋した潰瘍性大腸炎の 1 例。第 104 回日本消化器内視鏡学会近畿支部例会、京都、2020 年 12 月 19 日

エビデンスに基づいて治療方針が決まる現在において、よりよい治療方針を考えるためには臨床研究が非常に重要である。まずは後ろ向き研究によって日々の臨床経験の中から仮説を導きだし、前向き試験によって検証することになる。後ろ向き研究をおこなうためには、日常診療において研究標的とする疾患を多く治療して、解析に耐えるデータベースをもつことが不可欠である。まずは、急性心不全、急性冠症候群、院外心停止、心房細動についての良質なデータベースを作ること为目标としている。そのためには一貫した治療方針に従って日々の診療をおこない、十分な検査結果や診察結果、問診結果などをカルテに残すことが重要である。その一環として、心臓カテーテル検査においては、各種血管内画像診断 (IVUS, OCT, 血管内視鏡, spectroscopy など) による病変評価を積極的におこない、新しく登場する診断技術は積極的に取り入れている。さらに、従来から存在する心エコーや冠動脈 CT、心筋シンチも積極的に活用することで、現時点で可能な最先端の診断・治療の実践を目指している。日々のカンファレンスにおける徹底的な病態・治療方針の検討、データベースとして利用可能なカルテの改良などに取り組んでいる。

現在、急性心不全および急性冠症候群について、病態解明、発症機序解明と新しい診断法・治療法・予防法の開発を第一の目標としている。急性心不全については心エコーを中心とした研究を、急性冠症候群については血管内視鏡および T-TAS による血液血栓形成能を中心とした研究を進めている。また、大動脈における動脈硬化が大動脈疾患や脳梗塞のみならず、腎障害や ASO さらには認知症の原因となる可能性が示唆されており、大動脈内視鏡を用いた研究も始めている。

さらに、より大きな臨床試験によるエビデンスの確立や、発見した内容の臨床応用を目指して、大阪大学循環器内科関連病院を中心とした共同研究や、日本循環器学会を中心とした活動への展開も進めている。具体的には、大阪大学循環器内科関連病院による HFpEF の共同研究や、日本循環器学会による STOP MI キャンペーンを進めている。

【2020 年度 研究発表業績】

A-0

Yasumura K, Abe H, Iida Y, Kato T, Nakamura M, Toriyama C, Nishida H, Idemoto A, Shinouchi K, Mishima T, Awata M, Date M, Ueda Y, Uematsu M, Koretsune Y: Prognostic impact of nutritional status and physical capacity in elderly patients with acute decompensated heart failure. 「ESC HEART FAILURE」 7:1801-1808,2020 年 5 月 14 日

Watanabe E, Yamazaki F, Goto T, Asai T, Yamamoto T, Hirooka K, Sato T, Kasai A, Ueda M, Yamakawa T, Ueda Y, Yamamoto K, Tokunaga T, Sugai Y, Tanaka K, Hiramatsu S, Arakawa T, Schrader J, Varma N, Ando K: Remote Management of Pacemaker Patients With Biennial In-Clinic Evaluation Continuous Home Monitoring in the Japanese At-Home Study: A Randomized Clinical Trial. 「Arrhythmia and Electrophysiology」 13:e007734,2020 年 5 月 19 日

Inoue H, Tanaka N, Tanaka Y, Ninomiya Y, Hirao Y, Oka T, Okada M, Kitagaki R, Takayasu K, Koyama Y, Okamura A, Iwakura K, Fujii K, Sakata Y, Inoue K: Burden and Long Firing of Premature Atrial Contraction Early After Catheter Ablation Predict Late Recurrence of Atrial Fibrillation. 「Circulation Journal」 84(6)894-901,2020年5月25日

Nakamura M, Kosugi S, Awata M, Shinouchi K, Abe H, Mishima T, Date M, Uematsu M, Koretsune M, Ueda Y: Possible Very Early-Phase Neoatherosclerosis after the Implantation of Drug-Eluting Stent. 「Angioscopy」 6(1)1-2,2020年7月9日

Ueda Y, Kosugi S, Abe H, Ozaki T, Mishima T, Date M, Uematsu M, Koretsune Y: Transient increase in blood thrombogenicity may be a critical mechanism for the occurrence of acute myocardial infarction. 「Journal of Cardiology」 77(3):224-230,2020年9月10日

Kosugi S, Shinouchi K, Ueda Y, Abe H, Sogabe T, Ishida K, Mishima T, Ozaki T, Takayasu K, Iida Y, Ohashi T, Toriyama C, Nakamura M, Ueda Y, Sasaki S, Matsumura M, Iehara T, Date M, ohnishi M, Uematsu M, Koretsune Y: Clinical and Angiographic Features of Patients With Out-of-Hospital Cardiac Arrest and Acute Myocardial Infarction. 「Journal of the American College of Cardiology」 76(17)1934-1943, 2020年10月27日

Takayasau K, Okamura A, Iwakura K, Iwamoto M, Nagai H, Sumiyoshi A, Inoue K, Date M, Ueda Y, Fujii K: Acute Coronary Syndrome due to Plaque Rupture Induced by Negative Exercise Stress Test. 「Journal of Coronary Artery Disease」 26(4)102-105, 2020年10月31日

Nakagawa A, Yasumura Y, Yoshida C, Okumura T, Tateishi J, Yoshida J, Abe H, Tamaki S, Yano M, Hayashi T, Nakagawa Y, Yamada T, Nakatani D, Hikoso S, Sakata Y: Prognostic Importance of Right Ventricular-Vascular Uncoupling in Acute Decompensated Heart Failure With Preserved Ejection Fraction. 「Circ Cardiovasc Imaging」 2020 Nov;13(11):e011430. doi: 10.1161/CIRCIMAGING.120.011430. Epub 2020 Nov 17.2020年11月17日

Yamane H, Araki R, Doi A, Sato F, Tanaka K, Miyazaki N, Goda T, Yamada T: A successful case of “temporary endoluminal bypass technique” using a guide extension catheter during thrombolysis for acute limb ischemia in the non-stenting zone. 「Journal of Cardiology Cases」 <https://doi.org/10.1016/j.jccase.2020.11.014>Get rights and content. 2020年11月28日

Kosugi S, Awata M, Ueda Y, Abe H, Mishima T, Shinouchi K, Ozaki T, Takayasu K, Ohashi T, Toriyama C, Nakamura M, Ueda Y, Sasaki S Matsumura M, Iehara T, Date M, Uematsu M, Koretsune Y: Serial Angioscopic Evaluation of Arterial Repair After the Implantation of Drug-Coated Stent at the Culprit of Acute Coronary Syndrome. 「Journal of Coronary Artery Disease」 26(1)9-11. 2020年11月30日

Omatsu T, Sotomi Y, Kobayashi T, Hamanaka Y, Hirata A, Hirayama A, Ueda Y, Sakata Y, Higuchi Y: Quantitative validation of the coronary angioscopic yellow plaque with lipid core burden index assessed by intracoronary near-infrared spectroscopy. 「J Atheroscler Thromb」 2021;28:000-000. <http://doi.org/10.5551/jat.60566.2020>年12月20日

Ueda Y, Tahara Y, Itoh T, Tsujita K, Sakuma M, Amano T, Sato K, Taniguchi T, Nishiyama C, Konno S, Iwami T, Murohara T, Node K: New Strategy to Prevent Acute Myocardial Infarction by Public Education — A Position Statement of the Committee on Public Education About Emergency Medical Care of the Japanese Circulation Society — 「Circulation Journal」 85(3)319-322 .2021年2月25日

Mitsutake Y, Yano H, Ishihara T, Matsuoka H, Ueda Y, Ueno T: Consensus document on the standard of coronary angiography examination and assessment from the Japanese Association of Cardiovascular Intervention and Therapeutics. 「Cardiovascular Intervention and Therapeutics」 doi: 10.1007/s12928-021-00770-x. 2021年3月20日

Yamane H, Araki R, Abe H, Ueda Y: Indication of non-surgical management for acute limb ischemia. 「Journal of Interventional Cardiology」 13(2):309-312.2021年3月23日

A-2

上田恭敬 : 1.なぜ、血管内視鏡が臨床で役立つのか? B.血管内視鏡 I.基本編 「OCT/血管内視鏡活用ガイド」 30-33、南江堂、2021年3月

上田恭敬、大濱 透 : C.動脈硬化のスクリーニング 第4章.動脈硬化性・炎症性疾患 「臨床循環器学」 230-238、文光堂、2021年3月

A-4

上田恭敬 : ISCHEMIA-CKD 試験における血行再建術の有用性検討について 「Clear!ジャーナル四天王」、1259、CareNet.com、2020年7月21日

上田恭敬 : 抗血小板薬単剤療法はアスピリン単独か P2Y12 阻害薬単独か? 「Clear!ジャーナル四天王」、1275、CareNet.com、2020年8月18日

上田恭敬 : チカグレロルの DAPT から SAPT への移行時期:3 ヶ月 vs.12 ヶ月の比較試験 「Clear!ジャーナル四天王」、1276、CareNet.com、2020年8月19日

上田恭敬 : プラスグレレル治療における de-escalation? 「Clear!ジャーナル四天王」、1319、CareNet.com、2020年11月26日

上田恭敬 : elective PCI の抗血小板療法としてクロピドグレレルとチカグレロルに差はない? 「Clear!ジャーナル四天王」、1346、CareNet.com、2021年1月27日

上田恭敬 : 冠動脈小血管に対する DCB の DES の長期成績 「Clear!ジャーナル四天王」 1354、CareNet.com、2021年2月11日

B-2

Kosugi S , Ueda Y, Abe H, Mishima T, Shinouchi K, Ozaki T, Takayasu K, Iida Y, Ohashi T, Toriyama C, Nakamura M, Date M, Uematsu M, Koretsune Y: Angioscopic evaluation of vascular healing at 1 and

12 months after drug-coated stent implantation
日

.ESC Congress 2020, WEB, 2020 年 8 月 28

B-3

上田恭敬 : 急性心筋梗塞の発症機序としての血栓症と予防法としての抗血栓療法。第 42 回日本血栓止血学会学術集会、大阪、2020 年 7 月 13 日

上田恭敬 : 生体内肉眼病理としての血管内視鏡。第 52 回日本動脈硬化学会総会・学術集会。WEB、2020 年 7 月 17 日

児玉和久、小松誠、大原知樹、平山篤志、上田恭敬、樋口義治、高橋覚、由谷親夫 : Establishment of Japan-origin Non-obstructive General Angioscopy - Lessons Learned from Struggle for 40 years. 第 84 回日本循環器学会学術集会、WEB、2020 年 7 月 28 日

上田恭敬 : Overview of STOP MI Project、第 84 回日本循環器学会学術集会、WEB、2020 年 7 月 28 日

B-4

安村かおり、安部晴彦、小杉隼平、篠内和也、三嶋 剛、伊達基郎、上田恭敬、長谷川新治、上松正朗、是恒之宏 : Comparison of Prognostic Impact of Geriatric Nutritional Risk Index between Heart Failure with Reduced and Preserved Ejection Fraction。第 84 回日本循環器学会学術集会、WEB、2020 年 7 月 28 日

松村未紀子、安部晴彦、家原卓史、佐々木 駿、上田泰大、中村雅之、大橋拓也、飯田吉則、鳥山智恵子、尾崎立尚、高安幸太郎、小杉隼平、篠内和也、三嶋 剛、伊達基郎、上田恭敬、上松正朗、是恒之宏 : 意識消失と多発脳梗塞を呈した左房内腫瘍を契機に診断に至った原発性肺癌の一例。第 31 回日本心エコー図学会学術集会、WEB、2020 年 8 月 14 日

鳥山智恵子、安部晴彦、中村雅之、飯田吉則、大橋拓也、高安幸太郎、尾崎立尚、小杉隼平、篠内和也、三嶋 剛、伊達基郎、上田恭敬、上松正朗、是恒之宏 : 僧帽弁形成術後遠隔期に僧帽弁狭窄症の進行を呈した感染性心内膜炎の一例。第 31 回日本心エコー図学会学術集会、WEB、2020 年 8 月 14 日

家原卓史、飯田吉則、安部晴彦、中村雅之、鳥山智恵子、小杉隼平、篠内和也、上田恭敬、上松正朗、是恒之宏 : 透析により速やかに改善した重度機能性僧帽弁逆流の 1 例。日本超音波医学会第 93 回学術集会、WEB、2020 年 12 月 2 日

佐々木 駿、安部晴彦、中村雅之、飯田吉則、鳥山智恵子、小杉隼平、篠内和也、上田恭敬、上松正朗、是恒之宏 : 先行する拡張障害の進行を認め心不全発症に至った一例。日本超音波医学会第 93 回学術集会、WEB、2020 年 12 月 3 日

高安幸太郎 : Efficacy and safety of ultrasound-guided thrombin injection for treatment of catheter-induced pseudoaneurysms。第 29 回日本心血管インターベンション治療学会、WEB、2021 年

2月5日

石田健一郎、小島将裕、曾我部 拓、宮川幸恵、中野光樹、黒木亮佑、小杉隼平、上田恭敬、大西光雄:心原性院外心停止症例における ECPR 直後に行う体幹部単純 CT の有用性の検討。第 48 回日本集中治療医学会学術集会、WEB、2021 年 2 月 12 日

Kosugi S , Ueda Y, Abe H, Mishima T, Shinouchi K, Ozaki T, Takayasu K, Iida Y, Ohashi T, Toriyama C, Nakamura M, Date M, Uematsu M, Koretsune Y: Comparison of angioscopic findings between ultrathin strut sirolimus-eluting stent and everolimus-eluting stent at 1 year after implantation.。日本心臓血管インターベンション治療学会 CVIT2020、WEB、2021 年 2 月 18 日

B-6

井戸允清、市堀泰裕、外海洋平、上田恭敬、平山篤志、樋口義治: XIENCE 留置 5 日後に同時多発的に重急性ステント血栓症をきたした 1 例。第 35 回日本心臓血管インターベンション治療学会近畿地方会、WEB、2020 年 10 月 10 日

山根治野: 末梢動脈疾患を有する症例の大動脈及び下肢血管内視鏡所見。第 14 回近畿血管内視鏡研究会、大阪市、2020 年 10 月 24 日

井戸允清、三嶋 剛、鶴飼一穂、坂本麻衣、堀内恒平、福島貴嗣、中村雅之、山根治野、大橋拓也、高安幸太郎、尾崎立尚、小杉隼平、安部晴彦、伊達基郎、上田恭敬、上松正朗、是恒之宏: ヘパリン使用下で塞栓性イベントを繰り返した急性下肢動脈閉塞症の 1 例。第 130 回日本循環器学会近畿地方会、WEB、2020 年 11 月 28 日

鶴飼一穂、尾崎立尚、坂本麻衣、井戸允清、堀内恒平、福島貴嗣、中村雅之、山根治野、大橋拓也、高安幸太郎、小杉隼平、三嶋 剛、安部晴彦、伊達基郎、上田恭敬、上松正朗、是恒之宏: 頻拍の管理が末梢循環不全の改善に重要であった大動脈弁膜症合併急性心不全の一例。第 130 回日本循環器学会近畿地方会、WEB、2020 年 11 月 28 日

栗原健太、堀内恒平、小杉隼、鶴飼一、坂本麻衣、井戸允清、福島貴嗣、中村雅之、山根治野、大橋拓也、高安幸太郎、尾崎立尚、三嶋 剛、安部晴彦、伊達基郎、上田恭敬、上松正朗、是恒之宏: 脳腫瘍による痙攣性てんかん発作からたこつぼ型心筋症を発症した一例。第 130 回日本循環器学会近畿地方会、WEB、2020 年 11 月 28 日

赤間俊之、尾崎立尚、鶴飼一穂、坂本麻衣、井戸允清、堀内恒平、福島貴嗣、中村雅之、山根治野、大橋拓也、高安幸太郎、小杉隼平、三嶋 剛、安部晴彦、伊達基郎、上田恭敬、上松正朗、是恒之宏: 複雑な心筋灌流に対する経皮的冠動脈形成術の治療戦略に心筋シンチグラフィが有用であった一例。第 130 回日本循環器学会近畿地方会、WEB、2020 年 11 月 28 日

山根治野: 血栓性の末梢動脈病変において、原因の同定に血管内視鏡が有用であった一例。第 15 回近畿血管内視鏡研究会、WEB、2021 年 1 月 16 日

B-8

山根治野：小血管に対するステント留置が work した症例を考察する。Eluvia channel online、WEB、2020 年 5 月 18 日

山根治野：治療に難渋した CLTI の一例。CLI conference、WEB、2020 年 5 月 21 日

山根治野：これからの EVT について。Medicon 社内講演会、WEB、2020 年 6 月 9 日

山根治野：Distal Embolization を生じたステント内閉塞症例〜どう予測し、対処するか〜。Complex Case Conference、WEB、2020 年 8 月 7 日

山根治野：こうやって取り組んでいます！大阪医療センターの PAD 治療。大阪城循環器連携の会、WEB、2020 年 8 月 27 日

安部晴彦：心不全患者における栄養状態と身体活動レベルの評価と取り組み。大阪城循環器連携の会、WEB、2020 年 8 月 27 日

小杉隼平：蛇行した右冠動脈石灰化病変に Rotablator を施行した一例。9th KTIS オトのチカラ ヒカリのチカラ-Imaging Seminar-、WEB、2020 年 9 月 26 日

山根治野：高度 Nodule 石灰化の Iliac EVT。Cordis Educational Training Program 森之宮コース、WEB、2020 年 9 月 29 日

山根治野：こうやって取り組んでいます！大阪医療センターの PAD 治療。第 5 回法円坂循環器フォーラム、WEB、2020 年 10 月 22 日

山根治野：ISO どうしてですか？。関西若手で EVT 盛り上げ Night、WEB、2020 年 11 月 9 日

安部晴彦：高齢、慢性腎臓病合併心不全に対する ARNI の可能性。循環器 Expert Meeting-ARNI を診る-、大阪市、2020 年 12 月 11 日

三嶋 剛：心房細動アブレーション中に機材トラブルにより一部機能が使用不能になった 1 例。Meet the Heart Rhythm Expert、大阪市、2020 年 12 月 18 日

山根治野：早期ステント内閉塞を繰り返した FP の 1 例。IN.PACT,Web 症例検討会@大阪、WEB、2021 年 1 月 18 日

安部晴彦：ハートノートを用いた心不全地域連携。第 40 回国立大阪医療センター循環器病談話会、WEB、2021 年 1 月 23 日

小杉隼平：急性冠症候群の診断と治療。第 40 回国立大阪医療センター循環器病談話会、WEB、2021 年 1 月 23 日

三嶋 剛：地域で診る心房細胞～いつから、何を。第 40 回国立大阪医療センター循環器病談話会、WEB、2021 年 1 月 23 日

福島貴嗣：病院で最期を看取った心不全。緩和ケアを取り入れた循環器疾患治療を考える会、WEB、2021 年 2 月 3 日

小杉隼平：Treatment～厳格な脂質管理～。FIND FH Save Their Family、WEB、2021 年 2 月 5 日

安部晴彦：心不全治療にイブブラジンをどう活かすか？～対象症例について考える～。Heart Failure Web Seminar、WEB、2021 年 3 月 1 日

安部晴彦：心不全治療における SGLT2 阻害薬。CARDIORENAL Symposium WEEK、WEB、2021 年 3 月 10 日

上田恭敬：心筋梗塞を予防する方法 2-前兆-。日本冠疾患学会 WEB セミナー市民公開講座、WEB、2021 年 3 月 14 日

安部晴彦：腎関連を見据えた病診連携。合併症を見据えた糖尿病治療を考える会、WEB、2021 年 3 月 18 日

小杉隼平：法円坂のインターベンションと臨床研究。Integrated Imaging Center-Live、WEB、2021 年 3 月 21 日

山根治野：EVT の最新治療。TERUMO EVT Web Seminar、WEB、2021 年 3 月 24 日

山根治野：俺の LUTONIX!。俺の LUTONIX!、WEB、2021 年 3 月 25 日

上田恭敬：心筋梗塞ってどんな病気？理解できるまで説明します！。第 2 回大阪医療センターWEB 市民公開講座、WEB、2021 年 3 月 25 日

小児科

寺田志津子

小児科では、以下の疾患に重点的に取り組んでいる。

新生児医療：合併症をもつ母親から出生した新生児、健康新生児ならびに病的新生児、後期早産児、HIV 母子感染予防。

高度小児専門医療：骨系統疾患、発育・発達障害、内分泌、アレルギー、川崎病、神経、発達障害、児童虐待、感染症（HIV 感染症を含む）。

臨床研究として、日本小児白血病リンパ腫研究グループ（JPLSG）の参加施設として白血病・悪性リンパ腫の、主に長期フォローアップの研究に参加している。また、HIV 感染妊婦の全国疫学調査研究事業に参加している。

【2020 年度研究発表業績】

A-3

山本景子、藤本一途、寺田志津子：腋窩リンパ節腫脹で発症した川崎病の 1 例。
「小児科臨床」74(1)：P87-92、日本小児医事出版社、2021 年 1 月

B-4

田中瑞恵、外川正生、兼重昌夫、細川真一、寺田志津子、前田尚子、七野浩之、吉野直人、杉浦 敦、喜多恒和：小児 HIV 感染症の発生動向および診断時の状況の変遷。第 34 回日本エイズ学会学術集会、千葉（web）、2020 年 11 月 27 日

【班研究の報告書】

令和 2 年度厚生労働科学研究費補助金 エイズ対策政策研究事業

「HIV 感染者の妊娠・出産・予後に関する疫学的・コホートの調査研究と情報の普及啓発法の開発ならびに診療体制の整備と均てん化に関する研究」班

令和 2 年度厚生労働科学研究費補助金 エイズ対策政策研究事業

「HIV 感染者の妊娠・出産・予後に関する疫学的・コホートの調査研究と情報の普及啓発法の開発
ならびに診療体制の整備と均てん化に関する研究」班
分担研究報告書

研究分担課題名： HIV 感染女性と出生児の臨床情報の集積と解析およびウェブ登録によるコホートシステムの全国展開

研究分担者：田中瑞恵 国立国際医療研究センター 小児科 医師

研究協力者：外川正生 大阪市立総合医療センター小児医療センター
小児総合診療科・小児救急科部長

兼重昌夫 国立国際医療研究センター 小児科 医師

細川真一 愛育病院 新生児科 医師

前田尚子 独立行政法人国立病院機構名古屋医療センター 小児科 医長

寺田志津子 独立行政法人国立病院機構 大阪医療センター 小児科 科長

中河秀憲 大阪市立総合医療センター感染症内科 医長

要旨：

全国病院小児科に対して通算 22 年目となる HIV 感染妊婦から出生した児（子ども）の診療実態を調査した。一次調査の結果を受けて、18 施設に対して 2 次調査を行った。子どもを診療した 18 施設に対して 2 次調査を行い、94%の施設から 29 例の回答を得た。更に、昨年度調査依頼をした 1 施設から本年度に 2 例の回答を得た。以上の 2 次調査の結果、31 例の回答を得たが、同一 3 例が複数施設での報告、4 例が既報例、1 例が期間外の出生で調査対象にならなかった為、新規症例 23 例となり（うち 2019 年 9 月以前の症例 7 例：以下同）これら 23 例について検討した。23 例には品胎 1 組、双胎 1 組を含んだ。感染例の報告はなかった。地域別出生数は近畿が最多で、北海道からの報告はなかった。母親の国籍は日本 11 例であった。妊婦への ART は妊娠中期までに全例

で施行されていた。分娩前のウイルスコントロールは良好だった。分娩様式は全例で帝王切開だった。児の感染状況は、非感染が 17 例、未確定が 6 例だった。全例が AZT 単剤の予防内服をしており、貧血が高頻度で認められたが、輸血が必要な重症例は認めなかった。感染児は報告がなかったが、非感染児として新たに報告された 2 例の同胞として感染児の存在が明らかになった。詳細は不明である。今回の調査結果、累計報告数は 625 例であった。感染／非感染／未確定の内訳は感染 55 例、非感染 450 例、未確定 120 例となった。

フォローアップシステムの構築では、NCGM でのパイロット研究の継続および、全国展開に向け、研究計画書を立案、研究を開始した。パイロット研究では、NCGM の倫理委員会で平成 29 年 8 月 2 日付で承認を得た(研究名：ヒト免疫不全ウイルス陽性女性と出生した児の長期予後に関するコホート研究 The Japan Woman and Child HIV Cohort Study (JWCICS)、承認番号：NCGM-G-002104-01)。倫理委員会の承認後、平成 29 年 8 月 23 日から症例の登録を開始し、2021 年 2 月 26 日現在、計 28 例が登録されたが、1 例の脱落があり現在 27 例の登録がされている。多施設コホート研究は、主施設である国立国際医療研究センター倫理委員会審査の承認を 2020 年 4 月 2 日に得た(承認番号:NCGM-G-003469-00)。多施設コホート研究への移行について説明し同意を得た。2021 年 2 月 28 日現在、22 例から同意を取得した。また、他施設からは、2021 年 2 月 28 日現在、新たに 2 例の登録があった。

A. 研究目的

1) 小児科二次調査

①可能な限り、子どもの数、子どもの家族情報、周産期情報、薬剤情報、罹病と生育の正確な状況を把握し、母子感染率を検討する。

②本邦の国情に合った子どもの健康管理および発達支援に必要なデータベースを構築・更新する。

2) コホートシステムの開発

①従来の小児科二次調査では、長期予後についての調査は困難であり、コホートシステムの開発により、HIV 陽性女性から出生した児の長期予後を調査することを目的とする。この 3 年間で、現在単施設である研究施設を、4 施設程度に拡大することを目的とする。

②症例の集積を図り、妊娠した女性および出生児の長期予後についてデータを集積する。

③また、システムを通じた患者支援ツールについて検討する。

B. 研究方法

1) 小児科二次調査

全国の小児科を標榜する病院にアンケート調査(吉野班による小児科一次調査)を行い、子どもの診療経験について匿名連結不能型で発生动向を把握した。全国の小児科を標榜する病院に対し一次調査用紙を送付し、返信はがきにより回答を得た。質問は以下に該当する症例数を問うものであった。

質問 1. 2019 年 9 月 1 日～2020 年 8 月 31 日

までに出生した症例（新規症例）

質問2. 2019年8月31日以前に出生した症例で、過去の調査に報告していない症例（未報告症例）

上記質問に対しての有効回答の解析を行った。

この一次調査で把握された症例について、将来の追跡調査を目的とした匿名連結不可能型の詳細な二次調査を行った。

尚、一部症例登録用紙の改訂を行った。それに伴い、国立国際医療研究センター倫理委員会で審査し、平成28年8月8日付で承認された。（研究名：HIV感染妊婦から出生した児の実態調査、承認番号：NCGM-G-001874-01）

2) コホートシステムの開発

H27～29年に開始した、NCGMでのパイロット研究を踏まえ、HIV陽性女性および出生児のコホート調査を全国展開する。研究は、web登録で行い、医師（医療者）および、対象に対して健康調査を行う。

わが国における、HIV陽性女性から出生児の長期予後、罹病、成長・発達についてコホート研究を行うための、システム立案を行う。前年度まで施行していた、小児長期予後についての研究結果や、各国のコホートシステムを参考に、わが国で実行可能なシステムを検討する。登録症例について、半年（もしくは1年）に一度、現況、罹病、成長・発達（児のみ）について、対象による現況入力および、主治医によるweb登録し、データセンターでデータ管理する。女性のフォロー中に、妊娠があれば、その時点で、妊娠・出産の状況も登録し、児も登録する。集計されたデータをもとに、1年に一度解析を行い、報告する。

全国展開に向けては、昨年度パイロット調査を継続する中で明らかとなった問題点、患者の移動（転院）についても配慮されたシステムの在り方について検討し、その内容を反映した研究計画を立案する。

（倫理面への配慮）

本調査は「人を対象とする医学系研究に関する倫理指針」及びヘルシンキ宣言を遵守して実施する。当調査の扱う課題はHIV感染を中心に、その周産期・小児医療、社会医学との関わりであり、基本的に「倫理面への配慮」は欠くべからざるものであり、細心の注意をもって対処する。

C. 研究結果

1) 令和2年（2020）年度小児科二次調査結果

診療経験あり 18施設に対して当分担研究班が詳細な二次調査を行った。その結果、2020年2月10日現在、回答無しは1施設2症例（一次調査回答1例、2018年の未報告症例1例）だった。以上から二次調査に対する施設回答率は、17/18施設（94%）だった。

回答のあった17施設中、今年度初めて報告があったのは2施設だった。診療経験ありの施設毎の症例数は1～4例であった。この17施設から得た29例と、2018年調査の回答が遅れて届いた1施設から得た2例の計31例が今年度小児科二次調査で得た症例となった。内訳は2019年9月1日～2020年8月31日出生の児（新規症例）19例、2019年8月31日以前に出生した児（未報告症例）12例の計31例だった。このうち未報告症例の4例は既報、1例は期間外の誤報と判明。また、新規症例の中に同一症例と思われる2施設からの重複報告が3組あった。よって、今回調査によって得た新規報告は23例だった。最終的に新規症例として15施設から23例の報告について詳細に検討した。23例のうち、2019年9月1日～2020年8月31日出生の児は16例、2019年8月31日以前に出生した児は7例だった。

児については、この23例について以下の解析を行った。また、本年は双胎1組、品胎1組を含むため、母体数は20例であり、母体に関するデータについては総数20例で解析を行った。

カッコ内は、総数のうち2019年8月31日以

前に出生した例数を示す。

①年次別出生数と感染状況

新規症例 23 例の出生年の内訳は、2008 年 1 例、2013 年 1 例、2014 年 1 例、2015 年 1 例、2018 年 3 例、2019 年 6 例、2020 年 10 例だった。感染有無については 17 例が非感染であったが、6 例（2019 年出生 1 例、2020 年 5 例）が未確定だった。

②地域別出生数

関東甲信越 4 例、東北 1 例、中部 5 例（1 例）、近畿 7 例（3 例）、中国・四国 4 例（1 例）、九州・沖縄 2 例（2 例）で北海道からの報告はなかった。また、近畿 7 例は品胎、中国四国 4 例は双胎をそれぞれ含む。

③母親の国籍

母親の国籍は日本 11 例（3 例）で双胎 1 組を含んだ。外国 9 例（2 例）で品胎 1 組を含んだ。

外国籍の詳細はアフリカ 3 例、西アフリカ 1 例、南アメリカ 3 例、東アジア 1 例（1 例）、東南アジア 3 例（1 例）だった。

④実父の国籍と実父の感染状況

日本 10 例（5 例）、外国 10 例（2 例）で、感染状況は、陰性 11 例（4 例）、陽性 4 例、不明 5 例（1 例）だった。

⑤同胞について

16 例において同胞が 1～2 人あり、2 症例で同胞の感染例があったが、この 2 症例は今年度、同時に報告された兄弟例の同胞であり、同一児である為、報告のあった感染例同胞は 1 例だった。

⑥妊婦の感染判明時期と抗ウイルス薬投与状況

妊婦の感染判明時期は妊娠中が 12 例（4 例）で 10 週から 16 週の間判明だった。妊娠前の判明は 8 例（1 例）で、全例で出産前に母体の感染が判明していた。

妊婦への ART 開始時期は、妊娠前から服用が 8 例（1 例）、妊娠中開始が 12 例（4 例）だった。妊娠中開始の 12 例はいずれも、16 週から 24 週の間投薬開始しており、妊娠中期までには

ART が開始されていた。

薬剤名の詳細不明 1 例を除く 19 例についてキードラッグについて解析したところ RAL が双胎、品胎出産例を含む 12 例（3 例）、DTG が 2 例（1 例は 14 週から RAL に変更）、ATV+RTV が 1 例、DRV+RTV が 1 例、LPV/RTV が 3 例（3 例）であり、RAL が最も多かった。バックボーンでは、TVD が品胎出産例を含む 9 例（3 例）（1 例は 33 週から EZC に変更）、DVY が 4 例（1 例は 14 週から TVD に変更）、EZC が双胎を含む 3 例、AZT/3TC : 1 例（1 例）、COM : 2 例（2 例）（1 例は 23 週から AZT/3TC に変更）であった。分娩時に使用されていたバックボーンでは、TVD が 10 例（3 例）で最多であった。

⑦分娩前妊婦の免疫学的・ウイルス学的指標

妊婦の分娩前のウイルス量（copies/ml）は 19 例で記載があった。20copies/ml 以下が 12 例（2 例）で、うち感度以下は 9 例だった。20～200copies/ml は品胎、双胎出産例を含む 7 例（4 例）であった。高ウイルス量でコントロールが不良であると考えられた例は認めなかった。

妊婦の分娩前の CD4 数（/ μ l）は双胎、品胎出産を含む 18 例で記載があり、109 から 713/ μ l に分布した。18 例のうち、CD4 数が 500 未満であったのは品胎を含む 13 例（4 例）だった。13 例のうち 1 例は 200 未満だった。

⑧出生児の背景

出生した児の性別は、男児：女児 10 例（3 例）：13 例（4 例）だった。在胎週数は、37 週以上 11 例（4 例）だった。34 週～36 週の早産は双胎、品胎を含む 12 例（3 例）だった。

分娩方法は全例で帝王切開で、そのうち品胎を含む 5 例（3 例）は緊急帝王切開だった。

⑨新生児への対応

新生児への抗ウイルス薬は、23 例全例で投与されており、AZT 単剤（静注含む）の投与であった。

AZT の投与回数は、4 回/日が 2 例（1 例）で、2 回/日が 21 例（6 例）だった。

投与期間は6週間が14例(6例)、4週間以上6週間未満が7例、2週間が1例、2週間未満が1例(1例)であった。2週間未満の1例は1日と記載があったが副作用等の記載はなく、再度詳細を問い合わせたが返答が得られなかったため、投薬1日で終了した背景は不明である。23例全例で母乳は禁止されていた。

⑩新生児における問題

新生児期に異常があったのは12例(4例)だった。詳細は、重複を含み、極低出生体重児3例、低出生体重児7例(2例)新生児一過性多呼吸が6例(2例)、RDSが2例(1例)、無呼吸発作2例、胃軸捻転1例だった。奇形は2例に認め、心室中核欠損症1例、頭皮欠損1例(1例)だった。また品胎の1例において生後2か月の頭部MRIで側脳室周囲にT1WI高信号域、T2低信号域が散見された。

貧血は19例(4例)において指摘されていた。最低Hb値は、8.1~10.3g/dlに分布していた。最低Hb値が、9g/dL未満だったのは7例(1例)だった。最低Hb値であった時期は、生後1ヵ月が16例(3例)、生後2か月が3例(1例)だった。貧血の治療は、経過観察が6例、鉄剤投与が5例(1例)、エリスロポエチン、鉄剤の併用が8例(3例)であった。輸血施行例は認めなかった。

⑪感染例について

今年度は感染例の報告はなかったが、本年新規報告例の同胞として未報告の感染例の存在が明らかとなった。

2) 小児科二次調査・追跡調査

昨年度調査時に1歳半に達しておらずHIV感染の有無が「未確定」で、自己中断や転院により追跡不可能となった症例を除いた9施設、11例について追跡調査を行った。併せて、2016年と2017年の調査時に「未確定」だった症例(2016年度:6施設、11例、2017年度:5施設、9例)についても同内容の追跡調査を行った。対象症例は31例だった。回答結果は2017年度報告の1施設のみ未回答で、19施設30例の回答があ

った。施設回答率は19/20施設で95%だった。返答あった30例のうち、25例で非感染が確定していた。5例は未確定のまま追跡不能であった。また、追跡調査を行った30例全てにおいて、その後の発達障害や成長障害等は見られなかった。

3) 小児科二次調査22年間のまとめ(表1)

今回の調査結果、累計報告数は625例であった。感染/非感染/未確定の内訳は、今回追跡調査で「未確定」から「非感染」に移行した情報も踏まえた結果、感染55例、非感染450例、未確定120例となった。また、「非感染」には、過去に報告を受けたが詳細な情報が得られなかった1例も含まれている。

4) フォローアップシステムの構築

今年度は、NCGMのパイロット調査の継続と、全国展開に向け研究を開始した。

①パイロット調査の現況

2017年8月23日より、症例登録を開始した。2021年2月26日現在、28例の登録を得たが、1例が転院等で追跡対象外となり、27例の登録を継続している。本年度の登録例はなかった。

a. 同意取得状況(図1)

同意については以下の4項目について取得した。

i. 医療者が、あなたの過去の診療状況および現在の状態の調査に回答すること

ii. 医療者が、あなたのお子さんの過去の診療状況および現在の状態の調査に回答すること

iii. あなたが、あなたの現在の状態の調査に回答

すること

iv. あなたが、あなたのお子さんの状態の調査に

回答すること

それぞれ1~4の同意取得数(%)は、28

(100%)、27(96.4%)、25(89.3%)、24(85.7%)だった。

b. 回答状況(図2)

本年度より、研究補助による入力、医師の確認という手順をとったため、医療者が回答すべき CRF は回答率 100%となった。アンケート調査については、2019 年 4 月、10 月共に 65.2%だった。

c. 妊娠転帰(図 3)

2021 年 4 月 1 日までに妊娠転帰が明らかとなったのは、のべ 55 例だった。転帰の内訳は、選択的帝王切開 22 例、緊急帝王切開 7 例、経膈分娩 6 例、自然流産 4 例、人工中絶 16 例だった。転帰年毎にみると、2007 年以降に選択帝王切開の例が全例含まれていた。また、感染判明後に経膈分娩した例はなかった。

V. 女性の現況(図 4)

登録例は、全例生存中であつた。2020 年 4 月 1 日現在の年齢分布(カッコ内は出産歴あり)は、26~30 歳が 3 例(2 例)、31 歳~35 歳が 5 例(4 例)、36~40 歳が 9 例(7 例)、41~45 歳が 5 例(3 例)、46~50 歳が 5 例(4 例)、50 歳以上が 1 例(1 例)だった。出生児の数は一女性あたり、1~3 例だった。

VI. 出生児の現況(図 5)

登録例は、25 例で全例生存中であつた。感染児は 1 例、非感染児は 24 例だった。出生児の年齢分(2020 年 4 月 1 日現在)は、0 歳が 1 例、1~3 歳未満が 10 例、3~6 歳未満が 5 例、6 歳以上が 9 例だった。

②システム開発

JCRAC データセンターと協働してシステム開発を行った。データベースツールとして、REDCap (Research Electronic Data Capture) を採用した。REDCap は米国 Vanderbilt 大学が開発したデータ集積管理システム(EDC)である。アカデミック医学研究では世界標準になりつつある支援ツールで、REDCap Consortium Partner になれば、米国 Vanderbilt 大学から無償でライセンスを受けられる。(アカデミアの場合)また、特徴として、収集データに対し、自身でサーベイやデータベースが自由にカス

タマイズ可能、モバイル App や活動量計などの連携が可能などである。今回、EDC として REDCap を採用した理由として、1. データマネージメント業務を標準化、2. EDC 構築・運用コストの抑制、3. 研究者主導臨床研究では、プロトコル、CRF の変更が多いので迅速に eCRF の変更を行えるという点である。その中で、アカデミアで利用実績があり、導入・運用コストの低い EDC として REDCap 導入した。日本でも多くのアカデミアで導入が進んでおり、平成 26 年 2 月に Japan REDCap Consortium が大阪大学に設立されている。REDCap の作動環境は、1. アプリ REDCap ver6.10.32、2.OS CentOS 7、3. Web Apache 2.2.15、4. DB MariaDB ver5.5、5. 言語 PHP ver5.3.3、6. メール SMTP Email 2.6.6 である。JCRAC データセンターでは、サーバは JCRAC データセンター内に設置し、運用管理を実施している。

③多施設でのコホート研究(JWCICS II)計画
本研究では、以下のことについて配慮し研究計画を立案した。

a. 新たな女性のリクルートは分娩歴のある女性のみとする。パイロット調査の対象女性は再同意が得られれば、規定の期間までは継続とする。施設は 4 施設限定で開始する。

施設は、

国立国際医療研究センター

大阪市立総合医療センター小児医療センター

国立病院機構名古屋医療センター

大阪医療センター

から開始し、徐々に拡大する。

b. 対象女性から出生した児のうち感染児は別個にコホートし、非感染児と観察項目を分け、データ入力をしやすくする。

c. 感染児については、二次調査から症例のリクルートを行い、施設を限定せず全国から症例をリクルートする。

d. 二次調査とコホートで得たデータを統合して利用できるように配慮する。

e. 女性のデータは、パイロット調査からの移行

対象以外は、内科医師からのデータは取得せず、対象本人から情報を取得する。妊娠データについては引き続き、イベント発生毎に取得する。
f. CRF は出来るだけ、個別にメールで URL 連携にし、入力時期を逸脱しないように配慮する。
g. 二次調査と重複登録はしない。

これらに伴い、パイロット調査で使用している RedCap を引き続き EDC として使用するが、多施設コホートでは仕様を変更した。

また、パイロット調査に参加している対象については、再同意を取得し、パイロット調査のデータは多施設コホートの新システムに移行する予定である。

④多施設コホート調査の開始

2020年4月2日付で、主施設である国立国際医療研究センター倫理委員会審査の承認を受けた（承認番号：NCGM-G-003469-00）。その結果を受け、研究参加3施設においても倫理審査を受け承認を得た。

2020年4月2日以降、国立国際医療研究センターでは、パイロット調査参加者に対して、多施設コホート調査への移行について説明し同意を得た。2021年2月28日現在、22例から同意を取得した。

また、他施設からは、2021年2月28日現在、新たに2例の登録があった。

⑤産科・小児科二次調査との連携

コホート研究と、二次調査のデータを症例の重複なく統合して使用するため、産婦人科、小児科二次調査も RedCap を使用し、データ管理を web 化することとした。いままで産婦人科、小児科で個別に二次調査の観察項目を作成していたが、今後コホートから二次調査へのデータ移行を行うため、コホート調査と文言の統一を図った。また、コホートでは、観察項目は産婦人科領域、小児科領域で重複なく設計しているが、産婦人科、小児科二次調査では個別に郵送し、回答を得ているため、回答が必ずしも小児科、産婦人科の両方から得られるとは限らず、分娩週数等の重要な観察項目は産婦人科、小児

科で重複して回答を依頼している。更に、コホート調査は経年でデータを取得するが、二次調査は横断研究であり、同一の項目であってもどの時点のコホートデータを二次調査の項目として採用するのか、コホートでは小児科領域にある項目を産婦人科二次調査に移行、またその逆で産婦人科領域の項目を小児科二次調査に移行する場合があるなど、スムーズなデータ移行も可能にするための条件設定なども行った。上記のように二つの異なる手法の疫学調査のデータを紐づけする仕組みだけでなく、コホート調査と産科・小児科二次調査が連携をとれるように調査期間（当該年3月までに変更）、対象（産婦人科では転帰があった例のみ調査することに変更）の調整を図った。

D. 考察

1)小児科二次調査

本年度は、施設回答率は94%と高水準であった。追跡調査においても95%と高水準の施設回答率であり、調査として有効と考えられる。今年度の新規報告は23例であり昨年度と比較して報告数はやや減少傾向だった。更に本年度に出生した児は19例だった。20例を下回りやや減少傾向にあった。SARS-Cov2の流行により我が国の妊娠・出産数が更に減少しているが、その影響があったかについては、ここ数年のトレンドを検討する必要があると考えられた。

今年度は過去に報告がなかった2施設から新たに報告を受けた。報告施設のうち実際に症例のあった診療施設は累計167施設となり、徐々に診療施設の増加を認める。本年度は、2019年8月31日以前に出生していたが、2019年度報告までに報告されていなかった例を7例含んだ。毎年、年数が経過している症例の報告もあり、継続的に全国を網羅的に調査することで全数把握が可能になると考える。また、今年度は感染児の報告はなかったが、同胞例として1例本調査には未報告と思われる症例の存在が明らかとなった。小児HIV感染症は希少疾患である

ため、日常診療で遭遇することは稀である。そのため疾患名は知っていても鑑別診断に挙げづらい状況にある。希少ではあるものの、近年はほぼ毎年、報告例があること、そのほぼ全例で妊娠初期スクリーニングは陰性で様々な状況で診断されていることなどをより広く社会に情報拡散することで、日常診療での HIV 感染症の鑑別が迅速に行われるようになる可能性がある。一方非感染例のほとんどは母体ウイルスコントロール良好例であり、母体コントロールが良好で、予防法が確実に行われれば、感染予防は可能である。

今年度の報告例では全例に母体 ART が施行されており、遅くとも中期までには開始出来ていた。我が研究班の長年の調査から、妊娠中期までに ART が開始出来ていた場合の感染例はなく、後期からの開始では感染例が散見されることより、妊婦に対してはより一層、診断早期に ART の開始が望まれる。しかし、AIDS を発症していない成人例では、抗 HIV 治療薬は高額であることなどから、障害者手帳等の申請を経て治療が開始されることがほとんどであり、その手続きには1~2か月は通常かかることから治療の開始にタイムラグが生じてしまうことが問題になっている。妊婦では、母体自身の状況もさることながら、適切にされれば予防できる母子感染を予防するという観点から、AIDS を発症してなくても早期に ART を開始出来る制度が必要であると考えられる。母体 ART のレジメンは、キードラックではインテグラーゼ阻害薬 (RAL や DTG) の使用が 15/19 例 (78.9%) が最多となっている。また、バックボーンでも TDF をベースとしたレジメン (TVD や DVY) が 12/19 例 (63.1%) と最多で、AZT レジメンは 3/19 例 (15.8%) と減少していた。妊婦でも治療薬の選択肢が広がり、より副作用が出現する可能性が低い抗 HIV 薬が選択されるようになってきていると思われる。ART が妊娠中期までに開始されていたことにより、分娩時の VL は感度以下か 200copies/ml 未満であり全例でコントロール良好であった。母

体 ART は最も有効な母子感染予防策であり、今後も適切に行われることが望まれる。

児へは全例で AZT 単剤投与であり、母体の経過からも今年度報告例ではハイリスクにあたる症例はなかった。妊娠初期の HIV スクリーニングの実施、母体 ART が適切に行われた結果と考える。

AZT の投与回数は、21/23 例 (91.3%) が 2 回/日となっており、「HIV 感染妊娠に関する診療ガイドライン」(2018 年 3 月)に従った投与がほぼ行われるようになっている。投与期間については、母体情報から全例で母子感染リスクは低く、4 週間の投与でも許容されると考えられたが、6 週間投与が 14/23 例 (60.8%) であり、本年度出生例でも 8/19 例 (42.1%) と高い割合で 6 週間投与されていた。上記、ガイドラインでは原則 6 週間投与が推奨されている影響の可能性はある。欧米では、リスクが低ければ投与期間の短縮を推奨する傾向にあるため、我が国のガイドラインの改定の予定もあり、児の副作用軽減のためにもリスクに応じて投与期間の短縮がなされると考えられる。

児の AZT の副作用によると考えられる貧血は報告例では 19/23 例 (82.6%) と高頻度であり、昨年と比較しても同程度であった。輸血の対処がされる重症例はなかった。貧血の出現した時期 (最低 Hb 値の時期) は生後 1 か月が 16/19 例 (84.2%) と多く、先行論文で示されている時期と一致していた。今後も貧血は AZT の副作用として注視する必要がある。我が国の調査結果を踏まえて、より安全かつ有効な母子感染予防を検討する必要がある。

今年度は感染児の報告はなかったが、同胞例として未報告と思われる症例を認めた。詳細は不明であるが、次子の報告から感染例が本調査で把握されることもあり、その場合の同胞の調査依頼をどのようにするのか、なぜ長子の報告がされていないのか原因を検討し、今後の調査の方法についても再度検討する必要があると考えられた。

完全に母子感染予防策が遂行された例では、感染例はないことから現行の予防策は有効であり、如何に早期に母体の HIV 感染症を把握するかが重要である。先に述べたように、如何に母体の HIV 感染を早期に把握するかが重要であり、HIV 感染のみならず他の母子感染症の予防のために、妊婦検診の重要性と、検診を補助する仕組みづくりが重要である。小児 HIV 感染症の症例は稀であるが、2015 年以降ほぼ毎年報告を認めるようになり、増加傾向にある。今後の発生动向に注意が必要な状況である。さらに、多くの小児科医は診療の経験がなく、経験を積むことも我が国の現状では困難な状況にあり、診療体制が整っていない。一度感染すると長期の通院が必要であることから、病院の集約には限界があり、相談システムを確立することで、スムーズな診療が行えるようにすることも今後の課題である。

2) フォローアップシステム構築

①パイロットコホート調査

現在、少数ではあるが蓄積された症例は全例で生存が確認されており、数年の経過では予後良好だった。医療者からの情報収集については、医師からの入力作業は困難で、研究補助による入力作業、医師による確認に変更したところ、100%の入力を達成した。また、メールの回答率は 75%程度あることがわかっており、対象者からの情報収集も適切に行うことが出来た。しかし、多施設コホートでは、研究補助者がいるとは限らず、医師への入力依頼をいかに効率的に行うかは重要な問題であると考えられる。一方で対象者の回答率は 65%程度高いことから、対象者への質問項目を困難でない範囲で増やすことでより質の高い調査が可能になると考えられた。

②多施設コホートの展開

パイロットコホート研究の運営については開始後も検討すべき点が多々あり、今後の多施設展開を見据え修正点を引き続き検討した。

パイロット調査で最も問題であった情報入

力の促進と、複数部署の連携については、多施設研究では医療者からの内科情報の取得を取りやめ、関連部署をスマートにする。また、各 CRF を個別のメールで関連付け、入力依頼、催促を行うことで、入力者の混乱を軽減する。NCGM ではカルテと連動し、自動で情報が収集できるなどのシステムが有効な可能性があり、試行する。情報管理については、対象者のメールアドレスを対象者の目前で入力、確認、対象者に登録確認メールが到着することまでを確認することで、安全に管理されている。医療者から収集する情報についても、アカウント登録した者のみの限定となっており、パスワード複数回間違いによるロックなど行われており、安全に設定されている。多施設展開に伴い、個人情報の取り扱いについては、各施設の倫理規約に従うこととし、カルテ ID の入力ではなく施設で独自に設定した番号での登録や、誕生日についても生年月までは必須とし、日については任意の日付を許容することとした。また、事務局からは、カルテ ID もしくは施設番号は確認できない仕様にし、個人情報の取り扱いに関する安全面についてはより一層強化した。

また、CRF についてもパイロット研究から一部見直し、配置や、文言などを今一度整理した。更に、③で述べるように二次調査とのデータ連携を見据え杉浦班とも連携し、調査を行うことで、二次調査へのデータ移行がスムーズに行えるようになった。二次調査へのデータ移行は来年度から稼働する予定である。

③産科・小児科二次調査との連携

コホート研究、横断的研究はいずれも疫学調査であるものの、データの収集の手法は大きく異なるため、コホート研究から横断的研究にデータを移行する仕組みの構築は容易ではなかった。観察項目の紐づけだけでも、文言の調整、コホート研究のどの CRF からデータを紐づけし、横断的研究のデータとするか、時期や対象の選定、またコホートに参加していない各施設の症例のすくい上げの仕組みなど多岐に渡った。

しかし、産科・小児科二次調査およびコホート調査のデータを全体として、データベース化すること、質の高いデータの蓄積を行うため、コホート調査の研究計画から端を発し研究班の横断的研究も見直しを図る機会となった。我が国のHIV陽性女性および出生児に関するデータは本調査が唯一であり、貴重であることから、今後も丁寧なデータの蓄積とデータ管理が必要とされ、コホートの開始や二次調査の見直しは有用であると考えられ、来年度の運用開始に向け最終調整を行う必要がある。

E. 結論

いずれの研究についても概ね良好に遂行できたが、コホート調査については遂行をより促進する必要がある。

G. 業績

原著論文による発表

- 1) 島田真実, 田中瑞恵, 大田倫美, 渥美ゆかり, 本田真梨, 吉本優里, 大熊喜彰, 兼重昌夫, 瓜生英子, 山中 純子, 水上愛弓, 五石圭司, 佐藤典子, 七野浩之, 結核とリンパ球性間質性肺炎の鑑別に肺生検が有用であったHIV感染児の二例. 日本小児科学会雑誌 124(7):1107-1113, 2020
水上 愛弓五石 圭司 佐藤 典子 七野 浩之
- 2) 田中瑞恵, 小児のHIV感染症. 今日の小児治療指針第17版(水口雅編), 医学書院, 330, 2020
- 3) 田中瑞恵, HIV感染症. 小児感染免疫学(一般社団法人日本小児感染症学会), 朝倉書店, 534-541, 2020
- 4) 田中瑞恵, 小児、青少年期における抗HIV療法. (四本美保子, 白阪琢磨編) 抗HIV治療ガイドライン(2021年3月発行), H30年度厚生労働行政推進調査事業費補助金エイズ対策政策研究事業 抗HIV治療ガイドライン HIV感染症及びその合併症の課題を克服する研究班, 2020
- 5) 外川正生, HIV陽性の母親から生まれた児に対する予後管理. HIV感染症 治療の手引き(日

本エイズ学会 HIV感染症治療委員会), 日本エイズ学会 HIV感染症治療委員会, 34-35, 2020
6) 細川真一, 梅毒:先天梅毒について. 小児科診療(和田雅樹), 診断と治療社, 1227-1233, 2020

学会発表・講演・教育

国内

- 1) 田中瑞恵, 外川正生, 兼重昌夫, 細川真一, 寺田志津子, 前田尚子, 七野浩之, 吉野直人, 杉浦敦, 喜多恒和, 小児HIV感染症の発生動向および診断時の状況の変遷. 第34回日本エイズ学会学術集会・総会, 2020年11月, 千葉(web)

H. 知的財産権の出願・登録状況(予定を含む)

該当なし

表 1

年次別出生数と児の感染状況

	感染児	非感染児	未確定	出生数
1984	1	0	0	1
1985	0	0	0	0
1986	0	0	0	0
1987	1	2	0	3
1988	0	1	0	1
1989	0	3	1	4
1990	0	1	0	1
1991	4	0	1	5
1992	3	2	1	6
1993	6	6	1	13
1994	3	10	0	13
1995	8	11	1	20
1996	3	11	1	15
1997	5	13	1	19
1998	3	17	4	24
1999	1	21	1	23
2000	4	15	5	24
2001	0	25	1	26
2002	1	21	7	29
2003	0	16	5	21
2004	0	15	8	23
2005	1	14	5	20
2006	1	19	6	26
2007	0	13	6	19
2008	0	11	10	21
2009	2	9	7	18
2010	3	17	2	22
2011	0	12	6	18
2012	1	20	4	25
2013	1	16	8	25
2014	0	19	4	23
2015	1	21	7	29
2016	1	22	2	25
2017	1	22	4	27
2018	0	21	0	21
2019	0	18	6	24
2020	0	5	5	10
不明	0	1	0	1
合計	55	450	120	625

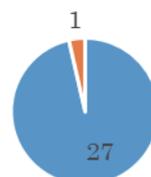
図1 同意取得状況

1.医療者が、あなたの過去の診療状況および現在の状態の調査に回答すること



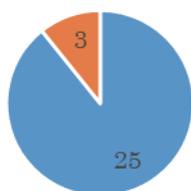
■ はい ■ いいえ

2.医療者が、あなたのお子さんの過去の診療状況及び現在の状態の調査に回答すること



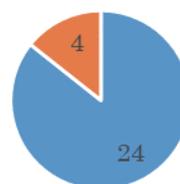
■ はい ■ いいえ

3.あなたが、あなたの現在の状態の調査に回答すること



■ はい ■ いいえ

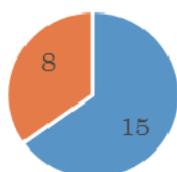
4.あなたが、あなたのお子さんの状態の調査に回答すること



■ はい ■ いいえ

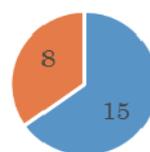
図2 アンケート回答状況

2019年10月



■ 回答あり ■ 回答なし

2019年4月



■ 回答あり ■ 回答なし

図3 妊娠転機

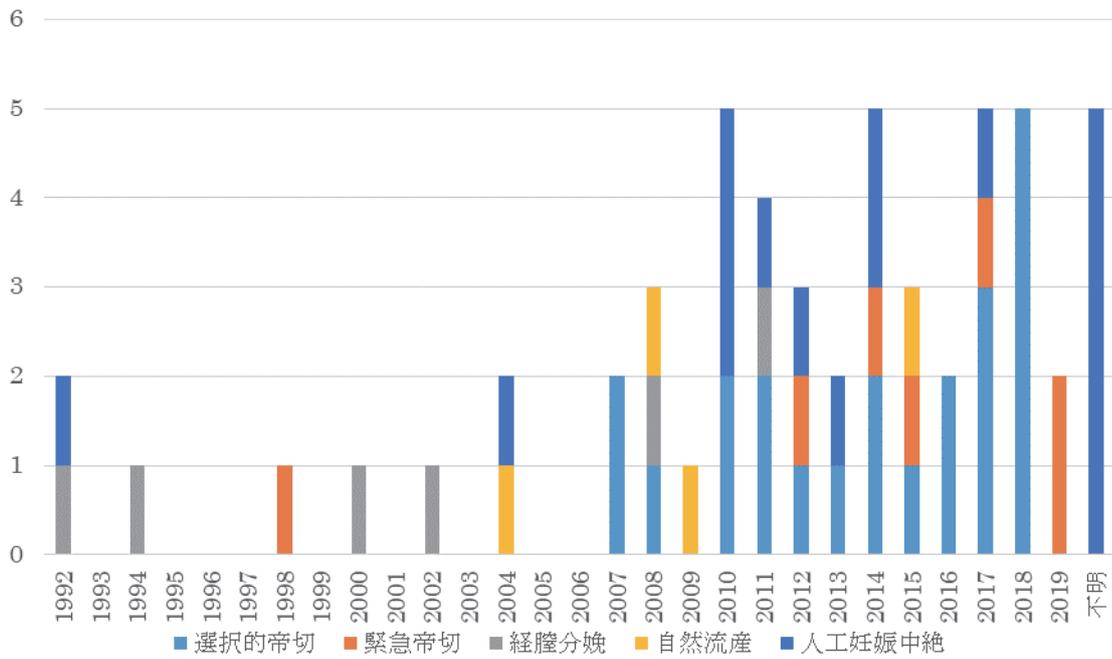


図4 女性年齢分布（2020年4月1日現在）

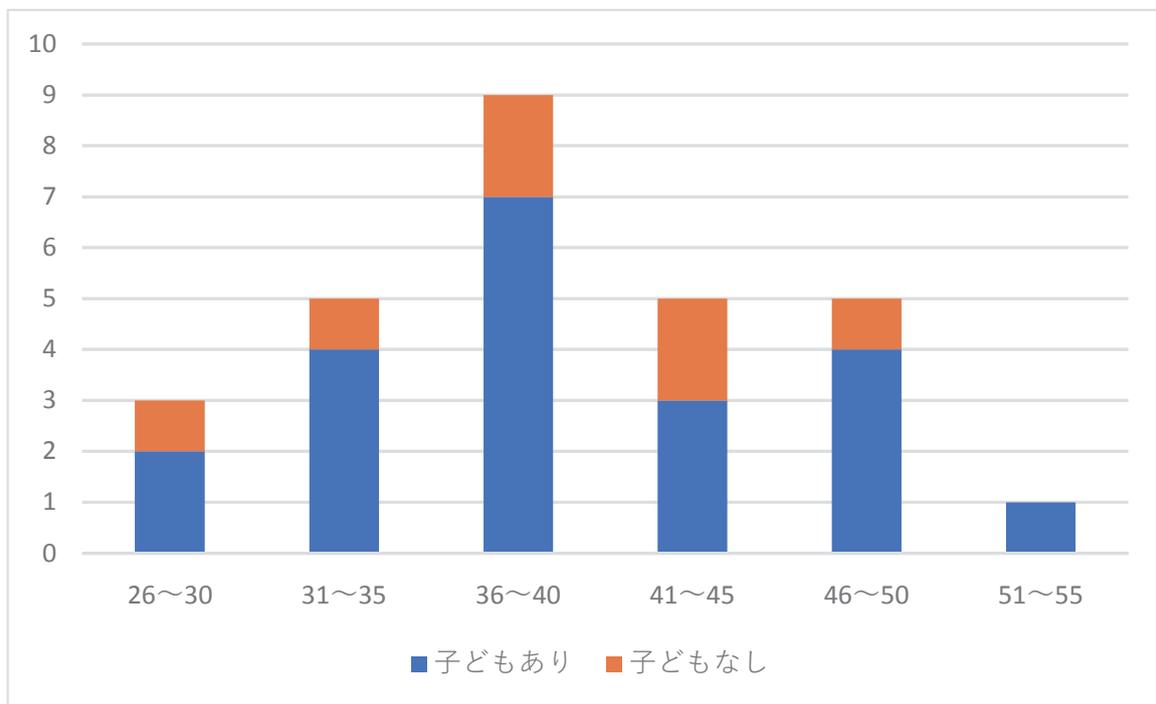
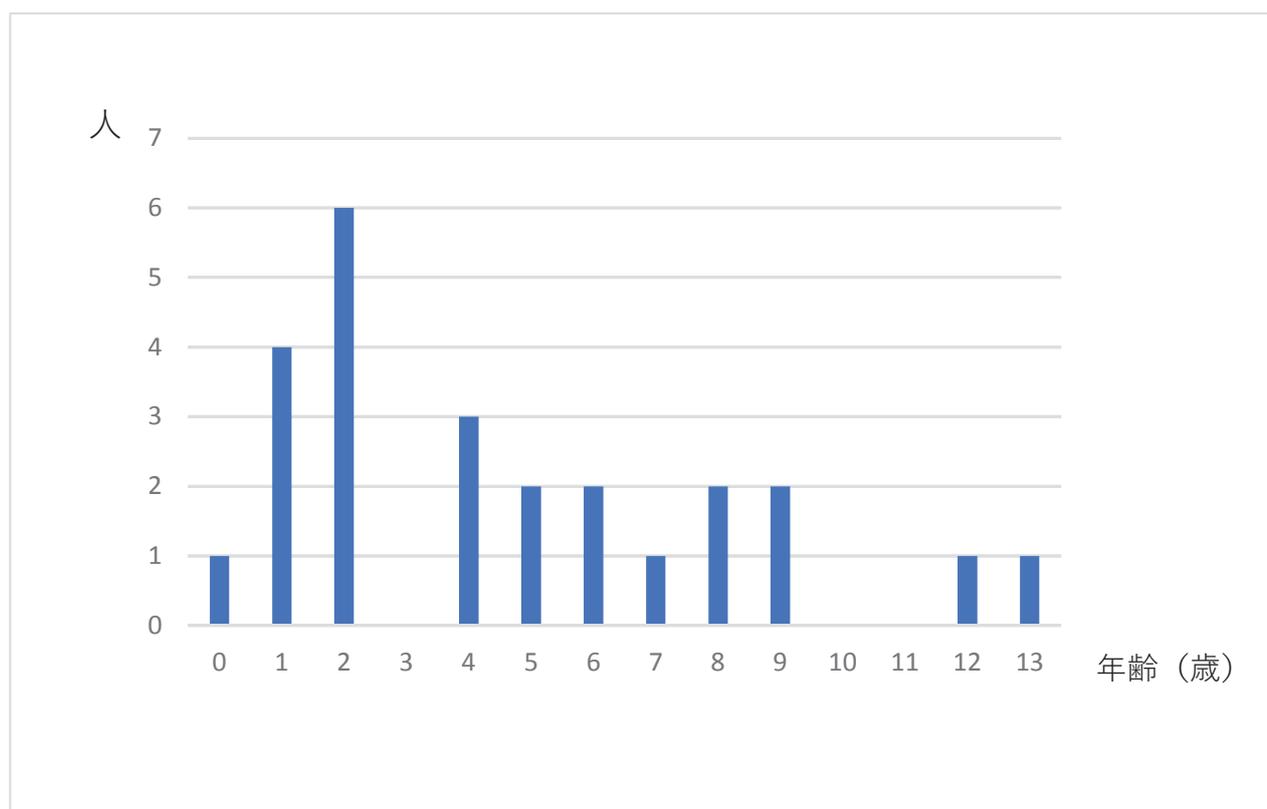


図5 出生児の年齢分布（2020年4月1日現在）



外科

(肝胆膵外科・上部消化管外科・下部消化管外科・呼吸器外科・乳腺外科)

平尾素宏

外科は、外科治療およびがん治療における標準治療の確立と先進医療の開発をめざして、以下の方針に基づいて臨床および研究を行ってきました。

- 1) 専門性および先進性の高い医療
- 2) 医療の質の向上とチーム医療の推進
- 3) 標準治療の確立と臨床共同研究の推進
- 4) 各種がんに対する集学的治療の推進
- 5) 外科手術の改善と向上
- 6) 周術期管理の改善と向上

毎年、多くの学会発表、論文発表、司会および講演を行っています。若手医師も積極的に研究発表と論文発表を行ってくれました。熱心に若手指導を行ってくれたスタッフ各位の努力のおかげです。今後もより一層皆で精進していこうと思います。

【2020年度 研究発表業績】

A-0

Kanzaki R, Susaki Y, Takami K, Funakoshi Y, Sakamaki Y, Kodama K, Yokouchi H, Ikeda N, Kadota Y, Iwasaki T, Ose N, Shintani Y : Long-Term Outcomes of Pulmonary metastasectomy for Uterine Malignancies: A Multi-institutional Study in the Current Era . 「 Ann Surg Oncol 」 27 (10) : P 3821 - 3828、2020年10月

Yamamoto Y, Kanzaki R, Ose N, Funakoshi Y, Ikeda N, Takami K, Iwasaki T, Iwazawa T, Yokouchi H, Shiono H, Kodama K, Shintani Y : Lung Cancer Surgery for Patients on Hemodialysis: A Decade of Experience at Multicenter Institutions . 「 Ann Thorac Surg 」 109 (5) : P 1558 - 1565、2020年5月

Katada C, Yokoyama T, Yano T, Oda I, Shimizu Y, Doyama H, Koike T, Takizawa K, Hirao M, Okada H, Yoshii T, Kubota Y, Yamanouchi T, Tsuda T, Omori T, Kobatashi N, Suzuki H, Tanabe S, Hori K, Nakayama N, Kawakubo H, Kakushima N, Matsuo Y, Ishikawa H, Yokoyama A, Muto M : Association between macrocytosis and metachronous squamous cell carcinoma of the esophagus after endoscopic resection in men with early esophageal squamous cell carcinoma . 「 Esophagus 」 17 (2) : P 149 - 158、2020年7月8日

Oda I, Shimizu Y, Yoshio T, Katada C, Yokoyama T, Yano T, Suzuki H, Abiko S, Takemura K, Koike T, Takizawa K, Hirao M, Okada H, Yoshii T, Katagiri A, Yamanouchi T, Matsuo Y, Kawakubo H, Kobayashi N, Shimoda T, Ochiai A, Ishikawa H, Yokoyama A, Muto M : Long-term outcome of endoscopic resection for intramucosal esophageal squamous cell cancer: a secondary analysis of the Japan Esophageal Cohort study . 「 Clinical Trial 」 52 (11) : P 967 - 975、 2020 年 11 月

Hagi T, Kurokawa Y, Kawabata R, Omori T, Matsuyama J, Fujitani K, Hirao M, Akamaru Y, Takahashi T, Yamasaki M, Satoh T, Eguchi H, Doki Y : Multicentre biomarker cohort study on the efficacy of nivolumab treatment for gastric cancer . 「 Br J Cancer 」 123 (6) : P 965 - 972、 2020 年 9 月

Hirao M, Hamakawa T, Nishikawa K, Takami K, Kato T, Miyamoto A, Miyake M, Doi T, Mano M : Distal gastrectomy for early gastric conduit carcinoma after Ivor-Lewis esophagectomy . 「 General Thoracic and Cardiovascular Surgery 」 69 (2) : P 405 - 408、 2021 年 2 月

Iwasaki Y, Terashima M, Mizushima J, Katayama H, Nakamura K, Katai H, Yoshikawa T, Ito S, Kaji M, Kimura Y, Hirao M, Yamada M, Kurita A, Takagi M, Sang-Woong L, Takagane A, Yabusaki H, Hihara J, Boku N, Sano T, Sasako M : Gastrectomy with or without neoadjuvant S-1 plus cisplatin for type 4 or large type 3 gastric cancer (JCOG0501): an open-label, phase 3, randomized controlled trial . 「 Gastric Cancer 」 24 (2) : P 492 - 502、 2021 年 3 月

Yamasaki M, Takiguchi S, Omori T, Hirao M, Imamura H, Fujitani K, Tamura S, Akamaru Y, Kishi K, Fujita J, Hirao T, Demura K, Matsuyama J, Takeno A, Ebisu C, Takachi K, Takayama O, Fukunaga H, Okada K, Adachi S, Fukuda S, Matsuura N, Saito T, Takahashi T, Kurokawa Y, Yano M, Eguchi H, Doki Y : Multicenter Prospective trial of total gastrectomy versus proximal gastrectomy for upper third cT1 gastric cancer . 「 Gastric Cancer 」 24 (2) : P 535 - 543、 2021 年 3 月

Sugimura K, Yamasaki M, Yasuda T, Yano M, Hirao M, Fujitani K, Kimura Y, Miyata H, Motoori M, Takeno A, Shiraishi O, Makino T, Kii T, Tanaka K, Satoh T, Mori M, Doki Y : Long-term results of a randomized controlled trial comparing neoadjuvant Adriamycin, cisplatin, and 5-fluorouracil vs docetaxel, cisplatin, and 5-fluorouracil followed by surgery for esophageal cancer (OGSG1003) . 「 Ann Gastroenterol Surg 」 5 (1) : P 75 - 82、 2020 年 11 月

Kimura Y, Mikami J, Yamasaki M, Hirao M, Imamura H, Fujita J, Takeno A, Matsuyama J, Kishi K, Takiguchi S, Eguchi H, Doki Y : Comparison of 5-year postoperative outcomes after Billroth I and Roux-en-Y reconstruction following distal

gastrectomy for gastric cancer: Results from a multi-institutional randomized controlled trial . 「 Ann Gastroenterol Surg 」 5 (1) : P 1 - 9、 2020 年 8 月

Tamura S, Taniguchi H, Nishikawa K, Imamura H, Fujita J, Takeno A, Matsuyama J, Kimura Y, Kawada J, Hirao M, Hirota M, Fujitani K, Kurokawa Y, Sakai D, Kawakami H, Shimokawa T, Satoh T : A phase II trial of dose-reduced nab-paclitaxel for patients with previously treated, advanced or recurrent gastric cancer (OGSG1302) . 「 Int J Clin Oncol. 」 25 (12) : P 2035 - 2043、 2020 年 12 月

Kobayashi Y, Nishikawa K, Asaoka T, Kato S, Hamakawa T, Yamamoto K, Kobayashi N, Kitakaze M, Maeda S, Uemura M, Miyake M, Hama N, Miyamoto A, Kato T, Miyazaki M, Nakamori S, Mita E, Sekimoto M, Mano M, Hirao M : Retrograde endoscopic submucosal dissection for early thoracic esophageal carcinoma . 「 Clin J Gastroenterol.(E-Pub) 」 2021 年 3 月

Ogata M, Kotaka M, Ogata T, Hatachi Y, Yasui H, Kato T, Tsuji A, Satake H : Regorafenib vs trifluridine/tipiracil for metastatic colorectal cancer refractory to standard chemotherapies: A multicenter retrospective comparison study in Japan . 「 PloS One. 」 15 (6) : P e0234314、 2020 年 6 月 12 日

Kotaka M, Iwamoto S, Satake H, Sakai D, Kudo T, Fukunaga M, Konishi K, Ide Y, Ikumoto T, Tsuji A, Sano Y, Kato T, Sugimoto N, Satoh T, Kanazawa A, Kurata T, Yamanaka T, Tomita N : Evaluation of FOLFOX or CAPOX reintroduction with or without bevacizumab in relapsed colorectal cancer patients treated with oxaliplatin as adjuvant chemotherapy (REACT study) . 「 Int J Clin Oncol. 」 25 (8) : P 1515 - 1522、 2020 年 8 月 25 日

Nose Y, Kagawa Y, Hata T, Mori R, Kawai K, Naito A, Sakamoto T, Murakami K, Katsura Y, Ohmura Y, Masuzawa T, Takeno A, Takeda Y, Kato T, Murata K : Neutropenia is an indicator of outcomes in metastatic colorectal cancer patients treated with FTD/TPI plus bevacizumab: a retrospective study . 「 Cancer Chemother Pharmacol. 」 86 (3) : P 427 - 433、 2020 年 9 月

Hasegawa H, Taniguchi H, Nakamura Y, Kato T, Fujii S, Ebi H, Shiozawa M, Yuki S, Masuishi T, Kato K, Izawa N, Moriwaki T, Oki E, Kagawa Y, Denda T, Nishina T, Tsuji A, Hara H, Esaki T, Nishida T, Kawakami H, Sakamoto Y, Miki I, Okamoto W, Yamazaki K, Yoshino T : FMS-like tyrosine kinase 3 (FLT3) amplification in patients with metastatic colorectal cancer . 「 Cancer Sci 」 112 (1) : P 314 - 322、 2020 年 10 月

Kotaka M, Saito Y, Kato T, Satake H, Makiyama A, Tsuji Y, Shinozaki K, Fujiwara T, Mizushima T, Harihara , Nagata N, Kurihara N, Ando M, Kusakawa G, Sakai T, Uchida Y, Takamoto M, Kimoto S, Hyodo I : A placebo controlled, double blind, randomized study of recombinant thrombomodulin (ART 123) to prevent oxaliplatin induced

peripheral neuropathy . 「 Cancer Chemother Pharmacol. 」 86 (5) : P 607 - 618、
2020 年 11 月

Nakamura Y, Taniguchi H, Ikeda M, Bando H, Kato K, Morizane C, Esaki T, Komatsu Y, Kawamoto Y, Takahashi N, Ueno M, Kagawa Y, Nishina T, Kato T, Yamamoto Y, Furuse J, Denda T, Kawakami H, Oki E, Nakajima T, Nishida N, Yamaguchi K, Yasui H, Goto M, Matsuhashi N, Ohtsubo K, Yamazaki K, Tsuji A, Okamoto W, Tsuchihara K, Yamanaka T, Miki I, Sakamoto Y, Ichiki H, Hata M, Yamashita R, Ohtsu A, Justin I. Odegaard, Yoshino T : Clinical utility of circulating tumor DNA sequencing in advanced gastrointestinal cancer: SCRUM-Japan GI-SCREEN and GOZILA studies. 「 Nature Medicine 」 26 (12) : P 1859 - 1864、2020 年 12 月

Satake H, Kato T, Oba K, Kotaka M, Kagawa Y, Yasui H, Nakamura M, Watanabe T, Matsumoto T, Kii T, Terazawa T, Makiyama A, Takano N, Yokota M, Okita Y, Matoba K, Hasegawa H, Tsuji A, Komatsu Y, Yoshino T, Yamazaki K, Mishima H, Oki E, Nagata N, Sakamoto J : Phase Ib/II Study of Biweekly TAS-102 in Combination with Bevacizumab for Patients with Metastatic Colorectal Cancer Refractory to Standard Therapies (BiTS Study) . 「 Oncologist 」 25 (12) : P 1855 - 1863、2020 年 12 月

Terazawa T, Kato T, Goto M, Ohta K, Noura S, Satake H, Kagawa Y, Kawakami H, Hasegawa H, Yanagihara K, Shingai T, Nakata K, Kotaka M, Hiraki M, Konishi K, Nakae S, Sakai D, Kurokawa Y, Shimokawa T, Satoh T : Phase II Study of Panitumumab Monotherapy in Chemotherapy-naïve Frail or Elderly Patients with Unresectable RAS Wild-Type Colorectal Cancer: OGSF 1602 . 「 Oncologist. 」 26 (1) : P 17 - e47、2021 年 1 月

Kagawa Y, Elena Elez Fernandez, Jesús García-Foncillas, Bando H, Taniguchi H, Ana Vivancos, Akagi K, Ariadna Garcia, Denda T, Javier Ros, Nishina T, Iosune Baraibar, Komatsu Y, Davide Ciardiello, Oki E, Kudo T, Kato T, Yamanaka T, Josep Taberero, Yoshino T: Combined Analysis of Concordance between Liquid and Tumor Tissue Biopsies for RAS Mutations in Colorectal Cancer with a Single Metastasis Site: The METABEAM Study. 「 American Association for Cancer Research(E-Pub) 」 、
2021 年 2 月

Iwase M, Ando M, Aogi K, Aruga T, Inoue K, Shimomura A, Tokunaga E, Masuda N, Yamauchi H, Yamashita T, Iwata H : Long-term survival analysis of addition of carboplatin to neoadjuvant chemotherapy in HER2-negative breast cancer. 「 Breast Cancer Res Treat 」 180(3) : P687-694、2020 年 4 月

Ishiguro H, Masuda N, Sato N, Higaki K, Morimoto T, Yanagita Y, Mizutani M, Ohtani S, Kaneko K, Fujisawa T, Takahashi M, Kadoya T, Matsunami N, Yamamoto Y, Ohno S, Takano T, Morita S, Tanaka-Mizuno S, Toi M : A Randomized Study Comparing Docetaxel/Cyclophosphamide (TC), 5-fluorouracil/epirubicin/cyclophosphamide (FEC)

Followed by TC, and TC Followed by FEC for Patients With Hormone Receptor-Positive HER2-negative Primary Breast Cancer. 「Breast Cancer Res Treat」 180(3) : P715-724、2020年4月

Kawaguchi H, Masuda N, Nakayama T, Aogi K, Anan K, Ito Y, Ohtani S, Sato N, Saji S, Takano T, Tokunaga E, Nakamura S, Hasegawa Y, Hattori M, Fujisawa T, Morita S, Yamaguchi M, Yamashita H, Yamashita T, Yamamoto Y, Yotsumoto D, Toi M, Ohno S : Factors associated with prolonged overall survival in patients with postmenopausal estrogen receptor-positive advanced breast cancer using real-world data: a follow-up analysis of the JBCRG-C06 Safari study. 「Breast Cancer」 27(3) : P389-398、2020年5月

Yamashiro H, Iwata H, Masuda N, Yamamoto N, Nishimura R, Ohtani S, Sato N, Takahashi M, Kamio T, Yamazaki K, Saito T, Kato M, Lee T, Kuroi K, Takano T, Yasuno S, Morita S, Ohno S, Toi M : Outcomes of trastuzumab therapy in HER2-positive early breast cancer patients: extended follow-up of JBCRG-cohort study 01. 「Breast Cancer」 27(4) : P631-641、2020年7月

Takahashi M, Masuda N, Nishimura R, Inoue K, Ohno S, Iwata H, Hashigaki S, Muramatsu Y, Umeyama Y, Toi M : Clinical significance of evaluating hormone receptor and HER2 protein using cell block against metastatic breast cancer: a multi-institutional study. 「Cancer Med」 9(14) : P4929-4940、2020年7月

Saura C, Oliveira M, Feng YH, Dai MS, Chen SW, Hurvitz SA, Kim SB, Moy B, Delaloge S, Gradishar W, Masuda N, Palacova M, Trudeau ME, Mattson J, Yap YS, Hou MF, Laurentiis MD, Yeh YM, Chang HT, Yau T, Wildiers H, Haley B, Fagnani D, Lu YS, Crown J, Lin J, Takahashi M, Takano T, Yamaguchi M, Fujii T, Yao B, Bebcuk J, Keyvanjah K, Bryce R, Brufsky A : Neratinib Plus Capecitabine Versus Lapatinib Plus Capecitabine in HER2-Positive Metastatic Breast Cancer Previously Treated With ≥ 2 HER2-Directed Regimens: Phase III NALA Trial. 「J Clin Oncol」 38(27) : P3138-3149、2020年9月

Yap YS, Chiu J, Ito Y, Ishikawa T, Aruga T, Kim SJ, Toyama T, Saeki T, Saito M, Gounaris I, Su F, Ji Y, Han Y, Gazdciu M, Masuda N : Ribociclib, a CDK 4/6 inhibitor, plus endocrine therapy in Asian women with advanced breast cancer. 「Cancer Sci」 111(9) : P3313-3326、2020年9月

Tsuda M, shiguro H, Toriguchi N, Masuda N, Bando H, Ohgami M, Homma M, Morita S, Yamamoto N, Kuroi K, Yanagita Y, Takano T, Shimizu S, Toi M : Overnight fasting before lapatinib administration to breast cancer patients leads to reduced toxicity compared with nighttime dosing: a retrospective cohort study from a randomized clinical trial. 「Cancer Med」 9(24) : P9246-9255、2020年12月

Cortes J, Cescon DW, Rugo HS, Nowecki Z, Im SA, Md Yusof M, Gallardo C, Lipatov O, Barrios CH, Holgado E, Iwata H, Masuda N, Otero MT, Gokmen E, Loi S, Guo Z, Zhao J, Aktan G, Karantza V, Schmid P : Pembrolizumab plus chemotherapy versus placebo plus chemotherapy for previously untreated locally recurrent inoperable or metastatic triple-negative breast cancer (KEYNOTE-355): a randomised, placebo-controlled, double-blind, phase 3 clinical trial. 「Lancet」 396 : P1817-1828、2020 年 12 月

Takahashi M, Ohtani S, Nagai SE, Takashima S, Yamaguchi M, Tsuneizumi M, Komoike Y, Osako T, Ito Y, Ikeda M, Ishida K, Nakayama T, Takashima T, Asakawa T, Matsumoto S, Shimizu D, Masuda N : The efficacy and safety of pertuzumab plus trastuzumab and docetaxel as a first-line therapy in Japanese patients with inoperable or recurrent HER2-positive breast cancer: the COMACHI study. 「Breast Cancer Res Treat」 185(1) : P125-134、2021 年 1 月

Toi M, Imoto S, Ishida T, Ito Y, Iwata H, Masuda N, Mukai H, Saji S, Shimizu A, Ikeda T, Haga H, Saeki T, Aogi K, Sugie T, Ueno T, Kinoshita T, Kai Y, Kitada M, Sato Y, Jimbo K, Sato N, Ishiguro H, Takada M, Ohashi Y, Ohno S : Adjuvant S-1 plus endocrine therapy for oestrogen receptor-positive, HER2-negative, primary breast cancer: a multicentre, open-label, randomised, controlled, phase 3 trial. 「Lancet Oncol」 22(1) : P74-84、2021 年 1 月

Rugo HS, Huober J, García-Sáenz JA, Masuda N, Hyuk Sohn J, Andre V-AM, Barriga S, Cox J, Goetz M : Management of Abemaciclib-Associated Adverse Events in Patients with Hormone Receptor-Positive, Human Epidermal Growth Receptor 2-Negative Advanced Breast Cancer: Safety Analysis of MONARCH 2 and MONARCH 3. 「Oncologist」 26(1) : e53-e65、2021 年 1 月

Masuda N, Mukai H, Inoue K, Rai Y, Ohno S, Ohtani S, Shimizu C, Hashigaki S, Muramatsu Y, Umeyama Y, Iwata H, Toi M : Analysis of subsequent therapy in Japanese patients with hormone receptor-positive/human epidermal growth factor receptor 2-negative advanced breast cancer who received palbociclib plus endocrine therapy in PALOMA-2 and -3. 「Breast Cancer Res Treat」 28(2) : P335-345、2021 年 3 月

Ohno S, Saji S, Masuda N, Tsuda H, Akiyama F, Kurosumi M, Shimomura A, Sato N, Takao S, Ohsumi S, Tokuda Y, Inaji H, Watanabe T, Ohashi Y : Relationships between pathological factors and long-term outcomes in patients enrolled in two prospective randomized controlled trials comparing the efficacy of oral tegafur-uracil with CMF (N-SAS-BC 01trial and CUBC trial). 「Breast Cancer Res Treat」 Epub

Tanaka K, Masuda N, Hayashi N, Sagara Y, Hara F, Kadoya T, Matsui A, Miyazaki C, Shien T, Tokunaga E, Hayashi T, Niikura N, Maeda S, Komoike Y, Bando H, Kanbayashi C, Iwata H : Clinicopathological predictors of postoperative upstaging to invasive ductal

carcinoma (IDC) in patients preoperatively diagnosed with ductal carcinoma in situ (DCIS) : A multi-institutional retrospective cohort study. 「Breast Cancer」 Epub

Toi M, Inoue K, Masuda N, Iwata H, Sohn J, Park IH, Im SA, Chen SC, Enatsu S, Turner PK, André VAM, Hardebeck MC, Sakaguchi S, Goetz MP, Sledge GW Jr : Abemaciclib in combination with endocrine therapy for East Asian patients with HR+, HER2-advanced breast cancer: MONARCH 2 & 3 trials. 「Cancer Sci」 Epub

Masuda N, Bando H, Yamanaka T, Kadoya T, Takahashi, Nagai SE, Ohtani S, Aruga T, Suzuki E, Kikawa Y, Yasojima H, Kasai H, Ishiguro H, Kawabata H, Morita S, Haga H, Kataoka TR, Uozumi R, Ohno S, Toi M : Eribulin-based neoadjuvant chemotherapy for triple-negative breast cancer patients stratified by homologous recombination deficiency status: a multicenter randomized phase II clinical trial. 「Breast Cancer Res Treat」 Epub

Makiyama A, Sukawa Y, Kashiwada T, Kawada J, Hosokawa A, Horie Y, Tsuji A, Moriwaki T, Tanioka H, Shinozaki K, Uchino K, Yasui H, Tsukuda H, Nishikawa K, Ishida H, Yamanaka T, Yamazaki K, Hironaka S, Esaki T, Boku N, Hyodo I, Muro K : Randomized, Phase II Study of Trastuzumab Beyond Progression in Patients With HER2-Positive Advanced Gastric or Gastroesophageal Junction Cancer: WJOG7112G(T-ACT Study) . 「 Journal of Clinical Oncology 」 38 (17) : P 1919 - 1928、2020年6月

Nishikawa K, Murotani K, Fujitani K, Inagaki H, Akamaru Y, Tokunaga S, Takagi M, Tamura S, Sugimoto N, Shigematsu T, Yoshikawa T, Ishiguro T, Nakamura M, Hasegawa H, Morita S, Miyashita Y, Tsuburaya A, , Sakamoto J, Tsujinaka T : Differences in disease status between patients with progression after first-line chemotherapy versus early lapse after adjuvant chemotherapy who undergo second-line chemotherapy for gastric cancer: Exploratory analysis of the randomized phase III TRICS trial. 「 European Journal of Cancer 」 132 : P 159 - 167、2020年6月

Taberner J, Maria Alsina, Shitara K, Doi T, Mikhail D, Wasat M, Hendrik-Tobias Arkenau Aliaksandr P, Michele G, Catia Faustino, Vera G, Edvard Z, Nishikawa K, Ando T, Şuayib Y, Eric Van Cutsem, Javier S, Donia S, Catherine L, Nadia A, David H. Ilson : Health-related quality of life associated with trifluridine/tipiracil in heavily pretreated metastatic gastric cancer: results from TAGS . 「 Gastric Cancer 」 23 (4) : P 689 - 698、2020年7月

Oshima T, Yoshikawa T, Miyagi Y, Morita S, Yamamoto M, Tanabe K, Nishikawa K, Ito Y, Matsui T, Kimura Y, Yokose T, Hiroshima Y, Aoyama T, Hayashi T, Ogata T, Cho H, Rino Y, Masuda M, Tsuburaya A, Sakamoto J : Biomarker analysis to predict the pathological response to neoadjuvant chemotherapy in locally advanced gastric cancer: An exploratory biomarker study of COMPASS, a randomized phase II trial . 「 Oncotarget 」 11 (30) : P 2906 - 2918、2020年7月

Kurokawa Y, Matsuyama J, Nishikawa K, Takeno A, Kimura Y, Fujitani K, Kawabata R, Makari Y, Terazawa T, Kawakami H, Sakai D, Shimokawa T, Satoh T: Docetaxel plus S-1 versus cisplatin plus S-1 in unresectable gastric cancer without measurable lesions: a randomized phase II trial (HERBIS-3). 「 Gastric Cancer 」 24 (2) : P 428 - 434、2021 年 3 月

Hayashi T, Yoshikawa T, Sakamaki K, Nishikawa K, Fujitani K, Tanabe K, Misawa K, Matsui T, Miki A, Nemoto H, Fukunaga T, Kimura Y, Hihara J: Primary results of a randomized two-by-two factorial phase II trial comparing neoadjuvant chemotherapy with two and four courses of cisplatin/S-1 and docetaxel/cisplatin/S-1 as neoadjuvant chemotherapy for advanced gastric cancer. 「 Ann Gastroenterol Surg 」 4 (5) : P 540 - 548、2020 年 9 月

Endo S, Fujiwara Y, Yamatsuji T, Nishikawa K, Fujitani K, Ikenaga M, Kawada J, Okamoto Y, Kubota H, Higashida M, Ueno T: Is it Necessary to Confirm Negative Margins in Gastrectomy for Peritoneal Lavage Cytology-positive Gastric Cancer. 「 Anticancer Res 」 40 (10) : P 5807 - 5813、2020 年 10 月

Fujitani K, Shitara K, Takashima A, Koeda K, Hara H, Nakayama N, Hironaka S, Nishikawa K, Kimura Y, Amagai K, Hosaka H, Komatsu Y, Shimada K, Kawabata R, Ohdan H, Kodera Y, Nakamura M, Nakajima TE, Miyata Y, Moriwaki T, Kusumoto T, Nishikawa K, Ogata K, Shimura M, Morita S, Koizumi W. : Effect of early tumor response on the health-related quality of life among patients on second-line chemotherapy for advanced gastric cancer in the ABSOLUTE trial . 「 Gastric Cancer 」 24 (2) : P 467 - 476、2021 年 3 月

Yamaguchi T, Takashima A, Nagashima K, Terashima M, Aizawa M, Ohashi M, Tanaka R, Yamada T, Kinoshita T, Matsushita H, Ishiyama K, Hosoda K, Yuasa Y, Haruta S, Kakihara N, Nishikawa K, Yunome G, Satoh T, Fukagawa T, Katai H, Boku N. : Impact of preoperative chemotherapy as initial treatment for advanced gastric cancer with peritoneal metastasis limited to positive peritoneal lavage cytology (CY1) or localized peritoneal metastasis (P1a): a multi-institutional retrospective study. 「 Gastric Cancer(E-Pub) 」 、2020 年 11 月

Endo S, Nishikawa K, Ikenaga M, Fujitani K, Kawada J, Yamatsuji T, Kubota H, Higashida M, Fujiwara Y, Ueno T: Prognostic factors for cytology-positive gastric cancer: a multicenter retrospective analysis. 「 Int J Clin Oncol(E-Pub) 」 、2021 年 2 月

Kawazoe A, Ando T, Hosaka H, Fujita J, Koeda K, Nishikawa K, Amagai K, Fujitani K, Ogata K, Watanabe K, Yamamoto Y, Shitara K.: Safety and activity of trifluridine/tipiracil and ramucirumab in previously treated advanced gastric cancer: an

open-label, single-arm, phase 2 trial. 「Lancet Gastroenterol Hepatol.」6(3): P 209 - 217、2021年3月

Otani Y, Mori K, Morikawa N, Mizutani M, Yasojima H, Masuyama M, Mano M, Masuda N: Rechallenge of anti-PD-1/PD-L1 antibody showed a good response to metastatic breast cancer: a case report. 「Immunotherapy」13(3): P189-194、2021年2月

Miyo M, Kato T, Takahashi Y, Miyake M, Toshiyama R, Hamakawa T, Sakai K, Nishikawa K, Miyamoto A, Hirao M: Short-term and long-term outcomes of laparoscopic colectomy with multivisceral resection for surgical T4b colon cancer: Comparison with open colectomy. 「Ann Gastroenterol Surg」4(6): P 676 - 683、2020年7月

Miyo M, Kato T, Yoshino T, Yamanaka T, Bando H, Satake H, Yamazaki K, Taniguchi H, Oki E, Kotaka M, Oba K, Miyata Y, Muro K, Komatsu Y, Baba H, Tsuji A: Protocol of the QUATTRO-II study: a multicenter randomized phase II study comparing CAPOXIRI plus bevacizumab with FOLFOXIRI plus bevacizumab as a firstline treatment in patients with metastatic colorectal cancer. 「BMC Cancer」20(1): P 687、2020年7月

Ichihara M, Ikeda M, Uemura M, Miyake M, Miyazaki M, Kato T, Sekimoto M: Feasibility and safety of laparoscopic lateral pelvic lymph node dissection for locally recurrent rectal cancer and risk factors for re-recurrence. 「Asian J Endosc Surg」13(4): P 489 - 497、2020年10月

Kusunoki C, Hamakawa T, Nishikawa K, Sato H, Imamura S, Miyahara S, Sakano Y, Miyazaki H, Seto H, Ueda R, Toshiyama R, Miyo M, Takahashi Y, Sakai K, Miyake M, Miyamoto A, Kato T, Mori K, Hirao M: Hybrid approach with laparoscopic wall-inversion surgery and single-incision intragastric surgery for intraluminal gastrointestinal stromal tumor: A case report. 「Asian Journal of Endoscopic Surgery (E-Pub)」、2021年2月

Ciruelos EM, Y Ciruelos EM, Rugo HS, Mayer IA, Levy C, Forget F, Delgado-Mingorance JI, Safra T, Masuda N, Park YH, Juric D, Conte P, Campone M, Loibl S, Iwata H, Zhou X, Park J, Ridolfi A, Lorenzo I, André F: Patient-Reported Outcomes in Patients With PIK3CA-Mutated Hormone Receptor-Positive, Human Epidermal Growth Factor Receptor 2-Negative Advanced Breast Cancer From SOLAR-1. 「J Clin Oncol」Epub

A-1

西川和宏: 進行・再発胃癌治療レジメン生存期間延長の薬剤選択: P. 1 - 63、医学と看護社、2020年11月5日

A-2

宮崎道彦、山田真美、田中玲子：直腸・肛門の性感染症「別冊日本臨床領域別症候群シリーズ No.10 消化管症候群（第3版）Ⅱ.日本臨床」：P. 275 - 278、2020年

宮崎道彦：裂肛 CQ-1「肛門疾患・直腸脱診療ガイドライン」P. 69 - 71、2020年

宮崎道彦：ガイドラインに則った慢性便秘症の対応「Gノート3」：P. 489 - 495、2020年

A-3

増田慎三：5.術後化学療法「乳腺腫瘍学 第3版」P.251-258、2020年4月

増田慎三：I .Capecitabine を用いた乳癌周術期臨床試験「癌と化学療法」47(12)：P.1673-1677、2020年12月

酒井健司、大橋朋史、原修一郎、大澤日出樹、井出義人、野呂浩史、平尾隆文、岩崎輝夫、畑中信良、山崎芳郎：若年ベトナム人に発症した Fibrolamellar Hepatocellular Carcinoma の1切除例「癌と化学療法」47(13)：P. 2326 - 2328、癌と化学療法社、2020年12月

酒井健司、大橋朋史、原修一郎、大澤日出樹、井出義人、野呂浩史、平尾隆文、畑中信良、山崎芳郎、筒井建紀：後腹膜腫瘍と卵巣成熟奇形種に対して腹腔鏡下に同時切除し得た1例「癌と化学療法」47(13)：P. 2329 - 2331、癌と化学療法社、2020年12月

植田隆太、今裕史、和久井洋佑、阪田敏聖、蔵谷大輔、武田圭佐、小池雅彦、鈴木昭：大腸癌術後にポリスチレンスルホン酸カルシウムが原因で吻合部潰瘍を来した1例「日本消化器外科学会雑誌」53(12)：P. 985 - 991、2020年6月

佐藤広陸、藤原綾子、植村守、三宅正和、平尾素宏、高見康二：成人 Bochdalek 孔ヘルニア術後に腸回転異常症による腸閉塞を発症した1例「日外科系連合会誌」46(1)：P. 102 - 109、2021年2月

宮崎葉月、浅岡忠史、花木武彦、岩上佳史、秋田裕史、野田剛広、後藤邦仁、小林省吾、川崎柱輔、森井英一、土岐祐一郎、江口英利：経過観察中に浸潤癌の合併を認めた胆管内乳頭状腫瘍の1切除例「日本胆道学会雑誌」34(4)：P. 748 - 757、2020年5月

宮原 智、高橋佑典、三代雅明、三宅正和、俊山礼志、浜川卓也、酒井健司、西川和宏、宮本敦史、加藤健志、平尾素宏：結腸癌イレウス加療中にイレウス管が誘因となった腸重積の1例「日外科系連合会誌」45(6)：P. 817 - 824、2020年12月30日

A-6

平尾素宏：手術（外科治療）まず、知っておきたいこと「がん情報サービス」
2020年

平尾素宏：新型コロナとがん診療「毎日新聞医療コラム」、2020年11月25日

増田慎三：「テセントリク適正使用ガイド（乳癌編）HPS改訂版」中外製薬株式会社、2020年4月

増田慎三：監修「乳がんのサポートィブ・ケア」第一三共株式会社、2020年4月

増田慎三：監修「CT-P6をお使いの患者様へ-COVID-19に関する注意点」セルトリオン・ヘルスケア・ジャパン株式会社、2020年9月

増田慎三：監修「アバスチンエビデンスブック」中外株式会社、2021年1月

B-1

Shien T, Tsuda H, Sasaki K, Mizusawa J, Akiyama F, Kurosumi M, Sawaki M, Tamura N, Tanaka K, Takahashi M, Hayashi N, Mukai H, Masuda N, Iwata H. Evaluation of pathological complete response (pCR) after neoadjuvant chemo-radiation therapy for primary breast cancer (JCOG0306A1). ESMO Asia Virtual Congress 2020, WEB開催, 2020年11月20日

Md Yusof M, Cescon DW, Rugo HS, Im SA, Gallardo C, Lipatov O, Barrios CH, Holgado E, Iwata H, Masuda N, Gokmen E, Loi S, Guo Z, Jensen E, Aktan G, Karantzis V, Schmid P, Cortes J. Phase III KEYNOTE-355 study of pembrolizumab (pembro) vs placebo (pbo) + chemotherapy (chemo) for previously untreated locally recurrent inoperable or metastatic triple-negative breast cancer (TNBC): Results for patients (Pts) enrolled in Asia. ESMO Asia Virtual Congress 2020, WEB開催, 2020年11月20日

Huang C, Toi M, Im Y, Iwata H, Sohn J, Wang H, Masuda N, Im S, Lu Y, Haddad N, Sakaguchi S, Hurt K, Neven P, Llombart-Cussac A, Sledge G. Abemaciclib plus fulvestrant in East Asian women with HR+, HER2- advanced breast cancer: Overall survival from MONARCH 2. ESMO Asia Virtual Congress 2020, WEB開催, 2020年11月21日

Dai MS, Feng YH, Chen SW, Masuda N, Sangai T, Yau T, Kwong A, Ngan R, Yap YS, Ang PCS, Ow S, Lee KS, Kim SB, Chung HC, Keyvanjah K, Bebachuk J, Chen MJ. Neratinib + capecitabine (N+C) vs lapatinib + capecitabine (L+C) in Asians with HER2+ metastatic breast cancer (MBC) previously treated with two or more HER2-directed regimens: A Pan-Asian analysis of the phase III NALA trial. ESMO Asia Virtual Congress 2020, WEB開催, 2020年11月21日

Rugo HS, Schmid P, Cescon DW, Nowecki Z, Im SA, Md Yusof M, Gallardo C, Lipatov O, Barrios CH, Perez-Garcia J, Iwata H, Masuda N, Otero MT, Gokmen E, Loi S, Guo Z, Zhao J, Karantza V, Aktan G, Cortes J. Additional efficacy endpoints from the phase 3 KEYNOTE-355 study of pembrolizumab plus chemotherapy vs placebo plus chemotherapy as first-line therapy for locally recurrent inoperable or metastatic triple-negative breast cancer. San Antonio Breast Cancer Symposium 2020, WEB 開催, 2020年12月10日

Rugo HS, Schmid P, Cescon DW, Nowecki Z, Im SA, Md Yusof M, Gallardo C, Lipatov O, Barrios CH, Perez-Garcia J, Iwata H, Masuda N, Otero MT, Gokmen E, Loi S, Guo Z, Zhao J, Karantza V, Aktan G, Cortes J. Additional efficacy endpoints from the phase 3 KEYNOTE-355 study of pembrolizumab plus chemotherapy vs placebo plus chemotherapy as first-line therapy for locally recurrent inoperable or metastatic triple-negative breast cancer. Miami Breast Cancer Conference, WEB 開催, 2021年3月4日

B-2

Iwasa S, Takahashi S, Hirao M, Kato K, Shitara K, Sato Y, Hamakawa T, Horinouchi H, Tahara M, Chin K, Mizutani M, Suzuki T, Takase T, Matsunaga R, Mukohara T : Effect of Infusion Rate, Premedication, and Prophylactic Peg-filgrastim Treatment on the Safety of the Liposomal Formulation of Eribulin (E7389-LF): Results From the Expansion Part of a Phase 1 Study . ESMO Virtual Congress 2020 , WEB 開催, 2020年9月19日-21日

Kotaka M, Manaka D, Eto T, Hasegawa J, Takagane A, Nakamura M, Kato T, Munemoto Y, Nakamura F, Bando H, Taniguchi H, Gamoh M, Shiozawa M, Nishi M, horiuchi T, Mizushima T, Yamanaka T, Yoshino T, Ohtsu A, Mori M: Association of postoperative serum carcinoembryonic antigen (CEA) with disease-free survival in patients with stage III colon cancer: ACHIEVE phase III randomized clinical trial. ASCO20 Virtual , WEB 開催, 2020年5月29日-31日

Yuki S, Bando H, Tsukada Y, Inamori K, Komatsu Y, Homma S, Uemura M, Kato T, Kotani D, Fukuoka S, Nakamura N, Fukui M, Wakabayashi M, Kojima M, Togashi Y, Sato A, Nishikawa H, Ito M, Yoshino T: Short-term results of VOLTAGE-A: Nivolumab monotherapy and subsequent radical surgery following preoperative chemoradiotherapy in patients with microsatellite stable and microsatellite instability-high locally advanced rectal cancer. ASCO20 Virtual , WEB 開催, 2020年5月29日-31日

Inamori K, Togashi Y, Bando H, Tsukada Y, Suzuki A, Suzuki Y, Kotani D, Fukuoka S, Kojima M, Fukui M, Yuki S, Komatsu Y, Homma S, Uemura M, Kato T, Ito M, Nishikawa H, Yoshino T: Translational research of voltage-A1: Efficacy predictors of preoperative chemoradiotherapy and subsequent nivolumab monotherapy in patients

with microsatellite-stable locally advanced rectal cancer. ASCO20 Virtual , WEB 開催, 2020 年 5 月 29 日-31 日

Nakamura Y, Taniguchi H, Bando H, Esaki T, Komatsu Y, Kato K, Takahashi N, Kagawa Y, Kato T, Nishina T, Satoh T, Oki E, Sunakawa Y, Shiozawa M, Yamamoto Y, Kawakami H, chi Denda T, Ohtsu A, Yoshino T : Utility of circulating tumor DNA (ctDNA) versus tumor tissue genotyping for enrollment of patients with metastatic colorectal cancer (mCRC) to matched clinical trials: SCRUM-Japan GI-SCREEN and GOZILA combined analysis. ASCO20 Virtual , WEB 開催, 2020 年 5 月 29 日-31 日

Kato T, Ikeda M, Ikeda A, Hasegawa J, Ota H, Shingai T, Yasui M, Fujii H, Miyake Y, Uemura M, Matsuda C, Satoh T, Mizushima T, Doki Y, Eguchi H: Postoperative XELOX therapy for patients with curatively resected high-risk stage II and stage III rectal cancer without preoperative chemoradiation: A prospective, multicenter, open-label, single arm phase II study. ASCO20 Virtual , WEB 開催, 2020 年 5 月 29 日-31 日

Yamanaka T, Yoshino T, Kotaka M, Manaka D, Shiozawa M, Sakamoto Y, Munemoto Y, Eto T, Shitara K, Kato T, Shiomi A, Hasegawa J, Makiyama A, Takagane A, Nakamura M, Oki E, Yamazaki K, Mizushima T, Sunami E, Ohtsu A, Maehara Y, Mori M : Relative impact of T4 and N2 on the efficacy of 3 versus 6 months of adjuvant CAPOX for high-risk stage II and stage III colon cancer:ACHIEVE and ACHIEVE-2 trials . ESMO GI , WEB 開催, 2020 年 7 月 1 日 日

A. Grothey, J. Tabernero, J. Taieb, R. Yaeger, Yoshino T, E. Maiello, E. Elez Fernandez, A. Ruiz Casado, P. Ross, T. André, Kato T, J. Ruffinelli, J. Graham, M. Van den Eynde, R. Vera, B. Jean, E. Carriere Roussel, C. Cahuzac, Z. Issiakhem, J. Vedovato, E. Van Cutsem : ANCHOR CRC: a single-arm, phase 2 study of encorafenib, binimetinib plus cetuximab in previously untreated BRAF V600E mutant metastatic colorectal cancer . ESMO GI , WEB 開催, 2020 年 7 月 1 日

Yukami H, Mishima S, Kotani D, Oki E, Taniguchi H, Nakamura Y, Kato T, Takemasa I, Yamanaka T, Shirasu H, Sawada K, Ebi H, A. Aleshin, P. Billings, M. Rabinowitz, Mori M, Yoshino T : Prospective observational study monitoring circulating tumor DNA in resectable colorectal cancer patients undergoing radical surgery: GALAXY study in CIRCULATE-Japan (trial in progress) . ESMO GI , WEB 開催, 2020 年 7 月 1 日

Ando T, Ito K, Yuki S, Saito R, Nakano S, Nakatsumi H, Kawamoto Y, Dazai M, Miyashita K, Hatanaka K, Harada K, Miyagishima T, Hisai H, Ishiguro A, Ueda A, Kato T, Sasaki T, Shindo Y, Yokota I, Takagi R, Sakata Y, Komatsu Y : HGCSG1902: Multicenter, prospective, observational study for cases with dysgeusia caused by chemotherapy for gastrointestinal cancer . ESMO GI , WEB 開催, 2020 年 7 月 1 日

Kagawa Y, E. Elez Fernandez, J. Garcia-Foncillas, H. Bando, Taniguchi H, A. Vivancos, Akagi K, A. Garcia, Denda T, J. Ros, Nishina T, I. Baraibar, Komatsu Y, D. Ciardiello, Oki E, Satoh T, Kato T, Yamanaka T, J. Tabernero, Yoshino T: METABEAM study: Combined analysis of concordance studies between liquid and tissue biopsies for RAS mutations in colorectal cancer patients with single metastatic sites. ESMO GI, WEB 開催, 2020年7月1日

Nakajima H, Kotani D, Oki E, Kato T, Shinozaki E, Sunakawa Y, Bando H, Yamazaki K, Yuki S, Yoshino T, Yamanaka T, Ohta T, Taniguchi H, Kagawa Y: REMARRY and PURSUIT trials: Liquid biopsy-guided re-challenge of anti-EGFR monoclonal antibody for patients with RAS/BRAF V600E wild-type metastatic colorectal cancer. ESMO GI, WEB 開催, 2020年7月1日

Yuki S, Bando H, Tsukada Y, Inamori K, Komatsu Y, Homma S, Uemura M, Kato T, Kotani D, Fukuoka S, Nakamura N, Fukui M, Wakabayashi M, Kojima M, Sato A, Togashi Y, Nishikawa H, Ito M, Yoshino T: Short-term results of VOLTAGE-A: Nivolumab monotherapy and subsequent radical surgery following preoperative chemoradiotherapy in patients with microsatellite stability and microsatellite instability-high, locally advanced rectal cancer (EPOC1504). ESMO GI, WEB 開催, 2020年7月1日

Yoshino T, Kotaka M, Manaka D, Eto T, Hasegawa J, Takagane A, Nakamura M, Kato T, Munemoto Y, Nakamura F, Bando H, Taniguchi H, Sakamoto Y, Shiozawa M, Nishi M, Horiuchi T, Mizushima T, Yamanaka T, Ohtsu A, Mori M: OS and long-term DFS with 3- vs. 6-month adjuvant oxaliplatin and fluoropyrimidine-based therapy for stage III colon cancer patients: A randomized phase III ACHIEVE trial. ESMO Virtual, WEB 開催, 2020年9月18日

Hamaguchi T, Shimada Y, Mizusawa J, Kanemitsu Y, Shiomi A, Komori K, Ohue M, Watanabe J, Takiguchi N, Nishizawa Y, Takii Y, Ojima H, Funakoshi T, Kato T, Kobatake T, Yamaguchi T, Takashima A, Katayama H, Fukuda H: Six-year updated results of Japan Clinical Oncology Group study (JCOG0910): Randomized phase III study of adjuvant chemotherapy with S-1 versus capecitabine in patients with stage III colorectal cancer. ESMO Virtual, WEB 開催, 2020年9月17日

Yukami H, Saori M, Kotani D, Oki E, Taniguchi H, Nakamura Y, Kato T, Takemasa I, Yamanaka T, Shirasu H, Sawada K, Ebi H, A. Aleshin, P. Billings, Mori M, Yoshino T: Prospective observational study monitoring circulating tumour DNA in resectable colorectal cancer patients undergoing radical surgery: GALAXY study in CIRCULATE-Japan. ESMO Asia Virtual 2020, WEB 開催, 2020年11月22日

Oki E, Kotaka M, Manaka D, Shiozawa M, Sakamoto Y, Munemoto Y, Eto T, Shitara K, Kato T, Shiomi A, Hasegawa J, Makiyama A, Yamanaka T, Mizushima T, Yamazaki

K, Sunami E, Ohtsu A, Maehara Y, Mori M, Yoshino T: Clinicopathological characteristics and impact on efficacy of three versus six months of adjuvant chemotherapy in early-onset colon cancer: ACHIEVE and ACHIEVE-2 trials. ASCO GI2021 , WEB 開催, 2021 年 1 月 15 日-17 日

Yasuda A, Matsuyama J, Terazawa T, Goto M, Kawabata R, Endo S, Imano M, Fujita S, Akamaru Y, Taniguchi H, Tatsumi M, Sang-Woong Lee, Kawakami H, Kurokawa Y, Shimokawa T, Sakai D, Kato T, Fujitani K, Satoh T: A phase II study of perioperative capecitabine plus oxaliplatin for clinical SS/SE N1-3 M0 gastric cancer (OGSG1601). ASCO GI2021 , WEB 開催, 2021 年 1 月 15 日-17 日

Yoshino T, Uetake H, Tsuchihara K, Shitara K, Yamazaki K, Watanabe J, Oki E, Sato T, Naitoh T, Komatsu Y, Kato T, Mori I, Yamanaka K, Hihara M, Soeda J, Yamanaka T, Akagi K, Ochiai A, Muro K: PARADIGM study: A multicenter, randomized, phase III study of mFOLFOX6 plus panitumumab or bevacizumab as first-line treatment in patients with RAS (KRAS/NRAS) wild-type metastatic colorectal cancer. ASCO GI2021 , WEB 開催, 2021 年 1 月 15 日-17 日

Bando H, Kotani D, Kotaka M, Kawazoe A, Masuishi T, Satake H, Taniguchi H, Yamazaki K, Yamanaka T, Oki E, Yoshino T, Muro K, Komatsu Y, Kato T, Tsuji A: Quadruplet regimen with capecitabine, irinotecan, oxaliplatin, and bevacizumab in chemo-naïve patients with metastatic colorectal cancer: Results from the safety lead-in of QUATTRO-II study. ASCO GI2021 , WEB 開催, 2021 年 1 月 15 日-17 日

Inamori K, Togashi Y, Bando H, Tsukada Y, Fukuoka S, Suzuki A, Suzuki Y, Kotani D, Kojima M, Fukui M, Yuki S, Komatsu Y, Homma S, Taketomi A, Uemura M, Kato T, Ito M, Nishikawa H, Yoshino T: Translational research of VOLTAGE-A: Efficacy predictors of preoperative chemoradiotherapy and consolidation nivolumab in patients with both microsatellite stable and microsatellite instability-high locally advanced rectal cancer. ASCO GI2021 , WEB 開催 , 2021 年 1 月 15 日-17 日

Kosaka H, Nishimura Y, Kaneda A, Masuda N, Tamura K, Saji S, Iwata H, Mori K. 2913 / 3 - Entinostat (KHK2375), class I histone deacetylase inhibitor, regulates human Treg function by decreasing Foxp3 expression and effector Treg population. AACR Annual Meeting 2020, WEB 開催, 2020 年 6 月 22 日

Masuda N, Hurvitz S, Vahdat L, Harbeck N, Wolff AC, Tolaney SM, Loi S, O'Shaughnessy J, Xie D, Walker L, Rustia E, Borges VF. HER2CLIMB-02: A randomized, double-blind, phase III study of tucatinib or placebo with T-DM1 for unresectable locally-advanced or metastatic HER2+ breast cancer. ESMO Asia Virtual Congress 2020, WEB 開催, 2020 年 11 月 22 日

Masuda N, Ohsumi S, Nishimura R, Akashi-Tanaka S, Suemasu K, Yamauchi H,

Tokunaga E, Ikeda T, Nishi T, Hayashi H, Iino Y, Takatsuka Y, Inaji H. Combined analysis of the WORTH 1 and WORTH 2 studies of ipsilateral breast tumor recurrence after breast conservative surgery without radiotherapy using the “5-mm thick slice and 5-mm free margin method”. San Antonio Breast Cancer Symposium 2020, WEB 開催, 2020 年 12 月 9 日

Krop I, Yonemori K, Takahashi S, Inoue K, Nakayama T, Iwata H, Toyama T, Yamamoto Y, Takahashi M, Osaki A, Saji S, Sagara Y, O'Shaughnessy J, Traina T, Ohwada S, Qi Z, Qiu Y, Onuma H, Sharma O, Mekan S, Masuda N. Safety and efficacy results from the phase 1/2 study of U3-1402, a human epidermal growth factor receptor 3 (HER3)-directed antibody drug conjugate (ADC), in patients with HER3-expressing metastatic breast cancer (MBC). San Antonio Breast Cancer Symposium 2020, WEB 開催, 2020 年 12 月 9 日

Masuda J, Tsurutani J, Masuda N, Tanabe Y, Iwasa T, Takahashi M, Futamura M, Matsumoto K, Aogi K, Iwata H, Hosonaga M, Mukohara T, Yoshimura K, Takano T. Phase II study of nivolumab in combination with abemaciclib plus endocrine therapy in patients with HR+, HER2- metastatic breast cancer: WJOG11418B NEWFLAME trial. San Antonio Breast Cancer Symposium 2020, WEB 開催, 2020 年 12 月 9 日

Ozaki Y, Kitano S, Tsurutani J, Iwasa T, Takahashi M, Mukohara T, Masuda N, Futamura M, Minami H, Matsumoto K, Kawabata H, Yamashita M, Yoshimura K, Takano T. Immunological analysis of the combination therapy of nivolumab, paclitaxel and bevacizumab in patients with HER2-negative MBC in NEWBEAT trial (WJOG9917BTR). San Antonio Breast Cancer Symposium 2020, WEB 開催, 2020 年 12 月 9 日

Iwatani T, Hara F, Shien T, Takahashi M, Masuda N, Yasojima H, Sagara Y, Mizutani T, Sasaki K, Nakamura K, Fukuda H, Shirowa T, Iwata H. Estimation of willingness-to-pay for breast cancer treatments through contingent valuation method in Japanese breast cancer patients (JCOG1709A); preliminary study findings. San Antonio Breast Cancer Symposium 2020, WEB 開催, 2020 年 12 月 9 日

Hurvitz S, Vahdat L, Harbeck N, Wolff AC, Tolaney SM, Loi S, Masuda N, O'Shaughnessy J, Dong C, Walker L, Rustia E, Borges VF. HER2CLIMB-02: A randomized, double-blind, phase 3 study of tucatinib or placebo with T-DM1 for unresectable locally-advanced or metastatic HER2+ breast cancer. San Antonio Breast Cancer Symposium 2020, WEB 開催, 2020 年 12 月 9 日

Yamamoto Y, Iwata H, Naruto T, Masuda N, Takahashi M, Yoshinami T, Ueno, Toyama T, Yamanaka T, Takano T, Kashiwaba M, Tsugawa K, Hasegawa Y, Tamura K, Tada K, Hara F, Saji S, Morita S, Toi M, Ohno S. A randomized, open-label, phase III trial of pertuzumab re-treatment in HER2-positive, locally advanced/metastatic breast cancer patients previously treated with pertuzumab, trastuzumab, and chemotherapy: The Japan

Breast Cancer Research Group-M05 (PRECIOUS) study. San Antonio Breast Cancer Symposium 2020, WEB 開催, 2020 年 12 月 10 日

Kashiwaba M, Nakayama T, Sangai T, Morimoto T, Yasojima H, Yamamoto Y, Ohno S, Masuda N. A randomized phase II trial of interventions with frozen groves and compression stockings to prevent nab-paclitaxel induced chemotherapy-induced peripheral neuropathy (SPOT trial). San Antonio Breast Cancer Symposium 2020, WEB 開催, 2020 年 12 月 9 日

B-3

高見康二、神崎 隆、須崎剛行、船越康信、坂巻 靖、児玉 憲、横内秀起、池田直樹、門田嘉久、岩崎輝雄、大瀬奈緒子、新谷 康：子宮悪性腫瘍肺転移に対する肺切除の治療成績。第 82 回日本臨床外科学会総会、WEB 開催、2020 年 10 月 29 日-31 日

平尾素宏、永妻佑季子、浜川卓也、西川和宏、西園博章、内藤裕子、高見康二、加藤健志、宮本敦史、増田慎三、濱直樹、三宅正和、高橋佑典、三代雅明、俊山礼志、八十島宏行、水谷麻紀子、藤原綾子、大谷陽子：上部消化管悪性疾患患者にたいする術前栄養・運動療法導入の試み。第 120 回日本外科学会定期学術集会 WEB 開催、2020 年 8 月 14 日

小高雅人、間中大、江頭徹哉、長谷川順一、高金明典、中村将人、加藤健志、宗本義則、中村文隆、伴登宏行、山中竹春、水島恒和、吉野孝之、大津 敦、森 正樹：stageⅢ結腸癌患者における術後血清 CEA と無病生存期間(DFS)の関連性:ACHIEVE 試験より。第 58 回日本癌治療学会学術集会、京都、2020 年 10 月 22 日

加藤健志、坂東英明、植村 守、小松嘉人、本間重紀、塚田祐一郎、伊藤雅昭、吉野孝之：マイクロサテライト不安定性のない(MMS)切除可能直腸癌症例に対する術前化学放射線療法(CRT)後の逐次治療としてのニボルマブ(nivo)療法の検討 VOLTAGE 試験。第 75 回日本大腸肛門病学会学術集会、WEB 開催、2020 年 11 月 13 日-14 日

加藤健志：切除不能大腸癌に対する免疫チェックポイント阻害剤の役割。JDDW2020KOBE サテライトシンポジウム、神戸、2020 年 11 月 7 日

増田慎三：乳癌臨床研究の up to date2020。第 32 回日本内分泌外科学会総会、WEB 開催、2020 年 9 月 18 日

Ozaki Y, Mukohara T, Tsurutani J, Takahashi M, Matsumoto K, Futamura M, Masuda N, Kitano S, Yoshimura K, Minami H, Takano T. A multicenter Phase II study evaluating the efficacy of nivolumab plus paclitaxel plus bevacizumab triple-combination therapy as a first-line treatment in patients with HER2-negative metastatic breast cancer:

WJOG9917B NEWBEAT trial. 第 28 回日本乳癌学会学術総会、WEB 開催、2020 年 10 月 9 日

大谷彰一郎、佐治重衡、長谷川善枝、藤澤知巳、柏葉匡寛、石田孝宣、山本 豊、石川 孝、永井成勲、芳林浩史、松本光史、相良安昭、北田正博、高野利美、高田正泰、増田慎三、平 成人、森田智視、大野真司、戸井雅和：進行乳癌に対する wPTX+BV 導入療法後のホルモン維持療法の有用性; JBCRG BOOSTER 試験。第 28 回日本乳癌学会学術総会、WEB 開催、2020 年 10 月 14 日

高橋將人、増田慎三、吉波哲大、八十島宏行、橘高信義、大谷彰一郎、金昇晋、倉上弘幸、山本尚子、山田知美、高田武彦、中山貴寛：HER2 陽性転移性乳癌における T-DM1 治療直後の薬物療法の有効性; KBCSG-TR1917 観察研究。第 28 回日本乳癌学会学術総会、WEB 開催、2020 年 10 月 14 日

杉江知治、井本滋、石田孝宣、伊藤良則、岩田広治、増田慎三、向井博文、佐治重衡、清水章、池田隆文、芳賀博典、佐伯俊昭、青儀健二郎、上野貴之、木下貴之、甲斐裕一郎、北田正博、大橋靖雄、大野真司、戸井雅和：ホルモン受容体陽性乳癌の術後内分泌療法における S-1 の併用効果 (POTENT 試験)。第 28 回日本乳癌学会学術総会、WEB 開催、2020 年 10 月 14 日

岩谷胤生、原文堅、枝園忠彦、高橋將人、増田慎三、相良安昭、佐々木啓太、白岩健、岩田広治：日本人乳癌患者が考える生命や健康に対する金銭的価値を検証する前向き観察研究; JCOG1709A-プレ調査結果。第 28 回日本乳癌学会学術総会、WEB 開催、2020 年 10 月 14 日

増田慎三：原発性 HER2 陽性乳癌の最適ストラテジー2020。第 82 回日本臨床外科学会、WEB 開催、2020 年 10 月 29 日

山中隆司、藤澤孝夫、内藤陽一、服部正也、増田慎三、山下年成、能澤一樹、深澤陽子、八十島宏行、松原由佳、向原 徹、大谷陽子、洞澤智至、倉本尚美、坂本泰理、中村能章、谷口浩也、吉野孝之、岩田広治：Genomic Landscape of Circulating Tumor DNA (ctDNA) in Patients with Advanced Breast Cancer: SCRUM-Japan MONSTAR-SCREEN。第 18 回日本臨床腫瘍学会学術集会、WEB 開催、2021 年 2 月 19 日

遠山竜也、山本豊、岩田広治、高橋將人、吉波哲大、上野貴之、山中隆司、高野利実、柏葉匡寛、増田慎三、津川浩一郎、長谷川善枝、田村研治、多田寛、平成人、原文堅、佐治重衡、森田智視、戸井雅和、大野真司：PRECIOUS: Pertuzumab re-treatment for HER2-positive locally advanced/metastatic breast cancer (JBCRG-M05)。第 18 回日本臨床腫瘍学会学術集会、WEB 開催、2021 年 2 月 20 日

増田慎三、向原徹、小野麻紀子、平尾素宏、下井辰徳、小島隆嗣、佐藤靖祥、八十島宏行、米盛勸、後藤功一、高橋俊二、鈴木拓也、奥村詩織、永井玲子、高瀬

貴夫、田村研治：Phase 1 Expansion Study of Liposomal Formulation of Eribulin (E7389-LF) for Solid Tumors: Focus on Breast Cancer。第 18 回日本臨床腫瘍学会学術集会、WEB 開催、2021 年 2 月 21 日

西川和宏、小泉和三郎、円谷彰、山中竹春、森田智視、藤谷和正、赤丸祐介、嶋田颯、保坂尚志、中山昇典、辻仲利政、坂本純一：切除不能胃癌二次化学療法における CPT-11 + CDDP 併用療法と CPT-11 単独療法とを比較する 2 つのランダム化試験の統合解析。第 120 回日本外科学会定期学術集会、WEB 開催、2020 年 8 月 14 日

Yasojima H, Takano T, Masuda N, Hattori M, Tsugawa K, Inoue K, Matsumoto K, Ohtani S, Ishikawa T, Yamamoto K, Nohata N, Karantza V, Cortes J, Iwata H. Pembrolizumab + Chemotherapy vs Chemotherapy in Metastatic TNBC: KEYNOTE-355 Japanese Subgroup Data. 第 28 回日本乳癌学会学術総会、WEB 開催、2020 年 10 月 14 日

池田雅彦、中山貴寛、吉波哲大、水谷麻紀子、山口美樹、菰池佳史、高島勉、吉留克英、鶴谷純司、岩本充彦、藤澤文絵、八十島宏行、山村順、山田知美、増田慎三：転移再発乳癌におけるパクリタキセル+ペバシズマブ導入化学療法後のホルモン療法+カペシタビン併用維持療法。第 28 回日本乳癌学会学術総会、WEB 開催、2020 年 10 月 14 日

浜川卓也、西川和宏、俊山礼志、三代雅明、高橋佑典、酒井健司、三宅正和、宮本敦史、加藤健志、平尾素宏：一般病院での技術認定（胃）取得を目指したチームビルディングとロードマップ。第 33 回近畿内視鏡外科学研究会、WEB 開催、2020 年 9 月 26 日

高橋佑典、三代雅明、三宅正和、俊山礼志、酒井健司、浜川卓也、西川和宏、宮本敦史、平尾素宏、加藤健志：当院における大腸技術認定医取得のための取り組み。第 33 回近畿内視鏡外科学研究会、WEB 開催、2020 年 9 月 26 日

高橋佑典、三代雅明、三宅正和、西川和宏、宮崎道彦、加藤健志：当科における TaTME 導入後の短期成績。第 75 回日本大腸肛門病学会学術集会、WEB 開催、2020 年 11 月 13 日-14 日

Takahashi Y, Miyo M, Miyake M, Kato T, Toshiyama R, Hamakawa T, Hama N, Nishikawa K, Miyamoto A, Miyazaki M, Hirao M：Short term outcome of TaTME in our institution。第 33 回日本内視鏡外科学会総会、横浜・WEB 開催、2021 年 3 月 11 日

三代雅明、三宅正和、加藤健志、佐藤広陸、俊山礼志、浜川卓也、濱直樹、西川和宏、宮本敦史、平尾素宏：Device for avoiding complications in laparoscopic surgery for locally recurrent colorectal cancer。第 120 回日本外科学会定期学術集会、WEB 開催、2020 年 8 月 13 日

三代雅明、高橋佑典、三宅正和、加藤健志、西川和宏、宮崎道彦：当科における pStageⅢ の治療成績について。第 75 回日本大腸肛門病学会学術集会、WEB 開催、2020 年 11 月 13 日-14 日

Miyo M、Takahashi Y、Miyake M、Kato T、Toshiyama R、Hamakawa T、Hama N、Nishikawa K、Miyamoto A、Hirao M：Outcomes of laparoscopic lateral lymph node dissection in rectal cancer recurrence surgery。第 75 回日本消化器外科学会総会、WEB 開催、2020 年 12 月 15 日-17 日

宮崎葉月、三代雅明、高橋佑典、三宅正和、宮崎道彦、加藤健志、俊山礼志、浜川卓也、濱直樹、宮本敦史、西川和宏、平尾素宏：当科における HIV 患者の急性虫垂炎に対する外科的治療。第 56 回日本腹部救急医学会総会、WEB 開催、2020 年 10 月 8 日

B-4

高見康二、藤原綾子、森清、栗山啓子：肺悪性腫瘍切除断端に発生した非悪性肺結節の 2 例。第 37 回日本呼吸器外科学会学術集会、WEB 開催、2020 年 9 月 29 日

平尾素宏、赤坂智史、眞能正幸、西川和宏、浜川卓也、石田永、三田英二、加藤健志、宮本敦史、濱直樹、三宅正和、三代雅明、高橋佑典、俊山礼志：胃癌 ESD 偶発穿孔後腹膜播種例の検討。第 92 回日本胃癌学会総会、WEB 開催、2020 年 7 月 1 日

平尾素宏、西川和宏、浜川卓也、眞能正幸、高見康二、加藤健志、宮本敦史、増田慎三、田中英一：集学的治療によるアブスコパル効果がみられた食道胃接合部癌術後再発症例。第 74 回日本食道学会学術集会、WEB 開催、2020 年 12 月 10 日-11 日

平尾素宏、西川和宏、浜川卓也、加藤健志、宮本敦史、濱直樹、三宅正和、高橋佑典、三代雅明、俊山礼志：免疫チェックポイント阻害剤併用によってアブスコパル効果の増強がみられた食道胃接合部癌再発症例。第 75 回日本消化器外科学会総会、WEB 開催、2020 年 12 月 15 日-17 日

平尾素宏、西川和宏、浜川卓也、眞能正幸、高見康二、加藤健志、宮本敦史、増田慎三、田中英一、赤坂智史、石田永、三田英二、眞能正幸、加藤健志、宮本敦史、三宅正和、酒井健司、高橋佑典、三代雅明、俊山礼志：胃癌内視鏡的切除時の偶発穿孔後腹膜播種例の検討。第 93 回日本胃癌学会総会、WEB、2021 年 3 月 3 日-5 日

佐竹悠良、加藤健志、後藤昌弘、寺澤哲志、太田勝也、能浦真吾、賀川義規、川上尚人、長谷川裕子、坂井大介、黒川幸典、下川敏雄、佐藤太郎：多剤併用療法

が適さない RAS 野生型大腸がんに対する一次治療パニツムマブ単剤療法。第 58 回日本癌治療学会学術集会、京都、2020 年 10 月 22 日

小高雅人、間中大、江頭徹哉、長谷川順一、高金明典、中村将人、加藤健志、宗本義則、中村文隆、水島恒和、山中竹春、大津 敦、森 正樹：結腸癌術後補助薬物療法の至適治療期間を検証した ACHIEVE 試験の全生存期間の結果報告。第 58 回日本癌治療学会学術集会、京都、2020 年 10 月 22 日

吉野孝之、加藤健志、江崎泰斗、高島淳生、塩澤学、中島貴子、竹内伸司、佐藤太郎、小松嘉人、室圭：BRAF V600E 変異転移性大腸がんにおける Encorafenib±Binimetinib+Cetuximab 併用療法。第 58 回日本癌治療学会学術集会、京都、2020 年 10 月 22 日

金浩敏、工藤敏啓、長谷川順一、中田 健、加藤健志、村田幸平、真貝竜史、武元浩新、池永雅一、植村 守、松田 宙、佐藤太郎、水島恒和、土岐祐一郎、江口英利：進行再発大腸癌に対する 1 次治療としての CAPOX(L-OHP100mg/m²)+BEV 療法の有効性の検討。第 58 回日本癌治療学会学術集会、京都、2020 年 10 月 22 日

宮本敦史、濱 直樹、俊山礼志、三代雅明、高橋佑典、浜川卓也、三宅正和、西川和宏、加藤健志、平尾素宏：局所進行腺癌に対する conversion surgery の臨床的意義に関する検討。第 75 回日本消化器外科学会総会、WEB 開催、2020 年 12 月 15 日-17 日

津田 均、黒住昌史、秋山 太、大野真司、増田慎三、佐治重衡、下村昭彦、佐藤信昭、高尾信太郎、大住省三、徳田 裕、稲治英生、渡辺 亨、大橋靖雄：NSAS-BC-01 研究におけるリンパ節転移なし浸潤性乳癌ハイリスク群の組織病理学的核グレイディングシステムの検証。第 79 回日本癌学会学術総会、WEB 開催、2020 年 10 月 1 日

金子耕司、川口英俊、増田慎三、中山貴寛、青儀健二郎、阿南敬生、伊藤良則、大谷彰一郎、佐治重衡、徳永えり子、中村清吾、長谷川善枝、藤澤知己、山口美樹、山下年成、山本 豊、森田智視、戸井雅和、大野真司：大規模コホート研究からの閉経後 ER 陽性進行・再発乳癌における OS に関与する因子の検討 (JBCRG-C06: Safari)。第 28 回日本乳癌学会学術総会、WEB 開催、2020 年 10 月 14 日

原文堅、津川浩一郎、岩田広治、大谷彰一郎、相良安昭、戸井雅和、西村令喜、増田慎三、石黒功二、吉本拓矢、伊藤良則：HER2 陽性早期乳癌に対する Pertuzumab 術後療法の有効性・安全性を検証した APHINITY 試験の日本人部分集団解析。第 28 回日本乳癌学会学術総会、WEB 開催、2020 年 10 月 14 日

中山貴寛、川口英俊、増田慎三、青儀健二郎、阿南敬生、伊藤良則、大谷彰一郎、金子耕司、佐治重衡、徳永えり子、中村清吾、長谷川善枝、藤澤知己、山口美樹、

山下年成、山本豊、森田智視、戸井雅和、大野真司：術後内分泌療法が ER+HER2- 進行再発乳癌の内分泌療法に及ぼす影響:JBCRG-C06 サブ解析。第 28 回日本乳癌学会学術総会、WEB 開催、2020 年 10 月 14 日

増田慎三、井上賢一、岩田広治、高橋将人、伊藤良則、三好康雄、森丈治、坂口佐知、Sledge GW、戸井雅和：MONARCH 2 日本人部分集団解析:進行乳癌における abemaciclib と fulvestrant 併用での全生存期間。第 28 回日本乳癌学会学術総会、WEB 開催、2020 年 10 月 14 日

二村学、大庭真梨、増田慎三、中山貴寛、櫻井健一、坂東裕子、岡田守人、山本豊、金敬徳、佐伯俊昭、長嶋健、桑山隆志、唐宇飛、平野明、井口雅史、山神和彦、水野豊、小島康幸、八十島宏行、大野真司：乳癌術前化学療法におけるアブラキサンの有用性についての大規模統合解析 (JBCRG-S01)。第 28 回日本乳癌学会学術総会、WEB 開催、2020 年 10 月 14 日

増山美里、川口英俊、増田慎三、中山貴寛、青儀健二郎、阿南敬生、伊藤良則、大谷彰一郎、金子耕司、佐治重衡、徳永えり子、中村清吾、長谷川善枝、藤澤知巳、山口美樹、山下年成、山本豊、森田智視、戸井雅和、大野真司：ホルモン陽性 HER2 陽性進行再発乳癌におけるフルベストラントの治療成績 (JBCRG-C06 Safari 試験) の検討。第 28 回日本乳癌学会学術総会、WEB 開催、2020 年 10 月 14 日

増田慎三、Sara Hurvitz、Linda Vahdat、Nadia Harbeck、Antonio C. Wolff、Sara M. Tolaney、Sherene Loi、O'Shaughnessy Joyce、Diqiong Xie、Luke Walker、Evelyn Rustia、Virginia F. Borges：HER2CLIMB-02: Tucatinib or placebo with T DM1 for unresectable locally-advanced or metastatic HER2+ breast cancer。第 18 回日本臨床腫瘍学会学術集会、WEB 開催、2021 年 2 月 18 日

増田慎三、Luke Walker、Sherry Tan、Evelyn Rustia、Keiko Yamamoto：HER2CLIMB-03: Phase 2 study of tucatinib with trastuzumab and capecitabine in HER2+ locally advanced unresectable or MBC。第 18 回日本臨床腫瘍学会学術集会、WEB 開催、2021 年 2 月 18 日

西川和宏、木村豊、岸健太郎、井上健太郎、松山仁、赤丸祐介、田村茂行、柳本喜智、川田純司、川瀬朋乃、川端良平、菅野仁士、山田岳史、内田英二、下川敏雄、今村博司：胃癌術後症例に対する早期の成分栄養剤介入が術後晩期の体重減少と骨格筋量に及ぼす影響に関する検討。第 92 回日本胃癌学会総会、WEB 開催、2020 年 7 月 1 日

西川和宏、田村茂行、谷口博一、竹野淳、今村博司、藤田淳也、松山仁、木村豊、川田純司、平尾素宏、広田将司、藤谷和正、黒川幸典、坂井大介、下川敏雄、佐藤太郎：進行・再発胃癌既治療症例に対する減量 nab-paclitaxel 療法の第二相試験。JDDW2020、WEB 開催、2020 年 11 月 6 日

西川和宏、小泉和三郎、円谷 彰、藤谷和正、赤丸祐介、嶋田顕、保坂尚志、中山昇典、辻仲利政、坂本純一：進行再発胃癌二次化学療法における IRI+CDDP 療法と IRI 単独療法とを比較する 2 つのランダム化試験の統合解析。第 75 回日本消化器外科学会総会、WEB 開催、2020 年 12 月 15 日-17 日

三宅正和、三代雅明、高橋佑典、加藤健志、俊山礼志、浜川卓也、濱 直樹、西川和宏、宮本敦史、宮崎道彦、平尾素宏：当院における閉塞性大腸癌の治療戦略～56 例の検討～。第 56 回日本腹部救急医学会総会、WEB 開催、2020 年 10 月 8 日

三宅正和、植村守、池田正孝、三代雅明、高橋佑典、加藤健志、宮崎道彦、俊山礼志、浜川卓也、濱 直樹、西川和宏、宮本敦史、平尾素宏：直腸がん他臓器合併切除後の骨盤死腔炎予防についての検討。第 120 回日本外科学会定期学術集会、WEB 開催、2020 年 8 月 13 日

三宅正和、三代雅明、高橋佑典、加藤健志、俊山礼志、浜川卓也、濱 直樹、西川和宏、宮本敦史、平尾素宏：他臓器浸潤を伴う T4b 局所進行結腸癌に対する腹腔鏡手術。第 75 回日本消化器外科学会総会、WEB 開催、2020 年 12 月 15 日-17 日

土井貴司、高見康二、小河原光正、木村 剛、宮本 智、安藤性實、角永茂樹、森 漑、栗山啓子：肺原発滑膜肉腫の 1 切除例。第 61 回日本肺癌学会学術集会、岡山、2020 年 11 月 14 日

柏葉匡寛、中山貴寛、三階貴史、森本卓、八十島宏行、山本 豊、熊谷真澄、安原加奈、吉田ミナ、岡本泰子、山中竹春、大野真司、増田慎三：nab-PTX の末梢神経障害予防に対するフローズングローブ、弾性ストッキングによる第 II 相試験（SPOT 試験）。第 28 回日本乳癌学会学術総会、WEB 開催、2020 年 10 月 14 日

相良安昭、森 雅紀、岩谷胤生、木川雄一郎、内藤陽一、古川孝広、田中希世、小谷はるる、八十島宏行、尾崎由記範、野口瑛美、宮下 穰、北川 大、近藤直人、菰池佳史、枝園忠彦、岩田広治：転移性乳癌患者に対するアドバンス ケア プランニングの現状調査。第 28 回日本乳癌学会学術総会、WEB 開催、2020 年 10 月 14 日

Hamakawa T, Nishikawa K, Toshiyama R, Miyo M, Takahashi Y, Miyake M, Hama N, Miyamoto A, Kato T, Hirao M : Risk factors for body weight loss after proximal gastrectomy. 第 92 回日本胃癌学会総会、WEB 開催、2020 年 7 月 1 日

浜川卓也、西川和宏、俊山礼志、三代雅明、高橋佑典、藤原綾子、三宅正和、濱直樹、宮本敦史、加藤健志、高見康二、平尾素宏：StageIV 胃癌に対する化学療法後胃切除の意義の検討。第 120 回日本外科学会定期学術集会、WEB 開催、2020 年 8 月 14 日

浜川卓也、西川和宏、三代雅明、俊山礼志、高橋佑典、三宅正和、濱直樹、宮本敦史、加藤健志、平尾素宏：腹臥位胸腔鏡手術中に同定した右上肺区域静脈(V2)走行異常を伴う食道癌の1例。第74回日本食道学会学術集会、WEB開催、2020年12月10日-11日

浜川卓也、西川和宏、俊山礼志、三代雅明、高橋佑典、三宅正和、濱直樹、宮本敦史、加藤健志、平尾素宏：腹腔鏡下胃癌手術後の自動縫合器を用いた再建-修練医に安全に習得してもらうための定型化-。第75回日本消化器外科学会総会、WEB開催、2020年12月15日-17日

浜川卓也、西川和宏、俊山礼志、三代雅明、高橋佑典、酒井健司、三宅正和、宮本敦史、加藤健志、平尾素宏：膈体尾部欠損を合併した胃癌患者に対して腹腔鏡下幽門側胃切除術を施行した1例。第93回日本胃癌学会総会、WEB開催、2021年3月3日-5日

酒井健司、大橋朋史、吉田真之、原修一郎、高山慶太、米田和弘、大澤日出樹、井出義人、野呂浩史、平尾隆文、岩崎輝夫、畑中伸良、山崎芳郎：若年ベトナム人における Fibrolamellar hepatocellular carcinoma の1切除例。第42回日本癌局所療法研究会、誌上開催、2020年5月29日

酒井健司、大橋朋史、吉田真之、原修一郎、高山慶太、大澤日出樹、井出義人、野呂浩史、平尾隆文、岩崎輝夫、畑中伸良、山崎芳郎、筒井建紀：後腹膜腫瘍と成熟奇形種に対して腹腔鏡下に同時切除し得た一例。第42回日本癌局所療法研究会、誌上開催、2020年5月29日

酒井健司、大橋朋文、大澤日出樹、井出義人、野呂浩史、平尾隆文、畑中信良、山崎芳郎：腹腔鏡下脾臓摘出術を施行した脾 littoral cell angioma の1例。第75回日本消化器外科学会総会、WEB開催、2020年12月15日-17日

藤原綾子、高見康二、森清、眞能正幸、井上敦夫、栗山啓子：当院における婦人科悪性腫瘍肺転移に対する肺切除例の検討。第37回日本呼吸器外科学会学術集会、WEB開催、2020年9月29日

高橋佑典：大阪医療センターにおける大腸技術認定取得に向けた取り組み。第75回日本大腸肛門病学会学術集会共催セミナー、WEB開催、2020年11月14日

高橋佑典、三代雅明、三宅正和、加藤健志、俊山礼志、浜川卓也、濱直樹、西川和宏、宮本敦史、平尾素宏：当院における80歳以上の初発大腸癌患者に対する外科治療。第75回日本消化器外科学会総会、WEB開催、2020年12月15日-17日

大谷陽子、水谷麻紀子、八十島宏行、増山美里、森清、増田慎三：術前化学療法を施行したホルモン陽性HER2陰性乳癌の予後予測におけるCPS+EG staging

system の有用性。第 28 回日本乳癌学会学術総会、WEB 開催、2020 年 10 月 14 日

三代雅明、高橋佑典、三宅正和、加藤健志、俊山礼志、浜川卓也、濱直樹、西川和宏、宮本敦史、宮崎道彦、平尾素宏：S 状結腸癌術後の横行結腸癌手術における ICG 蛍光法の有用性について。第 74 回手術手技研究会、松江、2020 年 10 月 9 日

Miyo M、Miyake M、Takahashi Y、Kato T、Miyazaki H、Toshiyama R、Hamakawa T、Hama N、Nishikawa K、Miyamoto A、Miyazaki M、Hirao M：Laparoscopic appendectomy for acute appendicitis in HIV patients。第 33 回日本内視鏡外科学会総会、横浜・WEB 開催、2020 年 3 月 12 日

俊山礼志、今野雅充、野田剛広、浅井 歩、武本宏泰、土岐祐一郎、江口英利、西山伸宏、石井秀始：改良型ウベニメクスはアミノペプチダーゼ N を標的とし、肝細胞癌幹細胞に対する抗腫瘍効果を発揮する。第 79 回日本癌学会学術総会、WEB 開催、2020 年 10 月 1 日-3 日

俊山礼志、宮本敦史、濱直樹、三代雅明、高橋佑典、浜川卓也、藤原綾子、三宅正和、西川和宏、加藤健志、高見康二、平尾素宏：全身性エリテマトーデスに併発した出血性胆嚢炎の 1 例。第 74 回手術手技研究会、松江、2020 年 10 月 9 日

Toshiyama R、Miyamoto A、Hama N、Miyo M、Takahashi Y、Hamakawa T、Fujiwara A、Miyake M、Nishikawa K、Kato T、Hirao M、Takami K：Study of cases of gangrenous cholecystitis surgery performed in our hospital。第 32 回日本肝胆膵外科学会学術集会、WEB 開催、2021 年 2 月 23 日-24 日

長江 歩、植村 守、高橋秀和、三吉範克、三宅正和、松田 宙、加藤健志、水島恒和、土岐祐一郎、江口英利：直腸癌局所再発症例に対する仙骨合併切除後の排尿障害についての検討。第 75 回日本消化器外科学会総会、WEB 開催、2020 年 12 月 15 日-17 日

加藤伸弥、浜川卓也、西川和宏、俊山礼志、三代雅明、高橋佑典、藤原綾子、三宅正和、濱直樹、宮本敦史、宮崎道彦、加藤健志、高見康二、平尾素宏：早期胃癌に対する噴門側胃切除術食道残胃吻合およびダブルトラクト再建の短期成績。第 92 回日本胃癌学会総会、WEB 開催、2020 年 7 月 1 日

加藤伸弥、西川和宏、浜川卓也、俊山礼志、三代雅明、高橋佑典、三宅正和、濱直樹、宮本敦史、宮崎道彦、加藤健志、平尾素宏：皮膚悪性黒色腫の小腸転移による同時性 5 ヶ所多発腸重積の 1 手術例。第 56 回日本腹部救急医学会総会、WEB 開催、2020 年 10 月 8 日

加藤伸弥、三代雅明、三宅正和、宮崎道彦、加藤健志：S 状結腸癌および小腸 GIST から重複して同時性多発肝転移を来した 1 例。第 75 回日本大腸肛門病学会学術集会、WEB 開催、2020 年 11 月 13 日-14 日

植田隆太、今 裕史、阪田敏聖、蔵谷大輔：血栓摘除を行った上腸間膜動脈閉塞症の二例。第 56 回日本腹部救急医学会総会、WEB 開催、2020 年 10 月 8 日

佐藤広陸、平尾素宏、浜川卓也、西川和宏、坂野 悠、宮原 智、楠 誓子、瀬戸 寛人、宮崎葉月、加藤伸弥、萩 美里、俊山礼志、三代雅明、藤原綾子、三宅正和、濱 直樹、宮本敦史、宮崎道彦、加藤健志、高見康二：下部食道扁平上皮癌に対する治療戦略—術前化学療法の主腫瘍径縮小率からの検討—。第 120 回日本外科学会定期学術集会、WEB 開催、2020 年 8 月 13 日

佐藤広陸、三宅正和、三代雅明、高橋佑典、加藤健志、俊山礼志、浜川卓也、濱直樹、西川和宏、宮本敦史、宮崎道彦、平尾素宏：HIV 感染者の自慰行為による直腸穿孔の一例。第 56 回日本腹部救急医学会総会、WEB 開催、2020 年 10 月 8 日

Miyazaki H, Hamakawa T, Nishikawa K, Toshiyama R, Miyo M, Takahashi Y, Miyake M, Hama N, Miyamoto A, Miyazaki M, Kato T, Takami K, Hirao M：Thoracoscopic esophagectomy for esophageal cancer with right superior pulmonary vein anomaly。第 33 回日本内視鏡外科学会総会、WEB 開催、2021 年 3 月 10 日-13 日

楠 誓子、浜川卓也、西川和宏、俊山礼志、三代雅明、三宅正和、濱 直樹、宮本敦史、加藤健志、平尾素宏：腹腔鏡手術と単孔式胃内手術を併称した GIST の 2 例。第 92 回日本胃癌学会総会、WEB 開催、2020 年 7 月 1 日

楠 誓子、三代雅明、高橋佑典、三宅正和、加藤健志、俊山礼志、浜川卓也、濱直樹、西川和宏、宮本敦史、平尾素宏：切除可能大腸癌転移性肝腫瘍に対する術前化学療法の治療成績について。第 120 回日本外科学会定期学術集会、WEB 開催、2020 年 8 月 15 日

楠 誓子、三代雅明、高橋佑典、三宅正和、西川和宏、宮崎道彦、加藤健志：当院における肛門管扁平上皮癌に対する CRT の治療成績について。第 75 回日本大腸肛門病学会学術集会、WEB 開催、2020 年 11 月 13 日-14 日

楠 誓子、西川和宏、浜川卓也、俊山礼志、高橋佑典、三宅正和、濱 直樹、宮本敦史、加藤健志、平尾素宏：胃癌肝転移切除症例の治療成績についての検討。第 75 回日本消化器外科学会総会、WEB 開催、2020 年 12 月 15 日-17 日

瀬戸寛人、浜川卓也、平尾素宏：水平脚十二指腸癌に対して腹腔鏡内視鏡合同手術を施行した 1 例。第 75 回日本消化器外科学会総会、WEB 開催、2020 年 12 月 15 日-17 日

宮原 智、藤原綾子、栗山啓子、森 清、眞能正幸、高見康二：自然退縮の後に再増大を認めた原発性肺癌の3例。第37回日本呼吸器外科学会学術集会、WEB開催、2020年9月29日

宮原 智、高橋佑典、俊山礼志、三代雅明、浜川卓也、三宅正和、濱 直樹、西川和宏、宮本敦史、加藤健志、平尾素宏：結腸癌イレウス加療中にイレウス管が原因と考えられる腸重積を認めた1例。第56回日本腹部救急医学会総会、WEB開催、2020年10月8日

宮原 智、西川和宏、浜川卓也、瀬戸寛人、楠 誓子、宮崎葉月、植田隆太、三代雅明、高橋佑典、三宅正和、俊山礼志、酒井健司、宮本敦史、加藤健志、平尾素宏：術前DOD療法によりpCRを得た高度リンパ節転移を伴う進行胃癌の1例。第82回日本臨床外科学会総会、WEB開催、2020年10月29日-31日

今村沙弓、大谷陽子、水谷麻紀子、八十島宏行、眞能正幸、森 清、増田慎三：乳癌転移との鑑別を要した癌性腹膜炎の一例。第204回近畿外科学会、WEB開催、2021年3月20日

四方文子、相良安昭、上田純子、石丸美幸、江口恵子、鈴木美智子、竹久志穂、山本瀬奈、尾崎由記範、小谷はるる、枝園忠彦、田中希世、内藤陽一、野口瑛美、古川孝広、宮下 穰、八十島宏行、増田慎三、岩田広治：転移性乳癌患者に対するアドバンス ケア プランニング (ACP) の現状調査-看護師の回答を中心に-。第28回日本乳癌学会学術総会、WEB開催、2020年10月14日

B-5

加藤健志：総合的な大腸癌治療について～手術から薬物療法まで～。Total Treatment Sequence for CRC Conference in Fukui、大阪、2020年7月9日

加藤健志：大腸がん化学療法について伝えたい3つの事柄。第7回平成大腸癌カンファレンス、Web開催、2020年9月1日

加藤健志：大腸癌薬物療法の最新知見。下関CRCオンラインセミナー、大阪、2020年10月28日

加藤健志：大腸がんとは。大腸がんWEBシンポジウム～今だからこそ、知り・理解する～、Web開催、2020年11月1日

加藤健志：BESTな大腸癌治療を目指して～進行・再発大腸癌化学療法戦略をUP DATE～。消化器癌カンファレンス in 香川、高松、2020年11月5日

加藤健志：大腸癌薬物療法の最新の話。Lilly Colorectal Cancer Symposium in 医ヶ丘、小倉、2020年11月10日

加藤健志:筑後消化器がんセミナー、Web 開催、2021 年 1 月 15 日

加藤健志:大腸がん薬物療法の最新の話。大腸がん WEB ライブセミナー、Web 開催、2021 年 2 月 10 日

加藤健志:大腸がん薬物治療 Update。大腸がん WEB ライブセミナー兵庫、Web 開催、2021 年 3 月 19 日

増田慎三:HR+HER2-進行再発乳癌の治療ストラテジー～CDK4/6 阻害剤の役割～。
ファイザー インターネットシンポジウム JOIN 2020、大阪、2020 年 7 月 22 日

増田慎三:今後の進行・再発乳癌治療における分子標的治療薬の意義・位置付け
について。乳がん治療における分子標的治療薬についての Web セミナー、大阪、
2020 年 7 月 28 日

増田慎三:HR+HER2-進行再発乳癌の治療ストラテジー～CDK4/6 阻害剤の役割～。
Pfizer Breast Cancer Web Meeting in Hiroshima、WEB 開催、2020 年 8 月 6 日

増田慎三:乳がん診療とがんゲノム医療。第 120 回日本外科学会定期学術集会 ラ
ンチョンセミナー10、大阪、2020 年 8 月 13 日

増田慎三:HR+HER2-早期乳癌における再発リスク評価と生物学的指標 (Ki-67)
の位置付けについて。Breast Cancer Ki-67 Advisory Board Meeting、WEB 開催、2020
年 8 月 17 日

増田慎三:PD-L1 陽性トリプルネガティブ乳がんの標的治療とは。中外 e セミナ
ー on Breast Cancer for Tecentriq、大阪、2020 年 8 月 24 日

増田慎三:HR+HER2-進行再発乳癌の治療ストラテジー～CDK4/6 阻害剤の役割～。
神奈川乳癌サミット、WEB 開催、2020 年 8 月 27 日

増田慎三:CDK4/6 阻害剤併用療法の最適化。第 17 回日本乳癌学会中部地方会共
催セミナー ランチョンセミナー4、WEB 開催、2020 年 9 月 13 日

増田慎三:HR 陽性 HER2 陰性 進行・再発乳癌治療における真のゴールとは?～
最新エビデンスを紐解く。Virtual Round Table Conference about Metastatic Breast
Cancer、WEB 開催、2020 年 9 月 24 日

増田慎三:HR+HER2-進行再発乳癌の治療ストラテジー～CDK4/6 阻害剤の役割～。
秋田乳がんオンライン講演会、WEB 開催、2020 年 9 月 28 日

増田慎三:HR+HER2-進行再発乳癌の治療ストラテジー。AstraZeneca Breast Cancer
TV セミナー、大阪、2020 年 10 月 2 日

増田慎三：HER2 陽性乳がん周術期治療におけるパラダイムシフト～カドサイラの適応拡大がもたらすものとは～。カドサイラ適応拡大記念講演会、新潟、WEB 開催、2020 年 10 月 9 日

増田慎三：HER2 陰性進行・再発乳がん治療～継往開来。第 28 回日本乳癌学会学術総会イブニングセミナー、大阪、WEB 開催、2020 年 10 月 11 日

増田慎三：乳癌死ゼロをめざして～エビデンスからの考動～。第 28 回日本乳癌学会学術総会共催セミナー、WEB 開催、2020 年 10 月 14 日

増田慎三：HER2 陽性乳がんの治療戦略。Chugai Breast Cancer Symposium 2020、東京、WEB 開催、2020 年 10 月 17 日

増田慎三：CDK4/6 阻害剤併用療法の最適化。第 17 回日本乳癌学会中国四国地方会 イブニングセミナー2、京都、WEB 開催、2020 年 10 月 24 日

増田慎三：HR+HER2-進行再発乳癌の治療ストラテジー。AstraZeneca Breast Cancer TV セミナー、大阪、2020 年 10 月 26 日

増田慎三：エビデンスから見る Trastuzumab BS 製剤の実際。Breast Cancer Expert Meeting、WEB 開催、2020 年 10 月 29 日

増田慎三：HER2 陰性 MBC におけるベストストラテジーを考える～テセントリクの適応によりどう変わるか～。T トリプルネガティブ乳癌の治療について考える会、岩手、WEB 開催、2020 年 11 月 4 日

増田慎三：HER2 陽性乳がん周術期治療におけるパラダイムシフト～カドサイラの適応がもたらすものとは～。CHUGAI Breast Cancer Meeting、石川、WEB 開催、2020 年 11 月 7 日

増田慎三：HER2 陽性乳がん周術期治療におけるパラダイムシフト～カドサイラの適応拡大がもたらすものとは～。Breast Cancer Forum in NARA、大阪、WEB 開催、2020 年 11 月 10 日

増田慎三：HER2 陽性乳がん周術期治療におけるパラダイムシフト～カドサイラの適応拡大がもたらすものとは～。Kitakyusyu Breast Cancer Meeting、福岡、2020 年 11 月 12 日

増田慎三：HER2 陰性乳がん治療の最新知見。乳がん抗体療法セミナー In 川越、埼玉、WEB 開催、2020 年 11 月 13 日

増田慎三：閉経後進行再発乳癌の初回治療について。Breast Cancer Round Table Online Discussion in 東葛、WEB 開催、2020 年 11 月 17 日

増田慎三：HER2 陽性乳がん周術期治療におけるパラダイムシフト～カドサイラの適応拡大がもたらすものとは～。Breast Cancer Professional Conference in Osaka、大阪、2020 年 11 月 17 日

増田慎三：HR+HER2-進行再発乳がんの 1 次治療として何が最適か？。Saga Breast Cancer Online Seminar、大阪、WEB 開催、2020 年 11 月 24 日

増田慎三：HER2 陰性 MBC におけるベストストラテジーを考える～テセントリクの適応によりどう変わるか～。BREAST CANCER WEB SEMINAR 2020 in Yamanashi、大阪、WEB 開催、2020 年 11 月 27 日

増田慎三：HER2 陽性早期乳癌における治療戦略。Breast Cancer Symposium in Saitama、埼玉、WEB 開催、2020 年 11 月 30 日

増田慎三：HER2 陽性乳がん周術期治療におけるパラダイムシフト～カドサイラの適応拡大がもたらすものとは～。South Osaka Breast Cancer Symposium、大阪、WEB 開催、2020 年 12 月 4 日

増田慎三：HR+HER2-進行再発乳癌の治療ストラテジー。乳癌内分泌療法研究会、埼玉、WEB 開催、2020 年 12 月 18 日

増田慎三：エビデンスから考える HR 陽性 HER2 陰性進行・再発乳癌の治療戦略。Virtual Round Table Conference about Metastatic Breast Cancer、大阪、WEB 開催、2021 年 1 月 7 日

増田慎三：原発性 HER2 陽性乳がん治療におけるベストストラテジー。Kyoto Breast Cancer Forum 2021、京都、WEB 開催、2021 年 1 月 15 日

増田慎三：原発性 HER2 陽性乳がん治療におけるベストストラテジー。第 34 回神戸臨床腫瘍研究会、兵庫、WEB 開催、2021 年 1 月 23 日

増田慎三：HER2 陰性 MBC におけるベストストラテジーを考える。南信乳癌治療セミナー、大阪、WEB 開催、2021 年 2 月 19 日

増田慎三：2021 年 HR 陽性 HER2 陰性 MBC の治療戦略～専門医の治療レジメンイブランスの使いどころ～。ファイザー インターネットシンポジウム JOIN 2021、大阪、WEB 開催、2021 年 2 月 16 日

増田慎三：HER2 陽性乳がん治療の Up-to-date～さらなる個別化治療をめざして～。Breast Cancer Meeting、大阪、WEB 開催、2021 年 3 月 6 日

増田慎三：KN-355 データに基づく実臨床でのペムブロリズマブの位置付け。KN355 TNBC Expert Input Forum、WEB 開催、2021 年 3 月 31 日

山本和義、平尾素宏、西川和宏、藤谷和正、辻仲利政:胃癌手術におけるサルコペニア対策。第27回日本がんチーム医療研究会、大阪、2021年2月13日

水谷麻紀子:原発性 HER2 陰性乳がんの周術期治療。HER2-positive Early Breast Cancer Treatment Forum。大阪、WEB 開催、横浜、2020年10月1日

八十島宏行:乳がんの検査と診断、治療法の選択について。保険薬局 Oncology Seminar、大阪、WEB 開催、2020年11月25日

八十島宏行:カルボプラチン併用レジメンの術前化学療法について。周術期乳癌薬物療法 Conference、大阪、WEB 開催、2020年12月9日

浜川卓也:不合格を経て築いた合格に必要な布石。技術認定医による LDG の Know-How2020～それぞれの立場から～、WEB 開催、2020年8月21日

大谷陽子、水谷麻紀子、八十島宏行、増田慎三:当院におけるトリプルネガティブ再発症例の治療戦略。第143回阪神乳腺疾患談話会 Online Seminar、WEB 開催、2020年9月4日

大谷陽子:「サブタイプ別にみる乳がんの初期治療。保険薬局 Oncology Seminar、大阪、WEB 開催、2021年2月17日

B-6

宮本敦史:膵癌に対する外科治療を基軸とした集学的治療。Pancreatic Cancer Seminar in OSAKA、大阪、2020年12月9日

西川和宏:胃癌治療 2nd ラインの適正使用に向けて。GC Oncology Interactive Seminar、大阪、2020年5月14日

西川和宏:胃癌治療における栄養療法の意義・胃癌患者に対するチームでの取り組み。Lilly インターネット講演会、神戸、2020年5月19日

西川和宏:胃癌治療 2nd ラインの適正使用に向けて。GC Oncology Interactive Seminar、大阪、2020年9月17日

西川和宏:胃癌 Late Line の最新の知見。TAIHO Web Lecture for Gastric Cancer、WEB 開催、2020年9月18日

西川和宏:進行再発胃癌の治療方針。郡山胃癌治療勉強会、WEB 開催、2020年12月4日

三宅正和:大腸がん手術の最前線と今後。大腸がん WEB シンポジウム～今だからこそ、知り・理解する～、WEB 開催、2020年11月1日

三宅正和：指導医目線からの技術認定医試験。腹腔鏡下 S 状結腸切除を学ぶ会、大阪、2021 年 1 月 29 日

高橋佑典：腹腔鏡下大腸切除術。第 13 回大阪内視鏡外科手術セミナー、川崎、2020 年 12 月 19 日

高橋佑典：大腸技術認定取得のための腹腔鏡下 S 状結腸切除術～大阪医療センタープロトコル～。ビラフトビ・メクトビエリア WEB セミナー、WEB 開催、2021 年 2 月 22 日

寺川航基、酒井健司、植田隆太、俊山礼志、三代雅明、高橋佑典、浜川卓也、土井貴司、三宅正和、西川和宏、加藤健志、高見康二、宮本敦史、平尾素宏：肝左葉形成不全を伴う膵鉤部癌に対して膵頭十二指腸切除術を施行した 1 例。第 634 回大阪外科集談会、大阪、2020 年 11 月 21 日

B-7

増田慎三：アドバイザー会議参加。マーケティングアドバイザーボード、WEB 開催、2020 年 10 月 9 日

増田慎三：アドバイザー会議参加。HER2 陽性乳がん pCR 制度管理に関するアドバイザーボード会議、WEB 開催、2020 年 10 月 19 日

増田慎三：アドバイザー会議参加。マーケティングアドバイザーボード、WEB 開催、2020 年 12 月 4 日

増田慎三：アドバイザー会議参加。乳がん領域アドバイザー会議、WEB 開催、2020 年 12 月 22 日

B-8

平尾素宏：消化器外科医のキャリアについて「我が消化器外科人生に一片の悔い無し!」。大阪大学外科専門研修プログラム、大阪、2020 年 7 月 4 日

平尾素宏：多くの術後再手術アクシデント報告をしてきた一外科医から。第 1 回医療安全定期講演会、大阪、2020 年 7 月 17 日

西川和宏：TNM 分類、癌取扱い規約。第 13 回日本癌治療学会 CRC 教育集会、大阪、2020 年 7 月 11 日

酒井健司：講師。第 47 回専門医を目指す消化器外科セミナー、大阪、2020 年 12 月 4 日

B-9

平尾素宏:新型コロナと胃癌診療。FM 大阪「LOVE&RED」、大阪、2020年10月13日

加藤健志:がん診療の啓発。FM 大阪「LOVE&RED」、大阪、2020年12月22日

宮本敦史:がん診療の啓発。FM 大阪「LOVE&RED」、大阪、2020年10月27日

増田慎三: HER2 マイナス進行再発乳癌におけるこれからの個別化医療 動画コンテンツ作成 撮影、大阪、2020年9月11日

増田慎三:がん診療の啓発。FM 大阪「LOVE&RED」、大阪、2020年11月10日

形成外科

吉龍澄子

1999年7月に形成外科学会の常勤医1名が赴任してスタートし、2000年4月1日より診療科として形成外科を標榜しました。2007年4月より外科の中で診療を行ってききましたが、2009年7月より形成外科は外科から独立した診療科となりました。

当院は形成外科学会の教育認定施設に認定され、形成外科専門医取得のための卒後教育にも当たっています。新専門医制度では、大阪大学形成外科の中でのカリキュラムとなっています。

当科は、自科で行う診療および複数の科とのチーム医療における再建外科を2本の柱として行ってきました。院内での腫瘍外科手術の増加に伴い、チーム医療における再建外科としての比率が形成外科単独手術の約2倍となっています。

自科としての診療では、主に顔面、頭頸部の皮膚悪性腫瘍、眼瞼形成術、皮膚腫瘍、ケロイド、瘢痕拘縮などの皮膚外科手術を扱っています。

顔面の皮膚癌について、当科ではできるだけ整容的にそして侵襲を少なく治療するために、植皮方法や皮弁の切開線の工夫を行ってきました。顔面の腫瘍の中でも特に眼瞼の腫瘍は、腫瘍の治療という点からだけでなく、眼瞼の機能、および整容的にも満足いく治療を行うのが重要と考えて治療方針を決め、術式も工夫を行っています。また眼球近くの癌でも、できるだけぎりぎりまで眼球温存するよう努めています。腫瘍以外では、眼瞼下垂や睫毛内反症、眼瞼外反などの眼瞼の手術を、ほぼ毎週数例以上行っています。特に眼瞼下垂の手術では整容面にも配慮し、眼窩脂肪の固定術の追加などいくつか工夫を行い、できるだけ左右差のない整容的な結果を心がけています。

その他、治療困難な真性のケロイドに対して、切除後の放射線照射療法を含む治療に取り組んでいます。当科は、全国で唯一ケロイドに対して組織内照射を行っていますので、症例や部位に応じて、切除後放射線外照射（電子線照射）あるいは組織内照射を使い分けて治療しています。ケロイドの他にも術後の創部の瘢痕拘縮の修正術も行っています。

もう1つの診療の柱として当科では、院内の外科系各科の癌の切除後の再建に取りくんできました。頭頸部再建、乳癌再建が主なものですが、その他、四肢、体幹の再建も増加しています。頭頸部再建症例は形成外科開設以来300例を超え、大部分がマイクロサージェリーによる遊離皮弁の症例です。外科、耳鼻科、口腔外科、形成外科、放射線科、脳外科などによるチーム医療体制が良好なため、安定した再建成績を維持できており、そのため現在まで再建皮弁の血管吻合部血栓によるトラブルなどの合併症は起こっていません。特に下顎再建では、顔面神経下顎縁枝麻痺による術後の口唇の変形予防のための手術（筋膜移植）も行っています。

乳房再建は、主に自家組織の皮弁による再建を行ってきました。2013年4月よりシリコンインプラントによる乳房再建も保険適応が一部の形で認められたため、

人工乳房による再建をスタートしましたが、2019年7月よりアラガン社のシリコンインプラントによる乳房再建術の保険適応が中止になりましたが、その後ほかのメーカーのインプラントが保険適応になり、インプラントによる乳房再建を再開しています。現在は自家組織の皮弁による乳房再建とインプラントによる再建のどちらも行っています。

当科では手術に際して、整容的にも満足のいく結果になるように様々な術式を工夫していますが、一方で、当院の方針として、整容のみを目的とする美容外科手術による術後の合併症やトラブルについては、原則として診療をしておりません。

今後も悪性腫瘍、顔面の形成、再建外科、眼瞼形成外科、皮膚外科を中心に診療する方針です。

【2020年度 研究発表業績】

A-3

吉龍澄子、白石万紀子：Minimal cheek flap による癌切除後の下眼瞼全層欠損の再建「形成外科」、63(5)：605-613、克誠堂出版、2020年5月

白石万紀子、吉龍澄子、南宏典：頭部皮膚原発腺様嚢胞癌の1例「形成外科」、63(8)：1071-1077、克誠堂出版、2020年8月

B-3

吉龍澄子、白石万紀子、田中宏之、上月志乃：シンポジウム scarless wound healing for better esthetic result 整容面を意識した眼瞼手術 ～切開線・縫合法の工夫から機能と対称性の再建まで～。第32回 日本眼瞼義眼床手術学会、京都市開催中止→WEB開催、2021年2月20日

B-4

吉龍澄子、白石万紀子、大鳥安正、南宏典：当科における緑内障患者の眼瞼下垂手術症例の検討。第31回 日本眼瞼義眼床手術学会、西宮市、2020年2月22日

吉龍澄子、白石万紀子：当科における緑内障患者の眼瞼下垂手術症例の検討。第63回日本形成外科学会総会、名古屋市、2020年8月26-28日

整形外科

三木秀宣

整形外科は運動器疾患全般を扱う診療科であり、頸部・体幹・骨盤から四肢・手足に至るまでその守備範囲は広い。さらに小児から高齢者まで対象患者の年齢層も幅広い。とくに超高齢社会において、ロコモシンドローム（運動器障害）の原因となる骨粗鬆症や関連骨折、腰部脊柱管狭窄症、変形性関節症をいかに予防、治療し、いかに要介護者を減らしていくかが、喫緊の社会的課題となってきた。

これら広範囲に亘る運動器疾患のうち、当科では、1) 関節外科（主として股関節・膝関節）、2) 脊椎外科、3) 小児整形・足の外科4) 骨・軟部腫瘍、の4つの領域を中心に、高度専門診療を担っている。昨年、骨折など一般運動器外傷についても、院内および近隣の整形外科病院・診療所と連携しながら可能な範囲で診療体制を整えている。

股関節外科の分野においては、術前 CT 画像データに基づく術中ナビゲーションを用いたより高精度の人工股関節全置換術を導入・推進し、術後脱臼などの合併症をへらしつつ、制限のない日常生活に復帰させることが可能となっている。膝関節外科については、術後の早期社会復帰を目指した最小侵襲手技（MIS）による全人工膝関節置換術やより低侵襲の片側型人工膝関節置換術も積極的に行っている。さらに脊椎外科分野においても、種々の脊椎変性疾患のみならず化膿性脊椎炎、転移性脊椎腫瘍などに対しても、前方・後方からの脊髄・神経根除圧に加え、各種脊椎インストルメンテーションによる固定手術も積極的に併用し、早期離床・スムーズな社会復帰を図っている。小児整形・足の外科の分野では、骨形成不全症、先天性股関節脱臼や先天性内反足、ペルテス病、大腿骨頭すべり症、先天性二分脊椎に伴う足部変形など幅広い小児運動器疾患に対し高度の専門的治療を提供するとともに、成人の様々な足部変形（ポリオ後遺症や骨折後変形治療など）に対しても、創外固定法を駆使した外科的変形矯正術を行っている。骨・軟部悪性腫瘍（肉腫）に対しては術前・術後化学療法、放射線療法、腫瘍広範切除術および各種患肢再建術を組合せた集学的治療体系を駆使することにより、生命予後の改善を図ると共に良好な術後患肢機能の再建に取り組んでいる。

これら高度な運動器専門診療レベルを維持し、今後さらに発展させるべく、治療成績を解析し学会発表や論文報告を積極的に行うとともに、大阪大学整形外科グループの基幹施設として整形外科専門医を目指す若手スタッフ・レジデントの一般整形外科診療を含む教育や手術トレーニング、医学部学生に対するクリニカルクラークシップなども重視していくことにより、臨床診療・研究・教育においてバランスの取れた高レベルの運動器疾患専門診療の充実を心掛けている。

【2020年度 研究発表業績】

A-0

Endo M, Takahashi S, Araki N, Sugiura H, Ueda T, Yonemoto T, Takahashi M, Morioka H, Hiraga H, Hiruma T, Kunisada T, Matsumine A, Goda K, Kawai A : Time lapse analysis of tumor response in patients with soft tissue sarcoma treated with trabectedin: A pooled analysis of two phase II clinical trials. *Cancer Med* 27(9): 3656-3667, 2020 年 4 月 1 日

Aono H, Takenaka S, Tobimatsu H, Nagamoto Y, Furuya M, Yamashita T, Ishiguro H, Iwasaki M : Adjacent-segment disease after L3-4 posterior lumbar interbody fusion: does L3-4 fusion have cranial adjacent degeneration similar to that after L4-5 fusion? *J Neurosurg Spine* 33(4), 425-429, 2020 年 4 月 1 日

Takenaka S, Araki N, Ueda T, Kakunaga S, Imura Y, Hamada K, Outani H, Naka N, Myoui A, Yoshikawa H.: Clinical Outcomes of Osteoarticular Extracorporeal Irradiated Autograft for Malignant Bone Tumor. *Sarcoma eCollection* 2020, 2020 年 4 月 1 日

Yasuda N, Takenaka S, Nakai S, Nakai T, Yamada S, Imura Y, Outani H, Hamada K, Yoshikawa H, Naka N : TAS-115 inhibits PDGFR α /AXL/FLT-3 signaling and suppresses lung metastasis of osteosarcoma. *FEBS Open Bio* 10(5):767-779, 2020 年 5 月 1 日

Outani H, Takenaka S, Hamada K, Imura Y, Kakunaga S, Tamiya H, Wakamatsu T, Naka N, Ueda T, Araki N.: A long-term follow-up study of extracorporeal irradiated autografts in limb salvage surgery for malignant bone and soft tissue tumors: A minimum follow-up of 10 years after surgery. *J Surg Oncol* 121(8): 1276-1282, 2020 年 6 月 1 日

Urakawa H, Kawai A, Goto T, Hiraga H, Ozaki T, Tsuchiya H, Nakayama R, Naka N, Matsumoto Y, Kobayashi E, Okuma T, Kunisada T, Ando M, Ueda T, Nishida Y : Phase II trial of pazopanib in patients with metastatic or unresectable chemoresistant sarcomas: A Japanese Musculoskeletal Oncology Group study. *Cancer Sci* 111(9): 3303-3312, 2020 年 9 月 1 日

Takashima K, Sakai T, Amano S, Hamada H, Ando W, Takao M, Hamasaki T, Nakamura N, Sugano N : Does a computed tomography-based navigation system reduce the risk of dislocation after total hip arthroplasty in patients with osteonecrosis of the femoral head? A propensity score analysis. *J Artif Organs* 33(4): 247-254, 2020 年 9 月 15 日

Nakamura T, Sugaya J, Naka N, Kobayashi H, Okuma T, Kunisada T, Asanuma K, Outani H, Nishimura S, Kawashima H, Akiyama T, Yasuda T, Miwa S, Sudo A, Ueda T : Standard treatment remains the recommended approach for patients with bone sarcoma who underwent unplanned surgery: report from the Japanese Musculoskeletal Oncology Group. *Cancer Manag Res* 12: 10017-10022, 2020 年 10 月 12 日

Iwata S, Kawai A, Ueda T, Ishii T, Japanese Musculoskeletal Oncology Group (JMOG) : Symptomatic Venous Thromboembolism in Patients with Malignant Bone and Soft Tissue

Tumors: A Prospective Multicenter Cohort Study. Ann Surg Oncol online ahead of print, 2020 年 11 月 4 日

Outani H, Kobayashi E, Wasa J, Saito M, Takenaka S, Hayakawa K, Endo M, Takeuchi A, Kobayashi H, Kito M, Morii T, Imanishi J, Ueda T : Clinical outcomes of patients with metastatic solitary fibrous tumors: A Japanese Musculoskeletal Oncology Group (JMOG) multiinstitutional study. Ann Surg Oncol online ahead of print , 2020 年 11 月 4 日

Nishida Y, Urakawa H, Nakayama R, Kobayashi E, Ozaki T, Ae K, Matsumoto Y, Tsuchiya H, Goto T, Hiraga H, Naka N, Takahashi S, Ando Y, Ando M, Kuwatsuka Y, Hamada S, Ueda T, Kawai A : Phase II clinical trial of pazopanib for patients with unresectable or metastatic malignant peripheral nerve sheath tumors. Int J Cancer 148(1): 140-149, 2021 年 1 月 1 日

Nakahara I, Kyo T, Kuroda Y, Miki H: [Does difference in stem design affect accuracy of stem alignment in total hip arthroplasty with a CT-based navigation system?](#) J Artif Organs. 24(1): 74-81, 2021 年 3 月 1 日

A-2

上田孝文、角永茂樹 : 肉腫の薬物療法、骨の肉腫、周術期化学療法「日本臨牀増刊号肉腫、基礎・臨床の最新知見」78 (5) : 420-426、日本臨牀社、東京、2020 年 10 月 31 日

A-3

峠憲太郎、宮本隆司、岩本圭史 : 先取り鎮痛による人工膝関節全置換術後疼痛への効果「日本関節鏡・膝・スポーツ整形外科学会雑誌」45 (2) : 448-449、2020 年 4 月 1 日

北田誠、中田活也 : 大腿骨ステム設置支援患者固有テンプレート (PST)「関節外科」39 (6) :71-77、2020 年 6 月 15 日

黒田泰生、中原一郎、三木秀宣 : 当院における Vancouver 分類 Type B 大腿骨ステム周囲骨折症例の治療経験「Hip Joint」46(1):516-518、2020 年 8 月 25 日

中原一郎、黒田泰生、三木秀宣 : カップ側・ステム側ともナビゲーションを使用した THA 症例の成績調査「Hip Joint」46(1):231-235、2020 年 8 月 25 日

B-2

Kawai A, Nishikawa T, Kawasaki M, Tomatsuri S, Okamura N, Ogawa G, Hirakawa A, Shibata T, Nakamura K, Kakunaga S, Tamura K, Ando M, Ozaki T, Ueda T, Yonemori K: Efficacy and safety of Nivolumab monotherapy in patients with unresectable clear cell sarcoma and alveolar soft part sarcoma (OSCAR trial, NCCH1510): A multicenter, phase 2 clinical trial. Connective Tissue Oncology Society Annual Meeting, Boca Rato (Web),

2020年11月19日

Ishiguro H, Takenaka S, Kashii M, Ukon Y, Nagamoto Y, Furuya M, Makino T, Sakai Y, Kaito T : Concomitant foraminotomy for radiculomyelopathy is directly involved in postoperative upper limb palsy in cervical laminoplasty. 48th Cervical Spine Research Society, Las Vegas (Web), 2020年12月12日

B-3

三木秀宣 : CT ベースナビゲーション人工股関節手術—導入初期の方へ—。第93回日本整形外科学会オンライン学術集会、東京 (Web)、2020年7月27日

三木秀宣 : 当科における CT ナビゲーション人工股関節全置換術の成績。第47回日本股関節学会学術集会、四日市 (Web)、2020年10月23日

宮本隆司 : JOURNEY □ XR (適応と画像診断) スポンサーシップシンポジウム2 究極のTKAはACL再建を目指す。第48回日本関節病学会、神戸 (Web)、2020年10月30日

B-4

名倉温雄、北野元裕、松岡由希子、三木秀宣 : プレート併用下肢骨延長術の治療成績。第33回日本創外固定・骨延長学会、京都 (Web)、2020年9月3日

石黒博之、武中章太、牧野孝洋、坂井勇介、岩崎幹季、柏井将文、海渡貴司 : 椎間孔拡大術を併用した椎弓形成術に発生する術後上肢麻痺の特徴-大阪脊椎脊髄グループデータベース-。第49回日本脊椎脊髄病学会、神戸 (Web)、2020年9月5日

久田原郁夫、角永茂樹、上田孝文、小河原光正、安藤性實 : IV期肺がんにおける骨転移の臨床的検討。第53回日本整形外科学会骨・軟部腫瘍学術集会、札幌 (Web)、2020年9月11日

王谷英達、竹中 聡、濱田健一郎、伊村慶紀、若松 透、田宮大也、角永茂樹、久田原郁夫、上田孝文 : 下肢悪性骨腫瘍に対する患肢温存手術の合併症。第53回日本整形外科学会骨・軟部腫瘍学術集会、札幌 (Web)、2020年9月11日

伊村慶紀、角永茂樹、王谷英達、竹中 聡、若松透、田中太晶、田宮大也、濱田健一郎、中 紀文、名井 陽、荒木信人、久田原郁夫、上田孝文、吉川秀樹 : 当院および関連施設における血管肉腫の治療成績。第53回日本整形外科学会骨・軟部腫瘍学術集会、札幌 (Web)、2020年9月11日

伊村慶紀、王谷英達、角永茂樹、竹中 聡、濱田 健一郎、若松 透、田中太晶、田宮大也、中 紀文、名井 陽、荒木信人、久田原郁夫、上田孝文、吉川 秀樹 : 悪性末梢神経鞘腫瘍の治療成績と予後因子。第53回日本整形外科学会骨・軟部腫瘍学

術集会、札幌 (Web)、2020 年 9 月 11 日

田宮大也、井上陽公、伊村慶紀、若松 透、田中太晶、中 紀文、王谷英達、竹中聡、濱田健一郎、角永茂樹、久田原郁夫、上田孝文：80 歳以上の超高齢者と 60-79 歳の高齢者における悪性軟部腫瘍の背景因子、治療因子、予後の違いについての検討。第 53 回日本整形外科学会骨・軟部腫瘍学術集会、札幌 (Web)、2020 年 9 月 11 日

高見晴奈、角永茂樹、久田原郁夫、上田孝文：炎症型の未分化多形肉腫においてドキソルビシン、イフォマイド療法にプレドニゾロンの追加投与で著効した 3 例。第 53 回日本整形外科学会骨・軟部腫瘍学術集会、札幌 (Web)、2020 年 9 月 11 日

高嶋和磨、中原一郎、上村圭亮、濱田英敏、安藤 渉、高尾正樹、三木秀宣、菅野伸彦：炭素繊維強化 PEEK 樹脂複合材を用いた大腿骨近位部固定ネイルの臨床的耐久性。第 47 回日本股関節学会学術集会、四日市 (Web)、2020 年 10 月 23 日

高嶋和磨、中原一郎、上村圭亮、濱田英敏、安藤 渉、高尾正樹、三木秀宣、菅野伸彦：炭素繊維強化 PEEK 樹脂複合材を用いた大腿骨近位部固定ネイルの X 線 CT 診断特性。第 47 回日本股関節学会学術集会、四日市 (Web)、2020 年 10 月 23 日

北野元裕、名倉温雄、松岡由希子、三木秀宣：骨形成不全症に生じた外傷性反復性股関節脱臼の 1 例。第 32 回日本整形外科学会骨系統疾患研究会、名古屋 (Web)、2020 年 12 月 5 日

岩本圭史、宮本隆司、峠憲太郎：高度外反膝に対する人工膝関節置換術。第 12 回日本関節鏡・膝・スポーツ整形外科学会 (JOSKAS)、神戸、2020 年 12 月 19 日

峠憲太郎、宮本隆司、岩本圭史：くる病による大腿骨遠位の高度屈曲変形を伴った内反型変形性膝関節症に対して両側人工膝関節全置換術を施行した一例。第 12 回日本関節鏡・膝・スポーツ整形外科学会 (JOSKAS)、神戸、2020 年 12 月 19 日

B-5

角永茂樹：骨軟部肉腫の治療成績－臨床医から病理医への feedback。第 92 回日本病理学会近畿支部学術集会、京都 (Web)、2021 年 2 月 20 日

B-6

高見晴奈、角永茂樹、中井隆彰、上田孝文：炎症型の未分化多形肉腫においてドキソルビシン、イホマイド療法にプレドニゾロンの追加投与で著効した 1 例。第 135 回中部整形外科災害外科・学術集会、出雲 (Web)、2020 年 10 月 9 日

中井隆彰、角永茂樹、佐々木うらら：足底部滑膜肉腫の診断後、FDG-PET/CT にて膝関節近傍に異常集積を認めた一例。第 135 回中部整形外科災害外科・学術集会、出雲 (Web)、2020 年 10 月 9 日

角永茂樹：骨軟部肉腫の治療成績－臨床医から病理医への feedback。第 92 回日本病理学会近畿支部学術集会、京都 (Web)、2021 年 2 月 20 日

中嶋哲史、石黒博之、岩本圭史、青野博之、北野元裕、三木秀宣：恥坐骨骨折に続発した脆弱性仙骨骨折に対して手術加療を要した一例。第 60 回大阪整形外科症例検討会、大阪、2021 年 2 月 27 日

B-8

宮本隆司：Bi-Cruciate Stabilized TKA の基本コンセプト。Journey II TKA Virtual Master Class、東京 (Web)、2020 年 6 月 27 日

宮本隆司：術前計画から術中操作に至るまで難渋した重度変形膝に対する TKA 2020。DePuy Synthes Smart Surgery Symposium、東京 (Web)、2020 年 9 月 11 日

宮本隆司：TKA Complex Primary & Revision の Tips。TKA Complex Primary & Revision Seminar in 三重、津 (Web)、2020 年 11 月 9 日

B-9

三木秀宣：人工股関節の治療など。FM 大阪 Love Flap、大阪、2021 年 3 月 4 日

青野博之：脊椎外科について。FM 大阪 Love Flap、大阪、2021 年 3 月 18 日

④【班研究・研究助成実績の報告書】

助成制度名	氏名（班長・班員・班友の別）	研究課題名	研究代表者	助成金額（研究全体でなく、個別に受け取った額）
科研・基盤研究 (A)19H01176 厚生労働科学研究補助金 難治性疾患政策研究事業	三木秀宣 （研究分担者）	肢関節疾患患者の臨床画像を用いたコンピュータ支援診断・治療システムの開発と評価	奈良先端科学技術大学院大学・佐藤嘉伸	40万円
	三木秀宣 （班員）	特発性大腿骨頭壊死症の医療水準及び患者 QOL 向上に資する大規模多施設研究	大阪大学大学院医学系研究科 運動器医工学治療学・菅野伸彦	10万円

*いずれも医師主導治験として進行中のため、報告書なし

脳神経外科

藤中俊之

脳神経外科では主に脳血管障害、脳腫瘍、頭部外傷などを対象疾患としています。脳血管障害に対しては、脳卒中内科と協力して脳卒中センターとして 24 時間体制で対応しています。当院の脳卒中センターは地域の脳卒中治療の核となるコアPSC に認定されています。急性期脳卒中に対しては、病態に応じて、開頭手術や脳血管内治療などの適切な治療を速やかに行い、発症からできるだけ早期にリハビリテーションを開始するとともに、地域連携パスを利用して後方病院でのスムーズな治療の継続を図っています。また、未破裂脳動脈瘤や慢性期脳血管障害に対しても十分な検討とインフォームドコンセントを行ったうえで積極的に治療を行っています。脳血管内治療に関しては、日本脳神経血管内治療学会専門医・指導医が在籍しており、高度な治療、最新のデバイスを用いた治療を行っています。脳動脈瘤に対するフローダイバーターステンントや脳動静脈奇形、硬膜動静脈瘻に対する液体塞栓物質（Onyx）を用いた治療などの実施医や実施施設が限定されている治療も数多く行っています。他施設での技術指導や全国からの見学者の受け入れも行っており、脳血管内治療分野での指導的施設となっています。新規脳血管内治療機器の治験や市販後調査、多施設共同研究にも積極的に参加しています。

脳腫瘍については、術前に詳細な画像評価を行い、術中はナビゲーションシステムや脳波・筋電図等によるモニタリングを駆使し安全・確実な手術を行っています。なかでも、中枢神経原発腫瘍の代表である神経膠腫に対しては、術中ナビゲーションやモニタリングに加え、5-アミノレブリン酸による蛍光反応ガイド下に手術を行うことで、機能温存を図りながら最大限の摘出を行うように努めています。特に機能的に重要な部位に発生した腫瘍においては、言語や高次機能を損なうことなく安全に手術を行うため麻酔科、リハビリテーション科の協力のもと覚醒下手術も行っています。また、化学療法、分子標的薬、放射線治療の進歩により癌種ごとの治療方針が必要となっている転移性脳腫瘍や、希少がんである神経膠種や悪性リンパ腫などに対して、疾患ごとに遺伝子診断など先進的な手法も用いて最適な治療方法を検討し集学的な治療を行っています。

頭部外傷については救命救急センターと連携し重症頭部外傷にも対応しています。個々の外傷患者の背景や病態は様々ですが、それぞれに最善と考えられる治療方針をとるように検討を行っています。

研修医、レジデント教育にも力を入れています。毎週の症例検討会のほかに脳卒中内科、救急医との合同症例検討会、抄読会などを行っています。また、顕微鏡手術については手術室外でもトレーニングが行えるよう、実体顕微鏡や手術顕微鏡を医局やカンファレンスルームに設置しており、シリコンモデルや鶏肉を用いた卓上での組織剥離・血管吻合の練習を奨励しています。当科は日本脳神経外科学会、日本脳神経血管内治療学会の研修施設に認定されており日本脳神経外科学会専門医、日本脳神経血管内治療学会専門医の育成にも注力しています。また、

日本脳卒中の外科学会技術認定指導医も在籍しており、同学会の技術認定医を目指すことも可能です。学会発表も推奨しており種々のサポートを行っています。発表した内容は順次、論文化して国内外の医学雑誌に投稿しています。

【2020年度 研究発表業績】

A-0

Fukai J, Arita H, Umehara T, Yoshioka E, Shofuda T, Kanematsu D, Kodama Y, Mano M, Kinoshita M, Okita Y, Nonaka M, Uda T, Tsuyuguchi N, Sakamoto D, Uematsu Y, Nakao N, Mori K, Kanemura Y: Molecular characteristics and clinical outcomes of elderly patients with IDH-wildtype glioblastomas: comparative study of older and younger cases in Kansai Network cohort. 「Brain Tumor Pathol」 37(2):50-59、2020年4月

Yotsumoto Y, Harada A, Tsugawa J, Ikura Y, Utsunomiya H, Miyatake S, Matsumoto N, Kanemura Y, Hashimoto-Tamaoki T: Infantile macrocephaly and multiple subcutaneous lipomas diagnosed with PTEN hamartoma tumor syndrome: A case report. 「Mol Clin Oncol」 12(4):329-335、2020年4月

Fujita Y, Kinoshita M, Ozaki T, Takano K, Kunimasa K, Kimura M, Inoue T, Tamiya M, Nishino K, Kumagai T, Kishima H, Imamura F: The impact of EGFR mutation status and single brain metastasis on the survival of non-small-cell lung cancer patients with brain metastases. 「Neurooncol Adv」 2(1):2380-2388、2020年5月

Okita Y, Shofuda T, Kanematsu D, Yoshioka E, Kodama Y, Mano M, Kinoshita M, Nonaka M, Fujinaka T, Kanemura Y: The association between 11 C-methionine uptake, IDH gene mutation, and MGMT promoter methylation in patients with grade II and III gliomas. 「Clin Radiol」 75(8):622-628、2020年8月

Imamura H, Sakai N, Matsumoto Y, Yamagami H, Terada T, Fujinaka T, Yoshimura S, Sugi K, Ishii A, Matsumaru Y, Izumi T, Oishi H, Higashi T, Iihara K, Kuwayama N, Ito Y, Nakamura M, Hyodo A, Ogasawara K: Clinical trial of carotid artery stenting using dual-layer CASPER stent for carotid endarterectomy in patients at high and normal risk in the Japanese population. 「J Neurointerv Surg」 15;neurintsurg-2020-016250、2020年9月

Kikuchi Z, Shibahara I, Yamaki T, Yoshioka E, Shofuda T, Ohe R, Matsuda KI, Saito R, Kanamori M, Kanemura Y, Kumabe T, Tominaga T, Sonoda Y: TERT promoter mutation associated with multifocal phenotype and poor prognosis in patients with IDH wild-type glioblastoma. 「Neurooncol Adv」 2(1):vdaa114、2020年9月

Miura S, Kijima N, Fujimori N, Nakagawa T, Nakagawa R, Tachi T, Okita Y, Kanemura Y, Nakajima S, Mano M, Kishima H, Ozawa K, Fujinaka T: Surgical Treatment of Brain Metastasis of Extramammary Paget's Disease: A Case Report. 「NMC Case Rep J」

7(4):189-193、2020年9月

Imahori T, Mizobe T, Fujinaka T, Miura S, Sugihara M, Aihara H, Kohmura E: An Aneurysm at the Origin of a Duplicated Middle Cerebral Artery Treated by Stent-Assisted Coiling Using the "Wrapped-Candy" Low-Profile Visualized Intraluminal Support (LVIS) Technique: A Technical Case Report and Review of the Literature. 「World Neurosurg」 143:353-359、2020年11月

Arita H, Matsushita Y, Machida R, Yamasaki K, Hata N, Ohno M, Yamaguchi S, Sasayama T, Tanaka S, Higuchi F, Iuchi T, Saito K, Kanamori M, Matsuda KI, Miyake Y, Tamura K, Tamai S, Nakamura T, Uda T, Okita Y, Fukai J, Sakamoto D, Hattori Y, Pareira ES, Hatae R, Ishi Y, Miyakita Y, Tanaka K, Takayanagi S, Otani R, Sakaida T, Kobayashi K, Saito R, Kurozumi K, Shofuda T, Nonaka M, Suzuki H, Shibuya M, Komori T, Sasaki H, Mizoguchi M, Kishima H, Nakada M, Sonoda Y, Tominaga T, Nagane M, Nishikawa R, Kanemura Y, Kuchiba A, Narita Y, Ichimura K. TERT promoter mutation confers favorable prognosis regardless of 1p/19q status in adult diffuse gliomas with IDH1/2 mutations. 「Acta Neuropathol Commun」 8(1):201、2020年11月

Achiha T, Kijima N, Kodama Y, Kagawa N, Kinoshita M, Fujimoto Y, Nonaka M, Fukai J, Inoue A, Nishida N, Yamanaka T, Harada A, Mori K, Tsuyuguchi N, Uda T, Ishibashi K, Tomogane Y, Sakamoto D, Shofuda T, Yoshioka E, Kanematsu D, Mano M, Luu B, Taylor MD, Kanemura Y, Kishima H: Activated leukocyte cell adhesion molecule expression correlates with the WNT subgroup in medulloblastoma and is involved in regulating tumor cell proliferation and invasion. 「PLoS One」 15(12):e0243272、2020年12月

Mitani Y, Fukuoka K, Mori M, Arakawa Y, Matsushita Y, Hibiya Y, Honda S, Kobayashi M, Tanami Y, Kanemura Y, Ichimura K, Nakazawa A, Kurihara J, Koh K: Clinical Aggressiveness of TP53-Wild Type Sonic Hedgehog Medulloblastoma With MYCN Amplification, Chromosome 17p Loss, and Chromothripsis. 「J Neuropathol Exp Neurol」 80(2):205-207、2021年1月

Kinoshita M, Arita H, Takahashi M, Uda T, Fukai J, Ishibashi K, Kijima N, Hirayama R, Sakai M, Arisawa A, Takahashi H, Nakanishi K, Kagawa N, Ichimura K, Kanemura Y, Narita Y, Kishima H: Impact of Inversion Time for FLAIR Acquisition on the T2-FLAIR Mismatch Detectability for IDH-Mutant, Non-CODEL Astrocytomas. 「Front Oncol」 10:596448、2021年1月

Shofuda T, Kanemura Y: HDACs and MYC in medulloblastoma: how do HDAC inhibitors control MYC-amplified tumors? 「Neuro Oncol」 23(2):173-174、2021年2月

Fukusumi H, Togo K, Sumida M, Nakamori M, Obika S, Baba K, Shofuda T, Ito D, Okano H, Mochizuki H, Kanemura Y: Alpha-synuclein dynamics in induced pluripotent stem

cell-derived dopaminergic neurons from a Parkinson's disease patient (PARK4) with SNCA triplication. 「FEBS Open Bio」 11(2):354-366、2021 年 2 月

Ozaki T, Nicholson P, Schaafsma JD, Agid R, Krings T, Pikula A, Pereira VM: Endovascular therapy of acute ischemic stroke in patients with large-vessel occlusion associated with active malignancy. 「J Stroke Cerebrovasc Dis」 30(2):105455、2021 年 2 月

Asai K, Nakamura H, Watanabe Y, Nishida T, Sakai M, Arisawa A, Takagaki M, Arita H, Ozaki T, Kagawa N, Fujimoto Y, Nakanishi K, Kinoshita M and Kishima H: Efficacy of endovascular intratumoral embolization for meningioma: assessment using dynamic susceptibility contrast-enhanced perfusion-weighted imaging. 「J Neurointerv Surg」 15;neurintsurg-2020-017116、2021 年 3 月

Li Y, Nonaka M, Kanemura Y, Kodama Y, Mano M, Asai A: A case of medulloblastoma in a patient with fetal ventricular enlargement. 「Childs Nerv Syst」 37(3):977-982、2021 年 3 月

Kinoshita M, Uchikoshi M, Sakai M, Kanemura Y, Kishima H, Nakanishi K: T2-FLAIR Mismatch Sign Is Caused by Long T1 and T2 of IDH-mutant, 1p19q Non-codeleted Astrocytoma. 「Magn Reson Med Sci」 20(1):119-123、2021 年 3 月

Nishikawa M, Inoue A, Ohnishi T, Yano H, Kanemura Y, Kohno S, Ohue S, Ozaki S, Matsumoto S, Suehiro S, Nakamura Y, Shigekawa S, Watanabe H, Kitazawa R, Tanaka J, Kunieda T: CD44 expression in the tumor periphery predicts the responsiveness to bevacizumab in the treatment of recurrent glioblastoma. 「Cancer Med」 10(6):2013-2025、2021 年 3 月

Ito N, M. Asrafuzzaman Riyadh, Shah Adil Ishtiyahq Ahmad, Hattori S, Kanemura Y, Kiyonari H, Abe T, Furuta Y, Sinmyo Y, Kaneko N, Hirota Y, Lupo G, Hatakeyama J, Felemban Athary Abdulhaleem M, Mohammad Badrul Anam, Yamaguchi M, Takeo T, Takebayashi H, Takebayashi M, Oike Y, Nakagata N, Shimamura K, Michael J. Holtzman, Takahashi Y, Guillemot F, Miyakawa T, Sawamoto K, Ohta K: Dysfunction of the proteoglycan Tsukushi causes hydrocephalus through altered neurogenesis in the subventricular zone in mice. 「Science Translational Medicine」 13(587):eaay7896、2021 年 3 月

Nguyen TN, Haussen DC, Qureshi MM, Yamagami H, Fujinaka T, Mansour OY, Abdalkader M, Frankel M, Qiu Z, Taylor A, Lylyk P, Eker OF, Mechtouff L, Piotin M, Lima FO, Mont'Alverne F, Izzath W, Sakai N, Mohammaden M, Al-Bayati AR, Renieri L, Mangiafico S, Ozretic D, Chalumeau V, Ahmad S, Rashid U, Hussain SI, John S, Griffin E, Thornton J, Fiorot JA, Rivera R, Hammami N, Cervantes-Arslanian AM, Dasenbrock HH, Vu HL, Nguyen VQ, Hetts S, Bourcier R, Guile R, Walker M, Sharma

M, Frei D, Jabbour P, Herial N, Al-Mufti F, Ozdemir AO, Aykac O, Gandhi D, Chugh C, Matouk C, Lavoie P, Edgell R, Beer-Furlan A, Chen M, Killer-Oberpfalzer M, Pereira VM, Nicholson P, Huded V, Ohara N, Watanabe D, Shin DH, Magalhaes PS, Kikano R, Ortega-Gutierrez S, Farooqui M, Abou-Hamden A, Amano T, Yamamoto R, Weeks A, Cora EA, Sivan-Hoffmann R, Crosa R, Möhlenbruch M, Nagel S, Al-Jehani H, Sheth SA, Lopez Rivera VS, Siegler JE, Sani AF, Puri AS, Kuhn AL, Bernava G, Machi P, Abud DG, Pontes-Neto OM, Wakhloo AK, Voetsch B, Raz E, Yaghi S, Mehta BP, Kimura N, Murakami M, Lee JS, Hong JM, Fahed R, Walker G, Hagashi E, Cordina SM, Roh HG, Wong K, Arenillas JF, Martinez-Galdamez M, Blasco J, Rodriguez Vasquez A, Fonseca L, Silva ML, Wu TY, John S, Brehm A, Psychogios M, Mack WJ, Tenser M, Todaka T, Fujimura M, Novakovic R, Deguchi J, Sugiura Y, Tokimura H, Khatri R, Kelly M, Peeling L, Murayama Y, Winters HS, Wong J, Teleb M, Payne J, Fukuda H, Miyake K, Shimbo J, Sugimura Y, Uno M, Takenobu Y, Matsumaru Y, Yamada S, Kono R, Kanamaru T, Morimoto M, Iida J, Saini V, Yavagal D, Bushnaq S, Huang W, Linfante I, Kirmani J, Liebeskind DS, Szeder V, Shah R, Devlin TG, Birnbaum L, Luo J, Churojana A, Masoud HE, Lopez CY, Steinfort B, Ma A, Hassan AE, Al Hashmi A, McDermott M, Mokin M, Chebl A, Kargiotis O, Tsivgoulis G, Morris JG, Eskey CJ, Thon J, Rebello L, Altschul D, Cornett O, Singh V, Pandian J, Kulkarni A, Lavados PM, Olavarria VV, Todo K, Yamamoto Y, Silva GS, Geyik S, Johann J, Multani S, Kaliaev A, Sonoda K, Hashimoto H, Alhazzani A, Chung DY, Mayer SA, Fifi JT, Hill MD, Zhang H, Yuan Z, Shang X, Castonguay AC, Gupta R, Jovin TG, Raymond J, Zaidat OO, Nogueira RG; SVIN COVID-19 Registry, the Middle East North Africa Stroke and Interventional Neurotherapies Organization (MENA-SINO); Japanese Society of Vascular and Interventional Neurology Society (JVIN): Decline in subarachnoid haemorrhage volumes associated with the first wave of the COVID-19 pandemic. 「Stroke Vasc Neurol」26:svn-2020-000695、2021年3月

A-2

金村米博：小児脳腫瘍における遺伝子異常「脳神経外科速報 2020年増刊 悪性脳腫瘍のすべて－Neuro-Oncologyの教科書－遺伝子診断時代の臨床リアルワールド」（編集 杉山一彦，橋本直哉）、30-38、メディカ出版、2020年10月1日

A-3

館 哲郎、藤中俊之、西本溪佑、山崎弘輝、村上皓紀、高野浩司、木谷知樹、金村米博、中島 伸：症候性内頸動脈瘤に対する Pipeline Embolization Device の治療成績「脳神経外科ジャーナル」29(12):864-869、2020年12月

木嶋教行，中川智義，三浦慎平，中川僚太，館 哲郎，沖田典子，金村米博，中島 伸，藤中俊之：重症くも膜下出血患者の治療戦略とその転帰「脳卒中の外科」49(2):98-102、2021年3月

A-4

金村米博：NHOにおける臨床研究法の取り組みについて－認定臨床研究審査委員

会の委員長の立場からー「医療」74(6):283-287、2020年6月

金村米博：総論 悪性脳腫瘍の基礎から臨床の現状「Medical Science Digest」46(8):3-5、2020年7月

金村米博、永根基雄：分子分類時代における髄芽腫の治療法選択は？ 新たな分類に基づいた、治療強度の最適化と有効な治療法の開発が望まれる(Q&A)「週刊日本医事新報」5033:51-53、2020年10月

荒川芳輝、金村米博：外視鏡を用いた脳神経外科手術の現状と今後の展望 脳神経外科手術をより安全で正確な治療として進化させることが期待される(Q&A)「週刊日本医事新報」5046:51-52、2021年1月

A-6

中島 伸：突如発生、想定外 レジデントノート 22(1): 175-177, 2020年4月

中島 伸：一般外来研修、はじまる！ レジデントノート 22(3): 607-609, 2020年5月

中島 伸：医学論文作成の手ほどき レジデントノート 22(4): 799-801, 2020年6月

中島 伸：新型コロナウイルス・パンデミックとレジリエント・ヘルスケア(前編) レジデントノート 22(6): 1212-1214, 2020年6月

中島 伸：新型コロナウイルス・パンデミックとレジリエント・ヘルスケア(後編) レジデントノート 22(7): 1385-1387, 2020年8月

中島 伸：果てしなきムンテラ名人への道 レジデントノート 22(9): 1774-1776, 2020年9月

中島 伸：研修医の発表指導(前編) レジデントノート 22(10): 1941-1943, 2020年10月

中島 伸：研修医の発表指導(後編) レジデントノート 22(12): 2344-2346, 2020年11月

中島 伸：手術上達のヒント(その1) レジデントノート 22(13): 2503-2505, 2020年12月

中島 伸：手術上達のヒント(その2) レジデントノート 22(15): 2939-2941, 2021年1月

中島 伸：手術上達のヒント（その 3） レジデントノート 22 (16): 3109-3111, 2021 年 2 月

中島 伸：手術上達のヒント（その 4） レジデントノート 22 (18): 3473-3475, 2021 年 3 月

B-2

Fukusumi H, Shofuda T, Yamamoto A, Sumida M, Handa Y, Kanemura Y: An efficient method for detecting traces of undifferentiated human induced pluripotent stem cells (HiPSCs) among differentiated neural stem/progenitor cells derived from HiPSCs. ISSCR 2020 VIRTUAL, WEB、2020 年 6 月 26 日

Ozaki T, Nicolson P, Schafsma JD, Agid R, Krings T, Pikula A, Pereira VM: IS THROMBECTOMY MORE DIFFICULT IN PATIENTS WITH LVO SECONDARY TO ACTIVE CANCER? A REVIEW OF OUTCOMES IN THIS PATIENT POPULATION. ESO-WSO 2020、WEB、2020 年 11 月 7～9 日

Arakawa Y, Makino Y, Kawauchi T, Tanji M, Mineharu Y, Kanemura Y, Miyamoto S: Retrospective analysis of the combined treatment of vincristine, ACNU, carboplatin and interferon- β plus radiotherapy (VAC-feron-R) in patients with diffuse astrocytoma. 2020 SNO Virtual Meeting、WEB、2020 年 11 月 19 日～21 日

Kijima N, Nakajima Y, Kanematsu D, Shofuda T, Higuchi Y, Suemizu H, Mori K, Kodama Y, Mano M, Sasaki A, Inoue T, Hirato J, Kishima H, Kanemura Y: Establishment of patient-derived xenografts from rare primary brain tumors. 2020 SNO Virtual Meeting、WEB、2020 年 11 月 19 日～21 日

Kinoshita M, Arita H, Takahashi M, Uda T, Fukai J, Ishibashi K, Kijima N, Hirayama R, Sakai M, Arisawa A, Takahashi H, Nakanishi K, Kagawa N, Ichimura K, Kanemura Y, Narita Y, Kishima H: Impact of inversion time for FLAIR acquisition on the T2-FLAIR mismatch detectability for IDH-mutant, non-CODEL astrocytomas. 2020 SNO Virtual Meeting、WEB、2020 年 11 月 19 日～21 日

Takahashi S, Takahashi M, Kinoshita M, Miyake M, Kawaguchi R, Shinojima N, Mukasa A, Saito K, Nagane M, Otani R, Ueki K, Tanaka S, Hata N, Nishikawa R, Arita H, Nonaka M, Tamura K, Tateishi K, Uda T, Fukai J, Okita Y, Tsuyuguchi N, Kanemura Y, Kobayashi K, Sese J, Ichimura K, Narita Y, Hamamoto R: Developing automatic segmentation method for brain tumor MR images that can be used at multiple facilities. 2020 SNO Virtual Meeting、WEB、2020 年 11 月 19 日～21 日

B-3

金村米博、正札智子、隅田美穂、吉岡絵麻、中村雅也、岡野栄之：神経再生治療に用いる iPS 細胞由来神経前駆細胞の製造・品質管理法。第 19 回日本再生医療

学会総会、WEB、2020年5月18日～29日

藤中俊之：CASの未来～Double-Layer micromesh Stent (DLS)への期待～。第26回日本血管内治療学会総会、名古屋市、2020年7月10日

木下 学、有田英之、佐々木貴浩、福間良平、柳澤琢史、成田善孝、金村米博、貴島晴彦：人工知能とビッグデータは精神神経疾患の神経科学に何をもたらすか？。第43回日本神経科学大会、WEB、2020年7月30日

藤中俊之：脳動脈瘤に対する血管内治療の進歩。第40回日本脳神経外科コンGRESS総会、金沢市、2020年8月10日

藤中俊之：フローダイバーター PIPELINE Shield 留置の極意。STROKE2020、WEB、2020年8月23日～25日

藤中俊之：ステント併用コイル塞栓術におけるタイトパッキングを目指した治療戦略。STROKE2020、横浜市、2020年8月24日

藤中俊之、山上 宏、木谷知樹、山本司郎、高野浩司、村上皓紀、西本溪佑、山崎弘輝、澤田遥奈、瀧 毅伊、井出裕季子、桜井 玲、永野恵子、金村米博、中島 伸：急性期広範囲脳梗塞に対する機械的血栓回収療法。STROKE2020、横浜市、2020年8月25日

市村幸一、中野嘉子、金村米博、義岡孝子、平戸純子、原 純一、市川 仁、成田義孝：脳腫瘍の分子診断。第79回日本癌学会学術総会、広島市、2020年10月1日

金村米博：小児・AYA 世代脳腫瘍のゲノム・分子生物学的解析。第79回日本癌学会学術総会、広島市、2020年10月3日

藤中俊之：Hybrid Neurosurgeon が考える直達手術の重要性。一般社団法人日本脳神経外科学会第79回学術総会、岡山市、2020年10月15日

木下 学、有田英之、高橋雅道、宇田武弘、深井順也、石橋謙一、木嶋教行、平山龍一、酒井美緒、有澤亜津子、高橋洋人、香川尚己、市村幸一、金村米博、成田善孝、貴島晴彦：神経膠腫の Radiomics から通常 MRI 撮影へのリバースエンジニアリング 神経膠腫診療に特化した FLAIR 撮影の開発。一般社団法人日本脳神経外科学会第79回学術総会、岡山市、2020年10月15日

中島 伸、山口壽美枝、森 寛泰、竹本雪子、福田貴史：大阪医療センター総合診療科における診療看護師の活動と問題点、そして解決法の提案。第74回国立病院総合医学会 シンポジウム22：Japanese Nurse Practitioner の先進的イノベーション～医師と考える JNP の更なる活動～、Web、2020年10月16日

金村米博、森 鑑二：関西中枢神経腫瘍分子診断ネットワーク Gioma Research Resource Sharing System 構築。一般社団法人日本脳神経外科学会第 79 回学術総会、岡山市、2020 年 10 月 16 日

荒川芳輝、山崎夏維、寺島慶太、山本哲哉、中村英夫、五味 玲、中野嘉子、金村米博、市村幸一、義岡孝子、瀧本哲也、平戸純子、坂本博昭、西川 亮、原 純一、JCCG 脳腫瘍委員会：本邦における小児脳腫瘍診療の向上を目指す多角的アプローチ。一般社団法人日本脳神経外科学会第 79 回学術総会、岡山市、2020 年 10 月 16 日

中島 伸：私の二刀流 ～脳神経外科医として、モノ書きとして～ 特別企画：二刀流の時代を生きる。一般社団法人日本脳神経外科学会第 79 回学術総会、岡山市、2020 年 10 月 17 日

梅原 徹、木下 学、佐々木貴浩、有田英之、吉岡絵麻、正札智子、児玉良典、香川尚己、沖田典子、高野浩司、宇田武弘、深井順也、阪本大輔、森 鑑二、金村米博：機械学習による画像テクスチャ解析を用いた初発膠芽腫の予後推定。一般社団法人日本脳神経外科学会第 79 回学術総会、岡山市、2020 年 10 月 17 日

藤中俊之：PulseRider®を用いた脳動脈瘤塞栓術。第 36 回 NPO 法人日本脳神経血管内治療学会学術総会、京都市、2020 年 11 月 19 日

藤中俊之：CAS (PRECISE®) 再考。第 36 回 NPO 法人日本脳神経血管内治療学会学術総会、京都市、2020 年 11 月 19 日

藤中俊之：脳動脈瘤治療におけるピットフォールとトラブルシューティング。第 36 回 NPO 法人日本脳神経血管内治療学会学術総会、京都市、2020 年 11 月 20 日

藤中俊之：ステント併用コイル塞栓術におけるタイトパッキングを目指した治療戦略。第 36 回 NPO 法人日本脳神経血管内治療学会学術総会、京都市、2020 年 11 月 20 日

高野浩司、金村米博、澤田遥奈、瀧 毅伊、西本溪佑、山崎弘輝、村上皓紀、木谷知樹、中島 伸、藤中俊之：膠芽腫患者における予後因子としての腫瘍摘出率の重要性と分子分類の関係。第 38 回日本脳腫瘍学会学術集会、広島市、2020 年 11 月 29 日

菊池善彰、山本 哲、柴原一陽、松田憲一郎、金村米博、大江倫太郎、金森政之、隈部俊宏、富永悌二、園田順彦：膠芽腫における TERTp 変異の臨床的意義。第 38 回日本脳腫瘍学会学術集会、広島市、2020 年 11 月 30 日

川内 豪、牧野恭秀、吉岡絵麻、正札智子、丹治正大、峰晴陽平、金村米博、荒川

芳輝、宮本 亨：WHO2016年脳腫瘍病理分類を用いた神経膠腫診断の検討。第38回日本脳腫瘍学会学術集会、広島市、2020年11月30日

深井順也、林 宣秀、有田英之、梅原 徹、吉岡絵麻、正札智子、兼松大介、児玉良典、木下 学、沖田典子、埜中正博、宇田武弘、阪本大輔、佐々木貴浩、上松右二、中尾直之、森 鑑二、金村米博：高齢者膠芽腫における分子マーカーと生命予後。第38回日本脳腫瘍学会学術集会、広島市、2020年11月30日

木下 学、成田善孝、金村米博、貴島晴彦：神経膠腫診療における radiomics の現状と未来について。第38回日本脳腫瘍学会学術集会、広島市、2020年11月30日

梅原 徹、木下 学、佐々木貴浩、有田英之、吉岡絵麻、正札智子、児玉良典、平山龍一、木嶋教行、香川尚己、沖田典子、高野浩司、宇田武弘、深井順也、阪本大輔、森鑑二、金村米博：術前画像情報を用いた初発膠芽腫の予後推定の有効性と限界。第38回日本脳腫瘍学会学術集会、広島市、2020年11月30日

高橋雅道、高橋 慧、木下 学、三宅基隆、河口理紗、篠島直樹、武笠晃丈、齊藤邦昭、永根基雄、大谷亮平、植木敬介、田中將太、秦 暢宏、田村 郁、立石健祐、西川 亮、有田英之、埜中正博、深井順也、沖田典子、露口尚弘、金村米博、小林和馬、瀬々 潤、市村幸一、成田善孝、浜本隆二：多施設での利用を目指した深層学習を用いた脳腫瘍領域測定法の開発。第38回日本脳腫瘍学会学術集会、広島市、2020年11月30日

木下 学、打越将人、酒井美緒、金村米博、貴島晴彦、中西克之：T2-FLAIR mismatch sign は IDH-mt 星細胞腫が T1,T2 緩和時間が極めて長いことに起因する。第38回日本脳腫瘍学会学術集会、広島市、2020年11月30日

藤中俊之、尾崎友彦、木谷知樹、西本溪佑、山崎弘輝、澤田遥奈、瀧 毅伊、金村米博、中島 伸、中村 元、貴島晴彦：外傷性頭頸部血管損傷に対する血管内治療の有用性と問題点。第26回日本脳神経外科救急学会、WEB、2021年2月5～6日

藤中俊之：フローダイバーター治療の実際—手技のポイントと現時点での課題—。STROKE2021、福岡市、2021年3月13日

B-4

勝間亜沙子、半田有佳子、兼松大介、山本篤世、吉岡絵麻、福角勇人、隅田美穂、正札智子、金村米博：自動画像解析プログラムを用いた単一幹細胞運動能評価システムの開発。第19回日本再生医療学会総会、WEB、2020年5月18-29日

岡本伸彦、宮 冬樹、角田達彦、金村米博、齋藤伸治、加藤光広、要 匡、柳久美子、小崎健次郎：Aminoacyl-tRNA synthetases 異常症の5家系。第62回日本小児神経学会学術集会、WEB、2020年8月18-20日

堀いくみ、宮 冬樹、中島光子、中村勇治、家田大輔、大橋 圭、根岸 豊、服部文子、安藤直樹、角田達彦、才津浩智、金村米博、小崎健次郎、齋藤伸治：当院でエキソーム解析を実施した小児神経疾患症例の臨床的検討。第 62 回日本小児神経学会学術集会、WEB、2020 年 8 月 18-20 日

藤中俊之、高野浩司、木谷知樹、館 哲郎、村上皓紀、西本溪佑、山崎弘輝、金村米博、中島 伸：大型脳動脈瘤に対する Flow diverter を用いた血管内治療成績。STROKE2020、WEB、2020 年 8 月 23-25 日

木谷知樹、瀧 毅伊、澤田遥奈、山崎弘輝、西本溪佑、村上皓紀、高野浩司、金村米博、中島 伸、藤中俊之：成人発症の後頭蓋窩 pialAVF に対し血管内治療を施行した一例。第 45 回日本脳卒中学会学術集会、WEB、2020 年 8 月 23 日～25 日

林 大誠、檜 彰良、中山良平、児玉良典、眞能正幸、吉岡絵麻、兼松大介、正札智子、金村米博：Modified Cycle-Consistent Adversarial Network を用いた病理組織画像における染色度合いの正規化を伴う病理組織分類。第 39 回日本医用画像工学会大会、WEB、2020 年 9 月 17 日

広川大輔、慶野 大、提箸祐貴、本間博邦、佐藤博信、後藤裕明、山本哲哉、金村米博、正札智子、吉岡絵麻、伊達 勲、西川 亮：髄芽腫における集学的治療に関する現状と考察。一般社団法人日本脳神経外科学会第 79 回学術総会、WEB、2020 年 10 月 15 日～17 日

藤本健二、有田英之、中村大志、田中將太、樋口英未、沖田典子、金村米博、深井順也、阪本大輔、宇田武弘、前原健寿、永根基雄、西川 亮、小森隆司、成田善孝、市村幸一：IDH wildtype LGG において TERT promoter mutation と CNA は重要な予後規定因子である。一般社団法人日本脳神経外科学会第 79 回学術総会、WEB、2020 年 10 月 15 日～17 日

泉本修一、渡邊 啓、中川修宏、森 鑑二、金村米博：脳腫瘍関連てんかんにおける AMPA 受容体拮抗剤ペランパネルの発作抑制効果と腫瘍関連因子との相関。一般社団法人日本脳神経外科学会第 79 回学術総会、WEB、2020 年 10 月 15 日～17 日

藤中俊之、木谷知樹、高野浩司、村上皓紀、西本溪佑、山崎弘輝、澤田遥奈、瀧 毅伊、金村米博、中島 伸：脳動脈瘤に対する Flow Diverter を用いた血管内治療成績。一般社団法人日本脳神経外科学会第 79 回学術総会、WEB、2020 年 10 月 15 日～17 日

西本溪佑、高野浩司、澤田遥奈、瀧 毅伊、山崎弘輝、村上皓紀、木谷知樹、金村米博、中島 伸、藤中俊之：外減圧術を施行された頭部外傷患者の予後に関わる因子。一般社団法人日本脳神経外科学会第 79 回学術総会、WEB、2020 年 10 月 15 日～17 日

深井順也、有田英之、梅原 徹、吉岡絵麻、正札智子、児玉良典、木下 学、沖田典子、埜中正博、宇田武弘、阪本大輔、上松右二、中尾直之、森 鑑二、金村米博：高齢者膠芽腫における分子マーカーと生命予後。一般社団法人日本脳神経外科学会第 79 回学術総会、WEB、2020 年 10 月 15 日～17 日

菊地善彰、山木 哲、柴原一陽、松田憲一朗、金村米博、大江倫太郎、金森政之、隈部俊宏、富永悌二、園田順彦：膠芽腫における TERTp 変異の臨床的意義。一般社団法人日本脳神経外科学会第 79 回学術総会、WEB、2020 年 10 月 15 日～17 日

沖田典子、正札智子、兼松大介、吉岡絵麻、児玉良典、眞能正幸、木下 学、埜中正博、藤中俊之、金村米博：Grade2,3 神経膠腫における MET-PET での IDH 変異と MGMT プロモーターメチル化率の予測。一般社団法人日本脳神経外科学会第 79 回学術総会、WEB、2020 年 10 月 15 日～17 日

牧野恭秀、荒川芳輝、川内 豪、峰晴陽平、丹治正大、吉岡絵麻、正札智子、兼松大介、金村米博、宮本 享：Diffuse astrocytoma に対する VAC-feron-R の治療成績。一般社団法人日本脳神経外科学会第 79 回学術総会、WEB、2020 年 10 月 15 日～17 日

金村米博、宮本 享：Diffuse astrocytoma に対する VAC-feron-R の治療成績。一般社団法人日本脳神経外科学会第 79 回学術総会、WEB、2020 年 10 月 15 日～17 日

上松右二、深井順也、佐々木貴浩、西林宏起、中尾直之、金村米博：IDH-wild Diffuse Astorcytoma, Grade II の臨床病理学的検討。一般社団法人日本脳神経外科学会第 79 回学術総会、WEB、2020 年 10 月 15 日～17 日

尾崎友彦、Nicolson P、Schafsma JD、Agid R、Krings T、Pikula A、Pereira VM：悪性腫瘍を伴う症例における急性期脳梗塞に対する血栓回収療法。一般社団法人日本脳神経外科学会第 79 回学術総会、WEB、2020 年 10 月 15 日～17 日

高野浩司、澤田遥奈、瀧 毅伊、西本溪佑、山崎弘輝、村上皓紀、木谷知樹、金村米博、中島 伸、藤中俊之：当院における術前腫瘍塞栓術の治療成績・合併症の検討。一般社団法人日本脳神経外科学会第 79 回学術総会、WEB、2020 年 10 月 15 日～17 日

山崎弘輝、澤田遥奈、瀧 毅伊、西本溪佑、村上皓紀、木谷知樹、高野浩司、金村米博、中島 伸、藤中俊之：破裂脳動脈瘤に対する意図した二期的治療の有用性。一般社団法人日本脳神経外科学会第 79 回学術総会、WEB、2020 年 10 月 15 日～17 日

村上皓紀、瀧 毅伊、澤田遥奈、山崎弘輝、西本溪佑、高野浩司、木谷知樹、金村米博、中島 伸、藤中俊之：当院における主幹動脈閉塞に対する急性期 STAMCA 吻合術の治療成績。一般社団法人日本脳神経外科学会第 79 回学術総会、WEB、

2020年10月15日～17日

木谷知樹、瀧 毅伊、澤田遥奈、山崎弘輝、西本溪佑、村上皓紀、高野浩司、金村米博、中島 伸、藤中俊之：重症頭部外傷に伴う硬膜動静脈瘻の発生頻度と自然歴。一般社団法人日本脳神経外科学会第79回学術総会、WEB、2020年10月15日～17日

川内 豪、牧野恭秀、正札智子、吉岡絵麻、丹治正大、峰晴陽平、金村米博、荒川芳輝、宮本 享：WHO2016年脳腫瘍病理分類を用いた神経膠腫診断の検討。一般社団法人日本脳神経外科学会第79回学術総会、WEB、2020年10月15日～17日

沖田典子、正札智子、兼松大介、吉岡絵麻、児玉良典、眞能正幸、木下 学、埜中正博、藤中俊之、金村米博：Grade2,3神経膠腫におけるMET-PETでのIDH変異とMGMTプロモーターメチル化率の予測。第58回日本癌治療学会学術集会、京都市、2020年10月24日

尾崎友彦、Hubert Lee、Timo Krings：硬膜からの流入血管を伴う脳動静脈奇形の特徴。第36回NPO法人日本脳神経血管内治療学会学術総会、京都市、WEB、2020年11月19-21日

木谷知樹、瀧 毅伊、澤田遥奈、山崎弘輝、西本溪佑、村上皓紀、高野浩司、尾崎友彦、金村米博、中島 伸、藤中俊之：後方循環非囊状脳動脈瘤に対するFREDの初期使用経験。第36回NPO法人日本脳神経血管内治療学会学術総会、京都市、WEB、2020年11月19-21日

勝間亜沙子、兼松大介、福角勇人、隅田美穂、吉岡絵麻、山本篤世、半田有佳子、正札智子、金村米博：一般実験室における細胞加工物製造設備の簡易モニタリングシステムの考案。第20回日本再生医療学会総会、WEB、2021年3月11日

兼松大介、正札智子、吉岡絵麻、隅田美穂、勝間亜沙子、山本篤世、半田有佳子、福角勇人、中村雅也、岡野栄之、金村米博：間期核FISH法を用いたヒト幹細胞における低頻度モザイク染色体異数性異常細胞の検出法の検討。第20回日本再生医療学会総会、WEB、2021年3月11日

福角勇人、勝間亜沙子、兼松大介、半田有佳子、隅田美穂、山本篤世、吉岡絵麻、正札智子、金村米博：ヒトiPS細胞由来神経系細胞の低酸素耐性能評価システムの開発。第20回日本再生医療学会総会、WEB、2021年3月11日

尾崎友彦、Lee H、Krings T：硬膜からの流入血管を伴う脳動静脈奇形の特徴。STROKE 2021、第46回日本脳卒中学会学術集会、WEB、2021年3月11-13日

B-8

藤中俊之：脳動脈瘤コイル塞栓術 ～塞栓率の向上を目指して～Axium PRIME &

Phenom の特徴を活かした治療戦略。脳血管内治療ブラッシュアップセミナー2020、神戸市、2020年7月3日

藤中俊之：脳動脈瘤に対する血管内治療の進歩と現時点での限界。Osaka Neurological Surgical Conference 2020、大阪市、2020年9月18日

藤中俊之：PIPELINE Shield を用いた血管内治療。中四国エリア Pipeline Shield 研究会、岡山市、2020年12月14日

藤中俊之：脳動脈瘤に対する血管内治療の進歩と現時点での課題。Fujita Bantane Neurosurgical Wednesday Web Seminar、WEB、2021年3月17日

心臓血管外科

吉龍正雄

当院では 従来より“低侵襲化と生活の質（QOL）向上を目指した心臓血管外科治療”を診療基本方針とし、エビデンスに基づきながら個々の症例の病態や背景に則した最善の治療を目指してきました。また、循環器内科や救命救急センターとの緊密な連携下での緊急手術や迅速かつ開かれた病診連携、病々連携により、地域の循環器診療に貢献しています。以下に当科で施行している主な手術の特色を提示します。

冠動脈バイパス手術：低侵襲心拍動下冠動脈バイパス術（±人工心肺）を第一選択とし場合により non touch technique を用いて愛護的に採取した大伏在静脈を使用しています。また、循環器内科と相談しカテーテル治療と組み合わせた hybrid 手術も行っています。更に小切開手術である MIDCAB も行っています。

弁膜症手術：僧帽弁閉鎖不全症では弁形成術を積極的に行うことにより、術後の抗凝固療法の回避および心機能の回復を目指した QOL を考慮した術式選択をしています。また、当院の特徴として再弁手術症例が多く、臨床研究にて再手術術式の妥当性および安全性を確認しています。

また、今年度より MICS(低侵襲心臓手術・小切開心臓手術)を導入し、より侵襲の少ない手術を行うことを予定しています。

大動脈瘤手術：胸部大動脈瘤および腹部大動脈瘤では積極的にステントグラフト治療を適応することにより、高齢者、脳梗塞、腎不全、慢性閉塞性肺疾患等のハイリスク症例や破裂等の緊急症例に対しても飛躍的な低侵襲化が得られています。腹部大動脈瘤に対するステントグラフト治療は早期から導入されており、国立病院機構のネットワーク研究に参加することにより長期成績を検討しています。また、急性大動脈解離では、エントリーが弓部に存在する場合には部分弓部置換術を行い必要に応じて 2 期的ステントグラフト治療を行っています。

近年高齢化による心臓血管外科手術術後の ADL 低下が危惧されていることより、上記の如く低侵襲手術を積極的に取り入れるとともに、呼吸器合併症予防（ASB、CPAP）の工夫や心臓リハビリプログラムによる早期離床を目指しています。また、新しく心臓血管外科に診療看護師（JNP）が配属されたことにより、患者さんに寄り添った治療が可能となっています。

【2020 年度 研究発表業績】

B-5

村上貴志、齋藤哲也、吉龍正雄：開心術後の胸骨離開に対して ネスプロンテープを用いた症例。関西胸部外科学会、WEB、2020 年 6 月 25 日～26 日

皮膚科

小澤健太郎

当科では、国立病院機構が担うべき医療のなかでも皮膚がんを含めた皮膚腫瘍に重点を置いており、その他にも下肢静脈瘤や炎症性皮膚疾患など幅広い領域の皮膚疾患の診断と治療に取り組んでいます。

皮膚腫瘍に関しては良性、悪性を問わずに診療しています。当院は皮膚がんに対する手術療法ならびに化学療法、放射線療法などの集学的な治療を行うことが可能な施設であり、複数の日本皮膚科学会認定皮膚科専門医をはじめ優れたスタッフと恵まれた医療設備のもと、正確な診断と十分な説明、事実に基づいた治療を実践し、皮膚がん患者の社会的な生活の質を第一とした診療を行っています。皮膚腫瘍の診断は容易ではないものも多いため、ダーモスコピーによる非侵襲的検査や皮膚生検を積極的に行い、臨床検査科病理部門との合同カンファレンスを行うことで診断精度を高めています。

また、金属アレルギーや接触皮膚炎、薬疹などのアレルギー性疾患、皮膚潰瘍、自己免疫性水疱症など専門性の高い診療にも対応し、難治性皮膚疾患に関しても、地域の医療施設や近隣の総合病院から患者を積極的に受け入れています。

下肢表在静脈の弁不全によって発生する下肢静脈瘤に対する専門外来を開設し、非侵襲的な超音波ドップラー検査を用いた診療を行うとともに、保存的治療に加えて短期入院による血管内レーザー治療を含めた外科的手術を数多く経験し、良好な治療成績を残しています。

臨床研究としては悪性黒色腫に対する免疫療法の有効性評価、皮膚付属器悪性腫瘍、メルケル細胞癌の疫学調査についての多施設共同研究に参加しています。

教育面では当院は大学病院以外では数少ない日本皮膚科学会認定専門医主研修施設で、新専門医制度においても研修基幹施設に認定されており、多様な皮膚疾患の診療を経験できる体制を整えて、皮膚科専門医育成のための医師教育にも取り組んでいます。

【2020年度 研究発表業績】

A-0

Miura S, Kijima N, Fujimori N, Nakagawa T, Nakagawa R, Tachi T, Okita Y, Kanemura Y, Nakajima S, Mano M, Kishima H, Ozawa K, Fujinaka T : Surgical Treatment of Brain Metastasis of Extramammary Paget's Disease: A Case Report. 「NMC Case Report Journal」 7(4) : P189-193、2020年10月1日

Hirota K, Watanabe D, Koizumi Y, Sakanashi D, Ueji T, Nishida Y, Takeda M, Taguri T, Ozawa K, Mikamo H, Shirasaka T, Uehira T : Observational study of skin and soft-tissue Staphylococcus aureus infection in patients infected with HIV-1 and epidemics of Panton-Valentine leucocidin-positive community-acquired MRSA infection in Osaka, Japan.

「Journal of Infection and Chemotherapy」.26(12):P1254-1259、2020年12月

Morita A, Takahashi H, Ozawa K, Imafuku S, Nakama T, Takahashi K, Matsuyama T, Okubo Y, Zhao Y, Kitamura K, Takei K, Yokoyama M, Hayashi N, Terui T : Long-term analysis of adalimumab in

Japanese patients with moderate to severe hidradenitis suppurativa: Open-label phase 3 results. 「Journal of Dermatology」 48(1):P3-13、2020年10月7日

A-3

原田 潤、益田 知可子、藤森 なぎさ、吉田 裕梨、小澤 健太郎：準緊急的大動脈弁狭窄症手術前に天疱瘡再燃に対して免疫グロブリン大量静注療法を施行した 1 例「皮膚科の臨床」62(9)：P1333-1336、金原出版、2020年8月

B-4

益田知可子、小林佑佳、吉田裕梨、池田彩、原田 潤、小澤健太郎、西江 渉：経過中に抗BP180NC16a抗体が陽性化したDPP-4阻害剤関連水疱性類天疱瘡の1例。第119回日本皮膚科学会総会、Web、2020年6月4日-7日

B-6

池田 彩、益田知可子、小林佑佳、小澤健太郎：日本紅斑熱の1例。第113回近畿皮膚科集談会、大阪/Web、2020年7月19日

出野りか子、吉田裕梨、小林佑佳、益田知可子、文 省太、池田 彩、小澤健太郎、乾 重樹：リンパ球様丘疹症 typeE の1例。第71回日本皮膚科学会中部支部学術大会、Web、2020年10月11日

文 省太、出野りか子、池田 彩、小澤健太郎：皮下腫瘤を呈したMTX関連リンパ増殖性疾患の1例。第481回日本皮膚科学会大阪地方会、Web、2020年12月5日

益田知可子、小林佑佳、吉田裕梨、池田 彩、原田 潤、小澤健太郎、北村三和：手掌に単発した環状肉芽腫の1例。第482回日本皮膚科学会大阪地方会、Web、2020年12月19日

池田 彩、小林佑佳、益田知可子、出野りか子、文 省太、小澤健太郎、山本司郎、家原卓史、小杉準平、上田恭敬：悪性黒色腫に対するペンプロリズマブ導入後に抗横紋筋抗体陽性の重症筋無力症とギラン・バレー症候群を発症した1例。第484回日本皮膚科学会大阪地方会、神戸、Web、2021年3月13日

泌尿器科

西村健作

泌尿器科では悪性腫瘍・尿路結石症をはじめ前立腺肥大症などによる排尿障害や過活動膀胱・神経因性膀胱などの蓄尿障害など多岐にわたる疾患に対する診療を行っています。2020年まで副腎腫瘍・腎癌・腎盂尿管癌・膀胱癌・前立腺癌などにおいて3Dモニターを用いた腹腔鏡手術を標準化し、積極的に行ってきました。

2021年1月からダヴィンチ Xi システムによる低侵襲ロボット支援下手術が始動しました。前立腺癌に対するロボット支援下前立腺全摘除術や腎癌に対するロボット支援下腎部分切除術を標準治療として開始しています。

高画質で立体的な3Dハイビジョンシステムの手術画像のもと完全に医師の操作によって人間の手の動きを正確に再現する装置で、術者は回転する手首を備えた鉗子を使用し、精緻な手術を行うことができます。前立腺全摘除術における膀胱尿道吻合や腎部分切除術における腫瘍切除や尿路・血管縫合はその代表的なものと言えます。また微細な解剖学的構造が鮮明な画像として捉えることが可能であり、前立腺全摘除術における神経温存手術にも有利といえます。

また尿路結石症ではレーザーを用いた経尿道的腎尿管碎石術 (f-TUL) や経皮的腎碎石術を併用したTAPを積極的に行っています。密接に地域連携を行いながら、正確な診断と高い水準の治療を提供できることを基本方針としています。これらの診療内容や治療成績を学会や地域連携フォーラムなどで発表を行い、臨床研究や治験などは悪性腫瘍を中心に積極的に取り組んでいます。

【2020年度 研究発表業績】

A-0

Oka T, Yamamoto Y, Okuda Y, Asakura T, Hatano K, Nakai Y, Nakayama M, Kakimoto KI, Sugai F, Nishimura K. Renal cell carcinoma with central nervous system demyelination caused by nivolumab. IJU Case Rep. 28; 4(1): 44-48、2020年10月

Yamamoto A, Nakai Y, Oka T, Kanaki T, Yamamoto Y, Nagahara A, Nakayama M, Kakimoto KI, Nishimura K. Advanced adrenocortical carcinoma successfully treated with gemcitabine plus capecitabine as second-line chemotherapy. IJU Case Rep. 2020 Aug 30; 3(6): 279-273、2020年10月

Oka T, Hatano K, Okuda Y, Asakura T, Nakai Y, Nakayama M, Kakimoto KI, Kubo C, Nakatsuka SI, Sugai F, Nishimura K. Partial nephrectomy for a Bosniak IV cystic renal mass mimicking a simple renal cyst adjacent to a solid renal tumor. IJU Case Rep. 10; 4(1): 18-21、2020年10月

Hayashi Y, Fujita K, Matsuzaki K, Eich ML, Tomiyama E, Matsushita M, Koh Y, Nakano K, Wang C, Ishizuya Y, Kato T, Hatano K, Kawashima A, Ujike T, Uemura M, Imamura R, Netto GJ, Nonomura N.

Clinical Significance of Hotspot Mutation Analysis of Urinary cell-Free DNA in Urinary Bladder Cancer. Front Oncol. 19; 10: 755、2020年5月

Kato T, Nagahara A, Kawamura N, Nakata N, Soda T, Matsuzaki K, Hatano K, Kawashima A, Ujike T, Tomiyama E, Imamura R, Nishimura K, Takada S, Tsujihata M, Yamaguchi S, Takao T, Nishimura K, Nonomura N, Uemura M. The prognostic impact of immune-related adverse events in metastatic renal cell carcinoma patients treated with nivolumab: a real-world multi-institutional retrospective study. Int J Clin Oncol.. doi: 10.1007/s10147-021-01872-5、2021年1月20日

Tomiyama E, Matsuzaki K, Fujita K, Shiromizu T, Narumi R, Jingushi K, Koh Y, Matsushita M, Nakano K, Hayashi Y, Wang C, Ishizuya Y, Kato T, Hatano K, Kawashima A, Ujike T, Uemura M, Takao T, Adachi J, Tomonaga T, Nonomura N. Proteomic analysis of urinary and tissue-exudative extracellular vesicles to discover novel bladder cancer biomarkers. Cancer sci.; 15. doi:10.1111/cas.14881、2021年3月19日

Matsumura S, Yoshida T, Taniguchi A, Imanaka T, Yamanaka K, Kishikawa H. Primary perirenal angiosarcoma: A preoperative diagnostic challenge. Uro Case Rep. 30; 32:101228. doi: 10.1016、2020年4月

Yoshida T, Matsumura S, Imanaka T, Taniguchi A, Yamanaka K, Kishikawa H, Nishimura K. Malignancy With Immunosuppression After Renal Transplantation: A Competing Risk Analysis. Transplant Proc.; 52(6):1775-1777、2020年7月-8月

Imanaka T, Yoshida T, Oka k, Matsumura S, Yamanaka K, Kishikawa H. Keratinizing Squamous Metaplasia of the Urinary Bladder With White Hair-like Structures. Urology.; 140:e12-e13. doi:10.1016、2020年6月

A-3

山本哲也、松崎恭介、片山欽三、鄭 則秀、西村健作：膀胱癌術後多発肺転移との鑑別が困難であった肺クリプトコッカス症の1例「泌尿器科紀要」66(11):393-395、2020年11月30日

谷 優、蔦原宏一、井之口舜亮、岡 利樹、朝倉寿久、川村憲彦、石河 純、中川勝弘、中川雅史、高尾徹也、山口誓司：リツキシマブ単剤による化学療法が奏功した膀胱原発 MALT リンパ腫の1例「泌尿器科紀要」66(11):397-401、2020年11月30日

朝倉寿久、中井康友、岡 利樹、奥田洋平、波多野浩士、中山雅志、垣本健一、西村和郎：腎細胞癌心筋転移に対してニボルマブが有効であった1例「泌尿器科紀要」66(7):225-228、2020年7月31日

岡 利樹、井之口舜亮、河田信彦、谷 優、朝倉寿久、川村憲彦、中川勝弘、中川雅史、蔦原宏一、高尾徹也、山口誓司：リツキシマブ単剤による化学療法が奏功した膀胱原発 MALT リンパ腫の1例「泌尿器科紀要」67(1):27-30、2021年1月31日

B-4

岡 利樹、松村聡一、野々村大地、松崎恭介、西村健作：当院における金属製尿管ステントの治療成績。第34回日本泌尿器内視鏡学会、岡山、WEB、2020年11月19日

松村聡一、岡 利樹、野々村大地、松崎恭介、西村健作：上腹部手術既往歴を有する体腔鏡下手術の検討。第34回日本泌尿器内視鏡学会、岡山、WEB、2020年11月19日

B-8

松崎恭介：Nivolumab +Ipilimumab 併用療法における経験の共有。第4回腎癌免疫実践セミナー、大阪、2021年2月17日

産科・婦人科

巽 啓司

当院は大阪府の産婦人科診療相互援助システム（OGCS）加盟施設として、産婦人科救急受け入れ施設となっています。産科では、NICUの併設がないため早産や胎児疾患には対応できませんが、母体疾患を中心に積極的に受け入れています。近年ハイリスク妊娠の割合は増加の一途をたどっており、当院でもこの傾向は顕著です。産科合併症は経過が急で、母体・胎児に重篤な異常をきたすことも多いため、胎児心拍モニタリングや超音波機器を駆使した評価法等により、子宮内の胎児の状態を厳重に把握し、必要な場合には遅滞なく介入を行っています。一方、異常のない場合はもちろん合併症をもった場合でも、院内各診療科と緊密に連携して管理することで、できるだけ自然な分娩を経験してもらえるよう努力しています。新しい知識や技術を駆使して、一人一人の妊婦に応じた個別で適切なリスク管理を行うことが当科の基本目標であります。また当科は、AIDS診療拠点病院としてHIV/AIDS合併妊娠を受け入れ、その管理にも積極的に取り組んでいます。

婦人科診療の中心はがん治療であります。当科は大阪における子宮癌治療の草分けとして出発・発展し、全国でも屈指の婦人科がん治療施設です。また日本産科婦人科学会婦人科腫瘍登録を通じて、わが国における婦人科腫瘍診療の発展に貢献しています。一方、子宮筋腫や卵巣嚢腫等の良性疾患も多数取り扱っておりますし、OGCSの受け入れ施設として可能な限り婦人科救急にも対応しています。近年は腹腔鏡下手術の症例数が増加しており、また子宮鏡下手術も積極的に取り入れ、術後後遺症の最少化、機能の温存を考慮しながら、年齢や生活環境なども含めた個々の症例に応じた適切な治療法を提案し実施しています。良性腫瘍だけでなく子宮頸癌や子宮体癌に対する腹腔鏡下悪性腫瘍手術も実施しており、近々ロボット補助下手術も開始予定です。

新専門医制度において、京都大学、近畿大学と連携した産婦人科専門医指導施設であります。また日本婦人科腫瘍学会、日本周産期新生児医学会、日本女性医学会等、サブスペシャリティの専門医研修施設として、若手医師の指導・育成を行っており、全国の医療施設で中心となって活躍している多数の専門医を輩出してきました。また各種臨床試験や治験にも積極的に参加し、新たな治療法の創出に貢献しています。

【2020年度 研究発表業績】

A-0

Yaguchi A, Ban K, Koshida Y, Fujikami Y, Ogura E, Terada A, Akagi K, Matsumoto H, Tobiune T, Okagaki A, Tatsumi K : Pseudo-Meigs Syndrome Caused by a Giant Uterine Leiomyoma with Cystic Degeneration: A Case Report. 「J Nippon Med Sch」 87(2):P80-86、2020年4月15日

Akagi K, Tobiume T, Kawamichi A, Koshida Y, Fujikami Y, Ogura E, Ban K, Matsumoto H, Okagaki A, Tatsumi K : Clear Cell Carcinoma of the Uterine Cervix Arising from an Interstitial Cyst Complicated with Endometriosis: A Case Report. 「Open Journal of Obstetrics and Gynecology」 2021, 11(3): P288-295.、2021年3月18日

B-4

小椋恵利、伴建二、越田裕一郎、藤上友輔、赤木佳奈、松本久宣、飛梅孝子、岡垣篤彦、巽啓司 : 治療に難渋した自然流産後の化膿性筋腫の1例。第72回日本産科婦人科学会学術講演会、東京、2020年4月23日～4月28日

岡垣篤彦 : FM クラウドを使用した災害時総合システム、電子トリアージ、災害掲示板、災害診療記録。第24回日本医療情報学会春季学術大会シンポジウム2020、WEB、2020年6月6日

岡垣篤彦 : COVID-19 パンデミック対策としての広域および医療機関内情報システムの検討、総論。第40回医療情報連合大会 オーガナイザー 公募ワークショップ7、浜松、2020年11月21日

岡垣篤彦 : COVID-19 感染者情報把握のための院内システムの構築。第40回医療情報連合大会 公募ワークショップ7、浜松、2020年11月21日

岡垣篤彦、草深裕光、山本康仁 : COVID-19 感染対策としての情報システム。第22回日本災害情報学会大会、WEB、2020年11月28日

伴建二、森清、越田裕一郎、小椋恵利、藤上友輔、寺田亜希子、赤木佳奈、松本久宣、飛梅孝子、岡垣篤彦、巽啓司 : 子宮頸部原発悪性黒色腫の1例。第62回日本婦人科腫瘍学会学術講演会、仙台、2021年1月29日～1月30日

眼科

大鳥安正

大阪の中心に位置していることから、近畿圏における主要な基幹病院として病診連携・病病連携の重要性を認識し、紹介元と緊密に連絡を取るようしており、特に緑内障・網膜硝子体疾患においては多くの難治性疾患を受け入れ、最終病院として機能しています。各医員は白内障以外に専門分野を標榜しており、情報収集も怠らず、最新で質の高い医療を提供することを心がけています。また、厚生労働省の政策医療感覚器ネットワーク機関としても全国の多施設共同研究に参加しています。

2019年4月から2020年3月の眼科における総手術件数は総計1,613件でした。

白内障：白内障手術件数は最も多く、2020年の白内障単独手術件数は928件でした。入院は両眼4泊5日、片眼3泊4日、片眼1泊2日から選択可能です。白内障手術の待ち期間は平均1か月程度です。**緑内障**：原発開放隅角緑内障は薬物療法が第一選択ですが、薬物療法で眼圧下降が十分でない場合には外科的治療（2020年の緑内障手術件数は422件）を行っています。低侵襲緑内障手術（Minimally Invasive Glaucoma Surgery, MIGS）も採用しております。また、複数回の緑内障手術でも眼圧下降が得られないような難治な緑内障に対してはチューブシャント手術を行っています。**網膜・硝子体手術**：増殖糖尿病網膜症、増殖硝子体網膜症、網膜剥離、黄斑部手術などを中心に積極的に行っています。2020年には硝子体手術230件が行われ、網膜剥離症例では症例に応じて初診当日入院・当日手術も行っています。硝子体手術は25ゲージシステムによる低侵襲硝子体手術を実施し良好な成績を得ています。手術加療だけでなく、加齢黄斑変性、網膜静脈分枝閉塞症や糖尿病黄斑浮腫などに対する抗Vascular Endothelial Growth Factor（VEGF）抗体の硝子体内注射も積極的に行っています。**その他（眼形成・翼状片など）**：翼状片手術、眼瞼内反症手術など32件の手術が行われました。眼部悪性腫瘍は当院の形成外科と連携しております。当院はHIV/AIDS先端医療開発センターであるため、免疫・感染症内科との連携によりサイトメガロウイルス網膜炎などのHIV眼合併症の治療も多数行っています。

【2020年度 研究発表業績】

A-0

Matsuoka T, Matsuda S, Harino S, Kumoi M, Tachibana E, Yokoyama J, Tsujino C, Kazuo K, Otori Y: Subarachnoid hemorrhage-negative Terson syndrome after intracranial artery treatment with a flow diverter device. Am J Ophthalmol Case Rep, 20:100978, 2020年10月24日

A-1

大鳥安正：どこで手術に踏み切る？続発緑内障、眼科スゴ技、緑内障の診断・治療・手術「眼科グラフィック」2020年別冊、メディカ出版、2020年5月1日

大鳥安正：小児緑内障「今日の小児治療指針（第17版）」、医学書院、2020年12月1日

A-3

雲井美帆、三木篤也、松下賢治、前田直之、西田幸二：コンタクトレンズセンサーによる緑内障患者の24時間眼圧測定「眼科臨床紀要」2021年1月1日

B-3

大鳥安正：総会長企画、線維柱帯切開術：眼内法と眼外法の効果は同等か？緑内障手術のクリニカルクエスチョン。第44回日本眼科手術学会、京都、Web開催、2021年1月31日

B-4

松岡孝典、部坂優子、河 共美、雲井美帆、橘依里、辻野知栄子、松田 理、大鳥安正：Amsler chartによる緑内障における傍中心視野障害の検出。第31回日本緑内障学会、大分、Web開催、2020年10月30日

雲井美帆、松田 理、松岡孝典、橘 依里、辻野知栄子、大鳥安正：原田病患者の眼内レンズ強膜内固定術後、低眼圧黄斑症にガス注入が奏効した1症例。第74回日本臨床眼科学会、東京、Web開催、2020年11月5日

部坂優子、河 共美、松岡孝典、雲井美帆、橘 依里、辻野知栄子、松田 理、大鳥安正：テノン前転糸をレーザー切糸可能に工夫した線維柱帯切除術の成績。第44回日本眼科手術学会学術総会、京都、Web開催、2020年1月29日

B-5

大鳥安正：人生100年時代の落屑緑内障対策。和歌山市緑内障治療研究会、和歌山、Web開催、2020年10月29日

B-6

雲井美帆：原田病患者の眼内レンズ強膜内固定術後、低眼圧黄斑症にガス注入が奏効したが前房内炎症が遷延する1例。わからん会、大阪、Web開催、2020年10月31日

雲井美帆：末期原田病患者の眼内レンズ固定後の低眼圧黄斑症。第248回O.C.C、大阪、Web開催、2020年11月21日

B-7

大鳥安正：インストラクションコース、Swept source OCT Topcon DRI OCT Triton、

光干渉断層計 (OCT) を用いた緑内障診断。第 74 回日本臨床眼科学会、東京、Web 開催、2020 年 10 月 16 日

大鳥安正：インストラクションコース、濾過手術での術後早期の低眼圧対策、緑内障専門医が教える緑内障術後合併症、これであなたも大丈夫？。第 44 回日本眼科手術学会、京都、Web 開催、2021 年 1 月 29 日

大鳥安正：モーニングセミナー、緑内障の術後管理、私はこうしています！緑内障の術式選択と術後管理を勉強しよう。第 44 回日本眼科手術学会、京都、Web 開催、2021 年 1 月 31 日

大鳥安正：閉塞隅角眼をどう診る？どうする？PACS, PAC, PACG。新・眼科診療アップデートセミナー2021 in Kyoto、京都、Web 開催、2021 年 2 月 21 日

大鳥安正：人生 100 年時代の落屑緑内障対策。Retina Glaucoma Club 2021、大阪、Web 開催、2021 年 3 月 13 日

耳鼻咽喉科

西村 洋

2015年4月1日より、前任科長の堀井の新潟大学教授就任に伴い、交代で私（西村）が大阪府立母子保健総合医療センターより着任しました。北村が大阪府立急性期・総合医療センターへ異動になり、森鼻が大阪大学より李医師が堺市立病院より着任しました。専修医の2名（山村・秋田）は留任しました。一昨年は科長が西村洋（平成5年大阪大学卒）、森鼻哲生（平成11年大阪大学卒業）、李杏菜（平成22年川崎医科大学卒）、山村裕真（平成24年大阪大学卒）、秋田佳名子（平成25年近畿大学卒）です。一昨年度の4名より1名増えて5人体制となりました。2017年4月より山村が大学に戻り当院の研修医であった福田雅俊（平成27年阪大卒）が新たに耳鼻咽喉科の専修医となりました。2017年12月に秋田が退職となりました。2018年3月末で森鼻と李が退職となり、代わりに2018年4月より花田、秋田、中（藤原）が採用になりました。2018年4月末で秋田が退職になり、2018年5月より笹井が採用になりました。2019年3月末で笹井が退職となり、4月より大西恵子医師が採用となりました。2019年6月に大西医師が退職し、7月より武田和也医師が着任しました。2020年3月に武田が退職し、2020年4月より、阪大の鼻・副鼻腔グループから津田医師が着任しました。2020年度末の時点で西村、津田、花田、藤原、和田となっています。

私の専門分野は中内耳手術や難聴などの耳科学で、博士課程（大阪大学大学院耳鼻咽喉科）での研究内容は人工内耳装用者の聴覚の中枢機構を脳血流 PET を用いて解明することでした。この研究の内容は英文科学雑誌 Nature に発表させていただきました。

今年度より当医療センターで診療をし、またその臨床内容に則した形で、患者さんの治療に繋がる研究をやっていけたらと考えています。

【2020年度 研究業績発表】

A-0

Hanada Y, Tsuda T, Wada K, Ogawa K, Tanaka H, Yoshitatsu S, Nishimura H:
A Case of Cochlear Implant Replacement Requiring Full-Thickness Skin Grafting. Ear, Nose & Throat Journal 2021年3月23日

Wada K, Tsuda T, Hanada Y, Maeda Y, Mori K, Nishimura H: A Rare Case of Prostate Carcinoma Metastasis in the Orbital Apex. Ear, Nose & Throat Journal 2020年11月20日

Wada K, Tsuda T, Hanada Y, Maeda Y, Mori K, Nishimura H: A Case of Ceruminous Adenocarcinoma Not Otherwise Specified (NOS) in the External Auditory Canal. Ear, Nose & Throat Journal 2020年8月30日

A-2

和田賢人、津田 武、西村 洋：慢性副鼻腔炎疑いにて耳鼻咽喉科を紹介された COVID-19 肺炎例「耳鼻咽喉科臨床」113(12)：P769-774、2020 年 12 月 1 日

B-3

西村 洋、森鼻哲生：当院の中耳真珠腫進展度と聴力の検討。第 29 回 日本耳科学会 総会・学術講演会、山形、2019 年 10 月 10 日

西村 洋、花田有紀子：頭蓋底に進展した治療に難渋した中耳真珠腫の一例。第 30 回日本耳科学会 総会・学術講演会、北九州、2020 年 11 月 13 日

放射線診断科・放射線治療科

栗山啓子 田中英一

放射線診断科では全ての領域の臨床画像診断と、緊急止血や CT ガイド下ドレナージ・生検および肝細胞癌の肝動脈化学塞栓療法（TACE）を行う IVR(Interventional Radiology)の 2 つの部門があり、これらを中心に臨床研究をおこなっている。

2020 年度は常勤医師 5 名、非常勤医師 3 名、および診療放射線技師で連携して臨床研究をおこなった。

画像診断の研究は局所の空間分解能に優れた 3 T の MRI で HIV/AIDS の脳病変の解析と婦人科領域の骨盤 MRI の画質向上を目的とした臨床研究を行った。2 台の 64 列 CT では肺野型肺癌と日和見感染症の病理と臨床データとを対比した研究をおこなった。

2020 年度に再開した研究は、HIV/AIDS と免疫不全患者の非結核性抗酸菌感染症である *Mycobacterium kansasii* の HRCT 画像を解析し、発表予定である。また、2020 年 12 月に緊急災害医療棟に更新された最新の CT により、重症 COVID-19 肺炎の画像解析を開始した。

循環器領域は国立循環器病研究センターと共同研究を行い、着実に成果を上げている。

放射線治療科では外部放射線治療装置（リニアック）を 1 台、高線量率小線源治療装置（remote after loading system : RALS）を 1 台保有しており、これらを用いた臨床研究をおこなっている。

特に、小線源治療の研究に関しては、国内のみならず世界をリードできるよう積極的に学会報告や論文発表をおこなっている。近年、特に画像誘導小線源治療（image-based brachytherapy）の前立腺癌、婦人科腫瘍等への臨床応用拡大の研究をすすめている。2020 年度は、常勤医師 2 名、非常勤医師 2 名、研究医員 1 名で研究をおこなった。小線源治療の対象疾患としては、再発婦人科腫瘍、新鮮子宮頸癌、前立腺癌、舌癌などの頭頸部癌、再発直腸癌などである。

2020 年度に開始もしくは継続中の研究としては、「局所限局口唇癌に対する 3 次元画像誘導高線量率組織内照射単独療法の治療成績および線量一体積評価」、「局所限局可動部舌癌に対する高線量率組織内照射単独療法（54Gy/9 回、1 日 2 回照射）の妥当性に関する急性期粘膜反応の観点からの研究」、「子宮頸部癌新鮮例における画像誘導を用いた小線源治療の最適化」、「前立腺癌の最適な放射線治療法選択に関する後方視的検討」があげられる。いずれも論文投稿中もしくは作成中である。

また、特定臨床研究「前立腺がんに対する高線量率組織内照射単独放射線療法の安全性と有効性を評価する多施設共同検証試験」も研究継続中であるが、残念ながら該当患者がなく患者登録ができなかった。

外部照射は IMRT などの高精度放射線治療の適応拡大に関する研究をすすめており、前立腺癌根治照射以外に、転移性脳腫瘍、脊椎転移、頭頸部癌術後照射、婦人科腫瘍などの臨床例に順次適応拡大をおこなっている。

【2020 年度 研発表業績】

A-0

Kuriyama K, Yanagawa M. CT Diagnosis of Lung Adenocarcinoma: Radiologic-Pathologic Correlation and Growth Rate. Radiology. 297(1):199-200、2020 年 10 月

Tsuboyama T, Takei O, Okada A, Honda T, Kuriyama K. Effect of uterine position and intrapelvic motions on the image quality of 3D T2-weighted MRI of the uterus: Can short prescans predict the non-diagnostic image quality? Eur J Radiol.;130:109186.2020 年 9 月

Kato T, Yoshihara Y, Watanabe D, Fukumoto M, Wada K, Nakakura T, Kuriyama K, Shirasaka T, Murai T. Neurocognitive impairment and gray matter volume reduction in HIV-infected patients. J Neurovirol.. 2020 Aug;26(4):590-601.

Tsuboyama T, Takei O, Okada A, Honda T, Kuriyama K. Comparison of HASTE with multiple signal averaging versus conventional turbo spin echo sequence: a new option for T2-weighted MRI of the female pelvis. Eur Radio. 30(6):3245-3253、2020 年 6 月

Higashi M, Yamada N, Imakita S, Yutani C, Ishibashi-Ueda H, Iihara K, Naito H. CT-pathologic correlation of non-calcified atherosclerotic arterial plaques: a study using carotid endarterectomy specimens.Br J Radiol. 93(1109):20190901、2020 年 5 月

Yamagishi M, Tamaki N, Akasaka T, Ikeda T, Ueshima K, Uemura S, Otsuji Y, ; Yasuki Kihara Y, Kimura K, Kimura T, Kusama Y, Kumita S, Sakuma H, Jinzaki M, Daida H, Takeishi Y, Tada H, Chikamori T, Tsujita K, Teraoka K, Nakajima K, Nakata T, Nakatani S, Nogami A, Node K, Nohara A, Hirayama A, Funabashi N, Miura M, Mochizuki T, Yokoi H, Yoshioka K, Watanabe M, Asanuma T, Ishikawa Y, Ohara T, Kaikita K, Kasai T, Kato E, Kamiyama H, Kawashiri M, Kiso K, Kitagawa K, Kido T, Kinoshita T, Kiriyama T, Kume R, Kurata A, Kurisu S, Kosuge M, Kodani E, Sato A, Shiono Y, Shiomi H, Taki J, Takeuchi M, Tanaka A, Tanaka N, Tanaka R, Nakahashi T, Nakahara T, Nomura A, Hashimoto A, Hayashi K, Higashi M, Hiro T, Fukamachi D, Matsuo H, Matsumoto N, Miyauchi K, Miyagawa M, Yamada Y, Yoshinaga K, Wada H,

Watanabe T, Ozaki Y, Kohsaka S, Shimizu W, Yasuda S, Yoshino H. JCS 2018
Guideline on Diagnosis of Chronic Coronary Heart Diseases. Circ J. doi:
10.1253/circj.CJ-19-1131. Online ahead of print. 2021 年 2 月 16 日

Watanabe Y, Tanaka T, Nishida A, Takahashi H, Fujiwara M, Fujiwara T, Arisawa A,
Yano H, Tomiyama N, Nakamura H, Todo K, Yoshiya K. Improvement of the
diagnostic accuracy for intracranial haemorrhage using deep learning-based computer-
assisted detection. Neuroradiology. 2020 年 10 月 6 日

A-6

山田賢磨、吉田武尊：新型コロナウイルス受け入れ開始から現在に至るまで「国
立病院近畿放射線技師会誌」No.150, P56-63、2020 年 8 月 24 日

北川智彦：関西の研究会集合～研究会の成り立ちから今後の展望～近畿救急撮影
セミナーについて「放射線技術学会近畿支部雑誌」26 (3)、2021 年 2 月

B-2

Kuriyama K. Diagnosis of peripheral lung cancer: Radiologic-pathologic correlation.
76th Korean Congress of Radiology (KCR2020) Seoul, 2020 年 9 月 17 日

Sasamura K, Ito M, Takase Y, Kotsuma T, Oshima Y, Minami Y, Suzuki J, Tanaka E,
Oguchi M, Okuda T, Suzuki K, Yoshioka Y : Comparison of tumor control and QoL score
among 5 different radiotherapy methods for prostate cancer: conventionally fractionated,
moderately or ultra-hypofractionated external beam radiotherapy, low-dose rate or
high-dose rate brachytherapy. American Society for Radiation Oncology 62nd Annual
Meeting. Miami, 2020 年 10 月 25 日

Ito M, Takase Y, Sasamura K, Kotsuma T, Oshima Y, Minami, Y, Suzuki J, Tanaka E,
Oguchi M, Okuda,T, Suzuki K, Yoshioka Y : Comparison of physician-recorded toxicities
and patient-reported outcomes among 5 different radiotherapy methods for prostate
cancer. American Society for Radiation Oncology 62nd Annual Meeting. Miami, 2020
年 10 月 25 日

Sato K, Fujisaki H : New Method to Obtain Suitable Views for Observing Tibial
Bone-Implant Interface after Unicompartmental Knee Arthroplasty. The 53rd Annual
Meeting of TWSRT, 台湾 台南市 2020 年 7 月 4 日

B-4

高見康二、藤原綾子、森 清、栗山啓子：肺悪性腫瘍切断断端に発生した非悪性肺
結節の 2 例。第 37 回日本呼吸器外科学会学術集会 Web 開催、2020 年 9 月 29 日

藤原綾子、高見康二、森 清、眞能正幸、井上敦夫、栗山啓子：当院における婦人
科悪性腫瘍肺転移に対する肺切除性の検討。第 37 回日本呼吸器外科学会学術集
会 Web 開催、2020 年 9 月 29 日

宮原 智、藤原綾子、栗山啓子、森 清、眞能正幸、高見康二：自然退縮の後に再増大を認めた原発性肺癌の3例。第37回日本呼吸器外科学会学術集会 Web開催、2020年9月29日

安藤性實、小河原光正、木村 剛、高見康二、栗山啓子、眞能正幸、森 清：化学療法反復により長期生存が得られた胸腺癌の1例。第43回日本呼吸器内視鏡学会、Web開催、2020年6月26日～27日

小川晴香、石田健一郎、下野圭一郎、岸本健太郎、河本昌雄、眞木亮祐、小島将裕、吉川吉暁、曾我部 拓、上尾光弘、大西光雄：COVID-19患者の緊急血管造影検査における当院内の他職種連携。第48回日本救急医学会総会・学術集会、岐阜市、2020年11月18日

下野圭一郎、石田健一郎、小川晴香、岸本健太郎、河本昌雄、眞木亮祐、田中太助、小島将裕、吉川吉暁、曾我部 拓、大西光雄：経過中に腸腰筋血腫を来たし動脈塞栓術を要した重症 COVID-19 の一例。第48回日本救急医学会総会・学術集会、岐阜市、2020年11月18日

中山明子、松尾千聡、中西絵里奈、柏木英二、藤原政宏、藤原拓也、高橋洋人、田中 壽、渡邊嘉之、富山憲幸：両側延髄外部腫瘍で発症したびまん性大細胞型 B 細胞リンパ腫の1例。第79回日本医学放射線学会総会、WEB開催、2020年5月15日

寺尾千秋、渡邊嘉之、藤原政宏、藤原拓也、松尾千聡、高橋洋人、田中 壽、富山憲幸、中野智仁、清水幹人、望月秀樹：若年で発症した神経軸索スフェロイド形成を伴う遺伝性びまん性白質脳症の1例。第79回日本医学放射線学会総会、WEB開催、2020年5月15日

小川和也、渡邊嘉之、藤原政宏、藤原拓也、松尾千聡、有澤亜津子、高橋洋人、田中 壽、富山憲幸、今井貴夫：蝸牛内神経鞘腫の1例。第79回日本医学放射線学会総会、WEB開催、2020年5月15日

伊藤誠、高瀬裕樹、篠村一磨、古妻理之、大島幸彦、南佳孝、鈴木淳司、田中英二、小口正彦、奥田隆仁、鈴木耕次郎、吉岡靖生：前立腺癌に対する5種類の放射線治療法-有害事象からみた比較-。日本放射線腫瘍学会第33回学術大会、札幌、2020年10月1日

菅原詩織、竹位応輝、岡田敦彦、中原一樹、中尾 弘、東将浩：頸動脈プラーク診断における MP2RAGE の有用性のファントムを用いた検討。第74回国立病院総合医学会、新潟、Web開催、2020年10月17日～11月14日

狭間 竜：銅エッジとタングステンエッジの比較。第74回国立病院総合医学会、新潟、Web開催、2020年10月17日～11月14日

佐藤一哉、藤崎 宏：単顆膝関節形成術(UKA)後の脛骨-インプラント接合面を撮影する新手法。第 74 回国立病院総合医学会、新潟、Web 開催、2020 年 10 月 17 日～11 月 14 日

進藤雅之、岡田敦彦、中原一樹、中尾 弘：1.5T 装置における T2 強調像 multi NEX Single-shot TSE 法におけるパラメータの検討。第 48 回日本磁気共鳴医学会大会、岩手、Web 開催、2020 年 9 月 11 日～10 月 4 日

竹位応輝、岡田敦彦、菅原詩織、中原一樹、中尾 弘、坪山尚寛、東 将浩：頸動脈プラーク診断における MP2RAGE の有用性のファントム実験による検討。第 48 回日本磁気共鳴医学会大会、岩手、Web 開催、2020 年 9 月 11 日～10 月 4 日

岡田敦彦、進藤雅之、竹位応輝、中原一樹、中尾 弘、坪山尚寛：1.5T-MRI 装置における T2 強調像 multi-NEX Single-shot TSE 法のファントム実験。第 48 回日本磁気共鳴医学会大会、岩手、Web 開催、2020 年 9 月 11 日～10 月 4 日

山田賢磨、北川智彦、中尾弘：「感染症対策実施下での診療放射線技師の対応～新型コロナウイルス患者・疑似症への対応～」。第 13 回診療放射線技師合同医療安全セミナーWeb(ホームページ掲載)、2021 年 3 月 12～22 日

B-5

高岡祐史：私の考える小線源治療の今後 ～若手小線源治療医の立場から～。第 19 回九州放射線治療システム研究会、オンライン開催、2021 年 1 月 30 日

B-8

栗山啓子 胸部 X 線の読影：入門編。第 34 回大阪画像診断 IVR セミナー、2021 年 3 月 9 日

山田賢磨：「頭部 CT 評価表」。国立病院近畿放射線技師会頭部読影講習会、Web、2020 年 9 月 26 日

山田賢磨：「症例検討会」。国立病院近畿放射線技師会頭部読影講習会、Web、2020 年 9 月 26 日

山田賢磨：「症例検討～イレウスを中心に～」。国立病院近畿放射線技師会腹部読影講習会、Web、2021 年 2 月 20 日

水野雄貴：医工連携セミナー医療機器・ヘルスケア—製品総論概説 放射線科紹介。次世代医療システム産業化フォーラム Web 会議、大阪医療センター、2021 年 3 月 3 日

口腔外科

有家 巧

当科では口腔、顎、顔面領域に生じる疾患を治療対象としています。すなわち 1) 歯および歯周組織疾患 2) 口腔粘膜疾患 3) 顎骨疾患 4) 唾液腺疾患 5) 顎関節疾患 6) 神経疾患 7) 血液疾患（診断と口腔粘膜出血の処置）8) リンパ系疾患などの口腔外科疾患を扱っています。特に悪性腫瘍の治療においては頭頸部カンファレンスと病理カンファレンスを行い、関連科の協力を得て集学的な治療を積極的に行っています。一方総合病院の口腔外科として、一般開業歯科医院では治療困難な全身管理（全身麻酔下治療および周術期管理を含む）を要する患者さんの歯科治療や、入院患者さんの口腔管理も行っています。なかでも口腔環境は、放射線治療、化学療法、骨髄移植、全身麻酔の術前（上部消化管疾患、肺がん等）、人工呼吸器装着および各種感染症などの患者における治療の遂行および入院期間に影響を与える大きな要因として認識され、十分な対応が求められています。

教育面では当科は歯学部学生の早期臨床体験を受け入れ、歯科医師卒後研修の研修指定病院としてマッチングに参加し、1名の歯科医師臨床研修医を教育しています。また日本口腔外科学会および日本顎関節学会の研修指定機関に指定され、専門医取得のための卒後教育も積極的に行っています。

臨床研究としては口腔顎顔面悪性腫瘍術後における顎骨再建と口腔機能再建、非関節性開口障害の診断と治療をそのテーマとしています。

【2020年度 研究発表業績】

A-3

藤井智子、大西祐一、中野宏祐、梶野晃佑、後藤倫子、白尾浩太郎：上唇に発生した黄色腫の1例「日本口腔外科学会雑誌」66（5）：P.236-239、2020年5月

B-4

有家 巧、白尾浩太郎、藤原彩也香、齋藤佑太、矢谷実英、金山宏幸、鹿野 学：術前PET-CT検査で把握しえなかった下顎歯肉癌を含む同時性4重複癌の1例。第74回国立病院総合医学会、新潟、2020年10月17日～11月14日

白尾浩太郎、鹿野 学、金山宏幸、矢谷実英、藤原彩也香、有家 巧：上顎骨病変を契機に発見された脂腺癌の1例。第65回日本口腔外科学会総会・学術大会、名古屋、2020年11月13日(金)～15日(日)（on Demand 視聴期間：11月13日～12月15日）

B-6

藤原彩也香、齋藤佑太、矢谷実英、金山宏幸、白尾浩太郎、鹿野 学、有家 巧：

喉頭癌の術後 14 年に生じた同時性 4 重複癌の 1 例。第 32 回日本口腔科学会近畿
地方部会、大阪、2020 年 12 月 2 日

B-8

有家 巧：HIV 感染者の歯科治療と口腔症状。令和 2 年度北陸地区 HIV 歯科診療
情報交換会・研修会、金沢（web 開催）、2020 年 2 月 14 日

救命救急センター

大西光雄

救命救急センターでは臨床医学的、社会医学的、基礎医学的な視点、それぞれを活かしリサーチマインドを常に互いに刺激し続けることを意識している。本年度は COVID-19 への対応が診療の中心となったが、診療における工夫や病態の解析、事業継続（BCP）を念頭においた診療体制に関する学会発表を行なった。

専攻医や研修医の教育に関しては、ディープラーニング・アクティブラーニングとなるよう心がけている。症例発表が中心となるが、“根拠”や“理論”を常に確認しながら、多角的な視点で深く事象を分析できるように指導している。専攻医 1 年目の英文症例報告が掲載されたことは嬉しい。

臨床研究に関しては、侵襲時、とくに敗血症の便中エンドトキシンや腸内細菌叢の変化（腸管免疫）、急性呼吸促進症候群といった急性呼吸不全での白血球機能に関する研究を行ない、病態解明を目指している。

病院前の研究に関して、大阪大学や京都大学、大阪府下の救急医療に携わる研究者らによる心停止患者搬送時の救急隊の蘇生記録や搬送後の病院での診療を対象とした心肺蘇生研究に参加している。また、2013 年から大阪市消防と大阪大学が臨床研究を開始した、当センター直近の中央消防から開始し他の救急隊へ拡大させ研究を続けてきた。2021 年度は当センターが競争的研究資金を獲得したため、当センターも加わり傷病発生現場から病院到着までの病態を解明していく。蘇生のガイドラインに影響を与える研究を目標としている。

日本外傷データバンクのデータを用いた研究に参加し、外傷診療の重症度や治療内容と予後に関する疫学的解析を行なっている。当センター医師が筆頭研究者の英文論文も掲載された。

社会医学に関する研究も行なっている。救急搬送患者は、様々な社会的問題を抱えていることが多い。大阪医療センターでは 3 名の救急認定ソーシャルワーカーを有し、救急医療における社会的側面へのアプローチに関し全国的なリーダーシップを発揮している。当センターの取り組みを元に“社会的救命”に関する研究を進めていきたい。

災害医療に関して、高齢者施設の種類と特徴に応じた救急・災害医が関与した災害計画と訓練手法の開発（文部省科研 19K10532）を行なっている。今年度は COVID-19 診療対応のため、高齢者施設における COVID-19 対応に関する現地調査や感染対策に関する講演を行なった。

基礎医学の研究では、爆発外傷の研究を行なっている。研究に必要な装置が大阪大学にあるため研究の場は大阪大学となるが、臨床的に未解明な部分の多い爆発外傷、特に衝撃波に伴う脳損傷の研究を行なっている。文部科学省科研費を獲得（21K09019）できたので、病態解明がさらに進むことを期待している。

今後とも、救急・災害医療研究を通して地域医療をはじめとして医療に貢献しつつ、リサーチマインドを涵養すべく人材育成に注力していきたい。

【2020 年度 研究発表業績】

A-0

Ojima M, Yamamoto N, Hirose T, Hamaguchi S, Tasaki O, Kojima T, Tomono K, Ogura H, Shimazu T: Serial change of neutrophil extracellular traps in tracheal aspirate of patients with acute respiratory distress syndrome: report of three cases, *Journal of Intensive Care*. 2020 8: 25. 2020 年 4 月 10 日
DOI: [10.1186/s40560-020-00444-5](https://doi.org/10.1186/s40560-020-00444-5)

Okada Y, Kiguchi T, Irisawa T, Yoshiya K, Yamada T, Hayakawa K, Noguchi K, Nishimura T, Ishibe T, Yagi Y, Kishimoto M, Shintani H, Hayashi Y, Sogabe T, Morooka T, Sakamoto H, Suzuki K, Nakamura F, Nishioka N, Matsuyama T, Sado J, Matsui S, Shimazu T, Koike K, Kawamura T, Kitamura T, Iwami T, CRITICAL Study Group Investigators :
Association between low pH and unfavorable neurological outcome among out-of-hospital cardiac arrest patients treated by extracorporeal CPR: a prospective observational cohort study in Japan. *Journal of Intensive Care* 8:34. 2020 年 5 月 11 日 DOI: [10.1186/s40560-020-00451-6](https://doi.org/10.1186/s40560-020-00451-6)

Hosomi S, Ohnishi M, Ogura H and Shimazu T: Traumatic brain injury-related inflammatory projection: beyond local inflammatory responses. 「Acute Medicine and Surgery」, 7(1): e520. 2020 年 6 月 4 日 DOI: [10.1002/ams2.520](https://doi.org/10.1002/ams2.520)

Kunii M, Ishida K, Ojima M, Sogabe T, Shimono K, Tanaka T, Ohnishi M. Bilateral vocal cord paralysis in a hanging survivor: a case report. *Acute Medicine and Surgery* 7(1):e519. 2020 年 6 月 8 日 DOI: [10.1002/ams2.519](https://doi.org/10.1002/ams2.519).

Ishida K, Katayama Y, Kitamura T, Hirose T, Nakao S, Tachino J, Umemura Y, Kiguchi T, Matsuyama T, Kiyohara K, Shimazu T and Ohnishi M. Abdominal angiography is associated with reduced in-hospital mortality among pediatric patients with blunt splenic and hepatic injury: A propensity-score-matching study from the national trauma registry in Japan. *Journal of Pediatric Surgery* S0022-3468(20)30533-9. 2020 年 7 月 31 日 DOI: [10.1016/j.jpedsurg.2020.07.029](https://doi.org/10.1016/j.jpedsurg.2020.07.029)

Okada Y, Kiguchi T, Irisawa T, Yoshiya K, Yamada T, Hayakawa K, Noguchi K, Nishimura T, Ishibe T, Yagi Y, Kishimoto M, Shintani H, Hayashi Y, Sogabe T, Morooka T, Sakamoto H, Suzuki K, Nakamura F, Nishioka N, Matsuyama T, Matsui S, Shimazu T, Koike K, Kawamura T, Kitamura T, Iwami T : Predictive accuracy of biomarkers for survival among cardiac arrest patients with hypothermia: a prospective observational cohort study in Japan. *Scandinavian Journal of Trauma, Resuscitation and Emergency Medicine* 28(1):75. 2020 年 8 月 5 日 DOI: [10.1186/s13049-020-00765-2](https://doi.org/10.1186/s13049-020-00765-2)

Katayama Y, Kiyohara K, Komukai S, Kitamura T, Ishida K, Hirose T, Matsuyama T, Kiguchi T, Hirayama A, Shimazu T. The relationship between seasonal influenza and telephone triage for fever: A population-based study in Osaka, Japan. *PLoS One*. 15(8):e0236560. 2020 年 8 月 6 日 DOI: [10.1371/journal.pone.0236560](https://doi.org/10.1371/journal.pone.0236560)

Nakao S, Hirose T, [Ohnishi M](#), Shiozaki T. Comments on "Cerebral oxygenation monitoring during resuscitation by emergency medical technicians: a prospective multicenter observational study". *Acute Medicine and Surgery* 7(1):e553. 2020 年 8 月 11 日 DOI: [10.1002/ams2.553](#)

Nakao S, Katayama Y, Hirayama A, Hirose T, [Ishida K](#), Umemura Y, Tachino J, Kiguchi T, Matsuyama T, Kiyohara K, et al. Trends and outcomes of blunt renal trauma management: a nationwide cohort study in Japan. *World Journal of Emergency Surgery*. 15(1):50. 2020 年 8 月 26 日 DOI: [10.1186/s13017-020-00329-w](#)

Tachino J, Katayama Y, Kitamura T, Kiyohara K, Nakao S, Umemura Y, [Ishida K](#), Hirose T, Nakagawa Y, Shimazu T. Assessment of the interaction effect between injury regions in multiple injuries: A nationwide cohort study in Japan. *Journal of Trauma and Acute Care Surgery*. 90(1):185-190. 2020 年 10 月 5 日 DOI: [10.1097/TA.0000000000002969](#)

[Kosugi S](#), [Shinouchi K](#), [Ueda Y](#), [Abe H](#), [Sogabe T](#), [Ishida K](#), [Mishima T](#), [Ozaki T](#), [Takayasu K](#), [Iida Y](#), [Ohashi T](#), [Toriyama C](#), [Nakamura M](#), [Ueda Y](#), [Sasaki S](#), [Matsumura M](#), [Iehara T](#), [Date M](#), [Ohnishi M](#), [Uematsu M](#), [Koretsune Y](#). Clinical and Angiographic Features of Patients With Out-of-Hospital Cardiac Arrest and Acute Myocardial Infarction. 「*Journal of the American College of Cardiology*」 76(17):1934-1943. 2020 年 10 月 27 日 DOI: [10.1016/j.jacc.2020.08.057](#).

Takegawa R, Hayashida K, Rolston DM, Li T, Miyara SJ, [Ohnishi M](#), Shiozaki T, Becker LB. Near-Infrared Spectroscopy Assessments of Regional Cerebral Oxygen Saturation for the Prediction of Clinical Outcomes in Patients With Cardiac Arrest: A Review of Clinical Impact, Evolution, and Future Directions. 「*Frontiers in Medicine (Lausanne)*」 7:587930. 2020 年 10 月 29 日 DOI: [10.3389/fmed.2020.587930](#)

Okada Y, Kiguchi T, Irisawa T, Yamada T, Yoshiya K, Park C, Nishimura T, Ishibe T, Yagi Y, Kishimoto M, Inoue T, Hayashi Y, [Sogabe T](#), Morooka T, Sakamoto H, Suzuki K, Nakamura F, Matsuyama T, Nishioka N, Kobayashi D, Matsui S, Hirayama A, Yoshimura S, Kimata S, Shimazu T, Ohtsuru S, Kitamura T, Iwami T : Development and Validation of a Clinical Score to Predict Neurological Outcomes in Patients With Out-of-Hospital Cardiac Arrest Treated With Extracorporeal Cardiopulmonary Resuscitation. *JAMA Network Open* 3(11). 2020 年 11 月 2 日 DOI:10.1001/jamanetworkopen.2020.22920

Katayama Y, Kitamura T, Hirose T, Kiyohara K, [Ishida K](#), Tachino J, Nakao S, Kiguchi T, Umemura Y, Noda T, [Tai S](#), [Tsuji J](#), [Masui J](#), [Mizobata Y](#), [Shimazu T](#): Characteristics and outcome of patients triaged by telephone and transported by ambulance: a population-based study in Osaka, Japan. *Acute Medicine and Surgery*. 7(1):e609. 2020 年 11 月 28 日 DOI: [10.1002/ams2.609](#)

Nishioka N, Kobayashi D, Izawa J, Irisawa T, Yamada T, Yoshiya K, Park C, Nishimura T, Ishibe T, Yagi Y, Kiguchi T, Kishimoto M, Inoue T, Hayashi Y, [Sogabe T](#), Morooka T, Sakamoto H, Suzuki K, Nakamura F, Matsuyama T, Okada Y, Matsui S, Hirayama A, Yoshimura S, Kimata S, Shimazu T, Kitamura T, Kawamura T, Iwami T, CRITICAL Study Group Investigators : Association between

serum lactate level during cardiopulmonary resuscitation and survival in adult out-of-hospital cardiac arrest: a multicenter cohort study. *Scientific Reports* 11(1):1639. 2021 年 1 月 15 日
DOI: [10.1038/s41598-020-80774-4](https://doi.org/10.1038/s41598-020-80774-4)

Matsuura H, Ohnishi M, Yoshioka Y, Togami Y, Hosomi S, Umemura Y, Ebihara T, Shimizu K, Ogura H, Shimazu T. Original experimental rat model of blast-induced mild traumatic brain injury: a pilot study. *Brain Injury*. 35(3):368-381. 2021 年 1 月 16 日
DOI: 10.1080/02699052.2020.1861653

Katayama Y, Kitamura T, Kiyohara K, Ishida K, Hirose T, Nakao S, Tachino J, Matsuyama T, Kiguchi T, Umemura Y, Noda T, Nakagawa Y, Shimazu T : Effect of fluid administration on scene to traffic accident patients by EMS personnel: a propensity score-matched study using population-based ambulance records and nationwide trauma registry in Japan. *European Journal of Trauma and Emergency Surgery*. 2021年1月25日 DOI: 10.1007/s00068-020-01590-z

Yoshimura S, Hirayama A, Kiguchi T, Irisawa T, Yamada T, Yoshiya K, Park C, Nishimura T, Ishibe T, Yagi Y, Kishimoto M, Inoue T, Hayashi Y, Sogabe T, Morooka T, Sakamoto H, Suzuki K, Nakamura F, Matsuyama T, Okada Y, Nishioka N, Kobayashi D, Matsui S, Kimata S, Shimazu T, Kitamura T, Iwami T, CRITICAL Study Group Investigators : Trends in In-Hospital Advanced Management and Survival of Out-of-Hospital Cardiac Arrest Among Adults From 2013 to 2017 - A Multicenter, Prospective Registry in Osaka, Japan. *Circulation Journal* 2021 年 2 月 2 日
DOI: [10.1253/circj.CJ-20-1022](https://doi.org/10.1253/circj.CJ-20-1022)

Ebihara T, Shimizu K, Ojima M, Nakamura Y, Mitsuyama Y, Ohnishi M, Ogura H, Shimazu T. Energy Expenditure and oxygen uptake kinetics in critically ill elderly patients. *Journal of Parenteral and Enteral Nutrition*. 2021 年 3 月 11 日 DOI: 10.1002/jpen.2098

Ishida K, Katayama Y, Kitamura T, Hirose T, Nakao S, Tachino J, Umemura Y, Kiguchi T, Matsuyama T, Kiyohara K, Shimazu T, Ohnishi M. Regarding: “Abdominal angiography is associated with reduced in-hospital mortality among pediatric patients with blunt splenic and hepatic injury: A propensity-score-matching study from the national trauma registry in japan”. *Journal of Pediatric Surgery* S0022-3468(21)00248-7. 2021 年 3 月 23 日 DOI: [10.1016/j.jpedsurg.2021.03.015](https://doi.org/10.1016/j.jpedsurg.2021.03.015)

A-1

上尾光弘 : 熱傷では循環管理が大変というけれど 熱傷侵襲と循環管理 「レジデント」 13 (6) : p.31-37、織田 順 企画編、医学出版、東京、2020 年 6 月 1 日

A-2

大西光雄 : 事態対処医療 法執行機関との連携 “災害医療 2020 大規模イベント、テロ対応を含めて” 「日本医師会雑誌」生涯教育シリーズ-98、149 (1) : P350-352、メジカルビュー社、2020 年 6 月 15 日

曾我部 拓、大西光雄：災害現場での医療判断と対応 災害時の慢性疾患への対応 透析
“災害医療 2020 大規模イベント、テロ対応を含めて” 「日本医師会雑誌」生涯教育シリーズ-98、149（1）：P205-206、メジカルビュー社、2020年6月15日

石田健一郎、大西光雄：災害現場での医療判断と対応 災害時の慢性疾患への対応 糖尿病
“災害医療 2020 大規模イベント、テロ対応を含めて” 「日本医師会雑誌」生涯教育シリーズ-98、149（1）、P203-204、メジカルビュー社、2020年6月15日

吉川吉曉、大西光雄：災害現場での医療判断と対応 災害時の慢性疾患への対応 高血圧
“災害医療 2020 大規模イベント、テロ対応を含めて” 「日本医師会雑誌」生涯教育シリーズ-98、149（1）、P 200-202、メジカルビュー社、2020年6月15日

上尾光弘：骨折の創外固定法「今日の治療指針 2021」P.118-119、福井次矢、高木 誠、小室一成編集、医学書院、東京、2021年1月1日

大西光雄：乱用薬物中毒（覚醒剤、大麻、危険ドラッグ、麻薬）「今日の治療指針 2021」
P.151-152、福井次矢、高木 誠、小室一成編集、医学書院、東京、2021年1月1日

青木誠、石田健一郎、苛原隆之、栗原祐太郎、昆 祐理、近藤浩史、篠塚 健、杉山拓也、妹尾聡美、富田啓介、永嶋 太、人見 秀、船曳知弘、松村洋輔、松本純一、丸橋孝昭：
DIRECT REBOAセミナー公式テキスト REBOAハンドブック、へるす出版、2021年3月1日

A-3

松井浩子、竹川良介、大西光雄、門脇裕子、嶋津岳士：アシクロビル脳症の1例 腎機能障害下でのアシクロビル投与に関する考察。「中毒研究」日本中毒学会機関誌 33(3)：P.216-218、へるす出版、2020年9月

A-4

大西光雄：真夏の国際イベント CBRNE 災害の対応に必要な医療従事者教育「アニムス」第25巻(2)、P25-31、アニムス編集委員会、2020年4月1日

廣瀬智也、塩崎忠彦、入澤太郎、中川雄公、大西光雄、小倉裕司、嶋津岳士：日本救急医学会学術集会における一般演題の変遷 1973年から2016年まで「日本救急医学会雑誌」
32(2)：P.57-63、Wiley、2021年2月18日

B-3

大西光雄：衝撃波外傷研究-胸部・腹部・頭部それぞれに与える影響（特別講演）。2020年度衝撃波シンポジウム、WEB、2021年3月5日

大西光雄：救急認定ソーシャルワーカーの役割とその検証（シンポジウム）。第23回日本臨床救急医学会総会・学術集会、東京（WEB）、2020年8月28日（配信9月16日～）

面川弘次、酒井智彦、塩崎忠彦、大西光雄、長谷川亮治、林田純人、佐藤圭一、磯淵久徳、嶋津岳士：救急救命士の将来の処置拡大とガイドライン 脳酸素飽和度(rSO₂)は重症患者の搬出のタイミングの指標となる 現場からの rSO₂測定への取り組み (シンポジウム)。第23回日本臨床救急医学会総会・学術集会、東京 (WEB)、2020年8月27日～28日

中尾俊一郎、竹川良介、塩崎忠彦、舘野丈太郎、廣瀬智也、酒井智彦、村津有紗、大西光雄、嶋津岳士：心停止の蘇生率向上を目指して 2分毎のリズムチェックは必要か? 心停止患者における脳 rSO₂ の変化を用いた心肺蘇生法に関する前後比較研究(中間報告) (シンポジウム)。第48回日本救急医学会総会、学術集会、岐阜、2020年11月20日

舘野丈太郎、塩崎忠彦、中尾俊一郎、竹川良介、村津有紗、廣瀬智也、大西光雄、嶋津岳士：すべての心停止後患者の社会復帰を目指して 脳血管自動調節能を評価することで脳蘇生を解き明かす (シンポジウム)。第48回日本救急医学会総会、学術集会、岐阜、2020年11月18日

B-4

太田裕子、平島園子、畑中眞優子、福森優司、高橋裕美、大西光雄：偶発性低体温症における受傷前 ADL,受傷機転の特徴と MSW 支援内容に関する2施設での検討。第23回日本臨床救急医学会総会・学術集会、東京 (WEB)、2020年8月27日～28日

高橋裕美、大西光雄、福森優司、片山祐介、太田裕子、嶋津岳士：偶発性低体温症例における社会的要因と転帰先との関係の検証 MSW の視点による分析。第23回日本臨床救急医学会総会・学術集会、東京 (WEB)、2020年8月27日～28日

戸上由貴、廣瀬智也、柴田実香、今田優子、波多野弥生、大西光雄、水島靖明、嶋津岳士：一般用かゆみ止め成分入り外皮用薬誤食の危険性 日本中毒情報センターのデータから。第42回日本中毒学会総会・学術集会、鹿児島 (WEB)、2020年9月7～20日

眞木良祐、柏崎正樹、北山聡明、谷口英治：肝門部胆管癌に対する拡大右肝切除・肝外胆管切除術後に発生した肝仮性動脈瘤破裂に対し固有肝動脈塞栓術を施行した1例。第56回日本腹部救急医学会総会、愛知 (名古屋・WEB)、2020年10月8日～11月2日 (オンデマンド配信)

新田佳苗、松岡 梓、眞木良祐、斎藤百合奈、柏崎正樹、玉川浩司、谷口英治：進行・再発乳癌における Eribulin の効果と好中球リンパ球比、リンパ球数の検討。第28回日本乳癌学会学術総会、WEB、2020年10月9日～10月31日 (オンデマンド配信)

福森優司、高橋裕美、三好紀子、松本 恵、大西光雄：自閉症スペクトラムを抱える思春期の子どもと親が対峙する課題の検証 思春期に直面する課題と解決案を掲載したパンフレットの作成。第61回日本児童青年精神医学会総会、兵庫 (WEB)、2020年10月24日

石田健一郎、河本昌雄、眞木良祐、小川晴香、小島将裕、田中太助、下野圭一郎、吉川吉暁、曾我部 拓、上尾光弘、大西光雄：BCP 部門と感染制御部門を柱とした当院の COVID-19 対策本部。第 48 回日本救急医学会総会、学術集会、岐阜、2020 年 11 月 20 日

小島将裕、清水健太郎、兒嶋嵩、小倉裕司、嶋津岳士：敗血症患者における便中エンドトキシンと全身免疫能・腸管免疫の関連性。第 48 回日本救急学会総会・学術集会、岐阜、2020 年 11 月 20 日

小島将裕、眞木良祐、小川晴香、田中太助、下野圭一郎、曾我部 拓、河本昌雄、吉川吉暁、石田健一郎、上尾光弘、大西光雄：人工呼吸管理を要した重症 COVID-19 患者 5 症例の治療に関する検討。第 48 回日本救急学会総会・学術集会、岐阜、2020 年 11 月 18-20 日

下野圭一郎、石田健一郎、小川晴香、岸本健太郎、河本昌雄、眞木良祐、田中太助、小島将裕、吉川吉暁、曾我部 拓、大西光雄：経過中に腸腰筋血腫を来し動脈塞栓術を要した重症 COVID-19 の一例。第 48 回日本救急医学会総会・学術集会、岐阜、2020 年 11 月 18 日

眞木良祐、石田健一郎、小川晴香、田中太助、小島将裕、吉川吉暁、下野圭一郎、曾我部 拓、上尾光弘、中島伸、大西光雄：当院でのアナフィラキシーに対するアドレナリン使用の現状と対策。第 48 回日本救急医学会総会・学術集会、岐阜、2020 年 11 月 19 日

小川晴香、石田健一郎、下野圭一郎、岸本健太郎、河本昌雄、眞木良祐、小島将裕、吉川吉暁、曾我部 拓、上尾光弘、大西光雄：COVID19 患者の緊急血管造影検査における当院内の多職種連携。第 48 回日本救急医学会総会・学術集会、岐阜、2020 年 11 月 20 日

河本昌雄、大西光雄、上尾光弘、島原由美子、曾我部 拓、石田健一郎、小島将裕、吉川吉暁、小川晴香、下野圭一郎、田中太助：災害対応機能を強化した当院のドクターカー編成について。第 48 回日本救急医学会総会・学術集会、岐阜（WEB）、2020 年 11 月 18 日～20 日

石田健一郎、片山祐介、北村哲久、廣瀬智也、中尾俊一郎、舘野丈太郎、梅村穰、大西光雄、嶋津岳士：小児の鈍的肝脾損傷に対する緊急腹部血管造影は低い院内死亡と関連する。第 34 回日本外傷学会総会・学術集会、オンライン、2020 年 12 月 7 日

玉川浩司、柏崎正樹、齋藤百合奈、眞木良祐、松岡梓、新田佳苗、谷口英治：Stage II、III の左側閉塞性大腸癌の中長期成績。第 75 回日本消化器外科学会総会、和歌山（WEB）、2020 年 12 月 15 日～17 日

B-6

石田健一郎、小島将裕、曾我部 拓、宮川幸恵、中野光樹、黒木亮佑、小杉隼平、上田恭敬、大西光雄：心原性院外心停止症例における ECPR 直後に行う体幹部単純 CT 検査の有有用性の検討。第 48 回日本集中治療医学会学術集会、オンライン、2021 年 2 月 12 日

B-8

大西光雄：大阪市消防と病院前を見つめて -rSO₂に関する大阪市消防局との共同研究（講演） 大阪市消防症例検討会 大阪 2019年7月21日

上尾光弘：大阪トライアスロン大会医療班、大阪、2020年10月11日

石田健一郎

DIRECT研究会主催 第2回DIRECT-REBOAオンラインセミナー、当番世話人、2020年10月24日

DIRECT研究会主催 第3回DIRECT-REBOAオンラインセミナー、当番世話人、2020年10月24日

DIRECT研究会主催 第4回DIRECT-REBOAオンラインセミナー、当番世話人、2020年12月6日

DIRECT研究会主催 第5回DIRECT-REBOAオンラインセミナー、当番世話人、2021年3月6日

射場次郎、大西光雄、矢嶋祐一、宮里政史、若井聡智:令和2年度 施設におけるコロナ対策・対応研修「ほんとに怖い！施設での感染拡大～事前準備と早期対応で感染拡大を防ぐ～」文部科学省科学研究費事業「高齢者施設の種類と特徴に応じた救急・災害医が関与した災害計画と訓練手法の開発（19K10532）」大阪（WEB）、2020年12月12日

大西光雄：2020年度 AMAT 隊員養成研修「災害時要配慮者」「災害時に留意すべき疾病」WEB研修（講師）、東京、2021年1月10日

大西光雄：集合研修。主催：公益社団法人 全日本病院協会、一般社団法人 日本医療法人協会、東京、2021年1月30日および2月6日

麻酔科

渋谷博美

麻酔科は、多くの診療科の多岐にわたる手術に対応し、新生児を除く幅広い年齢層の手術麻酔を年間およそ 3500 症例施行しています。社会の高齢化に伴い、年々合併症を伴う手術も増加しています。そのため、麻酔科術前外来にて、麻酔のリスクを評価し、合併症に対して他科へのコンサルトや担当診療科と合同カンファレンスを行うことで、良質な麻酔が施行できるように努めています。このように麻酔科は、各診療科とコミュニケーションをとり、情報共有することで、より一層安全な麻酔を施行しています。

麻酔方法も、吸入麻酔や静脈麻酔による全身麻酔に加え、硬膜外麻酔や経静脈的な鎮痛薬投与、抹消神経ブロックによる鎮痛などを併用し、Patient Controlled Analgesia（自己調節鎮痛法）による痛みのない術後を心がけています。また、増加するハイブリッド手術に対応した麻酔も行っております。

教育面では、医学部の学生のクリニカルクラークシップを受け入れ、実践現場での知識を得てもらい、初期研修医には、手技だけでなく術前評価や麻酔法の選択、合併症に対する対策のほか、手術中の循環管理、術後鎮痛などの周術期管理の研修も行なっています。専攻医に対しては、日本麻酔科学会の認定施設として、また、大阪大学、大阪市立大学、奈良県立医科大学、および関西医科大学の専門研修プログラムの専門医研修連携施設（A）として、専門医になるための深い知識と技術を取得できるように教育しています。

研究面では、周術期管理に難渋した希少な症例の報告や、臨床研究も行っています。麻酔法や輸液の種類や量、周術期の病態変化や術後鎮痛についてなど、retrospective に検証し、質の高い医療ができるように研究を行っているほか、より安全で快適な麻酔

を施行するための麻酔法についての研究も行い、現場につなげています。また、麻酔科の関連学会にも積極的に参加し、研究発表だけでなく、多くの新しい情報の取得と現在の知識の再確認を行っています。

【2020 年度 研究業績発表】

B-4

中嶋真理子、伊藤千明、氏本大介、上田祥弘、天野栄三、渋谷博美：右大動脈弓による気管狭窄を伴う胸部食道切除術において、3D-CT 評価が気管チューブ選択に有用であった 1 例。日本臨床麻酔学会第 40 回大会、WEB、2020 年 11 月 6 日～30 日

原恵理子、中西裕貴子、上田祥弘、伊藤千明、天野栄三、渋谷博美：全身麻酔導入時の喉頭展開が術後外傷性顎関節炎併発の一因と考えられた 1 例。日本臨床麻酔学会第 40 回大会、WEB、2020 年 11 月 6 日～30 日

山中百優、上田祥弘、谷口美奈、石井裕子、天野栄三、渋谷博美：気道確保に難渋した進行性骨化性繊維異形成症患者の麻酔経験。日本臨床麻酔学会第40回大会、WEB、2020年11月6日～30日

竹山恵梨子、桐山有紀、氏本大介、山路寛人、中西裕貴子、渋谷博美：周術期心血管合併症低リスク患者の非心臓手術後に心筋梗塞を発症した一例。日本心臓血管麻酔学会第25回学術大会、WEB、2020年9月20日～11月14日

桐山有紀、中西裕貴子、氏本大介、竹山恵梨子、山路寛人、渋谷博美：心肺蘇生時の胸骨圧迫による動脈損傷のために閉塞性ショックを来した2症例。日本心臓血管麻酔学会第25回学術大会、WEB、2020年9月20日～11月14日

氏本大介、桐山有紀、竹山恵梨子、中西裕貴子、山路寛人：腸間膜牽引症候群が疑われる血圧低下を生じた閉塞性肥大型心筋症の一例。日本心臓血管麻酔学会第25回学術大会、WEB、2020年9月20日～11月14日

中西裕貴子、山路寛人、竹山恵梨子、桐山有紀、氏本大介、天野栄三、渋谷博美：大動脈弁置換後の人工心肺離脱後に術前には認めなかった左房内血栓を経食道心エコーにより同定できた1例。日本心臓血管麻酔学会第25回学術大会、WEB、2020年9月20日～11月14日

臨床検査科

眞能正幸



1.概況

臨床検査部門は病院基本方針の1つである「質の高い医療を維持・発展」の一旦を担うため『精度保証されたデータを迅速に提供すること』を使命としている。当科はいち早く臨床検査室の国際規格であるISO15189認定を平成26年11月13日 国内第86番目の施設として取得した。今年度1月には生理検査部門を含む第4回のサーベイランスを受審した。

また、二交替勤務、輸血管理当直を早期より導入し休日・夜間を含む24時間体制で緊急検査、輸血管理・検査に対応している。今年度はSARS-CoV-2核酸検出検査を4月より開始し5月より術前検査を導入した。現在では24時間体制でPCR検査を実施している。スタッフは医師2名と臨床検査技師44名、検査助手4名で運営している。

・各部門について

外来検査部門：7個のブース中に車椅子用ブース2つを設け、また安静後採血のためのベッドを2台配置し外来患者の採血を実施している。患者待ち時間短縮と外来結果報告を早く行うために採血開始時間を15分早めて8時15分とし、待ち時間短縮等効果を継続している。採血は検査業務の入口であり、その8割以上を臨床検査技師が実施している。また、入院患者の翌日採血予定分の採血管を前日に準備している。併設の一般検査室では検尿、便潜血、穿刺液（髄液、胸腹水等）の検査、原虫や虫卵検出等を中心に検査している。

総合検査部門：血液中心とした体液中の成分を様々な分析機で検査している。緊急検査は30～40分以内、至急検査や診察前検査は約60分以内を目途に診療科に報告している。更に多くの治験にも協力しており、検体の処理や保管を実施している。この他、輸血血液製剤の一元化管理を行い、安全かつ効率的な血液製剤の利用に努めている。

微生物検査部門：臨床検体からの細菌分離、同定検査、薬剤感受性検査の他にインフルエンザウイルスなどの迅速抗原検査や結核菌などの微生物を対象とした検査を行っている。HCV、HBV および HIV のリアルタイム PCR 法による高感度測定や、HIV 薬剤耐性遺伝子解析や MRSA の遺伝子型（POT 法）の検出も行っている。これらの情報は耐性菌週報として院内に発信するとともに、ICT 会議や ICT ラウンド資料、院内抗菌薬適正使用（AST）として院内感染管理に貢献している。

病理検査部門：術中の迅速病理診断や迅速細胞診、100種以上の抗体を備えた免疫染色により症例に応じた治療法の選択に貢献している。高度な専門的病理診断に対応するため4大学より病理専門医を招聘している。

生理検査部門：心電図、脳波、呼吸機能、超音波など実際の患者を対象とした

部門である。循環器系、呼吸器系、消化器系、神経系や聴覚系等の分野の検査を実施し、特に超音波検査についてはエコーセンターとして、各診療科の超音波検査の受付を一括して行っている。

2.活動報告

各種の外部精度管理調査（日本医師会、日本臨床衛生検査技師会、大阪府医師会）に参加している。一例として日本医師会主催の臨床検査精度管理調査の成績（過去6年間）を示す。

	H27年度	H28年度	H29年度	H30年度	R1年度	R2年度
総合評価点	98.1	98.3	98.3	98.8	98.0	98.9

H27年度	H28年度	H29年度	H30年度	H31年度	令和2年度
H27年度	H28年度	H29年度	H30年度	H31年度	令和2年度

臨床検査科として、ISO15189 認定(RML00860)の他、日本臨床細胞学会(No.466)、日本病理学会研修認定施設(No.5011)などの施設認定を取得している。また、細胞検査士(6名)、超音波検査士(5名)、認定輸血検査技師(1名)、糖尿病療養指導士(1名)、認定血液検査技師(1名)、認定臨床微生物検査技師(3名)、認定一般検査技師(1名)の認定技師が在籍している。

3.今後の課題と目標

当科でも世代交代の波は急激に押し寄せている。特に当院は近畿グループの中においても人材育成を担う中心的な施設の1つであり、臨床検査技師の人材育成に力を入れている。特に入職後3年目までの技師を対象に複数部門(総合検査は必須)を積極的に経験させてジェネラリストとしての基礎を育てると共に、自身の適性や今後の方向性を自覚することにより将来認定資格取得を含めた専門性を高める起点となるよう努めている。

チーム医療の推進にも積極的に関わり、糖尿病教室、NST(栄養サポートチーム)、肝臓病教室、ICT(感染対策チーム)での患者指導・情報提供・ラウンド等に参加、さらにISO15189 認定施設としてスタッフへの教育を行ない、診療機能や治験業務の質向上に貢献していく。

現在実施している各種臨床病理カンファレンス(乳腺腫瘍、呼吸器腫瘍、皮膚科疾患、肝生検、肝胆膵腫瘍、骨軟部腫瘍等)を継続し、病理診断や臨床診断・治療の質の向上に今後も努めていく。また、職員研修部との共催で月1回のCPCを充実させ、若手臨床医の教育にも貢献していく。

(文責 末武 貢・眞能 正幸)

【2020 年度 研究発表業績】

A-0

Fukai J, Arita H, Umehara T, Yoshioka E, Shofuda T, Kanematsu D, Kodama Y, Mano M, Kinoshita M, Okita Y, Nonaka M, Uda T, Tsuyuguchi N, Sakamoto D, Uematsu Y, Nakao N, Mori K, Kanemura Y: Molecular characteristics and clinical outcomes of elderly patients with IDH-wildtype glioblastomas: comparative study of older and younger cases in Kansai Network cohort. 「Brain Tumor Pathology」 37(2) : P50-59、2020 年 4 月

Hasegawa H, Nagata Y, Sakakibara Y, Miyake M, Mori K, Masuda N, Mano M, Nakazuru S, Ishida H, Mita E : Breast metastasis from rectal cancer with BRAF V600E mutation: a case report with a review of the literature. 「Clinical Journal Gastroenterology」 13(2):153-157、2020 年 4 月

Okita Y, Shofuda T, Kanematsu D, Yoshioka E, Kodama Y, Mano M, Kinoshita M, Nonaka M, Fujinaka T, Kanemura Y: The association between 11 C-methionine uptake, IDH gene mutation, and MGMT promoter methylation in patients with grade II and III gliomas. 「Clin Radiol」 75(8):622-628、2020 年 8 月 (Epub 2020 年 4 月 19 日)

Wada K, Tsuda T, Hanada Y, Mori K, Nishimura H : A case of ceruminous adenocarcinoma to otherwise specified (NOS) in the external auditory canal. 「Ear, nose, & throat journal」 doi: 10.1016/j.gie.2019.06.010 [Epub ahead of print], 2020 年 8 月 30 日

Miura S, Kijima N, Fujimori N, Nakagawa T, Nakagawa R, Tachi T, Okita Y, Kanemura Y, Nakajima S, Mano M, Kishima H, Ozawa K, Fujinaka T: Surgical Treatment of Brain Metastasis of Extramammary Paget's Disease: A Case Report. 「NMC Case Rep J」 7(4):P189-193、2020 年 9 月

Wada K, Tsuda T, Hanada Y, Maeda Y, Mori K, Nishimura H : A rare case of prostate carcinoma metastasis in the orbital apex. 「Ear, nose & throat journal」 doi: 10.1177/0145561320973783 [Epub ahead of print], 2020 年 11 月 20 日

Otani Y, Mori K, Morikawa N, Mizutani M, Yasojima H, Masuyama M, Mano M, Masuda N. Rechallenge of anti-PD-1/ PD-L1 antibody showed a good response to metastatic breast cancer: a case report. 「Immunotherapy」 13(3) : P189-194, 2021 年 2 月 (Epub 2020 年 11 月 23 日)

Achiha T, Kijima N, Kodama Y, Kagawa N, Kinoshita M, Fujimoto Y, Nonaka M, Fukai J, Inoue A, Nishida N, Yamanaka T, Harada A, Mori K, Tsuyuguchi N, Uda T, Ishibashi K, Tomogane Y, Sakamoto D, Shofuda T, Yoshioka E, Kanematsu D, Mano M, Luu B, Taylor MD, Kanemura Y, Kishima H: Activated leukocyte cell adhesion molecule expression correlates with the WNT subgroup in medulloblastoma and is involved in regulating tumor cell proliferation and invasion. 「PLoS One」 15(12):e0243272、2020 年 12 月

Hirao M, Hamakawa T, Nishikawa K, Takami K, Kato T, Miyamoto A, Miyake M, Doi T, Mano M : Distal gastrectomy for early gastric conduit carcinoma after Ivor-Lewis esophagectomy. 「General Thoracic Cardiovascular Surgery」 69(2): P405-408、2021 年 2 月 (Epub 2020 年 10 月 9 日)。

Li Y, Nonaka M, Kanemura Y, Kodama Y, Mano M, Asai A: A case of medulloblastoma in a patient with fetal ventricular enlargement. 「Childs Nerv Syst」 37(3):977-982、2021 年 3 月

Kobayashi Y, Nishikawa K, Akasaka T, Kato S, Hamakawa T, Yamamoto K, Kobayashi N, Kitakaze M, Maeda S, Uemura M, Miyake M, Hama N, Miyamoto A, Kato T, Miyazaki M, Nakamori S, Mita E, Sekimoto M, Mano M, Hirao M : Retrograde endoscopic submucosal dissection for early thoracic esophageal carcinoma. 「Clinical Journal of Gastroenterology」
Online ahead of print、2021 年 3 月 10 日

A-6

加奥節子 : 日本乳腺甲状腺超音波医学会編 改訂の序「乳房超音波診断ガイドライン改訂第 4 版」 p1. 南江堂、東京、2020 年 9 月 19 日

B-3

眞能正幸 : がんゲノム医療時代の病理 遺伝子検査の精度管理と検査部門のマネジメントについて。第 74 回国立病院総合医学会、新潟 Web 開催 (オンデマンド配信)、2020 年 10 月 17 日-11 月 14 日

眞能正幸 : 「臨床医から病理医へ、病理医から臨床医へのアドバイス、基調講演」。第 74 回日本食道学会学術集会、徳島、12 月 11 日、ハイブリッド開催 (オンデマンド配信 2020 年 12 月 11 日～ 2021 年 1 月 11 日)

B-4

林 大誠、檜 彰良、中山良平、児玉良典、眞能正幸、吉岡絵麻、兼松大介、正札智子、金村米博 : Modified Cycle-Consistent Adversarial Network を用いた病理組織画像における染色度合いの正規化を伴う病理組織分類。第 39 回日本医用画像工学会大会、WEB、 2020 年 9 月 17 日

藤原綾子、高見康二、森 清、眞能正幸、井上敦夫、栗山啓子 : 当院における婦人科悪性腫瘍肺転移に対する肺切除例の検討。第 37 回日本呼吸器外科学会学術集会、WEB 開催、2020 年 9 月 29 日

宮原 智、藤原綾子、栗山啓子、森 清、眞能正幸、高見康二 : 自然退縮の後に再増大を認めた原発性肺癌の 3 例。第 37 回日本呼吸器外科学会学術集会、WEB 開催、2020 年 9 月 29 日

沖田典子、正札智子、兼松大介、吉岡絵麻、児玉良典、眞能正幸、木下 学、埜中正博、藤中俊之、金村米博：Grade2,3 神経膠腫における MET-PET での IDH 変異と MGMT プロモーターメチル化率の予測。一般社団法人日本脳神経外科学会第 79 回学術総会、WEB、2020 年 10 月 15 日～17 日

沖田典子、正札智子、兼松大介、吉岡絵麻、児玉良典、眞能正幸、木下 学、埜中正博、藤中俊之、金村米博：Grade2,3 神経膠腫における MET-PET での IDH 変異と MGMT プロモーターメチル化率の予測。第 58 回日本癌治療学会学術集会、京都市、2020 年 10 月 24 日

藤原佐美、井上真里、中野理美、田口雅子、小野美菜子、江口富夫、福田 修、末武 貢、眞能正幸：MALDI-TOF-MS 購入後の微生物検査の運用について。第 74 回国立病院総合医学会、新潟 Web 開催（オンデマンド配信）、2020 年 10 月 17 日-11 月 14 日

佐々木真依、児玉真由美、西 千夏、初山弘幸、末武 貢、眞能正幸：採血室の開室時間変更による業務改善の取り組み。第 74 回国立病院総合医学会、新潟 Web 開催（オンデマンド配信）、2020 年 10 月 17 日～11 月 14 日

B-5

眞能正幸：消化器病理 基本と新たな発展。第 39 回 日本消化器内視鏡学会近畿セミナー、大阪 Web 開催、リアルタイム配信 2020 年 11 月 29 日、オンデマンド配信 2020 年 12 月 11 日～2021 年 1 月 12 日

国立病院機構共同臨床研究 平成 31 年度 NHO ネットワーク共同研究（西村班研究）

研究課題名「乳房温存と放射線非照射を両立する高精度断端検索システム」

研究責任者： 森 清

緒言：乳癌に対する乳房温存切除術標本の断端検索は、乳頭と癌を結ぶ線に直角に約 5mm 幅で平行に割を入れ評価する方法(連続スライス法)が一般的であるが、側方断端面に垂直方向の割となるため、断端検索高率が悪く、スライス面の間に含まれる断端用製造があってもこれを検出できないことも想定される。また円柱状に切除された乳房温存切除術標本は、重力の影響で、固定中に平坦化する(パンケーキ現象)ため、正確な側方断端面が不明瞭化する。これらの問題を克服するため、名古屋医療センター 乳腺診療チームは、特殊なポリゴン型枠を用いた乳房温存切除術検体の固定と、型枠により平坦化した側方断端面に沿ったスライスを作製することで、高効率的に側方断端を精度高く検索する検索法(ポリゴンメソッド、以下「ポ法」)を開発し、日常の診療に使用している。今回の研究では、名古屋医療センター以外の多施設でも、本検索法を行い、適切に運用できる稼働かを検証する介入研究を実施する。

方法：目標症例数は 150 例で、当院では、業務量、人員の実情を踏まえ 10 例の登録とする。研究対象者登録期間は 2 年間とし、観察期間は最終研究対象者登録から 3 年とする(総研究期間：5 年)。検討内容は、①ポ法を用いた際の断端評価が、中央(名古屋医療センター)と他施設診断で一致するかどうかの再現性の評価、②ポ法運用上の問題点の収集、③ポ法で断端陰性とハンド難された患者における研究期間内の左右乳房の癌発生率の差の比較を行う予定である。④更に将来的に計画している、ポ法による断端検索で断端陰性であれば術後放射線照射の省略を行う他施設共同研究の基礎データを得るために、名古屋医療センターを含めた全施設症例を対象に、ポ法で断端陰性と判断した患者における研究期間内の左右乳房の癌発生率の差の比較、患者の背景やポ法に関して取得するデータ(断端ブロック数など)を探索的に検討する。

結果：症例の蓄積が、当初の予定(250 例)より少なく、150 例に下方修正した。総研究期間は 4 年から 5 年に延長された。当院では、病理選任医師の安定した補充がなく、研究登録開始から未だに登録ができていない状況である。医師の補充がされ次第、乳腺外科と連携を強化し、症例登録を順次行っていく予定である。

④ 【班研究・研究助成実績】

科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金）（基盤研究 C）

中間群および低悪性度に分類される原発性骨腫瘍の臨床病理学的解析

研究責任者： 眞能 正幸

【目的】

発生頻度の少ない原発性骨腫瘍は、希少癌の一つと認識されることが多い、我が国独自の臨床病理学的解析データがほとんどない腫瘍である。中でも原発性骨腫瘍の WHO 分類で *intermediate*(中間性)と、*malignant*(悪性)の中で低悪性度とされている肉腫について、まとまった症例数による我が国独自の臨床病理学的解析データはほとんどない。本研究では、それらの日本独自の臨床病理学的な特徴を明らかにするとともに、特に転移・再発に関与する形態学因子について統計学的手法を用いた客観的な方法で見出す。これらによって、WHO 分類で現在中間群と悪性群に属する低悪性度腫瘍に分けられている分類の妥当性を検討するとともに、我が国の中間群、低悪性度群の治療に新たな指標を提唱することを目的とする。

【方法】

令和 2 年度は、骨巨細胞腫 (GCTB) を対象、関西骨軟部腫瘍研究会の有志病院 7 つから初回手術を当該施設で行った 213 例の GCTB について、初回手術材料の 14 の病理学的因子と年齢性別や RANKL 阻害剤である *denosumab* 投与歴の 6 つの臨床的因子について、統計学的に解析し局所再発に関与する因子を検討した。

【結果】

213 例のうち、男性 100 例、女性 113 例でやや女性が多く、また初診時年齢は 12 歳から 80 歳で平均 38.7 歳だった。213 例のうち、62 例に局所再発がみられ、再発率は 29.1%であった。肺転移は 9 例に見られた。213 例のうち術式のわかった症例は 206 例で、搔爬が 171 例、切除術が 35 例であった。

Cox hazard 解析による単変量解析では、再発に有意な危険因子は若年齢、搔爬術、少ない間質の出血、血管浸潤像の存在、虚血壊死像が見られないこと、核分裂像の増加であった。その他、性別、発生部位、*denosumab* 投与の有無、手術の年代、骨化の有無、多形細胞、二次性動脈瘤性骨嚢胞、泡沫細胞の浸潤、紡錘形細胞の増殖面積、*storiform pattern* の有無、髄外増殖、軟部進展病変の骨化リムの有無、浸透像の有無、そして近年 GCTB の遺伝子異常と注目される H3.3 G34W 抗体の陽性像の有無については有意な結果は得られなかった。

さらに行った多変量解析では、有意な因子は、年齢、間質の出血、血管浸潤、虚血壊死、核分裂像となり、術式は有意傾向 ($P=0.053$) の結果となった。興味深いのは *denosumab* 投与例が有意傾向 ($P=0.053$) ながら局所再発の危険因子となることが分かった。

【意義】

本研究が遂行出来れば、中間群と低悪性度悪性群を分ける是非が明らかになり、統計学的手法より転移・再発に関するリスク因子が判れば、それぞれの疾患に対する *over or under treatment* を防ぎ、治療の個別化 (オーダーメイド化) も可能で、患者の予後のみならず QOL の向上に大きく寄与するものと考ええる。また、中間群、低悪性度群に分ける現 WHO 分類の妥当性についても評価可能となるものと考ええる。

リハビリテーション科

三木秀宣

急性期総合病院における当科の役割として急性発症後の早期機能回復、外傷後または外科術後の早期機能回復を目的に主科の医師、看護師などと連携をとりながら理学療法、作業療法、言語聴覚療法の3部門が超早期から積極的に介入している。機能回復に経過を要する疾患については最善の状態の後継病院へ引き継げるように、また外科術後などでは早期の自宅退院を目指して最大の機能回復を図っている。

リハビリテーション科の診療体制は当科の専従医師により障害診断および、それぞれの治療的特性に合わせた理学療法、作業療法、言語聴覚療法の処方が出され、治療は各専門の療法士が担当している。

令和2年度の療法士のスタッフ体制（R3.3.31現在）は24人体制で、うち理学療法士16人、作業療法士5人、言語聴覚士3人である。

リハビリテーション科へ依頼される診療科は整形外科、総合内科、脳内科、脳外科、救命科、外科、循環器内科、消化器科、心臓外科、感染症内科（HIV）等、多くの診療科に渡っている。

整形外科関連では人工関節（股・膝関節）や脊椎術後患者においてクリティカルパスに基づいて良質で均質なリハビリテーションを実施し、在院日数短縮とQOL向上を両立している。特に人工膝関節置換術患者は術前から退院後まで筋力、関節可動域、ADL等、運動機能を定量的に評価し、術後3週間で退院できるように短期集中型治療を行っている。また脳内科からは脳梗塞、脳外科からは脳内出血、脳腫瘍、頭部外傷術後などのリハ依頼があり、幅広い脳疾患に対応している。両科とも脳卒中ケアユニット（SCU）から一般病棟まで関わり、定期的なカンファレンスを行い患者の早期治療方針決定と最良な状態で後継病院に円滑に連携できるようリハビリテーションを実施している。また、平成28年1月から循環器内科では心疾患の急性期に対する心臓リハビリテーションを離床から200m歩行までのプロトコールに従って理学療法士・作業療法士が携わるようになり、ここ数年、実績を伸ばした。さらに平成28年11月からは心臓外科術後の急性期心臓リハビリテーションもプロトコールに従って実践している。

理学療法（PT）は徒手または機械器具で四肢・体幹の運動機能回復を図り、ベッド上の起居動作、移乗動作、歩行から階段昇降動作などの移動動作の獲得を目的とし実践している。また四肢・体幹の運動障害だけでなく、呼吸・循環障害に対しても適応がある。これら呼吸・循環障害を有する患者に関して、それぞれ呼吸ケアチームに参画、心臓リハに関しても定期的なカンファレンスを開催し、他職種と共同し最良の治療を目指している。また平成30年4月よりICUさらに令和元年11月より救命ICUおよび東7階CCUの早期離床プロジェクトにおいて、超早期からのADLアップに向け、カンファレンスを週1回定期的に行い、看護部と連携を取りながらリハビリテーションを実施している。

作業療法（OT）は作業を治療手段とする特性から上肢の運動機能回復、特に手指などの細かな運動や持久力の回復を図り、食事、排尿・排便などのトイレ動作、更衣、整容、入浴などの日常生活活動（ADL）・身のまわり動作の獲得を目的に実践している。これが理学療法との役割分担の違いである。特に急性期においても食事とトイレ動作の生命維持に関わる ADL の回復が重要となる。他には ADL に関わる高次脳機能障害に対しても適応がある。令和 2 年 7 月からは排尿ケアチームのラウンドに作業療法士がチーム医療の一員として参画している。

言語聴覚療法（ST）は主に脳疾患から由来する失語症、構音障害などの言語障害や摂食嚥下障害の回復に適した技術で、これら障害に対するアプローチのほかに高次脳機能障害の評価、未破裂動脈瘤、脳腫瘍、水頭症などの術前評価、頭部外傷後遺症の評価などを行い、必要に応じてこれらに対する治療や援助に取り組んでいる。平成 27 年度から耳鼻咽喉科における人工内耳術後のリハビリテーションにも取り組んでいる。

現在はリハビリテーション科のスタッフも充実（令和 2 年度 4 月理学療法士 2 名増員、主任理学療法士 2 名配置）してきており当院の急性期リハビリテーションのニーズに応えられるようになってきている。

令和 2 年度 2 月末時点でリハビリテーション科全体の実施単位数は 78,772 単位で前年比 1.8% 増、診療報酬では 20,989,765 点で前年比 5.8% 増となった。

今後も心臓リハや廃用症候群など潜在的にリハビリテーションが必要と考えられる患者は多く、需要の拡大が見込まれる。

これからは更にチームアプローチとして各部門と連携したリハビリテーション医療を行い、早期離床、ADL 獲得、早期退院を確立することが課題である。効果的で効率のよいリハビリテーション医療を短期間に実施し、成果を上げることができるよう努力している。

文責 西菌博章

臨床腫瘍科

久田原郁夫

臨床腫瘍科は、平成 11 年に設立され、腫瘍内科、腫瘍外科、緩和ケア内科の 3 科の総合科として始まりました。組織改変に伴い一昨年度より、緩和ケア内科は、がん以外の疾患も対象とするため独立科となりました。

腫瘍内科・腫瘍外科に所属する医師は、兼任で各々の専門領域（呼吸器、消化器、骨軟部）のがん診療をおこなっています。

毎週開催している臨床腫瘍科カンファレンスでは、新規症例や治療経過中の症例検討と外来化学療法室で発生したイベントや毒性の分析をおこなっています。また定期的行事として、全職員対象の Cancer Board およびオンコロジーセミナーを開催しております。これらの行事はがんの診断、治療に関して総合的かつ横断的に討論し知識を深めるよい機会となっています。

がんの種類は多彩でその臨床像も個人によって一様ではありません。遺伝子変異を広く検索し治療候補を探索するゲノム医療がはじまりました。また、新規の抗がん剤、分子標的薬、免疫チェックポイント阻害剤が続々と発売され国内外で多くの臨床試験がおこなわれ治療方法の選択肢が広がってきています。当科では 2 名のがん薬物療法専門医を中心に様々な症例に対して質の高い薬物療法を提供しています。各種の画像診断、病理診断および分子生物学的診断も日々進歩をとげています。このような環境で、診断、治療において主科のみならず個別的でかつ総合的な判断が求められる機会が増えてきています。またがん治療に特化した看護師、薬剤師、ソーシャルワーカーが積極的に介入することで患者さんは多くの恩恵を受けています。このように今や、がん治療はチーム医療が基本となっておりますが、臨床腫瘍科はその司令塔の役目を担っていきたいと考えています。

【2020 年度 研究発表業績】

A-0

Kudawara I, Kakunaga S, Koji Takami: Objective response of denosumab for multiple pulmonary metastases from giant cell tumor of bone: A case report and review of the literature. Current Problems in Cancer: Case Reports 3 (2021) 100073

Hasegawa H, Taniguchi H, Nakamura Y, Kato T, Fujii S, Ebi H, Shiozawa M, Yuki S, Masuishi T, Kato K, Izawa N, Moriwaki T, Oki E, Kagawa Y, Denda T, Nishina T, Tsuji A, Hara H, Esaki T, Nishida T, Kawakami H, Sakamoto Y, Miki I, Okamoto W, Yamazaki K, Yoshino T. FMS-like tyrosine kinase 3 (FLT3) amplification in patients with metastatic colorectal cancer. Cancer Sci. 2021 Jan;112(1):314-322.

Terazawa T, Kato T, Goto M, Ohta K, Noura S, Satake H, Kagawa Y, Kawakami H, Hasegawa H, Yanagihara K, Shingai T, Nakata K, Kotaka M, Hiraki M, Konishi K, Nakae S, Sakai D, Kurokawa Y, Shimokawa T, Satoh T. Phase II Study of Panitumumab Monotherapy in Chemotherapy-Naïve Frail or

Elderly Patients with Unresectable RAS Wild-Type Colorectal Cancer: OGS 1602. *Oncologist*. 2021 Jan;26(1):17-e47.

Hasegawa H, Nagata Y, Sakakibara Y, et al. Breast metastasis from rectal cancer with BRAF V600E mutation: a case report with a review of the literature. *Clin J Gastroenterol*. 2020;13:153-157.

B-4

久田原郁夫、角永茂樹、上田孝文、小河原光正、安藤性實、木村 剛、宮本 智：IV 期肺癌における骨転移の臨床的検討。第 53 回日本整形外科学会骨・軟部腫瘍学術集会、オンライン、2020 年 9 月 11-30 日

高見晴奈、角永茂樹、久田原郁夫、上田孝文：炎症型の未分化多形肉腫に置いてドキソルビシン、イフォマイド療法にプレドニゾロンの追加が著効した 3 例。第 53 回日本整形外科学会骨・軟部腫瘍学術集会、オンライン、2020 年 9 月 11-30 日

田宮大也、井上陽公、伊村慶紀、若松 透、田中大晶、中 紀文、王谷英達、竹中 聡、濱田健一郎、角永茂樹、久田原郁夫、上田孝文：80 歳以上の超高齢者と 60-79 歳の高齢者における悪性軟部腫瘍の背景因子、治療因子、予後の違いについての検討。第 53 回日本整形外科学会骨・軟部腫瘍学術集会、オンライン、2020 年 9 月 11-30 日

伊村慶紀、王谷英達、竹中 聡、角永茂樹、濱田健一郎、若松 透、田宮大也、中 紀文、名井陽、荒木信人、久田原郁夫、上田孝文、吉川秀樹：悪性末梢神経鞘腫の治療成績と予後因子。第 53 回日本整形外科学会骨・軟部腫瘍学術集会、オンライン、2020 年 9 月 11-30 日

伊村慶紀、王谷英達、竹中 聡、角永茂樹、濱田健一郎、若松 透、田宮大也、中 紀文、名井陽、荒木信人、久田原郁夫、上田孝文、吉川秀樹：当院および関連施設における血管肉腫の治療成績。第 53 回日本整形外科学会骨・軟部腫瘍学術集会、オンライン、2020 年 9 月 11-30 日

王谷英達、竹中 聡、濱田健一郎、伊村慶紀、若松 透、田宮大也、角永茂樹、久田原郁夫、上田孝文：下肢悪性骨腫瘍に対する患肢温存手術の合併症。第 53 回日本整形外科学会骨・軟部腫瘍学術集会、オンライン、2020 年 9 月 11-30 日

安藤性實、小河原光正、木村 剛、高見康二、栗山啓子、眞能正幸、森 清：化学療法反復により長期生存が得られた胸腺癌の一例。第 43 回日本呼吸器内視鏡学会学術集会、旭川、2020 年 6 月 27 日

土井貴司、高見康二、小河原光正、木村 剛、宮本 智、安藤性實、角永茂樹、森 清、栗山啓子：肺原発滑膜肉腫の 1 切除例。第 61 回日本肺癌学会学術集会、岡山、2020 年 11 月 14 日。

B-6

大崎慧、安藤性實、小河原光正、清木祐介、三田英治、栗山啓子、森 清、眞能正幸：急激な転帰を辿った KRAS 変異陽性肺癌の 1 例。第 229 回日本内科学会近畿地方会、web 開催、2020 年 9 月 26 日

吉村友佑、山本裕一、上原雄平、花岡 希、種田灯子、光井絵理、加藤 研、木村 剛、小河原
光正：小細胞肺癌の化学療法中に汎下垂体機能低下を認めた 1 例。第 230 回日本内科学会近
畿地方会、web 開催、2020 年 12 月 26 日

薬剤部

山内一恭

大阪医療センターの運営方針に基づき、医薬品の適正使用の推進、医薬品の安全管理、薬物療法の有効性・安全性の向上に資する業務、薬剤管理指導業務、チーム医療への主体的関与（HIV 感染症患者への服薬支援、緩和ケアチーム、NST、ICT、AST、外来化学療法室でのがん薬物療法支援等）を実践し、良質かつ適正な医療の提供に貢献することを薬剤部の基本方針としている。

1. 病棟薬剤業務・薬剤管理指導業務

病棟担当薬剤師を専任化し、薬物療法の質の向上と医療安全の確保を主な目的として次の業務を行っている。

1) 無菌調製業務

注射処方 of 投与量、投与速度、配合変化等の確認を行い、クリーンベンチ内で注射薬の無菌調製を行っている（32,478 件/年）。

抗がん剤の調製はレジメンと処方内容を確認し、薬剤部無菌室の安全キャビネット内で調製している（17,058 件/年）。

2) 入院時の持参薬確認

薬剤師による持参薬報告、服用状況の確認を行うことにより、医療安全の向上と持参薬服用の適正化に取り組んでいる。

3) 処方提案・支援

主治医に対する主な処方提案・支援として、持参薬の代替薬の提案、処方設計支援、支持療法薬の提案、薬物血中濃度に基づいた処方設計等を行っている。

4) 医薬品情報の提供・相談応需

採用医薬品情報の提供や医療スタッフからの照会や相談に対して情報提供に努めている。また、各診療部門協力のもと昨年は、8 領域の院内フォーミュラリを作成したが、今年度は 4 領域の作成を準備している。

5) 薬剤管理指導業務

薬物療法に係る様々な情報を収集・分析し、その内容から効果の評価、副作用モニタリングを実施し、薬学的アプローチを積極的に実施している。また、病棟業務の延長として高齢者のポリファーマシー対策を実践している。薬剤管理指導算定件数は 19,352 件/年であった。

2. 外来服薬支援指導

HIV 感染症専門薬剤師が「お薬の相談室」に常駐し長期的な支援体制を構築しており、外来における指導件数は 3,455 件/年であった。また外来化学療法室では治療計画、副作用等について指導を実施し、がん薬物療法の安全と質の向上に努めている。薬剤師による外来がん薬物療法患者の指導件数は 741 件/年であった。

3. 医薬品情報管理（収集・整理・評価・提供）

医薬品情報の適正な管理と供給を行うために専任スタッフを配置し、医療スタッフからの相談応需や医薬品情報の発信を行っている。厚生労働省への医薬品・医療機器副作用報告は 11 件/年の報告を、また、プリアボイド報告としては日本病院薬剤師会に 454 件/年の報告を行っている。

4. 治験薬管理業務

治験薬管理者（薬剤部長）の管理責任の下、GCP を遵守した治験薬の適切な保管、管理、調剤を行い、被験者への治験薬投与が円滑かつ安全に行われるよう努めている。

5. 専門薬剤師の育成・研修受入体制の推進

日本病院薬剤師会 HIV 感染症薬物療法認定薬剤師研修施設・がん薬物療法認定薬剤師研修施設、日本医療薬学会がん専門薬剤師研修施設・薬物療法専門薬剤師研修施設、日本薬剤師研修センター小児薬物療法認定薬剤師研修施設等の認定を受けており、今年度は、2 名の研修生を受け入れた。また、薬学部実務実習生は 26 名を受け入れ薬学教育にも寄与している。

6. 臨床研究業績

論文投稿、学会発表等は以下の通りである。

【2020 年度 研究発表業績】

A-0

Imanishi K, Nakakura I, Miyabe T, Sako R, Yamauchi K: Comparison of safety between high and low doses of sulbactam/ampicillin: A retrospective observational study in Japanese patients with pneumonia. 「J Infect Chemother」 26(11) : P1152-1157、2020 年 7 月 1 日

A-4

矢倉裕輝: Evidence Update 2021 最新の薬物治療のエビデンスを付加的に利用する 抗ウイルス薬「薬局」 72 (1) : P.123-126、南山堂、2021 年 1 月 5 日

A-5

矢倉裕輝: 適正な抗 HIV 療法の実施と HIV 感染症薬物療法認定薬剤師養成等を通じた人材育成－HIV 医療包括ケア体制の整備（薬剤師の立場から）に関する研究－。厚生労働行政推進調査事業費補助金（エイズ対策政策研究事業）「HIV 感染症の医療体制の整備に関する研究」令和 2 年度研究報告書、P.100-105、2021 年 3 月 31 日

B-3

矢倉裕輝: 血液凝固因子製剤投与に伴う凝固因子活性の動態把握の意義と薬剤師の役割（共催セミナー）。第 34 回日本エイズ学会学術集会・総会、東京、WEB 開催、2020 年 11 月 28 日

矢倉裕輝：抗 HIV 薬の忍容性と将来性を見据えたレジメンマネジメントーリルピ
ビリン/オデフシィの可能性ー（共催セミナー）。第 34 回日本エイズ学会学術集
会・総会、東京、WEB 開催、2020 年 11 月 29 日

B-4

井後星哉、今西嘉生里、水本知宏、宮部貴識、佐光留美、山内一恭：AST 担当薬
剤師の業務範囲拡大が 広域抗菌薬の AUD に与える影響。第 68 回日本化学療法
学会総会、神戸、2020 年 9 月 13 日

中内崇夫、矢倉裕輝、櫛田宏幸、井上敦介、宮部貴識、上平朝子、白阪琢磨、山
内一恭：当院における抗 HIV 療法施行中患者のポリファーマシーに関する調査。
第 74 回国立病院総合医学会、新潟、WEB 開催、2020 年 10 月 17 日-11 月 14 日

櫛田宏幸、中内崇夫、矢倉裕輝、井上敦介、宮部貴識、山内一恭：HIV 感染症患
者におけるシスタチン C とクレアチニンを用いた腎機能評価の検討、第 74 回国
立病院総合医学会、新潟、web 開催、2020 年 10 月 17 日-11 月 14 日

矢倉裕輝、櫛田宏幸、渡邊 大、中内崇夫、西田恭治、井上敦介、宮部貴識、上
平朝子、白阪琢磨、山内一恭：日本人 HIV-1 感染者におけるビクテグラビルの血
漿中トラフ濃度に関する検討。第 74 回国立病院総合医学会、新潟、WEB 開催、
2020 年 10 月 17 日-11 月 14 日

加藤あい、江原美里、宮城和代、宮部貴識、山内一恭：切除不能肝細胞癌に対す
るレンパチニブの安全性および有効性について。第 58 回日本癌治療学会学術集
会、京都、Web 開催、2020 年 10 月 22 日-12 月 25 日

今西嘉生里、水本知宏、井後星哉、宮部貴識、佐光留美、山内一恭：バンコマイ
シンの 2 回目のトラフ値に関する年齢別調査。第 30 回日本医療薬学会年会、名古
屋、WEB 開催、2020 年 10 月 24 日-11 月 1 日

中内崇夫、矢倉裕輝、櫛田宏幸、榊田智仁、廣田和之、上地隆史、渡邊 大、西田
恭治、上平朝子、白阪琢磨：初回治療としてインテグラーゼ阻害剤を使用した患
者の血清尿酸値の変動に関する要因についての検討。第 34 回日本エイズ学会学
術集会・総会、東京、web 開催、2020 年 11 月 27 日-12 月 25 日

櫛田宏幸、中内崇夫、矢倉裕輝、榊田智仁、廣田和之、上地隆史、渡邊 大、西田
恭治、上平朝子、白阪琢磨：日本人のテノホビルアラフェナミド服用における推
定糸球体ろ過量低下症例についての検討。第 34 回日本エイズ学会学術集会・総
会、東京、web 開催、2020 年 11 月 27 日-12 月 25 日

矢倉裕輝、中内崇夫、櫛田宏幸、榊田智仁、廣田和之、上地隆史、渡邊 大、西田
恭治、上平朝子、白阪琢磨：日本人 HIV-1 感染者におけるビクテグラビルの血漿
中濃度に関する検討 第 1 報。第 34 回日本エイズ学会学術集会・総会、東京、

web 開催、2020 年 11 月 27 日-12 日 25 日

足立紗知、宮城和代、仲野宏紀、井上敦介、宮部貴識、山内一恭：ステロイド投与歴とニボルマブ関連副腎機能低下症発現患者についての検討。日本臨床腫瘍薬学会学術大会 2021、千葉、WEB 開催、2021 年 3 月 6 日-14 日

江原美里、畑 裕基、川上智久、宮城和代、井上敦介、宮部貴識、山内一恭：がん化学療法における HBV スクリーニングの実施状況調査と実施率向上に対する薬剤師介入に向けた取り組み。日本臨床腫瘍薬学会学術大会 2021、千葉、WEB 開催、2021 年 3 月 6 日-14 日

B-6

檜本佳代、井後星哉、今西嘉生里、森祐美子、矢倉裕輝、井上敦介、宮部貴識、山内一恭：点滴静注用メトロニダゾール投与における有害事象と腎機能の関連に関する検討。第 42 回日本病院薬剤師会近畿学術大会、大阪、WEB 開催、2020 年 1 月 30 日-2 月 28 日

B-8

矢倉裕輝：患者さんで行う治療マネジメント～PK 測定ツールの有効性～。血友病 PK 可視化 WEB セミナー、WEB 開催、2020 年 8 月 26 日

矢倉裕輝：PK 測定の重要性 ～薬剤師の立場から～。多職種連携血友病診療セミナー、WEB 開催、2020 年 9 月 9 日

矢倉裕輝：薬剤選択の現状と服薬支援の実際。HIV インターネット講演会、WEB 開催、2020 年 10 月 6 日

矢倉裕輝：薬剤師の血友病診療への関わりの重要性、全国 WEB 講演会、WEB 開催、2020 年 10 月 28 日

櫛田宏幸：抗 HIV 薬の特徴と薬剤師の役割。令和 2 年度 HIV 感染症研修会、大阪、2020 年 11 月 2 日

矢倉裕輝、渡邊 大：抗 HIV 療法の実際。令和 2 年度 HIV 感染症研修会、大阪、2020 年 11 月 2 日

中内崇夫、中濱智子、岡本 学、西川歩美：症例検討(他職種との連携)。令和 2 年度 HIV 感染症研修会、大阪、2020 年 11 月 3 日

櫛田宏幸：薬剤師の役割と服薬指導。2020 年度 HIV/AIDS 看護師研修会、大阪、2020 年 11 月 9 日

矢倉裕輝：血友病患者さんのより良い生活のために～薬剤師の立場から～。大阪

血友病フォーラム、WEB 開催、2020 年 11 月 14 日

櫛田宏幸：抗 HIV 薬 uptodate2020、2020 年度第 1 回関西臨床カンファレンス薬剤師部会、WEB 開催、2020 年 11 月 14 日

矢倉裕輝：論文を書こう！。第 34 回日本エイズ学会学術集会・総会 HIV 感染症薬物療法認定・専門薬剤師認定講習会「目指せ！HIV 感染症薬物療法認定・専門薬剤師～薬剤師スキルアップ～」、東京、WEB 開催、2020 年 11 月 29 日

矢倉裕輝：血友病診療における薬剤師の役割～病院薬剤師の立場から～。薬剤師のための血友病 Web セミナー、WEB 開催、2020 年 12 月 15 日

矢倉裕輝：長期療養時代における薬物治療マネジメントと薬剤師の関わり。北関東甲信 HIV/AIDS 薬剤師連絡会議、新潟、WEB 開催、2020 年 12 月 26 日

小林恭子：倫理審査委員会・治験審査委員会の役割と機能。令和 2 年度初級者臨床研究コーディネーター養成研修、Web 開催、2021 年 1 月 14 日

櫛田宏幸：血友病治療における包括ケアの検討。hemophilia total care and team therapy、web 開催、2021 年 1 月 31 日

矢倉裕輝：血友病患者さんの QOL 維持・向上に必要な医療関係者が取り組むべきこと（薬剤師の観点から）。Academy for Integrated Patient Care Conference for Rare Diseases 患者中心の医療を実現するために Following the 2020 Patients Voice、WEB 開催、2021 年 2 月 27 日

適正な抗HIV療法の実施とHIV感染症薬物療法認定薬剤師養成等を通じた人材育成

—HIV医療包括ケア体制の整備（薬剤師の立場から）に関する研究—

研究分担者 矢倉 裕輝

独立行政法人国立病院機構大阪医療センター薬剤部 研究教育主任

研究要旨

本分担研究では、2020年において、薬剤師の立場からHIV感染症の医療包括ケア体制の整備を図るため、薬剤師間のネットワークの構築、各種研究、情報発信を目的とした研究を立案した。HIV/AIDSブロック拠点病院薬剤師を中心とした会議の開催により、薬剤師を通じた施設間の情報共有、連携が可能となった。さらに、HIV/AIDSブロック・中核拠点病院連絡会を開催し、中核拠点病院薬剤師へも裾野を広げることで、更なるHIV医療の均てん化に努めた。また、HIV・AIDSブロック中核拠点病院における抗HIV療法の処方動向等に関する研究では、薬剤の処方状況について調査を行うことで、薬物治療の観点からのHIV診療の均てん化の状況について把握すること並びに患者に適切な薬剤情報のあり方について検討することができた。また、新型コロナウイルス感染症の流行に伴うHIV感染症の外来診療の変化について、薬剤交付の観点から調査を行うことで、オンライン診療時における適切な患者への薬剤の交付や服薬支援の方法について検討することができた。

A. 研究目的

HIV感染症の治療は薬物治療が中心であり、チーム医療の中で薬剤師は長期服薬アドヒアランスの維持を含む薬物治療マネジメントを行うことで、治療成功に寄与することが果たすべき責務である。この責務は病院薬剤師のみに課せられるものではなく、長期服薬患者が増加し、院外処方発行率が上昇している現在ならびに今後は保険薬局薬剤師が担う部分も増加していくものと思われる。また、本年は新型コロナウイルス感染症の流行によって通信機器を使った診療も行われ、それに伴い患者への薬剤の交付方法や服薬支援も従来とは異なった方法を試みる必要も生じた。

本研究は2020年において、薬剤師間のネットワークの充実、研究、情報発信、長期療養時代ならびに新型コロナウイルス感染症流行下のHIV診療における薬剤師の役割について検討することを目的として実施した。

B. 研究方法

- 1) HIV感染症の医療体制の整備に関する研究（班会議、HIV/AIDSブロック・中核拠点病院薬剤師連絡会の開催）
- 2) HIV・AIDSブロック中核拠点病院における抗HIV療法の処方動向等に関する研究
- 3) HIV感染症診療における新型コロナウイルス感染症対応調査

（倫理面への配慮）

研究の実施にあたり疫学研究に関する倫理指針を遵守し、研究対象者に対する人権擁護上の配慮、研究方法による研究対象者に対する不利益、危険性の排除に留意した。

C. 研究結果

1) HIV 感染症の医療体制の整備に関する研究

(班会議、HIV/AIDS ブロック・中核拠点病院薬剤師連絡会の開催)

班会議を Web 環境下で 2 回実施し、連絡会の活動、各ブロック拠点病院及び各ブロックの HIV 診療の現状と課題、日本病院薬剤師会 HIV 感染症専門薬剤師及び HIV 感染症薬物療法認定薬剤師取得状況および日本病院薬剤師会 HIV 感染症専門薬剤師部門認定単位発行のための今後の研修の在り方について検討を行い、更なる HIV 医療の均てん化に努めることを確認した。また、HIV/AIDS ブロック・中核拠点病院連絡会を医療体制班事業として主催した。中核拠点病院からの報告ならびに本研究班の活動報告を行い、更なる薬剤師間の連携ならびに患者支援を強化していくことを確認した。

2) HIV/AIDS ブロック中核拠点病院における

抗 HIV 療法と薬剤の在庫等に関する研究

目的

本研究は、国内で実施されている抗 HIV 療法の組み合わせと薬剤供給、院外処方箋発行状況等の現状調査を実施し、患者に必要な確かな薬剤情報提供のあり方とより効果的な服薬支援について検討することを目的とする。

対象および方法

2019 年 10 月 1 日～2019 年 12 月 31 日の期間に受診し、投薬が行われた症例に対する抗 HIV 薬の組み合わせ、院外処方箋の発行状況、廃棄された薬剤、曝

露後予防薬について、国立国際医療研究センター病院、HIV/AIDS ブロック拠点病院、中核拠点病院にアンケート調査用紙を郵送し調査を行った。また、2019 年 1 月 1 日～2019 年 12 月 31 日の期間までの期間に新たに ART が開始された症例の組み合わせについても調査を行った。

結果

1) アンケート用紙は 69 施設に配布し、60 施設 (89%) から回答があった。

① 抗 HIV 薬の組み合わせ

抗 HIV 薬の組み合わせについて集計結果を図 1 に示す。総症例は 12,934 例であった。最も処方が多かったのは、DVY-HT、DTG で 21%、2 位は BVY で 18%、3 位は TRI で 16%、4 位は GEN で 9%、5 位は DVY-HT、RAL (QD) で 5%、6 位は SMT で 4%、7 位は DVY-HT、RAL (BID) で 3%、8 位は ODF、EZC+RAL (QD)、EZC+DTG でそれぞれ 2%であり、上位 10 レジメンで全症例の 83%を占めていた (図 1)。

② 抗 HIV 薬の廃棄状況、院外処方箋発行率、曝露後予防薬

薬価ベースでの HIV 薬の廃棄金額を図 2 に示す。2019 年中に期限切れ等の理由で廃棄された抗 HIV 薬の総金額は約 498 万円であった。様々な薬剤が廃棄されていたが、中でも、TVD の廃棄金額が最も高く 70 万円を超えていた (図 2)。院外処方箋の発行施設は 60 施設中 49 施設 (82%) であった。また、院外処方箋の発行施

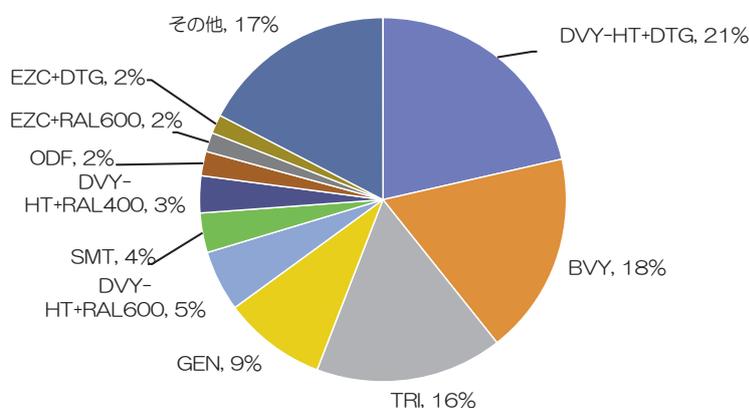


図 1 2019 年 10 月～12 月に受診した症例の抗 HIV 薬の組み合わせ n=12,934

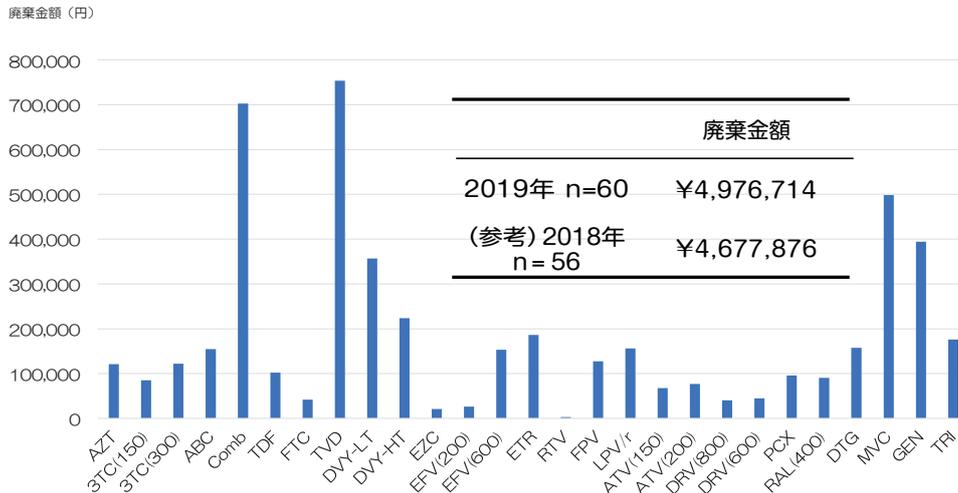


図2 2019年に廃棄した抗HIV薬の廃棄金額

設の処方箋発行率は約半数の施設で75%以上であったが、3割程度の施設の発行率は25%未満と低値を示した（図3）。

曝露後予防薬の組み合わせについてはTVD+RALの組み合わせが最も多かった（図4）。

③ 抗 HIV 薬の新規組み合わせ

2019年1月1日～2019年12月31日の間に新たにARTを開始した症例は865例であった。最も処方が多かったのは、BVYで46%、次いでDVY-HT、DTGで21%、TRIで9%、DVY-HT、RAL(QD)で6%、GENで6%と続き、上位5レジメンで全体の88%を占めていた（図5）。

3) HIV 感染症診療における新型コロナウイルス感染症対応調査

目的

新型コロナウイルス感染症流行下における、外来HIV感染症診療の薬剤交付に関わる対応および生じた問題について調査を行い、今後のオンライン診療において、患者に必要なかつ確な薬剤情報提供のあり方とより効果的な服薬支援について検討することを目的とする。

対象および方法

国立国際医療研究センター病院およびHIV/AIDSブロック・中核拠点病院（薬剤部）を対象として、2020年3月1日から6月30日の期間に、オンライン診療の実施状況及びFAX調剤の対応についてアンケート調査を実施した。

結果

アンケート用紙は69施設に配布し、58施設（84.1%）から回答があった。

① オンライン診療の実施状況

オンライン診療を実施した施設は52%にあたる30施設であり、初診のケースには適応せず、すべて2回目以降の診療であった。

② オンライン診療後の抗 HIV 薬を含む処方箋の発行方法および取り扱いを行った職種

抗HIV薬を含む処方箋について、院内処方のみは27%、院外処方のみは43%、両方の発行を行ったのは30%であった。

また、処方箋をFAX、郵送を行った職種については、事務が70%と最も多く、次いで各診療科スタッフが9%、薬剤師が4%等であった（図6）。

③ 薬剤交付を行う際に配慮した取り組み、保険薬局からの問い合わせ

薬剤を薬局から郵送する際に、中身が家族等に抗HIV薬とわからないように配慮するよう薬局に依頼したとの回答があった。

保険薬局からの問い合わせについては、「0410対応の記載がない場合、処方箋の原本がないと調剤及び交付が出来ない。」「薬を郵送する場合の患者の住所・連絡先を把握していないので教えて欲しい。」等の回答があった。また、処方箋のFAX送信間違い、輸送費の負担先が不明確であること、患者へのオンライン受診の方

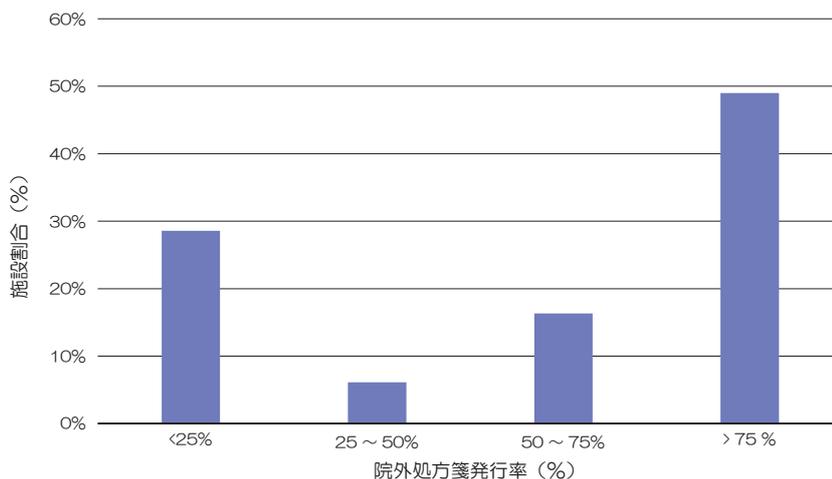


図3 院外処方箋発行施設の発行状況(n=49)

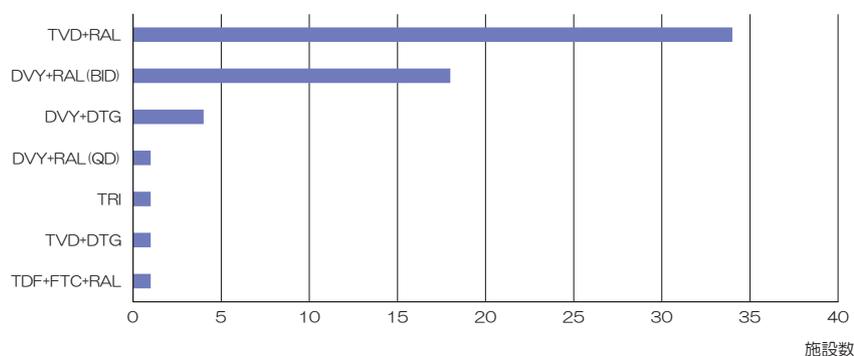


図4 曝露後予防薬の組み合わせ

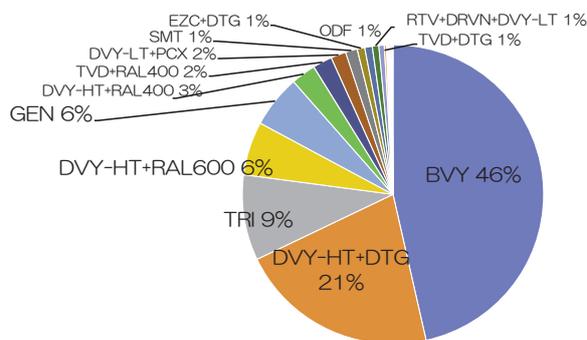
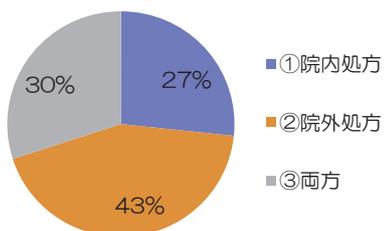


図5 2019年新規症例の組み合わせ n=865

抗HIV薬を含む処方箋の発行方法 (n=30)



処方箋のFAXおよび原本を送付した職種 (n=23)

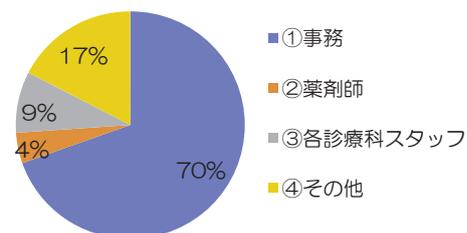


図6 オンライン診療後の抗HIV薬を含む処方箋の発行方法および取り扱いを行った職種

法に関する説明が難しい等の問題点についても回答があった（図7）。

D. 考察

- 班会議及びHIV/AIDSブロック・中核拠点病院薬剤師連絡会について、Webを用いた開催を滞りなく実施できたことにより、薬剤師間における連携を行っていく環境が更に強化された。今後とも検討を重ね、薬剤師が更なるHIV診療の充実に寄与できる体制の確立ならびに継続して後進を育成する環境の整備の確立を目指していく。

- HIV・AIDSブロック中核拠点病院における抗HIV療法と薬剤の在庫等に関する研究については、抗HIV薬の組み合わせ、院外処方箋の発行状況、HIV曝露予防薬等についてアンケートを実施し、患者に必要な薬剤情報提供のあり方について検討することができた。

薬剤の廃棄に関する調査からここ2年間の調査施設における廃棄金額は500万円程度であり、更なる増加は病院経営への影響や限られた医療資源のロスとなる。その対策として、抗HIV薬の院外処方箋の発行推進が考えられるが、院外処方を発行している施設は全体の82%であったものの、75%以上の発行率の施設のみで考えると全体の50%に達していなかった。患者のプライバシーに対する不安や保険薬局の在庫の管理、服薬指導等の課題はまだ多いが、院外処方の推進は廃棄金額の減少だけでなく、治療の長期化に伴う併存疾患の発症等による複数の医療機関から処方される併用薬の増加等も考慮すると、保険薬局で一元管理を行うことで薬剤間相互作用の回避や服薬アドヒアランス不良に伴う

残薬に対する問題解決にも寄与するものと考えられる。

更なる院外処方推進の方策として、病院と保険薬局との更なる連携を推進していくことが重要であると考えられる。

また今年度の廃棄薬剤の金額が高くなった要因の一つにTVDの廃棄が挙げられる。現在の抗HIV療法において、TFV製剤の多くはTAFを用いるが、妊婦等へ投与した際の安全性のエビデンスが十分ではないことから、従来頻用されていたTDF製剤であるTVDを選択することがある。同様の理由から曝露後予防薬としてもTVDを選択されており、その中の複数の施設からTVDを廃棄した旨の結果があったことから、「医薬品、医薬機器等の品質、有効性及び安全性の確保等に関する法律」より、保険薬局から最低数量の分譲を実施している施設の情報等を共有、推進していくことが対策の一つであると考えられた。

- 抗HIV薬の組み合わせに関する研究については、各施設に継続して通院し、抗HIV薬を服薬している症例並びに2019年に新たに抗HIV薬の服薬を開始した症例が服薬しているレジメンはいずれも上位5位までがインテグラーゼを含む組み合わせであった。また、継続、新規症例の上位5位までのレジメンでそれぞれ全体の69%及び88%を占めており、選択レジメンが集約する傾向が認められた。
- 感染症診療における新型コロナウイルス感染症対応調査については、半数を超える施設でオンライン診療が実施されており、いずれの施設においても初診の患者を対象としておらず、恐ら

配慮した取り組み

- 郵送する際に中身について「サプリメント」と配送伝票に記載するよう、応需薬局に依頼した。

保険薬局からの問い合わせ

- 「0410対応」の記載がない場合、処方箋の原本がないと調剤及び交付が出来ない。
- 薬を郵送する場合の患者の住所・連絡先を把握していないので教えて欲しい。

問題点

- 病院担当者が患者が希望する薬局と異なる薬局へFAXを行った。
- 血液凝固因子製剤の郵送料にかかる保険料が高額で負担先が不明確であり、病院で負担した。
- 運用の説明が電話等による口頭になるため、患者の理解が難しい場合があった。

図7 薬剤交付を行う際に配慮した取り組み、保険薬局からの問い合わせや問題点

くコントロール良好な服薬継続症例を対象としていることが考えられる。院内処方については問題となった回答はなかったが、処方箋原本のやり取りや薬剤の送料を含む交付方法や患者面談を含む服薬支援の方法についての問題が明らかとなった。対策として、保険薬局との連携の強化に加えて、直接対面での面談等が難しくなった場合の対応や処方箋や薬剤の受け取りの方法についてマニュアル化を行った上で、平時に患者と相談をしておくことが重要であると考えられた。

E. 結論

本研究を通じて、薬剤師間のネットワークの充実、研究、長期療養時代ならびにオンライン診療における薬剤師の役割について検討することを目的とした研究を実施することができた。

F. 健康危険情報

なし

G. 研究発表

1. 原著論文

該当なし

2. 学会発表

- 1) 中内崇夫、矢倉裕輝、榊田宏幸、井上敦介、宮部貴織、上平朝子、白阪琢磨、山内一恭. 当院における抗HIV療法施行中患者のポリファーマシーに関する調査. 第74回国立病院総合医学会、Web、2020年10月
- 2) 榊田宏幸、中内崇夫、矢倉裕輝、井上敦介、宮部貴織、山内一恭. HIV感染症患者におけるシスタチンCとクレアチニンを用いた腎機能評価の検討. 第74回国立病院総合医学会、Web、2020年10月
- 3) 矢倉裕輝、榊田宏幸、渡邊大、中内崇夫、西田恭治、井上敦介、宮部貴織、上平朝子、白阪琢磨、山内一恭. 日本人HIV-1感染者におけるビクテグラビルの血漿中トラフ濃度に関する検討. 第74回国立病院総合医学会、Web、2020年10月
- 4) 中内崇夫、矢倉裕輝、榊田宏幸、榊田智仁、廣田和之、上地隆史、渡邊大、西田恭治、上平朝子、白阪琢磨. 初回治療としてインテグラーゼ阻害剤を使用した患者の血清尿酸値の変動に関する要因についての検討. 第34回日本エイズ学会学術集会・総会、Web、2020年11月

- 5) 榊田宏幸、中内崇夫、矢倉裕輝、榊田智仁、廣田和之、上地隆史、渡邊大、西田恭治、上平朝子、白阪琢磨. 日本人のテノホビルアラフェナミド服用における推定糸球体ろ過量低下症例についての検討. 第34回日本エイズ学会学術集会・総会、Web、2020年11月
- 6) 矢倉裕輝、中内崇夫、榊田宏幸、榊田智仁、廣田和之、上地隆史、渡邊大、西田恭治、上平朝子、白阪琢磨. 日本人HIV-1感染者におけるビクテグラビルの血漿中濃度に関する検討 第1報. 第34回日本エイズ学会学術集会・総会、Web、2020年11月
- 7) 渡邊大、矢倉裕輝、榊田智仁、廣田和之、上地隆史、中内崇夫、榊田宏幸、西田恭治、上平朝子、白阪琢磨. 当院におけるビクテグラビル・テノホビルアラフェナミド・エムトリシタビン配合錠の処方例に関する検討. 第34回日本エイズ学会学術集会・総会、Web、2020年11月

H. 知的財産権の出願・登録状況（予定を含む）

1. 特許取得

なし

2. 実用新案登録

なし

3. その他

なし

看護部

西本京子

今年度 看護部は K「期待を先取り」 S「相手を尊重」 K「快（こちよさ）を提供」行動！！をスローガンに活動をしてきました。特にコロナ禍で行動制限が厳しい中、患者さんに提供できる快（こちよさ）は何なのかと現場で考え対応してきた一年でした。

コロナの波に合わせ 1年間で 3回の病棟編成を行いコロナ患者に対応できる体制を整え、患者さんに途絶えることなく看護を提供してきました。安心して受診していただけるように、感染を持ち込まないように当初病院玄関にて看護師が検疫を行いました。重症コロナ患者の受け入れに際しては、感染を拡大させない為に防護具を正しく装着する練習を行い、感染対策のルールを遵守しました。重症な患者に対応できるように集中治療の知識・技術も日々研鑽し、疾患の回復に努めました。面会禁止の中でも患者家族に少しでも安心して頂くためにリモート面会の対応を行いました。感染を制御し、自分たちの看護をどうしたら患者さんに提供できるのかを、創意工夫した一年でした。

全国的に看護研究学会の開催は今年度少なかったですが以下のように WEBでの開催に参加し、新たな形式での発表方法を学びのきっかけとなりました。

今年度は行動制限が多く、看護師の持ち前である元気や笑顔が少なかったと思います。次年度は持ち前の元気や笑顔でケアの実践を行っていきたいと思います。

【2020年度 研究発表業績】

A-3

安原加奈：“つらい”に寄り添う現場力 UP! がん薬物療法の副作用 50 患者アセスメント&ケアの note 見てわかる 今から使える「YORi-SOU がんナーシング」2021年増刊号、2021年1月26日

B-4

四方文子：転移性乳癌患者に対するアドバンスケアプランニング（ACP）の現状調査－看護師の回答を中心に－。第28回日本乳癌学会学術総会、WEB、2020年10月14日

四方文子：若年乳がん患者の妊孕性保存の支援。第16回日本乳がん看護研究会、WEB、2020年10月25日

橋口貴美、浅野弘美、増田雅子：退院前訪問・退院後訪問で看護師に期待すること。第74回国立病院総合医学会、WEB、2020年10月17日～11月14日

林 律子、中ノ亜沙美、林 祐希、角野郁子：よりよい指導に向けて～消化器外科病棟における再入院患者の特徴を明らかにする～。第 74 回国立病院総合医学会、WEB、2020 年 10 月 17 日～11 月 14 日

中濱智子：HIV 陽性者の情報の Up date における課題「HIV 陽性者の健康と生活に関する全国調査」の結果から。第 34 回日本エイズ学会学術集会、WEB、2020 年 11 月 27 日～12 月 25 日

東 政美：高齢化への対応と介護について「HIV 陽性者の健康と生活に関する全国」の結果から。第 34 回日本エイズ学会学術集会、WEB、2020 年 11 月 27 日～12 月 25 日

栄養管理部

内藤裕子

栄養管理室では、栄養士がチーム医療の一員として専門性を発揮すると共に、各科カンファレンスへの積極的な参加と栄養士の病棟担当制の推進によりメディカルスタッフとの連携強化を図り、入院患者の栄養状態維持改善、免疫力低下防止、治療効果及びQOL向上に向け継続的に努めている。今年度より特定集中治療室において、早期離床・在宅復帰を推進する観点から、栄養管理の充実に取り組んでいる。

栄養食事指導では、個人指導と各種教室である集団指導を実施し行っているが、糖尿病や腎臓病、循環器疾患等の慢性疾患や術前術後等についても積極的な取り組みを行い研究にも繋がっている。また、今年度より骨粗鬆症外来が開設され、栄養食事指導を担っている。

食事提供では、術前術後の栄養管理、化学療法での食欲低下患者、摂食嚥下障害患者等への個々に対応した食事の提供を行っているが、昨年同様にアレルギー対応についても増加傾向にある。

今年度の、栄養管理室で行った主な取り組みについて下記に示す。

1. 栄養サポートチーム

平成 25 年 6 月より栄養サポートチームを嚥下障害・内科系疾患とがん・外科系疾患の 2 チーム体制により専門性に特化した細やかな対応を継続して実施している。栄養士の病棟担当制により、医師、看護師との連携やアセスメントの充実をはかると共に職員間の栄養管理についての理解も深まりより重点的な活動が行われた。年間依頼件数は 366 件、年間算定件数は 962 件となった。また歯科医師連携加算は 297 件の算定件数となった。

2. 栄養食事指導

術前術後患者、糖尿病教育入院、循環器疾患、腎臓病、摂食嚥下障害やサルコペニア等の栄養食事指導を積極的に実施している。平成 29 年 2 月からの栄養指導室増設と栄養士曜日担当制により充実が図られた。指導病名別では、糖尿病、循環器疾患、腎臓病、がんが多くを占めている状況に特に大きな変化はなかった。年間指導件数は、3,633 件であった。

3. 1 型糖尿病専門外来指導

1 型糖尿病患者を対象に、平成 25 年 7 月より食事や活動、インスリン量などについての外来栄養指導を開始、インスリンポンプ導入患者に対するカーボカウント、ポンプ機能等の説明、患者自身による食事に合わせたインスリン調整など内容的にも充実したものとなっている。外来患者数の増により平成 29 年 1 月より予約枠を増やし対応していたが、更なる増加と要望に対応するため令和元年 8 月より更に枠を増やしているが、今年度は 427 件と COVID-19 感染拡大

防止対策等の影響もあり、減少傾向であった。

4. 糖尿病透析予防指導管理料

平成 24 年度から新設され、現在糖尿病内科医師、専任看護師、専任管理栄養士でチームにより月 3 回実施、令和 2 年度は年間 33 件であった。

5. 特定集中治療室管理料 早期栄養介入管理加算

特定集中治療室において、医師・看護師・薬剤師・理学療法士・専任管理栄養士等と共にチーム体制を整備し、令和 2 年 4 月より ICU・7 月より CCU の早期栄養介入管理を実施し、栄養管理の強化を図っている。年間算定件数は 1720 件となった。

6. Nutrition Week

栄養管理の最新・高度の知識・技術を修得させ、サービスの質と提供体制の均質化及び向上を図ることを目的として、ニュートリションウィークを今年度も開催した。

日本病態栄養学会「NST 実習技能研修」として 11 月 13 日～11 月 19 日(平日 5 日間)に実施。当院と機構病院、民間病院より 19 名を受け入れた。

7. NST セミナー

チームの活性化と栄養療法の質的向上を目指し、医師、看護師、薬剤師、栄養士等に

よる、全職員を対象としたセミナーを年間 6 回の開催予定であったが、COVID-19 感染拡大防止対策のため 2 回の開催となった。参加人数は延べ 16 名。

以 上

ケアサポートチーム（緩和ケアチーム）

当院の緩和ケアチームは2004年に、院内のがん緩和ケアを目的として多業種からなる「がんサポートチーム」という名称で発足しました。当初はがん告知の補助やオピオイドの使用方法などの依頼がありましたが、がん医療従事者の緩和ケア研修会の受講者の増加や疼痛緩和に対する認識が上昇してくるにつれ、チームが受けるコンサルテーションの内容も多岐で複雑になってきています。最近の緩和ケアはがんのみならず苦痛を伴う全ての患者を対象にするという趨勢になってきており、それに伴い当チームはがん以外の疾患も対応するため名称を「ケアサポートチーム」に改めました。また心不全など循環器疾患に対する緩和ケアが保険で認められるようになり、実際当院でも循環器疾患のコンサルテーションに対して介入を行っています。

チームでは他業種カンファレンスを毎週行い症例ごとの問題点を取り上げ、回診や診察を通じて改善策を検討し主治医や病棟看護師へと提案しています。病状の変化や新たな問題点の出現に対して、前線の実動メンバーは迅速に行動し対応策の構築に努めています。

月1回の運営会議では、介入件数や症例インシデントの解析、緩和に関連する学会、研究会、セミナーの報告や開催計画について討論しています。

また当院はがん診療連携拠点病院として年1回、厚生労働省委託事業PEACEプロジェクトの緩和ケア研修会を開催しています。昨年は新型コロナウイルス感染症の影響で人数を少なくし院内の医師のみを対象として無事終了することができました。

緩和ケアは本来は患者本人および家族に対して総合的になされますが、将来意思決定ができなくなった場合にどのようなケアを希望して行くのかを家族や医療従事者とともに話し合い意見や情報を共有するアドバンスケアプランニング(ACP)の整備が求められています。ACP導入時期や方法についてはまだ議論がありますが、ACPは世界的に健康人に対しても行われており緩和ケアを受ける患者に対しては必須の項目になっていくと思われます。それらの点を踏まえチームではACPの体制整備に対する取り組みを始め実践に向けて協議を重ねております。

構成メンバー

医師： 久田原郁夫（室長、臨床腫瘍科科長、整形外科医長）

相木佐代（緩和ケア内科）、田宮裕子（精神科科長）、青野奈々（緩和ケア内科）

看護師

櫻井真知子（外来副看護師長、がん看護専門看護師）

井出恭子（外来副看護師長、がん性疼痛認定看護師）

齊藤明音（外来副看護師長、緩和ケア認定看護師）

薬剤師

清水彩加（薬剤師）

井上敦介（副薬剤部長、緩和薬物療法認定薬剤師）

山本友佳子（薬剤師）

吉金鮎美（薬剤師）

MSW: 関根知嘉子、長谷川友美

栄養士: 内川巖志（副栄養管理室長）

心理士: 森田眞子（心理療法士）、富田朋子（心理療法士）

【実績】

2019年4月～2020年3月末日まで:

新規患者数 250件（がん患者230名、非がん患者20名）

セミナー開催: 法円坂緩和ケアセミナー

研修会開催: 厚生労働省委託事業 PEACE プロジェクト緩和ケア研修会

【2020年度 研究発表業績】

A-0

Kudawara I, Kakunaga S, Koji Takami: Objective response of denosumab for multiple pulmonary metastases from giant cell tumor of bone: A case report and review of the literature. Current Problems in Cancer: Case Reports 3 (2021) 100073

A-2

相木佐代: 緩和ケア病棟に転院後から始めなければならない場合「まるっと! ACP」宇井睦人編集、P36-39、南山堂、東京、2020年4月20日

B-4

久田原郁夫、角永茂樹、上田孝文、小河原光正、安藤性實、木村 剛、宮本 智: IV期肺がんにおける骨転移の臨床的検討。第53回日本整形外科学会骨・軟部腫瘍学術集会、Web、2020年9月11-30日

高見晴奈、角永茂樹、久田原郁夫、上田孝文: 炎症型の未分化多形肉腫に置いてドキソルビシン、イフォマイド療法にプレドニゾロンの追加が著効した3例。第53回日本整形外科学会骨・軟部腫瘍学術集会、Web、2020年9月11-30日

田宮大也、井上陽公、伊村慶紀、若松 透、田中大晶、中 紀文、王谷英達、竹中 聡、濱田健一郎、角永茂樹、久田原郁夫、上田孝文: 80歳以上の超高齢者と60-79歳の高齢者における悪性軟部腫瘍の背景因子、治療因子、予後の違いについての検討。第53回日本整形外科学会骨・軟部腫瘍学術集会、Web、2020年9月11-30日

伊村慶紀、王谷英達、竹中 聡、角永茂樹、濱田健一郎、若松 透、田宮大也、中 紀文、名井 陽、荒木信人、久田原郁夫、上田孝文、吉川秀樹: 悪性末梢神経鞘腫の治療成績と予後因子。第53回日本整形外科学会骨・軟部腫瘍学術集会、Web、2020年9月11-30日

伊村慶紀、王谷英達、竹中 聡、角永茂樹、濱田健一郎、若松 透、田宮大也、中 紀文、名井 陽、荒木信人、久田原郁夫、上田孝文、吉川秀樹: 当院および関連施設における血管肉

腫の治療成績。第53回日本整形外科学会骨・軟部腫瘍学術集会、Web、2020年9月11-30日

王谷英達、竹中 聡、濱田健一郎、伊村慶紀、若松 透、田宮大也、角永茂樹、久田原郁夫、上田孝文：下肢悪性骨腫瘍に対する患肢温存手術の合併症。第53回日本整形外科学会骨・軟部腫瘍学術集会、Web、2020年9月11-30日

B-8

相木佐代：心不全患者の終末期ケアと意思決定支援のポイント。大阪、2019年6月27日

相木佐代：心不全患者の終末期ケアと意思決定支援のポイント。東京、2019年9月12日

相木佐代：AYA世代の緩和ケア～ライフスタイルに合わせた薬剤選択～。大阪市東部緩和薬物療法ステップアップセミナー、大阪、2020年11月12日

福島貴嗣、安部晴彦、上田恭敬、相木佐代：病院での看取り。緩和ケアを取り入れた循環器疾患治療を考える会、大阪、Web、2021年2月3日

臨床心理室

田宮裕子

平成 19 年 7 月より臨床心理室は、①病院の理念に基づく事業であること、②質の高い医療の提供に貢献すること、③疾患と心理状態の関連が研究されていること、④医療者⇄患者関係と保健行動との関連が医療の効果を左右すること、⑤診療科間のサービスの格差をなくすこと、以上 5 点の目的や理由により、全診療科の患者やその家族等に対応可能な臨床心理室として再編された。今年度は常勤心理療法士 6 名、非常勤心理療法士 1 名、遺族健診・相談担当の心理療法士 1 名、エイズ予防財団リサーチレジデント 1 名、合計 9 名体制である。

現在臨床心理室は、臨床心理室運営委員会で審議した活動目標や計画をもとに、患者や家族等の心理相談、心理検査、各診療科・チームとのリエゾン・コンサルテーションといった心理臨床活動に加え、臨床心理室内のカンファレンス、臨床心理学専攻の大学院生の実習受け入れ、近畿グループ管内のメンタルヘルス相談、心理に関する研修の企画・運営・講義・講演、そして、研修を主に行っている。

当臨床心理室では従来日々の臨床に加えて、厚生労働行政推進調査事業費補助金による HIV 関連の研究班に分担研究者や協力者として参与し、HIV 陽性者の心理学的問題や、HIV 医療における心理臨床に関する研究を積み重ねている。また、各種セミナーや研修会において積極的に事例発表を行い、自己研鑽に務めている。調査研究や事例研究を心理臨床学会や日本エイズ学会などの学会において発表することにより、総合病院における臨床心理室の役割を他施設に伝え、医療の総合的な充実に資することも、当臨床心理室にとって重要な任務であると認識している。

【2020年度 研究発表業績】

A-5

安尾利彦、西川歩美、水木 薫、森田眞子、富田朋子、宮本哲雄、富成伸次郎：HIV陽性者の心理的問題点と対策の検討。厚生労働行政推進調査事業費補助金エイズ対策政策研究事業「HIV陽性者に対する精神・心理的支援方策および連携体制構築に関する研究」令和2年度（分担）研究報告書、P.12-17、2021年3月

A-6

安尾利彦：ちょっと立ち止まって、自分自身のことを見つめてみませんか-カウンセリングのご紹介-。NPO 法人日本 HIV 陽性者ネットワーク・ジャンププラスニュースレター43号、P.4-5、2020年7月

安尾利彦：メンタルヘルスサポートチーム「なのはな」活動紹介。大阪医療センター看護部ニュースレターかがやき 2020年7月号、2020年7月

B-3

榊原英輔、和田 信、塩飽耕規、井原 裕、兼本浩祐：精神医学の哲学としての精神病理学。日本精神病理学会第43回大会、Web開催、2020年10月17日

安尾利彦：総合病院の臨床心理室における同職種連携。シンポジウム「同職種内連携を円滑に進めるためにー業務と教育のマネジメントを中心にー」、第74回国立病院総合医学会、Web開催、2020年10月17日-11月14日

B-4

安尾利彦、西川歩美、水木 薫、神野未佳、富成伸次郎、白阪琢磨：HIV陽性者を含む慢性疾患患者の行動と心理に関する研究。第34回日本エイズ学会学術集会総会、Web開催、2020年11月27日-12月25日

水木 薫、安尾利彦、森田眞子、冨田朋子、宮本哲雄、西川歩美、牧 寛子、神野未佳、白阪琢磨：初診HIV陽性者を対象とした心理スクリーニングに関する研究。第34回日本エイズ学会学術集会・総会、Web開催、2020年11月27日-12月25日

山田富秋、早坂典生、橋本 謙、種田博之、小川良子、入江恵子、宮本哲雄：薬害被害者の「感染」の心理社会的意味。第34回日本エイズ学会学術集会、Web開催、11月27日

B-8

安尾利彦：健康管理・メンタルヘルスについて。大阪医療センター新採用職員研修、大阪医療センター、大阪、2020年4月2日

森田眞子：HIVとカウンセリング。大阪大学医学部公衆衛生学実習、大阪、2020年9月3日

森田眞子：HIV感染症と心理支援。奈良県立医科大学4回生実習、大阪、2020年10月15日

森田眞子：グループワークファシリテーション。大阪医療センターメンタルヘルスサポートチーム「なのはな」主催事務・コメディカル新入職者セルフケア研修、大阪、2020年10月26日

安尾利彦：ストレスとは。大阪医療センターメンタルヘルスサポートチーム「なのはな」主催事務・コメディカル新入職者セルフケア研修、大阪、2020年10月26日

安尾利彦：セルフケアとは。大阪医療センターメンタルヘルスサポートチーム「なのはな」主催事務・コメディカル新入職者セルフケア研修、大阪、2020年10月26日

安尾利彦：グループファシリテーション。大阪医療センターメンタルヘルスサポートチーム「なのはな」主催事務・コメディカル新入職者セルフケア研修、大阪、2020年10月26日

安尾利彦：HIVとカウンセリング。HIV感染症研修会、大阪、2020年11月3日

中内崇夫、岡本 学、中濱智子、西川歩美、：チーム医療の実際-多職種との協働-。HIV感染症研修会、大阪、2020年11月3日

牧 寛子：事例提供。HIV医療におけるコミュニケーションとチーム医療研修会、大阪、2020年11月4日

森田眞子：HIV陽性者の心理的支援、HIV陽性者の看護③チーム医療：チーム診療の実際。HIV/AIDS看護師研修会初心者コース、大阪、2020年11月10日

安尾利彦：新人看護師とメンタルヘルス。大阪医療センター看護部2020年度ラダー教育研修【ラダーI】メンタルヘルスケア、大阪、2020年11月27日

牧 寛子：事例提供。近畿ブロック HIV医療におけるカウンセリング研修会、大阪、2020年12月18日

安尾利彦：事例提供。近畿ブロック HIV医療におけるカウンセリング研修会、大阪、2020年12月18日

森田眞子：服薬支援～カウンセラーの視点から、服薬支援ロールプレイ指導。HIV感染症薬物療法認定薬剤師養成研修、大阪、2021年2月18日

宮本哲雄：HIV感染症と物質依存、認知症。HIV感染症薬物療法認定薬剤師養成研修、大阪、2021年2月18日

安尾利彦：看護師としてのレジリエンスとメンタルヘルス。大阪医療センター附属看護学校特別講義、大阪、2020年2月25日

研究分担・協力課題名 HIV 陽性者の心理的問題点と対策の検討

研究分担者 : 安尾 利彦 (国立病院機構 大阪医療センター 臨床心理室)

研究協力者 : 西川 歩美 (国立病院機構 大阪医療センター 臨床心理室)

水木 薫 (国立病院機構 大阪医療センター 臨床心理室)

神野 未佳 (国立病院機構 大阪医療センター 臨床心理室/

公益財団法人 エイズ予防財団)

森田 眞子 (国立病院機構 大阪医療センター 臨床心理室)

富田 朋子 (国立病院機構 大阪医療センター 臨床心理室)

宮本 哲雄 (国立病院機構 大阪医療センター 臨床心理室)

富成 伸次郎 (京都大学大学院 社会健康医学系専攻 健康情

報学分野)

研究要旨 本研究は HIV 陽性者の行動面の障害を伴う心理学的問題に関して、中でも受診中断に関してその発生状況、受診中断と関連する要因、受診中断に至る心理力動、心理学的介入方法を明らかにすることを目的とする。

初年度である一昨年度は研究 1 として、大阪医療センターに通院する HIV 陽性者の診療録の後方視的調査を行い、続いて 2 年目である昨年度は研究 2 として、HIV 陽性者および他の慢性疾患を対象に受診中断等の行動面の障害を伴う問題や心理的傾向を疾患の違いによって比較検討し、HIV 陽性者の行動面や心理面の特性を明らかにする調査を行った。研究 1 の結果、30 歳以下であること、抗 HIV 薬服用を服用していないこと、無断キャンセルの回数が多いことが受診中断と関連していること、研究 2 の結果、受診中断と関連する要因は見いだせなかったが、自尊感情と服薬中断の間に関連があることが明らかとなった。

最終年度である今年度は研究 3 として、HIV 陽性者の受診中断・継続の心理的背景と受診中断予防、受診再開、受診継続のための介入方法を明らかにすることを目的に、当院を初診受診した HIV 陽性者のうち、6 ヶ月以上にわたる受診中断経験を有する人を中断・再開経験者群 (以下中断群) として、性別、年齢、感染経路、病期、CD4 値、治療状況などで中断群とマッチングする受診中断経験のない人を受診継続者群 (以下継続群) として抽出し、欲求不満状況への反応を査定する心理検査である P-F スタディ等から構成される調査を実施した。P-F スタディの結果から、中断群 (n=13) は欲求不満状態に陥った際に、その原因を自分に求め自分を攻撃する一方、障害となっている他者に対しては許容的な態度を取る傾向が強いこと、継続群 (n=6) は欲求不満の原因である障害に対して不満や不快を表明したり他者を直接的に避難・攻撃したりすることは少なく、自分で障害を解決して乗り越えようとする傾向が強いことが推察された。自分を攻撃することが、受診行動を阻害する現実的問題を解決して乗り越える力や、自分を大事にしようとする治療意欲を弱めている可能性、および、受診中断の予防や再開・継続の支援のためには、HIV 感染等を巡る HIV 陽性者の自罰的な感情への介入や、問題解決の指向性を補助・促進する介入の必要性が示唆された。

研究の背景

中西ら¹⁾によると、HIV 陽性者は適応障害やうつ病などを発症することが多く、適応障害の中心は不安あるいは抑うつ気分であるが、対応が困難となるのは行動面の障害を伴う場合であり、具体的には外来通院の中断、内服の自己中断、職場放棄、ひきこもり、大量飲酒、薬物乱用が挙げられる。その他の先行研究でも、HIV 陽性者はメンタルヘルスに関する問題を抱えていることが多く²⁾、メンタルヘルスの低下や心理的な苦痛は、その後の安定した受診や服薬の障壁になりやすいと言われている^{3,4)}。また、富成ら⁵⁾によると、受診中断となる因子は治療歴なし、就労なし、若年者であり、カウンセリング導入歴があるものは、受診中断する可能性が低いことが示唆されている。加えて、心理社会的治療は免疫状態を改善させるだけでなく、情緒的苦痛の軽減や服薬アドヒアランスの改善、リスク行動の低減などの利点があると指摘されている⁶⁾。

これらの先行研究を踏まえ、本研究は HIV 陽性者の行動面の障害を伴う心理学的問題に関して、中でも受診中断に関してその発生状況、受診中断と関連する要因、受診中断に至る心理力動、心理学的介入方法を明らかにすることを目的とする。

本研究は以下の3つの研究から構成される。研究1は受診中断に関する診療録の後方視的調査研究、研究2は HIV 陽性者を含む慢性疾患患者の受診中断等の行動面や心理面の特性に関する調査研究、研究3は HIV 陽性者の受診中断・継続の心理的背景に関する調査研究である。

研究1：HIV 陽性者の受診中断に関する診療録の後方視的調査研究

研究目的

HIV 陽性者の受診中断の発生状況、受診中断と関連する要因、および介入方法を明らかにすることを目的とする。

研究方法

調査対象は2012年10月1日から2013年9月30日の間に大阪医療センターを新規受診した HIV 陽性者222名のうち、2018年3月末までに転院した例、死亡した例、帰国した例等を除く168名とした。

診療録から基本情報(性別、初診時の年代、感染経路、2018年3月末時点での抗 HIV 薬服薬の有無)、受診中断歴の有無、診療予約の無断キャンセル数、診療経過でのメンタルヘルスに関する診療録への記載の有無、物質使用の有無、飲酒頻度と量、カウンセリング介入歴を抽出した。

単純集計及び受診中断歴に関して χ^2 検定もしくは正確確率検定を行った。

(倫理面への配慮)

当院の倫理委員会に相当する受託研究審査委員会の承認を得た(整理番号:18112)。

研究結果

2018年3月末時点での受診中断者は19名(11%)、通院者は149名(89%)であった。受診中断歴については、

ありが33名(20%)、なしが135名(80%)であった。初診時の年齢は20代が41名(25%)であり、うち16名が中断歴あり、25名が中断歴なしであった。30代は49名(29%)で最も多く、うち10名が中断歴あり、39名が中断歴なしであった。40代は44名(26%)であり、うち5名が中断歴あり、39名が中断歴なしであった。50代は23名(14%)であり、うち2名は中断歴あり、21名が中断歴なしであった。60代は9名(5%)、70代は2名(1%)であり、いずれも中断歴ありはなかった。

初診時の年齢は30代が最も多いが、中断歴ありの陽性者は初診時に20代が最も多く、年齢が高くなるごとに減少傾向が認められた。

性別は男性が165名(98%)であり、うち33名が中断歴あり、132名が中断歴なしであった。女性は3名(2%)で、中断歴ありはいなかった。

感染経路については同性間が153名(91%)であり、うち31名が中断歴あり、122名が中断歴なしであった。異性間は15名(9%)であり、うち2名が中断歴あり、13名が中断歴なしであった。

初診時の病期について、無症候キャリアが134名(80%)であり、うち30名が中断歴あり、104名が中断歴なしであった。エイズ発症は34名(20%)であり、うち3名が中断歴あり、31名が中断歴なしであった。

2018年3月末時点での抗 HIV 薬内服の有無では、服用なしが13名(8%)であり、うち11名が中断歴あり、2名が中断歴なしであった。これまでに抗 HIV 薬服用ありは155名(92%)であり、うち22名が中断歴あり、133名が中断歴なしであった。服用なしのほとんどが中断歴ありであった。

他科を含めた診療の無断キャンセル数について、5回以上無断キャンセルありは23名(14%)であり、うち9名が中断歴あり、14名が中断歴なしであった。4回以下は145名(86%)であり、うち24名が中断歴あり、121名が中断歴なしであった。

診療録へのメンタルヘルスに関する記載(初診時や診療経過での自覚し自ら訴えた不安や気分の落ち込みに関する記述や、医療者が観察した HIV 陽性者のメンタルヘルスに関する記述)の有無については記載ありが77名(46%)であり、うち13名が中断歴あり、64名が中断歴なしであった。記載なしについては、91名(54%)であり、うち20名が中断歴あり、71名が中断歴なしであった。

物質使用について使用歴ありは57名(34%)であり、15名が中断歴あり、42名が中断歴なしであった。使用歴なしは88名(52%)であり、うち14名が中断歴あり、74名が中断歴なしであった。不明は23名(14%)であり、4名が中断歴あり、19名が中断歴なしであった。飲酒頻度や摂取量については、週3日以上頻度で3杯以上の摂取量である群と、それ以外の飲まない、あるいは機会飲酒程度の群に分けたところ、週3日以上頻度で3杯以上の摂取量の群は41名(25%)であり、うち5名が中断歴あり、36名が中断歴なしであった。飲まない・機会飲酒群は123名(73%)であり、うち26名が中断歴あり、97名が中断歴なしであった。不明は4名(2%)

であり、2名が中断歴あり、2名が中断歴なしであった。カウンセリングの介入歴については、カウンセリング介入歴ありは41名(24%)であり、うち9名が中断歴あり、32名が中断歴なしであった。認知機能検査のみは10名(6%)であり、10名ともに中断歴なしであった。研究参加による心理士との接触ありでは28名(17%)であり、5名が中断歴あり、23名が中断歴なしであった。研究参加による心理士との接触なしは89名(53%)であり、うち19名が中断歴あり、70名が中断歴なしであった。

上記の単純集計から、年齢(30歳以下/31歳以上)、性別(男/女)、感染経路(同性間/異性間)、初診時の病期(無症候キャリア/エイズ発症)、2018年3月末時点での抗HIV薬服薬(あり/なし)、無断キャンセル(5回以上/4回以下)、メンタルヘルスに関する記述(あり/なし)、カウンセリングの利用歴(あり/なし)、物質使用(あり/なし)、アルコールの多量摂取(あり/なし)で、中断歴(あり/なし)に関して χ^2 乗検定もしくは正確確率検定を行った。その結果は下記のとおりである。年齢($p=0.000$)、性別($p=1.000$)、感染経路($p=.738$)、初診時の病期($p=.075$)、2018年3月末時点での抗HIV薬内服($p=.000$)、無断キャンセル($p=.021$)、メンタルヘルスに関する記述($p=.408$)、カウンセリングの利用歴($p=.737$)、物質使用($p=.126$)、アルコールの多量摂取($p=.205$)。よって、30歳以下であること、抗HIV薬服用を服用していないこと、無断キャンセルの回数が多いことと、受診中断の間に関連が認められた。

考察

本研究により、1施設ではあるがHIV陽性者の受診中断の発生状況が明らかとなった。また、先行研究で示されているように、若年者及び服薬未導入の場合には、受診中断に至りやすい可能性が確認された。これに加え、診療の無断キャンセルが多い場合には受診中断に繋がりやすい可能性が示唆された。

無断キャンセルが生じた際には、本人の来院時に安定的な受診の障壁となっている点を医療スタッフが本人に確認し、受診中断予防のための介入を行うことが重要である。

また今回の調査ではメンタルヘルスや物質使用と受診中断の関連は明らかにはならなかった。しかしながら、診療場面等において本人が自身のメンタルヘルスや物質使用の問題について自覚的であるとは限らず、またそれについて自発的に発言することは容易ではないことが推察され、この点は今回の調査手法による限界であると考えられる。メンタルヘルスや物質使用については、医療スタッフからの意識的・継続的なアセスメントが必要であると考えられる。

結論

HIV陽性者の受診中断の発生状況が明らかとなった。また、HIV陽性者の受診中断を防ぐためには、無断キャンセルが発生した際に、安定した受診の障壁を検討する介入を行うことの重要性が示唆された。

研究2：HIV陽性者を含む慢性疾患患者の行動面および心理面の特性に関する研究

研究目的

HIV陽性者および他の慢性疾患を対象に、受診・服薬や就労・外出といった行動および自尊感情や対象関係といった心理に関する特徴を明らかにし、心理的援助のあり方を検討することを目的とする。

研究方法

高血圧、糖尿病、HIV感染症を対象疾患とする。HIV感染症の対照群として高血圧と糖尿病を選択した根拠は、3疾患いずれも慢性疾患ではあるものの、定期的な受診や治療薬の内服・使用が求められること、治療しなければ重篤な病状や後遺症、あるいは死亡が生じうる疾患であることである。

高血圧と糖尿病に関しては、本調査を委託するリサーチ企業にモニター登録をしている高血圧と糖尿病の患者から無作為抽出し、ウェブ上で調査への回答を求めた。

HIV感染症に関しては、2016年～2017年度に実施した質問紙調査(当院外来通院中のHIV陽性者300名を無作為抽出し無記名自記式質問紙を配布)のデータのうち、基本属性に関する質問への記載漏れのない回答を今回の分析に用いた。

調査項目は1)基本属性、2)保健行動・社会的行動、3)心理尺度で構成する。1)基本属性：性別、年齢、最終学歴、罹患判明後の年月を問う。2)行動(保健行動・社会的行動)：①受診中断：6か月間以上受診しなかった経験の有無、②治療薬の自己中断：医師の指示でなく自分の判断で服用・使用をやめた経験の有無、③就労および外出：内閣府調査⁷⁾の一部を用い、就労状況と外出の頻度。3)心理尺度：①自尊感情尺度：ローゼンバーグによって作成され、山本らが翻訳した10項目から成る尺度⁸⁾、②対象関係尺度：対人場面における個人の態度や行動を規定する、精神内界における自己と対象との関係性の表象である対象関係を測定するもので、親和不全(6項目)、希薄な対人関係(5項目)、自己中心的な他者操作(5項目)、一体性の過剰希求(6項目)、見捨てられ不安(7項目)の5つの下位尺度(合計29項目)から成る尺度⁹⁾。

分析方法は以下のとおりである。1)行動をアウトカムとし、疾患・基本属性・心理尺度を共変量とした多変量ロジスティック回帰分析、2)心理尺度得点をアウトカムとし、疾患・基本属性を共変量とした重回帰分析、3)対象関係尺度について、一般人口(大学生・成人)のデータと3疾患群との間でのt検定。

(倫理面への配慮)

当院の倫理委員会に相当する受託研究審査委員会の承認を得た(整理番号：18102)。

研究結果

3疾患群それぞれの基本属性と受診中断・治療薬自己中断・就労の有無・外出の有無は以下のとおりである。

HIV感染症群(n=163) 平均年齢：49.0歳、性別：男性159名(97.5%)、女性4名(2.5%)、最終学歴：中

学6名(3.7%)、高校46名(28.2%)、専門学校29名(17.8%)、高等専門学校/短期大学10名(6.1%)、4年生大学60名(36.8%)、大学院12名(7.4%)。受診中断:あり12名(7.4%)、なし150名(92.6%)。治療薬自己中断:あり8名(5.1%)、なし150名(94.9%)。就労:あり130名(79.8%)、なし33名(20.2%)。外出:あり133名(84.2%)、なし25名(15.8%)。

高血圧症群(n=205) 平均年齢:62.1歳。性別:男性170名(82.9%)、女性35名(17.1%)。最終学歴:中学5名(2.4%)、高校60名(29.3%)、専門学校13名(6.3%)、高等専門学校/短期大学17名(8.3%)、4年生大学105名(51.2%)、大学院6名(2.9%)。受診中断:あり17名(8.3%)、なし188名(91.7%)。治療薬自己中断:あり19名(9.3%)、なし186名(92.7%)。就労:あり136名(66.3%)、なし69名(33.7%)。外出:あり151名(73.7%)、なし54名(26.3%)。

糖尿病群(n=210) 平均年齢:62.3歳。性別:男性172名(81.9%)、女性38名(18.1%)。最終学歴:中学9名(4.3%)、高校63名(30.0%)、専門学校12名(5.7%)、高等専門学校/短期大学16名(7.6%)、4年生大学104名(49.5%)、大学院6名(2.9%)。受診中断:あり20名(9.5%)、なし190名(90.5%)。治療薬自己中断:あり14名(6.7%)、なし196名(93.3%)。就労:あり129名(61.4%)、なし81名(38.6%)。外出:あり142名(67.6%)、なし68名(32.4%)。

1) 行動をアウトカムとし、疾患・基本属性・心理尺度を共変量とした多変量ロジスティック回帰分析

自尊感情が低い人ほど治療薬の自己中断をしていた(OR 0.948, 95%CI 0.900-0.999, $p=0.046$)。高血圧症の人(OR 3.750, 95%CI 1.467-9.585, $p=0.006$)、糖尿病の人(OR 3.052, 95%CI 1.198-7.770, $p=0.019$)、年齢が低い人(OR 0.879, 95%CI 0.854-0.904, $p<0.001$)、自尊感情が高い人(OR 1.046, 95%CI 1.009-1.084, $p=0.012$)ほど就労していた。また年齢が低い人(OR 0.954, 95%CI 0.931-0.976, $p<0.001$)ほど外出をしていた。受診中断については特に共変量との関連は認められなかった。

2) 心理尺度得点をアウトカムとし、疾患・基本属性を共変量とした重回帰分析

HIV陽性者に比べて高血圧症の人($\beta=8.221$, 95%CI 7.246-9.195, $p<0.001$)や糖尿病の人($\beta=8.431$, 95%CI 7.452-9.409, $p<0.001$)は対象関係尺度における自己中心的な他者操作が高く、また同じくHIV陽性者に比べて高血圧症の人($\beta=11.386$, 95%CI 10.199-12.574, $p<0.001$)や糖尿病の人($\beta=11.946$, 95%CI 10.755-13.139, $p<0.001$)は対象関係尺度における一体性の過剰希求が高いという結果であった。

3) 対象関係尺度 一般人口と3疾患群との間でのt検定

一般人口に比べて高血圧症患者は「親和不全」($t=19.351$, $p<0.001$)、「希薄な対人関係」($t=21.632$, $p<0.001$)、「自己中心的な他者操作」($t=24.601$, $p<0.001$)、「一体化の過剰希求」($t=32.575$, $p<0.001$)、「見捨てられ不安」($t=19.779$, $p<0.001$)が高かった。一般人口に比べて糖尿病患者も「親和不全」($t=18.074$, $p<0.001$)、「希薄な対人関係」($t=20.608$, $p<0.001$)、「自己中心的な他者操作」($t=30.697$, $p<0.001$)、「一

体化の過剰希求」($t=26.382$, $p<0.001$)、「見捨てられ不安」($t=8.935$, $p<0.001$)が高かった。HIV陽性者は一般人口に比べ、「親和不全」($t=2.759$, $p<0.01$)と「希薄な対人関係」($t=6.242$, $p<0.001$)が高く、「自己中心的な他者操作」($t=4.086$, $p<0.001$)、「一体化の過剰希求」($t=2.953$, $p<0.01$)、「見捨てられ不安」($t=2.200$, $p<0.05$)は低かった。

考察

慢性疾患患者には、自尊感情の高さと治療継続や就労といった行動との間の関連性、対人緊張の高さや対人的交流の乏しさが、強弱に差はあるが共通して認められた。また高血圧症患者、糖尿病患者は、HIV陽性者よりも就労している傾向にあった。これらの点から、慢性疾患患者に対する心理的支援に関しては、罹患等による自尊感情の低下や対人緊張・回避に焦点づけた介入が重要であると考えられる。また、HIV陽性者の就労困難については、他の2疾患よりも疾患や性的指向に対する社会的偏見が影響している可能性が推察される。

また、HIV陽性者は他の2疾患よりも「自己中心的な他者操作」と「一体性の過剰希求」が低く、一般人口よりも「自己中心的な他者操作」「一体性の過剰希求」「見捨てられ不安」が低いことが明らかとなった。「自己中心的な他者操作」は他者の操作的利用や共感性未発達を、「一体性の過剰希求」は他者を独立した他者と認めない傾向を、そして「見捨てられ不安」は拒絶の恐れや相手の反応への過敏さを意味する。これらの点から、HIV陽性者は、他者に対する健全な共感性や自己と他者の境界感覚を強く有する一方で、他者に対して劣等感を抱き、心理的に距離を置く傾向がある可能性が推察される。

心理療法においては、個々のHIV陽性者の対象関係についてこれらの点に留意したアセスメントと介入が必要である。

結論

HIV陽性者を含む慢性疾患患者において、自尊感情の高さが治療継続や就労行動と関連することが明らかとなった。またHIV陽性者は他の2疾患患者よりも他者に対する健全な共感性や自己と他者の境界感覚を強く有する一方で、他者に対して劣等感を抱き、心理的に距離を置く傾向がある可能性があり、これらの点に留意したアセスメントと介入が必要であると推察された。受診中断については今回の調査では関連する要因が明らかにならなかったため、今後は異なる視点での研究を行う必要性が示唆された。

研究3: HIV陽性者の受診中断・再開・継続の心理的背景に関する研究

研究目的

HIV陽性者の受診中断・継続の心理的背景と受診中断予防、受診再開、受診継続のための介入方法を明らかにすることを目的とする。

研究方法

調査期間は2020年6月から、対象は2012~14年に当

院を初診受診した陽性者のうち、6 ヶ月以上にわたる受診中断経験を有する人を中断・再開経験者群（以下中断群、n=25 程度）として抽出した。性別、年齢、感染経路、病期、CD4 値、治療状況などで受診中断者とマッチングする）受診中断経験のない人を受診継続者群（以下継続群、n=25 程度）として抽出した。

調査項目は以下のとおりである。1) 基本属性：年齢、性別、感染経路、病期、CD4 値、治療状況など、2) 受診中断・再開・継続に関する質問（中断群：受診中断・再開の理由、初診時・中断時・現在の HIV 陽性の受容度、継続群：受診継続の理由、初診時・現在の HIV 陽性の受容度）、3) 心理検査：P-F スタディ。これは投影法による心理検査で、24 の欲求不満場面が描かれた絵を見て、登場人物がどのような反応をするか記載を求め、心理力動を査定する。被検者の反応はアグレッションの方向により 3 つ（他責的 E-A、自責的 I-A、無責的 M-A）、アグレッションの型により 3 つ（障害優位型 O-D、自我防衛型 E-D、要求固執型 N-P）のカテゴリーに分けられ、さらにこのアグレッションの方向と型の組み合わせにより 9 つ（他責逡巡 E'、他罰 E、他責固執 e、自責逡巡 I'、自罰 I、自責固執 i、無責逡巡 M'、無罰 M、無責固執 m）のカテゴリーに分けられる¹⁰⁾。

分析方法は以下のとおりである。1) 受診中断・再開・継続の理由：単純集計、2) HIV 陽性であることを受容度：単純集計、中断群と継続群の比較、両群内での時期（初診時・中断時・現在）による比較（t 検定、 χ^2 検定）、3) P-F スタディのスコア：標準と中断群/継続群の比較、中断群と継続群の比較（t 検定、Mann-Whitney の U 検定）。

（倫理面への配慮）

当院の倫理委員会に相当する受託研究審査委員会の承認を得た（整理番号：19140）。

研究結果

今年度は新型コロナウイルスの影響により外来患者の受診が不安定になりがちとなったことで、リクルートが予定通り進まず、予定の対象者数に満たなかった。特に継続群のリクルートは6名のみと限定的であった。

中断群（n=13）の基本属性は以下のとおりである。性別：男性 13 名（100%）、初診時年齢（平均）：31.3 歳、感染経路：男性同性間 13 名（100%）、初診時病期：無症候キャリア 12 名（92.3%）、エイズ発症 1 名（7.7%）、初診時 CD4 値（平均）：358、中断時の服薬の有無：あり 12 名（92.3%）、なし 1 名（7.7%）、受診中断期間（平均）：26.6 ヶ月。継続群（n=6）の基本属性は以下のとおりである。性別：男性 6 名（100%）、初診時年齢（平均）：37.5 歳、感染経路：男性同性間 6 名（100%）、初診時病期：無症候キャリア 5 名（83.3%）、エイズ発症 1 名（16.7%）、初診時 CD4 値（平均）：377。

1) 受診中断・再開・継続の理由（複数回答）

中断群の中断理由：「身体に何の症状もなかった」8 件、「時間を作ることができなかった」7 件、「経済的に医療費を払えなかった」6 件、「受診できる精神状態ではなかった」6 件、「医療費減免の手続きができていなかった」5 件、「HIV で嫌な思いをした」5 件、「診察や病院関係

者と会うことに抵抗があった」4 件、「抗 HIV 薬を飲むのが辛かった」3 件、「HIV に向き合うのが辛かった」2 件、「周囲に HIV 未告知で、支えがなかった」1 件、「受診を促してくれる人がいなかった」1 件、「大切な他者との不和や別れがあった」1 件、「信頼する病院関係者がいなくなった」1 件であった。

中断群の再開理由：「時間を作ることができるようになった」5 件、「健康悪化防止に治療しようという気持ちが出てきた」5 件、「経済的に医療費を払えるようになった」4 件、「医療費減免の手続きができた」3 件、「身体の症状が出てきた」3 件、「HIV に向き合うようになった」2 件、「HIV の理解者・支援者ができた」1 件、「大切な他者ができた・関係が改善した」1 件、「精神状態が改善した」1 件、「信頼できる病院関係者が見つかった」1 件、「病院から受診再開を促す連絡があった」1 件であった。

継続群の継続理由：「時間を作ることができる」5 件、「健康悪化防止に治療しようという気持ちがある」5 件、「医療費減免の手続きができてきている」5 件、「経済的に医療費を払うことができる」4 件、「HIV に向き合おうとしている」4 件、「信頼できる病院関係者がいる」4 件、「診察や病院関係者への抵抗がない」3 件、「大切な他者がいる」3 件、「HIV の理解者・支援者がいる」2 件、「精神状態が安定している」2 件、「HIV で嫌な思いをしたことがない」2 件、「病院関係者から受診を促される」2 件であった。

2) HIV 陽性であることを受容度（「全く受け入れていない」1 点～「完全に受け入れている」5 点の 5 件法）

中断群：初診時 3.5、中断時 3.6、現在 4.6、継続群：初診時 3.0、現在 4.7 であった。中断群の初診時と継続群の初診時に差はなく（ $t=780, p=.446$ ）、同じく両群の現在にも差はなかった（ $z=1.394, p=.244$ ）。中断群の初診時、中断時、現在では差が認められた（ $\chi^2=9.36, p<.01$ ）。継続群の初診時と現在では差が認められなかった（ $t=1.784, p=.135$ ）。

3) P-F スタディのスコア

16 のカテゴリーのスコアについて、標準、中断群、継続群の順で示す。他責的 E-A (%)：標準 40、中断群 28.8、継続群 24.2、自責的 I-A (%)：標準 27、中断群 37.1、継続群 34.7、無責的 M-A (%)：標準 33、中断群 33.8、継続群 41.0、障害優位型 O-D (%)：標準 25、中断群 19.2、継続群 23.2、自我防衛型 E-D (%)：標準 51、中断群 56.8、継続群 36.3、要求固執型 N-P (%)：標準 23、中断群 23.9、継続群 34.2、他責逡巡 E' (個)：標準 2.1、中断群 1.4、継続群 0.6、他罰 E (個)：標準 5.6、中断群 3.1、継続群 2.7、他責固執 e (個)：標準 1.8、中断群 2.3、継続群 2.4、自責逡巡 I' (個)：標準 1.7、中断群 2.0、継続群 2.3、自罰 I (個)：標準 3.5、中断群 4.6、継続群 2.8、自責固執 i (個)：標準 1.5、中断群 2.0、継続群 3.0、無責逡巡 M' (個)：標準 2.3、中断群 1.0、継続群 2.5、無罰 M (個)：標準 3.1、中断群 5.6、継続群 4.5、無責固執 m (個)：標準 2.4、中断群 1.3、継続群 2.7 であった。

両群と標準の比較では、中断群は標準と比べて 1SD 以上無責逡巡 M' が低く、自責的 I-A と無罰 M が高かった。継続群は標準と比べて 1SD 以上他責的 E-A、自我防衛型

E-D、他責逡巡E'、他罰Eが低く、要求固執型N-Pと自責固執iが高かった。

中断群と継続群の比較では、中断群は継続群よりも自我防衛型E-D ($t=2.95, p<.05$)、他責逡巡E' ($t=2.32, p<.05$)、自罰I ($t=2.98, p<.01$)が高く、継続群は中断群よりも障害固執型N-P ($t=2.25, p<.05$)と無責固執m ($z=2.44, p<.05$)が高かった。

考察

受診中断・再開・継続の理由の結果からは、中断には症状がなく受診の必要性の実感がないこと、受診のための時間や経済面など現実的問題が未解決であること、精神状態およびHIVに関する嫌な思いの経験など心理的問題が関連することが推察された。受診再開の理由となるほどに精神状態の改善が生じる例は少ない一方で、治療意欲の高まりは認められており、受診のための時間や経済面などの現実的問題が解決していることが受診再開と関連していると考えられる。継続群は、受診のための時間や経済面などの現実的問題が解決しており、治療意欲があり、HIVや医療者と向き合う姿勢やスキルを持っていることが推察された。

P-Fスタディの結果からは、中断群は欲求不満状態に陥った際に、欲求不満の原因である障害を軽視することができず、その原因を自分に求め自分を攻撃する一方、障害となっている他者に対しては許容的な態度を取る傾向が強いことが推察された。これに対して継続群は、欲求不満の原因である障害に対して不満や不快を表明したり他者を直接的に避難・攻撃したりすることは少なく、自分で障害を解決して乗り越えようとする傾向が強いと考えられる。

受診の中断・再開・継続の理由の結果と合わせて考えると、自分を攻撃することが、受診行動を阻害する現実的問題を解決して乗り越える力や、自分を大事にしようとする治療意欲を弱めている可能性が推察される。受診中断の予防や再開・継続の支援のためには、HIV感染等を巡るHIV陽性者の自罰的な感情に対する介入と、問題解決の指向性を補助・促進する介入が必要であることが推察される。

結論

自分を攻撃することが、受診行動を阻害する現実的問題を解決して乗り越える力や、自分を大事にしようとする治療意欲を弱めている可能性が推察される。受診中断の予防や再開・継続の支援のためには、HIV感染等を巡るHIV陽性者の自罰的な感情への介入と、問題解決の指向性を補助・促進する介入が必要であることが推察される。

健康危険情報

該当なし。

研究発表

1. 論文発表

該当なし。

2. 学会発表

西川歩美：心理士からみたHIV陽性者の受診中断の背景に関する検討。ワークショップ看護 受診中断者を“ゼロ”にする、第32回日本エイズ学会学術集会・総会、大阪、2018年12月。

水木薫、安尾利彦、西川歩美、白阪琢磨：HIV陽性者の行動面の障害を伴う問題の心理的背景に関する研究。第32回日本エイズ学会学術集会・総会、大阪、2018年12月。

安尾利彦：長期療養におけるコミュニケーションの重要性。HIV感染症薬物療法認定・専門薬剤師認定講習会、第32回日本エイズ学会学術集会・総会、大阪、2018年12月。

安尾利彦、西川歩美、水木薫、神野未佳、富成伸次郎、白阪琢磨：HIV陽性者を含む慢性疾患患者の行動と心理に関する研究。第34回日本エイズ学会学術集会・総会、千葉(Web)、2020年11月～12月。

知的財産権の出願・取得状況 (予定を含む)

該当なし。

文献

- 1)中西幸子、赤穂理恵：HIV/AIDSにおける精神障害。総合病院精神医学 23(1), 35-41, 2011.
- 2)Bing EG, Burnam AM, Longshore D, et al. Psychiatric disorders and drug use among human immunodeficiency virus-infected adults in the United States. Arch Gen Psych.;58:721,2001
- 3)Tobias CR, Cunningham W, Cabral HD, Cunningham CO, Eldred L et al. Living with HIV But Without Medical Care: Barriers to Engagement, AIDS Patient Care STDs 21: 426-434,2007
- 4)Blashill AJ, Perry N, Safren SA .Mental Health: A Focus on Stress, Coping, and Mental Illness as it Relates to Treatment Retention, Adherence, and Other Health Outcomes. Curr HIV/AIDS Rep 8: 215-222,2011
- 5)Shinjiro Tominari et al. Implementation of Mental Health Service Has an Impact on Retention in HIV Care: A Nested Case-Control Study in a Japanese HIV Care Facility. PLOS ONE8(7)1-6.2013
- 6)Cohen,MA et al.:Handbook of AIDS Psychiatry. Oxford University Press, 2010, New York 訳：HIV感染症及びその合併症の課題を克服する研究 平成25年度 研究報告書 72-73.
- 7)内閣府政策統括官：若者の意識に関する調査（ひきこもりに関する実態調査）報告書, 41-43, 2009.
- 8)堀洋道、山本真理子：自尊感情尺度。心理測定尺度集□, 29-31, サイエンス社, 2001.
- 9)井梅由美子・平井洋子・青木紀久代・馬場禮子：日本における青年期用対象関係尺度の開発。パーソナリティ研究 14, 181-193, 2006.
- 10) 林勝造：P-Fスタディ解説2006年版。三京房, 2007.

研究分担・協力課題名 HIV 陽性者の心理的問題点と対策の検討

研究分担者: 安尾利彦 (独立行政法人国立病院機構 大阪医療センター 臨床心理室)

研究協力者: 神野未佳 (独立行政法人国立病院機構 大阪医療センター 臨床心理室 / エイズ予防財団リサーチレジデント)

西川歩美 (独立行政法人国立病院機構 大阪医療センター 臨床心理室)

水木薫 (独立行政法人国立病院機構 大阪医療センター 臨床心理室)

森田眞子 (独立行政法人国立病院機構 大阪医療センター 臨床心理室)

富田朋子 (独立行政法人国立病院機構 大阪医療センター 臨床心理室)

宮本哲雄 (独立行政法人国立病院機構 大阪医療センター 臨床心理室)

【目的】 HIV 陽性者の受診中断・継続の心理的背景と受診中断予防、受診再開、受診継続のための介入方法を明らかにすることを目的とする。

【方法】 2012 年～2014 年の 2 年間に当院を初診受診した HIV 陽性者のうち、6 ヶ月以上にわたる受診中断経験を有する人を「中断・再開経験者」群とする (以下中断群、n=25 程度を予定)、性別、年齢、感染経路、病期、CD4 値、治療状況などで「受診中断・再開経験者」とマッチングする受診中断経験のない人を「受診継続者」群とする (以下継続群、n=同上)。調査項目は基本属性、受診中断・再開・継続の理由、初診時・受診中断時・現在における HIV 陽性であることについての受容度、P-F スタディ。当院倫理委員会の承認を得た。

【結果】 2021 年 1 月末現在、受診中断・再開経験者 13 名、受診継続者群 6 名に実施した。P-F スタディの結果について、標準と中断群・継続群、中断群と継続群で比較をした。その結果、中断群は標準と比べて無責逡巡 (障害軽視) は低いが、自責と無罰 (許容) が高いという結果であった。また継続群は標準と比べて他責逡巡 (不満・不快の表明) と他罰 (直接非難・攻撃) が低く、自責固執 (自分で解決) が高かった。中断群と継続群で比較したところ、中断群は自罰 (謝罪、責任の自認) が高く、継続群は他責逡巡 (不満・不快の表明) が低く無責固執 (自分で解決) が高いという結果であった。

【考察】 中断群は欲求不満状態に陥った際に、欲求不満の原因である障害を軽視することができず、その原因を自分に求め自分を攻撃する一方、障害となっている他者に対しては許容的な態度を取る傾向が強いと考えられる。継続群は欲求不満の原因である障害に対して不満や不快を表明したり他者を直接的に避難・攻撃したりすることは少なく、自分で障害を解決して乗り越えようとする傾向が強いと考えられる。自分を攻撃することが、受診行動を阻害する現実的問題を解決して乗り越える力や、自分を大事にしようとする治療意欲を弱めている可能性が推察される。受診継続の支援のためには、HIV 感染等を巡る HIV 陽性者の自罰的な感情への介入と、問題解決の指向性を促進する介入が必要であることが推察される。

メンタルヘルスサポートチーム「なのはな」

科長名または室長名（構成員）

上松正朗副院長、三田英治副院長、八軒美幸副看護部長、田宮裕子精神科長、小西宏一管理課長、山本紗世職員研修部係長、小國駿職員研修部係長、岡本裕子保健師、安尾利彦心理療法士

メンタルヘルスサポートチーム「なのはな」は、当院の職員のメンタルヘルス、中でも主に1次予防（メンタルヘルスに関する情報提供・教育研修・環境改善）と2次予防（メンタルヘルス不調の早期把握・早期対策）に関する企画、立案、評価、対策を行う組織横断的なチームである。

平成18年の厚生労働省からの「労働者の心の健康づくりのための指針」の改定に基づき、「事業者が自らの事業所におけるメンタルヘルスケアを積極的に推進すること」との指針に従い、平成23年4月からの院内での立ち上げの準備期間を経て、安全衛生委員会のもとで平成24年1月から本格的な活動を開始した。

チームの愛称である「なのはな」は、菜の花の花言葉「豊かな日々」「快活」に由来しており、「職員一人ひとりが心豊かに、生き活きと働くための職場づくりをサポートしたい」という願いが込められている。

「なのはな」がこれまでに取り組んできた主な活動は大きく分けて、1) 職員からの個別相談、2) チームの広報と情報提供、3) 教育研修、4) 危機介入、5) 健康診断時のセルフチェックの実施、6) 各部署訪問による労働環境改善の働きかけ、以上6つである。

- 1) 職員からの個別相談：相談窓口を設け、本人およびその上司や同僚からの相談について、精神科医1名と臨床心理士1名が対応している（精神科診療や心理療法の提供はせず、コンサルテーションのみとしている）。
- 2) チームの広報と情報提供：ネームプレートに入れることができる、相談窓口を記載したカードを作成した。また院内広報誌になのはな便りを掲載した。
- 3) 教育研修：新入職者オリエンテーション時の講義に加え、ラインケア研修、セルフケア研修を企画運営またはその協力をしている。
- 4) 危機介入：入院患者の自殺等の緊急事態が発生した際、現場に暴露された職員の個別面談、グループミーティングを行った。また発生部署の職員全員に対して、急性ストレス障害に関する情報提供を行った。
- 5) 健康診断時のセルフチェックの実施：平成27年度より義務化されたストレスチェック制度に先駆けて、問診票とともに仕事の疲労度セルフチェックを配布し、任意・匿名で回収し、希望者には書面で結果のフィードバックを行った。義務化によって導入された制度に移行した。
- 6) 各部署訪問による労働環境改善の働きかけ：了解が得られた部署に対して、職業性ストレス簡易調査票によるアンケートを実施し、その結果をもとにその職場の職員が主体的に改善点を検討・実施し、再度同じ調査票を用いて改善度を評価した。

3. 今年度の主な活動状況

- 1) 定例連絡会議：計7回（令和2年6月8日、7月13日、8月24日、9月28日、10月19日、11月16日、令和3年3月22日）
- 2) 研修会（企画運営および協力）：新規採用職員研修（令和2年4月2日）、メンタルヘルスサポートチーム「なのはな」主催事務・コメディカル新入職者セルフケア研修（10月26日）、安全衛生研修「セルフケアから始めよう～すぐできる、ひとりのできる、こころケア～（演者：大阪彩都心理センター 竹田 伸子先生）」（12月25日）
- 3) 新型コロナウイルス感染症に従事する職員や外傷的体験をした職員に対して、メンタルヘルスに関する情報提供、メンタルヘルスチェック、個別面談を行った。

【2020年度 研究発表業績】

A-6

田宮裕子：危機的な状況の中での医療従事者のメンタルヘルス。大阪医療センター看護部ニュースレターかがやき2020年7月号、2020年7月

安尾利彦：メンタルヘルスサポートチーム「なのはな」の活動の紹介。大阪医療センター看護部ニュースレターかがやき2020年7月号、2020年7月

B-8

安尾利彦：健康管理・メンタルヘルスについて。大阪医療センター新採用職員研修、大阪医療センター、大阪、2020年4月2日

安尾利彦：ストレスとは。大阪医療センターメンタルヘルスサポートチーム「なのはな」主催事務・コメディカル新入職者セルフケア研修、大阪、2020年10月26日

安尾利彦：セルフケアとは。大阪医療センターメンタルヘルスサポートチーム「なのはな」主催事務・コメディカル新入職者セルフケア研修、大阪、2020年10月26日

安尾利彦：グループファシリテーション。大阪医療センターメンタルヘルスサポートチーム「なのはな」主催事務・コメディカル新入職者セルフケア研修、大阪、2020年10月26日

安尾利彦：新人看護師とメンタルヘルス。大阪医療センター看護部2020年度ラダー教育研修【ラダーI】メンタルヘルスケア、大阪、2020年11月27日

田宮裕子：司会。安全衛生研修「セルフケアから始めよう～すぐできる、ひとりのできる、こころケア～（演者：大阪彩都心理センター 竹田 伸子先生）」、大阪、

2020年12月25日

安尾利彦：看護師としてのレジリエンスとメンタルヘルス。大阪医療センター付属看護学校特別講義、大阪、2020年2月25日

臨床工学室

1. 臨床工学室スタッフ紹介

吉龍 正雄

(医師、医療技術部部長、臨床工学室室長)

中村 貴行 (臨床工学技士長 7月～)

・体外循環技術認定士

宮川 幸恵 (主任臨床工学技士)

・体外循環技術認定士

・透析技術認定士

・日本体外循環技術医学会 地方代議員・安全委員・情報委員

・大阪府臨床工学技士会 理事

樋口 栄二 (院内主任臨床工学技士)

・呼吸療法認定士

・救急救命士

中崎 宏則 (院内主任臨床工学技士)

藤井 順也 (臨床工学技士)

・体外循環技術認定士

・不整脈治療専門臨床工学技士

・呼吸療法認定士

・ITE (Intervention Technical Expert)

・日本 DMAT 隊員

・大阪 DMAT 隊員

・臨床検査技師

中野 光樹 (臨床工学技士)

・体外循環技術認定士

町屋敷 薫 (臨床工学技士)

・呼吸療法認定士

黒木 亮佑 (臨床工学技士)

・呼吸療法認定士

・透析技術認定士

・臨床検査技師

高橋 俊平 (臨床工学技士)

丸宮 和也 (臨床工学技士)

伊藤 彩乃 (臨床工学技士)

2. 概要

臨床工学室は、生命維持管理装置の管理・操作を中心に業務を行うとともに、当直およびオンコール体制にて緊急業務に対しても 365 日 24 時間、柔軟に対応している。また、生命維持管理装置の動作点検を日々行い医療安全の向上に貢献している。

a. 手術室部門

心臓血管外科手術において人工心肺装置ならびに周辺機器の管理・操作業務を週 3 回の定期手術および緊急手術にて行っている。また循環器内科にて行われる CIEDs 植込み・交換術におけるプログラマー操作を担いその他の術中の医療機器トラブルにも対応している。本年度ダヴィンチ Xi が導入され 2 月より運用を開始した。臨床工学技士もチームの一員として機器管理および操作・デバイス管理などを行っている。

b. 循環部門

心臓カテーテル室におけるカテーテルインターベンションおよび心臓アブレーション業務を行っている。CIEDs 領域においては循環器外来での外来患者 CIEDs チェック、MRI や CT 対応を行っている。また、手術室・心臓カテーテル室・初療室・各種集中治療室における経皮的心肺補助装置 (PCPS) ・大動脈内バルーンポンピング (IABP) の管理・操作業務を行っている。

c. 血液浄化部門

人工腎室では臨床工学技士 2-3 名を常駐し、入院患者を対象とした各種血液浄化装置の管理・操作業務および RO 装置 (逆浸透水製造装置) の水質管理を行っている。また、重症患者に対しては集中治療室にて、持続緩徐式血液透析濾過療法などの各種急性血液浄化療法の管理・操作を行っている。

d. ME 機器部門

中央管理室の医療機器における日常点検と物品管理、病棟での医療機器トラブル対応を行っている。また、一般病棟および集中治療室に貸し出された全ての人工呼吸器が正常に作動しているかを、毎日施行する巡回にて確認している。この巡回業務は機械的人工呼吸療法時の事故防止の観点から大きな成果を上げている。

e. 教育・研修

生命維持管理装置 (人工呼吸器、補助循環など) の院内向け勉強会を定期的実施している。臨床工学室の教育体制としては、新人教育プログラムなどを設けるとともに、認定士資格取得に向けたスキルアップ教育も行っている。

3. 業務実績

手術室部門

人工心肺症例数 : 41 件

補助循環部門

PCPS 症例数 : 40 件 (延べ 254 日)

IABP 症例数 : 43 件 (延べ 182 日)

循環器部門

CIEDs 植込み : 新規 48 件 交換・その他 21 件
CIEDs チェック : 1,340 件
CIEDs 遠隔モニタリング : 324 件
心臓アブレーション:124 件
心臓カテーテル検査 : 400 件
心臓カテーテル治療 : 287 件

血液浄化部門

血液透析 (HD or HDF) : 1420 件
持続的血液浄化 (CHDF) : 53 件 (延べ 401 日)
単純血漿交換 (PE) : 6 件
二重濾過血漿交換療法 (DFPP) 1 件
エンドトキシン吸着 (ET-A) : 9 件
腹水還元濾過療法 (CART) : 4 件

【2020 年度 研究発表業績】

B-3

藤井順也 : ECMO システムウイルスフィルタの開発。第 6 回 AMED マッチングフォーラム例会、web 開催、2020 年 12 月 21 日

黒木亮佑 : COVID-19 を経験して。第 15 回大阪大学心臓血管外科関連施設体外循環技士懇話会定例会(PUSCAR)、Web 開催、2020 年 12 月 6 日

【2020年度 研究発表業績】

A-0

Yasumura K ,Abe H,Iida Y, Kato T, Toriyama C, Nishida H, Idemoto A, Shinouchi K, Mishima T, Awata M, Date M, Ueda Y, Uematsu M, Koretsune Y, Prognostic impact of nutritional status and physical capacity in elderly patients with acute decompensated heart failure. ESC HEART FAILURE, 2020 年 5 月 15 日, Published online in Wiley Online Library DOI:10.1002/ehf2.12743

Ishigaki K, Akiyama M, Kanai M, Koretsune Y, Kubo M, Kamatani Y, et. al, Large-scale Genome-Wide Association Study in a Japanese Population Identifies Novel Susceptibility Loci Across Different Diseases, Nat Genet. 2020:52:66-79, 2020 年 6 月 8 日

Akao M, Shimizu W, Atarashi H, Ikeda T, Inoue H, Okumura K, Koretsune Y, Tsutsui H, Toyoda K, Hirayama A, Yasaka M, Yamashita T, Yamaguchi T, Teramukai S, Kimura T, Kaburagi J, Takita A :OralAnticoagulant Use in Elderly Japanese Patients With Non-Valvular Atrial Fibrillation –Subanalysis of the ANAFIE Registry-, Circulation Reports,doi:10.1253/circrep.CR-20-0082, J-STAGE Advance Publication released online October 1,2020

Mizokami Y, Yamamoto T, Atarashi H, Yamashita T, Akao M, Ikeda T, Koretsune Y, Okumura K, Shimizu W, Tsutsui H, Toyoda K, Hirayama A, Yasaka M, Yamaguchi T, Teramukai S, Kimura T, Kaburagi J, Takita A, Inoue H: Current status of proton pump inhibitor use in Japanese elderly patients with non-valvular atrial fibrillation: A subanalysis of the ANAFIE Registry, PLOS ONE, <https://doi.org/10.1371/journal.pone.0240859>, Published: 2020 年 11 月 5 日

A-3

是恒之宏：人生 100 年時代の健康長寿のための血栓予防 脳 心臓 血管を守る、バイエル薬品株式会社、第 42 回日本血栓止血学会学術集会、2020 年 6 月

A-4

是恒之宏：除細動時の抗凝固療法の注意点は？、抗血栓療法—日常臨床での疑問に答える—、循環器ジャーナル、医学書院、第 68 巻第 4 号、2020 年 10 月 1 日

安部晴彦、是恒之宏：同種薬の特徴と使い分け、抗血栓薬(経口抗凝固薬、抗血小板薬)、今日の治療指針 私はこう治療している 2021、医学書院、PP358-361、2021 年 1 月 1 日

B-1

Koretsune Y :Japanese Evidence from ANAFIE Registry and ETNA-AF Japan, Virtual Scientific Exchange Forum – Post ESC 2020,2020 年 9 月 4 日

B-4

Koretsune Y, Yamashita T, Fujii K, Shiosaki K: ETNA-AF-Japan: One-year real-world results with edoxaban in Japanese patients with non-valvular atrial fibrillation in long-term clinical practice, 第 84 回日本循環器学会学術集会、web、2020 年 7 月 31 日

是恒之宏、松尾有香子、伊吹竜樹、森本 剛 : Comparative Safety and Effectiveness Study of Apixaban versus Warfarin in Oral Anticoagulant-naïve Patients with Non-valvular Atrial Fibrillation (RCR-OAC study),Japanese Circulation Society 2021、横浜、2021 年 3 月 26 日-28 日

是恒之宏、山下武志、藤井邦充、塩境一仁 : ETNW-AF-Japan:Two-year real-world final results with edoxaban in Japanese patients with non-valvular atrial fibrillation in long-term clinical practice, Japanese Circulation Society 2021、横浜、2021 年 3 月 26 日-28 日

B-5

是恒之宏 : ANAFIE REGISTRY 結果 (対象 ANAFIE 地域代表研究者)。Web 講演会、2020 年 10 月 3 日

是恒之宏 : ANAFIE REGISTRY 主解析 研究成績報告会 (対象 ANAFIE 参加全施設研究責任医師・研究分担医師)。Web 講演会、2020 年 10 月 10 日

B-8

是恒之宏 : 不整脈薬物治療ガイドライン 2020 改訂と高齢者治療戦略。抗血栓療法を考える会、岩手(Web セミナー 大阪会場)、2020 年 10 月 23 日

是恒之宏 : 心房細動治療の Update-不整脈治療ガイドライン 2020 に学ぶ-。京都不整脈治療 WEB セミナー、2020 年 11 月 19 日

是恒之宏 : 不整脈薬物治療ガイドライン 2020 改訂と高齢者治療戦略。AF 治療地域連携セミナー in HIROSHIMA、Web、2020 年 11 月 30 日

是恒之宏 : 心房細動治療の Update –不整脈治療ガイドライン 2020 に学ぶ-。大津市医師会、Web サタディセミナーパート 1、Web、2020 年 12 月 26 日

B-9

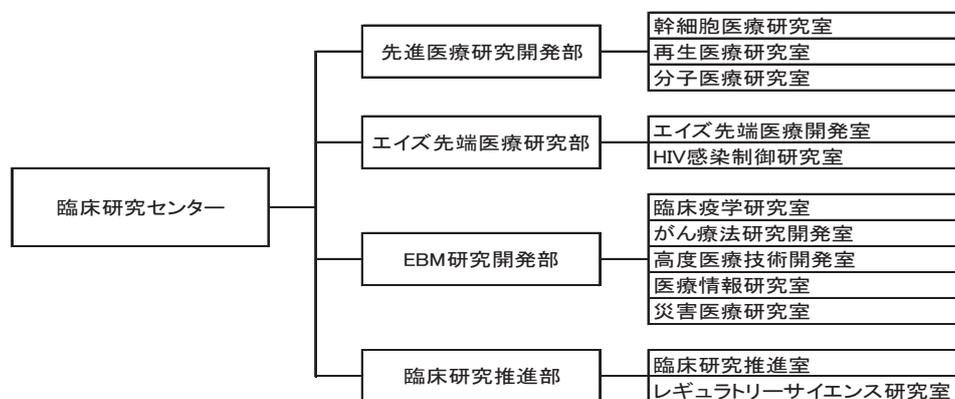
是恒之宏 : DOCTORS FLAP。FM 大阪、2021 年 1 月 7 日、2021 年 1 月 21 日放送

-臨床研究センター-

臨床研究センター

センター長 白阪琢磨

当臨床研究センターの前身の臨床研究部は昭和 54 年 4 月に設置され 40 年が経過し、現在の臨床研究センターとなって本年度で 13 年目を迎えた。国立病院機構では平成 17 年度より新たな研究業績評価が開始されたが、当院は常に 1-2 位の座を獲得している。この業績評価は、治験、臨床研究プロトコール作成、特許の取得、競争的研究費の獲得、論文著書、国内外の学会発表などの総合力で分析される。日常臨床が多忙を極める中で、大阪医療センターの治験を含めた臨床研究への積極的な取り組みが評価されたものとする。当臨床研究センターは平成 20 年度臨床研究部から臨床研究センターへランクアップされたのにもない、1 部 5 室体制から 2 部 9 室体制へと改編され、従来病院内の組織であった治験管理部門を新たに臨床研究も含めた支援室、臨床研究推進室として研究センターの元におくこととなった。平成 23 年度からは、新たに高度医療技術開発室、レギュラトリーサイエンス研究室を開設し、3 部 11 室となった。これまでと同様、文部科研に応募を希望する医師については、併任発令を行い、これに対応した。また、院内の多くの医師が臨床研究に携わっていること、本部からの研究助成金を研究業績に応じて一部分配することにより研究推進を図る目的で、平成 18 年度より医長以上の併任、英文論文筆頭著者併任をおこなうこととした。平成 25 年度 DMAT 西日本拠点に指定されたのに伴い、平成 26 年度から災害医療研究室を加え 4 部 12 室体制となった。令和 2 年度の構成は以下のとおりである。



先進医療研究開発部

幹細胞医療研究室

幹細胞医療研究室では、ヒト iPS 細胞（人工多能性幹細胞）の作製と、iPS 細胞から神経幹細胞（神経系細胞を供給する能力を持つ幹細胞）への分化誘導を行い、再生医療や、神経毒性評価系の構築に向けた技術開発、及び疾患の発症メカニズムの研究を行っている。また、当センター脳神経外科及び再生医療研究室と共同で、各種脳腫瘍の遺伝子変異解析と、新規腫瘍マーカーの探索を実施している。

再生医療研究室

再生医療研究室では、各種ヒト細胞を応用した「細胞治療」を新しい先進的な医療として確立させることを目標に、治療に使用する各種ヒト細胞の培養・加工プロセスの開発、治療用ヒト細胞の品質管理並びに安全性評価に関する技術開発などの研究を行なっている。また、ヒト幹細胞を応用した薬剤毒性評価系の開発と新規治療薬候補化合物の探索を目指した基礎的研究を実施している。

分子医療研究室

分子医療研究室では各種遺伝子検査を用いた悪性脳腫瘍、難治性脳形成障害症等の難治性神経疾患の分子診断技術の開発と、分子診断結果を用いた病態解析研究、および新規治療法開発を実施している。

エイズ先端医療研究部

エイズ先端医療開発室

大阪医療センターでは、HIV感染症の専門的診療は感染症内科が担い、他の機能はエイズ先端医療研究部がコーディネートしている。臨床研究の主なテーマとして HIV 感染症の病態解析や治療に関する研究と患者中心の医療の提供に関する研究に取り組んでいる。教育・研修では院外向けと共に、院内での研修については、看護部、医療相談室、臨床心理室等と共に職員研究部と協働で実施し、多くの参加者を得ている。

HIV 感染制御研究室

エイズ先端医療開発室と共同で、HIV 感染症の診療における多くの問題に対して研究を行っている。厚生労働省エイズ対策研究事業を中心に、HIV 感染症の病態における種々の問題点の解明に取り組み、多施設共同臨床調査や臨床的課題について取り組んでいる。

EBM 研究開発部

臨床疫学研究室

臨床疫学研究室は主に消化器疾患の病態を分子疫学面から検証し、最適な治療方法や安全性を検討している。肝炎に関する種々の研究を積極的に推進している。さらに HIV 感染が B 型急性肝炎の重症度に与える影響についても検討している。A 型急性肝炎も MSM を中心に流行しており、その疫学的特徴を報告した。

がん療法研究開発室

本研究室では、最新の基礎研究や臨床研究によって得られた成果を利用した科学的根拠に基づいた新しい癌治療法の開発を目的として、がん細胞やがん組織を用いた基礎的研究から科学的根拠を確実にするための全国規模の多施設共同臨床試験への参加、自主的臨床試験研究の企画を進めている。特に、新たながんの診断や治療戦略の開発をめざし、外科手術時などに得られたがん組織を利用してがんにおける分子異常を探り、それに基づいた臨床において利用できる医療技術や

医薬品として確立することを行う目的とした研究（橋渡し研究、トランスレーショナルリサーチ）を行っている。

高度医療技術開発室

医用画像診断装置の技術開発により低侵襲化、従来視覚化困難であった部位や現象の画像化が可能になりつつあり、そこから新たな治療が生まれる可能性がある。これらの技術開発には医工連携すなわち病院、大学、企業との連携体制の構築が必要であるが、米国における産学連携の仕組みや組織と比較すると本邦ではまだまだ発展の余地が多いと言える。病院における医療現場のニーズを企業が保有している技術開発力や大学の基礎医学研究能力に結び付けながら、常に新しい高度医療技術の開発に取り組んでゆくことが、病院に付属する本研究室の最も重要な役割である。平成 30 年度には CT 画像検査、心エコー検査に関して行った研究報告（AHA2018）が、心エコー図学会に認められ海外発表優秀論文賞を受賞した。

医療情報研究室

医療情報研究室では、医療への IT 応用に関するソフト、ハードの両側面の研究を行っている。病院において実稼働している病続情報統合システムを用いた研究、病院情報システム本体の機能拡張に関する独自の研究を実施する一方、治験・臨床研究や医療安全に関するシステムの検討、シミュレーションや統計などの情報科学の医療応用に関する研究を行っている。また、ネットワーク技術や画像処理技術の応用・改良など、情報処理の基盤技術に関連した研究も行っている。早急に実用化することを求められている災害時の国内標準 電子カルテについて、あるいは SS-MIX、SS-MIX2、MML、openEHR といった標準規格を通して異なる電子カルテシステム間のスムーズな連携についても研究を行なっている。2019 年には災害時の療養病床の支援について研究を行なった。2020 年には、「COVID-19 パンデミック対策としての広域および医療機関内情報システムの検討」というタイトルでワークショップを主催した。

災害医療研究室

主要な研究テーマのひとつは災害時医療情報の応用で、厚生科学研究費補助金による「災害時効果的初動期医療の確保及び改善に関する研究」では共同研究者として災害時の標準的診療記録票を作成した。さらに主任研究者として厚生労働省指定研究「南海トラフ巨大地震の被害想定に対するDMATによる急性期医療対応に関する研究」を報告し、厚生労働省の進めている災害急性期医療対応の判断根拠となるデータを作成した。今後の災害対応はCOVID-19といった新興感染症にも同時に対応する想定が必要となっている。その想定に対するシミュレーション研究に参画した。

臨床研究推進部

臨床研究推進室

臨床研究推進室は、CRCおよび治験事務局として治験の全体的なコーディネーションを担うことにより、契約前から終了まで迅速かつ質の高い治験実施を支援している他、受託研究審査委員会（IRB）事務局機能も併せ持っている。受託研究と各種臨床研究関連指針が適応される自主研究は、それぞれ独立した2つのIRB（第1委員会・第2委員会）により審議を行っている。この2つのIRBは、厚生労働省より「質の高い倫理審査が行える委員会（認定倫理審査委員会）」として認定を受けており、iPadを導入し、ペーパーレスとしている。

また、平成30年3月31日には臨床研究法上の臨床研究審査委員会として厚生労働大臣から認定を取得した。国立病院機構では5機関が認定されており、4月以降は情報共有を行いつつ審査体制の整備に努め、平成31年1月から審査意見業務を開始した。新規の審査申請課題がない等のため更新をせず2021年3月30日に廃止申請を行い、継続課題については移管を完了した。

治験実績では、国立病院機構内施設で全国2位の成績であった。

自主研究の支援に関しては、「人を対象とする医学系研究に関する倫理指針」に基づいた質の高い臨床研究の実施をより進めるために、研究機関の長が行う点検（自己点検）を実施し、その結果を研究者にもフィードバックしている。また確実な同意書管理のための支援も継続的に取り組んでいる。臨床研究法準拠の研究についても、同様の支援を行っている。

レギュラトリーサイエンス研究室

レギュラトリーサイエンスの考えに基づき、臨床現場での薬剤・医療機器や技術等の使用を評価するための手法の構築を目的として平成23年4月に設立され、10年が経過した。令和2年度においては、東京大学医科学研究所主宰のオーダーメイド医療実現化プロジェクト共同研究において21万人余り42疾患のGWAS研究により多くの日本人遺伝子多型を検出しNature Geneticsに論文掲載された。また、昨年度も発表した75歳以上のAFレジストリー（ANAFIE）登録のサブ解析で消化管出血予防のためのPPI処方の実態をPLOS ONEに発表した。

【2020年度 研究発表業績】

A-0

Kato T, Yoshihara Y, Watanabe D, Fukumoto M, Wada K, Nakakura T, Kuriyama K, Shirasaka T, Murai T: Neurocognitive impairment and gray matter volume reduction in HIV-infected patients. 「J Neurovirol.」26(4): P.590-601、2020年8月

A-0

Hirota K, Watanabe D, Koizumi Y, Sakanashi D, Ueji T, Nishida Y, Takeda M, Taguri T, Ozawa K, Mikamo H, Shirasaka T, Uehira T: Observational study of skin and soft-

tissue Staphylococcus aureus infection in patients infected with HIV-1 and epidemics of Panton-Valentine leucocidin-positive community-acquired MRSA infection in Osaka, Japan. 「J Infect Chemother.」 26(12): P.1254-1259、2020年11月

A-3

櫛田宏幸、中内崇夫、矢倉裕輝、渡邊大、上平朝子、白阪琢磨：HIV-1, HBV 共感染血液透析症例におけるテノホビル血中濃度推移を測定した一症例「感染症学雑誌」印刷中。

A-4

白阪琢磨：ガイドライン改訂の Points DHHS ガイドライン改訂のポイント「HIV 感染症と AIDS の治療」11(1): P.17-23、メディカルレビュー社、2020年11月

白阪琢磨：抗 HIV 薬「治療薬ハンドブック 2021」P.1406-1432、じほう、2021年1月

A-5

白阪琢磨：HIV 感染症及びその合併症の課題を克服する研究。厚生労働行政推進調査事業費補助金（エイズ対策政策研究事業）「HIV 感染症及びその合併症の課題を克服する研究」令和2年度研究報告書、2021年3月31日

白阪琢磨：HIV 感染症及びその合併症の課題を克服する研究。厚生労働行政推進調査事業費補助金（エイズ対策政策研究事業）「HIV 感染症及びその合併症の課題を克服する研究」平成30-令和2年度総合研究報告書、2021年3月31日

白阪琢磨：エイズ発症予防に資するための血液製剤による HIV 感染者の調査研究。公益財団法人友愛福祉財団委託事業「エイズ発症予防に資するための血液製剤による HIV 感染者の調査研究」令和2年度報告書、2021年3月31日

A-6

白阪琢磨：HIV 治療の現在（第1～3回）。『中学保健ニュース』『高校保健ニュース』付録、株式会社少年写真新聞社、2020年6月28日、8月28日、9月28日

白阪琢磨：HIV 感染症の治療の現在。『高校保健ニュース』、株式会社少年写真新聞社、2020年11月8日

白阪琢磨、山内一恭、小林恭子、松尾友香、羽田かおる：密な職種間連携で適正な治験と臨床研究を実現する「臨床研究推進室」。Medical Network No. 34 P.10-13、田辺三菱製薬、2020年11月

白阪琢磨：HIV の新常識、適切な治療続ければ「感染しない」。朝日新聞、2020年12月1日

白阪琢磨：HIV 新常識、治療すればうつさない 世界エイズデー。朝日新聞 DIGITAL、2020 年 12 月 1 日

B-2

Bessho H, Tanaka S, Ishihara A, Watanabe D, Uehira T, Ishida H, Shirasaka T, Mita E: Effectiveness of hepatitis A vaccination in human immunodeficiency virus-infected men who have sex with men during an outbreak of hepatitis A in Osaka, Japan. The Digital International Liver Congress, Digital, 27-29、2020年8月

Anand T, Nitpolprasert C, Shirasaka T, Iwatani Y, Yokomaku Y, Imahashi M, Kaneko N, Iwahashi K, Ikushima Y, Aoki R, Ishida T, Shiono S, Yamaguchi M, Takemura K, Iwamoto A. HIV prevention among MSM in Japan: current opinions on achieving the first 90 among Japanese MSM. HIV Glasgow 2020, Virtual Meeting, 5-8、2020年10月

B-3

白阪琢磨：U=U を陽性者に伝える、社会に伝えることについて。第 34 回日本エイズ学会学術集会・総会、WEB 開催、2020 年 11 月 27 日

白阪琢磨：ガイドラインの位置づけと期待。第 34 回日本エイズ学会学術集会・総会、東京・WEB、2020 年 11 月 28 日

白阪琢磨：HIV 感染症と AIDS の治療の手引き「What's New」。第 34 回日本エイズ学会学術集会・総会、WEB 開催、2020 年 11 月 29 日

白阪琢磨：HIV/AIDS に関連した医薬品の承認審査について－医師の立場から－。第 34 回日本エイズ学会学術集会・総会、WEB 開催、2020 年 11 月 27 日-12 月 25 日

B-4

中内崇夫、矢倉裕輝、櫛田宏幸、井上敦介、宮部貴識、上平朝子、白阪琢磨、山内一恭：当院における抗 HIV 療法施行中患者のポリファーマシーに関する調査。第 74 回国立病院総合医学会、WEB 開催、2020 年 10 月 17 日-11 月 14 日

矢倉裕輝、櫛田宏幸、渡邊 大、中内崇夫、西田恭治、井上敦介、宮部貴識、上平朝子、白阪琢磨、山内一恭：日本人 HIV-1 感染者におけるビクテグラビルの血漿中トラフ濃度に関する検討。第 74 回国立病院総合医学会、WEB 開催、2020 年 10 月 17 日-11 月 14 日

野村悠樹、杉山 文、阿部夏音、今田寛人、Rakhimov Anvarion、Tuychiev Sherzad、秋田智之、鹿野千治、喜多村祐里、白阪琢磨、田中純子：広島市・大阪市の献血ルーム来訪者における複数回献血者の特徴と地域差の検討。第 79 回日本公衆衛生学会総会、WEB 開催、2020 年 10 月 20-22 日

白阪琢磨、橋本修二、川戸美由紀、大金美和、岡本 学、瀧永博之、日笠 聡、福武勝幸、八橋 弘、岡 慎一：血液製剤による HIV 感染者の調査成績（第 1 報）健康状態と生活状況の概要。第 34 回日本エイズ学会学術集会・総会、WEB 開催、2020 年 11 月 27 日-12 月 25 日

川戸美由紀、橋本修二、大金美和、岡 慎一、岡本 学、瀧永博之、日笠 聡、福武勝幸、八橋 弘、白阪琢磨：血液製剤による HIV 感染者の調査成績（第 2 報）未発症者の生活状況とその推移。第 34 回日本エイズ学会学術集会・総会、WEB 開催、2020 年 11 月 27 日-12 月 25 日

佐保美奈子、古山美穂、高 知恵、山田加奈子、工藤里香、立花久裕、岡本友子、立花久裕、豊島裕子、大野典子、白阪琢磨：HIV サポートリーダー養成研修 10 年間の成果と展望。第 34 回日本エイズ学会学術集会・総会、WEB 開催、2020 年 11 月 27 日-12 月 25 日

渡邊 大、矢倉裕輝、榊田智仁、廣田和之、上地隆史、中内崇夫、櫛田宏幸、西田恭治、上平朝子、白阪琢磨：当院におけるビクテグラビル・テノホビルアラフェナミド・エムトリシタビン配合錠の処方例に関する検討。第 34 回日本エイズ学会学術集会・総会、WEB 開催、2020 年 11 月 27 日-12 月 25 日

矢倉裕輝、中内崇夫、櫛田宏幸、榊田智仁、廣田和之、上地隆史、渡邊 大、西田恭治、上平朝子、白阪琢磨：日本人 HIV-1 感染者におけるビクテグラビルの血漿中濃度に関する検討 第 1 報。第 34 回日本エイズ学会学術集会・総会、WEB 開催、2020 年 11 月 27 日-12 月 25 日

櫛田宏幸、中内崇夫、矢倉裕輝、榊田智仁、廣田和之、上地隆史、渡邊 大、西田恭治、上平朝子、白阪琢磨：日本人のテノホビルアラフェナミド服用における推定糸球体ろ過量低下症例についての検討。第 34 回日本エイズ学会学術集会・総会、WEB 開催、2020 年 11 月 27 日-12 月 25 日

中内崇夫、矢倉裕輝、櫛田宏幸、榊田智仁、廣田和之、上地隆史、渡邊 大、西田恭治、上平朝子、白阪琢磨：初回治療としてインテグラーゼ阻害剤を使用した患者の血清尿酸値の変動に関する要因についての検討。第 34 回日本エイズ学会学術集会・総会、WEB 開催、2020 年 11 月 27 日-12 月 25 日

増田純一、関根祐介、國本雄介、矢倉裕輝、平野 淳、日笠真一、築地茉莉子、石原正志、岩崎 藍、押賀充則、又村了輔、櫛田宏幸、福島直子、島袋翔多、沼田理子、川口 崇、山口拓洋、天野景裕、岡 慎一、白阪琢磨：抗 HIV 療法における意思決定とアドヒアランスに関する多施設共同研究(DEARS-J study)。第 34 回日本エイズ学会学術集会・総会、WEB 開催、2020 年 11 月 27 日-12 月 25 日

安尾利彦、西川歩美、水木 薫、神野未佳、富成伸次郎、白阪琢磨：HIV 陽性者を含む慢性疾患患者の行動と心理に関する研究。第 34 回日本エイズ学会学術集会総会、WEB 開催、2020 年 11 月 27 日-12 月 25 日

水木 薫、安尾利彦、森田眞子、富田朋子、宮本哲雄、西川歩美、牧 寛子、神野未佳、白阪琢磨: 初診 HIV 陽性者を対象とした心理スクリーニングに関する研究。第 34 回日本エイズ学会学術集会・総会、WEB 開催、2020 年 11 月 27 日-12 月 25 日

松山亮太、渡邊 大、土橋西紀、鍵浦文子、加納和彦、高橋琢理、松井佑亮、白阪琢磨、砂川富正、梯正之: CD4 細胞数データとインシデンス法を利用した日本における HIV 感染者数の推定。第 31 回日本疫学会学術総会、WEB 開催、2021 年 1 月 28 日

B-8

白阪琢磨: 「抗 HIV 治療ガイドライン」UP TO DATE。HIV インターネット講演会、大阪、2020 年 6 月 8 日

白阪琢磨: 概論。2020 年度大阪大学医学部環境医学・公衆衛生学実習、大阪、2020 年 7 月 2 日

白阪琢磨: 日本および海外における HIV 治療ガイドライン。Medical Education Webinar 「HIV 治療ガイドラインを紐解く」、大阪、2020 年 7 月 17 日

白阪琢磨: HIV/エイズの歴史と日本の HIV 医療体制。エイズ予防財団令和 2 年度 HIV/エイズ基礎研修会、大阪、2020 年 7 月 31 日

白阪琢磨: ヒト免疫不全ウイルス (HIV)。大阪医療センター附属看護学校講義、大阪、2020 年 9 月 9 日

白阪琢磨: HIV 陽性者の人権課題～HIV、AIDS 等の現状と課題～。大阪府人権総合講座 (前期) 人権問題科目、大阪、2020 年 9 月 30 日

白阪琢磨: HIV の最新治療。厚生科研エイズ対策研究事業 第 21 回 HIV サポートリーダー養成研修、WEB 開催、2020 年 10 月 2 日

白阪琢磨: HIV 感染症の疫学。2020 年度奈良県立医科大学健康政策医学実習、大阪、2020 年 10 月 16 日

白阪琢磨: HIV 感染症治療と最新情報。MERS 2020 年度相談員研修会、大阪、2020 年 10 月 18 日

白阪琢磨: HIV 感染者における新型コロナウイルス感染症の留意点。MERS 2020 年度相談員研修会、大阪、2020 年 10 月 18 日

白阪琢磨: 最新の ART の動向とビクトルビ配合錠の臨床的位置づけ～COVID-19 流行から学ぶ服薬支援の New Normal とは～。Gilead Infectious Disease Virtual

Symposium 2020、大阪、2020 年 10 月 27 日

白阪琢磨：疫学と抗 HIV 治療ガイドライン。令和 2 年度 HIV 感染症研修会、大阪、2020 年 11 月 2 日

白阪琢磨：現代的健康課題－HIV/エイズや性感染症等について－。大阪府令和 2 年度新規採用養護教諭研修（第 10 回）、大阪、2020 年 11 月 5 日

白阪琢磨：公衆衛生看護学 I。2020 年度大阪府立大学看護学類講義、WEB 開催、2020 年 12 月 22 日

B-9

白阪琢磨：ラジオ小学校。エフエム大阪開局 50 周年記念 50 時間特別番組「LAUGH & MUSIC RADIO」、大阪、2020 年 4 月 1 日

白阪琢磨：おしえて！しらさか先生。FM 大阪ラジオ「hug+（ハグタス）」、大阪、2020 年 4 月 24 日

白阪琢磨：新型コロナウイルスについて①。FM 大阪ラジオ「HIV/AIDS 啓発プロジェクト LOVE+RED」、大阪、2020 年 5 月 5 日

白阪琢磨：新型コロナウイルスについて。FM 大阪ラジオ「シャンプーハットこいでの Friday Music Show（笑）」、大阪、2020 年 5 月 8 日

白阪琢磨：新型コロナウイルスについて②。FM 大阪ラジオ「HIV/AIDS 啓発プロジェクト LOVE+RED」、大阪、2020 年 5 月 12 日放送

白阪琢磨：新型コロナウイルスについて③。FM 大阪ラジオ「HIV/AIDS 啓発プロジェクト LOVE+RED」、大阪、2020 年 9 月 15 日

白阪琢磨：新型コロナウイルスについて④。FM 大阪ラジオ「HIV/AIDS 啓発プロジェクト LOVE+RED」、大阪、2020 年 9 月 22 日

白阪琢磨：感染症アップデート。FM 大阪ラジオ「HIV/AIDS 啓発プロジェクト LOVE+RED」、大阪、2020 年 10 月 20 日

幹細胞医療研究室

室長 正札智子

【概要】

幹細胞医療研究室では、ヒト iPS 細胞（人工多能性幹細胞）より、神経幹細胞（神経系細胞を供給する能力を持つ細胞）への分化誘導技術の開発をメインテーマとして研究を行っています。それらの成果は、再生医療応用や、ハイスループットの神経毒性評価試験、及び神経疾患の発症メカニズムの解明に役立っています。また当センター脳神経外科及び再生医療研究室と共同で、脳腫瘍の分類と治療法の判断に必須となる分子診断と、新規腫瘍マーカーの探索を実施しています。

【研究テーマ】

ヒト iPS 細胞由来神経系細胞の作製と培養法の検討

ヒト iPS 細胞を用いた、再生医療応用や神経毒性評価系の構築を目指し、使用目的に応じた神経系細胞への分化誘導技術の開発と、分子生物学的な手法を用いて細胞の評価を実施しています。

2. 神経疾患細胞の変異解析と特性解析

神経疾患患者由来の細胞試料を用い、疾患を起因する原因遺伝子の変異解析と、細胞形質の特性を、分子生物学と細胞生物学的解析を進めています。更に、疾患 iPS 細胞を用いて、神経科学的解析が可能な十分に成熟した神経細胞の誘導技術の開発を行っています。

3. 脳腫瘍患者摘出手術検体の分子診断と新規腫瘍マーカーの探索

大阪医療センター及び近隣施設の神経膠腫患者、また小児に発症例の多い脳腫瘍である髄芽腫と上衣腫患者は全国規模で、摘出腫瘍組織をご提供いただき、発症原因や予後との関連が示唆されている遺伝子の分子診断を行っています。また腫瘍組織から樹立し、長期培養に成功した細胞株の生物学的特性解析を行い、医療応用を目指す iPS 細胞由来神経幹細胞の腫瘍化リスクの指標となるマーカーの探索を実施しています。

【2020 年度 研究発表業績】

A-0

Fukai J, Arita H, Umehara T, Yoshioka E, Shofuda T, Kanematsu D, Kodama Y, Mano M, Kinoshita M, Okita Y, Nonaka M, Uda T, Tsuyuguchi N, Sakamoto D, Uematsu Y, Nakao N, Mori K, Kanemura Y: Molecular characteristics and clinical outcomes of elderly patients with IDH-wildtype glioblastomas: comparative study of older and younger cases in Kansai Network cohort. 「Brain Tumor Pathol」 37(2):50-59、2020 年 4 月

Okita Y, Shofuda T, Kanematsu D, Yoshioka E, Kodama Y, Mano M, Kinoshita M, Nonaka M, Fujinaka T, Kanemura Y: The association between 11 C-methionine uptake, IDH gene mutation, and MGMT promoter methylation in patients with grade II and III gliomas. 「Clin Radiol」 75(8):622-628、2020 年 8 月

Kikuchi Z, Shibahara I, Yamaki T, Yoshioka E, Shofuda T, Ohe R, Matsuda KI, Saito R, Kanamori M, Kanemura Y, Kumabe T, Tominaga T, Sonoda Y: TERT promoter mutation associated with multifocal phenotype and poor prognosis in patients with IDH wild-type glioblastoma. 「Neurooncol Adv」 2(1):vdaa114、2020 年 9 月

Arita H, Matsushita Y, Machida R, Yamasaki K, Hata N, Ohno M, Yamaguchi S, Sasayama T, Tanaka S, Higuchi F, Iuchi T, Saito K, Kanamori M, Matsuda KI, Miyake Y, Tamura K, Tamai S, Nakamura T, Uda T, Okita Y, Fukai J, Sakamoto D, Hattori Y, Pareira ES, Hatae R, Ishi Y, Miyakita Y, Tanaka K, Takayanagi S, Otani R, Sakaida T, Kobayashi K, Saito R, Kurozumi K, Shofuda T, Nonaka M, Suzuki H, Shibuya M, Komori T, Sasaki H, Mizoguchi M, Kishima H, Nakada M, Sonoda Y, Tominaga T, Nagane M, Nishikawa R, Kanemura Y, Kuchiba A, Narita Y, Ichimura K. TERT promoter mutation confers favorable prognosis regardless of 1p/19q status in adult diffuse gliomas with IDH1/2 mutations. 「Acta Neuropathol Commun」 8(1):201、2020 年 11 月

Achiha T, Kijima N, Kodama Y, Kagawa N, Kinoshita M, Fujimoto Y, Nonaka M, Fukai J, Inoue A, Nishida N, Yamanaka T, Harada A, Mori K, Tsuyuguchi N, Uda T, Ishibashi K, Tomogane Y, Sakamoto D, Shofuda T, Yoshioka E, Kanematsu D, Mano M, Luu B, Taylor MD, Kanemura Y, Kishima H: Activated leukocyte cell adhesion molecule expression correlates with the WNT subgroup in medulloblastoma and is involved in regulating tumor cell proliferation and invasion. 「PLoS One」 15(12):e0243272、2020 年 12 月

Shofuda T, Kanemura Y: HDACs and MYC in medulloblastoma: how do HDAC inhibitors control MYC-amplified tumors? 「Neuro Oncol」 23(2):173-174、2021 年 2 月

Fukusumi H, Togo K, Sumida M, Nakamori M, Obika S, Baba K, Shofuda T, Ito D, Okano H, Mochizuki H, Kanemura Y: Alpha-synuclein dynamics in induced pluripotent stem cell-derived dopaminergic neurons from a Parkinson's disease patient (PARK4) with SNCA triplication. 「FEBS Open Bio」 11(2):354-366、2021 年 2 月

B-2

Fukusumi H, Shofuda T, Yamamoto A, Sumida M, Handa Y, Kanemura Y: An efficient method for detecting traces of undifferentiated human induced pluripotent stem cells (HiPSCs) among differentiated neural stem/progenitor cells derived from HiPSCs. ISSCR 2020 VIRTUAL, WEB、2020 年 6 月 26 日

Kijima N, Nakajima Y, Kanematsu D, Shofuda T, Higuchi Y, Suemizu H, Mori K, Kodama Y, Mano M, Sasaki A, Inoue T, Hirato J, Kishima H, Kanemura Y: Establishment of

patient-derived xenografts from rare primary brain tumors. 2020 SNO Virtual Meeting、WEB、2020年11月19日～21日

B-3

金村米博、正札智子、隅田美穂、吉岡絵麻、中村雅也、岡野栄之：神経再生治療に用いる iPS 細胞由来神経前駆細胞の製造・品質管理法。第19回日本再生医療学会総会、WEB、2020年5月18日～29日

梅原 徹、木下 学、佐々木貴浩、有田英之、吉岡絵麻、正札智子、児玉良典、香川尚己、沖田典子、高野浩司、宇田武弘、深井順也、阪本大輔、森 鑑二、金村米博：機械学習による画像テクスチャ解析を用いた初発膠芽腫の予後推定。一般社団法人日本脳神経外科学会第79回学術総会、岡山市、2020年10月17日

川内 豪、牧野恭秀、吉岡絵麻、正札智子、丹治正大、峰晴陽平、金村米博、荒川芳輝、宮本 亨：WHO2016年脳腫瘍病理分類を用いた神経膠腫診断の検討。第38回日本脳腫瘍学会学術集会、広島市、2020年11月30日

深井順也、林 宣秀、有田英之、梅原 徹、吉岡絵麻、正札智子、兼松大介、児玉良典、木下 学、沖田典子、埜中正博、宇田武弘、阪本大輔、佐々木貴浩、上松右二、中尾直之、森 鑑二、金村米博：高齢者膠芽腫における分子マーカーと生命予後。第38回日本脳腫瘍学会学術集会、広島市、2020年11月30日

梅原 徹、木下 学、佐々木貴浩、有田英之、吉岡絵麻、正札智子、児玉良典、平山龍一、木嶋教行、香川尚己、沖田典子、高野浩司、宇田武弘、深井順也、阪本大輔、森鑑二、金村米博：術前画像情報を用いた初発膠芽腫の予後推定の有効性と限界。第38回日本脳腫瘍学会学術集会、広島市、2020年11月30日

B-4

勝間亜沙子、半田有佳子、兼松大介、山本篤世、吉岡絵麻、福角勇人、隅田美穂、正札智子、金村米博：自動画像解析プログラムを用いた単一幹細胞運動能評価システムの開発。第19回日本再生医療学会総会、WEB、2020年5月18-29日

岡本伸彦、宮 冬樹、角田達彦、金村米博、齋藤伸治、加藤光広、要 匡、柳久美子、小崎健次郎：Aminoacyl-tRNA synthetases 異常症の5家系。第62回日本小児神経学会学術集会、WEB、2020年8月18-20日

林 大誠、檜 彰良、中山良平、児玉良典、眞能正幸、吉岡絵麻、兼松大介、正札智子、金村米博：Modified Cycle-Consistent Adversarial Network を用いた病理組織画像における染色度合いの正規化を伴う病理組織分類。第39回日本医用画像工学会大会、WEB、2020年9月17日

広川大輔、慶野 大、提箸祐貴、本間博邦、佐藤博信、後藤裕明、山本哲哉、金村米博、正札智子、吉岡絵麻、伊達 勲、西川 亮：髄芽腫における集学的治療に関する

現状と考察。一般社団法人日本脳神経外科学会第79回学術総会、WEB、2020年10月15日～17日

深井順也、有田英之、梅原 徹、吉岡絵麻、正札智子、児玉良典、木下 学、沖田典子、埜中正博、宇田武弘、阪本大輔、上松右二、中尾直之、森 鑑二、金村米博：高齢者膠芽腫における分子マーカーと生命予後。一般社団法人日本脳神経外科学会第79回学術総会、WEB、2020年10月15日～17日

沖田典子、正札智子、兼松大介、吉岡絵麻、児玉良典、眞能正幸、木下 学、埜中正博、藤中俊之、金村米博：Grade2,3 神経膠腫における MET-PET での IDH 変異と MGMT プロモーターメチル化率の予測。一般社団法人日本脳神経外科学会第79回学術総会、WEB、2020年10月15日～17日

牧野恭秀、荒川芳輝、川内 豪、峰晴陽平、丹治正大、吉岡絵麻、正札智子、兼松大介、金村米博、宮本 享：Diffuse astrocytoma に対する VAC-feron-R の治療成績。一般社団法人日本脳神経外科学会第79回学術総会、WEB、2020年10月15日～17日

川内 豪、牧野恭秀、正札智子、吉岡絵麻、丹治正大、峰晴陽平、金村米博、荒川芳輝、宮本 享：WHO2016 年脳腫瘍病理分類を用いた神経膠腫診断の検討。一般社団法人日本脳神経外科学会第79回学術総会、WEB、2020年10月15日～17日

沖田典子、正札智子、兼松大介、吉岡絵麻、児玉良典、眞能正幸、木下 学、埜中正博、藤中俊之、金村米博：Grade2,3 神経膠腫における MET-PET での IDH 変異と MGMT プロモーターメチル化率の予測。第58回日本癌治療学会学術集会、京都市、2020年10月24日

勝間亜沙子、兼松大介、福角勇人、隅田美穂、吉岡絵麻、山本篤世、半田有佳子、正札智子、金村米博：一般実験室における細胞加工物製造設備の簡易モニタリングシステムの考案。第20回日本再生医療学会総会、WEB、2021年3月11日

兼松大介、正札智子、吉岡絵麻、隅田美穂、勝間亜沙子、山本篤世、半田有佳子、福角勇人、中村雅也、岡野栄之、金村米博：間期核 FISH 法を用いたヒト幹細胞における低頻度モザイク染色体異数性異常細胞の検出法の検討。第20回日本再生医療学会総会、WEB、2021年3月11日

福角勇人、勝間亜沙子、兼松大介、半田有佳子、隅田美穂、山本篤世、吉岡絵麻、正札智子、金村米博：ヒト iPS 細胞由来神経系細胞の低酸素耐性能評価システムの開発。第20回日本再生医療学会総会、WEB、2021年3月11日

再生医療研究室

室長 金村米博

【概要】

再生医療研究室では、各種ヒト細胞を応用した「細胞治療」を新しい先進的な医療として確立させることを目標に、治療に使用する各種ヒト細胞の培養・加工プロセスの開発、治療用ヒト細胞の品質管理並びに安全性評価に関する技術開発などの研究を行なっています。また、ヒト幹細胞を応用した薬剤毒性評価系の開発と新規治療薬候補化合物の探索を目指した基礎的研究を実施しています。

【主な研究テーマ】

1. 治療用ヒト細胞培養プロセスの開発

治療に使用する各種ヒト細胞を培養・加工するヒト細胞培養専用施設（セルブプロセッシングセンター）の管理・運用を担当し、セルブプロセッシングセンター内でのヒト細胞培養プロトコールの開発を行っています。また、細菌・真菌検査や遺伝子検査などを組み込んだ治療用ヒト細胞の品質検査法の開発などを行なっています。

2. 医療用ヒト幹細胞の品質管理技術の開発

再生医療に使用する細胞として、組織幹細胞であるヒト神経幹細胞および間葉系幹細胞さらにヒト iPS 細胞由来神経前駆細胞などを主な研究対象として、細胞増殖能、染色体構造、細胞表面マーカー発現様式、細胞分化能等を詳細に解析してこれら細胞の生物学的特性を明らかにし、医療応用するための細胞の品質管理に必要な項目の策定とその検査方法の開発を行っています。

3. ヒト幹細胞を応用した薬剤毒性評価系の開発と新規治療薬候補化合物の探索

ヒト iPS 細胞由来神経前駆細胞、ヒト iPS 細胞由来神経細胞を主に使用して、各種薬剤の毒性評価をハイスループットで評価するシステムの開発を行っています。また、ヒト神経前駆細胞やグリオーマ幹細胞を標的とする新規治療薬候補化合物の探索を実施しています。

【2020 年度 研究発表業績】

A-0

Fukai J, Arita H, Umehara T, Yoshioka E, Shofuda T, Kanematsu D, Kodama Y, Mano M, Kinoshita M, Okita Y, Nonaka M, Uda T, Tsuyuguchi N, Sakamoto D, Uematsu Y, Nakao N, Mori K, Kanemura Y: Molecular characteristics and clinical outcomes of elderly patients with IDH-wildtype glioblastomas: comparative study of older and younger cases in Kansai Network cohort. 「Brain Tumor Pathol」 37(2):50-59、2020 年 4 月

Yotsumoto Y, Harada A, Tsugawa J, Ikura Y, Utsunomiya H, Miyatake S, Matsumoto N, Kanemura Y, Hashimoto-Tamaoki T: Infantile macrocephaly and multiple subcutaneous lipomas diagnosed with PTEN hamartoma tumor syndrome: A case report. 「Mol Clin Oncol」 12(4):329-335、2020 年 4 月

Okita Y, Shofuda T, Kanematsu D, Yoshioka E, Kodama Y, Mano M, Kinoshita M, Nonaka M, Fujinaka T, Kanemura Y: The association between 11 C-methionine uptake, IDH gene mutation, and MGMT promoter methylation in patients with grade II and III gliomas. 「Clin Radiol」 75(8):622-628、2020 年 8 月

Kikuchi Z, Shibahara I, Yamaki T, Yoshioka E, Shofuda T, Ohe R, Matsuda KI, Saito R, Kanamori M, Kanemura Y, Kumabe T, Tominaga T, Sonoda Y: TERT promoter mutation associated with multifocal phenotype and poor prognosis in patients with IDH wild-type glioblastoma. 「Neurooncol Adv」 2(1):vdaa114、2020 年 9 月

Miura S, Kijima N, Fujimori N, Nakagawa T, Nakagawa R, Tachi T, Okita Y, Kanemura Y, Nakajima S, Mano M, Kishima H, Ozawa K, Fujinaka T: Surgical Treatment of Brain Metastasis of Extramammary Paget's Disease: A Case Report. 「NMC Case Rep J」 7(4):189-193、2020 年 9 月

Arita H, Matsushita Y, Machida R, Yamasaki K, Hata N, Ohno M, Yamaguchi S, Sasayama T, Tanaka S, Higuchi F, Iuchi T, Saito K, Kanamori M, Matsuda KI, Miyake Y, Tamura K, Tamai S, Nakamura T, Uda T, Okita Y, Fukai J, Sakamoto D, Hattori Y, Pareira ES, Hatae R, Ishi Y, Miyakita Y, Tanaka K, Takayanagi S, Otani R, Sakaida T, Kobayashi K, Saito R, Kurozumi K, Shofuda T, Nonaka M, Suzuki H, Shibuya M, Komori T, Sasaki H, Mizoguchi M, Kishima H, Nakada M, Sonoda Y, Tominaga T, Nagane M, Nishikawa R, Kanemura Y, Kuchiba A, Narita Y, Ichimura K. TERT promoter mutation confers favorable prognosis regardless of 1p/19q status in adult diffuse gliomas with IDH1/2 mutations. 「Acta Neuropathol Commun」 8(1):201、2020 年 11 月

Achiha T, Kijima N, Kodama Y, Kagawa N, Kinoshita M, Fujimoto Y, Nonaka M, Fukai J, Inoue A, Nishida N, Yamanaka T, Harada A, Mori K, Tsuyuguchi N, Uda T, Ishibashi K, Tomogane Y, Sakamoto D, Shofuda T, Yoshioka E, Kanematsu D, Mano M, Luu B, Taylor MD, Kanemura Y, Kishima H: Activated leukocyte cell adhesion molecule expression correlates with the WNT subgroup in medulloblastoma and is involved in regulating tumor cell proliferation and invasion. 「PLoS One」 15(12):e0243272、2020 年 12 月

Mitani Y, Fukuoka K, Mori M, Arakawa Y, Matsushita Y, Hibiya Y, Honda S, Kobayashi M, Tanami Y, Kanemura Y, Ichimura K, Nakazawa A, Kurihara J, Koh K: Clinical Aggressiveness of TP53-Wild Type Sonic Hedgehog Medulloblastoma With MYCN Amplification, Chromosome 17p Loss, and Chromothripsis. 「J Neuropathol

Exp Neurol」 80(2):205-207、2021 年 1 月

Kinoshita M, Arita H, Takahashi M, Uda T, Fukai J, Ishibashi K, Kijima N, Hirayama R, Sakai M, Arisawa A, Takahashi H, Nakanishi K, Kagawa N, Ichimura K, Kanemura Y, Narita Y, Kishima H: Impact of Inversion Time for FLAIR Acquisition on the T2-FLAIR Mismatch Detectability for IDH-Mutant, Non-CODEL Astrocytomas. 「Front Oncol」 10:596448、2021 年 1 月

Shofuda T, Kanemura Y: HDACs and MYC in medulloblastoma: how do HDAC inhibitors control MYC-amplified tumors? 「Neuro Oncol」 23(2):173-174、2021 年 2 月

Fukusumi H, Togo K, Sumida M, Nakamori M, Obika S, Baba K, Shofuda T, Ito D, Okano H, Mochizuki H, Kanemura Y: Alpha-synuclein dynamics in induced pluripotent stem cell-derived dopaminergic neurons from a Parkinson's disease patient (PARK4) with SNCA triplication. 「FEBS Open Bio」 11(2):354-366、2021 年 2 月

Li Y, Nonaka M, Kanemura Y, Kodama Y, Mano M, Asai A: A case of medulloblastoma in a patient with fetal ventricular enlargement. 「Childs Nerv Syst」 37(3):977-982、2021 年 3 月

Kinoshita M, Uchikoshi M, Sakai M, Kanemura Y, Kishima H, Nakanishi K: T2-FLAIR Mismatch Sign Is Caused by Long T1 and T2 of IDH-mutant, 1p19q Non-codeleted Astrocytoma. 「Magn Reson Med Sci」 20(1):119-123、2021 年 3 月

Nishikawa M, Inoue A, Ohnishi T, Yano H, Kanemura Y, Kohno S, Ohue S, Ozaki S, Matsumoto S, Suehiro S, Nakamura Y, Shigekawa S, Watanabe H, Kitazawa R, Tanaka J, Kunieda T: CD44 expression in the tumor periphery predicts the responsiveness to bevacizumab in the treatment of recurrent glioblastoma. 「Cancer Med」 10(6):2013-2025、2021 年 3 月

Ito N, M. Asrafuzzaman Riyadh, Shah Adil Ishtiyahq Ahmad, Hattori S, Kanemura Y, Kiyonari H, Abe T, Furuta Y, Sinmyo Y, Kaneko N, Hirota Y, Lupo G, Hatakeyama J, Felemban Athary Abdulhaleem M, Mohammad Badrul Anam, Yamaguchi M, Takeo T, Takebayashi H, Takebayashi M, Oike Y, Nakagata N, Shimamura K, Michael J. Holtzman, Takahashi Y, Guillemot F, Miyakawa T, Sawamoto K, Ohta K: Dysfunction of the proteoglycan Tsukushi causes hydrocephalus through altered neurogenesis in the subventricular zone in mice. 「Science Translational Medicine」 13(587):eaay7896、2021 年 3 月

A-2

金村米博 : 小児脳腫瘍における遺伝子異常 「脳神経外科速報 2020 年増刊 悪

性脳腫瘍のすべて－Neuro-Oncology の教科書－遺伝子診断時代の臨床リアルワールド」(編集 杉山一彦, 橋本直哉)、30-38、メディカ出版、2020年10月1日

A-3

館 哲郎、藤中俊之、西本溪佑、山崎弘輝、村上皓紀、高野浩司、木谷知樹、金村米博、中島 伸：症候性内頸動脈瘤に対する Pipeline Embolization Device の治療成績「脳神経外科ジャーナル」29(12):P864-869、2020年12月

A-4

金村米博：NHOにおける臨床研究法の取り組みについて－認定臨床研究審査委員会の委員長の立場から－「医療」74(6):P283-287、2020年6月

金村米博：総論 悪性脳腫瘍の基礎から臨床の現状「Medical Science Digest」46(8):P3-5、2020年7月

金村米博、永根基雄：分子分類時代における髄芽腫の治療法選択は？ 新たな分類に基づいた、治療強度の最適化と有効な治療法の開発が望まれる (Q&A)「週刊日本医事新報」5033:P51-53、2020年10月

荒川芳輝、金村米博：外視鏡を用いた脳神経外科手術の現状と今後の展望 脳神経外科手術をより安全で正確な治療として進化させることが期待される (Q&A)「週刊日本医事新報」5046:P51-52、2021年1月

B-2

Fukusumi H, Shofuda T, Yamamoto A, Sumida M, Handa Y, Kanemura Y: An efficient method for detecting traces of undifferentiated human induced pluripotent stem cells (HiPSCs) among differentiated neural stem/progenitor cells derived from HiPSCs. ISSCR 2020 VIRTUAL, WEB、2020年6月26日

Arakawa Y, Makino Y, Kawauchi T, Tanji M, Mineharu Y, Kanemura Y, Miyamoto S: Retrospective analysis of the combined treatment of vincristine, ACNU, carboplatin and interferon- β plus radiotherapy (VAC-feron-R) in patients with diffuse astrocytoma. 2020 SNO Virtual Meeting、WEB、2020年11月19日～21日

Kijima N, Nakajima Y, Kanematsu D, Shofuda T, Higuchi Y, Suemizu H, Mori K, Kodama Y, Mano M, Sasaki A, Inoue T, Hirato J, Kishima H, Kanemura Y: Establishment of patient-derived xenografts from rare primary brain tumors. 2020 SNO Virtual Meeting、WEB、2020年11月19日～21日

Kinoshita M, Arita H, Takahashi M, Uda T, Fukai J, Ishibashi K, Kijima N, Hirayama R, Sakai M, Arisawa A, Takahashi H, Nakanishi K, Kagawa N, Ichimura K,

Kanemura Y, Narita Y, Kishima H: Impact of inversion time for FLAIR acquisition on the T2-FLAIR mismatch detectability for IDH-mutant, non-CODEL astrocytomas. 2020 SNO Virtual Meeting、WEB、2020年11月19日～21日

Takahashi S, Takahashi M, Kinoshita M, Miyake M, Kawaguchi R, Shinojima N, Mukasa A, Saito K, Nagane M, Otani R, Ueki K, Tanaka S, Hata N, Nishikawa R, Arita H, Nonaka M, Tamura K, Tateishi K, Uda T, Fukai J, Okita Y, Tsuyuguchi N, Kanemura Y, Kobayashi K, Sese J, Ichimura K, Narita Y, Hamamoto R: Developing automatic segmentation method for brain tumor MR images that can be used at multiple facilities. 2020 SNO Virtual Meeting、WEB、2020年11月19日～21日

B-3

金村米博、正札智子、隅田美穂、吉岡絵麻、中村雅也、岡野栄之：神経再生治療に用いる iPS 細胞由来神経前駆細胞の製造・品質管理法。第19回日本再生医療学会総会、WEB、2020年5月18日～29日

木下 学、有田英之、佐々木貴浩、福間良平、柳澤琢史、成田善孝、金村米博、貴島晴彦：人工知能とビッグデータは精神神経疾患の神経科学に何をもたらすか？。第43回日本神経科学大会、WEB、2020年7月30日

市村幸一、中野嘉子、金村米博、義岡孝子、平戸純子、原 純一、市川 仁、成田義孝：脳腫瘍の分子診断。第79回日本癌学会学術総会、広島市、2020年10月1日

金村米博：小児・AYA 世代脳腫瘍のゲノム・分子生物学的解析。第79回日本癌学会学術総会、広島市、2020年10月3日

木下 学、有田英之、高橋雅道、宇田武弘、深井順也、石橋謙一、木嶋教行、平山龍一、酒井美緒、有澤亜津子、高橋洋人、香川尚己、市村幸一、金村米博、成田善孝、貴島晴彦：神経膠腫の Radiomics から通常 MRI 撮影へのリバースエンジニアリング 神経膠腫診療に特化した FLAIR 撮影の開発。一般社団法人日本脳神経外科学会第79回学術総会、岡山市、2020年10月15日

金村米博、森 鑑二：関西中枢神経腫瘍分子診断ネットワーク Gioma Research Resource Sharing System 構築。一般社団法人日本脳神経外科学会第79回学術総会、岡山市、2020年10月16日

荒川芳輝、山崎夏維、寺島慶太、山本哲哉、中村英夫、五味 玲、中野嘉子、金村米博、市村幸一、義岡孝子、瀧本哲也、平戸純子、坂本博昭、西川 亮、原 純一、JCCG 脳腫瘍委員会：本邦における小児脳腫瘍診療の向上を目指す多角的アプローチ。一般社団法人日本脳神経外科学会第79回学術総会、岡山市、2020年10月16日

梅原 徹、木下 学、佐々木貴浩、有田英之、吉岡絵麻、正札智子、児玉良典、香川尚己、沖田典子、高野浩司、宇田武弘、深井順也、阪本大輔、森 鑑二、金村米博：機械学習による画像テクスチャ解析を用いた初発膠芽腫の予後推。一般社団法人日本脳神経外科学会第 79 回学術総会、岡山市、2020 年 10 月 17 日

高野浩司、金村米博、澤田遥奈、瀧 毅伊、西本溪佑、山崎弘輝、村上皓紀、木谷知樹、中島 伸、藤中俊之：膠芽腫患者における予後因子としての腫瘍摘出率の重要性と分子分類の関係。第 38 回日本脳腫瘍学会学術集会、広島市、2020 年 11 月 29 日

菊池善彰、山本 哲、柴原一陽、松田憲一朗、金村米博、大江倫太郎、金森政之、隈部俊宏、富永悌二、園田順彦：膠芽腫における TERTp 変異の臨床的意義。第 38 回日本脳腫瘍学会学術集会、広島市、2020 年 11 月 30 日

川内 豪、牧野恭秀、吉岡絵麻、正札智子、丹治正大、峰晴陽平、金村米博、荒川芳輝、宮本 亨：WHO2016 年脳腫瘍病理分類を用いた神経膠腫診断の検討。第 38 回日本脳腫瘍学会学術集会、広島市、2020 年 11 月 30 日

深井順也、林 宣秀、有田英之、梅原 徹、吉岡絵麻、正札智子、兼松大介、児玉良典、木下 学、沖田典子、埜中正博、宇田武弘、阪本大輔、佐々木貴浩、上松右二、中尾直之、森 鑑二、金村米博：高齢者膠芽腫における分子マーカーと生命予後。第 38 回日本脳腫瘍学会学術集会、広島市、2020 年 11 月 30 日

木下 学、成田善孝、金村米博、貴島晴彦：神経膠腫診療における radiomics の現状と未来について。第 38 回日本脳腫瘍学会学術集会、広島市、2020 年 11 月 30 日

梅原 徹、木下 学、佐々木貴浩、有田英之、吉岡絵麻、正札智子、児玉良典、平山龍一、木嶋教行、香川尚己、沖田典子、高野浩司、宇田武弘、深井順也、阪本大輔、森鑑二、金村米博：術前画像情報を用いた初発膠芽腫の予後推定の有効性と限界。第 38 回日本脳腫瘍学会学術集会、広島市、2020 年 11 月 30 日

高橋雅道、高橋 慧、木下 学、三宅基隆、河口理紗、篠島直樹、武笠晃丈、齊藤邦昭、永根基雄、大谷亮平、植木敬介、田中將太、秦 暢宏、田村 郁、立石健祐、西川 亮、有田英之、埜中正博、深井順也、沖田典子、露口尚弘、金村米博、小林和馬、瀬々 潤、市村幸一、成田善孝、浜本隆二：多施設での利用を目指した深層学習を用いた脳腫瘍領域測定法の開発。第 38 回日本脳腫瘍学会学術集会、広島市、2020 年 11 月 30 日

木下 学、打越将人、酒井美緒、金村米博、貴島晴彦、中西克之：T2-FLAIR mismatch sign は IDH-mt 星細胞腫が T1,T2 緩和時間が極めて長いことに起因する。第 38 回日本脳腫瘍学会学術集会、広島市、2020 年 11 月 30 日

B-4

勝間重沙子、半田有佳子、兼松大介、山本篤世、吉岡絵麻、福角勇人、隅田美穂、正札智子、金村米博：自動画像解析プログラムを用いた単一幹細胞運動能評価システムの開発。第 19 回日本再生医療学会総会、WEB、2020 年 5 月 18-29 日

岡本伸彦、宮 冬樹、角田達彦、金村米博、齋藤伸治、加藤光広、要 匡、柳久美子、小崎健次郎：Aminoacyl-tRNA synthetases 異常症の 5 家系。第 62 回日本小児神経学会学術集会、WEB、2020 年 8 月 18-20 日

堀いくみ、宮 冬樹、中島光子、中村勇治、家田大輔、大橋 圭、根岸 豊、服部文子、安藤直樹、角田達彦、才津浩智、金村米博、小崎健次郎、齋藤伸治：当院でエクソーム解析を実施した小児神経疾患症例の臨床的検討。第 62 回日本小児神経学会学術集会、WEB、2020 年 8 月 18-20 日

林 大誠、檜 彰良、中山良平、児玉良典、眞能正幸、吉岡絵麻、兼松大介、正札智子、金村米博：Modified Cycle-Consistent Adversarial Network を用いた病理組織画像における染色度合いの正規化を伴う病理組織分類。第 39 回日本医用画像工学会大会、WEB、2020 年 9 月 17 日

広川大輔、慶野 大、提箸祐貴、本間博邦、佐藤博信、後藤裕明、山本哲哉、金村米博、正札智子、吉岡絵麻、伊達 勲、西川 亮：髄芽腫における集学的治療に関する現状と考察。一般社団法人日本脳神経外科学会第 79 回学術総会、WEB、2020 年 10 月 15 日～17 日

藤本健二、有田英之、中村大志、田中將太、樋口芙未、沖田典子、金村米博、深井順也、阪本大輔、宇田武弘、前原健寿、永根基雄、西川 亮、小森隆司、成田善孝、市村幸一：IDH wildtype LGG において TERT promoter mutation と CNA は重要な予後規定因子である。一般社団法人日本脳神経外科学会第 79 回学術総会、WEB、2020 年 10 月 15 日～17 日

泉本修一、渡邊 啓、中川修宏、森 鑑二、金村米博：脳腫瘍関連てんかんにおける AMPA 受容体拮抗剤ペランパネルの発作抑制効果と腫瘍関連因子との相関。一般社団法人日本脳神経外科学会第 79 回学術総会、WEB、2020 年 10 月 15 日～17 日

藤中俊之、木谷知樹、高野浩司、村上皓紀、西本溪佑、山崎弘輝、澤田遥奈、瀧 毅伊、金村米博、中島 伸：脳動脈瘤に対する Flow Diverter を用いた血管内治療成績。一般社団法人日本脳神経外科学会第 79 回学術総会、WEB、2020 年 10 月 15 日～17 日

西本溪佑、高野浩司、澤田遥奈、瀧 毅伊、山崎弘輝、村上皓紀、木谷知樹、金村米博、中島 伸、藤中俊之：外減圧術を施行された頭部外傷患者の予後に

関わる因子。一般社団法人日本脳神経外科学会第 79 回学術総会、WEB、2020 年 10 月 15 日～17 日

深井順也、有田英之、梅原 徹、吉岡絵麻、正札智子、児玉良典、木下 学、沖田典子、埜中正博、宇田武弘、阪本大輔、上松右二、中尾直之、森 鑑二、金村米博：高齢者膠芽腫における分子マーカーと生命予後。一般社団法人日本脳神経外科学会第 79 回学術総会、WEB、2020 年 10 月 15 日～17 日

菊地善彰、山木 哲、柴原一陽、松田憲一朗、金村米博、大江倫太郎、金森政之、隈部俊宏、富永悌二、園田順彦：膠芽腫における TERTp 変異の臨床的意義。一般社団法人日本脳神経外科学会第 79 回学術総会、WEB、2020 年 10 月 15 日～17 日

沖田典子、正札智子、兼松大介、吉岡絵麻、児玉良典、眞能正幸、木下 学、埜中正博、藤中俊之、金村米博：Grade2,3 神経膠腫における MET-PET での IDH 変異と MGMT プロモーターメチル化率の予測。一般社団法人日本脳神経外科学会第 79 回学術総会、WEB、2020 年 10 月 15 日～17 日

牧野恭秀、荒川芳輝、川内 豪、峰晴陽平、丹治正大、吉岡絵麻、正札智子、兼松大介、金村米博、宮本 享：Diffuse astrocytoma に対する VAC-feron-R の治療成績。一般社団法人日本脳神経外科学会第 79 回学術総会、WEB、2020 年 10 月 15 日～17 日

上松右二、深井順也、佐々木貴浩、西林宏起、中尾直之、金村米博：IDH-wild Diffuse Astorcytoma, Grade II の臨床病理学的検討。一般社団法人日本脳神経外科学会第 79 回学術総会、WEB、2020 年 10 月 15 日～17 日

高野浩司、澤田遥奈、瀧 毅伊、西本溪佑、山崎弘輝、村上皓紀、木谷知樹、金村米博、中島 伸、藤中俊之：当院における術前腫瘍塞栓術の治療成績・合併症の検討。一般社団法人日本脳神経外科学会第 79 回学術総会、WEB、2020 年 10 月 15 日～17 日

山崎弘輝、澤田遥奈、瀧 毅伊、西本溪佑、村上皓紀、木谷知樹、高野浩司、金村米博、中島 伸、藤中俊之：破裂脳動脈瘤に対する意図した二期的治療の有用性。一般社団法人日本脳神経外科学会第 79 回学術総会、WEB、2020 年 10 月 15 日～17 日

村上皓紀、瀧 毅伊、澤田遥奈、山崎弘輝、西本溪佑、高野浩司、木谷知樹、金村米博、中島 伸、藤中俊之：当院における主幹動脈閉塞に対する急性期 STAMCA 吻合術の治療成績。一般社団法人日本脳神経外科学会第 79 回学術総会、WEB、2020 年 10 月 15 日～17 日

木谷知樹、瀧 毅伊、澤田遥奈、山崎弘輝、西本溪佑、村上皓紀、高野浩司、

金村米博、中島 伸、藤中俊之：重症頭部外傷に伴う硬膜動静脈瘻の発生頻度と自然歴。一般社団法人日本脳神経外科学会第 79 回学術総会、WEB、2020 年 10 月 15 日～17 日

川内 豪、牧野恭秀、正札智子、吉岡絵麻、丹治正大、峰晴陽平、金村米博、荒川芳輝、宮本 享：WHO2016 年脳腫瘍病理分類を用いた神経膠腫診断の検討。一般社団法人日本脳神経外科学会第 79 回学術総会、WEB、2020 年 10 月 15 日～17 日

沖田典子、正札智子、兼松大介、吉岡絵麻、児玉良典、眞能正幸、木下 学、埜中正博、藤中俊之、金村米博：Grade2,3 神経膠腫における MET-PET での IDH 変異と MGMT プロモーターメチル化率の予測。第 58 回日本癌治療学会学術集会、京都市、2020 年 10 月 24 日

勝間亜沙子、兼松大介、福角勇人、隅田美穂、吉岡絵麻、山本篤世、半田有佳子、正札智子、金村米博：一般実験室における細胞加工物製造設備の簡易モニタリングシステムの考案。第 20 回日本再生医療学会総会、WEB、2021 年 3 月 11 日

兼松大介、正札智子、吉岡絵麻、隅田美穂、勝間亜沙子、山本篤世、半田有佳子、福角勇人、中村雅也、岡野栄之、金村米博：間期核 FISH 法を用いたヒト幹細胞における低頻度モザイク染色体異数性異常細胞の検出法の検討。第 20 回日本再生医療学会総会、WEB、2021 年 3 月 11 日

福角勇人、勝間亜沙子、兼松大介、半田有佳子、隅田美穂、山本篤世、吉岡絵麻、正札智子、金村米博：ヒト iPS 細胞由来神経系細胞の低酸素耐性能評価システムの開発。第 20 回日本再生医療学会総会、WEB、2021 年 3 月 11 日

分子医療研究室

室長 金村米博

【概要】

分子医療研究室では各種遺伝子検査を用いた悪性脳腫瘍、難治性脳形成障害症等の難治性神経疾患の分子診断技術の開発と、分子診断結果を用いた病態解析研究、および新規治療法開発を実施しています。

【主な研究テーマ】

1. 悪性脳腫瘍の分子遺伝学的解析

悪性グリオーマを対象として、関西地域を中心とした 60 以上の医療機関で構成される「関西中枢神経腫瘍分子診断ネットワーク」を主宰し、脳腫瘍検体レジス্টリーを行い、WHO 分類に基づく中央遺伝子診断の実施と、大規模症例を用いた悪性グリオーマの分子遺伝学的特性解析を実施しています。また、小児悪性脳腫瘍の中で最も頻度の高い腫瘍の一つである髄芽腫に関して、「日本小児がん研究グループ (JCCG)」に参加し、全国レベルで収集された髄芽腫標本の中央分子診断を実施しています。

2. 難治性脳形成障害症の分子遺伝学的解析

L1CAM 変異で発症する X 連鎖性遺伝性水頭症を中心に、各種難治性脳形成障害症患者の臨床情報、画像情報、患者由来生体試料（組織・細胞・DNA）を収集し、次世代シーケンサーを駆使した遺伝子解析研究を実施すると同時に、患者由来試料から分離した線維芽細胞、神経幹細胞、間葉系細胞（臍帯由来）、血液細胞の特性解析を行い、並行してそれら細胞から疾患 iPS 細胞の樹立を実施し、その特性解析を実施しています。

【2020 年度 研究発表業績】

A-0

Fukai J, Arita H, Umehara T, Yoshioka E, Shofuda T, Kanematsu D, Kodama Y, Mano M, Kinoshita M, Okita Y, Nonaka M, Uda T, Tsuyuguchi N, Sakamoto D, Uematsu Y, Nakao N, Mori K, Kanemura Y: Molecular characteristics and clinical outcomes of elderly patients with IDH-wildtype glioblastomas: comparative study of older and younger cases in Kansai Network cohort. 「Brain Tumor Pathol」 37(2):50-59、2020 年 4 月

Yotsumoto Y, Harada A, Tsugawa J, Ikura Y, Utsunomiya H, Miyatake S, Matsumoto N, Kanemura Y, Hashimoto-Tamaoki T: Infantile macrocephaly and multiple subcutaneous lipomas diagnosed with PTEN hamartoma tumor syndrome: A case report. 「Mol Clin Oncol」 12(4):329-335、2020 年 4 月

Okita Y, Shofuda T, Kanematsu D, Yoshioka E, Kodama Y, Mano M, Kinoshita M, Nonaka M, Fujinaka T, Kanemura Y: The association between 11 C-methionine uptake, IDH gene mutation, and MGMT promoter methylation in patients with grade II and III gliomas. 「Clin Radio」 75(8):622-628、2020年8月

Kikuchi Z, Shibahara I, Yamaki T, Yoshioka E, Shofuda T, Ohe R, Matsuda KI, Saito R, Kanamori M, Kanemura Y, Kumabe T, Tominaga T, Sonoda Y: TERT promoter mutation associated with multifocal phenotype and poor prognosis in patients with IDH wild-type glioblastoma. 「Neurooncol Adv」 2(1):vdaa114、2020年9月

Miura S, Kijima N, Fujimori N, Nakagawa T, Nakagawa R, Tachi T, Okita Y, Kanemura Y, Nakajima S, Mano M, Kishima H, Ozawa K, Fujinaka T: Surgical Treatment of Brain Metastasis of Extramammary Paget's Disease: A Case Report. 「NMC Case Rep J」 7(4):189-193、2020年9月

Arita H, Matsushita Y, Machida R, Yamasaki K, Hata N, Ohno M, Yamaguchi S, Sasayama T, Tanaka S, Higuchi F, Iuchi T, Saito K, Kanamori M, Matsuda KI, Miyake Y, Tamura K, Tamai S, Nakamura T, Uda T, Okita Y, Fukai J, Sakamoto D, Hattori Y, Pareira ES, Hatae R, Ishi Y, Miyakita Y, Tanaka K, Takayanagi S, Otani R, Sakaida T, Kobayashi K, Saito R, Kurozumi K, Shofuda T, Nonaka M, Suzuki H, Shibuya M, Komori T, Sasaki H, Mizoguchi M, Kishima H, Nakada M, Sonoda Y, Tominaga T, Nagane M, Nishikawa R, Kanemura Y, Kuchiba A, Narita Y, Ichimura K. TERT promoter mutation confers favorable prognosis regardless of 1p/19q status in adult diffuse gliomas with IDH1/2 mutations. 「Acta Neuropathol Commun」 8(1):201、2020年11月

Achiha T, Kijima N, Kodama Y, Kagawa N, Kinoshita M, Fujimoto Y, Nonaka M, Fukai J, Inoue A, Nishida N, Yamanaka T, Harada A, Mori K, Tsuyuguchi N, Uda T, Ishibashi K, Tomogane Y, Sakamoto D, Shofuda T, Yoshioka E, Kanematsu D, Mano M, Luu B, Taylor MD, Kanemura Y, Kishima H: Activated leukocyte cell adhesion molecule expression correlates with the WNT subgroup in medulloblastoma and is involved in regulating tumor cell proliferation and invasion. 「PLoS One」 15(12):e0243272、2020年12月

Mitani Y, Fukuoka K, Mori M, Arakawa Y, Matsushita Y, Hibiya Y, Honda S, Kobayashi M, Tanami Y, Kanemura Y, Ichimura K, Nakazawa A, Kurihara J, Koh K: Clinical Aggressiveness of TP53-Wild Type Sonic Hedgehog Medulloblastoma With MYCN Amplification, Chromosome 17p Loss, and Chromothripsis. 「J Neuropathol Exp Neurol」 80(2):205-207、2021年1月

Kinoshita M, Arita H, Takahashi M, Uda T, Fukai J, Ishibashi K, Kijima N, Hirayama R, Sakai M, Arisawa A, Takahashi H, Nakanishi K, Kagawa N, Ichimura K, Kanemura Y,

Narita Y, Kishima H: Impact of Inversion Time for FLAIR Acquisition on the T2-FLAIR Mismatch Detectability for IDH-Mutant, Non-CODEL Astrocytomas. 「Front Oncol」 10:596448、2021年1月

Shofuda T, Kanemura Y: HDACs and MYC in medulloblastoma: how do HDAC inhibitors control MYC-amplified tumors? 「Neuro Oncol」 23(2):173-174、2021年2月

Fukusumi H, Togo K, Sumida M, Nakamori M, Obika S, Baba K, Shofuda T, Ito D, Okano H, Mochizuki H, Kanemura Y: Alpha-synuclein dynamics in induced pluripotent stem cell-derived dopaminergic neurons from a Parkinson's disease patient (PARK4) with SNCA triplication. 「FEBS Open Bio」 11(2):354-366、2021年2月

Li Y, Nonaka M, Kanemura Y, Kodama Y, Mano M, Asai A: A case of medulloblastoma in a patient with fetal ventricular enlargement. 「Childs Nerv Syst」 37(3):977-982、2021年3月

Kinoshita M, Uchikoshi M, Sakai M, Kanemura Y, Kishima H, Nakanishi K: T2-FLAIR Mismatch Sign Is Caused by Long T1 and T2 of IDH-mutant, 1p19q Non-codeleted Astrocytoma. 「Magn Reson Med Sci」 20(1):119-123、2021年3月

Nishikawa M, Inoue A, Ohnishi T, Yano H, Kanemura Y, Kohno S, Ohue S, Ozaki S, Matsumoto S, Suehiro S, Nakamura Y, Shigekawa S, Watanabe H, Kitazawa R, Tanaka J, Kunieda T: CD44 expression in the tumor periphery predicts the responsiveness to bevacizumab in the treatment of recurrent glioblastoma. 「Cancer Med」 10(6):2013-2025、2021年3月

Ito N, M. Asrafuzzaman Riyadh, Shah Adil Ishtiyahq Ahmad, Hattori S, Kanemura Y, Kiyonari H, Abe T, Furuta Y, Sinmyo Y, Kaneko N, Hirota Y, Lupo G, Hatakeyama J, Felemban Athary Abdulhaleem M, Mohammad Badrul Anam, Yamaguchi M, Takeo T, Takebayashi H, Takebayashi M, Oike Y, Nakagata N, Shimamura K, Michael J. Holtzman, Takahashi Y, Guillemot F, Miyakawa T, Sawamoto K, Ohta K: Dysfunction of the proteoglycan Tsukushi causes hydrocephalus through altered neurogenesis in the subventricular zone in mice. 「Science Translational Medicine」 13(587):eaay7896、2021年3月

A-2

金村米博：小児脳腫瘍における遺伝子異常「脳神経外科速報 2020年増刊 悪性脳腫瘍のすべて－Neuro-Oncologyの教科書－遺伝子診断時代の臨床リアルワールド」（編集 杉山一彦，橋本直哉）、P30-38、メディカ出版、2020年10月1日

A-3

館 哲郎、藤中俊之、西本溪佑、山崎弘輝、村上皓紀、高野浩司、木谷知樹、金村

米博、中島 伸：症候性内頸動脈瘤に対する Pipeline Embolization Device の治療成績「脳神経外科ジャーナル」29(12):P864-869、2020年12月

A-4

金村米博：NHOにおける臨床研究法の取り組みについて－認定臨床研究審査委員会の委員長の立場から－「医療」74(6):P283-287、2020年6月

金村米博：総論 悪性脳腫瘍の基礎から臨床の現状「Medical Science Digest」46(8):P3-5、2020年7月

金村米博、永根基雄：分子分類時代における髄芽腫の治療法選択は？ 新たな分類に基づいた、治療強度の最適化と有効な治療法の開発が望まれる（Q&A）「週刊日本医事新報」5033:P51-53、2020年10月

荒川芳輝、金村米博：外視鏡を用いた脳神経外科手術の現状と今後の展望 脳神経外科手術をより安全で正確な治療として進化させることが期待される(Q&A)「週刊日本医事新報」5046:P51-52、2021年1月

B-2

Fukusumi H, Shofuda T, Yamamoto A, Sumida M, Handa Y, Kanemura Y: An efficient method for detecting traces of undifferentiated human induced pluripotent stem cells (HiPSCs) among differentiated neural stem/progenitor cells derived from HiPSCs. ISSCR 2020 VIRTUAL, WEB、2020年6月26日

Arakawa Y, Makino Y, Kawauchi T, Tanji M, Mineharu Y, Kanemura Y, Miyamoto S: Retrospective analysis of the combined treatment of vincristine, ACNU, carboplatin and interferon- β plus radiotherapy (VAC-feron-R) in patients with diffuse astrocytoma. 2020 SNO Virtual Meeting、WEB、2020年11月19日～21日

Kijima N, Nakajima Y, Kanematsu D, Shofuda T, Higuchi Y, Suemizu H, Mori K, Kodama Y, Mano M, Sasaki A, Inoue T, Hirato J, Kishima H, Kanemura Y: Establishment of patient-derived xenografts from rare primary brain tumors. 2020 SNO Virtual Meeting、WEB、2020年11月19日～21日

Kinoshita M, Arita H, Takahashi M, Uda T, Fukai J, Ishibashi K, Kijima N, Hirayama R, Sakai M, Arisawa A, Takahashi H, Nakanishi K, Kagawa N, Ichimura K, Kanemura Y, Narita Y, Kishima H: Impact of inversion time for FLAIR acquisition on the T2-FLAIR mismatch detectability for IDH-mutant, non-CODEL astrocytomas. 2020 SNO Virtual Meeting、WEB、2020年11月19日～21日

Takahashi S, Takahashi M, Kinoshita M, Miyake M, Kawaguchi R, Shinojima N, Mukasa A, Saito K, Nagane M, Otani R, Ueki K, Tanaka S, Hata N, Nishikawa R, Arita H, Nonaka M, Tamura K, Tateishi K, Uda T, Fukai J, Okita Y, Tsuyuguchi N, Kanemura

Y. Kobayashi K, Sese J, Ichimura K, Narita Y, Hamamoto R: Developing automatic segmentation method for brain tumor MR images that can be used at multiple facilities. 2020 SNO Virtual Meeting、WEB、2020年11月19日～21日

B-3

金村米博、正札智子、隅田美穂、吉岡絵麻、中村雅也、岡野栄之：神経再生治療に用いる iPS 細胞由来神経前駆細胞の製造・品質管理法。第19回日本再生医療学会総会、WEB、2020年5月18日～29日

木下 学、有田英之、佐々木貴浩、福間良平、柳澤琢史、成田善孝、金村米博、貴島晴彦：人工知能とビッグデータは精神神経疾患の神経科学に何をもたらすか？。第43回日本神経科学大会、WEB、2020年7月30日

市村幸一、中野嘉子、金村米博、義岡孝子、平戸純子、原 純一、市川 仁、成田義孝：脳腫瘍の分子診断。第79回日本癌学会学術総会、広島市、2020年10月1日

金村米博：小児・AYA 世代脳腫瘍のゲノム・分子生物学的解。第79回日本癌学会学術総会、広島市、2020年10月3日

木下 学、有田英之、高橋雅道、宇田武弘、深井順也、石橋謙一、木嶋教行、平山龍一、酒井美緒、有澤亜津子、高橋洋人、香川尚己、市村幸一、金村米博、成田善孝、貴島晴彦：神経膠腫の Radiomics から通常 MRI 撮影へのリバースエンジニアリング 神経膠腫診療に特化した FLAIR 撮影の開発。一般社団法人日本脳神経外科学会第79回学術総会、岡山市、2020年10月15日

金村米博、森 鑑二：関西中枢神経腫瘍分子診断ネットワーク Gioma Research Resource Sharing System 構築。一般社団法人日本脳神経外科学会第79回学術総会、岡山市、2020年10月16日

荒川芳輝、山崎夏維、寺島慶太、山本哲哉、中村英夫、五味 玲、中野嘉子、金村米博、市村幸一、義岡孝子、瀧本哲也、平戸純子、坂本博昭、西川 亮、原 純一、JCCG 脳腫瘍委員会：本邦における小児脳腫瘍診療の向上を目指す多角的アプローチ。一般社団法人日本脳神経外科学会第79回学術総会、岡山市、2020年10月16日

梅原 徹、木下 学、佐々木貴浩、有田英之、吉岡絵麻、正札智子、児玉良典、香川尚己、沖田典子、高野浩司、宇田武弘、深井順也、阪本大輔、森 鑑二、金村米博：機械学習による画像テクスチャ解析を用いた初発膠芽腫の予後推定。一般社団法人日本脳神経外科学会第79回学術総会、岡山市、2020年10月17日

高野浩司、金村米博、澤田遥奈、瀧 毅伊、西本溪佑、山崎弘輝、村上皓紀、木谷知樹、中島 伸、藤中俊之：膠芽腫患者における予後因子としての腫瘍摘出率の重

要性と分子分類の関係。第 38 回日本脳腫瘍学会学術集会、広島市、2020 年 11 月 29 日

菊池善彰、山本 哲、柴原一陽、松田憲一郎、金村米博、大江倫太郎、金森政之、隈部俊宏、富永悌二、園田順彦：膠芽腫における TERTp 変異の臨床的意義。第 38 回日本脳腫瘍学会学術集会、広島市、2020 年 11 月 30 日

川内 豪、牧野恭秀、吉岡絵麻、正札智子、丹治正大、峰晴陽平、金村米博、荒川芳輝、宮本 亨：WHO2016 年脳腫瘍病理分類を用いた神経膠腫診断の検討。第 38 回日本脳腫瘍学会学術集会、広島市、2020 年 11 月 30 日

深井順也、林 宣秀、有田英之、梅原 徹、吉岡絵麻、正札智子、兼松大介、児玉良典、木下 学、沖田典子、埜中正博、宇田武弘、阪本大輔、佐々木貴浩、上松右二、中尾直之、森 鑑二、金村米博：高齢者膠芽腫における分子マーカーと生命予後。第 38 回日本脳腫瘍学会学術集会、広島市、2020 年 11 月 30 日

木下 学、成田善孝、金村米博、貴島晴彦：神経膠腫診療における radiomics の現状と未来について。第 38 回日本脳腫瘍学会学術集会、広島市、2020 年 11 月 30 日

梅原 徹、木下 学、佐々木貴浩、有田英之、吉岡絵麻、正札智子、児玉良典、平山龍一、木嶋教行、香川尚己、沖田典子、高野浩司、宇田武弘、深井順也、阪本大輔、森鑑二、金村米博：術前画像情報を用いた初発膠芽腫の予後推定の有効性と限界。第 38 回日本脳腫瘍学会学術集会、広島市、2020 年 11 月 30 日

高橋雅道、高橋 慧、木下 学、三宅基隆、河口理紗、篠島直樹、武笠晃丈、齊藤邦昭、永根基雄、大谷亮平、植木敬介、田中將太、秦 暢宏、田村 郁、立石健祐、西川 亮、有田英之、埜中正博、深井順也、沖田典子、露口尚弘、金村米博、小林和馬、瀬々 潤、市村幸一、成田善孝、浜本隆二：多施設での利用を目指した深層学習を用いた脳腫瘍領域測定法の開発。第 38 回日本脳腫瘍学会学術集会、広島市、2020 年 11 月 30 日

木下 学、打越将人、酒井美緒、金村米博、貴島晴彦、中西克之：T2-FLAIR mismatch sign は IDH-mt 星細胞腫が T1,T2 緩和時間が極めて長いことに起因する。第 38 回日本脳腫瘍学会学術集会、広島市、2020 年 11 月 30 日

B-4

勝間亜沙子、半田有佳子、兼松大介、山本篤世、吉岡絵麻、福角勇人、隅田美穂、正札智子、金村米博：自動画像解析プログラムを用いた単一幹細胞運動能評価システムの開発。第 19 回日本再生医療学会総会、WEB、2020 年 5 月 18-29 日

岡本伸彦、宮 冬樹、角田達彦、金村米博、齋藤伸治、加藤光広、要 匡、柳久美子、小崎健次郎：Aminoacyl-tRNA synthetases 異常症の 5 家系。第 62 回日本小児神経学会学術集会、WEB、2020 年 8 月 18-20 日

堀いくみ、宮 冬樹、中島光子、中村勇治、家田大輔、大橋 圭、根岸 豊、服部文子、安藤直樹、角田達彦、才津浩智、金村米博、小崎健次郎、齋藤伸治：当院でエキソーム解析を実施した小児神経疾患症例の臨床的検討。第 62 回日本小児神経学会学術集会、WEB、2020 年 8 月 18-20 日

林 大誠、檜 彰良、中山良平、児玉良典、眞能正幸、吉岡絵麻、兼松大介、正札智子、金村米博：Modified Cycle-Consistent Adversarial Network を用いた病理組織画像における染色度合いの正規化を伴う病理組織分類。第 39 回日本医用画像工学会大会、WEB、2020 年 9 月 17 日

広川大輔、慶野 大、提箸祐貴、本間博邦、佐藤博信、後藤裕明、山本哲哉、金村米博、正札智子、吉岡絵麻、伊達 勲、西川 亮：髄芽腫における集学的治療に関する現状と考察。一般社団法人日本脳神経外科学会第 79 回学術総会、WEB、2020 年 10 月 15 日～17 日

藤本健二、有田英之、中村大志、田中將太、樋口芙未、沖田典子、金村米博、深井順也、阪本大輔、宇田武弘、前原健寿、永根基雄、西川 亮、小森隆司、成田善孝、市村幸一：IDH wildtype LGG において TERT promoter mutation と CNA は重要な予後規定因子である。一般社団法人日本脳神経外科学会第 79 回学術総会、WEB、2020 年 10 月 15 日～17 日

泉本修一、渡邊 啓、中川修宏、森 鑑二、金村米博：脳腫瘍関連てんかんにおける AMPA 受容体拮抗剤ペランパネルの発作抑制効果と腫瘍関連因子との相関。一般社団法人日本脳神経外科学会第 79 回学術総会、WEB、2020 年 10 月 15 日～17 日

藤中俊之、木谷知樹、高野浩司、村上皓紀、西本溪佑、山崎弘輝、澤田遥奈、瀧 毅伊、金村米博、中島 伸：脳動脈瘤に対する Flow Diverter を用いた血管内治療成績。一般社団法人日本脳神経外科学会第 79 回学術総会、WEB、2020 年 10 月 15 日～17 日

西本溪佑、高野浩司、澤田遥奈、瀧 毅伊、山崎弘輝、村上皓紀、木谷知樹、金村米博、中島 伸、藤中俊之：外減圧術を施行された頭部外傷患者の予後に関わる因子。一般社団法人日本脳神経外科学会第 79 回学術総会、WEB、2020 年 10 月 15 日～17 日

深井順也、有田英之、梅原 徹、吉岡絵麻、正札智子、児玉良典、木下 学、沖田典子、埜中正博、宇田武弘、阪本大輔、上松右二、中尾直之、森 鑑二、金村米博：高齢者膠芽腫における分子マーカーと生命予後。一般社団法人日本脳神経外科学会第 79 回学術総会、WEB、2020 年 10 月 15 日～17 日

菊地善彰、山木 哲、柴原一陽、松田憲一郎、金村米博、大江倫太郎、金森政之、隈部俊宏、富永悌二、園田順彦：膠芽腫における TERTp 変異の臨床的意義。一

般社団法人日本脳神経外科学会第 79 回学術総会、WEB、2020 年 10 月 15 日～17 日

沖田典子、正札智子、兼松大介、吉岡絵麻、児玉良典、眞能正幸、木下 学、埜中正博、藤中俊之、金村米博：Grade2,3 神経膠腫における MET-PET での IDH 変異と MGMT プロモーターメチル化率の予測。一般社団法人日本脳神経外科学会第 79 回学術総会、WEB、2020 年 10 月 15 日～17 日

牧野恭秀、荒川芳輝、川内 豪、峰晴陽平、丹治正大、吉岡絵麻、正札智子、兼松大介、金村米博、宮本 享：Diffuse astrocytoma に対する VAC-feron-R の治療成績。一般社団法人日本脳神経外科学会第 79 回学術総会、WEB、2020 年 10 月 15 日～17 日

上松右二、深井順也、佐々木貴浩、西林宏起、中尾直之、金村米博：IDH-wild Diffuse Astorcytoma, Grade II の臨床病理学的検討。一般社団法人日本脳神経外科学会第 79 回学術総会、WEB、2020 年 10 月 15 日～17 日

高野浩司、澤田遥奈、瀧 毅伊、西本溪佑、山崎弘輝、村上皓紀、木谷知樹、金村米博、中島 伸、藤中俊之：当院における術前腫瘍塞栓術の治療成績・合併症の検討。一般社団法人日本脳神経外科学会第 79 回学術総会、WEB、2020 年 10 月 15 日～17 日

山崎弘輝、澤田遥奈、瀧 毅伊、西本溪佑、村上皓紀、木谷知樹、高野浩司、金村米博、中島 伸、藤中俊之：破裂脳動脈瘤に対する意図した二期的治療の有用性。一般社団法人日本脳神経外科学会第 79 回学術総会、WEB、2020 年 10 月 15 日～17 日

村上皓紀、瀧 毅伊、澤田遥奈、山崎弘輝、西本溪佑、高野浩司、木谷知樹、金村米博、中島 伸、藤中俊之：当院における主幹動脈閉塞に対する急性期 STAMCA 吻合術の治療成績。一般社団法人日本脳神経外科学会第 79 回学術総会、WEB、2020 年 10 月 15 日～17 日

木谷知樹、瀧 毅伊、澤田遥奈、山崎弘輝、西本溪佑、村上皓紀、高野浩司、金村米博、中島 伸、藤中俊之：重症頭部外傷に伴う硬膜動静脈瘻の発生頻度と自然歴。一般社団法人日本脳神経外科学会第 79 回学術総会、WEB、2020 年 10 月 15 日～17 日

川内 豪、牧野恭秀、正札智子、吉岡絵麻、丹治正大、峰晴陽平、金村米博、荒川芳輝、宮本 享：WHO2016 年脳腫瘍病理分類を用いた神経膠腫診断の検討。一般社団法人日本脳神経外科学会第 79 回学術総会、WEB、2020 年 10 月 15 日～17 日

沖田典子、正札智子、兼松大介、吉岡絵麻、児玉良典、眞能正幸、木下 学、埜中

正博、藤中俊之、金村米博：Grade2,3 神経膠腫における MET-PET での IDH 変異と MGMT プロモーターメチル化率の予測。第 58 回日本癌治療学会学術集会、京都市、2020 年 10 月 24 日

勝間亜沙子、兼松大介、福角勇人、隅田美穂、吉岡絵麻、山本篤世、半田有佳子、正札智子、金村米博：一般実験室における細胞加工物製造設備の簡易モニタリングシステムの考案。第 20 回日本再生医療学会総会、WEB、2021 年 3 月 11 日

兼松大介、正札智子、吉岡絵麻、隅田美穂、勝間亜沙子、山本篤世、半田有佳子、福角勇人、中村雅也、岡野栄之、金村米博：間期核 FISH 法を用いたヒト幹細胞における低頻度モザイク染色体異数性異常細胞の検出法の検討。第 20 回日本再生医療学会総会、WEB、2021 年 3 月 11 日

福角勇人、勝間亜沙子、兼松大介、半田有佳子、隅田美穂、山本篤世、吉岡絵麻、正札智子、金村米博：ヒト iPS 細胞由来神経系細胞の低酸素耐性能評価システムの開発。第 20 回日本再生医療学会総会、WEB、2021 年 3 月 11 日

エイズ先端医療開発室

室長 白阪琢磨

エイズ先端医療研究部はエイズ先端医療開発室と HIV 感染制御研究室から構成されている。

当院は薬害 HIV 裁判の和解に基づく恒久対策の一環として、平成 9 年にエイズ診療における近畿ブロックのブロック拠点病院に選定され、診療（全科対応体制）、臨床研究、教育・研修、情報発信の 4 機能を担っている。院内設置の HIV/AIDS 先端医療開発センターが関連部署と緊密な連携を取り任務を遂行している。HIV 感染症の専門的診療は感染症内科が担い、他の機能はエイズ先端医療研究部がコーディネートしている。臨床研究では厚生労働行政推進調査事業費補助金によるエイズ対策政策研究事業（令和 2 年度は指定研究「HIV 感染症及びその合併症の課題を克服する研究」（研究代表者 白阪琢磨）、指定研究「HIV 感染症の医療体制の整備に関する研究」（研究分担者 渡邊大、矢倉裕輝））などを実施し、臨床研究の主なテーマとして HIV 感染症の病態解析や治療に関する研究と患者中心の医療の提供に関する研究に取り組んでいる。令和 2 年度の独立行政法人国立病院機構の NHO ネットワーク共同研究課題として、「抗 HIV 療法中のプロウイルスにおける薬剤耐性微小集団に関する観察研究（H31-NHO（エイズ）-01）」（研究代表者 白阪琢磨）の研究を遂行した。血液製剤による感染者の多くは加齢に伴う長期療養が重大な課題となっており、厚生労働行政推進調査事業費補助金によるエイズ対策政策研究事業「非加熱血液凝固因子製剤による HIV 感染血友病等患者の長期療養体制の構築に関する患者参加型研究」班の研究分担（消化器科 三田英治）を担当し研究協力も行っている。重複感染の肝移植に対しては厚生労働行政推進調査事業費補助金によるエイズ対策政策研究事業指定研究班（江口班（研究分担者 上平朝子））の研究分担を担当している。教育・研修では院外向けと共に、院内での研修については、看護部、医療相談室、臨床心理室等と共に職員研究部と協働で実施し、多くの参加者を得ている。これらの研究成果は学会あるいは論文として発表した。情報発信については当院のホームページ内に HIV/AIDS 先端医療開発センタ（<https://osaka.hosp.go.jp/khac/>）を設け、厚労科研の成果の一部（<https://www.haart-support.jp/>）や HIV 感染症/AIDS に関する情報を発信しており、ホームページは 1999 年に開設以来アクセス数は約 76 万件と、多くの方の利用を得ている。

平成 25 年 4 月には大阪大学大学院医学系研究科の連携大学院（エイズ先端医療学）が併設され、平成 26 年度から 1 名の大学院生を受け入れた。

今後も、HIV/AIDS 先端医療開発センターの研究部門として HIV 感染症/AIDS に関する臨床研究、教育・研修、情報発信を進め、特に急性感染期の HIV 感染症の診断と治療を新たなテーマとして研究を推進して行きたい。

【2020 年度 研究発表業績】

A-0

Kato T, Yoshihara Y, Watanabe D, Fukumoto M, Wada K, Nakakura T, Kuriyama K, Shirasaka T, Murai T: Neurocognitive impairment and gray matter volume reduction in HIV-infected patients. 「J Neurovirol.」 26(4): P.590-601、2020 年 8 月

Hirota K, Watanabe D, Koizumi Y, Sakanashi D, Ueji T, Nishida Y, Takeda M, Taguri T, Ozawa K, Mikamo H, Shirasaka T, Uehira T: Observational study of skin and soft-tissue Staphylococcus aureus infection in patients infected with HIV-1 and epidemics of Panton-Valentine leucocidin-positive community-acquired MRSA infection in Osaka, Japan. 「J Infect Chemother.」 26(12): P.1254-1259、2020 年 11 月

A-2

西田恭治: 血友病保因者の健康管理「EBM 血液疾患の治療」金倉讓 監修、P.473-474、中外医学社、東京、2021 年 1 月

A-3

中蔵伊知郎、今西嘉生里、廣田和之、坪倉美由紀、上平朝子、宮部貴識、佐光留美、山内一恭: 基質拡張型 β -ラクタマーゼ(ESBLs)産生グラム陰性菌菌血症に対する抗菌薬療法の治療期間とアウトカムに関する検討:単施設後方視的調査「日本化学療法学会雑誌」 68(4): P.539-546、日本化学療法学会、2020 年 7 月 10 日

櫛田宏幸、中内崇夫、矢倉裕輝、渡邊 大、上平朝子、白阪琢磨: HIV-1, HBV 共感染血液透析症例におけるテノホビル血中濃度推移を測定した一症例「感染症学雑誌」印刷中。

A-4

上平朝子: HIV 感染症-Up to date 「大阪透析研究会会誌」 38(1): P.15-20、2020 年

白阪琢磨: ガイドライン改訂の Points DHHS ガイドライン改訂のポイント「HIV 感染症と AIDS の治療」 11(1): P.17-23、メディカルレビュー社、2020 年 11 月

増田 純一、渡邊 大、横幕 能行、四本 美保子: 主要 AIDS 治療拠点病院での HIV 感染症治療の実際「HIV 感染症と AIDS の治療」 11(1): P.78-85、メディカルレビュー社、2020 年 11 月

白阪琢磨: 抗 HIV 薬「治療薬ハンドブック 2021」 P.1406-1432、じほう、2021 年 1 月

西田恭治: 血友病保因者の健康管理「EBM 血液疾患の治療 2021-2022」 P.473-474、中外医学社、2021 年 1 月

矢倉裕輝: Evidence Update 2021 最新の薬物治療のエビデンスを付加的に利用す

る 抗ウイルス薬「薬局」72(1): P.123-126、南山堂、2021年1月

西田恭治：女性血友病「Land-Mark in Thrombosis & Haemostasis」(1): P.39-42、メディカルレビュー社、2021年2月

西田恭治：保因者「日本血栓止血学会誌」32(1): P.33-41、2021年2月

西田恭治：より良いコミュニケーション講座 周産期の包括的なコミュニケーション(保因者検診、父親、家族全体のケアについて)「Frontiers in Haemophilia」8(1)、メディカルレビュー社、2021年3月

A-5

渡邊 大：オピニオンリーダーに聞く最新抗 HIV 治療 患者背景に合わせた抗 HIV 薬 切り替えの考え方。2020年11月

木内 英、谷口俊文、照屋勝治、渡邊 大：HIV 感染症座談会 HIV 感染症治療最前線! 新しい NNRTI ドラビリンの実臨床における位置づけ ～基礎から臨床まで、その可能性をさぐる～。記録集、2020年12月

白阪琢磨：HIV 感染症及びその合併症の課題を克服する研究。厚生労働行政推進調査事業費補助金(エイズ対策政策研究事業)「HIV 感染症及びその合併症の課題を克服する研究」令和2年度研究報告書、2021年3月31日

白阪琢磨：HIV 感染症及びその合併症の課題を克服する研究。厚生労働行政推進調査事業費補助金(エイズ対策政策研究事業)「HIV 感染症及びその合併症の課題を克服する研究」平成30-令和2年度総合研究報告書、2021年3月31日

白阪琢磨：エイズ発症予防に資するための血液製剤による HIV 感染者の調査研究。公益財団法人友愛福祉財団委託事業「エイズ発症予防に資するための血液製剤による HIV 感染者の調査研究」令和2年度報告書、2021年3月31日

上平朝子：大阪医療センターにおける HIV/HCV 重複感染凝固異常患者の検討。厚生労働行政推進調査事業費補助金(エイズ対策政策研究事業)「血液製剤による HIV/HCV 重複感染患者の肝移植に関する研究」令和2年度研究報告書、P.13-15、2021年3月31日

渡邊 大：近畿ブロックの HIV 医療体制整備。厚生労働行政推進調査事業費補助金(エイズ対策政策研究事業)「HIV 感染症の医療体制の整備に関する研究」令和2年度研究報告書、P.64-68、2021年3月31日

安尾利彦、西川歩美、水木薫、森田眞子、富田朋子、宮本哲雄、富成伸次郎：HIV 陽性者の心理的問題点と対策の検討。厚生労働行政推進調査事業費補助金エイズ対策政策研究事業「HIV陽性者に対する精神・心理的支援方策および連携体制構

築に関する研究」令和2年度研究報告書、P.12-17、2021年3月

矢倉裕輝：適正な抗 HIV 療法の実施と HIV 感染症薬物療法認定薬剤師養成等を通じた人材育成－HIV 医療包括ケア体制の整備（薬剤師の立場から）に関する研究－。厚生労働行政推進調査事業費補助金（エイズ対策政策研究事業）「HIV 感染症の医療体制の整備に関する研究」令和 2 年度研究報告書、P.100-105、2021 年 3 月 31 日

安尾有加：エイズ診療拠点病院と在宅あるいは福祉施設の連携に関する研究。厚生労働行政推進調査事業費補助金（エイズ対策政策研究事業）「HIV 感染症及びその合併症の課題を克服する研究」令和 2 年度研究報告書、2021 年 3 月 31 日

安尾有加：エイズ診療拠点病院と在宅あるいは福祉施設の連携に関する研究。厚生労働行政推進調査事業費補助金（エイズ対策政策研究事業）「HIV 感染症及びその合併症の課題を克服する研究」平成 30-令和 2 年度総合研究報告書、2021 年 3 月 31 日

A-6

長江千愛，西田恭治，佐道俊幸：保因者・女性血友病。Frontiers in Haemophilia 7(1): P4-12、メディカルレビュー社、2020 年 4 月

白阪琢磨：HIV 治療の現在（第 1～3 回）。『中学保健ニュース』『高校保健ニュース』付録、株式会社少年写真新聞社、2020 年 6 月 28 日、8 月 28 日、9 月 28 日

安尾利彦：ちょっと立ち止まって、自分自身のことを見つめてみませんか-カウンセリングのご紹介-。NPO 法人日本 HIV 陽性者ネットワーク・ジャンププラスニュースレター43号、P.4-5、2020 年 7 月

白阪琢磨：HIV 感染症の治療の現在。『高校保健ニュース』、株式会社少年写真新聞社、2020 年 11 月 8 日

白阪琢磨，山内一恭，小林恭子，松尾友香，羽田かおる：密な職種間連携で適正な治験と臨床研究を実現する「臨床研究推進室」。Medical Network No. 34 P.10-13、田辺三菱製薬、2020 年 11 月

白阪琢磨：HIV の新常識、適切な治療続ければ「感染しない」。朝日新聞、2020 年 12 月 1 日

白阪琢磨：HIV 新常識、治療すればうつさない 世界エイズデー。朝日新聞 DIGITAL、2020 年 12 月 1 日

B-2

Bessho H, Tanaka S, Ishihara A, Watanabe D, Uehira T, Ishida H, Shirasaka T, Mita E:

Effectiveness of hepatitis A vaccination in human immunodeficiency virus-infected men who have sex with men during an outbreak of hepatitis A in Osaka, Japan. The Digital International Liver Congress, Digital, 27-29 Aug 2020

Anand T, Nitpolprasert C, Shirasaka T, Iwatani Y, Yokomaku Y, Imahashi M, Kaneko N, Iwahashi K, Ikushima Y, Aoki R, Ishida T, Shiono S, Yamaguchi M, Takemura K, Iwamoto A. HIV prevention among MSM in Japan: current opinions on achieving the first 90 among Japanese MSM. HIV Glasgow 2020, Virtual Meeting, 5-8 Oct 2020

B-3

渡邊 大 : 50 分で Catch up できる HIV 治療の現在と臨床で直面する今日の課題。第 94 回日本感染症学会総会・学術講演会、東京、2020 年 8 月 21 日

白阪琢磨 : U=U を陽性者に伝える、社会に伝えることについて。第 34 回日本エイズ学会学術集会・総会、WEB 開催、2020 年 11 月 27 日

西田恭治 : 世界の血友病事情－WFH の報告を踏まえて－。第 34 回日本エイズ学会学術集会・総会、WEB 開催、2020 年 11 月 27 日

白阪琢磨 : ガイドラインの位置づけと期待。第 34 回日本エイズ学会学術集会・総会、東京・WEB、2020 年 11 月 28 日

渡邊 大 : With/After COVID-19 時代の ART の New Normal。第 34 回日本エイズ学会学術集会・総会、WEB 開催、2020 年 11 月 28 日

矢倉裕輝 : 血液凝固因子製剤投与に伴う凝固因子活性の動態把握の意義と薬剤師の役割。第 34 回日本エイズ学会学術集会・総会、WEB 開催、2020 年 11 月 28 日

白阪琢磨 : HIV 感染症と AIDS の治療の手引き「What's New」。第 34 回日本エイズ学会学術集会・総会、WEB 開催、2020 年 11 月 29 日

矢倉裕輝 : 抗 HIV 薬の忍容性と将来性を見据えたレジメンマネジメントーリルピビリン/オデフシイの可能性－。第 34 回日本エイズ学会学術集会・総会、WEB 開催、2020 年 11 月 29 日

井上洋士、山中 晃、矢倉裕輝 : 長期療養時代にある ART と服薬アドヒアランスの再考。第 34 回日本エイズ学会学術集会・総会、WEB 開催、2020 年 11 月 29 日

白阪琢磨 : HIV/AIDS に関連した医薬品の承認審査について－医師の立場から－。第 34 回日本エイズ学会学術集会・総会、WEB 開催、2020 年 11 月 27 日-12 月 25 日

上平朝子 : 抗 HIV 治療の開始時期・薬剤の選択。第 34 回日本エイズ学会学術集

会・総会、WEB 開催、2020 年 11 月 27 日-12 月 25 日

渡邊 大：HIV 診療における薬物相互作用。第 34 回日本エイズ学会学術集会・総会、WEB 開催、2020 年 11 月 27 日-12 月 25 日

渡邊 大：CAB/RPV など注射製剤の将来的なポジショニングについて。第 34 回日本エイズ学会学術集会・総会、WEB 開催、2020 年 11 月 27 日-12 月 25 日

岡本 学：社会福祉制度とは？HIV では何を利用できるのか？。第 34 回日本エイズ学会学術集会・総会、WEB 開催、2020 年 11 月 27 日-12 月 25 日

西田恭治：血友病周産期を取り巻く課題。第 30 回日本産婦人科新生児血液学会、WEB 開催、2020 年 12 月 21-26 日

西田恭治：保因者の現状と課題。第 30 回日本産婦人科新生児血液学会学術集会、WEB 開催、2020 年 12 月 21-26 日

B-4

中内崇夫、矢倉裕輝、櫛田宏幸、井上敦介、宮部貴識、上平朝子、白阪琢磨、山内一恭：当院における抗 HIV 療法施行中患者のポリファーマシーに関する調査。第 74 回国立病院総合医学会、WEB 開催、2020 年 10 月 17 日-11 月 14 日

櫛田宏幸、中内崇夫、矢倉裕輝、井上敦介、宮部貴識、山内一恭：HIV 感染症患者におけるシスタチン C とクレアチニンを用いた腎機能評価の検討。第 74 回国立病院総合医学会、WEB 開催、2020 年 10 月 17 日-11 月 14 日

矢倉裕輝、櫛田宏幸、渡邊大、中内崇夫、西田恭治、井上敦介、宮部貴識、上平朝子、白阪琢磨、山内一恭：日本人 HIV-1 感染者におけるビクテグラビルの血漿中トラフ濃度に関する検討。第 74 回国立病院総合医学会、WEB 開催、2020 年 10 月 17 日-11 月 14 日

野村悠樹、杉山 文、阿部夏音、今田寛人、Rakhimov Anvarion、Tuychiev Sherzad、秋田智之、鹿野千治、喜多村祐里、白阪琢磨、田中純子：広島市・大阪市の献血ルーム来訪者における複数回献血者の特徴と地域差の検討。第 79 回日本公衆衛生学会総会、WEB 開催、2020 年 10 月 20-22 日

白阪琢磨、橋本修二、川戸美由紀、大金美和、岡本 学、瀧永博之、日笠 聡、福武勝幸、八橋 弘、岡 慎一：血液製剤による HIV 感染者の調査成績（第 1 報）健康状態と生活状況の概要。第 34 回日本エイズ学会学術集会・総会、WEB 開催、2020 年 11 月 27 日-12 月 25 日

川戸美由紀、橋本修二、大金美和、岡 慎一、岡本 学、瀧永博之、日笠 聡、福武勝幸、八橋 弘、白阪琢磨：血液製剤による HIV 感染者の調査成績（第 2 報）

未発症者の生活状況とその推移。第 34 回日本エイズ学会学術集会・総会、WEB 開催、2020 年 11 月 27 日-12 月 25 日

佐保美奈子、古山美穂、高 知恵、山田加奈子、工藤里香、立花久裕、岡本友子、立花久裕、豊島裕子、大野典子、白阪琢磨：HIV サポートリーダー養成研修 10 年間の成果と展望。第 34 回日本エイズ学会学術集会・総会、WEB 開催、2020 年 11 月 27 日-12 月 25 日

渡邊 大、矢倉裕輝、榊田智仁、廣田和之、上地隆史、中内崇夫、櫛田宏幸、西田恭治、上平朝子、白阪琢磨：当院におけるビクテグラビル・テノホビルアラフェナミド・エムトリシタビン配合錠の処方例に関する検討。第 34 回日本エイズ学会学術集会・総会、WEB 開催、2020 年 11 月 27 日-12 月 25 日

川畑拓也、伊禮之直、真栄田哲、 崎原永辰、仲宗根正、仁平 稔、 久高 潤、渡邊 大、大森亮介、 駒野 淳、阪野文哉、森 治代、本村和嗣：健康診断機会を利用した HIV・梅毒検査の提供。第 34 回日本エイズ学会学術集会・総会、WEB 開催、2020 年 11 月 27 日-12 月 25 日

菊地 正、蜂谷敦子、西澤雅子、椎野禎一郎、俣野哲朗、佐藤かおり、豊嶋崇徳、伊藤俊広、林田庸総、瀧永博之、岡 慎一、古賀道子、長島真美、貞升健志、近藤真規子、宇野俊介、谷口俊文、猪狩英俊、寒川 整、中島秀明、吉野友祐、堀場昌英、茂呂 寛、渡邊珠代、今橋真弓、松田昌和、重見 麗、岡崎玲子、岩谷靖雅、横幕能行、渡邊 大、小島洋子、森 治代、藤井輝久、高田清式、中村麻子、南 留美、山本政弘、松下修三、健山正男、藤田次郎、杉浦 互、吉村 和：国内新規 HIV/AIDS 診断症例における薬剤耐性 HIV-1 の動向。第 34 回日本エイズ学会学術集会・総会、WEB 開催、2020 年 11 月 27 日-12 月 25 日

矢倉裕輝、中内崇夫、櫛田宏幸、榊田智仁、廣田和之、上地隆史、渡邊 大、西田恭治、上平朝子、白阪琢磨：日本人 HIV-1 感染者におけるビクテグラビルの血漿中濃度に関する検討 第 1 報。第 34 回日本エイズ学会学術集会・総会、WEB 開催、2020 年 11 月 27 日-12 月 25 日

櫛田宏幸、中内崇夫、矢倉裕輝、榊田智仁、廣田和之、上地隆史、渡邊 大、西田恭治、上平朝子、白阪琢磨：日本人のテノホビルアラフェナミド服用における推定糸球体ろ過量低下症例についての検討。第 34 回日本エイズ学会学術集会・総会、WEB 開催、2020 年 11 月 27 日-12 月 25 日

中内崇夫、矢倉裕輝、櫛田宏幸、榊田智仁、廣田和之、上地隆史、渡邊 大、西田恭治、上平朝子、白阪琢磨：初回治療としてインテグラーゼ阻害剤を使用した患者の血清尿酸値の変動に関する要因についての検討。第 34 回日本エイズ学会学術集会・総会、WEB 開催、2020 年 11 月 27 日-12 月 25 日

増田純一、関根祐介、國本雄介、矢倉裕輝、平野 淳、日笠真一、築地茉莉子、石

原正志、岩崎 藍、押賀充則、又村了輔、櫛田宏幸、福島直子、島袋翔多、沼田理子、川口 崇、山口拓洋、天野景裕、岡 慎一、白阪琢磨：抗 HIV 療法における意思決定とアドヒアランスに関する多施設共同研究(DEARS-J study)。第 34 回日本エイズ学会学術集会・総会、WEB 開催、2020 年 11 月 27 日-12 月 25 日

若林チヒロ、池田和子、杉野祐子、谷口 紅、中濱智子、東 政美、生島 嗣：HIV 陽性者の基本的属性 — 「HIV 陽性者の健康と生活に関する全 国調査」の結果から（第 1 報）。第 34 回日本エイズ学会学術集会・総会、WEB 開催、2020 年 11 月 27 日-12 月 25 日

中濱智子、東 政美、池田和子、杉野祐子、谷口 紅、生島嗣、若林チヒロ、渡邊大、上平朝子：HIV 陽性者の情報の Up date における課題～「HIV 陽性者の健康と生活に関する全国調査」の結果から（第 2 報）。第 34 日本エイズ学会学術集会、WEB 開催、2020 年 11 月 27 日-12 月 25 日

東 政美、中濱智子、渡邊 大、上平朝子、池田和子、杉野祐子、谷口 紅、生島 嗣、若林チヒロ：高齢化への対応と介護について「HIV 陽性者の健康と生活に関する全国調査」の結果から（第 3 報）。第 34 回日本エイズ学会学術集会、WEB 開催、WEB 開催、2020 年 11 月 27 日-12 月 25 日

杉野祐子、谷口 紅、池田和子、青木孝弘、田沼順子、中濱智子、東 政美、生島 嗣、若林チヒロ：HIV 陽性者の併存疾患と受診行動 — 「HIV 陽性者の健康と生活に関する全 国調査」の結果から（第 4 報）。第 34 回日本エイズ学会学術集会・総会、WEB 開催、2020 年 11 月 27 日-12 月 25 日

谷口 紅、杉野祐子、中濱智子、東 政美、池田和子、青木孝弘、田沼順子、生島 嗣、若林チヒロ：HIV 陽性者の病名開示 — 「HIV 陽性者の健康と生活に関する全 国調査」の結果から（第 5 報）。第 34 回日本エイズ学会学術集会・総会、WEB 開催、2020 年 11 月 27 日-12 月 25 日

池田和子、杉野祐子、谷口 紅、中濱智子、東 政美、青木孝弘、田沼順子、生島 嗣、若林チヒロ：薬害被害者の精神健康 ～ 「HIV 陽性者の健康と生活に関する全 国調査」の結果から（第 6 報）～ 。第 34 回日本エイズ学会学術集会・総会、WEB 開催、2020 年 11 月 27 日-12 月 25 日

安尾利彦、西川歩美、水木 薫、神野未佳、富成伸次郎、白阪琢磨：HIV 陽性者を含む慢性疾患患者の行動と心理に関する研究。第 34 回日本エイズ学会学術集会総会、WEB 開催、2020 年 11 月 27 日-12 月 25 日

水木 薫、安尾利彦、森田眞子、富田朋子、宮本哲雄、西川歩美、牧 寛子、神野未佳、白阪琢磨：初診 HIV 陽性者を対象とした心理スクリーニングに関する研究。第 34 回日本エイズ学会学術集会・総会、WEB 開催、2020 年 11 月 27 日-12 月 25 日

山田富秋、早川典生、橋本 謙、種田博之、小川良子、入江恵子、宮本哲雄：薬害被害者の「感染」の心理社会的意味。第 34 回日本エイズ学会学術集会・総会、WEB 開催、2020 年 11 月 27 日-12 月 25 日

松山亮太、渡邊 大、土橋西紀、鍵浦文子、加納和彦、高橋琢理、松井佑亮、白阪琢磨、砂川富正、梯正之：CD4 細胞数データとインシデンス法を利用した日本における HIV 感染者数の推定。第 31 回日本疫学会学術総会、WEB 開催、2021 年 1 月 28 日

B-7

渡邊 大：新たな 2 剤療法開幕～耐性への知見を踏まえて～。HIV 講演会-新しい時代の治療を考える-、大阪、2020 年 8 月 8 日

B-8

白阪琢磨：「抗 HIV 治療ガイドライン」UP TO DATE。HIV インターネット講演会、大阪、2020 年 6 月 8 日

上平朝子：HIV 感染症。関西医科大学「感染症コース」講義、枚方、2020 年 6 月 12 日

西田恭治：血友病とわが国における診療体制。第 1 回血友病講演会（大阪）、大阪、2020 年 6 月 24 日

白阪琢磨：概論。2020 年度大阪大学医学部環境医学・公衆衛生学実習、大阪、2020 年 7 月 2 日

上平朝子：COVID-19 感染対策。2020 年度第 1 回院内定期講演会（感染制御部）、大阪、2020 年 7 月 9 日

渡邊 大：HIV 感染症の診断。2020 年度大阪大学医学部環境医学・公衆衛生学実習、大阪、2020 年 7 月 9 日

櫛田宏幸：HIV と服薬指導。2020 年度大阪大学医学部環境医学・公衆衛生学実習、大阪、2020 年 7 月 9 日

白阪琢磨：日本および海外における HIV 治療ガイドライン。Medical Education Webinar「HIV 治療ガイドラインを紐解く」、大阪、2020 年 7 月 17 日

上平朝子：新型コロナウイルス感染症の概要。大阪市感染対策支援ネットワーク東ブロック研修会、大阪、2020 年 7 月 28 日

白阪琢磨：HIV/エイズの歴史と日本の HIV 医療体制。エイズ予防財団令和 2 年度 HIV/エイズ基礎研修会、大阪、2020 年 7 月 31 日

西田恭治：定期補充療法を継続するために大切なこと。血友病 B 誌上座談会「血友病 B 患者が継続できる定期補充療法を考える」、大阪、2020 年 8 月 2 日

矢倉裕輝：患者さんで行う治療マネジメント～PK 測定ツールの有効性～。血友病 PK 可視化 WEB セミナー、WEB 開催、2020 年 8 月 26 日

森田眞子：HIV とカウンセリング。2020 年度大阪大学医学部環境医学・公衆衛生学実習、大阪、2020 年 9 月 3 日

岡本 学：HIV とソーシャルワーク。2020 年度大阪大学医学部環境医学・公衆衛生学実習、大阪、2020 年 9 月 3 日

白阪琢磨：ヒト免疫不全ウイルス（HIV）。大阪医療センター附属看護学校講義、大阪、2020 年 9 月 9 日

矢倉裕輝：PK 測定の重要性 ～薬剤師の立場から～。多職種連携血友病診療セミナー、WEB 開催、2020 年 9 月 9 日

東 政美：HIV 陽性者の外来支援。2020 年度大阪大学医学部環境医学・公衆衛生学実習、大阪、2020 年 9 月 10 日

中濱智子：陽性妊婦の看護支援。2020 年度大阪大学医学部環境医学・公衆衛生学実習、大阪、2020 年 9 月 10 日

西田恭治：血友病と薬害エイズ。2020 年度大阪大学医学部環境医学・公衆衛生学実習、大阪、2020 年 9 月 17 日

上平朝子：HIV 針刺し暴露後予防。2020 年度大阪大学医学部環境医学・公衆衛生学実習、大阪、2020 年 9 月 17 日

白阪琢磨：HIV 陽性者の人権課題～HIV、AIDS 等の現状と課題～。大阪府人権総合講座（前期）人権問題科目、大阪、2020 年 9 月 30 日

白阪琢磨：HIV の最新治療。厚生科研エイズ対策研究事業 第 21 回 HIV サポートリーダー養成研修、WEB 開催、2020 年 10 月 2 日

矢倉裕輝：薬剤選択の現状と服薬支援の実際。HIV インターネット講演会、WEB 開催、2020 年 10 月 6 日

廣田和之：STD（性行為感染症）の診断。2020 年度奈良県立医科大学健康政策医学実習、大阪、2020 年 10 月 13 日

上平朝子：HIV 感染症の基礎知識。2020 年度奈良県立医科大学健康政策医学実習、

大阪、2020年10月13日

渡邊 大：HIV感染症の診断。2020年度奈良県立医科大学健康政策医学実習、大阪、2020年10月14日

東 政美：HIV陽性者の看護支援。2020年度奈良県立医科大学健康政策医学実習、大阪、2020年10月14日

岡本 学：地域で暮らす HIV 陽性者の療養生活を支える～医療ソーシャルワーカーにできること～。2020年度奈良県立医科大学健康政策医学実習、大阪、2020年10月14日

上平朝子：事例紹介。2020年度奈良県立医科大学健康政策医学実習、大阪、2020年10月15日

森田眞子：HIV感染症と心理支援。2020年度奈良県立医科大学健康政策医学実習、大阪、2020年10月15日

中内崇夫：薬剤師の役割と服薬指導。2020年度奈良県立医科大学健康政策医学実習、大阪、2020年10月15日

西田恭治：薬害 HIV。2020年度奈良県立医科大学健康政策医学実習、大阪、2020年10月15日

中濱智子：HIV陽性妊婦の看護支援。2020年度奈良県立医科大学健康政策医学実習、大阪、2020年10月15日

白阪琢磨：HIV感染症の疫学。2020年度奈良県立医科大学健康政策医学実習、大阪、2020年10月16日

白阪琢磨：HIV感染症治療と最新情報。MERS 2020年度相談員研修会、大阪、2020年10月18日

白阪琢磨：HIV感染者における新型コロナウイルス感染症の留意点。MERS 2020年度相談員研修会、大阪、2020年10月18日

白阪琢磨：最新の ART の動向とビクタルビ配合錠の臨床的位置づけ～COVID-19流行から学ぶ服薬支援の New Normal とは～。Gilead Infectious Disease Virtual Symposium 2020、大阪、2020年10月27日

矢倉裕輝：薬剤師の血友病診療への関わりの重要性、全国 WEB 講演会、WEB 開催、2020年10月28日

矢倉裕輝、中濱智子、岡本学：血友病患者さんの QOL 向上を目指したチーム医療。全国 Web 講演会、WEB 開催 大阪、2020 年 10 月 28 日

白阪琢磨：疫学と抗 HIV 治療ガイドライン。令和 2 年度 HIV 感染症研修会、大阪、2020 年 11 月 2 日

渡邊 大：HIV 感染症の診断。令和 2 年度 HIV 感染症研修会、大阪、2020 年 11 月 2 日

櫛田宏幸：抗 HIV 薬の特徴と薬剤師の役割。令和 2 年度 HIV 感染症研修会、大阪、2020 年 11 月 2 日

渡邊 大、矢倉裕輝：抗 HIV 療法の実際。令和 2 年度 HIV 感染症研修会、大阪、2020 年 11 月 2 日

西田恭治：血友病診療・凝固因子製剤の使い方。令和 2 年度 HIV 感染症研修会、大阪、2020 年 11 月 2 日

岡本 学：HIV 感染者に対するソーシャルワーク。令和 2 年度 HIV 感染症研修会、大阪、2020 年 11 月 2 日

渡邊 大：日和見感染症（PCP）。令和 2 年度 HIV 感染症研修会、大阪、2020 年 11 月 3 日

上平朝子：免疫再構築症候群。令和 2 年度 HIV 感染症研修会、大阪、2020 年 11 月 2 日
大阪、2020 年 11 月 3 日

中濱智子、岡本学、中内崇夫、西川歩美：症例検討（他職種との連携）。令和 2 年度 HIV 感染症研修会、大阪、2020 年 11 月 3 日

上平朝子：針刺し暴露後対策。令和 2 年度 HIV 感染症研修会、大阪、2020 年 11 月 3 日

中濱智子：外来・病棟看護と療養支援。令和 2 年度 HIV 感染症研修会、大阪、2020 年 11 月 3 日

安尾利彦：HIV とカウンセリング。令和 2 年度 HIV 感染症研修会、大阪、2020 年 11 月 3 日

白阪琢磨：現代的健康課題－HIV/エイズや性感染症等について－。大阪府令和 2 年度新規採用養護教諭研修（第 10 回）、大阪、2020 年 11 月 5 日

上平朝子：COVID-19 感染対策～今冬のインフルエンザ対策に備えて。2020 年度第 2 回院内定期講演会（感染管理）、大阪、2020 年 11 月 5 日

西田恭治：HIV/AIDS の背景：薬害エイズについて。令和 2 年度 HIV/AIDS 看護師研修初心者コース、大阪、2020 年 11 月 9 日

渡邊 大：HIV/AIDS の基礎知識：HIV 感染症・抗体検査・日和見疾患・治療。令和 2 年度 HIV/AIDS 看護師研修初心者コース、大阪、2020 年 11 月 9 日

中濱智子：HIV/AIDS の概要：歴史・動向。令和 2 年度 HIV/AIDS 看護師研修初心者コース、大阪、2020 年 11 月 9 日

櫛田宏幸：薬剤師の役割と服薬指導。令和 2 年度 HIV/AIDS 看護師研修初心者コース、大阪、2020 年 11 月 9 日

東 政美：HIV 陽性者の看護と療養支援：外来受診者の動向・外来療養支援の実際。令和 2 年度 HIV/AIDS 看護師研修初心者コース、大阪、2020 年 11 月 10 日

東 政美：HIV 陽性者の看護②：HIV 陽性者の療養支援における課題。令和 2 年度 HIV/AIDS 看護師研修初心者コース、大阪、2020 年 11 月 10 日

森田眞子：HIV 陽性者の心理的支援。令和 2 年度 HIV/AIDS 看護師研修初心者コース、大阪、2020 年 11 月 10 日

岡本 学：社会資源の活用。令和 2 年度 HIV/AIDS 看護師研修初心者コース、大阪、2020 年 11 月 10 日

HIV 診療チーム（医師、HIV コーディネーター、薬剤師、MSW、臨床心理士）：HIV 陽性者の③チーム医療：チーム医療の実際。令和 2 年度 HIV/AIDS 看護師研修初心者コース、大阪、2020 年 11 月 10 日

上平朝子：HIV 感染症－治療の進歩と病診連携。大阪府医師会令和 2 年度 HIV 医療講習会、大阪、2020 年 11 月 13 日

西田恭治：世界の血友病事情のいま－WFH の報告を踏まえて－。Hemophilia A Update Webinar（サノフィ）、大阪、2020 年 11 月 13 日

廣田和之：インフルエンザの診療と感染対策～With COVID-19～。2020 年度 ICT・感染制御部主催研修会、大阪、2020 年 11 月 13 日

矢倉裕輝：血友病患者さんのより良い生活のために～薬剤師の立場から～。大阪血友病フォーラム、WEB 開催、2020 年 11 月 14 日

櫛田宏幸：抗 HIV 薬 uptodate2020、2020 年度第 1 回関西臨床カンファレンス薬剤師部会、WEB 開催、2020 年 11 月 14 日

矢倉裕輝：論文を書こう！。第 34 回日本エイズ学会学術集会・総会 HIV 感染症薬物療法認定・専門薬剤師認定講習会「目指せ！HIV 感染症薬物療法認定・専門薬剤師～薬剤師スキルアップ～」、WEB 開催、2020 年 11 月 27 日-12 月 25 日

西田恭治：取り残された血友病保因者問題。大阪南 血友病治療講演会、大阪、2020 年 12 月 3 日

中濱智子：血友病診療における看護師の役割について。大阪南 血友病治療講演会、WEB 開催、2020 年 12 月 3 日

西田恭治：血友病包括医療 2021 の実践。New Generation～血友病治療 新たな一歩～、WEB 開催、2020 年 12 月 14 日

西田恭治：血友病診療におけるチーム医療の重要性と薬剤師への期待。薬剤師のための血友病 WEB セミナー、WEB 開催、2020 年 12 月 15 日

矢倉裕輝：血友病診療における薬剤師の役割～病院薬剤師の立場から～。薬剤師のための血友病 Web セミナー、WEB 開催、2020 年 12 月 15 日

安尾利彦：事例提供。近畿ブロック HIV 医療におけるカウンセリング研修会、大阪、2020 年 12 月 18 日

白阪琢磨：公衆衛生看護学 I。2020 年度大阪府立大学看護学類講義、WEB 開催、2020 年 12 月 22 日

西田恭治：取り残された血友病保因者問題。埼玉周産期血友病検討会、大阪、2020 年 12 月 22 日

矢倉裕輝：長期療養時代における薬物治療マネジメントと薬剤師の関わり。北関東甲信 HIV/AIDS 薬剤師連絡会議、新潟、WEB 開催、2020 年 12 月 26 日

西田恭治：長期療養時代の HIV 感染血友病医療-新たな治療選択-。Hemophilia Meet the Expert in 仙台、WEB 開催、2021 年 1 月 23 日

東 政美：血友病患者の療養支援における連携の実際。第 3 回近畿 Hemophilia Seminar①～チーム医療～、WEB 開催、2021 年 1 月 28 日

櫛田宏幸：血友病治療における包括ケアの検討。hemophilia total care and team therapy、WEB 開催、2021 年 1 月 31 日

西田恭治：血友病医療連携 2021 の実践。第 3 回近畿 Hemophilia オンラインセミナー part 3、WEB 開催、2021 年 2 月 9 日

西田恭治：取り残された血友病保因者問題。第 3 回 Osaka 血友病カンファレンス、WEB 開催、2021 年 2 月 18 日

森田眞子：「服薬支援～カウンセラーの視点から」、服薬支援ロールプレイ指導。HIV 感染症薬物療法認定薬剤師養成研修、大阪、2021 年 2 月 18 日

西田恭治：取り残された血友病保因者問題－医者は気付きを、保因者は自覚を－。第 11 回北関東ヘモフィリア研究会、WEB 開催、2021 年 2 月 26 日

矢倉裕輝：血友病患者さんの QOL 維持・向上に必要な医療関係者が取り組むべきこと（薬剤師の観点から）。Academy for Integrated Patient Care Conference for Rare Diseases 患者中心の医療を実現するために Following the 2020 Patients Voice、WEB 開催、2021 年 2 月 27 日

上平朝子：HIV 感染症の感染対策。2020 年度 ICT・感染制御部主催研修会、大阪、2021 年 3 月 12 日

渡邊 大：HIV 治療の新たな選択肢、発売から 1 年を経て－Real World での有用性－。HIV Specialist Web セミナー、WEB 開催、2021 年 3 月 17 日

B-9

白阪琢磨：ラジオ小学校。エフエム大阪開局 50 周年記念 50 時間特別番組「LAUGH & MUSIC RADIO」、大阪、2020 年 4 月 1 日

白阪琢磨：おしえて！しらさか先生。FM 大阪ラジオ「hug+（ハグタス）」、大阪、2020 年 4 月 24 日

白阪琢磨：新型コロナウイルスについて①。FM 大阪ラジオ「HIV/AIDS 啓発プロジェクト LOVE+RED」、大阪、2020 年 5 月 5 日

白阪琢磨：新型コロナウイルスについて。FM 大阪ラジオ「シャンプーハットこいでの Friday Music Show（笑）」、大阪、2020 年 5 月 8 日

白阪琢磨：新型コロナウイルスについて②。FM 大阪ラジオ「HIV/AIDS 啓発プロジェクト LOVE+RED」、大阪、2020 年 5 月 12 日放送

白阪琢磨：新型コロナウイルスについて③。FM 大阪ラジオ「HIV/AIDS 啓発プロジェクト LOVE+RED」、大阪、2020 年 9 月 15 日

白阪琢磨：新型コロナウイルスについて④。FM 大阪ラジオ「HIV/AIDS 啓発プロ

プロジェクト LOVE+RED」、大阪、2020年9月22日

白阪琢磨：感染症アップデート。FM 大阪ラジオ「HIV/AIDS 啓発プロジェクト LOVE+RED」、大阪、2020年10月20日

HIV 感染制御研究室

室長 渡邊 大

当研究室は、白阪琢磨が室長を兼任しているエイズ先端医療開発室と共同で、HIV 感染症の診療における多く問題に対して研究を行っております。

近年の抗 HIV 療法の進歩により、多くの症例でウイルス抑制が得られるようになりました (Jpn J Infect Dis. 2017)。しかし、潜伏感染細胞を駆逐できないが故に、一生の内服加療を強いられます。我々は潜伏感染細胞数に相当する残存プロウイルス量の高感度の測定法の開発を行い、早期に治療を開始した症例では残存プロウイルス量が低く抑えられていることを明らかにしました (BMC Infect Dis. 2011)。抗 HIV 療法によって長期間、ウイルス抑制が得られたとしても、免疫系は改善に回復したわけではありません。ウイルス抑制となった症例においても血中インターフェロン γ が持続的に高値を示す症例 (Viral Immunol. 2010) が存在し、それらの症例では CD4 数の回復が不十分であること (BMC Infect Dis. 2019) を報告しました。抗 HIV 薬の副作用の課題も残されています。テノホビル DF によって血中ミトコンドリア CK 活性が上昇すること (J Infect Chemother. 2012)、ドルテグラビルの神経精神系有害事象はその血中濃度や UGT1A1 遺伝子多型と関連すること (BMC Infect Dis. 2017)、ドルテグラビル投与例における腎機能評価が困難であること (J Infect Chemother. 2018)、ddI の長期内服に伴う非硬性門脈圧亢進症を呈した症例 (J Infect Chemother. 2014) を報告しました。

薬剤耐性検査や薬剤血中濃度は HIV 感染者の治療において欠かすことのできない検査です。当研究室ではこれらに関する研究も行っております (Antiviral Res. 2010, J Infect Chemother. 2015, Inter Med. 2016)。

抗 HIV 療法以外にも、さまざまな課題が残されています。急性 HIV 感染症 (AIDS Res Ther. 2015)、ヒトヘルペスウイルス 8 型感染症 (J Infect Chemother. 2017, Inter Med. 2014)、帯状疱疹 (J Med Virol. 2013) 急性 A 型肝炎 (Hepatol Res. 2019)、悪性リンパ腫 (J Clin Immunol. 2018)、市中感染型 MRSA 感染 (J Infect Chemother. 2020)、脳構造への影響 (J Neurovirol. 2020) などがあげられます。当研究室では、厚生労働省エイズ対策研究事業を中心に、この病態における問題点の解明に取り組み、多施設共同臨床調査や臨床的課題について取り組んでいます。

【2020 年度 研究発表業績】

Kato T, Yoshihara Y, Watanabe D, Fukumoto M, Wada K, Nakakura T, Kuriyama K, Shirasaka T, Murai T. Neurocognitive impairment and gray matter volume reduction in HIV-infected patients. 「J Neurovirol. 」26(4):590-601、2020 年 8 月

Hirota K, Watanabe D, Koizumi Y, Sakanashi D, Ueji T, Nishida Y, Takeda M, Taguri T, Ozawa K, Mikamo H, Shirasaka T, Uehira T. Observational study of skin and soft-

tissue Staphylococcus aureus infection in patients infected with HIV-1 and epidemics of Panton-Valentine leucocidin-positive community-acquired MRSA infection in Osaka, Japan. 「J Infect Chemother.」 26(12):1254-1259、2020年11月

A-3

増田純一、渡邊 大、横幕能行、四本美保子：主要 AIDS 治療拠点病院での HIV 感染症治療の実際「HIV 感染症と AIDS の治療」 11(1)：P78-85、メディカルレビュー社、2020年11月30日

榎田宏幸、中内崇夫、矢倉裕輝、渡邊 大、上平朝子、白阪琢磨：HIV-1,HBV 共感染血液透析症例におけるテノホビル血中濃度推移を測定した一症例。感染症学雑誌。印刷中。

A-5

渡邊 大：オピニオンリーダーに聞く最新抗 HIV 治療 患者背景に合わせた抗 HIV 薬 切り替えの考え方。2020年11月

木内 英、谷口俊文、照屋勝治、渡邊 大：HIV 感染症座談会 HIV 感染症治療最前線！ 新しい NNRTI ドラビリンの実臨床における位置づけ ～基礎から臨床まで、その可能性をさぐる～。2020年12月

渡邊 大：近畿ブロックの HIV 医療体制整備。厚生労働行政推進調査事業費補助金（エイズ対策政策研究事業）「HIV 感染症の医療体制の整備に関する研究」令和 2 年度研究報告書、P.64-68、2021年3月31日

B-3

渡邊 大：50分で Catch up できる HIV 治療の現在と臨床で直面する今日の課題。第 94 回日本感染症学会総会・学術講演会、東京、2020年8月21日

渡邊 大：With/After COVID-19 時代の ART の New Normal。共催セミナー8。第 34 回日本エイズ学会学術集会・総会、WEB、2020年11月28日

渡邊 大：HIV 診療における薬物相互作用。シンポジウム 4「Drug-Drug Interactions」。第 34 回日本エイズ学会学術集会・総会、WEB、2020年11月27-29日

渡邊 大：CAB/RPV など注射製剤の将来的なポジショニングについて。シンポジウム 22「新規抗 HIV 薬をどのように使い分けるか」。第 34 回日本エイズ学会学術集会・総会、WEB、2020年11月27-29日

B-4

榎田宏幸、中内崇夫、矢倉裕輝、榎田智仁、廣田和之、上地隆史、渡邊 大、西田恭治、上平朝子、白阪琢磨：日本人のテノホビルアラフェナミド服用における推定糸球体ろ過量低下症例についての検討。第 34 回日本エイズ学会学術集会・総

会、WEB、2020年11月28日

矢倉裕輝、中内崇夫、櫛田宏幸、榊田智仁、廣田和之、上地隆史、渡邊 大、西田恭治、上平朝子、白阪琢磨：日本人 HIV-1 感染者におけるビクテグラビルの血漿中濃度に関する検討 第1報。第34回日本エイズ学会学術集会・総会、WEB、2020年11月28日

中内崇夫、矢倉裕輝、櫛田宏幸、榊田智仁、廣田和之、上地隆史、渡邊 大、西田恭治、上平朝子、白阪琢磨：初回治療としてインテグラーゼ阻害剤を使用した患者の血清尿酸値の上昇に関する要因についての検討。第34回日本エイズ学会学術集会・総会、WEB、2020年11月28日

渡邊 大、矢倉裕輝、榊田智仁、廣田和之、上地隆史、中内崇夫、櫛田宏幸、西田恭治、上平朝子、白阪琢磨：当院におけるビクテグラビル・テノホビルアラフェナミド・エムトリシタビン配合錠の処方例に関する検討。第34回日本エイズ学会学術集会・総会、WEB、2020年11月28日

菊地正、蜂谷敦子、西澤雅子、椎野禎一郎、俣野哲朗、佐藤かおり、豊嶋崇徳、伊藤俊広、林田庸総、瀧永博之、岡慎一、古賀道子、長島真美、貞升健志、近藤真規子、宇野俊介、谷口俊文、猪狩英俊、寒川 整、中島秀明、吉野友祐、堀場昌英、茂呂 寛、渡邊珠代、今橋真弓、松田昌和、重見麗、岡崎玲子、岩谷靖雅、横幕能行、渡邊 大、小島洋子、森 治代、藤井輝久、高田清式、中村麻子、南 留美、山本政弘、松下修三、健山正男、藤田次郎、杉浦互、吉村和久：国内新規 HIV/AIDS 診断症例における薬剤耐性 HIV-1 の動向。第34回日本エイズ学会学術集会・総会、WEB、2020年11月28日

川畑拓也、伊禮之直、真栄田 哲、崎原永辰、仲宗根正、仁平 稔、久高 潤、渡邊大、大森亮介、駒野 淳、阪野文哉、森 治代、本村和嗣：健診機会を利用した HIV・梅毒検査の提供。第34回日本エイズ学会学術集会・総会、WEB、2020年11月28日

中濱智子、東 政美、渡邊 大、上平朝子、池田和子、杉野祐子、谷口 紅、生島 嗣、若林チヒロ：HIV 陽性者の情報の Up date における課題 ～「HIV 陽性者の健康と生活に関する全国調査」の結果から（第2報）～。第34回日本エイズ学会学術集会・総会、WEB、2020年11月28日

東 政美、中濱智子、渡邊 大、上平朝子、池田和子、杉野祐子、伊藤 紅、斎藤可夏子、若林チヒロ、生島 嗣：HIV 陽性者の高齢化と介護～「HIV 陽性者の健康と生活に関する全国調査」の結果から（第3報）～。第34回日本エイズ学会学術集会・総会、WEB、2020年11月28日

松山亮太、渡邊 大、土橋西紀、鍵浦文子、加納和彦、高橋琢理、松井佑亮、白阪琢磨、砂川富正、梯正之：CD4 細胞数データとインシデンス法を利用した日本に

おける HIV 感染者数の推定。第 31 回日本疫学会学術総会、WEB、2021 年 1 月 28 日

B-7

渡邊 大：新たな 2 剤療法開幕～耐性への知見を踏まえて～。HIV 講演会～新しい時代の治療を考える～、大阪、2020 年 8 月 8 日

B-8

渡邊 大：HIV 感染症の診断。令和 2 年度大阪大学医学部公衆衛生学実習、大阪、2020 年 7 月 9 日

渡邊 大：HIV 感染症の診断。令和 2 年度 HIV 感染症研修会、大阪、2020 年 11 月 2 日

渡邊 大、矢倉裕輝：抗 HIV 療法の実際。令和 2 年度 HIV 感染症研修会、大阪、2020 年 11 月 2 日

渡邊 大：日和見感染症（PCP）。令和 2 年度 HIV 感染症研修会、大阪、2020 年 11 月 3 日

渡邊 大：HIV 感染症の診断。令和元年度奈良県立医科大学健康政策医学実習、大阪、2020 年 10 月 14 日

渡邊 大：HIV/AIDS の基礎知識：HIV 感染症・抗体検査・日和見疾患・治療。令和元年度 HIV/AIDS 看護師研修初心者コース、大阪、2020 年 11 月 9 日

臨床疫学研究室

室長 三田英治

臨床疫学研究室は主に消化器疾患の病態を分子疫学面から検証し、最適な治療方法や安全性を検討しています。代表的な研究内容を示します。

インターフェロンフリー治療によって C 型肝炎は HCV 排除が期待できる時代になりましたが、残された少数の難治例に対する最適治療法を検討しています。インターフェロンフリー治療は非代償性肝硬変にまで適応が拡大されましたが、肝予備能が低下した症例に投薬するため、死亡例が出ています。より安全に治療できる条件とその有効性を検証しています。同じく心機能低下や腎機能低下症例に対する治療法も検討しています。HIV 感染合併例でのインターフェロンフリー治療の成績もまとめ、論文化しています。

次に B 型肝炎では、核酸アナログの長期投与成績から導かれる耐性化の問題点を検討しています。そしてラミブジン・アデホビル併用療法効果不良例に対し、アデホビルを TDF に切り替えることの有効性と安全性を明らかにしました。現在はさらに TDF から TAF への切り替えを検証しています。近年散発的に発生している B 型急性肝炎では genotype A が大半を占めますが、その特徴を解析し、慢性化への関与についても検討しています。また HIV 感染が B 型急性肝炎の重症度に与える影響についても検討しています。

A 型急性肝炎も MSM を中心に流行しており、その疫学的特徴を報告しました。

肝細胞癌に対する治療では肝動注化学療法に注目し、現在症例の蓄積中です。また分子標的薬と免疫チェックポイント阻害剤との併用も治療選択肢に入りましたので、病状に応じた最適治療の方向性を示していけるよう検討を続けています。

【2020 年度 研究発表業績】

A-0

Myojin Y, Kodama T, Maesaka K, Motooka D, Sato Y, Tanaka S, Abe Y, Ohkawa K, Mita E, Hayashi Y, Hikita H, Sakamori R, Tatsumi T, Taguchi A, Eguchi H, Takehara T : ST6GAL1 is a novel serum biomarker for lenvatinib-susceptible FGF19-driven hepatocellular carcinoma. 「Clinical Cancer Research」 27(4) : P1150-1161、2021 年 2 月 15 日

Maesaka K, Sakamori R, Yamada R, Urabe A, Tahata Y, Oshita M, Ohkawa K, Mita E, Hagiwara H, Tamura S, Ito T, Yakushijin T, Iio S, Kodama T, Hikita H, Tatsumi T, Takehara T : Therapeutic efficacy of lenvatinib in hepatocellular carcinoma patients with portal hypertension. 「Hepatology Research」 50(9) : P1091-1100、2020 年 9 月

Nishimoto N, Sakakibara Y, Nakazuru S, Mori K, Mita E : Multiple Lymphomatous Polyposis Associated with Mucosa-Associated Lymphoid Tissue Lymphoma of the Colon 「ACG Case Reports journal」 8(2) : e00503、2021 年 2 月 26 日

A-2

石田 永、三田英治：外国株（ゲノタイプ B、C 以外）の急性肝炎の場合「困ったウイルス肝炎パーフェクト対応ガイド」竹原徹郎、持田 智 編集、P.60-65、南江堂、東京、2020 年 12 月 10 日

田中聡司、三田英治：A 型肝炎の HIV 重複感染の場合「困ったウイルス肝炎パーフェクト対応ガイド」竹原徹郎、持田 智 編集、P.172-175、南江堂、東京、2020 年 12 月 10 日

A-3

西本奈穂、榊原祐子、石田 永、石原朗雄、田中聡司、長谷川裕子、山本俊祐、中水流正一、森 清、三田英治：肺腺癌を合併した寛解期の潰瘍性大腸炎患者にペムブロリズマブ投与し、重篤な腸炎が誘発された一例「日本消化器病学会誌」2021 年 1 月 accept

東 瀬菜、田中聡司、津室 悠、西村祐子、河本泰治、別所宏紀、石原朗雄、長谷川裕子、山本俊祐、赤坂智史、榊原祐子、中水流正一、石田 永、三田英治：S 状結腸憩室穿孔が周囲膿瘍形成を来し、Fusobacterium 肝膿瘍を合併した 1 例「肝臓」2020 年 11 月 accept

河本泰治、榊原祐子、石田 永、長谷川裕子、赤坂智史、中水流正一、田中玲子、宮崎道彦、三田英治：大腸全摘術後に特発性血小板減少性紫斑病を合併した潰瘍性大腸炎の 1 例「日本消化器病学会雑誌」117(12)：P1073-1080、2020 年 12 月 10 日

河本泰治、田中聡司、津室 悠、西村祐子、清木祐介、西本奈穂、早田菜保子、宮崎哲郎、東 瀬菜、別所宏紀、石原朗雄、長谷川裕子、山本俊祐、赤坂智史、榊原祐子、中水流正一、石田 永、三田英治：B 型慢性肝炎の加療中に発見された肝腫瘍で肝細胞癌との鑑別が困難であった肝脾濾胞性リンパ腫の一例「肝臓」2020 年 10 月 accept

B-4

西本奈穂、石原朗雄、清木祐介、早田菜保子、宮崎哲郎、河本泰治、東 瀬菜、別所宏紀、平尾 建、藤井祥史、岩崎哲也、田中聡司、長谷川裕子、赤坂智史、榊原祐子、中水流正一、石田 永、三田英治：乳癌治療経過中に急速に進行する肝不全をきたし死亡した一例。第 56 回日本肝臓学会総会、大阪、2020 年 8 月 28-29 日

藤井祥史、石田 永、石原朗雄、岩崎哲也、田中聡司、長谷川裕子、赤坂智史、榊原祐子、中水流正一、野田剛広、疋田隼人、阪森亮太郎、東原大樹、江口英利、竹原徹郎、三田英治：発達した傍食道静脈を伴う再発性食道静脈瘤に対し経回結腸静脈的塞栓術を行い良好にコントロールできた一例。第 56 回日本肝臓学会総会、大阪、2020 年 8 月 28-29 日

松尾剛明、田中聡司、清木祐介、西本奈穂、早田菜保子、宮崎哲郎、岩崎哲也、石原朗雄、長谷川裕子、赤坂智史、榊原祐子、中水流正一、石田 永、三田英治：HIV 感染に気付かずラミブジンを導入したため HIV 耐性変異を生じた B 型慢性肝炎の 1 例。第 56 回日本肝臓学会総会、大阪、2020 年 8 月 28-29 日

清木祐介、石原朗雄、西本奈穂、宮崎哲郎、早田菜保子、河本泰治、東瀬菜、平尾建、別所宏紀、藤井祥史、岩崎哲也、田中聡司、長谷川裕子、赤坂智史、榊原祐子、中水流正一、石田 永、三田英治：S 状結腸憩室炎の穿破・膿瘍形成から肝膿瘍を呈した一例。第 56 回日本肝臓学会総会、大阪、2020 年 8 月 28-29 日

土居 哲、疋田隼人、田畑優貴、中堀 輔、山田涼子、小玉尚宏、阪森亮太郎、巽智秀、萩原秀紀、今井康陽、乾 由明、三田英治、竹原徹郎：DAA 治療により非著効となった C 型慢性肝疾患患者における薬剤耐性変異と再治療の可能性。第 56 回日本肝臓学会総会、大阪、2020 年 8 月 28-29 日

河本泰治、榊原祐子、清木祐介、西本奈穂、早田菜保子、宮崎哲郎、東 瀬菜、別所宏紀、藤井祥史、石原朗雄、岩崎哲也、田中聡司、長谷川裕子、赤坂智史、中水流正一、石田 永、尾下正秀、三田英治：当院で経験した肝膿瘍 104 症例の検討。第 56 回日本肝臓学会総会、大阪、2020 年 8 月 28-29 日

石原朗雄、清木祐介、宮崎哲郎、西本奈穂、早田菜保子、平尾建、藤井祥史、岩崎哲也、田中聡司、長谷川裕子、赤坂智史、榊原祐子、中水流正一、石田 永、三田英治：HIV 合併の A 型急性肝炎、C 型急性肝炎では強い肝障害を惹起する。第 56 回日本肝臓学会総会、大阪、2020 年 8 月 28-29 日

山田涼子、阪森亮太郎、土居 哲、卜部彩子、田畑優貴、平松直樹、尾下正秀、三田英治、肱岡泰三、今井康陽、小玉尚宏、疋田隼人、巽 智秀、竹原徹郎：核酸アナログ投与症例における新規発癌の検討。多施設共同研究、第 56 回日本肝臓学会総会、大阪、2020 年 8 月 28-29 日

田中聡司、清木祐介、西本奈穂、早田菜保子、宮崎哲郎、藤井祥史、岩崎哲也、石原朗雄、長谷川裕子、赤坂智史、榊原祐子、中水流正一、石田 永、三田英治：MSM 間に流行する A 型肝炎の現況。第 56 回日本肝臓学会総会、大阪、2020 年 8 月 28-29 日

田中聡司、清木祐介、西本奈穂、早田菜保子、宮崎哲郎、藤井祥史、岩崎哲也、石原朗雄、長谷川裕子、赤坂智史、榊原祐子、中水流正一、石田 永、三田英治：HIV 感染者に対する A 型肝炎ワクチン接種効果の検討。第 56 回日本肝臓学会総会、大阪、2020 年 8 月 28-29 日

東 瀬菜、石原朗雄、清木祐介、西本奈穂、早田菜保子、宮崎哲郎、藤井祥史、岩崎哲也、田中聡司、長谷川裕子、赤坂智史、榊原祐子、中水流正一、石田 永、尾下正秀、三田英治：RFA 困難部肝細胞癌に対する PEIT 併用 RFA の安全

性と有効性の評価。第 56 回日本肝臓学会総会、大阪、2020 年 8 月 28-29 日

B-5

榊原祐子、赤坂智史、中水流正一、石田 永、三田英治：当院での便中カルプロテクチンを用いた潰瘍性大腸炎の評価。第 104 回日本消化器内視鏡学会近畿支部例会、Web、2020 年 6 月 27 日

別所宏紀、榊原祐子、中水流正一、石田 永、三田英治：当院における内視鏡的胃瘻造設術後の合併症、及び早期死亡に関わる因子の検討。第 104 回日本消化器内視鏡学会近畿支部例会、Web、2020 年 6 月 27 日

B-6

津室 悠、田中聡司、西村佑子、河本泰治、東 瀬菜、別所宏紀、石原朗雄、長谷川裕子、赤坂智史、榊原祐子、中水流正一、石田 永、三田英治：B 型慢性肝炎患者に発見された肝腫瘍で、肝細胞癌との鑑別が困難であった肝脾悪性リンパ腫の一例。第 43 回日本肝臓学会東部会、オンライン、2020 年 12 月 3-5 日

東 瀬菜、石原朗雄、津室 悠、西村佑子、河本泰治、別所宏紀、田中聡司、長谷川裕子、赤坂智史、榊原祐子、中水流正一、石田 永、三田英治：HCC 治療経過中に発症した CCC に対して SBRT を施行した一例。第 43 回日本肝臓学会東部会、オンライン、2020 年 12 月 3-5 日

西本奈穂、榊原祐子、清木祐介、早田菜保子、宮崎哲郎、河本泰治、別所宏紀、東 瀬菜、藤井祥史、石原朗雄、岩崎哲也、田中聡司、長谷川裕子、赤坂智史、中水流正一、石田 永、三田英治：ペンブロリズマブ投与後に潰瘍性大腸炎が増悪した一例。第 104 回日本消化器内視鏡学会近畿支部例会、Web、2020 年 6 月 27 日

大山愛理、榊原祐子、津室 悠、西村佑子、別所宏紀、東 瀬菜、河本泰治、石原朗雄、田中聡司、長谷川裕子、山本俊祐、中水流正一、石田 永、三田英治：HIV 感染と CMV 感染を合併し、診断に難渋した潰瘍性大腸炎の 1 例。第 104 回日本消化器内視鏡学会近畿支部例会、京都、2020 年 12 月 19 日

がん療法研究開発室

室長 平尾素宏

がんが日本人の死因のトップとなって久しい。国立がん研究センターのがん情報サービスによれば、2017年の年間がん罹患数は97万人を超え、2019年のがんによる死亡者数は約38万人と報告されている。最近、がん免疫治療法が脚光を浴び、臨床の場において使用され、その評価が明らかになってきたが、すべてのがんの効果があるわけではなく、がんに対する有効な治療法の開発の重要性は依然変わっていない。

免疫治療を含め従来の多くのがん治療法の有効性は、症例ごと、施設ごとの経験から得られたものであり、複数施設における大規模な臨床試験による治療効果の検証が必須となっている。そのような状況において、現在、がん治療成績向上を目的として科学的根拠に基づいた効果的ながん治療法の開発が求められている。さらに、発がん、増殖、転移といったがん自体やそれに伴う病態に関わる遺伝子や蛋白、糖鎖といった数多くの分子の異常が報告され、これらの分子の特徴や機能が新しいがんの診断法や治療に応用され、個別化医療やオーダーメイド医療という語に代表されるような各個人のがんの種類や病態の特徴に応じた医療が進められつつある。実際、2019年よりがん遺伝子パネル検査が保険診療可能となった。

本研究室では、このような最新の基礎研究や臨床研究によって得られた成果を利用した科学的根拠に基づいた新しい癌治療法の開発を目的として、がん細胞やがん組織を用いた基礎的研究から科学的根拠を確実にするための全国規模の多施設共同臨床試験への参加、自主的臨床試験研究の企画を進めている。特に、新たながんの診断や治療戦略の開発をめざし、外科手術時などに得られたがん組織を利用してがんにおける分子異常を探り、それに基づいた臨床において利用できる医療技術や医薬品として確立することを行う目的とした研究（橋渡し研究、トランスレーショナルリサーチ）を行っている。

【2020年度 研究業績発表】

A-0

Kanzaki R, Susaki Y, Takami K, Funakoshi Y, Sakamaki Y, Kodama K, Yokouchi H, Ikeda N, Kadota Y, Iwasaki T, Ose N, Shintani Y : Long-Term Outcomes of Pulmonary metastasectomy for Uterine Malignancies: A Multi-institutional Study in the Current Era . 「 Ann Surg Oncol 」 27 (10) : P 3821 - 3828、2020年10月

Yamamoto Y, Kanzaki R, Ose N, Funakoshi Y, Ikeda N, Takami K, Iwasaki T, Iwazawa T, Yokouchi H, Shiono H, Kodama K, Shintani Y : Lung Cancer Surgery for Patients on Hemodialysis: A Decade of Experience at Multicenter Institutions .

「 Ann Thorac Surg 」 109 (5) : P 1558 - 1565、2020年5月

Katada C, Yokoyama T, Yano T, Oda I, Shimizu Y, Doyama H, Koike T, Takizawa K, Hirao M, Okada H, Yoshii T, Kubota Y, Yamanouchi T, Tsuda T, Omori T, Kobatashi N, Suzuki H, Tanabe S, Horii K, Nakayama N, Kawakubo H, Kakushima N, Matsuo Y, Ishikawa H, Yokoyama A, Muto M : Association between macrocytosis and metachronous squamous cell carcinoma of the esophagus after endoscopic resection in men with early esophageal squamous cell carcinoma . 「 Esophagus 」 17 (2) : P 149 - 158、2020 年 7 月 8 日

Oda I, Shimizu Y, Yoshio T, Katada C, Yokoyama T, Yano T, Suzuki H, Abiko S, Takemura K, Koike T, Takizawa K, Hirao M, Okada H, Yoshii T, Katagiri A, Yamanouchi T, Matsuo Y, Kawakubo H, Kobayashi N, Shimoda T, Ochiai A, Ishikawa H, Yokoyama A, Muto M : Long-term outcome of endoscopic resection for intramucosal esophageal squamous cell cancer: a secondary analysis of the Japan Esophageal Cohort study . 「 Clinical Trial 」 52 (11) : P 967 - 975、2020 年 11 月

Hagi T, Kurokawa Y, Kawabata R, Omori T, Matsuyama J, Fujitani K, Hirao M, Akamaru Y, Takahashi T, Yamasaki M, Satoh T, Eguchi H, Doki Y : Multicentre biomarker cohort study on the efficacy of nivolumab treatment for gastric cancer . 「 Br J Cancer 」 123 (6) : P 965 - 972、2020 年 9 月

Hirao M, Hamakawa T, Nishikawa K, Takami K, Kato T, Miyamoto A, Miyake M, Doi T, Mano M : Distal gastrectomy for early gastric conduit carcinoma after Ivor–Lewis esophagectomy . 「 General Thoracic and Cardiovascular Surgery 」 69 (2) : P 405 - 408、2021 年 2 月

Iwasaki Y, Terashima M, Mizushima J, Katayama H, Nakamura K, Katai H, Yoshikawa T, Ito S, Kaji M, Kimura Y, Hirao M, Yamada M, Kurita A, Takagi M, Sang-Woong L, Takagane A, Yabusaki H, Hihara J, Boku N, Sano T, Sasako M : Gastrectomy with or without neoadjuvant S-1 plus cisplatin for type 4 or large type 3 gastric cancer (JCOG0501): an open-label, phase 3, randomized controlled trial . 「 Gastric Cancer 」 24 (2) : P 492 - 502、2021 年 3 月

Yamasaki M, Takiguchi S, Omori T, Hirao M, Imamura H, Fujitani K, Tamura S, Akamaru Y, Kishi K, Fujita J, Hirao T, Demura K, Matsuyama J, Takeno A, Ebisu C, Takachi K, Takayama O, Fukunaga H, Okada K, Adachi S, Fukuda S, Matsuura N, Saito T, Takahashi T, Kurokawa Y, Yano M, Eguchi H, Doki Y : Multicenter Prospective trial of total gastrectomy versus proximal gastrectomy for upper third cT1 gastric cancer . 「 Gastric Cancer 」 24 (2) : P 535 - 543、2021 年 3 月

Sugimura K, Yamasaki M, Yasuda T, Yano M, Hirao M, Fujitani K, Kimura Y, Miyata H, Motoori M, Takeno A, Shiraishi O, Makino T, Kii T, Tanaka K, Satoh T, Mori M, Doki Y : Long-term results of a randomized controlled trial comparing neoadjuvant Adriamycin, cisplatin, and 5-fluorouracil vs docetaxel, cisplatin, and 5-fluorouracil

followed by surgery for
esophageal cancer (OGSG1003) . 「 Ann Gastroenterol Surg 」 5 (1) : P 75 - 82、
2020 年 11 月

Kimura Y, Mikami J, Yamasaki M, Hirao M, Imamura H, Fujita J, Takeno A,
Matsuyama J, Kishi K, Takiguchi S, Eguchi H, Doki Y : Comparison of 5-year
postoperative outcomes after Billroth I and Roux-en-Y reconstruction following distal
gastrectomy for gastric cancer: Results from a multi-institutional randomized
controlled trial . 「 Ann Gastroenterol Surg 」 5 (1) : P 1 - 9、 2020 年 8 月

Tamura S, Taniguchi H, Nishikawa K, Imamura H, Fujita J, Takeno A, Matsuyama J,
Kimura Y, Kawada J, Hirao M, Hirota M, Fujitani K, Kurokawa Y, Sakai D, Kawakami
H, Shimokawa T, Satoh T : A phase II trial of dose-reduced nab-paclitaxel for patients
with previously treated, advanced or recurrent gastric cancer (OGSG1302) . 「 Int J
Clin Oncol. 」 25 (12) : P 2035 - 2043、 2020 年 12 月

Kobayashi Y, Nishikawa K, Asaoka T, Kato S, Hamakawa T, Yamamoto K, Kobayashi
N, Kitakaze M, Maeda S, Uemura M, Miyake M, Hama N, Miyamoto A, Kato T,
Miyazaki M, Nakamori S, Mita E, Sekimoto M, Mano M, Hirao M : Retrograde
endoscopic submucosal dissection for early thoracic esophageal carcinoma . 「 Clin J
Gastroenterol.(E-Pub) 」 2021 年 3 月

Ogata M, Kotaka M, Ogata T, Hatachi Y, Yasui H, Kato T, Tsuji A, Satake H :
Regorafenib vs trifluridine/tipiracil for metastatic colorectal cancer refractory to
standard chemotherapies: A multicenter retrospective comparison study in Japan .
「 PloS One. 」 15 (6) : P e0234314、 2020 年 6 月 12 日

Kotaka M, Iwamoto S, Satake H, Sakai D, Kudo T, Fukunaga M, Konishi K, Ide Y,
Ikumoto T, Tsuji A, Sano Y, Kato T, Sugimoto N, Satoh T, Kanazawa A, Kurata T,
Yamanaka T, Tomita N : Evaluation of FOLFOX or CAPOX reintroduction with or
without bevacizumab in relapsed colorectal cancer patients treated with oxaliplatin as
adjuvant chemotherapy (REACT study) . 「 Int J Clin Oncol. 」 25 (8) : P 1515 -
1522、 2020 年 8 月 25 日

Nose Y, Kagawa Y, Hata T, Mori R, Kawai K, Naito A, Sakamoto T, Murakami K,
Katsura Y, Ohmura Y, Masuzawa T, Takeno A, Takeda Y, Kato T, Murata K :
Neutropenia is an indicator of outcomes in metastatic colorectal cancer patients treated
with FTD/TPI plus bevacizumab: a retrospective study . 「 Cancer Chemother
Pharmacol. 」 86 (3) : P 427 - 433、 2020 年 9 月

Hasegawa H, Taniguchi H, Nakamura Y, Kato T, Fujii S, Ebi H, Shiozawa M, Yuki S,
Masuishi T, Kato K, Izawa N, Moriwaki T, Oki E, Kagawa Y, Denda T, Nishina T, Tsuji
A, Hara H, Esaki T, Nishida T, Kawakami H, Sakamoto Y, Miki I, Okamoto W, Yamazaki

K, Yoshino T : FMS-like tyrosine kinase 3 (FLT3) amplification in patients with metastatic colorectal cancer . 「 Cancer Sci 」 112 (1) : P 314 - 322、 2020 年 10 月

Kotaka M, Saito Y, Kato T, Satake H, Makiyama A, Tsuji Y, Shinozaki K, Fujiwara T, Mizushima T, Harihara , Nagata N, Kurihara N, Ando M, Kusakawa G, Sakai T, Uchida Y, Takamoto M, Kimoto S, Hyodo I : A placebo controlled, double blind, randomized study of recombinant thrombomodulin (ART 123) to prevent oxaliplatin induced peripheral neuropathy . 「 Cancer Chemother Pharmacol. 」 86 (5) : P 607 - 618、 2020 年 11 月

Nakamura Y, Taniguchi H, Ikeda M, Bando H, Kato K, Morizane C, Esaki T, Komatsu Y, Kawamoto Y, Takahashi N, Ueno M, Kagawa Y, Nishina T, Kato T, Yamamoto Y, Furuse J, Denda T, Kawakami H, Oki E, Nakajima T, Nishida N, Yamaguchi K, Yasui H, Goto M, Matsushashi N, Ohtsubo K, Yamazaki K, Tsuji A, Okamoto W, Tsuchihara K, Yamanaka T, Miki I, Sakamoto Y, Ichiki H, Hata M, Yamashita R, Ohtsu A, Justin I. Odegaard, Yoshino T : Clinical utility of circulating tumor DNA sequencing in advanced gastrointestinal cancer: SCRUM-Japan GI-SCREEN and GOZILA studies. 「 Nature Medicine 」 26 (12) : P 1859 - 1864、 2020 年 12 月

Satake H, Kato T, Oba K, Kotaka M, Kagawa Y, Yasui H, Nakamura M, Watanabe T, Matsumoto T, Kii T, Terazawa T, Makiyama A, Takano N, Yokota M, Okita Y, Matoba K, Hasegawa H, Tsuji A, Komatsu Y, Yoshino T, Yamazaki K, Mishima H, Oki E, Nagata N, Sakamoto J : Phase Ib/II Study of Biweekly TAS-102 in Combination with Bevacizumab for Patients with Metastatic Colorectal Cancer Refractory to Standard Therapies (BiTS Study) . 「 Oncologist 」 25 (12) : P 1855 - 1863、 2020 年 12 月

Terazawa T, Kato T, Goto M, Ohta K, Noura S, Satake H, Kagawa Y, Kawakami H, Hasegawa H, Yanagihara K, Shingai T, Nakata K, Kotaka M, Hiraki M, Konishi K, Nakae S, Sakai D, Kurokawa Y, Shimokawa T, Satoh T : Phase II Study of Panitumumab Monotherapy in Chemotherapy-Naïve Frail or Elderly Patients with Unresectable RAS Wild-Type Colorectal Cancer: OGSF 1602 . 「 Oncologist. 」 26 (1) : P 17 - e47、 2021 年 1 月

Kagawa Y, Elena Elez Fernandez, Jesús García-Foncillas, Bando H, Taniguchi H, Ana Vivancos, Akagi K, Ariadna Garcia, Denda T, Javier Ros, Nishina T, Iosune Baraibar, Komatsu Y, Davide Ciardiello, Oki E, Kudo T, Kato T, Yamanaka T, Josep Tabernero, Yoshino T: Combined Analysis of Concordance between Liquid and Tumor Tissue Biopsies for RAS Mutations in Colorectal Cancer with a Single Metastasis Site: The METABEAM Study. 「 American Association for Cancer Research(E-Pub) 」 、 2021 年 2 月

Iwase M, Ando M, Aogi K, Aruga T, Inoue K, Shimomura A, Tokunaga E, Masuda N, Yamauchi H, Yamashita T, Iwata H : Long-term survival analysis of addition of

carboplatin to neoadjuvant chemotherapy in HER2-negative breast cancer. 「Breast Cancer Res Treat」 180(3) : P687-694、2020年4月

Ishiguro H, Masuda N, Sato N, Higaki K, Morimoto T, Yanagita Y, Mizutani M, Ohtani S, Kaneko K, Fujisawa T, Takahashi M, Kadoya T, Matsunami N, Yamamoto Y, Ohno S, Takano T, Morita S, Tanaka-Mizuno S, Toi M : A Randomized Study Comparing Docetaxel/Cyclophosphamide (TC), 5-fluorouracil/epirubicin/cyclophosphamide (FEC) Followed by TC, and TC Followed by FEC for Patients With Hormone Receptor-Positive HER2-negative Primary Breast Cancer. 「Breast Cancer Res Treat」 180(3) : P715-724、2020年4月

Kawaguchi H, Masuda N, Nakayama T, Aogi K, Anan K, Ito Y, Ohtani S, Sato N, Saji S, Takano T, Tokunaga E, Nakamura S, Hasegawa Y, Hattori M, Fujisawa T, Morita S, Yamaguchi M, Yamashita H, Yamashita T, Yamamoto Y, Yotsumoto D, Toi M, Ohno S : Factors associated with prolonged overall survival in patients with postmenopausal estrogen receptor-positive advanced breast cancer using real-world data: a follow-up analysis of the JBCRG-C06 Safari study. 「Breast Cancer」 27(3) : P389-398、2020年5月

Yamashiro H, Iwata H, Masuda N, Yamamoto N, Nishimura R, Ohtani S, Sato N, Takahashi M, Kamio T, Yamazaki K, Saito T, Kato M, Lee T, Kuroi K, Takano T, Yasuno S, Morita S, Ohno S, Toi M : Outcomes of trastuzumab therapy in HER2-positive early breast cancer patients: extended follow-up of JBCRG-cohort study 01. 「Breast Cancer」 27(4) : P631-641、2020年7月

Takahashi M, Masuda N, Nishimura R, Inoue K, Ohno S, Iwata H, Hashigaki S, Muramatsu Y, Umeyama Y, Toi M : Clinical significance of evaluating hormone receptor and HER2 protein using cell block against metastatic breast cancer: a multi-institutional study. 「Cancer Med」 9(14) : P4929-4940、2020年7月

Saura C, Oliveira M, Feng YH, Dai MS, Chen SW, Hurvitz SA, Kim SB, Moy B, Delaloge S, Gradishar W, Masuda N, Palacova M, Trudeau ME, Mattson J, Yap YS, Hou MF, Laurentiis MD, Yeh YM, Chang HT, Yau T, Wildiers H, Haley B, Fagnani D, Lu YS, Crown J, Lin J, Takahashi M, Takano T, Yamaguchi M, Fujii T, Yao B, Bebcuk J, Keyvanjah K, Bryce R, Brufsky A : Neratinib Plus Capecitabine Versus Lapatinib Plus Capecitabine in HER2-Positive Metastatic Breast Cancer Previously Treated With ≥ 2 HER2-Directed Regimens: Phase III NALA Trial. 「J Clin Oncol」 38(27) : P3138-3149、2020年9月

Yap YS, Chiu J, Ito Y, Ishikawa T, Aruga T, Kim SJ, Toyama T, Saeki T, Saito M, Gounaris I, Su F, Ji Y, Han Y, Gazdoui M, Masuda N : Ribociclib, a CDK 4/6 inhibitor, plus endocrine therapy in Asian women with advanced breast cancer. 「Cancer Sci」 111(9) : P3313-3326、2020年9月

Tsuda M, Shiguro H, Toriguchi N, Masuda N, Bando H, Ohgami M, Homma M, Morita S, Yamamoto N, Kuroi K, Yanagita Y, Takano T, Shimizu S, Toi M : Overnight fasting before lapatinib administration to breast cancer patients leads to reduced toxicity compared with nighttime dosing: a retrospective cohort study from a randomized clinical trial. 「Cancer Med」 9(24) : P9246-9255、2020年12月

Cortes J, Cescon DW, Rugo HS, Nowecki Z, Im SA, Md Yusof M, Gallardo C, Lipatov O, Barrios CH, Holgado E, Iwata H, Masuda N, Otero MT, Gokmen E, Loi S, Guo Z, Zhao J, Aktan G, Karantza V, Schmid P : Pembrolizumab plus chemotherapy versus placebo plus chemotherapy for previously untreated locally recurrent inoperable or metastatic triple-negative breast cancer (KEYNOTE-355): a randomised, placebo-controlled, double-blind, phase 3 clinical trial. 「Lancet」 396 : P1817-1828、2020年12月

Takahashi M, Ohtani S, Nagai SE, Takashima S, Yamaguchi M, Tsuneizumi M, Komoike Y, Osako T, Ito Y, Ikeda M, Ishida K, Nakayama T, Takashima T, Asakawa T, Matsumoto S, Shimizu D, Masuda N : The efficacy and safety of pertuzumab plus trastuzumab and docetaxel as a first-line therapy in Japanese patients with inoperable or recurrent HER2-positive breast cancer: the COMACHI study. 「Breast Cancer Res Treat」 185(1) : P125-134、2021年1月

Toi M, Imoto S, Ishida T, Ito Y, Iwata H, Masuda N, Mukai H, Saji S, Shimizu A, Ikeda T, Haga H, Saeki T, Aogi K, Sugie T, Ueno T, Kinoshita T, Kai Y, Kitada M, Sato Y, Jimbo K, Sato N, Ishiguro H, Takada M, Ohashi Y, Ohno S : Adjuvant S-1 plus endocrine therapy for oestrogen receptor-positive, HER2-negative, primary breast cancer: a multicentre, open-label, randomised, controlled, phase 3 trial. 「Lancet Oncol」 22(1) : P74-84、2021年1月

Rugo HS, Huober J, García-Sáenz JA, Masuda N, Hyuk Sohn J, Andre V-AM, Barriga S, Cox J, Goetz M : Management of Abemaciclib-Associated Adverse Events in Patients with Hormone Receptor-Positive, Human Epidermal Growth Receptor 2-Negative Advanced Breast Cancer: Safety Analysis of MONARCH 2 and MONARCH 3. 「Oncologist」 26(1) : e53-e65、2021年1月

Masuda N, Mukai H, Inoue K, Rai Y, Ohno S, Ohtani S, Shimizu C, Hashigaki S, Muramatsu Y, Umeyama Y, Iwata H, Toi M : Analysis of subsequent therapy in Japanese patients with hormone receptor-positive/human epidermal growth factor receptor 2-negative advanced breast cancer who received palbociclib plus endocrine therapy in PALOMA-2 and -3. 「Breast Cancer Res Treat」 28(2) : P335-345、2021年3月

Ohno S, Saji S, Masuda N, Tsuda H, Akiyama F, Kurosumi M, Shimomura A, Sato N, Takao S, Ohsumi S, Tokuda Y, Inaji H, Watanabe T, Ohashi Y : Relationships between

pathological factors and long-term outcomes in patients enrolled in two prospective randomized controlled trials comparing the efficacy of oral tegafur–uracil with CMF (N·SAS-BC 01trial and CUBC trial). 「Breast Cancer Res Treat」 Epub

Tanaka K, Masuda N, Hayashi N, Sagara Y, Hara F, Kadoya T, Matsui A, Miyazaki C, Shien T, Tokunaga E, Hayashi T, Niikura N, Maeda S, Komoike Y, Bando H, Kanbayashi C, Iwata H : Clinicopathological predictors of postoperative upstaging to invasive ductal carcinoma (IDC) in patients preoperatively diagnosed with ductal carcinoma in situ (DCIS) : A multi-institutional retrospective cohort study. 「Breast Cancer」 Epub

Toi M, Inoue K, Masuda N, Iwata H, Sohn J, Park IH, Im SA, Chen SC, Enatsu S, Turner PK, André VAM, Hardebeck MC, Sakaguchi S, Goetz MP, Sledge GW Jr : Abemaciclib in combination with endocrine therapy for East Asian patients with HR+, HER2-advanced breast cancer: MONARCH 2 & 3 trials. 「Cancer Sci」 Epub

Masuda N, Bando H, Yamanaka T, Kadoya T, Takahashi, Nagai SE, Ohtani S, Aruga T, Suzuki E, Kikawa Y, Yasojima H, Kasai H, Ishiguro H, Kawabata H, Morita S, Haga H, Kataoka TR, Uozumi R, Ohno S, Toi M : Eribulin-based neoadjuvant chemotherapy for triple-negative breast cancer patients stratified by homologous recombination deficiency status: a multicenter randomized phase II clinical trial. 「Breast Cancer Res Treat」 Epub

Makiyama A, Sukawa Y, Kashiwada T, Kawada J, Hosokawa A, Horie Y, Tsuji A, Moriwaki T, Tanioka H, Shinozaki K, Uchino K, Yasui H, Tsukuda H, Nishikawa K, Ishida H, Yamanaka T, Yamazaki K, Hironaka S, Esaki T, Boku N, Hyodo I, Muro K : Randomized, Phase II Study of Trastuzumab Beyond Progression in Patients With HER2-Positive Advanced Gastric or Gastroesophageal Junction Cancer: WJOG7112G(T-ACT Study) . 「 Journal of Clinical Oncology 」 38 (17) : P 1919 - 1928、2020年6月

Nishikawa K, Murotani K, Fujitani K, Inagaki H, Akamaru Y, Tokunaga S, Takagi M, Tamura S, Sugimoto N, Shigematsu T, Yoshikawa T, Ishiguro T, Nakamura M, Hasegawa H, Morita S, Miyashita Y, Tsuburaya A, , Sakamoto J, Tsujinaka T : Differences in disease status between patients with progression after first-line chemotherapy versus early lapse after adjuvant chemotherapy who undergo second-line chemotherapy for gastric cancer: Exploratory analysis of the randomized phase III TRICS trial. 「 European Journal of Cancer 」 132 : P 159 - 167、2020年6月

Taberner J, Maria Alsina, Shitara K, Doi T, Mikhail D, Wasat M, Hendrik-Tobias Arkenau Aliaksandr P, Michele G, Catia Faustino, Vera G, Edvard Z, Nishikawa K, Ando T, Şuayib Y, Eric Van Cutsem, Javier S, Donia S, Catherine L, Nadia A, David H. Ilson : Health-related quality of life associated with trifluridine/tipiracil in heavily pretreated metastatic gastric cancer: results from TAGS . 「 Gastric Cancer 」 23 (4) : P 689 - 698、2020年7月

Oshima T, Yoshikawa T, Miyagi Y, Morita S, Yamamoto M, Tanabe K, Nishikawa K, Ito Y, Matsui T, Kimura Y, Yokose T, Hiroshima Y, Aoyama T, Hayashi T, Ogata T, Cho H, Rino Y, Masuda M, Tsuburaya A, Sakamoto J : Biomarker analysis to predict the pathological response to neoadjuvant chemotherapy in locally advanced gastric cancer: An exploratory biomarker study of COMPASS, a randomized phase II trial . 「 Oncotarget 」 11 (30) : P 2906 - 2918、2020 年 7 月

Kurokawa Y, Matsuyama J, Nishikawa K, Takeno A, Kimura Y, Fujitani K, Kawabata R, Makari Y, Terazawa T, Kawakami H, Sakai D, Shimokawa T, Satoh T: Docetaxel plus S-1 versus cisplatin plus S-1 in unresectable gastric cancer without measurable lesions: a randomized phase II trial (HERBIS-3). 「 Gastric Cancer 」 24 (2) : P 428 - 434、2021 年 3 月

Hayashi T, Yoshikawa T, Sakamaki K, Nishikawa K, Fujitani K, Tanabe K, Misawa K, Matsui T, Miki A, Nemoto H, Fukunaga T, Kimura Y, Hihara J: Primary results of a randomized two-by-two factorial phase II trial comparing neoadjuvant chemotherapy with two and four courses of cisplatin/S-1 and docetaxel/cisplatin/S-1 as neoadjuvant chemotherapy for advanced gastric cancer. 「 Ann Gastroenterol Surg 」 4 (5) : P 540 - 548、2020 年 9 月

Endo S, Fujiwara Y, Yamatsuji T, Nishikawa K, Fujitani K, Ikenaga M, Kawada J, Okamoto Y, Kubota H, Higashida M, Ueno T: Is it Necessary to Confirm Negative Margins in Gastrectomy for Peritoneal Lavage Cytology-positive Gastric Cancer. 「 Anticancer Res 」 40 (10) : P 5807 - 5813、2020 年 10 月

Fujitani K, Shitara K, Takashima A, Koeda K, Hara H, Nakayama N, Hironaka S, Nishikawa K, Kimura Y, Amagai K, Hosaka H, Komatsu Y, Shimada K, Kawabata R, Ohdan H, Kodera Y, Nakamura M, Nakajima TE, Miyata Y, Moriwaki T, Kusumoto T, Nishikawa K, Ogata K, Shimura M, Morita S, Koizumi W. : Effect of early tumor response on the health-related quality of life among patients on second-line chemotherapy for advanced gastric cancer in the ABSOLUTE trial . 「 Gastric Cancer 」 24 (2) : P 467 - 476、2021 年 3 月

Yamaguchi T, Takashima A, Nagashima K, Terashima M, Aizawa M, Ohashi M, Tanaka R, Yamada T, Kinoshita T, Matsushita H, Ishiyama K, Hosoda K, Yuasa Y, Haruta S, Kakiyama N, Nishikawa K, Yunome G, Satoh T, Fukagawa T, Katai H, Boku N. : Impact of preoperative chemotherapy as initial treatment for advanced gastric cancer with peritoneal metastasis limited to positive peritoneal lavage cytology (CY1) or localized peritoneal metastasis (P1a): a multi-institutional retrospective study. 「 Gastric Cancer(E-Pub) 」 、2020 年 11 月

Endo S, Nishikawa K, Ikenaga M, Fujitani K, Kawada J, Yamatsuji T, Kubota H, Higashida M, Fujiwara Y, Ueno T: Prognostic factors for cytology-positive gastric

cancer: a multicenter retrospective analysis. 「 Int J Clin Oncol(E-Pub) 」、2021 年 2 月

Kawazoe A, Ando T, Hosaka H, Fujita J, Koeda K, Nishikawa K, Amagai K, Fujitani K, Ogata K, Watanabe K, Yamamoto Y, Shitara K.: Safety and activity of trifluridine/tipiracil and ramucirumab in previously treated advanced gastric cancer: an open-label, single-arm, phase 2 trial. 「 Lancet Gastroenterol Hepatol. 」 6 (3) : P 209 - 217、2021 年 3 月

Otani Y, Mori K, Morikawa N, Mizutani M, Yasojima H, Masuyama M, Mano M, Masuda N : Rechallenge of anti-PD-1/PD-L1 antibody showed a good response to metastatic breast cancer: a case report. 「 Immunotherapy 」 13(3) : P189-194、2021 年 2 月

Miyo M, Kato T, Takahashi Y, Miyake M, Toshiyama R, Hamakawa T, Sakai K, Nishikawa K, Miyamoto A, Hirao M : Short-term and long-term outcomes of laparoscopic colectomy with multivisceral resection for surgical T4b colon cancer: Comparison with open colectomy . 「 Ann Gastroenterol Surg 」 4 (6) : P 676 - 683、2020 年 7 月

Miyo M, Kato T, Yoshino T, Yamanaka T, Bando H, Satake H, Yamazaki K, Taniguchi H, Oki E, Kotaka M, Oba K, Miyata Y, Muro K, Komatsu Y, Baba H, Tsuji A: Protocol of the QUATTRO-II study: a multicenter randomized phase II study comparing CAPOXIRI plus bevacizumab with FOLFOXIRI plus bevacizumab as a firstline treatment in patients with metastatic colorectal cancer . 「 BMC Cancer 」 20 (1) : P 687、2020 年 7 月

Ichihara M, Ikeda M, Uemura M, Miyake M, Miyazaki M, Kato T, Sekimoto M: Feasibility and safety of laparoscopic lateral pelvic lymph node dissection for locally recurrent rectal cancer and risk factors for re-recurrence. 「 Asian J Endosc Surg 」 13 (4) : P 489 - 497、2020 年 10 月

Kusunoki C, Hamakawa T, Nishikawa K, Sato H, Imamura S, Miyahara S, Sakano Y, Miyazaki H, Seto H, Ueda R, Toshiyama R, Miyo M, Takahashi Y, Sakai K, Miyake M, Miyamoto A, Kato T, Mori K, Hirao M : Hybrid approach with laparoscopic wall inversion surgery and single-incision intragastric surgery for intraluminal gastrointestinal stromal tumor: A case report . 「 Asian Journal of Endoscopic Surgery (E-Pub) 」、2021 年 2 月

Fukai J, Arita H, Umehara T, Yoshioka E, Shofuda T, Kanematsu D, Kodama Y, Mano M, Kinoshita M, Okita Y, Nonaka M, Uda T, Tsuyuguchi N, Sakamoto D, Uematsu Y, Nakao N, Mori K, Kanemura Y: Molecular characteristics and clinical outcomes of elderly patients with IDH-wildtype glioblastomas: comparative study of older and younger cases in Kansai Network cohort. 「 Brain Tumor Pathology 」 37(2) : P50-59、2020 年 4 月

Hasegawa H, Nagata Y, Sakakibara Y, Miyake M, Mori K, Masuda N, Mano M, Nakazuru S, Ishida H, Mita E : Breast metastasis from rectal cancer with BRAF V600E mutation: a case report with a review of the literature. 「Clinical Journal Gastroenterology」 13(2):153-157、2020 年 4 月

Okita Y, Shofuda T, Kanematsu D, Yoshioka E, Kodama Y, Mano M, Kinoshita M, Nonaka M, Fujinaka T, Kanemura Y: The association between 11 C-methionine uptake, IDH gene mutation, and MGMT promoter methylation in patients with grade II and III gliomas. 「Clin Radiol」 75(8):622-628、2020 年 8 月 (Epub 2020 年 4 月 19 日)

Miura S, Kijima N, Fujimori N, Nakagawa T, Nakagawa R, Tachi T, Okita Y, Kanemura Y, Nakajima S, Mano M, Kishima H, Ozawa K, Fujinaka T: Surgical Treatment of Brain Metastasis of Extramammary Paget's Disease: A Case Report. 「NMC Case Rep J」 7(4):P189-193、2020 年 9 月

Achiha T, Kijima N, Kodama Y, Kagawa N, Kinoshita M, Fujimoto Y, Nonaka M, Fukai J, Inoue A, Nishida N, Yamanaka T, Harada A, Mori K, Tsuyuguchi N, Uda T, Ishibashi K, Tomogane Y, Sakamoto D, Shofuda T, Yoshioka E, Kanematsu D, Mano M, Luu B, Taylor MD, Kanemura Y, Kishima H: Activated leukocyte cell adhesion molecule expression correlates with the WNT subgroup in medulloblastoma and is involved in regulating tumor cell proliferation and invasion. 「PLoS One」 15(12):e0243272、2020 年 12 月

Li Y, Nonaka M, Kanemura Y, Kodama Y, Mano M, Asai A: A case of medulloblastoma in a patient with fetal ventricular enlargement. 「Childs Nerv Syst」 37(3):977-982、2021 年 3 月

A-1

西川和宏 : 進行・再発胃癌治療レジメン生存期間延長の薬剤選択 : P. 1 - 63、医学と看護社、2020 年 11 月 5 日

A-3

増田慎三 : 5.術後化学療法「乳腺腫瘍学 第3版」P.251-258、2020 年 4 月

増田慎三 : I . Capecitabine を用いた乳癌周術期臨床試験「癌と化学療法」47(12) : P.1673-1677、2020 年 12 月

佐藤広陸、藤原綾子、植村守、三宅正和、平尾素宏、高見康二 : 成人 Bochdalek 孔ヘルニア術後に腸回転異常症による腸閉塞を発症した 1 例 「日外科系連合会誌」 46 (1) : P.102 - 109、2021 年 2 月

宮崎葉月、浅岡忠史、花木武彦、岩上佳史、秋田裕史、野田剛広、後藤邦仁、小林省吾、川崎柱輔、森井英一、土岐祐一郎、江口英利 : 経過観察中に浸潤癌の

合併を認めた胆管内乳頭状腫瘍の1切除例 「日本胆道学会雑誌」 34 (4):P.748 - 757、2020年5月

宮原智、高橋佑典、三代雅明、三宅正和、俊山礼志、浜川卓也、酒井健司、西川和宏、宮本敦史、加藤健志、平尾素宏：結腸癌イレウス加療中にイレウス管が誘因となった腸重積の1例 「日外科系連会誌」 45 (6):P.817 - 824、2020年12月30日

A-6

平尾素宏：手術（外科治療）まず、知っておきたいこと「がん情報サービス」2020年

平尾素宏：新型コロナとがん診療「毎日新聞医療コラム」、2020年11月25日

増田慎三：「テセントリク適正使用ガイド（乳癌編）HPS改訂版」中外製薬株式会社、2020年4月

増田慎三：監修「乳がんのサポーター・ケア」第一三共株式会社、2020年4月

増田慎三：監修「CT-P6をお使いの患者様へ-COVID-19に関する注意点」セルトリオン・ヘルスケア・ジャパン株式会社、2020年9月

増田慎三：監修「アバスチンエビデンスブック」中外株式会社、2021年1月

B-1

Shien T, Tsuda H, Sasaki K, Mizusawa J, Akiyama F, Kurosumi M, Sawaki M, Tamura N, Tanaka K, Takahashi M, Hayashi N, Mukai H, Masuda N, Iwata H. Evaluation of pathological complete response (pCR) after neoadjuvant chemo-radiation therapy for primary breast cancer (JCOG0306A1). ESMO Asia Virtual Congress 2020, WEB開催, 2020年11月20日

Md Yusof M, Cescon DW, Rugo HS, Im SA, Gallardo C, Lipatov O, Barrios CH, Holgado E, Iwata H, Masuda N, Gokmen E, Loi S, Guo Z, Jensen E, Aktan G, Karantza V, Schmid P, Cortes J. Phase III KEYNOTE-355 study of pembrolizumab (pembro) vs placebo (pbo) + chemotherapy (chemo) for previously untreated locally recurrent inoperable or metastatic triple-negative breast cancer (TNBC): Results for patients (Pts) enrolled in Asia. ESMO Asia Virtual Congress 2020, WEB開催, 2020年11月20日

Huang C, Toi M, Im Y, Iwata H, Sohn J, Wang H, Masuda N, Im S, Lu Y, Haddad N, Sakaguchi S, Hurt K, Neven P, Llombart-Cussac A, Sledge G. Abemaciclib plus fulvestrant in East Asian women with HR+, HER2- advanced breast cancer: Overall survival from MONARCH 2. ESMO Asia Virtual Congress 2020, WEB開催, 2020年11月21日

Dai MS, Feng YH, Chen SW, Masuda N, Sangai T, Yau T, Kwong A, Ngan R, Yap YS, Ang PCS, Ow S, Lee KS, Kim SB, Chung HC, Keyvanjah K, Bebhuk J, Chen MJ. Neratinib + capecitabine (N+C) vs lapatinib + capecitabine (L+C) in Asians with HER2+ metastatic breast cancer (MBC) previously treated with two or more HER2-directed regimens: A Pan-Asian analysis of the phase III NALA trial. ESMO Asia Virtual Congress 2020, WEB 開催, 2020 年 11 月 21 日

Rugo HS, Schmid P, Cescon DW, Nowecki Z, Im SA, Md Yuso M, Gallardo C, Lipatov O, Barrios CH, Perez-Garcia J, Iwata H, Masuda N, Otero MT, Gokmen E, Loi S, Guo Z, Zhao J, Karantza V, Aktan G, Cortes J. Additional efficacy endpoints from the phase 3 KEYNOTE-355 study of pembrolizumab plus chemotherapy vs placebo plus chemotherapy as first-line therapy for locally recurrent inoperable or metastatic triple-negative breast cancer. San Antonio Breast Cancer Symposium 2020, WEB 開催, 2020 年 12 月 10 日

Rugo HS, Schmid P, Cescon DW, Nowecki Z, Im SA, Md Yuso M, Gallardo C, Lipatov O, Barrios CH, Perez-Garcia J, Iwata H, Masuda N, Otero MT, Gokmen E, Loi S, Guo Z, Zhao J, Karantza V, Aktan G, Cortes J. Additional efficacy endpoints from the phase 3 KEYNOTE-355 study of pembrolizumab plus chemotherapy vs placebo plus chemotherapy as first-line therapy for locally recurrent inoperable or metastatic triple-negative breast cancer. Miami Breast Cancer Conference, WEB 開催, 2021 年 3 月 4 日

B-2

Iwasa S, Takahashi S, Hirao M, Kato K, Shitara K, Sato Y, Hamakawa T, Horinouchi H, Tahara M, Chin K, Mizutani M, Suzuki T, Takase T, Matsunaga R, Mukohara T : Effect of Infusion Rate, Premedication, and Prophylactic Peg-filgrastim Treatment on the Safety of the Liposomal Formulation of Eribulin (E7389-LF): Results From the Expansion Part of a Phase 1 Study . ESMO Virtual Congress 2020 , WEB 開催, 2020 年 9 月 19 日 -21 日

Kotaka M, Manaka D, Eto T, Hasegawa J, Takagane A, Nakamura M, Kato T, Munemoto Y, Nakamura F, Bando H, Taniguchi H, Gamoh M, Shiozawa M, Nishi M, horiuchi T, Mizushima T, Yamanaka T, Yoshino T, Ohtsu A, Mori M: Association of postoperative serum carcinoembryonic antigen (CEA) with disease-free survival in patients with stage III colon cancer: ACHIEVE phase III randomized clinical trial. ASCO20 Virtual , WEB 開催, 2020 年 5 月 29 日 -31 日

Yuki S, Bando H, Tsukada Y, Inamori K, Komatsu Y, Homma S, Uemura M, Kato T, Kotani D, Fukuoka S, Nakamura N, Fukui M, Wakabayashi M, Kojima M, Togashi Y Sato A, Nishikawa H, Ito M, Yoshino T: Short-term results of VOLTAGE-A: Nivolumab monotherapy and subsequent radical surgery following preoperative chemoradiotherapy in patients with microsatellite stable and microsatellite instability-

high locally advanced rectal cancer. ASCO20 Virtual , WEB 開催, 2020 年 5 月 29 日 - 31 日

Inamori K, Togashi Y, Bando H, Tsukada Y, Suzuki A, Suzuki Y, Kotani D, Fukuoka S, Kojima M, Fukui M, Yuki S, Komatsu Y, Homma S, Uemura M, Kato T, Ito M, Nishikawa H, Yoshino T: Translational research of voltage-A1: Efficacy predictors of preoperative chemoradiotherapy and subsequent nivolumab monotherapy in patients with microsatellite-stable locally advanced rectal cancer. ASCO20 Virtual , WEB 開催, 2020 年 5 月 29 日-31 日

Nakamura Y, Taniguchi H, Bando H, Esaki T, Komatsu Y, Kato K, Takahashi N, Kagawa Y, Kato T, Nishina T, Satoh T, Oki E, Sunakawa Y, Shiozawa M, Yamamoto Y, Kawakami H, chi Denda T, Ohtsu A, Yoshino T : Utility of circulating tumor DNA (ctDNA) versus tumor tissue genotyping for enrollment of patients with metastatic colorectal cancer (mCRC) to matched clinical trials: SCRUM-Japan GI-SCREEN and GOZILA combined analysis. ASCO20 Virtual , WEB 開催, 2020 年 5 月 29 日-31 日

Kato T, Ikeda M, Ikeda A, Hasegawa J, Ota H, Shingai T, Yasui M, Fujii H, Miyake Y, Uemura M, Matsuda C, Satoh T, Mizushima T, Doki Y, Eguchi H: Postoperative XELOX therapy for patients with curatively resected high-risk stage II and stage III rectal cancer without preoperative chemoradiation: A prospective, multicenter, open-label, single arm phase II study. ASCO20 Virtual , WEB 開催, 2020 年 5 月 29 日-31 日

Yamanaka T, Yoshino T, Kotaka M, Manaka D, Shiozawa M, Sakamoto Y, Munemoto Y, Eto T, Shitara K, Kato T, Shiomi A, Hasegawa J, Makiyama A, Takagane A, Nakamura M, Oki E, Yamazaki K, Mizushima T, Sunami E, Ohtsu A, Maehara Y, Mori M : Relative impact of T4 and N2 on the efficacy of 3 versus 6 months of adjuvant CAPOX for high-risk stage II and stage III colon cancer:ACHIEVE and ACHIEVE-2 trials . ESMO GI , WEB 開催, 2020 年 7 月 1 日 日

A. Grothey, J. Tabernero, J. Taieb, R. Yaeger, Yoshino T, E. Maiello, E. Elez Fernandez, A. Ruiz Casado, P. Ross, T. André, Kato T, J. Ruffinelli, J. Graham, M. Van den Eynde, R. Vera, B. Jean, E. Carriere Roussel, C. Cahuzac, Z. Issiakhem, J. Vedovato, E. Van Cutsem : ANCHOR CRC: a single-arm, phase 2 study of encorafenib, binimetinib plus cetuximab in previously untreated BRAF V600E mutant metastatic colorectal cancer . ESMO GI , WEB 開催, 2020 年 7 月 1 日

Yukami H, Mishima S, Kotani D, Oki E, Taniguchi H, Nakamura Y, Kato T, Takemasa I, Yamanaka T, Shirasu H, Sawada K, Ebi H, A. Aleshin, P. Billings, M. Rabinowitz, Mori M, Yoshino T : Prospective observational study monitoring circulating tumor DNA in resectable colorectal cancer patients undergoing radical surgery: GALAXY study in CIRCULATE-Japan (trial in progress) . ESMO GI , WEB 開催, 2020 年 7 月 1 日

Ando T, Ito K, Yuki S, Saito R, Nakano S, Nakatsumi H, Kawamoto Y, Dazai M, Miyashita K, Hatanaka K, Harada K, Miyagishima T, Hisai H, Ishiguro A, Ueda A, Kato T, Sasaki T, Shindo Y, Yokota I, Takagi R, Sakata Y, Komatsu Y : HGCSG1902: Multicenter, prospective, observational study for cases with dysgeusia caused by chemotherapy for gastrointestinal cancer . ESMO GI , WEB 開催, 2020 年 7 月 1 日

Kagawa Y, E. Elez Fernandez, J. Garcia-Foncillas, H. Bando, Taniguchi H, A. Vivancos, Akagi K, A. Garcia, Denda T, J. Ros, Nishina T, I. Baraibar, Komatsu Y, D. Ciardiello, Oki E, Satoh T, Kato T, Yamanaka T J. Tabernero Yoshino T: METABEAM study: Combined analysis of concordance studies between liquid and tissue biopsies for RAS mutations in colorectal cancer patients with single metastatic sites . ESMO GI , WEB 開催, 2020 年 7 月 1 日

Nakajima H, Kotani D, Oki E, Kato T, Shinozaki E, Sunakawa Y, Bando H, Yamazaki K, Yuki S, Yoshino T, Yamanaka T, Ohta T, Taniguchi H, Kagawa Y: REMARRY and PURSUIT trials: Liquid biopsy-guided re-challenge of anti-EGFR monoclonal antibody for patients with RAS/BRAF V600E wild-type metastatic colorectal cancer . ESMO GI , WEB 開催, 2020 年 7 月 1 日

Yuki S, Bando H, Tsukada Y, Inamori K, Komatsu Y, Homma S, Uemura M, Kato T, Kotani D, Fukuoka S, Nakamura N, Fukui M, Wakabayashi M, Kojima M, Sato A, Togashi Y, Nishikawa H, Ito M, Yoshino T : Short-term results of VOLTAGE-A: Nivolumab monotherapy and subsequent radical surgery following preoperative chemoradiotherapy in patients with microsatellite stability and microsatellite instability-high, locally advanced rectal cancer (EPOC1504) . ESMO GI , WEB 開催, 2020 年 7 月 1 日

Yoshino T, Kotaka M, Manaka D, Eto T, Hasegawa J, Takagane A, Nakamura M, Kato T, Munemoto Y, Nakamura F, Bando H, Taniguchi H, Sakamoto Y, Shiozawa M, Nishi M, Horiuchi T, Mizushima T, Yamanaka T, Ohtsu A, Mori M : OS and long-term DFS with 3- vs. 6-month adjuvant oxaliplatin and fluoropyrimidine-based therapy for stage III colon cancer patients: A randomized phase III ACHIEVE trial . ESMO Virtual , WEB 開催, 2020 年 9 月 18 日

Hamaguchi T, Shimada Y, Mizusawa J, Kanemitsu Y, Shiomi A, Komori K, Ohue M, Watanabe J, Takiguchi N, Nishizawa Y, Takii Y, Ojima H, Funakoshi T, Kato T, Kobatake T, Yamaguchi T, Takashima A, Katayama H, Fukuda H : Six-year updated results of Japan Clinical Oncology Group study (JCOG0910): Randomized phase III study of adjuvant chemotherapy with S-1 versus capecitabine in patients with stage III colorectal cancer . ESMO Virtual , WEB 開催, 2020 年 9 月 17 日

Yukami H, Saori M, Kotani D, Oki E, Taniguchi H, Nakamura Y, Kato T, Takemasa I, Yamanaka T, Shirasu H, Sawada K, Ebi H, A. Aleshin , P. Billings , Mori M, Yoshino T : Prospective observational study monitoring circulating tumour DNA in resectable

colorectal cancer patients undergoing radical surgery: GALAXY study in CIRCULATE-Japan . ESMO Asia Virtual 2020 , WEB 開催, 2020 年 11 月 22 日

Oki E, Kotaka M, Manaka D, Shiozawa M, Sakamoto Y, Munemoto Y, Eto T, Shitara K, Kato T, Shiomi A, Hasegawa J, Makiyama A, Yamanaka T, Mizushima T, Yamazaki K, Sunami E, Ohtsu A, Maehara Y, Mori M, Yoshino T: Clinicopathological characteristics and impact on efficacy of three versus six months of adjuvant chemotherapy in early-onset colon cancer: ACHIEVE and ACHIEVE-2 trials. ASCO GI2021 , WEB 開催, 2021 年 1 月 15 日-17 日

Yasuda A, Matsuyama J, Terazawa T, Goto M, Kawabata R, Endo S, Imano M, Fujita S, Akamaru Y, Taniguchi H, Tatsumi M, Sang-Woong Lee, Kawakami H, Kurokawa Y, Shimokawa T, Sakai D, Kato T, Fujitani K, Satoh T: A phase II study of perioperative capecitabine plus oxaliplatin for clinical SS/SE N1-3 M0 gastric cancer (OGSG1601). ASCO GI2021 , WEB 開催, 2021 年 1 月 15 日-17 日

Yoshino T, Uetake H, Tsuchihara K, Shitara K, Yamazaki K, Watanabe J, Oki E, Sato T, Naitoh T, Komatsu Y, Kato T, Mori I, Yamanaka K, Hihara M, Soeda J, Yamanaka T, Akagi K, Ochiai A, Muro K: PARADIGM study: A multicenter, randomized, phase III study of mFOLFOX6 plus panitumumab or bevacizumab as first-line treatment in patients with RAS (KRAS/NRAS) wild-type metastatic colorectal cancer. ASCO GI2021 , WEB 開催, 2021 年 1 月 15 日-17 日

Bando H, Kotani D, Kotaka M, Kawazoe A, Masuishi T, Satake H, Taniguchi H, Yamazaki K, Yamanaka T, Oki E, Yoshino T, Muro K, Komatsu Y, Kato T, Tsuji A: Quadruplet regimen with capecitabine, irinotecan, oxaliplatin, and bevacizumab in chemo-naïve patients with metastatic colorectal cancer: Results from the safety lead-in of QUATTRO-II study. ASCO GI2021 , WEB 開催, 2021 年 1 月 15 日-17 日

Inamori K, Togashi Y, Bando H, Tsukada Y, Fukuoka S, Suzuki A, Suzuki Y, Kotani D, Kojima M, Fukui M, Yuki S, Komatsu Y, Homma S, Taketomi A, Uemura M, Kato T, Ito M, Nishikawa H, Yoshino T: Translational research of VOLTAGE-A: Efficacy predictors of preoperative chemoradiotherapy and consolidation nivolumab in patients with both microsatellite stable and microsatellite instability-high locally advanced rectal cancer . ASCO GI2021 , WEB 開催 , 2021 年 1 月 15 日-17 日

Kosaka H, Nishimura Y, Kaneda A, Masuda N, Tamura K, Saji S, Iwata H, Mori K. 2913 / 3 - Entinostat (KHK2375), class I histone deacetylase inhibitor, regulates human Treg function by decreasing Foxp3 expression and effector Treg population. AACR Annual Meeting 2020, WEB 開催, 2020 年 6 月 22 日

Masuda N, Hurvitz S, Vahdat L, Harbeck N, Wolff AC, Tolaney SM, Loi S, O'Shaughnessy J, Xie D, Walker L, Rustia E, Borges VF. HER2CLIMB-02: A randomized, double-blind, phase III study of tucatinib or placebo with T-DM1 for unresectable

locally-advanced or metastatic HER2+ breast cancer. ESMO Asia Virtual Congress 2020, WEB 開催, 2020 年 11 月 22 日

Masuda N, Ohsumi S, Nishimura R, Akashi-Tanaka S, Suemasu K, Yamauchi H, Tokunaga E, Ikeda T, Nishi T, Hayashi H, Iino Y, Takatsuka Y, Inaji H. Combined analysis of the WORTH 1 and WORTH 2 studies of ipsilateral breast tumor recurrence after breast conservative surgery without radiotherapy using the “5-mm thick slice and 5-mm free margin method”. San Antonio Breast Cancer Symposium 2020, WEB 開催, 2020 年 12 月 9 日

Krop I, Yonemori K, Takahashi S, Inoue K, Nakayama T, Iwata H, Toyama T, Yamamoto Y, Takahashi M, Osaki A, Saji S, Sagara Y, O'Shaughnessy J, Traina T, Ohwada S, Qi Z, Qiu Y, Onuma H, Sharma O, Mekan S, Masuda N. Safety and efficacy results from the phase 1/2 study of U3-1402, a human epidermal growth factor receptor 3 (HER3)-directed antibody drug conjugate (ADC), in patients with HER3-expressing metastatic breast cancer (MBC). San Antonio Breast Cancer Symposium 2020, WEB 開催, 2020 年 12 月 9 日

Masuda J, Tsurutani J, Masuda N, Tanabe Y, Iwasa T, Takahashi M, Futamura M, Matsumoto K, Aogi K, Iwata H, Hosonaga M, Mukohara T, Yoshimura K, Takano T. Phase II study of nivolumab in combination with abemaciclib plus endocrine therapy in patients with HR+, HER2- metastatic breast cancer: WJOG11418B NEWFLAME trial. San Antonio Breast Cancer Symposium 2020, WEB 開催, 2020 年 12 月 9 日

Ozaki Y, Kitano S, Tsurutani J, Iwasa T, Takahashi M, Mukohara T, Masuda N, Futamura M, Minami H, Matsumoto K, Kawabata H, Yamashita M, Yoshimura K, Takano T. Immunological analysis of the combination therapy of nivolumab, paclitaxel and bevacizumab in patients with HER2-negative MBC in NEWBEAT trial (WJOG9917BTR). San Antonio Breast Cancer Symposium 2020, WEB 開催, 2020 年 12 月 9 日

Iwatani T, Hara F, Shien T, Takahashi M, Masuda N, Yasojima H, Sagara Y, Mizutani T, Sasaki K, Nakamura K, Fukuda H, Shiroya T, Iwata H. Estimation of willingness-to-pay for breast cancer treatments through contingent valuation method in Japanese breast cancer patients (JCOG1709A); preliminary study findings. San Antonio Breast Cancer Symposium 2020, WEB 開催, 2020 年 12 月 9 日

Hurvitz S, Vahdat L, Harbeck N, Wolff AC, Tolaney SM, Loi S, Masuda N, O'Shaughnessy J, Dong C, Walker L, Rustia E, Borges VF. HER2CLIMB-02: A randomized, double-blind, phase 3 study of tucatinib or placebo with T-DM1 for unresectable locally-advanced or metastatic HER2+ breast cancer. San Antonio Breast Cancer Symposium 2020, WEB 開催, 2020 年 12 月 9 日

Yamamoto Y, Iwata H, Naruto T, Masuda N, Takahashi M, Yoshinami T, Ueno, Toyama

T, Yamanaka T, Takano T, Kashiwaba M, Tsugawa K, Hasegawa Y, Tamura K, Tada K, Hara F, Saji S, Morita S, Toi M, Ohno S. A randomized, open-label, phase III trial of pertuzumab re-treatment in HER2-positive, locally advanced/metastatic breast cancer patients previously treated with pertuzumab, trastuzumab, and chemotherapy: The Japan Breast Cancer Research Group-M05 (PRECIOUS) study. San Antonio Breast Cancer Symposium 2020, WEB 開催, 2020 年 12 月 10 日

Kashiwaba M, Nakayama T, Sangai T, Morimoto T, Yasojima H, Yamamoto Y, Ohno S, Masuda N. A randomized phase II trial of interventions with frozen groves and compression stockings to prevent nab-paclitaxel induced chemotherapy-induced peripheral neuropathy (SPOT trial). San Antonio Breast Cancer Symposium 2020, WEB 開催, 2020 年 12 月 9 日

B-3

高見康二、神崎隆、須崎剛行、船越康信、坂巻 靖、児玉 憲、横内秀起、池田直樹、門田嘉久、岩崎輝雄、大瀬奈緒子、新谷 康：子宮悪性腫瘍肺転移に対する肺切除の治療成績。第 82 回日本臨床外科学会総会、WEB 開催、2020 年 10 月 29 日-31 日

平尾素宏、永妻佑季子、浜川卓也、西川和宏、西菌博章、内藤裕子、高見康二、加藤健志、宮本敦史、増田慎三、濱 直樹、三宅正和、高橋佑典、三代雅明、俊山礼志、八十島宏行、水谷麻紀子、藤原綾子、太谷陽子：上部消化管悪性疾患患者にたいする術前栄養・運動療法導入の試み。第 120 回日本外科学会定期学術集会 WEB 開催、2020 年 8 月 14 日

小高雅人、間中 大、江頭徹哉、長谷川順一、高金明典、中村将人、加藤健志、宗本義則、中村文隆、伴登宏行、山中竹春、水島恒和、吉野孝之、大津 敦、森正樹：stageⅢ結腸癌患者における術後血清 CEA と無病生存期間(DFS)の関連性:ACHIEVE 試験より。第 58 回日本癌治療学会学術集会、京都、2020 年 10 月 22 日

加藤健志、坂東英明、植村 守、小松嘉人、本間重紀、塚田祐一郎、伊藤雅昭、吉野孝之：マイクロサテライト不安定性のない(MMS)切除可能直腸癌症例に対する術前化学放射線療法(CRT)後の逐次治療としてのニボルマブ(nivo)療法の検討 VOLTAGE 試験。第 75 回日本大腸肛門病学会学術集会、WEB 開催、2020 年 11 月 13 日-14 日

加藤健志：切除不能大腸癌に対する免疫チェックポイント阻害剤の役割。JDDW2020KOBÉ サテライトシンポジウム、神戸、2020 年 11 月 7 日

増田慎三：乳癌臨床研究の up to date2020。第 32 回日本内分泌外科学会総会、WEB 開催、2020 年 9 月 18 日

Ozaki Y, Mukohara T, Tsurutani J, Takahashi M, Matsumoto K, Futamura M, Masuda N, Kitano S, Yoshimura K, Minami H, Takano T. A multicenter Phase II study evaluating the efficacy of nivolumab plus paclitaxel plus bevacizumab triple-combination therapy as a first-line treatment in patients with HER2-negative metastatic breast cancer: WJOG9917B NEWBEAT trial. 第 28 回日本乳癌学会学術総会、WEB 開催、2020 年 10 月 9 日

大谷彰一郎、佐治重衡、長谷川善枝、藤澤知己、柏葉匡寛、石田孝宣、山本 豊、石川 孝、永井成勲、芳林浩史、松本光史、相良安昭、北田正博、高野利美、高田正泰、増田慎三、平 成人、森田智視、大野真司、戸井雅和：進行乳癌に対する wPTX+BV 導入療法後のホルモン維持療法の有用性; JBCRG BOOSTER 試験。第 28 回日本乳癌学会学術総会、WEB 開催、2020 年 10 月 14 日

高橋將人、増田慎三、吉波哲大、八十島宏行、橘高信義、大谷彰一郎、金昇晋、倉上弘幸、山本尚子、山田知美、高田武彦、中山貴寛：HER2 陽性転移性乳癌における T-DM1 治療直後の薬物療法の有効性; KBCSG-TR1917 観察研究。第 28 回日本乳癌学会学術総会、WEB 開催、2020 年 10 月 14 日

杉江知治、井本 滋、石田孝宣、伊藤良則、岩田広治、増田慎三、向井博文、佐治重衡、清水 章、池田隆文、芳賀博典、佐伯俊昭、青儀健二郎、上野貴之、木下貴之、甲斐裕一郎、北田正博、大橋靖雄、大野真司、戸井雅和：ホルモン受容体陽性乳癌の術後内分泌療法における S-1 の併用効果 (POTENT 試験)。第 28 回日本乳癌学会学術総会、WEB 開催、2020 年 10 月 14 日

岩谷胤生、原 文堅、枝園忠彦、高橋將人、増田慎三、相良安昭、佐々木啓太、白岩健、岩田広治：日本人乳癌患者が考える生命や健康に対する金銭的価値を検証する前向き観察研究; JCOG1709A-プレ調査結果。第 28 回日本乳癌学会学術総会、WEB 開催、2020 年 10 月 14 日

増田慎三：原発性 HER2 陽性乳癌の最適ストラテジー2020。第 82 回日本臨床外科学会、WEB 開催、2020 年 10 月 29 日

山中隆司、藤澤孝夫、内藤陽一、服部正也、増田慎三、山下年成、能澤一樹、深澤陽子、八十島宏行、松原由佳、向原徹、大谷陽子、洞澤智至、倉本尚美、坂本泰理、中村能章、谷口浩也、吉野孝之、岩田広治：Genomic Landscape of Circulating Tumor DNA (ctDNA) in Patients with Advanced Breast Cancer: SCRUM-Japan MONSTAR-SCREEN。第 18 回日本臨床腫瘍学会学術集会、WEB 開催、2021 年 2 月 19 日

遠山竜也、山本 豊、岩田広治、高橋將人、吉波哲大、上野貴之、山中隆司、高野利実、柏葉匡寛、増田慎三、津川浩一郎、長谷川善枝、田村研治、多田寛、平成人、原 文堅、佐治重衡、森田智視、戸井雅和、大野真司：PRECIOUS: Pertuzumab re-treatment for HER2-positive locally advanced/metastatic breast cancer (JBCRG-M05)。

第 18 回日本臨床腫瘍学会学術集会、WEB 開催、2021 年 2 月 20 日

増田慎三、向原 徹、小野麻紀子、平尾素宏、下井辰徳、小島隆嗣、佐藤靖祥、八十島宏行、米盛 勸、後藤功一、高橋俊二、鈴木拓也、奥村詩織、永井玲子、高瀬貴夫、田村研治：Phase 1 Expansion Study of Liposomal Formulation of Eribulin (E7389-LF) for Solid Tumors: Focus on Breast Cancer。第 18 回日本臨床腫瘍学会学術集会、WEB 開催、2021 年 2 月 21 日

西川和宏、小泉和三郎、円谷 彰、山中竹春、森田智視、藤谷和正、赤丸祐介、嶋田顕、保坂尚志、中山昇典、辻仲利政、坂本純一：切除不能胃癌二次化学療法における CPT-11 + CDDP 併用療法と CPT-11 単独療法とを比較する 2 つのランダム化試験の統合解析。第 120 回日本外科学会定期学術集会、WEB 開催、2020 年 8 月 14 日

Yasojima H, Takano T, Masuda N, Hattori M, Tsugawa K, Inoue K, Matsumoto K, Ohtani S, Ishikawa T, Yamamoto K, Nohata N, Karantza V, Cortes J, Iwata H. Pembrolizumab + Chemotherapy vs Chemotherapy in Metastatic TNBC: KEYNOTE-355 Japanese Subgroup Data. 第 28 回日本乳癌学会学術総会、WEB 開催、2020 年 10 月 14 日

池田雅彦、中山貴寛、吉波哲大、水谷麻紀子、山口美樹、菰池佳史、高島 勉、吉留克英、鶴谷純司、岩本充彦、藤澤文絵、八十島宏行、山村 順、山田知美、増田慎三：転移再発乳癌におけるパクリタキセル+ベバシズマブ導入化学療法後のホルモン療法+カペシタビン併用維持療法。第 28 回日本乳癌学会学術総会、WEB 開催、2020 年 10 月 14 日

浜川卓也、西川和宏、俊山礼志、三代雅明、高橋佑典、酒井健司、三宅正和、宮本敦史、加藤健志、平尾素宏：一般病院での技術認定（胃）取得を目指したチームビルディングとロードマップ。第 33 回近畿内視鏡外科研究会、WEB 開催、2020 年 9 月 26 日

高橋佑典、三代雅明、三宅正和、俊山礼志、酒井健司、浜川卓也、西川和宏、宮本敦史、平尾素宏、加藤健志：当院における大腸技術認定医取得のための取り組み。第 33 回近畿内視鏡外科研究会、WEB 開催、2020 年 9 月 26 日

高橋佑典、三代雅明、三宅正和、西川和宏、宮崎道彦、加藤健志：当科における TaTME 導入後の短期成績。第 75 回日本大腸肛門病学会学術集会、WEB 開催、2020 年 11 月 13 日-14 日

Takahashi Y, Miyo M, Miyake M, Kato T, Toshiyama R, Hamakawa T, Hama N, Nishikawa K, Miyamoto A, Miyazaki M, Hirao M : Short term outcome of TaTME in our institution. 第 33 回日本内視鏡外科学会総会、横浜・WEB 開催、2021 年 3 月 11 日

三代雅明、三宅正和、加藤健志、佐藤広陸、俊山礼志、浜川卓也、濱直樹、西川和宏、宮本敦史、平尾素宏：Device for avoiding complications in laparoscopic surgery for locally recurrent colorectal cancer。第120回日本外科学会定期学術集会、WEB開催、2020年8月13日

三代雅明、高橋佑典、三宅正和、加藤健志、西川和宏、宮崎道彦：当科におけるpStageⅢの治療成績について。第75回日本大腸肛門病学会学術集会、WEB開催、2020年11月13日-14日

Miyo M, Takahashi Y, Miyake M, Kato T, Toshiyama R, Hamakawa T, Hama N, Nishikawa K, Miyamoto A, Hirao M：Outcomes of laparoscopic lateral lymph node dissection in rectal cancer recurrence surgery。第75回日本消化器外科学会総会、WEB開催、2020年12月15日-17日

宮崎葉月、三代雅明、高橋佑典、三宅正和、宮崎道彦、加藤健志、俊山礼志、浜川卓也、濱直樹、宮本敦史、西川和宏、平尾素宏：当科におけるHIV患者の急性虫垂炎に対する外科的治療。第56回日本腹部救急医学会総会、WEB開催、2020年10月8日

眞能正幸：がんゲノム医療時代の病理 遺伝子検査の精度管理と検査部門のマネジメントについて。第74回国立病院総合医学会、新潟Web開催（オンデマンド配信）、2020年10月17日-11月14日

眞能正幸：「臨床医から病理医へ、病理医から臨床医へのアドバイス、基調講演」第74回日本食道学会学術集会、徳島、12月11日、ハイブリッド開催（オンデマンド配信 2020年12月11日～ 2021年1月11日）

B-4

高見康二、藤原綾子、森清、栗山啓子：肺悪性腫瘍切除断端に発生した非悪性肺結節の2例。第37回日本呼吸器外科学会学術集会、WEB開催、2020年9月29日

平尾素宏、赤坂智史、眞能正幸、西川和宏、浜川卓也、石田永、三田英治、加藤健志、宮本敦史、濱直樹、三宅正和、三代雅明、高橋佑典、俊山礼志：胃癌ESD偶発穿孔後腹膜播種例の検討。第92回日本胃癌学会総会、WEB開催、2020年7月1日

平尾素宏、西川和宏、浜川卓也、眞能正幸、高見康二、加藤健志、宮本敦史、増田慎三、田中英一：集学的治療によるアブスコパル効果がみられた食道胃接合部癌術後再発症例。第74回日本食道学会学術集会、WEB開催、2020年12月10日-11日

平尾素宏、西川和宏、浜川卓也、加藤健志、宮本敦史、濱直樹、三宅正和、高橋佑典、三代雅明、俊山礼志：免疫チェックポイント阻害剤併用によってアブスコパル効果の増強がみられた食道胃接合部癌再発症例。第 75 回日本消化器外科学会総会、WEB 開催、2020 年 12 月 15 日-17 日

平尾素宏、西川和宏、浜川卓也、眞能正幸、高見康二、加藤健志、宮本敦史、増田慎三、田中英一、赤坂智史、石田 永、三田英二、眞能正幸、加藤健志、三宅正和、酒井健司、高橋佑典、三代雅明、俊山礼志：胃癌内視鏡的切除時の偶発穿孔後腹膜播種例の検討。第 93 回日本胃癌学会総会、WEB、2021 年 3 月 3 日-5 日

佐竹悠良、加藤健志、後藤昌弘、寺澤哲志、太田勝也、能浦真吾、賀川義規、川上尚人、長谷川裕子、坂井大介、黒川幸典、下川敏雄、佐藤太郎：多剤併用療法が適さない RAS 野生型大腸がんに対する一次治療パニツムマブ単剤療法。第 58 回日本癌治療学会学術集会、京都、2020 年 10 月 22 日

小高雅人、間中 大、江頭徹哉、長谷川順一、高金明典、中村将人、加藤健志、宗本義則、中村文隆、水島恒和、山中竹春、大津敦、森 正樹：結腸癌術後補助薬物療法の至適治療期間を検証した ACHIEVE 試験の全生存期間の結果報告。第 58 回日本癌治療学会学術集会、京都、2020 年 10 月 22 日

吉野孝之、加藤健志、江崎泰斗、高島淳生、塩澤 学、中島貴子、竹内伸司、佐藤太郎、小松嘉人、室圭：BRAF V600E 変異転移性大腸がんにおける Encorafenib±Binimetinib+Cetuximab 併用療法。第 58 回日本癌治療学会学術集会、京都、2020 年 10 月 22 日

金 浩敏、工藤敏啓、長谷川順一、中田 健、加藤健志、村田幸平、真貝竜史、武元浩新、池永雅一、植村 守、松田宙、佐藤太郎、水島恒和、土岐祐一郎、江口英利：進行再発大腸癌に対する 1 次治療としての CAPOX(L-OHP100mg/m²)+BEV 療法の有効性の検討。第 58 回日本癌治療学会学術集会、京都、2020 年 10 月 22 日

宮本敦史、濱 直樹、俊山礼志、三代雅明、高橋佑典、浜川卓也、三宅正和、西川和宏、加藤健志、平尾素宏：局所進行膵癌に対する conversion surgery の臨床的意義に関する検討。第 75 回日本消化器外科学会総会、WEB 開催、2020 年 12 月 15 日-17 日

津田 均、黒住昌史、秋山 太、大野真司、増田慎三、佐治重衡、下村昭彦、佐藤信昭、高尾信太郎、大住省三、徳田 裕、稲治英生、渡辺 亨、大橋靖雄：NSAS-BC-01 研究におけるリンパ節転移なし浸潤性乳癌ハイリスク群の組織病理学的核グレーディングシステムの検証。第 79 回日本癌学会学術総会、WEB 開催、2020 年 10 月 1 日

金子耕司、川口英俊、増田慎三、中山貴寛、青儀健二郎、阿南敬生、伊藤良則、大谷彰一郎、佐治重衡、徳永えり子、中村清吾、長谷川善枝、藤澤知巳、山口美樹、山下年成、山本 豊、森田智視、戸井雅和、大野真司：大規模コホート研究からの閉経後 ER 陽性進行・再発乳癌における OS に関する因子の検討 (JBCRG-C06: Safari)。第 28 回日本乳癌学会学術総会、WEB 開催、2020 年 10 月 14 日

原文堅、津川浩一郎、岩田広治、大谷彰一郎、相良安昭、戸井雅和、西村令喜、増田慎三、石黒功二、吉本拓矢、伊藤良則：HER2 陽性早期乳癌に対する Pertuzumab 術後療法の有効性・安全性を検証した APHINITY 試験の日本人部分集団解析。第 28 回日本乳癌学会学術総会、WEB 開催、2020 年 10 月 14 日

中山貴寛、川口英俊、増田慎三、青儀健二郎、阿南敬生、伊藤良則、大谷彰一郎、金子耕司、佐治重衡、徳永えり子、中村清吾、長谷川善枝、藤澤知巳、山口美樹、山下年成、山本 豊、森田智視、戸井雅和、大野真司：術後内分泌療法が ER+HER2- 進行再発乳癌の内分泌療法に及ぼす影響：JBCRG-C06 サブ解析。第 28 回日本乳癌学会学術総会、WEB 開催、2020 年 10 月 14 日

増田慎三、井上賢一、岩田広治、高橋将人、伊藤良則、三好康雄、森丈治、坂口佐知、Sledge GW、戸井雅和：MONARCH 2 日本人部分集団解析：進行乳癌における abemaciclib と fulvestrant 併用での全生存期間。第 28 回日本乳癌学会学術総会、WEB 開催、2020 年 10 月 14 日

二村学、大庭真梨、増田慎三、中山貴寛、櫻井健一、坂東裕子、岡田守人、山本豊、金 敬徳、佐伯俊昭、長嶋 健、桑山隆志、唐宇飛、平野 明、井口雅史、山神和彦、水野 豊、小島康幸、八十島宏行、大野真司：乳癌術前化学療法におけるアブラキサンの有用性についての大規模統合解析 (JBCRG-S01)。第 28 回日本乳癌学会学術総会、WEB 開催、2020 年 10 月 14 日

増山美里、川口英俊、増田慎三、中山貴寛、青儀健二郎、阿南敬生、伊藤良則、大谷彰一郎、金子耕司、佐治重衡、徳永えり子、中村清吾、長谷川善枝、藤澤知巳、山口美樹、山下年成、山本 豊、森田智視、戸井雅和、大野真司：ホルモン陽性 HER2 陽性進行再発乳癌におけるフルベストラントの治療成績 (JBCRG-C06 Safari 試験) の検討。第 28 回日本乳癌学会学術総会、WEB 開催、2020 年 10 月 14 日

増田慎三、Sara Hurvitz、Linda Vahdat、Nadia Harbeck、Antonio C. Wolff、Sara M. Tolaney、Sherene Loi、O'Shaughnessy Joyce、Diqiong Xie、Luke Walker、Evelyn Rustia、Virginia F. Borges：HER2CLIMB-02: Tucatinib or placebo with T DM1 for unresectable locally-advanced or metastatic HER2+ breast cancer。第 18 回日本臨床腫瘍学会学術集会、WEB 開催、2021 年 2 月 18 日

増田慎三、Luke Walker、Sherry Tan、Evelyn Rustia、Keiko Yamamoto：HER2CLIMB-03: Phase 2 study of tucatinib with trastuzumab and capecitabine in HER2+ locally

advanced unresectable or MBC。第 18 回日本臨床腫瘍学会学術集会、WEB 開催、2021 年 2 月 18 日

西川和宏、木村 豊、岸健太郎、井上健太郎、松山 仁、赤丸祐介、田村茂行、柳本喜智、川田純司、川瀬朋乃、川端良平、菅野仁士、山田岳史、内田英二、下川敏雄、今村博司：胃癌術後症例に対する早期の成分栄養剤介入が術後晩期の体重減少と骨格筋量に及ぼす影響に関する検討。第 92 回日本胃癌学会総会、WEB 開催、2020 年 7 月 1 日

西川和宏、田村茂行、谷口博一、竹野 淳、今村博司、藤田淳也、松山 仁、木村豊、川田純司、平尾素宏、広田将司、藤谷和正、黒川幸典、坂井大介、下川敏雄、佐藤太郎：進行・再発胃癌既治療症例に対する減量 nab-paclitaxel 療法の第二相試験。JDDW2020、WEB 開催、2020 年 11 月 6 日

西川和宏、小泉和三郎、円谷 彰、藤谷和正、赤丸祐介、嶋田 顕、保坂尚志、中山昇典、辻仲利政、坂本純一：進行再発胃癌二次化学療法における IRI+CDDP 療法と IRI 単独療法とを比較する 2 つのランダム化試験の統合解析。第 75 回日本消化器外科学会総会、WEB 開催、2020 年 12 月 15 日-17 日

三宅正和、植村守、池田正孝、三代雅明、高橋佑典、加藤健志、宮崎道彦、俊山礼志、浜川卓也、濱 直樹、西川和宏、宮本敦史、平尾素宏：直腸がん他臓器合併切除後の骨盤死腔炎予防についての検討。第 120 回日本外科学会定期学術集会、WEB 開催、2020 年 8 月 13 日

三宅正和、三代雅明、高橋佑典、加藤健志、俊山礼志、浜川卓也、濱 直樹、西川和宏、宮本敦史、宮崎道彦、平尾素宏：当院における閉塞性大腸癌の治療戦略～56 例の検討～。第 56 回日本腹部救急医学会総会、WEB 開催、2020 年 10 月 8 日

三宅正和、三代雅明、高橋佑典、加藤健志、俊山礼志、浜川卓也、濱 直樹、西川和宏、宮本敦史、平尾素宏：他臓器浸潤を伴う T4b 局所進行結腸癌に対する腹腔鏡手術。第 75 回日本消化器外科学会総会、WEB 開催、2020 年 12 月 15 日-17 日

土井貴司、高見康二、小河原光正、木村 剛、宮本智、安藤性實、角永茂樹、森清、栗山啓子：肺原発滑膜肉腫の 1 切除例。第 61 回日本肺癌学会学術集会、岡山、2020 年 11 月 14 日

柏葉匡寛、中山貴寛、三階貴史、森本 卓、八十島宏行、山本 豊、熊谷真澄、安原加奈、吉田ミナ、岡本泰子、山中竹春、大野真司、増田慎三：nab-PTX の末梢神経障害予防に対するフローズングローブ、弾性ストッキングによる第 II 相試験（SPOT 試験）。第 28 回日本乳癌学会学術総会、WEB 開催、2020 年 10 月 14 日

Hamakawa T, Nishikawa K, Toshiyama R, Miyo M, Takahashi Y, Miyake M, Hama N, Miyamoto A, Kato T, Hirao M : Risk factors for body weight loss after proximal gastrectomy。第 92 回日本胃癌学会総会、WEB 開催、2020 年 7 月 1 日

浜川卓也、西川和宏、俊山礼志、三代雅明、高橋佑典、藤原綾子、三宅正和、濱直樹、宮本敦史、加藤健志、高見康二、平尾素宏 : StageIV 胃癌に対する化学療法後胃切除の意義の検討。第 120 回日本外科学会定期学術集会、WEB 開催、2020 年 8 月 14 日

浜川卓也、西川和宏、三代雅明、俊山礼志、高橋佑典、三宅正和、濱直樹、宮本敦史、加藤健志、平尾素宏 : 腹臥位胸腔鏡手術中に同定した右上肺区域静脈 (V2) 走行異常を伴う食道癌の 1 例。第 74 回日本食道学会学術集会、WEB 開催、2020 年 12 月 10 日-11 日

浜川卓也、西川和宏、俊山礼志、三代雅明、高橋佑典、三宅正和、濱直樹、宮本敦史、加藤健志、平尾素宏 : 腹腔鏡下胃癌手術後の自動縫合器を用いた再建-修練医に安全に習得してもらうための定型化-。第 75 回日本消化器外科学会総会、WEB 開催、2020 年 12 月 15 日-17 日

浜川卓也、西川和宏、俊山礼志、三代雅明、高橋佑典、酒井健司、三宅正和、宮本敦史、加藤健志、平尾素宏 : 膈体尾部欠損を合併した胃癌患者に対して腹腔鏡下幽門側胃切除術を施行した 1 例。第 93 回日本胃癌学会総会、WEB 開催、2021 年 3 月 3 日-5 日

酒井健司、大橋朋文、大澤日出樹、井出義人、野呂浩史、平尾隆文、畑中信良、山崎芳郎 : 腹腔鏡下脾臓摘出術を施行した脾 littoral cell angioma の 1 例。第 75 回日本消化器外科学会総会、WEB 開催、2020 年 12 月 15 日-17 日

藤原綾子、高見康二、森清、眞能正幸、井上敦夫、栗山啓子 : 当院における婦人科悪性腫瘍肺転移に対する肺切除例の検討。第 37 回日本呼吸器外科学会学術集会、WEB 開催、2020 年 9 月 29 日

高橋佑典 : 大阪医療センターにおける大腸技術認定取得に向けた取り組み。第 75 回日本大腸肛門病学会学術集会共催セミナー、WEB 開催、2020 年 11 月 14 日

高橋佑典、三代雅明、三宅正和、加藤健志、俊山礼志、浜川卓也、濱直樹、西川和宏、宮本敦史、平尾素宏 : 当院における 80 歳以上の初発大腸癌患者に対する外科治療。第 75 回日本消化器外科学会総会、WEB 開催、2020 年 12 月 15 日-17 日

大谷陽子、水谷麻紀子、八十島宏行、増山美里、森清、増田慎三 : 術前化学療法を施行したホルモン陽性 HER2 陰性乳癌の予後予測における CPS+EG staging system の有用性。第 28 回日本乳癌学会学術総会、WEB 開催、2020 年 10 月 14 日

三代雅明、高橋佑典、三宅正和、加藤健志、俊山礼志、浜川卓也、濱直樹、西川和宏、宮本敦史、宮崎道彦、平尾素宏：S状結腸癌術後の横行結腸癌手術における ICG 蛍光法の有用性について。第 74 回手術手技研究会、松江、2020 年 10 月 9 日

Miyo M、Miyake M、Takahashi Y、Kato T、Miyazaki H、Toshiyama R、Hamakawa T、Hama N、Nishikawa K、Miyamoto A、Miyazaki M、Hirao M：Laparoscopic appendectomy for acute appendicitis in HIV patients。第 33 回日本内視鏡外科学会総会、横浜・WEB 開催、2020 年 3 月 12 日

俊山礼志、宮本敦史、濱直樹、三代雅明、高橋佑典、浜川卓也、藤原綾子、三宅正和、西川和宏、加藤健志、高見康二、平尾素宏：全身性エリテマトーデスに併発した出血性胆嚢炎の 1 例。第 74 回手術手技研究会、松江、2020 年 10 月 9 日

Toshiyama R、Miyamoto A、Hama N、Miyo M、Takahashi Y、Hamakawa T、Fujiwara A、Miyake M、Nishikawa K、Kato T、Hirao M、Takami K：Study of cases of gangrenous cholecystitis surgery performed in our hospital。第 32 回日本肝胆膵外科学会学術集会、WEB 開催、2021 年 2 月 23 日-24 日

長江 歩、植村 守、高橋秀和、三吉範克、三宅正和、松田 宙、加藤健志、水島恒和、土岐祐一郎、江口英利：直腸癌局所再発症例に対する仙骨合併切除後の排尿障害についての検討。第 75 回日本消化器外科学会総会、WEB 開催、2020 年 12 月 15 日-17 日

加藤伸弥、浜川卓也、西川和宏、俊山礼志、三代雅明、高橋佑典、藤原綾子、三宅正和、濱直樹、宮本敦史、宮崎道彦、加藤健志、高見康二、平尾素宏：早期胃癌に対する噴門側胃切除術食道残胃吻合およびダブルトラクト再建の短期成績。第 92 回日本胃癌学会総会、WEB 開催、2020 年 7 月 1 日

加藤伸弥、西川和宏、浜川卓也、俊山礼志、三代雅明、高橋佑典、三宅正和、濱直樹、宮本敦史、宮崎道彦、加藤健志、平尾素宏：皮膚悪性黒色腫の小腸転移による同時性 5 ヲ所多発腸重積の 1 手術例。第 56 回日本腹部救急医学会総会、WEB 開催、2020 年 10 月 8 日

加藤伸弥、三代雅明、三宅正和、宮崎道彦、加藤健志：S状結腸癌および小腸 GIST から重複して同時性多発肝転移を来した 1 例。第 75 回日本大腸肛門病学会学術集会、WEB 開催、2020 年 11 月 13 日-14 日

佐藤広陸、平尾素宏、浜川卓也、西川和宏、坂野悠、宮原 智、楠 誓子、瀬戸寛人、宮崎葉月、加藤伸弥、萩 美里、俊山礼志、三代雅明、藤原綾子、三宅正和、濱直樹、宮本敦史、宮崎道彦、加藤健志、高見康二：下部食道扁平上皮癌

に対する治療戦略—術前化学療法の主腫瘍径縮小率からの検討—。第 120 回日本外科学会定期学術集会、WEB 開催、2020 年 8 月 13 日

佐藤広陸、三宅正和、三代雅明、高橋佑典、加藤健志、俊山礼志、浜川卓也、濱直樹、西川和宏、宮本敦史、宮崎道彦、平尾素宏：HIV 感染者の自慰行為による直腸穿孔の一例。第 56 回日本腹部救急医学会総会、WEB 開催、2020 年 10 月 8 日

Miyazaki H、Hamakawa T、Nishikawa K、Toshiyama R、Miyo M、Takahashi Y、Miyake M、Hama N、Miyamoto A、Miyazaki M、Kato T、Takami K、Hirao M：Thoracoscopic esophagectomy for esophageal cancer with right superior pulmonary vein anomaly。第 33 回日本内視鏡外科学会総会、WEB 開催、2021 年 3 月 10 日-13 日

楠 誓子、浜川卓也、西川和宏、俊山礼志、三代雅明、三宅正和、濱直樹、宮本敦史、加藤健志、平尾素宏：腹腔鏡手術と単孔式胃内手術を併称した GIST の 2 例。第 92 回日本胃癌学会総会、WEB 開催、2020 年 7 月 1 日

楠 誓子、三代雅明、高橋佑典、三宅正和、加藤健志、俊山礼志、浜川卓也、濱直樹、西川和宏、宮本敦史、平尾素宏：切除可能大腸癌転移性肝腫瘍に対する術前化学療法の治療成績について。第 120 回日本外科学会定期学術集会、WEB 開催、2020 年 8 月 15 日

楠 誓子、三代雅明、高橋佑典、三宅正和、西川和宏、宮崎道彦、加藤健志：当院における肛門管扁平上皮癌に対する CRT の治療成績について。第 75 回日本大腸肛門病学会学術集会、WEB 開催、2020 年 11 月 13 日-14 日

楠 誓子、西川和宏、浜川卓也、俊山礼志、高橋佑典、三宅正和、濱直樹、宮本敦史、加藤健志、平尾素宏：胃癌肝転移切除症例の治療成績についての検討。第 75 回日本消化器外科学会総会、WEB 開催、2020 年 12 月 15 日-17 日

瀬戸寛人、浜川卓也、平尾素宏：水平脚十二指腸癌に対して腹腔鏡内視鏡合同手術を施行した 1 例。第 75 回日本消化器外科学会総会、WEB 開催、2020 年 12 月 15 日-17 日

宮原 智、藤原綾子、栗山啓子、森 清、眞能正幸、高見康二：自然退縮の後に再増大を認めた原発性肺癌の 3 例。第 37 回日本呼吸器外科学会学術集会、WEB 開催、2020 年 9 月 29 日

宮原 智、高橋佑典、俊山礼志、三代雅明、浜川卓也、三宅正和、濱直樹、西川和宏、宮本敦史、加藤健志、平尾素宏：結腸癌イレウス加療中にイレウス管が原因と考えられる腸重積を認めた 1 例。第 56 回日本腹部救急医学会総会、WEB 開催、2020 年 10 月 8 日

宮原 智、西川和宏、浜川卓也、瀬戸寛人、楠誓子、宮崎葉月、植田隆太、三代雅明、高橋佑典、三宅正和、俊山礼志、酒井健司、宮本敦史、加藤健志、平尾素宏：術前 DOD 療法により pCR を得た高度リンパ節転移を伴う進行胃癌の 1 例。第 82 回日本臨床外科学会総会、WEB 開催、2020 年 10 月 29 日-31 日

今村沙弓、大谷陽子、水谷麻紀子、八十島宏行、眞能正幸、森 清、増田慎三：乳癌転移との鑑別を要した癌性腹膜炎の一例。第 204 回近畿外科学会、WEB 開催、2021 年 3 月 20 日

四方文子、相良安昭、上田純子、石丸美幸、江口恵子、鈴木美智子、竹久志穂、山本瀬奈、尾崎由記範、小谷はるる、枝園忠彦、田中希世、内藤陽一、野口瑛美、古川孝広、宮下 穰、八十島宏行、増田慎三、岩田広治：転移性乳癌患者に対するアドバンス ケア プランニング (ACP) の現状調査-看護師の回答を中心に-。第 28 回日本乳癌学会学術総会、WEB 開催、2020 年 10 月 14 日

林 大誠、檜 彰良、中山良平、児玉良典、眞能正幸、吉岡絵麻、兼松大介、正札智子、金村米博：Modified Cycle-Consistent Adversarial Network を用いた病理組織画像における染色度合いの正規化を伴う病理組織分類。第 39 回日本医用画像工学会大会、WEB、 2020 年 9 月 17 日

沖田典子、正札智子、兼松大介、吉岡絵麻、児玉良典、眞能正幸、木下 学、埜中正博、藤中俊之、金村米博：Grade2,3 神経膠腫における MET-PET での IDH 変異と MGMT プロモーターメチル化率の予測。一般社団法人日本脳神経外科学会第 79 回学術総会、WEB、2020 年 10 月 15 日～17 日

沖田典子、正札智子、兼松大介、吉岡絵麻、児玉良典、眞能正幸、木下 学、埜中正博、藤中俊之、金村米博：Grade2,3 神経膠腫における MET-PET での IDH 変異と MGMT プロモーターメチル化率の予測。第 58 回日本癌治療学会学術集会、京都市、2020 年 10 月 24 日

藤原佐美、井上真里、中野理美、田口雅子、小野美菜子、江口富夫、福田 修、末武 貢、眞能正幸：MALDI-TOF-MS 購入後の微生物検査の運用について。第 74 回国立病院総合医学会、新潟 Web 開催 (オンデマンド配信)、2020 年 10 月 17 日-11 月 14 日

佐々木真依、児玉真由美、西 千夏、初山弘幸、末武貢、眞能正幸：採血室の開室時間変更による業務改善の取り組み。第 74 回国立病院総合医学会、新潟 Web 開催 (オンデマンド配信)、2020 年 10 月 17 日～11 月 14 日

B-5

加藤健志：総合的な大腸癌治療について～手術から薬物療法まで～。Total Treatment Sequence for CRC Conference in Fukui、大阪、2020 年 7 月 9 日

加藤健志:大腸がん化学療法について伝えたい3つの事柄。第7回平成大腸癌カンファレンス、Web開催、2020年9月1日

加藤健志:大腸癌薬物療法の最新知見。下関CRCオンラインセミナー、大阪、2020年10月28日

加藤健志:大腸がんとは。大腸がんWEBシンポジウム～今だからこそ、知り・理解する～、Web開催、2020年11月1日

加藤健志:BESTな大腸癌治療を目指して～進行・再発大腸癌化学療法戦略をUPDATE～。消化器癌カンファレンス in 香川、高松、2020年11月5日

加藤健志:大腸癌薬物療法の最新の話。Lilly Colorectal Cancer Symposium in 医学生ヶ丘、小倉、2020年11月10日

加藤健志:筑後消化器がんセミナー、Web開催、2021年1月15日

加藤健志:大腸がん薬物療法の最新の話。大腸がんWEBライブセミナー、Web開催、2021年2月10日

加藤健志:大腸がん薬物治療Update。大腸がんWEBライブセミナー兵庫、Web開催、2021年3月19日

増田慎三:HR+HER2-進行再発乳癌の治療ストラテジー～CDK4/6阻害剤の役割～。ファイザー インターネットシンポジウム JOIN 2020、大阪、2020年7月22日

増田慎三:今後の進行・再発乳癌治療における分子標的治療薬の意義・位置付けについて。乳がん治療における分子標的治療薬についてのWebセミナー、大阪、2020年7月28日

増田慎三:HR+HER2-進行再発乳癌の治療ストラテジー～CDK4/6阻害剤の役割～。Pfizer Breast Cancer Web Meeting in Hiroshima、WEB開催、2020年8月6日

増田慎三:乳がん診療とがんゲノム医療。第120回日本外科学会定期学術集会 ランチョンセミナー10、大阪、2020年8月13日

増田慎三:HR+HER2-早期乳癌における再発リスク評価と生物学的指標(Ki-67)の位置付けについて。Breast Cancer Ki-67 Advisory Board Meeting、WEB開催、2020年8月17日

増田慎三:PD-L1陽性トリプルネガティブ乳がんの標的治療とは。中外eセミナー on Breast Cancer for Tecentriq、大阪、2020年8月24日

増田慎三：HR+HER2-進行再発乳癌の治療ストラテジー～CDK4/6 阻害剤の役割～。
神奈川乳癌サミット、WEB 開催、2020 年 8 月 27 日

増田慎三：CDK4/6 阻害剤併用療法の最適化。第 17 回日本乳癌学会中部地方会共
催セミナー ランチョンセミナー4、WEB 開催、2019 年 9 月 13 日

増田慎三：HR 陽性 HER2 陰性 進行・再発乳癌治療における真のゴールとは？～
最新エビデンスを紐解く。Virtual Round Table Conference about Metastatic Breast
Cancer、WEB 開催、2020 年 9 月 24 日

増田慎三：HR+HER2-進行再発乳癌の治療ストラテジー～CDK4/6 阻害剤の役割～。
秋田乳がんオンライン講演会、WEB 開催、2020 年 9 月 28 日

増田慎三：HR+HER2-進行再発乳癌の治療ストラテジー。AstraZeneca Breast Cancer
TV セミナー、大阪、2020 年 10 月 2 日

増田慎三：HER2 陽性乳がん周術期治療におけるパラダイムシフト～カドサイラ
の適応拡大がもたらすものとは～。カドサイラ適応拡大記念講演会、新潟、WEB
開催、2020 年 10 月 9 日

増田慎三：HER2 陰性進行・再発乳がん治療～継往開来。第 28 回日本乳癌学会学
術総会イブニングセミナー、大阪、WEB 開催、2020 年 10 月 11 日

増田慎三：乳癌死ゼロをめざして～エビデンスからの考動～。第 28 回日本乳癌学
会学術総会共催セミナー、WEB 開催、2020 年 10 月 14 日

増田慎三：HER2 陽性乳がんの治療戦略。Chugai Breast Cancer Symposium 2020、
東京、WEB 開催、2020 年 10 月 17 日

増田慎三：CDK4/6 阻害剤併用療法の最適化。第 17 回日本乳癌学会中国四国地方
会 イブニングセミナー2、京都、WEB 開催、2020 年 10 月 24 日

増田慎三：HR+HER2-進行再発乳癌の治療ストラテジー。AstraZeneca Breast Cancer
TV セミナー、大阪、2020 年 10 月 26 日

増田慎三：エビデンスから見る Trastuzumab BS 製剤の実際。Breast Cancer Expert
Meeting、WEB 開催、2020 年 10 月 29 日

増田慎三：HER2 陰性 MBC におけるベストストラテジーを考える～テセントリク
の適応によりどう変わるか～。T トリプルネガティブ乳癌の治療について考える
会、岩手、WEB 開催、2020 年 11 月 4 日

増田慎三：HER2 陽性乳がん周術期治療におけるパラダイムシフト～カドサイラ

の適応がもたらすものとは～。**CHUGAI Breast Cancer Meeting**、石川、WEB 開催、2020 年 11 月 7 日

増田慎三：**HER2 陽性乳がん周術期治療におけるパラダイムシフト～カドサイラの適応拡大がもたらすものとは～**。**Breast Cancer Forum in NARA**、大阪、WEB 開催、2020 年 11 月 10 日

増田慎三：**HER2 陽性乳がん周術期治療におけるパラダイムシフト～カドサイラの適応拡大がもたらすものとは～**。**Kitakyusyu Breast Cancer Meeting**、福岡、2020 年 11 月 12 日

増田慎三：**HER2 陰性乳がん治療の最新知見。乳がん抗体療法セミナー In 川越、埼玉、WEB 開催、2020 年 11 月 13 日**

増田慎三：**閉経後進行再発乳がんの初回治療について**。**Breast Cancer Round Table Online Discussion in 東葛**、WEB 開催、2020 年 11 月 17 日

増田慎三：**HER2 陽性乳がん周術期治療におけるパラダイムシフト～カドサイラの適応拡大がもたらすものとは～**。**Breast Cancer Professional Conference in Osaka**、大阪、2020 年 11 月 17 日

増田慎三：**HR+HER2-進行再発乳がんの 1 次治療として何が最適か？**。**Saga Breast Cancer Online Seminar**、大阪、WEB 開催、2020 年 11 月 24 日

増田慎三：**HER2 陰性 MBC におけるベストストラテジーを考える～テセントリクの適応によりどう変わるか～**。**BREAST CANCER WEB SEMINAR 2020 in Yamanashi**、大阪、WEB 開催、2020 年 11 月 27 日

増田慎三：**HER2 陽性早期乳がんにおける治療戦略**。**Breast Cancer Symposium in Saitama**、埼玉、WEB 開催、2020 年 11 月 30 日

増田慎三：**HER2 陽性乳がん周術期治療におけるパラダイムシフト～カドサイラの適応拡大がもたらすものとは～**。**South Osaka Breast Cancer Symposium**、大阪、WEB 開催、2020 年 12 月 4 日

増田慎三：**HR+HER2-進行再発乳がんの治療ストラテジー**。**乳がん内分泌療法研究会**、埼玉、WEB 開催、2020 年 12 月 18 日

増田慎三：**エビデンスから考える HR 陽性 HER2 陰性進行・再発乳がんの治療戦略**。**Virtual Round Table Conference about Metastatic Breast Cancer**、大阪、WEB 開催、2021 年 1 月 7 日

増田慎三：**原発性 HER2 陽性乳がん治療におけるベストストラテジー**。**Kyoto**

Breast Cancer Forum 2021、京都、WEB 開催、2021 年 1 月 15 日

増田慎三：原発性 HER2 陽性乳がん治療におけるベストストラテジー。第 34 回神戸臨床腫瘍研究会、兵庫、WEB 開催、2021 年 1 月 23 日

増田慎三：HER2 陰性 MBC におけるベストストラテジーを考える。南信乳癌治療セミナー、大阪、WEB 開催、2021 年 2 月 19 日

増田慎三：2021 年 HR 陽性 HER2 陰性 MBC の治療戦略～専門医の治療レジメンイブランスの使いどころ～。ファイザー インターネットシンポジウム JOIN 2021、大阪、WEB 開催、2021 年 2 月 16 日

増田慎三：HER2 陽性乳がん治療の Up-to-date～さらなる個別化治療をめざして～。Breast Cancer Meeting、大阪、WEB 開催、2021 年 3 月 6 日

増田慎三：KN-355 データに基づく実臨床でのペムブロリズマブの位置付け。KN355 TNBC Expert Input Forum、WEB 開催、2021 年 3 月 31 日

山本和義、平尾素宏、西川和宏、藤谷和正、辻仲利政：胃癌手術におけるサルコペニア対策。第 27 回日本がんチーム医療研究会、大阪、2021 年 2 月 13 日

大谷陽子、水谷麻紀子、八十島宏行、増田慎三：当院におけるトリプルネガティブ再発症例の治療戦略。第 143 回阪神乳腺疾患談話会 Online Seminar、WEB 開催、2020 年 9 月 4 日

眞能 正幸：消化器病理 基本と新たな発展。第 39 回 日本消化器内視鏡学会近畿セミナー、大阪 Web 開催、リアルタイム配信 2020 年 11 月 29 日、オンデマンド配信 2020 年 12 月 11 日～2021 年 1 月 12 日

B-6

宮本敦史：膵癌に対する外科治療を基軸とした集学的治療。Pancreatic Cancer Seminar in OSAKA、大阪、2020 年 12 月 9 日

西川和宏：胃癌治療 2nd ラインの適正使用に向けて。GC Oncology Interactive Seminar、大阪、2020 年 5 月 14 日

西川和宏：胃癌治療における栄養療法の意義・胃癌患者に対するチームでの取り組み。Lilly インターネット講演会、神戸、2020 年 5 月 19 日

西川和宏：胃癌治療 2nd ラインの適正使用に向けて。GC Oncology Interactive Seminar、大阪、2020 年 9 月 17 日

西川和宏：胃癌 Late Line の最新の知見。TAIHO Web Lecture for Gastric Cancer、WEB 開催、2020 年 9 月 18 日

西川和宏：進行再発胃癌の治療方針。郡山胃癌治療勉強会、WEB 開催、2020 年 12 月 4 日

三宅正和：大腸がん手術の最前線と今後。大腸がん WEB シンポジウム～今だからこそ、知り・理解する～、WEB 開催、2020 年 11 月 1 日

三宅正和：指導医目線からの技術認定医試験。腹腔鏡下 S 状結腸切除を学ぶ会、大阪、2021 年 1 月 29 日

寺川航基、酒井健司、植田隆太、俊山礼志、三代雅明、高橋佑典、浜川卓也、土井貴司、三宅正和、西川和宏、加藤健志、高見康二、宮本敦史、平尾素宏：肝左葉形成不全を伴う膵鉤部癌に対して膵頭十二指腸切除術を施行した 1 例。第 634 回大阪外科集談会、大阪、2020 年 11 月 21 日

B-7

増田慎三：アドバイザー会議参加。マーケティングアドバイザーボード、WEB 開催、2020 年 10 月 9 日

増田慎三：アドバイザー会議参加。HER2 陽性乳がん pCR 制度管理に関するアドバイザーボード会議、WEB 開催、2020 年 10 月 19 日

増田慎三：アドバイザー会議参加。マーケティングアドバイザーボード、WEB 開催、2020 年 12 月 4 日

増田慎三：アドバイザー会議参加。乳がん領域アドバイザー会議、WEB 開催、2020 年 12 月 22 日

B-8

平尾素宏：消化器外科医のキャリアについて「我が消化器外科人生に一片の悔い無し!」。大阪大学外科専門研修プログラム、大阪、2020 年 7 月 4 日

平尾素宏：多くの術後再手術アクシデント報告をしてきた一外科医から。第 1 回医療安全定期講演会、大阪、2020 年 7 月 17 日

西川和宏：TNM 分類、癌取扱い規約。第 13 回日本癌治療学会 CRC 教育集会、大阪、2020 年 7 月 11 日

B-9

平尾素宏：新型コロナと胃癌診療。FM 大阪「LOVE&RED」、大阪、2020 年 10 月 13 日

加藤健志:がん診療の啓発。FM 大阪「LOVE&RED」、大阪、2020 年 12 月 22 日

宮本敦史:がん診療の啓発。FM 大阪「LOVE&RED」、大阪、2020 年 10 月 27 日

増田慎三：HER2 マイナス進行再発乳癌におけるこれからの個別化医療 動画コンテンツ作成 撮影、大阪、2020 年 9 月 11 日

増田慎三:がん診療の啓発。FM 大阪「LOVE&RED」、大阪、2020 年 11 月 10 日

高度医療技術開発室

室長 是恒之宏

室員 安部晴彦

近年における医療を取り巻く情報処理や画像処理の技術革新により、診断、治療における医用画像診断装置の利用範囲は拡大しており、著しいイノベーションを引き起こしている。昨年より新型コロナウイルスの世界的パンデミックによって我々の生活や産業構造は大きな変革を余儀なくされた。そのような変革の中で画像が果たす役割は大きくなってきている。遠隔モニタを用いた遠隔診療などはさらに推進されていくであろう。診断技術に関してもAIなどのサポートを受けながら今まで以上に向上していくものと考えられる。本研究室ではこれまでにない新しい医療技術開発の基盤を構築していく。

平成24年度より循環器系研究室員を配置し、医用画像診断装置の技術開発を大阪大学大学院医学系研究科保健学専攻機能診断科学講座とともに推進した。

平成27年度より、院内臨床症例（特に心房細動症例、大動脈弁狭窄症例）の心臓超音波画像解析も並行して推進した。

平成29年度は、院内臨床症例で僧帽弁輪石灰化、大動脈弁石灰化をCT画像から解析し、心臓超音波画像と組み合わせて解析することによって、冠動脈石灰化のリスク層別化が可能であること。また心エコー検査と生体インピーダンス分析を併用することによって心不全患者の再入院リスク層別化が可能であることを報告した。(AHA2017、ACC2018)

平成30年度は、昨年のCT画像検査、心エコー検査に関する研究を進め、それぞれ報告を行った。(AHA2018) この研究が、心エコー図学会に認められ海外発表優秀論文賞を受賞した。

平成31年度（令和元年）は、大阪大学大学院医学系研究科循環器内科学において他施設で実施している心不全レジストリ登録を行っているデータから、心エコーによるうっ血の指標をスコア化し、層別化することによって心不全患者の予後を予測することを報告した。

(AHA2019) さらに、尿検査の結果から心不全患者の予後が予測可能であることも報告した(ACC2020)。

令和2年度は、心臓リハビリテーションにおいて、心不全患者の栄養状態と身体活動性が生命予後に影響していることを報告した(ESC Heart Fail 2020;7:1801-1808)。本研究は今後、心不全患者の歩行動画像をAI認識させることによって自動的に身体活動性を評価させる医用画像診断アプリの開発へと繋げていきたい。

【2020年度 研究発表業績】

A-0

Yasumura K, Abe H, Iida Y, Kato T, Nakamura M, Toriyama C, Nishida H, Idemoto A, Shinouchi K, Mishima T, Awata M, Date M, Ueda Y, Uematsu M, Koretsune Y: Prognostic impact of nutritional status and physical capacity in elderly patients with acute decompensated heart failure. 「ESC HEART FAILURE」 7:1801-1808,2020年5月14日

Nakamura M, Kosugi S, Awata M, Shinouchi K, Abe H, Mishima T, Date M, Uematsu M, Koretsune M, Ueda Y: Possible Very Early-Phase Neoatherosclerosis after the Implantation of Drug-Eluting Stent. 「Angioscopy」 6(1)1-2,2020年7月9日

Ueda Y, Kosugi S, Abe H, Ozaki T, Mishima T, Date M, Uematsu M, Koretsune Y: Transient increase in blood thrombogenicity may be a critical mechanism for the occurrence of acute myocardial infarction. 「Journal of Cardiology」 77(3):224-230,2020年9月10日

Kosugi S, Shinouchi K, Ueda Y, Abe H, Sogabe T, Ishida K, Mishima T, Ozaki T, Takayasu K, Iida Y, Ohashi T, Toriyama C, Nakamura M, Ueda Y, Sasaki S, Matsumura M, Iehara T, Date M, Ohnishi M, Uematsu M, Koretsune Y: Clinical and Angiographic Features of Patients With Out-of-Hospital Cardiac Arrest and Acute Myocardial Infarction. 「Journal of the American College of Cardiology」 76(17)1934-1943, 2020年10月27日

Nakagawa A, Yasumura Y, Yoshida C, Okumura T, Tateishi J, Yoshida J, Abe H, Tamaki S, Yano M, Hayashi T, Nakagawa Y, Yamada T, Nakatani D, Hikoso S, Sakata Y: Prognostic Importance of Right Ventricular-Vascular Uncoupling in Acute Decompensated Heart Failure With Preserved Ejection Fraction. 「Circ Cardiovasc Imaging」 2020 Nov;13(11):e011430. doi: 10.1161/CIRCIMAGING.120.011430. Epub 2020 Nov 17.2020年11月17日

Kosugi S, Awata M, Ueda Y, Abe H, Mishima T, Shinouchi K, Ozaki T, Takayasu K, Ohashi T, Toriyama C, Nakamura M, Ueda Y, Sasaki S, Matsumura M, Iehara T, Date M, Uematsu M, Koretsune Y: Serial Angiographic Evaluation of Arterial Repair After the Implantation of Drug-Coated Stent at the Culprit of Acute Coronary Syndrome. 「Journal of Coronary Artery Disease」 26(1)9-11. 2020年11月30日

B-2

Kosugi S, Ueda Y, Abe H, Mishima T, Shinouchi K, Ozaki T, Takayasu K, Iida Y, Ohashi T, Toriyama C, Nakamura M, Date M, Uematsu M, Koretsune Y: Angiographic evaluation of vascular healing at 1 and 12 months after drug-coated stent implantation. ESC Congress 2020, WEB, 2020年8月28日

B-4

安村かおり、安部晴彦、小杉隼平、篠内和也、三嶋剛、伊達基郎、上田恭敬、長谷川新治、上松正朗、是恒之宏：Comparison of Prognostic Impact of Geriatric Nutritional Risk Index between Heart Failure with Reduced and Preserved Ejection Fraction. 。第84回日本循環器学会学術集会、WEB、2020年7月28日

松村未紀子、安部晴彦、家原卓史、佐々木駿、上田泰大、中村雅之、大橋拓也、飯田吉則、鳥山智恵子、尾崎立尚、高安幸太郎、小杉隼平、篠内和也、三嶋剛、伊達基郎、上田恭敬、上松正朗、是恒之宏：意識消失と多発脳梗塞を呈した左房内腫瘍を契機に診断に至った原発性肺癌の一、第31回日本心エコー学会学術集会、WEB、2020年8月14日

鳥山智恵、安部晴彦、中村雅之、飯田吉則、大橋拓也、高安幸太郎、尾崎立尚、小杉隼平、篠内和也、三嶋剛、伊達基郎、上田恭敬、上松正朗、是恒之宏：僧帽弁形成術後遠隔期に僧

帽弁狭窄症の進行を呈した感染性心内膜炎の一例。第 31 回日本心エコー学会学術集会、WEB、2020 年 8 月 14 日

家原卓史、飯田吉則、安部晴彦、中村雅之、鳥山智恵子、小杉隼平、篠内和也、上田恭敬、上松正朗、是恒之宏：透析により速やかに改善した重度機能性僧帽弁逆流の 1 例。日本超音波医学会第 93 回学術集会、WEB、2020 年 12 月 2 日

佐々木 駿、安部晴彦、中村雅之、飯田吉則、鳥山智恵子、小杉隼平、篠内和也、上田恭敬、上松正朗、是恒之宏：先行する拡張障害の進行を認め心不全発症に至った一例。日本超音波医学会第 93 回学術集会、WEB、2020 年 12 月 3 日

Kosugi S , Ueda Y, Abe H, Mishima T, Shinouchi K, Ozaki T, Takayasu K, Iida Y, Ohashi T, Toriyama C, Nakamura M, Date M, Uematsu M, Koretsune Y: Comparison of angioscopic findings between ultrathin strut sirolimus-eluting stent and everolimus-eluting stent at 1 year after implantation.。日本心血管インターベンション治療学会 CVIT2020、WEB、2021 年 2 月 18 日

B-6

井戸允清、三嶋 剛、鶴飼一穂、坂本麻衣、堀内恒平、福島貴嗣、中村雅之、山根治野、大橋拓也、高安幸太郎、尾崎立尚、小杉隼平、安部晴彦、伊達基郎、上田恭敬、上松正朗、是恒之宏：ヘパリン使用下で塞栓性イベントを繰り返した急性下肢動脈閉塞症の 1 例。第 130 回日本循環器学会近畿地方会、WEB、2020 年 11 月 28 日

鶴飼一穂、尾崎立尚、坂本麻衣、井戸允清、堀内恒平、福島貴嗣、中村雅之、山根治野、大橋拓也、高安幸太郎、小杉隼平、三嶋 剛、安部晴彦、伊達基郎、上田恭敬、上松正朗、是恒之宏：頻拍の管理が末梢循環不全の改善に重要であった大動脈弁膜症合併急性心不全の一例。第 130 回日本循環器学会近畿地方会、WEB、2020 年 11 月 28 日

栗原健太、堀内恒平、小杉隼平、鶴飼一穂、坂本麻衣、井戸允清、福島貴嗣、中村雅之、山根治野、大橋拓也、高安幸太郎、尾崎立尚、三嶋 剛、安部晴彦、伊達基郎、上田恭敬、上松正朗、是恒之宏：脳腫瘍による痙攣性てんかん発作からたこつぼ型心筋症を発症した一例。第 130 回日本循環器学会近畿地方会、WEB、2020 年 11 月 28 日

赤間俊之、尾崎立尚、鶴飼一穂、坂本麻衣、井戸允清、堀内恒平、福島貴嗣、中村雅之、山根治野、大橋拓也、高安幸太郎、小杉隼平、三嶋 剛、安部晴彦、伊達基郎、上田恭敬、上松正朗、是恒之宏：複雑な心筋灌流に対する経皮的冠動脈形成術の治療戦略に心筋シンチグラフィが有用であった一例。第 130 回日本循環器学会近畿地方会、WEB、2020 年 11 月 28 日

B-8

安部晴彦：心不全患者における栄養状態と身体活動レベルの評価と取り組み。大阪城循環器連携の会、WEB、2020 年 8 月 27 日

安部晴彦：高齢、慢性腎臓病合併心不全に対する ARNI の可能性。循環器 Expert Meeting-ARNI を診る-、大阪市、2020 年 12 月 11 日

安部晴彦：ハートノートを用いた心不全地域連携。第40回国立大阪医療センター循環器病談話会、WEB、2021年1月23日

安部晴彦：心不全治療にイブブラジンをどう活かすか？～対象症例について考える～Heart Failure Web Seminar。WEB、2021年3月1日

安部晴彦：心不全治療におけるSGLT2阻害薬。CARDIORENAL Symposium WEEK。WEB、2021年3月10日

安部晴彦：腎関連を見据えた病診連携。合併症を見据えた糖尿病治療を考える会、WEB、2021年3月18日

医療情報研究室

室長 岡垣篤彦

医療情報研究室では、医療への IT 応用に関するソフト、ハードの両側面の研究を行っている。病院において実稼働している病続情報統合システムを用いた研究、病院情報システム 本体の機能拡張に関する独自の研究を実施する一方、治験・臨床研究や医療安全に関する システム的検討、シミュレーションや統計などの情報科学の医療応用に関する研究を行っている。また、ネットワーク技術や画像処理技術の応用・改良など、情報処理の基盤技術 に関連した研究も行っている。早急に実用化することを求められている災害時の国内標準 電子カルテについて、あるいは SS-MIX、SS-MIX2、MML、openEHR といった標準規格を通して異なる 電子カルテシステム間のスムーズな連携についても研究を行なっている。国内で行なわれている医療機関間のデータ共有に関する主要な研究プロジェクトのうち代表的な 2 つのプロジェクト、すなわち、国立病院機構の「電子カルテデータ標準化等のための IT 基盤構築事業」、および大阪大学が主導する「病院情報システムデータを利用した横断的研究基盤構築に関する研究」に参加している。2020 年 1 月に更新した電子カルテシステムは、システムの応用範囲が広くなり、データ利用についても 多彩な可能性が考えられる。このシステムを用いて岡垣室長を中心に開発してきたカード型カルテシステムの発展をめざすと同時に経営分析的な視点を新たに研究対象に加えている。2014 年 1 月より実用化された救命救急外来経過表は、救命救急外来の診療速度についてける国内で最も進んだ電子カルテとして大きな注目を集め、東京大学、京都大学、沖縄中部病院など、国内の一流研究・医療機関より見学を受け入れた。2013 年度は災害医療研究室と共同で厚労省指定研究「南海トラフ巨大地震の被害想定に対する DMAT による急性期医療対応に関する研究」において GIS の技術を用いた DMAT 被災地派遣支援ソフトウェアの開発を行い 2014 年度に報告書を上梓したが、国会での来るべき甚大災害に対する医療支援に関する議論に対しデータの供給を行なうなど国内の甚大災害対策に貢献した。引き続き災害関連の研究として 2015 年度より厚労省指定研究「首都直下地震に対応した DMAT の戦略的医療活動に必要な医療支援の定量的評価に関する研究」を 2 年間行なった。南海トラフ地震への医療支援に関してはその後も継続的に研究に参加しており、2016 年度厚生労働科学研究費補助金（地域医療基盤開発推進研究事業）分担研究「南海トラフ地震に関する研究」に共同研究者として参加し、2017 年度、2018 年度も引き続き共同研究者として参加した。その他に、国立病院機構の「電子カルテによる「災害診療記録」電子フォーマット自動出力実証事業」に参加した。医療情報学会において 2017 年に「災害・救急医療へのユーザーメイド IT の貢献」、2018 年には「医療の質向上に貢献する診療支援システムとその効果分析」というテーマでワークショップを主催した。2019 年には災害時の療養病床の支援について研究を行なった。2020 年には、「COVID-19 パンデミック対策としての広域および医療機関内情報システムの検討」というタイトルでワークショップを主催した。今後も医療

情報学会、災害情報学会などで発表を予定している。

【2020年度 研究発表業績】

A-2

岡垣篤彦、定光大海：南海トラフ地震における療養施設の被災状況予測 医療情報学、39:P.179-188 2020年4月20日発行

岡垣篤彦：COVID-19 検証-ITによる最新の医療安全管理 患者と職員を守る IT 活用の具体策 感染対策を目的とした院内システムの構築と医療安全観点からの重要性「月刊新医療」P.24-27、2021年2月1日発行

A-3

岡垣篤彦、草深裕光、山本康仁：COVID-19 感染対策としての情報システム 日本災害情報学会大会予稿集 22：P.148-149、2020年

岡垣篤彦、草深裕光、山本康仁、上村修二、橋本悟：COVID-19 パンデミック対策としての広域および医療機関内情報システムの検討。「医療情報学連合大会論文集(CDROM)」P.386-390、2020年11月18日

B-3

岡垣篤彦：FMクラウドを使用した災害時総合システム、電子トリアージ、災害掲示板、災害診療記録。第24回日本医療情報学会春季学術大会シンポジウム2020、WEB、2020年6月6日

岡垣篤彦：COVID-19 パンデミック対策としての広域および医療機関内情報システムの検討、総論オーガナイザー 公募ワークショップ7。第40回医療情報連合大会、浜松、2020年11月21日

岡垣篤彦：COVID-19 感染者情報把握のための院内システムの構築 公募ワークショップ7。第40回医療情報連合大会、浜松、2020年11月21日

岡垣篤彦、草深裕光、山本康仁：COVID-19 感染対策としての情報システム。第22回日本災害情報学会大会、WEB、2020年11月28日

上尾光弘、岡垣篤彦：災害時標準診療録を位置情報を含んだ電子記録とすることにより災害医療の全体像をビッグデータとともにリアルタイムに把握するシステムの開発。日本災害医学会、神戸、2020年2月21日

災害医療研究室

室長 大西光雄

【役割】

広域災害や局地災害、さらに放射線災害やテロリズムなど特殊災害にも対応できる拠点的病院として災害医療を担う。そのため、救命救急センターを中心とした平時救急診療体制と災害時に即座に対応できる組織体制を確立し、全国あるいは地域の関連機関との連携を図ることで実効的な災害医療を展開する。災害急性期には専門的な訓練を受けた災害派遣医療チーム（DMAT）を編成し、広域災害には厚生労働省が認証する日本 DMAT を、大阪府下および周辺の局地災害には大阪府が認証する大阪 DMAT を直ちに派遣できる体制とする。常に事業継続（Business Continuity Planning : BCP）を念頭に自院の機能をなるべく落とさぬように対応するため、令和元年度に BCP が整備され、毎年改定を行ってきた。また、国立病院機構の西日本基幹災害拠点病院として災害医療班を早期から派遣し、急性期から亜急性期の災害医療支援とその連携体制を構築する役割もある。平成 25 年 10 月 1 日より開設された厚生労働省医政局災害対策室 DMAT 事務局は、首都直下地震で東京の災害医療センターにある DMAT 事務局が機能不全になった時の代替機能、隊員の技能維持研修や養成研修等の日常的な役割があるが、令和 2 年度以降は国立病院機構本部直轄となり、災害医療棟 4 階の立地は変わらず東京都立川市の国立病院機構災害医療センター内の DMAT 事務局と同一組織となった。

【現状】

1. 災害対策

平成 13 年に緊急災害医療棟が完成し、放射線災害（原子力災害）に対応できる設備や救急外来初療室、情報処理室、300 名までの傷病者が収容できるスペースおよび災害ベッドが整備されている。災害時医療班派遣のためのドクターカーは、平成 31 年度（令和元年度）に更新され、災害派遣用車両（DMAT カー等）も確保された。

大阪府の被ばく医療体制では唯一の二次被ばく医療施設として、地下 1 階に除染室、放射線測定室を備えてきた。一方、平成 23 年に発生した東日本大震災での原子力発電所事故以来、広域の被ばく医療対策として、平成 24 年に原子力規制委員会が発足、平成 27 年より原子力災害医療・総合支援センターが整備され、原子力発電所立地県を中心に原子力災害拠点病院の整備が図られている。それに従い、これまでの二次、三次被ばく医療施設という体制はなくなった。当センターは平成 30 年 3 月 25 日に大阪府の原子力災害拠点病院に指定され、これまで取り組んできた被ばく患者に対する診療・治療の役割に加えて、地域の関係者への研修や原子力災害医療チームの整備の役割を担うこととなった。当院の被ばく医療に対するこれまでの経験や訓練を踏まえた組織力は強力で、実際の災害時に果たす役割は大きい。原子力災害拠点病院としての機能維持を行う。被ばく医療に必要な機器の整備は、令和 2 年度にホールボディーカウンターを含む多数の測定器・資機材が更新された。

災害医療棟 1 階は日常診療で救急外来として使用しており、初期・二次の時間外救急及び三次救急に対応する初療室と CT 撮影室、外来手術室を完備している。1 階フロアー及び玄関周囲は災害時に傷病者を受け入れるための指揮所やトリアージゾーンを設置できる。2 階、3 階の各研修室、講堂と廊下には多数の被災者を収容し、応急的な治療ができるよう酸素や吸引などの配管が設置されている。研修室と講堂は、会議や講演会、各種研修、勉強会等にも広く利用されている。

災害時に必要な資機材や食料・水等の備蓄は、3 日間供給が途絶しても対応できる規模で準備している。非常食は経済性や味、耐用年数などを考慮した備蓄となっている。水は 800 トンが備蓄でき、病院で必要な量を 1 日 200 トンと計算して 4 日間は対応可能である。救急医薬品の備蓄も 197 品目に及んでいる。平成 26 年度から化学災害やテロに対応できるように一部の中毒拮抗薬備蓄も開始した。

災害訓練については、毎年 1 回病院全体での訓練を、主に被災者受け入れ訓練を中心に行っている。病棟火災に対応する防災訓練も年 1 回行っている。フルスケール災害訓練は大阪湾を震源地とした震度 6 相当の地震が発生し、近隣に多数の傷病者が出たという想定で毎年 1 月に行ってきたが、令和 2 年度は COVID-19 禍の中で机上演習やシステムの確認にとどまることとなった。COVID-19 禍となる前は放射性物質の汚染患者を想定した受け入れ訓練も加えている。国立病院機構近畿グループ事務所をはじめ近畿および西日本の国立病院機構、大阪市東医師会、近隣の関連医療機関、他医療機関の日本 DMAT チーム、看護学校および看護学生など毎年約 600 名が参加していた。

2. 災害派遣

災害救護班の派遣は平成 16 年の新潟中越地震をもって嚆矢とする。この経験に基づいて機構の近畿ブロック事務所とも連携をとりながら災害救護体制の整備を進める形ができあがった。平成 17 年 4 月 25 日の JR 福知山線列車脱線事故では災害現地に DMAT を初めて派遣できた。その後に発生した新潟県中越沖地震では震災発生後 1 時間で DMAT チーム派遣の準備が完了し（実際の派遣はなかったが）、迅速な派遣体制がほぼ整った。そして、平成 23 年 3 月 11 日に発生した東日本大震災では日本 DMAT や医療救護班の迅速な派遣が可能になり、未曾有の原子力発電所事故に対しても放射線サーベイランスや医療支援要員を福島県へ派遣できた。平成 28 年 4 月 14 日に発生した熊本地震では DMAT 事務局の熊本県への支援、DMAT 隊の派遣、初動医療班や災害医療班の派遣が行われた。平成 30 年 6 月の大阪府北部地震では、大阪府保健医療調整本部（大阪府庁内）の本部機能を支えるロジスティックチームとして派遣され、同 7 月の西日本豪雨災害でも同様の活動を岡山・広島県で行った。令和 2 年 7 月に発生した熊本・人吉の水害では、新型 DMAT 車両にて COVID-19 時代における自然災害対応を行い、同年 8 月には大阪府内の高齢者施設における COVID-19 クラスター対応を行った。このように災害発生時に即時的対応ができる体制は整備されてきたが、広域の被災地、被災地外医療機関連携を一定期間効率的に行うには国立病院機構の災害医療体制をさらに充実させる必要がある。

3. 平時救急診療体制

救命救急センターを中心とした救急診療体制により重症外傷、急性中毒、熱傷、急性呼吸不全、ショック、重症感染症などの三次救急患者の受け入れが中心となっている。救命救急センターの外傷患者数は年間 300 例（COVID-19 禍以前）を超えており、外傷診療の経験は災害医療にもつながる。医療供給体制では、三次だけでなく、脳卒中・急性心筋梗塞の二次救急を含めた集学的救急医療体制もすでに構築されている。

【将来構想】

DMAT 事務局と連携を取りつつ、地域の災害拠点病院、国立病院機構のグループ拠点病院の役割をはたすことが基本になる。

- ① 救命救急センターでの日常診療を充実させ、災害に対応できる救急・災害医療の整備、救急・災害医療専門医の補強を進める。
- ② 災害情報システムの効率的運用と、災害発生時に物的・人的資源の提供など後方支援（ロジスティック）の中心的役割をはたせる組織体制をつくる。
- ③ 多くの専門医療機関を有する国立病院機構の特徴を生かした災害医療連携を確立する。
- ④ 原子力災害拠点病院としての機能の充実とともに、原子力災害の研修・訓練体制を確立していく。（いわゆる CBRNE 災害への対応能力の向上も図る。）
- ⑤ その他の活動及び、国際的な取り組みへの参加

今後の災害対応は COVID-19 といった新興感染症にも同時に対応する想定が必要となっている。その想定に対するシミュレーション研究に参画した。また、大災害が発生した際に海外（米国）からの医療支援を受けるための準備、課題の抽出を目的とした米国 DMAT 等との研究が始まった。また、2001 年の米国同時多発テロを受け、米国・カナダの呼びかけにより G7 や EC、WHO をメンバーとする世界保健安全保障イニシアティブ（Global Health Security Initiative : GHSI）の化学事案作業部会（Chemical Event Working Group : CEWG）に令和 2 年度末から大西が加わり、国際的な取り組みに積極的に参加していく予定である。

【2020 年度 研究発表業績】

A-2

大西光雄：事態対処医療 法執行機関との連携「災害医療 2020 大規模イベント、テロ対応を含めて」「日本医師会雑誌」生涯教育シリーズ-98、149（1）：P350-352、メジカルビュー社、2020 年 6 月 15 日

曾我部 拓、大西光雄：災害現場での医療判断と対応 災害時の慢性疾患への対応 透析「災害医療 2020 大規模イベント、テロ対応を含めて」「日本医師会雑誌」生涯教育シリーズ-98、149（1）：P205-206、メジカルビュー社、2020 年 6 月 15 日

石田健一郎、大西光雄：災害現場での医療判断と対応 災害時の慢性疾患への対

応 糖尿病「災害医療 2020 大規模イベント、テロ対応を含めて」「日本医師会雑誌」生涯教育シリーズ-98、149 (1) :P203-204、メジカルビュー社、2020年6月15日

吉川吉暁、大西光雄：災害現場での医療判断と対応 災害時の慢性疾患への対応 高血圧「災害医療 2020 大規模イベント、テロ対応を含めて」「日本医師会雑誌」生涯教育シリーズ-98、149 (1) : P 200-202、メジカルビュー社、2020年6月15日

A-4

大西光雄：真夏の国際イベント CBRNE 災害の対応に必要な医療従事者教育「アニムス」25(2) : P25-31、アニムス編集委員会、2020年4月1日

B-4

石田健一郎、河本昌雄、眞木良祐、小川晴香、小島将裕、田中太助、下野圭一郎、吉川吉暁、曾我部 拓、上尾光弘、大西光雄：BCP 部門と感染制御部門を柱とした当院の COVID-19 対策本部。第48回日本救急医学会総会、学術集会、岐阜、2020年11月20日

河本昌雄、大西光雄、上尾光弘、島原由美子、曾我部 拓、石田健一郎、小島将裕、吉川吉暁、小川晴香、下野圭一郎、田中太助：災害対応機能を強化した当院のドクターカー編成について。第48回日本救急医学会総会・学術集会、岐阜 (WEB)、2020年11月18日～20日

B-8

射場次郎、大西光雄、矢嶋祐一、宮里政史、若井聡智：令和2年度 施設におけるコロナ対策・対応研修「ほんとに怖い！施設での感染拡大～事前準備と早期対応で感染拡大を防ぐ～」文部科学省科学研究費事業「高齢者施設の種類と特徴に応じた救急・災害医が関与した災害計画と訓練手法の開発 (19K10532)」大阪 (WEB)、2020年12月12日

大西光雄：2020年度 AMAT 隊員養成研修「災害時要配慮者」「災害時に留意すべき疾病」主催：公益社団法人 全日本病院協会、一般社団法人 日本医療法人協会 WEB 研修 (講師)、東京、2021年1月10日「集合研修」(講師)、東京、2021年1月30日および2月6日

臨床研究推進室
臨床研究センター長・臨床研究推進部長・
臨床研究推進室長 **白阪琢磨**

臨床研究事業は、従来から国立病院機構が果たすべき先駆的な政策医療の一分野である。当院では治験・臨床研究の円滑な運営・管理、支援を行うことを目的に、臨床研究センター4部12室の中に「臨床研究推進部」、「臨床研究推進室」を配置している。臨床研究推進室は“治験管理部門”と“臨床試験支援部門”の2つの部門から成るが、治験管理部門が、治験以外の臨床研究支援も含め専ら活動の中心となっている。

臨床研究推進室の構成員は、部長（室長併任）1名、臨床研究コーディネーター（CRC）8名、治験・臨床研究事務局3名、データマネジャー1名、事務補助7名である（令和3年3月末現在）。

臨床研究推進室は、CRCおよび治験事務局として治験の全体的なコーディネーションを担うことにより、契約前から終了まで迅速かつ質の高い治験実施を支援している他、受託研究審査委員会（IRB）事務局機能も併せ持っている。受託研究と各種臨床研究関連指針が適応される自主研究は、それぞれ独立した2つのIRB（第1委員会・第2委員会）により毎月審議を行っている。今年度は新型コロナウイルス感染防止対策からWeb会議形式にて開催した。また、平成30年3月31日には臨床研究法（以下、法）上の臨床研究審査委員会として厚生労働大臣から認定を取得し、審査意見業務を行ってきた。しかし、新規の審査申請課題がなく、臨床研究法施行規則第66条臨床研究審査委員会の認定の要件に定められている、有効期間の更新を受ける条件である年11回以上の審査意見業務を行うことが出来ず、2021年3月30日に廃止申請を行った。当委員会にて審査を行っていた課題については、移管を完了した。今後は、当院で実施される法準拠の課題について、法に定められる管理者の責務を果たすことができるよう、当室も役割を担っていく。

治験実績では、国立病院機構内施設で全国2位の成績であった。（令和3年2月現在）新規受託件数27件、総件数114件、研究請求金額総額は約3億円であり、目標を達成することが出来た。

自主研究の支援に関しては、「人を対象とする医学系研究に関する倫理指針」に基づいた質の高い臨床研究の実施をより進めるために、研究機関の長が行う点検（自己点検）を実施し、その結果を研究者にもフィードバックしている。また確実な同意書管理のための支援も継続的に取り組んでいる。臨床研究法準拠の研究についても、昨年度から同様の支援を開始した。

その他、地域治験ネットワークの活動としては大阪府内の16医療機関で形成する「治験ネットおおさか」の活動にも参加し、他医療機関との意見交換を行い、CRC養成研修での講師やファシリテーターを務めた。

学術的活動および教育については、学会・研究会で発表を行い、国立病院機構本部主催の初級者CRC養成研修では講師を務めた。

院内教育および啓発活動としては「臨床研究推進室ニュース」（年4回）の発行、

「治験セミナー」、「臨床研究セミナー」を実施した。IRB 委員への倫理教育としては、新型コロナウイルス感染防止対策から eAPRIN 倫理研修の受講のみとした。

【2020 年度 研究発表業績】

B-4

瀬野千亜紀、辻本有希恵、小林恭子、羽田かおる、白坂琢磨：被験者登録促進に向けた取り組み-エントリーアクションプランの活用-。CRC と臨床試験のあり方を考える会議 2020 in 長崎、Web 開催、2020 年 11 月 3 日～16 日

名畑優保、金順姫、齊藤友香、奥村葵美、松尾友香、辻本有希恵、柚本育世、小林恭子、羽田かおる、白坂琢磨、：ロジックツリーを用いた治験実施計画書からの逸脱の原因分析と防止策の検討。第 41 回日本臨床薬理学会学術総会、福岡、Web 併用開催、2020 年 12 月 5 日

B-8

小林恭子：倫理審査委員会・治験審査委員会の役割と機能。国立病院機構主催 2020 年度初級者臨床研究コーディネーター養成研修、Web 開催、2021 年 1 月 15 日

辻本由希恵：モニタリング・監査及び規制当局による GCP 実地調査の目的と方法。国立病院機構主催 2020 年度初級者臨床研究コーディネーター養成研修、Web 開催、2021 年 1 月 15 日

柚本育世：CRC の業務（インフォームドコンセント及びアセント、治験実施前の業務）。治験ネットおおさか主催 CRC 養成研修（初級者向け研修初級者向け研修）、Web 開催、2021 年 2 月 20 日

柚本育世：グループワークアドバイザー（日々の業務で困っていること、他施設の体制についての質問）。治験ネットおおさか主催 CRC 養成研修（初級者向け研修初級者向け研修）、2021 年 2 月 20 日

レギュラトリーサイエンス研究室

室長 是恒之宏

レギュラトリーサイエンスは、科学技術の成果を人と社会に役立てることを目的に、根拠に基づく的確な予測、評価、判断を行い、科学技術の成果を人と社会との調和の上で最も望ましい姿に調整するための科学とされている。また、レギュラトリーサイエンスは、的確な予測、評価、判断によって①限りなく進歩する科学技術を正しく生かして有効に利用する最善の道を見出すことと、②人間の願望から出発した科学技術が、社会や人間を無視して発達することによってもたらされる深刻な影響を未然に防ぐこと、の二つの大きな目的/役割を担っている。

当研究室は、レギュラトリーサイエンスの考えに基づき、臨床現場での薬剤・医療機器や技術等の使用を評価するための手法の構築を目的として平成 23 年 4 月に設立され、10 年が経過した。

令和 2 年度においては、東京大学医科学研究所主宰のオーダーメイド医療実現化プロジェクト共同研究において 21 万人余り 42 疾患の GWAS 研究により多くの日本人遺伝子多型を検出し Nature Genetics に論文掲載された。また、昨年度も発表した 75 歳以上の AF レジストリー (ANAFIE) 登録のサブ解析で消化管出血予防のための PPI 処方の実態を PLOS ONE に発表した。

【2020 年度 研究発表業績】

A-0

Yasumura K, Abe H, Iida Y, Kato T, Toriyama C, Nishida H, Idemoto A, Shinouchi K, Mishima T, Awata M, Date M, Ueda Y, Uematsu M, Koretsune Y, Prognostic impact of nutritional status and physical capacity in elderly patients with acute decompensated heart failure. ESC HEART FAILURE, 2020 年 5 月 15 日, Published online in Wiley Online Library DOI:10.1002/ehf2.12743

Ishigaki K, Akiyama M, Kanai M, Koretsune Y, Kubo M, Kamatani Y, et. al, Large-scale Genome-Wide Association Study in a Japanese Population Identifies Novel Susceptibility Loci Across Different Diseases, Nat Genet. 2020:52:66-79, 2020 年 6 月 8 日

Akao M, Shimizu W, Atarashi H, Ikeda T, Inoue H, Okumura K, Koretsune Y, Tsutsui H, Toyoda K, Hirayama A, Yasaka M, Yamashita T, Yamaguchi T, Teramukai S, Kimura T, Kaburagi J, Takita A :Oral Anticoagulant Use in Elderly Japanese Patients With Non-Valvular Atrial Fibrillation –Subanalysis of the ANAFIE Registry–, Circulation Reports, doi:10.1253/circrep.CR-20-0082, J-STAGE Advance Publication released online October 1, 2020

Mizokami Y, Yamamoto T, Atarashi H, Yamashita T, Akao M, Ikeda T, Koretsune Y,

Okumura K, Shimizu W, Tsutsui H, Toyoda K, Hirayama A, Yasaka M, Yamaguchi T, Teramukai S, Kimura T, Kaburagi J, Takita A, Inoue H: Current status of proton pump inhibitor use in Japanese elderly patients with non-valvular atrial fibrillation: A subanalysis of the ANAFIE Registry, PLOS ONE, <https://doi.org/10.1371/journal.pone.0240859>, Published: 2020 年 11 月 5 日

A-3

是恒之宏：人生 100 年時代の健康長寿のための血栓予防 脳 心臓 血管を守る、バイエル薬品株式会社 第 42 回日本血栓止血学会学術集会、2020 年 6 月

A-4

是恒之宏：除細動時の抗凝固療法の注意点は？、抗血栓療法—日常臨床での疑問に答える—、循環器ジャーナル、医学書院、68(4)、2020 年 10 月 1 日

安部晴彦、是恒之宏：同種薬の特徴と使い分け、抗血栓薬(経口抗凝固薬、抗血小板薬)、「今日の治療指針 私はこう治療している 2021」医学書院、PP358-361、2021 年 1 月 1 日

B-1

Koretsune Y :Japanese Evidence from ANAFIE Registry and ETNA-AF Japan, Virtual Scientific Exchange Forum – Post ESC 2020,2020 年 9 月 4 日

B-4

Koretsune Y, Yamashita T, Fujii K, Shiosaki K: ETNA-AF-Japan: One-year real-world results with edoxaban in Japanese patients with non-valvular atrial fibrillation in long-term clinical practice, 第 84 回日本循環器学会学術集会、web、2020 年 7 月 31 日

是恒之宏、松尾有香子、伊吹竜樹、森本剛：Comparative Safety and Effectiveness Study of Apixaban versus Warfarin in Oral Anticoagulant-naïve Patients with Non-valvular Atrial Fibrillation (RCR-OAC study),Japanese Circulation Society 2021、横浜、2021 年 3 月 26 日-28 日

是恒之宏、山下武志、藤井邦充、塩境一仁：ETNW-AF-Japan:Two-year real-world final results with edoxaban in Japanese patients with non-valvular atrial fibrillation in long-term clinical practice, Japanese Circulation Society 2021、横浜、2021 年 3 月 26 日-28 日

B-5

是恒之宏：ANAFIE REGISTRY 結果（対象 ANAFIE 地域代表研究者）。Web 講演会、2020 年 10 月 3 日

是恒之宏：ANAFIE REGISTRY 主解析 研究成績報告会（対象 ANAFIE 参加全施設研究責任医師・研究分担医師）。Web 講演会、2020 年 10 月 10 日

B-8

是恒之宏：不整脈薬物治療ガイドライン 2020 改訂と高齢者治療戦略。抗血栓療法を考える会、岩手(Web セミナー 大阪会場)、2020 年 10 月 23 日

是恒之宏：心房細動治療の Update-不整脈治療ガイドライン 2020 に学ぶ-。京都不整脈治療 WEB セミナー、2020 年 11 月 19 日

是恒之宏：不整脈薬物治療ガイドライン 2020 改訂と高齢者治療戦略。AF 治療地域連携セミナー in HIROSHIMA、Web、2020 年 11 月 30 日

是恒之宏：心房細動治療の Update -不整脈治療ガイドライン 2020 に学ぶ-。大津市医師会 Web サタディセミナーパート 1、Web、2020 年 12 月 26 日

B-9

是恒之宏：DOCTORS FLAP。FM 大阪、2021 年 1 月 7 日、2021 年 1 月 21 日放送

II. 研究助成一覽

令和2年度 研究助成一覧

	研究課題名 (採択番号があれば採択番号も記載)	研究者名	研究事業名 (依頼業者名)	主任 又は 分担	新規 又は 継続	研究種別	研究費獲得額(単位:万円)			
							主任研究者 直接経費金額	分担研究者 直接経費金額	間接経費金額	合計
③科学研究費 助成事業(学 術研究助成基 金助成金)	ヒト神経細胞の低酸素・虚血ストレス障害発生メカニ ズム解析と新規治療法開発 18K08958	金村 米博	科学研究費助成事業 (学術研究助成基金助 成金)(基盤研究(C))	主任	継続	補助金(研究費)	80 万円	万円	30 万円	110 万円
③科学研究費 助成事業(学 術研究助成基 金助成金)	ヒト神経細胞の低酸素・虚血ストレス障害発生メカニ ズム解析と新規治療法開発 18K08958	正札 智子	科学研究費助成事業 (学術研究助成基金助 成金)(基盤研究(C))	分担	継続	補助金(研究費)	万円	20 万円	0 万円	20 万円
③科学研究費 助成事業(学 術研究助成基 金助成金)	脳梗塞に対するips細胞移植と内在性幹細胞による肝 細胞コンピネーション治療法開発 20K09354	金村 米博	科学研究費助成事業 (学術研究助成基金助 成金)(基盤研究(C))	分担	新規	補助金(研究費)	万円	10 万円	3 万円	13 万円
③科学研究費 助成事業(学 術研究助成基 金助成金)	慢性腎臓病におけるADH1BALDH2を考慮した飲酒の 残習機能への影響 20k17270	木村 良紀	科学研究費助成事業 (学術研究助成基金助 成金)(若手研究)	主任	新規	補助金(研究費)	140 万円	万円	42 万円	182 万円
③科学研究費 助成事業(学 術研究助成基 金助成金)	HIV感染症の急速な病態進行に関わるウイルス側因 子・宿主因子の解析 18H03046	渡邊 大	科学研究費助成事業 (学術研究助成基金助 成金)(基盤研究(B))	分担	継続	補助金(研究費)	万円	50 万円	15 万円	65 万円
③科学研究費 助成事業(学 術研究助成基 金助成金)	深層学習、シミュレーション、統計モデルを融合した人 工股関節手術の意思決定支援 19H01176	三木 秀宣	科学研究費助成事業 (学術研究助成基金助 成金)(基盤研究(A))	分担	継続	補助金(研究費)	万円	40 万円	12 万円	52 万円
③科学研究費 助成事業(学 術研究助成基 金助成金)	レジリエントな手術チームのシステムダイナミクスの解 明 18H03025	中島 伸	科学研究費助成事業 (学術研究助成基金助 成金)(基盤研究(B))	分担	継続	補助金(研究費)	万円	3 万円	1 万円	4 万円
③科学研究費 助成事業(学 術研究助成基 金助成金)	Radiogenomicsによる膠芽腫の臨床経過予測モデルの 構築 19K09526	金村 米博	科学研究費助成事業 (学術研究助成基金助 成金)(基盤研究(C))	分担	継続	補助金(研究費)	万円	10 万円	3 万円	13 万円
③科学研究費 助成事業(学 術研究助成基 金助成金)	髄芽腫における髄液播種の機能解析とリキッドバイオ プシーの可能性について検討 19K08345	金村 米博	科学研究費助成事業 (学術研究助成基金助 成金)(基盤研究(C))	分担	継続	補助金(研究費)	万円	10 万円	3 万円	13 万円
③科学研究費 助成事業(学 術研究助成基 金助成金)	神経膠腫の二重微小染色体による診断法とLiquid biopsyの開発 20K09324	金村 米博	科学研究費助成事業 (学術研究助成基金助 成金)(基盤研究(C))	分担	新規	補助金(研究費)	万円	20 万円	6 万円	26 万円
③科学研究費 助成事業(学 術研究助成基 金助成金)	中間群および低悪性度に分類される原発性骨腫瘍の 臨床病理学的解析 17K08747	眞能 正幸	科学研究費助成事業 (学術研究助成基金助 成金)(基盤研究(C))	分担	継続	補助金(研究費)	万円	10 万円	3 万円	13 万円
⑥厚生労働科 学研究費	HIV感染症及びその合併症の課題を克服する研究 H30-エイズ-指定-004	白阪 琢磨	厚生労働行政推進調査 事業費	主任	継続	補助金(研究費)	3,643 万円	万円	267 万円	3,910 万円
⑥厚生労働科 学研究費	HIV感染症及びその合併症の課題を克服する研究 H30-エイズ-指定-004	安尾 有加	厚生労働行政推進調査 事業費	分担	継続	補助金(研究費)	万円	80 万円	0 万円	80 万円
⑥厚生労働科 学研究費	非加熱血液凝固因子製剤によるHIV感染友病患者 の長期療養体制の整備に関する患者参加型研究 H30-エイズ-指定-002	三田 英治	厚生労働行政推進調査 事業費補助金	分担	継続	補助金(研究費)	万円	150 万円	0 万円	150 万円
⑥厚生労働科 学研究費	血液製剤によるHIV/HCV重複感染患者に対する肝移 植適応に関する研究 H30-エイズ-指定-002	上平 朝子	厚生労働行政推進調査 事業費補助金	分担	継続	補助金(研究費)	万円	20 万円	0 万円	20 万円
⑥厚生労働科 学研究費	HIV感染症の医療体制の整備に関する研究20HB2001	渡邊 大	厚生労働行政推進調査 事業費	分担	新規	補助金(研究費)	万円	600 万円	0 万円	600 万円
⑥厚生労働科 学研究費	HIV感染症の医療体制の整備に関する研究20HB2001	矢倉 裕輝	厚生労働行政推進調査 事業費	分担	新規	補助金(研究費)	万円	300 万円	0 万円	300 万円
⑥厚生労働科 学研究費	特発性大腸骨頭壊死症の医療水準及び患者のQOL向 上に関する大規模多施設研究 20HB2001	三木 秀宣	厚生労働省科学研究費 補助金	分担	継続	補助金(研究費)	万円	10 万円	0 万円	10 万円
⑥厚生労働科 学研究費	HIV陽性者に対する精神心理的支援方策および連携 体制に資する研究 H30-エイズ一般-007	安尾 利彦	厚生労働省科学研究費 補助金	分担	継続	補助金(研究費)	万円	80 万円	0 万円	80 万円
⑥厚生労働科 学研究費	健診施設を活用したHIV検査体制を構築し検査機会 の拡大と知識の普及に挑む研究 20HB1003	渡邊 大	厚生労働省科学研究費 補助金	分担	新規	補助金(研究費)	万円	60 万円	0 万円	60 万円
⑩その他財団 等からの研究 費	エイズ発症予防に資するための血液製剤によるHIV感 染者の調査研究	白阪 琢磨	友愛福祉財団研究助成 金	主任	新規	補助金(研究費)	103 万円	万円	0 万円	103 万円
⑨日本医療研 究開発機構研 究費	早期転移発見による予後の向上を目指した乳がん術 後の新たな標準的フォローアップ法開発に関する研究 20c0k106432s0303	増田 慎三	埼玉医科大学	分担	継続	委託研究費	万円	30 万円	9 万円	39 万円
⑨日本医療研 究開発機構研 究費	高齢者HER2陽性進行乳癌に対するT-DM1療法とベル ツスマブ+トラスツマブ+ドセタキセル療法のランダ ム化比較第Ⅲ相試験20c0k106440s0403	増田 慎三	島根大学	分担	継続	委託研究費	万円	35 万円	11 万円	46 万円

	研究課題名 (採択番号があれば採択番号も記載)	研究者名	研究事業名 (依頼業者名)	主任 又は 分担	新規 又は 継続	研究種別	研究費獲得額(単位:万円)			
							主任研究者 直接経費金額	分担研究者 直接経費金額	間接経費金額	合計
⑨日本医療研究開発機構研究費	タンパク質・ペプチド修飾解析による早期がん・リスク疾患診断のための血液バイオマーカーの開発 20cm0106403s0505	宮本 敦史	国立がん研究センター	分担	継続	委託研究費	万円	20 万円	1 万円	21 万円
⑨日本医療研究開発機構研究費	切除不能または再発食道癌に対するCF(シスプラチン+5-FU)療法とbDCF(biweeklyドセタキセル+CF)療法のランダム化第Ⅲ相比較試験20ck0106597s0601	平尾 素宏	静岡がんセンター	分担	継続	委託研究費	万円	75 万円	23 万円	98 万円
⑨日本医療研究開発機構研究費	進行胃癌を対象とした大網切除に対する大網温存の単劣性を検証するランダム化比較第Ⅲ相試験 20ck0106496s0802	平尾 素宏	国立がん研究センター	分担	継続	委託研究費	万円	30 万円	9 万円	39 万円
⑨日本医療研究開発機構研究費	病理学的StageⅡ/Ⅲで vulnerable な80歳以上の高齢者胃癌に対する開始量を減量したS-1術後補助化学療法に関するランダム化大腸癌に対する術後補助化学療法に関するランダム化比較第Ⅲ相試験 20ck0106621s0801	平尾 素宏	岐阜大学	分担	継続	委託研究費	万円	10 万円	3 万円	13 万円
⑨日本医療研究開発機構研究費	がん領域Clinical Innovation Network事業による超希少がんの臨床開発と基盤整備を行う総合研究 20k0201044s0305	角永 茂樹	国立がん研究センター	分担	継続	委託研究費	万円	77 万円	23 万円	100 万円
⑨日本医療研究開発機構研究費	国内流行HIV及びその薬剤耐性株の長期的動向把握に関する研究20k0410028h0702	渡邊 大	AMED(国立感染症研究所)	分担	継続	委託研究費	万円	60 万円	18 万円	78 万円
⑨日本医療研究開発機構研究費	iPS細胞研究中核拠点、疾患・組織別実用化研究拠点(拠点A)(01)20bm0204001h0108	金村 米博	AMED(慶応大学)	主任	継続	委託研究費	5,712 万円	万円	1,713 万円	7,425 万円
⑨日本医療研究開発機構研究費	脊髄再生治療に付随するリハビリテーション治療の構築に関する研究20bk0104017s0903	金村 米博	AMED(慶応大学)	分担	継続	委託研究費	万円	38 万円	12 万円	50 万円
⑨日本医療研究開発機構研究費	小児特有の脳腫瘍に対する標準治療確立のための全国施設共同研究20ck0106608s0101	金村 米博	大阪市立総合医療センター	分担	新規	委託研究費	万円	300 万円	90 万円	390 万円
⑨日本医療研究開発機構研究費	細胞-基質間の力を基盤とした細胞移動と神経回路形成機構の解明およびその破綻による病態の解析 20gm081001ls0104	金村 米博	奈良先端科学技術大学院	分担	継続	委託研究費	万円	500 万円	150 万円	650 万円
⑨日本医療研究開発機構研究費	全医療職ニーズ・ニーズ収集をワストップで実現する次世代医療機器連携拠点20hk040201ij0002	金村 米博	AMED	主任	継続	委託研究費	909 万円	万円	90 万円	999 万円
⑨日本医療研究開発機構研究費	遺伝子変異に応じたがんシグナルの同定を基盤とした小児脳腫瘍の新規治療法に関する研究開発 20ck0106534s0201	金村 米博	国立精神・神経医療研究センター	分担	新規	委託研究費	万円	100 万円	30 万円	130 万円
⑨日本医療研究開発機構研究費	性差を加味した冠動脈疾患AI診断システムに関する研究開発20gk0210026s0101	東 将浩	国立循環器病研究センター	分担	新規	委託研究費	万円	10 万円	3 万円	13 万円
⑨日本医療研究開発機構研究費	産学連携全国がんゲノムスクリーニング(SCRUM-Japan)患者レジストリを活用したHER2陽性の切除不能・再発大腸がんを対象とした医師主導治療 20k0201054s0705	加藤 健志	国立がん研究センター	分担	継続	委託研究費	万円	80 万円	24 万円	104 万円
⑨日本医療研究開発機構研究費	SCRUM-Japanの基盤を活用した血液循環腫瘍DNAスクリーニングに基づくFGFR遺伝子異常を有する難治性の治療切除不能進行・再発固形がんに対するTAS-120のバスケット型医師主導治療の実施	加藤 健志	国立がん研究センター	分担	継続	委託研究費	万円	120 万円	36 万円	156 万円
⑨日本医療研究開発機構研究費	直腸癌局所再発に対する標準治療確率のための研究開発20ck0106514s0302	加藤 健志	国立がん研究センター	分担	継続	委託研究費	万円	20 万円	6 万円	26 万円
⑨日本医療研究開発機構研究費	StageⅡ大腸癌に対する術後補助化学療法の有効性に関する研究20ck0106584h1901	加藤 健志	AMED	分担	新規	委託研究費	万円	30 万円	9 万円	39 万円
⑨日本医療研究開発機構研究費	肝硬変患者のQOLの向上及び予後改善に資する研究 20k0210069s0301	三田 英治	長崎医療センター	分担	新規	委託研究費	万円	20 万円	6 万円	26 万円
⑨日本医療研究開発機構研究費	FGM/CGMの血糖管理における精度・有用性の検証及び健康寿命促進のための血糖変動指標の探索 20ek0210104s0503	加藤 研	国立循環器病研究センター	分担	継続	委託研究費	万円	11 万円	3 万円	14 万円
⑨日本医療研究開発機構研究費	脳出血超急性期患者への遺伝子組換え活性化型Ⅶ因子投与の有効性と安全性を検証する研究者主導国際臨床試験20k0201094s0602	藤中 俊之	国立循環器病研究センター	分担	継続	委託研究費	万円	38 万円	16 万円	54 万円
⑨日本医療研究開発機構研究費	中性脂肪蓄積心筋血管症の診療に直結するエビデンス創出研究20ek0109479h0001	東 将浩	大阪大学	分担	新規	委託研究費	万円	0 万円	0 万円	0 万円
⑨日本医療研究開発機構研究費	2.5次元共培養系を用いたヒト神経細胞シナプス成熟法の開発20bm0804024h0001	金村 米博	AMED	主任	新規	委託研究費	万円	1,600 万円	480 万円	2,080 万円
⑪民間セクターからの寄附金	心臓血管外科手術における長時間人工心肺後凝固異常に対する薬物療法の検討	三隅 祐輔	エフワーズライフサイエンス株式会社	主任	新規	委託研究費	40 万円	万円	0 万円	40 万円
⑪民間セクターからの寄附金	コンピュータ支援手術で行った人工股関節全置換術・再置換術の術成績の検討	三木 秀宣	ジョンソンエンドジョンソン(株)	主任	新規	委託研究費	100 万円	万円	0 万円	100 万円

	研究課題名 (採択番号があれば採択番号も記載)	研究者名	研究事業名 (依頼業者名)	主任 又は 分担	新規 又は 継続	研究種別	研究費獲得額(単位:万円)			
							主任研究者 直接経費金額	分担研究者 直接経費金額	間接経費金額	合計
⑪民間セクターからの寄附金	亜鉛と貧血・腎疾患との関連についての検討	岩谷 博次	大塚製薬株式会社	主任	新規	委託研究費	30 万円	万円	0 万円	30 万円
⑪民間セクターからの寄附金	肝細胞癌への分子標的治療における血清アポトーシス・マーカーを用いた早期治療効果予測に関する検討	田中 聡司	アツヴィ合同会社	主任	新規	委託研究費	100 万円	万円	0 万円	100 万円
⑪民間セクターからの寄附金	再発進行直腸癌に対する根治的拡大手術についての検討	加藤 健志	中外製薬株式会社	主任	新規	委託研究費	100 万円	万円	0 万円	100 万円
⑪民間セクターからの寄附金	乳癌診療情報を用いたにRWE(Real-World Evidence)の構築	増田 慎三	中外製薬株式会社	主任	新規	委託研究費	100 万円	万円	0 万円	100 万円
⑪民間セクターからの寄附金	慢性腎臓病が急性心不全患者の予後に与える影響に関する観察研究	安部 晴彦	日本ペーリンガーインゲルハイム㈱	主任	新規	委託研究費	100 万円	万円	0 万円	100 万円
⑪民間セクターからの寄附金	血管内視鏡を用いた冠動脈疾患等動脈硬化性疾患患者の予後予測に関する観察研究他	上田 恭敬	アポットバスキュラージャパン㈱	主任	新規	委託研究費	300 万円	万円	0 万円	300 万円
⑪民間セクターからの寄附金	腰椎変性疾患による下垂足の手術成績 術前下肢周径からの予測	青野 博之	ビーフラウンエスクラブ株式会社	主任	新規	委託研究費	150 万円	万円	0 万円	150 万円
⑪民間セクターからの寄附金	乳癌診療情報を用いたにRWE(Real-World Evidence)の構築	増田 慎三	第一三共株式会社	主任	新規	委託研究費	30 万円	万円	0 万円	30 万円
⑪民間セクターからの寄附金	80歳以上の高齢者に対する後方侵入腰椎椎体間固定術(PLIF)の臨床成績の調査	石黒 博之	ニューベイシブジャパン株式会社	主任	新規	委託研究費	100 万円	万円	0 万円	100 万円
⑪民間セクターからの寄附金	血管内視鏡を用いた冠動脈疾患等動脈硬化性疾患患者の予後予測に関する観察研究他	上田 恭敬	第一三共株式会社	主任	新規	委託研究費	30 万円	万円	0 万円	30 万円
⑪民間セクターからの寄附金	肝細胞癌への分子標的治療における造影超音波を用いた早期治療効果予測に関する検討	田中 聡司	日本イーライリリー株式会社	主任	新規	委託研究費	10 万円	万円	0 万円	10 万円
⑪民間セクターからの寄附金	発症機序解明を目指した急性心筋梗塞症例における血液血栓形成能の検討	上田 恭敬	帝人ファーマ株式会社	主任	新規	委託研究費	15 万円	万円	0 万円	15 万円
⑪民間セクターからの寄附金	乳癌診療情報を用いたにRWE(Real-World Evidence)の構築	増田 慎三	エーザイ株式会社	主任	新規	委託研究費	50 万円	万円	0 万円	50 万円
⑪民間セクターからの寄附金	コンピュータ支援手術で行った人工股関節全置換術・再置換術の術成績の検討	三木 秀宣	日本ストライカー	主任	新規	委託研究費	200 万円	万円	0 万円	200 万円

III. 全研究業績の区分分類と 業績件数の総括表

診療科の研究業績

診療科名	総数	A-0	A-1	A-2	A-3	A-4	A-5	A-6	B-1	B-2	B-3	B-4	B-5	B-6	B-7	B-8	B-9
総合診療部	18							12			5						1
腎臓内科	17	3										8		3		3	
糖尿病内科	11	1		2										2		5	1
輸血療法部	0																
血液内科	0																
呼吸器内科	7						1					3	1	2			
脳卒中内科	51	19		2	2	7					16	4		1			
感染症内科	117	2		1	2	8	7	6		2	12	18			1	50	8
精神科	11											1	1				9
消化器内科	36	10		2	4				1			13	2	4			
循環器内科	67	13		2		6				1	4	8		7		26	
小児科	2																
外科	274	55	1	3	8			6	6	30	26	63	53	11	4	3	5
形成外科	5				2						1	2					
整形外科	44	12		1	4					2	3	13	1	4		2	2
脳神経外科	105	21		1	2	4		12		6	26	29				4	
心臓血管外科	1												1				
皮膚科	10	3			1							1		5			
泌尿器科	16	9			4							2				1	
産科・婦人科	8	2										6					
眼科	16	1	2		1						1	3	1	2	5		
耳鼻咽喉科	6	3		1							2						
放射線診断科・放射線治療科	36	7						2		4		17	1			5	
口腔外科	5				1							2		1		1	
救命救急センター	58	20	1	7	1	2					5	15		1		6	
麻酔科	7											7					
臨床検査科	22	11						1			2	7	1				
リハビリテーション科	0																
臨床腫瘍科	14	4										8		2			
薬剤部	33	1				1	1				2	11		1		16	
看護部	7				1							6					
栄養管理部	0																
ケアサポートチーム	12	1		1								6				4	
臨床心理室	25						1	2			2	3				17	
メンタルヘルsteam「なのはな」	9							2								7	
臨床工学室	2										2						
院長室	18	4			1	2			1			3	2			4	1
小計	1,070	202	4	23	35	30	10	43	8	45	109	260	64	46	10	164	17

臨床研究センターの研究業績

研究室名	総数	A-0	A-1	A-2	A-3	A-4	A-5	A-6	B-1	B-2	B-3	B-4	B-5	B-6	B-7	B-8	B-9
臨床研究センター	55	2			1	2	3	5		2	4	14				14	8
幹細胞医療研究室	26	7								2	5	12					
再生医療研究室	65	15		1	1	4				5	16	23					
分子医療研究室	65	15		1	1	4				5	16	23					
エイズ先端医療開発室	170	2		1	2	9	11	7		2	16	24			1	87	8
HIV感染制御研究室	27	2			2		3				4	9			1	6	
臨床疫学研究室	26	3		2	4	11							2	4			
がん療法研究開発室	269	59	1		5			6	6	31	28	63	49	9	4	3	5
高度医療技術開発室	23	6								1		6		4		6	
医療情報研究室	9			2	2						5						
災害医療研究室	9			4		1						2				2	
臨床研究推進室	6											2				4	
レギュラトリーサイエンス研究室	18	4			1	2			1			3	2			4	1
小計	768	115	1	11	19	33	17	18	7	48	94	181	53	17	6	126	22

全研究業績

分類	総数	A-0	A-1	A-2	A-3	A-4	A-5	A-6	B-1	B-2	B-3	B-4	B-5	B-6	B-7	B-8	B-9
合計	1,838	317	5	34	54	63	27	61	15	93	203	441	117	63	16	290	39

研究業績の分類基準と記号

著述発表業績区分				口演発表業績区分											
A-0	A-1	A-2	A-3	A-4	A-5	A-6	B-1	B-2	B-3	B-4	B-5	B-6	B-7	B-8	B-9
英文 著述	単独執筆	共同執筆 (含連名)	原著	総説	学術医学研究班報告書 講演発表論文	その他	シンポジウム 特別講演等	一般演題 (ポスター)	シンポジウム 特別講演等	一般演題 (ポスター)	シンポジウム 特別講演等	一般演題 (ポスター)	乗効調査 研究会発表	文化講演 教育講演等	TV 出演 ラジオ 放送出演
	単行書		邦文著述 (学会誌・学術専門誌)	国際学会			国内学会の全国年次学会	国内学会の地方会 及び分科会研究会							

Research Vol.40 (2020)

独立行政法人国立病院機構 大阪医療センター
臨床研究業績年報

発行者 独立行政法人国立病院機構
大阪医療センター 院長 松村泰志

編集 臨床研究センター
〒540-0006 大阪市中央区法円坂2丁目1番14号
電話 (06) 6942-1331

印刷所 株式会社 中島弘文堂印刷所
〒537-0002 大阪市東成区深江南2丁目6番8号
電話 (06) 6976-8761

